

Title	連歌の発想 : 連想語彙用例辞典と、そのネットワークの解析
Author(s)	山田, 奨治; 岩井, 茂樹
Citation	日文研叢書. 2006, 38
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/23357
rights	Copyright ©2006 by the International Research Center for Japanese Studies
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University



日文研叢書
38

連歌の発想

連想語彙用例辞典と、そのネットワークの解析

山田奨治・岩井茂樹 編著

国際日本文化研究センター

連歌の発想

連想語彙用例辞典と、そのネットワークの解析

山田奨治・岩井茂樹 編著

国際日本文化研究センター

Imagination of Renga
Lexical Association Example Dictionary, and Analysis of that Network

Copyright ©2006 by the International Research Center for Japanese Studies
3-2 Oeyama-cho, Goryo, Nishikyo-ku, Kyoto 610-1192, Japan
Tel.075-335-2222 Fax.075-335-2091 <http://www.nichibun.ac.jp/>

NICHIBUNKEN JAPANESE STUDIES SERIES (日文研叢書), No. 38 (2006)

ISSN 1346-6585

Printed by SOUBUNDO

謝 辞

本書は、平成一六〇一八年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究A「前近代日本の諸概念を対象にした知識発見のためのマイニング資源の開発」(代表者・山田奨治)の補助を受けて実施した研究の成果の一部である。日文研「連歌データベース」「俳諧データベース」の基になるデータを作成された、奈良工業高等専門学校
の勢田勝郭教授に感謝申し上げます。

目次

謝辞

第一章 連歌・俳諧データベースからの知識発見 (1)

1・1 検索から発見へ (1)

1・2 先行研究 (3)

1・3 研究の対象と手法 (5)

1・4 成果の概要 (10)

注 (13)

第二章 連歌・俳諧DBより抽出した連想語彙ネットワークの解析 (21)

はじめに

2・1 連想語彙ネットワークの全体像 (21)

2・2 抽出率の変化 (24)

2・3 連想語彙ネットワーク図の変化 (26)

2・4 「ほととぎす」のイメージ (29)

2・5 「ほととぎす」余滴 (42)

2・6 まとめ (44)

注 (45)

連想語彙用例辞典

凡例・目次・索引

第一章 連歌・俳諧データベースからの知識発見

1-1 検索から発見へ

人文学を取り巻く情報環境は、二〇一〇年のあいだに大きく変わった。インターネットの普及とパソコンの高機能・低価格化が、その大きな原動力だったことはいうまでもない。しかしハード・ソフト両面が発達したことよりも、さらに重要な進歩が二〇一〇年のあいだに成し遂げられた。それは、コンテンツ面の整備、とくに人文学資料の全文データ化が盛んになってきたことである。

全文データとは、その文献にある文字すべてを文字入力してデータ化したものをいう。版面をスキャナやデジカメで画像入力しただけのもは、全文データとはいわない。

版面の画像データと全文データのあいだには、データを利用する際の利便性の面で大きな差が生じる。画像データの場合は、そこに書かれてあることを、最終的には目視で読み取る必要がある。あるいは光学式自動文字読み取り(OCR)の技術で処理できる範囲で文字データ化する方法もあるが、人文学資料によくあるような旧字

体や手書きの文字にOCR技術を適用することは、現時点では困難である。

画像データに対する検索は、一般的には画像タイトルやキーワードなど、画像に付加された文字情報に対して行われる。したがって、タイトルやキーワードとして拾われなかった文字列に対して、検索を行うことはできない。

一方で、全文データの場合は、タイトルやキーワードをあえて付ける必要はない。その文献に登場するすべての文字列に対して、検索をかけることができるからである。この点が、文献資料の画像データしかない場合と、全文データ化されている場合の、大きな違いである。

コンピュータによる情報検索ができるようになってから、人文学研究が大きく進展したことに、異論を挟むとはいえないだろう。いまや、OPAC(Online Public Access Catalog)の略。コンピュータの端末を利用してアクセスし、オンラインで検索することができる目録のこと)やWEBCAT(全国の大学図書館等が所蔵する図書・雑誌の総合目録データベースを、インターネットで検索できるシステムのこと)などの文献データベースを検索することなしに、人文学研究を行うことは、不可能に近い。

しかし万能のように思える情報検索にも弱点はある。コンピュータはその文字にあてられたコード番号が異なると別の文字とみなし

てしまう。そのため、表記のゆらぎや漢字の異体字が出てきた場合に、望む検索結果が得られないことがある。たとえば、「デジタル」と検索語を入れると「ディジタル」とはマッチしなくなる。あるいは、将軍や幕府を意味する「柳営」と検索語をいれて、検索結果に「柳營」も含めたい場合には、「営」と「營」が異体字であるという知識を、あらかじめ検索システムに仕組んでおかななくてはならない。

表記のゆらぎや異体字の問題のほかに、情報検索にはあまり意識されない大きな弱点がある。それは、どのような語を入れたら望む結果が得られるかの先験的な知識が、利用者によって備わっていることが大前提になっていることである。つまり、自分が調べたい対象についてあいまいな知識しかなく、何を検索したらいいのかわからないような利用者にとっては、情報検索システムはあまり役に立たない。実際に人文学研究者が情報検索する場面を想像してみよう。対象についてのじゅうぶんな知識を備えた専門家が、自分の専門についての情報を検索する場面は、もちろんある。そんな場合には、既存の情報検索システムはこのうえなく有用だろう。しかし、対象についての知識がじゅうぶんでない学生や、あるいは専門外のことをしなければようとする研究者もまた、豊富なデータベースを有効に活用したい。そのような利用者は、まずその分野についての基礎的な知識を身につけてから情報検索システムを利用せよ、というべきだろうか。

ある分野の専門家が、大量のデータから新しい知識を発見しようとする場合を考えてみよう。未知のことを調べようというのだから、いったい何が鍵になることばなのかはわからない。そのような場合、専門家は知識のない素人と、ほとんどおなじ立場に立たされる。つまり、新知識の発見のためには、たんなる情報検索を超えた仕組みが要請されるのだ。

これから望まれるのは、大量データから新しい知識を発見しようとした場合に、いかにコンピュータが人間の思考を手助けできるかなのである。

さて、文字情報に対してコンピュータで知識発見を手助けするためには、全文データを入手できることが前提となる。人文学研究の使用に耐える全文データの草分けとしては、一九七〇年代からデータ作成がはじまったプロジェクト・グーテンベルクが有名である。著作権が切れた古典作品や歴史的な文書を中心に、二〇〇六年六月時点で一八、〇〇〇作品の全文データがあり、インターネットを経由して無料でダウンロードできる。

日本国内では、一九八〇年代はじめ頃から個人ベースで古典・近代文学の全文データを作る仕事をはじめた。そうして個人で作ったデータを、当時普及しはじめていたパソコン通信を使って公開する動きがあった。それがプロジェクト・グーテンベルクに匹敵するような大きなうねりになるには、一九九七年からはじまった青空文

庫の登場を待たねばならなかった。青空文庫には日本文学を中心に、二〇〇六年六月時点で五、〇〇〇作品を超える全文データが収められている。

プロジェクト・グーテンベルクや青空文庫は、學術利用だけが目的ではなく、著作権切れの作品を共有の文化財として無料で利用できるようにすることを狙っている。學術目的で作成された全文データでは、「源氏物語」諸本の入力作業が早くからなされている。国文学研究史料館から公開されている岩波古典文学大系の全文データも、利用制限はあるものの、人文学研究者にとっては貴重なものになっている。

商業ベースで作成されたものでは、角川書店の『新編国歌大観』のすべてを収めたCD-ROM（一九九六年）が記念碑的な労作といえよう。それに先立ち発売された、『八代集』CD-ROM（一九九五年）や、その後発売された『平安遺文』（一九九八年）、『吾妻鏡・玉葉』のCD-ROM（一九九九年）がこれに並ぶものと同位置づけられる。

人文学データベースとしての重要性の点では、『読売新聞』『朝日新聞』『太陽』のCD-ROMや、国立国会図書館から公開されている「近代デジタルライブラリー」に言及しないわけにはいかない。しかしながら、これらはいずれも文書の画像データベースであり、目次や見出しなど極めて限定的な項目しかテキストデータ化されて

いないので、本書で論じているような知識発見の用途には使いづらい。

本書では、知識発見のための全文データとして国際日本文化研究センターから公開されている「連歌データベース」と「俳諧データベース」を用いる（以後、連歌・俳諧DBと略す）。このデータベースは、連歌研究者の勢田勝郭かつひら氏が永年にわたって蓄積し、日文研に寄贈されたデータを公開しているものである。永禄以前（連歌師宗養が没した一五六三年まで）の現存する連歌作品のすべて、および永禄以後一七世紀末までの主要な連歌（一九七、二二八件）と、蕉門俳諧までの一七世紀末までの主要な俳諧作品（二二五、六五二件）の全文がデータベース化されている。とくに連歌については、その規模とデータの正確さの点において、他に類例のない貴重なデータベースである。

本書では、この連歌・俳諧DBを解析対象とし、知識発見の方法を駆使して連想関係にある語を抽出し、用例に基づく連想語彙用例辞典を作成するとともに、特徴的な語についてその概念変遷について詳しい検討を加える。

1-2 先行研究

全文データを分析するには、大量の日本語を処理できるコンピュー

タ環境が必要である。そのような能力を備えたパソコンが安価になってきたのは一九九〇年代なかばころで、そのころから日本で人文学の全文データを分析する研究が出はじめた。

人文学分野の全文データを使った数量的な研究の日本での草分けは、統計学者の村上征勝らが行った『日蓮遺文』の分析や、『源氏物語』（全五四帖）全文データの分析がある。村上らは、池田亀鑑編『源氏物語大成』に品詞情報をつけた全文データを分析し、名詞と助動詞の出現率の点で「宇治十帖」と称される一〇帖が、他の四帖と異なる傾向を持つことを示した。「宇治十帖」は紫式部の作ではないという説を補強する材料を提供したわけである⁽¹⁾。

『源氏物語』の分析をするために、村上らは品詞情報を加えた全文データをまさに手作りで作成した。そのデータはすでに市販されており、作成に膨大な手間暇をかけたものであるにもかかわらず、一〇、〇〇〇円を切る値段でそれを購入することができる。作成したデータを独占的に使用したり、高い値段で販売したりするのではなく、研究者が気楽に買える価格に抑えるか、あるいは無料で公開することが、研究の発展のために重要であることはいまでもなからう。

特筆すべきは、情報科学者の竹田正幸と国文学者の福田智子らが『新編国歌大観』CD-ROMに収録された全文データを使って行った、一連の知識発見の共同研究である。彼らの成果は、全文データ

に対して知識発見的な手法を適用することで、人文学上の具体的な発見にまで結びつけた、日本で最初の研究と位置づけられよう。

先に述べた村上らの『源氏物語』の研究は、いわば従来、人文学においても指摘されていた仮説を、統計という別の言語を使ってより精密に表現することに成功したものと見える。人文学にも統計が有効なことを実証的に示した先駆的な研究のひとつと位置づけられる。しかし、同時に統計という「言語」のトレーニングを受けていない人文学者たちにとっては、必ずしもわかりやすい研究ではなかったように思われる。その点で、竹田らの研究は用例の発見という、人文学者がふだん行っていることを、知識発見の手法により成し遂げたという意味で、その有効性がより広く受け入れられうるだろう。

竹田らの手法は、ふたつの和歌のあいだの類似性を数値化し、ある基準でみたときの「似た歌」のペアを『新編国歌大観』にある約四五〇、〇〇〇首のなかから抽出して、その類似ペアがもつ和歌研究のうえで意義を精査したことに特徴がある。かりに四五〇、〇〇〇首から二首を取り出した場合、その組み合わせの数は百億とおりを超える。竹田らの手法の特徴は、いわば天文学的な数の調査対象のなかから、何らかの知見に結びつきうる可能性のある候補を人のおよぶ数だけ取り出し、専門家が検討を加えたことにある。

この手法により竹田らは、『後撰和歌集』（九五一年勅命）に収められた藤原兼輔（八七七〜九三三）の歌「人の親の心は闇にあ

らねども 子を思ふ道に まどひぬるかな」の類似歌に、『古今和歌集』（九〇五序）にある清原深養父の「人を思う 心は雁に あらねども 雲居にのみも なきわたるかな」があることを発見した。この引用関係は、既存のどの注釈書にも指摘されていないものだった。

従来の解釈では、兼輔の歌は子を思う親の一途な心情をすなおに表現したものと理解されていた。しかし『古今和歌集』にその本歌とみられる歌が見つかったことで、兼輔の歌は恋心を親心に置きかえた、技巧的な替え歌だったともみることができるといえる。コンピュータによる知識発見的な手法により、和歌にあらたな解釈を与えることができたのである。

いうまでもなく、『新編国歌大観』のCD-ROMが発売されたことが、竹田らの研究を可能にした。人文学の全文データが世に出ることで、そこから新たな研究の可能性が拓かれることをも、彼らの研究は示している。

しかしながら、同CD-ROMに収められた全文データと附属の検索システムは、そのままでは知識発見の用には足りないものだったこともまた、事実である。その最大の理由は、全文データが独自の形式に変換されてCD-ROMに入っているため、附属の検索システムを介さずにデータにアクセスすることが、技術者でなければできないようになってきていることである。

全文データが想定外の目的に利用されることを抑止するための、販売側の対策なのであるが、こういった措置が、販売側の想定を超えた高度な研究利用の芽をも摘むことになっている。竹田らは同CD-ROMのデータ形式を解析し、そこから全文データを取り出したうえで独自の校正を施し、データの誤謬を修正したうえでこの研究に使用した。願わくは、研究者がそういった余計な労力を使わずに済むよう、ワープロやテキスト・エディタでファイルを開けばデータが読めるような、平易なデータ形式で公開されることが理想である。

連歌を対象にしたものでは、連歌・俳諧DBの基になっているデータの作成者でもある勢田勝郭による研究がある⁸⁾。勢田はパーソナル・コンピュータが普及しはじめた一九七〇年代から、コンピュータを連歌研究に応用する試みを先駆的に進めた。主としてパソコンの検索機能と統計を用いて、連歌表現の時代変化を計量的・実証的に行った。連歌の研究者人口が少なく、また専門外にはあまり注目されてこなかった研究であるけれども、その精緻な研究手法からは学ぶべき点が多い。

1-3 研究の対象と手法

連歌と俳諧は、中世から近世にかけて盛んに行われた文芸である。

両者は、文学の世界にとどまらず、絵画、芸能などにも大きな影響を与えていることが、先学の研究によって縷々指摘されてきた。例えば、小西甚一や島津忠夫は能楽との関係について、鶴崎裕雄や島津新は絵画との関わりを、熊倉功夫、伊地知鉄男は茶道との関係を指摘している⁽⁴⁾。しかしながら、それらの研究は確かに多くの示唆を与えてはくれるものの、実際には必ずしも実証的とは言えないものもあり、同時代に興隆していた文芸、もしくはよく似た空間や様式で行われていた芸能といったことだけで関係づけられているような恣意的な論も少なくない。

とはいえ、連歌や俳諧には「式目^{しきもく}」とよばれる複雑なルールがあり、その世界を理解することはそれほど容易ではない。したがって、ある特定のジャンルで連歌や俳諧の影響が指摘されたとしても、その連歌・俳諧の世界とはどんなものか、その全体像がはっきりしないまま論じられてきたというのが実状である。これが、従来の研究が恣意的であるとみなされてもしかたのない決定的な要因であった。極言するなら、連歌や俳諧は何だか難しそうなルールに規定されており、そのルールに従って関連性のある語句が鎖のように連続していく文芸、といった理解だけで論じられてきたのである。

しかし、最もシンプルに考えれば、連歌や俳諧というのは、ある句（前句^{まえく}とする）に対し、次の句（付句^{つけく}とする）に前句にある単語や意味と関連する語彙を配して、発想を次々と展開していくゲーム

であるといえる。したがって、基本的に前句と付句の間には、必ず何らかの連想関係が成立していなければならない。この付け方を連歌では付合^{つけあひ}（あるいは付様^{つけよう}）という。この付合の関係にある語をうまく抽出できれば、連歌・俳諧における連想語彙用例辞典を作成することができる。

次に、連歌・俳諧DBから知識発見の手法により連想語彙を抽出した手法について述べる。

基本的なアイデアは、「前句・付句に含まれる語が共通である用例が複数発見できた場合、それらの語は何らかの連想関係があるかもしれない」というものである。そのような用例を手作業で網羅的にみつける作業は、作業量が膨大過ぎて、とうてい人力では不可能である。そこで、用例発見という人力がおよばない部分をコンピューターで支援させることにした。そして、異本の判断や古典語彙の分解など、現在の情報技術では難しい部分と処理プログラムの開発に、研究者の労力を集中させた。

日文研から公開されている連歌・俳諧DBには、それぞれの連歌集・俳諧集について作品集名、作成年月日、作品区分、句番号、そして句が入っている。各項目の説明は、つぎのとおりである。

〈作品集名〉

通用のものは、その呼称を用いている。作品名が不明な場合は、作者名、成立年代、成立事情などから判断し、最適と思われる名を

付けている。

〈作成年月日〉

その連歌・俳諧が行われた年月日が入っている。連歌の「付句集」「発句集」、俳諧の「付句」「発句」は、その書物が発行された年になっっている。

〈作品区分〉

連歌は、「千句」「百韻」（千句残欠を含む）「大山祇神社法楽連歌」「三物類」「付句集」「発句集」に区分されている。俳諧は、「連句」「発句」「付句」「三物」に区分されている。それぞれの説明は、つぎのとおりである。

▼連歌

【千句】百韻を一〇回行ったもの。全部で一、〇〇〇句となるが、時に追加として数首が加えられることがある。

【百韻】正式な連歌の形式、百韻で一巻と称する。

【大山祇神社法楽連歌】国指定重要文化財（昭和四七年指定）。神仏の徳を称えるために奉納された連歌集。中世の文安二年（一四五五）から江戸期の寛文十一年（一六七二）までの約三〇〇年間、二八〇巻に及ぶ。道後湯築城主河野氏から庶民までに及ぶ連歌資料。

【三物類】百韻などの連歌作品から、優れた三句単位の付合を取り出し集めたもの。

【付句集】百韻などの連歌作品から、優れた二句単位の付合を取り

出し集めたもの。有名なものに『菟玖波集』や『新撰菟玖波集』がある。

【発句集】連歌作品の発句だけを集めたもの。

▼俳諧

【連句】俳諧の連歌のこと。三六句、四四句、五〇句、一〇〇句などの形式がある。

【発句】俳諧の連歌における発句のみを分離、蒐集したもの。

【付句】連歌の俳諧作品から、優れた二句単位の付合を取り出し集めたもの。連歌の【付句集】と同じ形式。

【三物】連歌の俳諧作品から、優れた三句単位の付合を取り出し集めたもの。連歌の【三物類】と同じ形式。

〈句番号〉

連歌における「百韻」、「千句」、俳諧における「連句」など連続して一巻をなしているものは、一巻ごとに連続して番号を付してある。連歌における「三物類」や「付句」、俳諧における「付句」、「三物」には、連続で番号を付したものもあるが、付句（二句単位）、あるいは三物（三句単位）で番号を付したものもあり、作品によって番号の付与方法は異なる。

〈句〉

句はすべてひらがなで入力されており、五字、または七字単位で

区切られている。ただし、俳諧の一部の作品には、ひらがなの他に漢字入力を併記したものがあある。また俳諧の一部の作品には、作者も記載されていることがあるが、多くの作品では作者名の入力は行われていない。

連歌・俳諧DBの、このようなデータを加工し、表1-1のような形式の処理用基データを作成した。そのデータ構成は、「作品集名」「作品名」「作成年月日(和暦)」「作成年(西暦)」「句番号」「句」の六種類の項目からなる。「句」はひらがなで表記され、五・七の文字の区切りにハイフンが挿入されている。作成手順の概略は、つぎのとおりである。

【手順】

- ①連歌・俳諧DBから五・七文字を抽出し、その出現度数を数える。これを「五・七出現度数」と呼ぶことにする。ゲタ文字が含まれる句は、この時点で除く。
- ②すべての五・七文字について、それが出現する句の付句に登場する五・七文字の出現度数を数える。これを「付句五・七出現度数」と呼ぶことにする。
- ③「付句五・七出現度数」が二以上ある五・七文字のペアを抽出する。
- ④それに該当する前句・付句の全体を取り出し、異本を手作業で削

除する。

- ⑤残った五・七文字を手作業で語彙分解し、連想関係の妥当性を確認・修正する。そうして抽出された五・七文字を「連想語」、語彙分解したものを「連想語彙」とする。

手順①により取り出された五・七文字は、一三二、五四七種類で、その上位五〇件は、つぎのようになる。

ほととぎす (807) なりぬらむ (457) あさほらけ (316) のころらむ (315) くさまくら (309) あきのかせ (297) うくひすの (274) ひとのころの (258) いかかせむ (246) ころにて (239) ゆふまくれ (239) よはのつき (238) かへらむ (237) はなさきて (233) かりまくら (231) あらはれて (229) あきふけて (213) やまさくら (212) かはるよのなか (209) ものおもひ (208) おもふらむ (204) きりきりす (200) はなさかり (193) あきのつき (191) いかならむ (189) うつろひて (188) はなのかけ (188) くさのいほ (181) あさかすみ (180) あきかせに (176) やまほととぎす (176) しつかにて (173) ふるさとに (172) いかはかり (171) かねなりて (163) ふるさとの (163) わするらむ (163) あきのくれ (159) あきのそら (159) ありあけに (158) かすむらむ (157) たひのそら (157) ふけぬらむ

- (156) ふくかせに (154) ちきりにて (152) いそくらむ
 (148) はなちりて (148) いたつらに (145) かせふきて
 (144) からころも (144) しつかなる (144) つきをみて
 (144) (括弧内は度数)

つぎに手順②③の結果、「付句五・七出現度数」は、つぎのよう
 な形で七、七二二ペアが得られた。リストの読み方は、たとえば第
 一行目は、「あかしかた」を含む句は五六あり、そのうち前句に
 「あかしかた」、付句に「ちとりなくこゑ」を含むペアは二あること
 を示している。

- あかしかた (56) ちとりなくこゑ (2)
 あかしかた (56) をかこえのみち (2)
 あかしかた (56) をかへのあきの (2)
 あかしのなみの (5) おこなひに (2)
 あかしのなみの (5) かねなりて (2)
 あかしのなみの (5) たえぬむときの (2)
 あかすたまくら (4) ちははも (2)
 あかすたまくら (4) やつこにて (2)
 あかつききし (2) ほととぎす (2)
 あかつききし (2) ゆくへわすれぬ (2)

- あかつきの (102) あはちやま (2)
 あかつきの (102) いくかへるさじ (2)
 あかつきの (102) うはそくの (2)
 あかつきの (102) うらむらむ (2)
 あかつきの (102) きぬきぬに (2)
 あかつきの (102) きぬきぬのそて (2)
 あかつきの (102) こころにて (2)
 あかつきの (102) さるのこゑ (2)
 あかつきの (102) つきおちて (2)
 あかつきの (102) つきそうき (2)
 あかつきの (102) ねさめして (2)
 あかつきの (102) みはそれながら (2)
 あかつきの (102) ゆめさめて (2)
 あかつきの (102) わかるらむ (2)
 あかつきの (102) をしかなく (2)

手順④⑤で異本の削除と連想関係の妥当性の確認をした結果、連
 想語を含む前句・付句のペアが二、八五六対残った。

こういった作業の結果、抽出されたものの一例を見ておこう。た
 とえば、『永祿年間百韻二八巻』にある「さらてたに つきによな
 よな あかしかた まくらにあきの ちとりなくこゑ」と『天正年

間百韻五七卷』にある「わひつつも うらなれけりな あかしかた
まくらにちかし ちとりなくこゑ」とでは、前句の「あかしかた」
(明石潟) と付句の「ちとりなくこゑ」(千鳥鳴く声) が共通する。
このように複数の用例があるものは、何らかの定型的な連想関係に
ある語彙を含む可能性が高いことは容易に推察できよう。

このようにして抽出されたすべての連想語彙候補について、連想
関係の妥当性を目視によりチェックし、必要に応じて修正を加えた。
前述の例では、「明石潟」の連想語は「枕に千鳥鳴く声」となる。
さらにこれらの連想語から名詞、動詞、形容詞、形容動詞を取り出
し、連想語彙に分解した。例えば「枕に千鳥鳴く声」は、「まくら」
「ちどり」「なく」「こゑ」に分解される。

1-4 成果の概要

こうした抽出作業を行った結果、取り出された連想語彙を概観し
ておこう。

まず、取り出された語彙のほとんどが連歌DBからの連想関係で
あり、俳諧DBからのものは三二例しかなかった。これは、俳諧D
Bに収録されている用例の範囲では、五・七文字の単位でみた場合、
連想関係をうまく抽出できないことを意味している。したがって、
連想語彙用例辞典からは、俳諧からの用例を除去することにした。

最終的に、連想語彙は、前句・付句のペア二、八二四対から抽出さ
れた六七七語になった。この結果はそのまま、連歌・俳諧の連想語
彙用例辞典にもなる。連想語彙を見出し語にして、辞典に編集し直
したものを、巻末に添付した。

俳諧DBからの抽出例がほとんどなかったことについては、次の
ようなことが考えられる。まずは、句数が少なすぎることである。
先にも述べたように、連歌が永祿以前(連歌師宗養が没した一五六
三年まで)の現存する連歌作品のすべて、および永祿以後一七世紀
末までの主要な連歌(一九七、二二八件)を収載しているのに対し、
俳諧は蕉門俳諧までの一七世紀末までの主要な俳諧作品(二五、六
五二件)しか収載されていない。つまり、連歌DBの約八分の一の
句数しかない。さらに、残念なことに、俳諧DBは一六四〇〜一七
〇〇年という短い期間の句しか収載されていないという事実がある
(それもほとんどが蕉門俳諧のデータである)。これも連歌が約四〇
〇年間の句を採録しているのとは、大きな違いである。すなわち、
俳諧DBは数の少なさと収載期間の短さが、抽出例の少なさに大き
く影響している。当時の俳諧は貞門俳諧(松永貞徳(一五七一〜一
六五三))を中心とした俳諧)、談林俳諧(西山宗因(一六〇五〜一
六八二))を中心とした俳諧)から、松尾芭蕉(一六四四〜一六九四)
を中心とした蕉門俳諧への移行期であり、俳諧史の中でも最も変化
の激しかった時期である。ここに抽出例が少なかったことは文学史

的な観点から見ても十分に首肯できる結果であるといえよう。もし、一六四〇年以前のデータと、一七〇〇年以降のデータが大量にあれば、多くの抽出例を見いだせる可能性は十分にある。

また、俳諧が俗語を使用してよいことも、抽出例が少なかった一要因であろう。連歌が歌言葉、雅語によって作られるのに対し、俗語を用いるのが俳諧の特徴の一つである。ということは、これまで和歌や連歌で使われなかった語彙を用い、そこに俳諧味を見出そうとするのは、当然のことであろう。この二点、つまり俳諧DBの句数の少なさと採録期間の短さ、そして俳諧が俗語を使用する文芸であること、が俳諧DBからの抽出例が少なかった最大の理由であると考えられる。

さて、このようにして用例を基にした連想語彙用例辞典が作られたわけであるが、旧来の縁語辞典類に収録されている語と比較して、どの程度異同があるものになっているのだろうか。もし旧来の縁語集に指摘のない連想語が拾われているのならば、それはこの研究の成果だといえよう。

そこで、連想語彙用例辞典に拾われた語が、旧来の縁語集に収録されているか否かについて調べてみた。調べた対象は、『連歌合璧集』(一四七六年奥書)、『宗長歌話』(一四八〇年成立)、『連歌作法』(一四八九年奥書)、『せわ焼草』(一六五六年刊)、『便船集』(一六六九年成立)、『初本結』(一六六二年上梓)、『俳諧類船集』(一六七

六年成立)の七種類の縁語集である。その結果を表1-2に示した。ここからわかるように、旧来の縁語集に指摘のない連想語彙が多数含まれているのがわかる。より精密な分析のためには、この研究から浮かび上がった連想語彙のすべてを同様にチェックする必要性があるが、多大な労力を要するので行っていない。しかし、表1-2をみれば、従来の縁語集にない連想語彙を指摘できていることはまちがいない。

つぎに、抽出された六三〇語の連想語彙の出現頻度を出し、頻度の降順に並べた。その結果の上位五〇語を示したものが、つぎのリストである。括弧内には出現度数と『古事類苑』の索引に従い部類分けした結果を示した。例えば、(天)とあれば『古事類苑』の「天部」に記載があることを意味する。索引に項目がないものは「—」とした。

つき (313、天) ほととぎす (311、動物) あき (302、歳時)
 やま (266、地) こえ (264、天・人) かぜ (261、天) はな
 (198、植物) はる (180、歳時) うぐいす (166、動物) なく
 (156、—) よる (147、歳時) ひと (147、人) かすみ (138、天) くれ (123、—) かげ (121、—) そら (111、天) み
 ち (110、地) うち (110、—) くさ (109、植物) まくら
 (103、器用) そで (102、服飾) まつ (101、植物) つゆ (97、

天) かえる (94' —) ふね (92' 器用) かり (92' 動物)
 こころ (91' 人) ありあけ (90' 歳時) なみ (86' 地) あさ
 (86' 歳時) ゆう (82' 歳時) よ (80' —) かね (78' 宗教)
 くも (76' 天) おと (72' —) ゆめ (70' 人) ころも (68'
 服飾) おもう (68' —) みず (63' —) なか (63' —) ふ
 るやう (61' —) ぢや (59' 天) なる (57' —) ぢへ (56' —)
 にち (55' 歳時) ふける (53' —) くりあい (53' 歳時) む
 れ (52' —) ぐる (52' —) した (52' —)

つぎに、抽出された連想語彙の変化を、年代別に追ってみよう。

時代区分は、連歌DB上での句数のバランスと連歌史上の画期とを
 考え合わせて、つぎの五期に分類した。⁶⁾ただし、「付句集」と「三
 物」は作句年ではなく本の出版年しかわからないので、除いてある。
 また、作句年のわからない句も分析の対象外にしてある。

第一期： 一四五〇年以前（飯尾宗祇以前） 一七、六四一句
 第二期： 一四五〇—一五〇二年（宗祇の活躍期） 六八、〇四八句
 第三期： 一五〇三—一五六三年（谷宗養の活躍期）
 六四、四三七句

第四期： 一五六四—一六〇二年（里村紹巴の活躍期）

一九、三七五句

第五期： 一六〇三年以後（紹巴以後） 二五、六四一句

この時代区分と抽出句数については、次章に再録し、若干の考察
 を加えることにする（第二章、2・1）。

抽出された連想語彙を出現度数が高い順に、各期上位二〇語を抜
 き出したのが、表1—3である。これをみれば、「つき」のように
 定座⁷⁾のあるものは、やはり各期とも上位にきていることがわかる。

なかでも特徴的な動きをしているのが、「ほととぎす」である。第
 一期で「ほととぎす」は、度数九で二五位だった。それが第二期に
 は六位になり、第三期以後は一位を占めるようになっていく。

どうやら「ほととぎす」は第二期以後、連歌の連想語彙として頻
 繁に用いられるようになったようだ。このことを、連歌DBに含ま
 れる各期の総句数に占める、「ほととぎす」の語を含む句数の割合
 で確認しておこう。その結果が表1—4である。これによると、や
 はり第二期以後に、「ほととぎす」の語が急激に用いられるように
 なっている様子がみてとれる。

こういった「ほととぎす」の変化は、連歌に特有なことだったの
 だろうか。そこで疑問になるのは、和歌における「ほととぎす」に
 同様の变化があったかということである。

日文研からは、やはり勢田氏が作成し寄贈された「和歌データベ
 ス」もまた公開されている。和歌DBには、七〇〇年代から一五〇

○年代までの勅撰和歌集（全二一集）のすべてと、『万葉集』をはじめ『夫木和歌集』などの私撰集、および主要な私家集の和歌が二八、〇一八首収録されている。この和歌DBを利用して、各期の和歌に占める「ほととぎす」を含む歌の数を数え、割合を比較してみた。

その結果が表1-5である。和歌の場合「ほととぎす」の歌は、第三期に割合がやや減少するものの、いずれの期でもほぼ二%代で一定している。出現率は連歌の場合よりもはるかに高いが、年代による出現率の変動はさほどみられない。したがって、「ほととぎす」を取り巻く連想関係の変化は、和歌ではみられず連歌に特有な現象だったことが発見できた。

「ほととぎす」に関するより詳細な分析は次章で行うことにして、最後にこの手法の限界と課題点について述べておく。

最大の欠点は、連想関係を五・七文字の単位でしか拾えていないことにある。連想関係を持つ語は、二文字や三文字といった短い文字列である場合も、もちろんありえる。しかしながら、短い文字列について同様の手法を試みようとする、自動抽出される連想語の候補が爆発的に増えてしまい、人間が手作業で確認作業をすることが事実上、不可能になってしまう。現状では、最短で五文字の単位に抑えることで、かろうじて人力がおおよぶ範囲に候補を絞り込むことができている。この欠点を克服するためには、句の漢字化か、あ

るいは形態素解析をしておくことが必要になる。しかし、これもまた膨大な作業を要することであるので、現状では望むべくもない。もうひとつの欠点は、あくまでも文字列上の一致でしか連想関係をみていないことにある。連歌の付合では、違うことばを使っても、その底流にある付合の心はおなじであるという場合も、ふんだんにある。そのような連想関係を抽出することもまた、現状では人間のセンスに頼るしかない。

こういった課題点を考えると、この手法で抽出された連想語彙は網羅的なものでは決してない。連歌・俳諧DBのなかには、未だ抽出されていない未知の連想語彙が山のように残っていると考えるべきである。しかしながら、たとえ取りこぼしがあったとしても、未知の連想語彙を新たに発見し得たことの価値には変わりはない。さらに連歌の連想関係における「ほととぎす」の時代的变化を見出し、深く考察すべき課題を発見し得たこともまた重要である。

以上のことを小括とし、次章の考察に論をつなぐことにする。

注

- (1) 村上征勝『文化を計る』、朝倉書店、二〇〇二年一二月
- (2) 竹田正幸、福田智子「類似歌を探せ」デジタル国文学の新展開『日経サイエンス』二〇〇二年五月号、二八〜三五頁
- (3) 勢田勝郭『連歌の新研究 索引編（宗祇の部）』『同 索引編（肖柏・宗

長の部』『同 論考編』『同 索引編(七賢の部)』、桜楓社、一九九二
〜九五

(4) 能楽については、小西甚一『能楽論研究』(塙選書、昭和三六年四月)、
島津忠夫『能と連歌』(和泉書院、平成二年三月)などに指摘がある。

絵画との関係については、鶴崎裕雄「連歌師の絵心―連歌と水墨山水画、
特に瀟湘八景図について―」『芸能史研究』第四三号(芸能史研究会、

昭和四八年一〇月)や島尾新「連歌的世界の画像学―室町時代の『尽し』
風屏風を例に」(板倉聖哲編『講座日本美術史』第二巻、東京大学出版

会、平成一七年五月所収)などがある。また能や歌舞伎、茶道などとの
関係については、「特集 連歌と能・狂言と―中近世の集团的演劇性」

『国文学 解釈と教材の研究』第四三巻一四号、学燈社、平成一〇年
一二月)所収の諸論稿があるが、この中に茶道との関係を論じた熊倉功

夫「茶の湯の連歌的性格」がある。茶道との関係を述べたものには他に、
伊地知鉄男「中世的芸能の性格―たとえば連歌と茶湯について」(『伊地

知鉄男著作集』Ⅱ、汲古書院、平成八年一二月所収)がある。
(5) 『古事類苑』は、明治二九年から大正三年にかけて刊行された日本最大

の百科史料事典である。歴代の制度、文物、社会百般の事項を天・歳時・
地・神祇などの三〇部門に分類し、そこには慶応三年以前の基本的な文

献から各項に関わる史料が採録されている。
(6) 福井久蔵『連歌への道』(『福井久蔵著作選集』、国書刊行会、昭和五六

年二月)、木藤才蔵「連歌Ⅱ」(和歌文学会編『和歌文学講座』第三巻

(歌壇・歌合・連歌)、桜楓社、昭和四七年七月)などを参考にした。

ただし、ここでは基データ数を鑑みて連歌全体の時代区分ではなく、連
歌の隆盛期から衰退期、もしくは室町期の時代を新たに区分しなおした

形となった。ちなみに、ここで設定した時代区分をまたぐ可能性がある
句をもつ付句集(たとえば『新撰菟玖波集』など)は除外し、データの

処理を行った。なお参考のため、各連歌師の生没年を記しておく、飯
尾宗祇(一四二一〜一五〇二)、谷宗養(一五二六〜一五六二)、里村紹

巴(？〜一六〇二)である。
(7) 定座とは、決められた景物が必ず読みこまれる位置をさす。例えば、歌

仙(三六句で一巻)では花を二つ、月を三つ詠むことになっている。月
の場合、初折表の五句目、裏の八句目あたり、名残の折の表一一句目あ

たりが定座となる。花の場合は、初折裏の一一句目、名残の折の裏五回
目がそれに当たる。ちなみに、連歌では懐紙を二つ折にしたものを百韻

は四枚、歌仙は二枚というように使い、一枚の表裏に記す句数を定めて
いる。一枚目の懐紙を一の折または初折しんせりとし、二枚目の懐紙を二の折、

三枚目の懐紙を三の折と呼ぶ。最後の懐紙は名残の折と呼び、百韻では
四の折が、歌仙では二の折がこれに当たる。

表 1-1 処理用連歌・俳諧基データ (一部)

作品集名	作品名	作成年月日	作成年	句番号	句
【文和千句】	文和千句 第一:何人 [なはたかく]	文和五年	1355	00001	なはたかく一こゑはうへなし一ほとときす
【文和千句】	文和千句 第一:何人 [なはたかく]	文和五年	1355	00002	しけるきながら一みなまつのかせ
【文和千句】	文和千句 第一:何人 [なはたかく]	文和五年	1355	00003	やまかけは一すすきみつの一なかつにて
【文和千句】	文和千句 第一:何人 [なはたかく]	文和五年	1355	00004	つきはみねこそ一はしめなりけれ
【文和千句】	文和千句 第一:何人 [なはたかく]	文和五年	1355	00005	あきのひの一いてしくもまと一みえつるに
【文和千句】	文和千句 第一:何人 [なはたかく]	文和五年	1355	00006	しくれのそらも一のこるあさきり
【文和千句】	文和千句 第一:何人 [なはたかく]	文和五年	1355	00007	くれことの一つゆはそてにも一さたまらて
【文和千句】	文和千句 第一:何人 [なはたかく]	文和五年	1355	00008	さこそかはれ一ころもうつこゑ
【文和千句】	文和千句 第一:何人 [なはたかく]	文和五年	1355	00009	たひひとの一またれしころや一すきぬらむ
【文和千句】	文和千句 第一:何人 [なはたかく]	文和五年	1355	00010	けふよりのちの一はなはたのます
【文和千句】	文和千句 第一:何人 [なはたかく]	文和五年	1355	00011	かすめとも一こすゑにかせは一なほふきて
【文和千句】	文和千句 第一:何人 [なはたかく]	文和五年	1355	00012	かけにはのこる一やまのしらゆき
【文和千句】	文和千句 第一:何人 [なはたかく]	文和五年	1355	00013	かはかみの一つきにやみつの一こほるらむ
【文和千句】	文和千句 第一:何人 [なはたかく]	文和五年	1355	00014	なみのよるこそ一あらはさむけれ
【文和千句】	文和千句 第一:何人 [なはたかく]	文和五年	1355	00015	ことかたに一かよふちとりの一こゑとほし
【文和千句】	文和千句 第一:何人 [なはたかく]	文和五年	1355	00016	ともなしとても一たひのゆふくれ
【文和千句】	文和千句 第一:何人 [なはたかく]	文和五年	1355	00017	みをたにも一おもひすてたる一よのなかに
【文和千句】	文和千句 第一:何人 [なはたかく]	文和五年	1355	00018	あきのうきをは一のこすやまさと
【文和千句】	文和千句 第一:何人 [なはたかく]	文和五年	1355	00019	つゆならは一なみたのそてに一こころせよ
【文和千句】	文和千句 第一:何人 [なはたかく]	文和五年	1355	00020	まつもたのみの一よこそなかけれ

表 1-3 出現度数が高い連想語彙 (括弧内は度数)

時代区分				
1	2	3	4	5
①つき(29)	①あき(91)	①ほととぎす(120)	①つき(52)	①つき(15)
②なみ(27)	②やま(83)	②あき(109)	①ほととぎす(52)	①ほととぎす(15)
③かり(25)	③つき(82)	③つき(99)	③こえ(45)	③うぐいす(11)
④かえる(24)	④かぜ(80)	④こえ(98)	④うぐいす(44)	④はな(10)
⑤あき(20)	⑤ひと(75)	⑤かぜ(97)	⑤みち(32)	④やま(10)
⑥そで(18)	⑥ほととぎす(70)	⑥やま(89)	⑥はな(30)	⑥あき(8)
⑦ありあけ(16)	⑦こえ(66)	⑦なく(62)	⑦やま(30)	⑥かげ(8)
⑦かすみ(16)	⑧ころろ(65)	⑧はな(60)	⑧かぜ(28)	⑥はる(8)
⑦はな(16)	⑨はな(54)	⑨うぐいす(57)	⑨はる(26)	⑨あける(7)
⑩こえ(15)	⑨はる(54)	⑩はる(54)	⑩いち(25)	⑨こえ(7)
⑩やま(15)	⑪よ(53)	⑪よる(52)	⑪あき(22)	⑨ひかり(7)
⑫かぜ(14)	⑫なか(49)	⑫かげ(41)	⑫かすみ(21)	⑫とり(6)
⑫まつ(14)	⑬かわる(47)	⑫くれ(41)	⑬そで(20)	⑫なく(6)
⑫よる(14)	⑭かすみ(41)	⑭かすみ(39)	⑭なく(19)	⑫のどか(6)
⑮ひと(13)	⑮かげ(37)	⑮そら(37)	⑮よる(17)	⑮かすみ(5)
⑯つゆ(12)	⑯よる(36)	⑯つゆ(36)	⑯まくら(16)	⑮かぜ(5)
⑰さくら(11)	⑰くさ(35)	⑰まくら(35)	⑰おと(15)	⑮きりぎりす(5)
⑰なく(11)	⑰くれ(35)	⑰そで(34)	⑰くさ(15)	⑮しも(5)
⑰はる(11)	⑰まつ(35)	⑰いち(33)	⑰くれ(15)	⑮にち(5)
⑰ふじ(11)	⑳なく(34)	⑳ふね(31)	⑰そら(15)	⑮むらさめ(5)
			⑰はし(15)	

表 1-4 連歌中「ほととぎす」を含む句数の割合

時代区分	連歌DB句数	ほととぎす句数	割合(%)
1	17641	45	0.3
2	68048	523	0.8
3	64437	394	0.6
4	19375	151	0.8
5	25641	141	0.5

表 1-5 和歌中「ほととぎす」を含む歌数の割合

時代区分	和歌DB総歌数	ほととぎす歌数	割合(%)
1	158236	4510	2.9
2	47597	1390	2.9
3	2185	50	2.3
4	0	0	0.0
5	0	0	0.0

第二章 連歌・俳諧DBより抽出した連想語彙ネット

ワークの解析

はじめに

前章では、日文研の連歌・俳諧DBから連想語彙を抽出し、抽出結果に対する考察を行った。本章は、連歌における連想語彙ネットワーク図の全体像と、その時代的変遷について考察したものである。本章で示す全体像とは、一三〇〇年代から一六〇〇年代の約四〇〇年間にわたる連歌の全体像である。また、時代的変遷とは、対象とした年代の中で時代的な変化があるのかないのか、それを検証したものである。

本研究の意義等については、前章で述べた通りであるが、従来の国文学における研究とどういった点で異なるのかを、ここに簡単に記しておく。従来の連歌・俳諧研究は主として作品の解釈から分析を行うという手法を採っていた。だが、本書はそのような方法は採らない。本書の解析方法は、まずすべての作品(句)を等価なデータとして扱い、データ解析を行う。そのようにして得られた結果から問題点を抽出し考察を加える。もし必要な場合があれば、実際の

データに戻って検証することもある。こうした解析法を採用することによって、オーソドックスな国文学的解析法からだけでは決して導き得なかった新しい知見をもたらすのが本書の主旨であり、目的である。

2-1 連想語彙ネットワークの全体像

前章で抽出された六三〇語の連想語彙の出現頻度を出し、頻度の降順に並べ、その結果の上位五〇語をリストで示した。前章でも説明したように、括弧内は出現度数と『古事類苑』の索引に従い部類分けした結果である。「天」とあれば『古事類苑』「天」部に記述があることを意味する。また、対象語彙に関する記述が『古事類苑』にない場合は、「―」とした。その結果は、左のようなリストになる(第一章のリストを再録)。

つき (313、天) ほととぎす (311、動物) あき (302、歳時)
 やま (266、地) へえ (264、天・人) かぜ (261、天) はな
 (198、植物) はる (180、歳時) うぐいす (166、動物) なく
 (156、―) よる (147、歳時) ひと (147、人) かすみ (138、
 天) くれ (123、―) かげ (121、―) そら (111、天) み
 ち (110、地) いち (110、―) くさ (109、植物) まくら (1

03、器用) そで(102、服飾) まご(101、植物) つゆ(97、天) かえる(94、—) ふね(92、器用) かり(92、動物) こころ(91、人) ありあけ(90、歳時) なみ(86、地) あさ(86、歳時) ゆう(82、歳時) よ(80、—) かね(78、宗教) くも(76、天) おと(72、—) ゆめ(70、人) ころも(68、服飾) おもう(68、—) みず(63、—) なか(63、—) ふる(61、—) ゆき(59、天) なる(57、—) やく(56、—) にち(55、歳時) ふける(53、—) いりあい(53、歳時) むれ(52、—) やる(52、—) した(52、—)

これら五〇語について、連想関係の強弱を示すネットワーク図を作成した(図2-1)⁽⁴⁾。

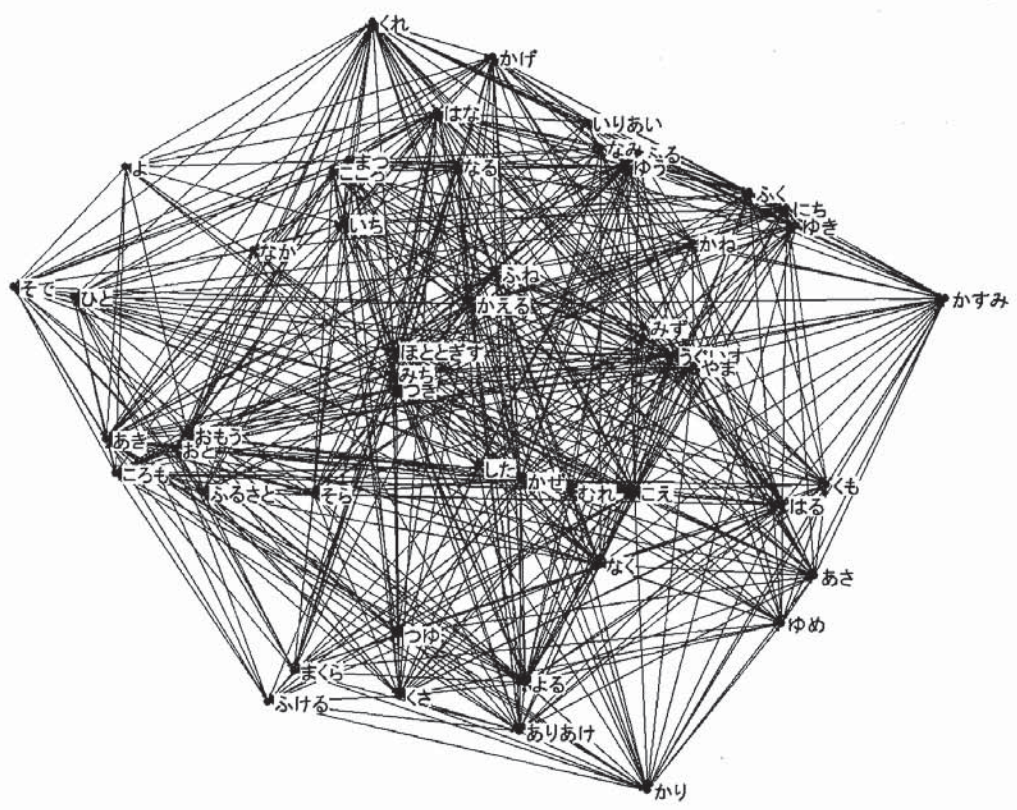


図2-1 連想語彙ネットワークの全体図

この図に表われた傾向を図化し直すと、図2-3のようになる。

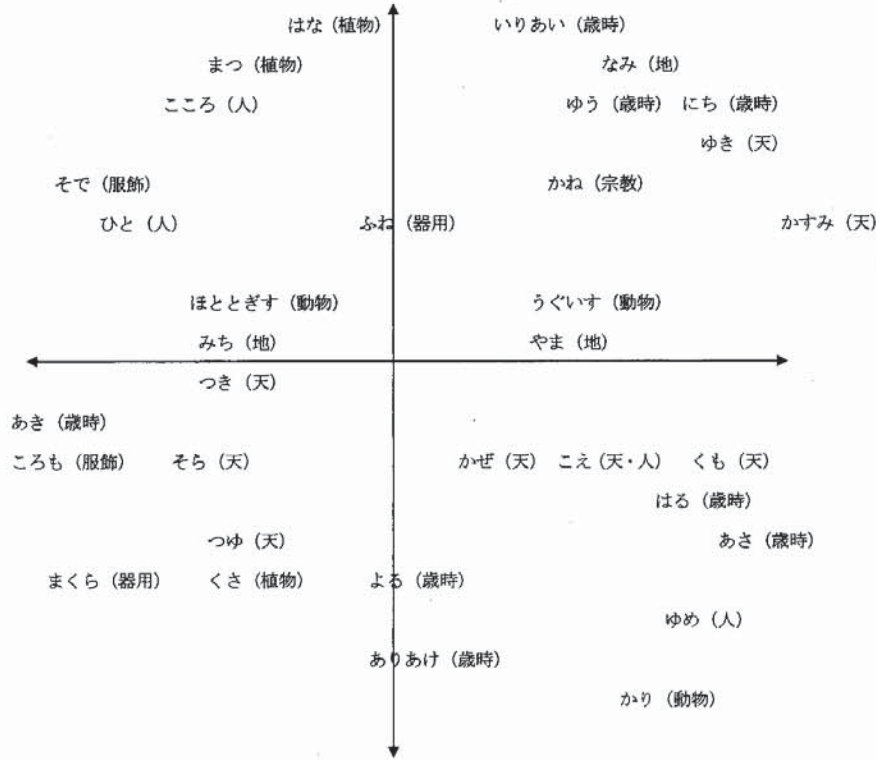


図2-2 連想語彙(全体)の位置

図2-1のネットワーク図に示した語彙の内、『古事類苑』で分類可能だったものを残して、再度図を作成すると図2-2のようになる。

図2-3の横軸は、春と秋を結ぶ季節の軸であり、縦軸は夕(日

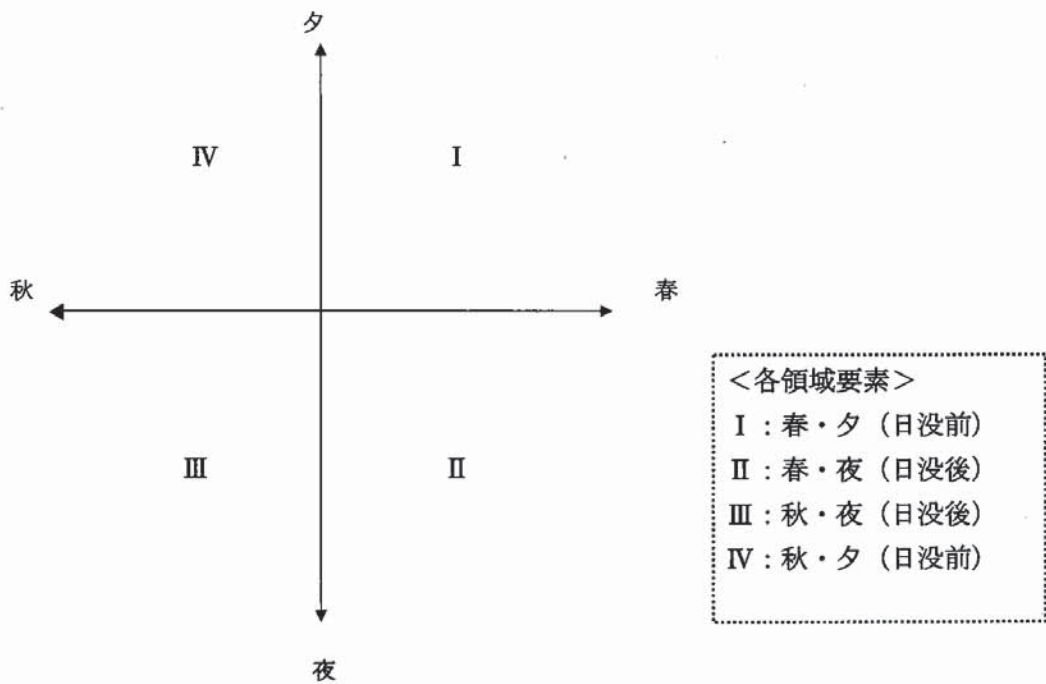


図2-3 連想語彙(全体)の概念図

没前)と夜(日没後)を結ぶ時間軸と解釈できる。横軸と縦軸で区切られた各領域を図のようにⅠ～Ⅳとすると、それぞれの領域は図中の〈各領域要素〉のようになる。

領域ⅠとⅣには、昼、とりわけ夕暮れ時に見られる景物が、そしてⅡとⅢには夜、とりわけ早朝に見られる景物が配されている。また領域Ⅲには、人を思う恋の要素(「おもう」、「ころも」、「つゆ」、「まくら」など)が、そして領域Ⅳには世を厭う述懐の要素(「よ」、「なか」、「そで」など)が多く見られるように思われる。実際の作品では、恋と述懐は用語の点でかなり類似するので、領域Ⅲ、Ⅳを合わせて、「人事の領域」と考えてもいいかもしれない。領域Ⅰ、Ⅱに関して言えば、特別な傾向は見いだせなかった。ただ、やや強引かもしれないが、領域Ⅲ、Ⅳに比べ「天」部や「歳時」部に分類される自然の景物が多いことから、これらの領域を、「神(自然界)の領域」と見なすことも全く不可能なことではない。

ちなみに、「あき」と恋が近い関係にあるのは「あき」が「秋」だけでなく「飽き」に通じるからであり、「つゆ」の場合は、これがしばしば「なみだ」の喩えとして用いられることから恋に近い領域に配されたものと考えられる。

この結果から、連歌の連想世界は主にこの二軸を念頭に置きながら展開されてきたと考えられる。少なくとも、データ上から見れば、そのように考え得るのである。

2-2 抽出率の変化

まず、前章で行ったように、連歌DBのデータ構成と従来の連歌史研究を勘案し、表2-1のような時代区分を行った。念のためも再録しておく、(飯尾)宗祇以前(一四五〇年以前)、宗祇の活躍期(一四五一～一五〇二年)、(谷)宗養の活躍期(一五〇三～一五六三年)、(里村)紹巴の活躍期(一五六四～一六〇二年)、紹巴以後(一六〇三年以後)という五期に分類した。

表2-1 連歌・俳諧DBの時代区分と連想語彙の割合

【時代区分】	DBの句数(A)	抽出句数(B)	抽出率(%)
1 1450年以前:宗祇の活躍以前	17641	275	1.56
2 1451~1502年:宗祇の活躍から没まで	68048	764	1.12
3 1503~1563年:宗養の活躍から没まで	64437	869	1.35
4 1564~1602年:紹巴の活躍から没まで	19375	423	2.18
5 1603年以後:紹巴以後	25641	116	0.45
計	195142	2447	1.25
総句数(成立年が全くわからないものを含む)	200958		

表2-1で連歌・俳諧DBに収録されている句数に対する抽出句数の割合（抽出率）を見ると、とりわけ4と5の時期に特徴が見られる。4の時期は元のデータ数が少ないにもかかわらず、抽出率が高い（二・一八％）。本研究では、五・七の単位で連想関係にある語彙を抽出しているから、紹巴の活躍期に五・七単位の長く、かつ定型的な付句が多く作られたことを、この数字は物語っている。反対に、5の時期では元の句数は4の時代よりも多いにもかかわらず、抽出率が極端に低くなっている（〇・四五％）。

5の時期に抽出率が極端に低下した原因については、以下の三つの可能性が考えられる。

第一は、5の時期に、付句の単位が五・七の単位よりも短い単位の連想語で付けられるようになったという可能性である。それは前代への反省と反動の現れであるのかもしれない。4の時期に顕著であった長い単位での付合に対する、反省と反動である。

第二は、付け方が変化した可能性である。つまり、詞から意想中心へと付合の主流が変化したのかもしれないということである。金子金治郎は、二条良基（二三二〇～一三八八）の『僻連抄』（一三三四五年成立）に挙げられている主要な付合の型を以下のようにまとめている。

平付ひらひ : 風景など、ありのままに並べて付ける。山に峰、浦に

舟に付ける類である。

四手付よつて : 前句中の複数の詞ことばを取り上げ、それぞれ縁語よりのあい（寄合と呼ぶ）で付句を構成する。

景気付 : 前句のおもしろい風情、たとえば花に対し、これに添ぞるおもしろい風情を付ける。

心付 : 詞のたよりもなく、寄合もなく、景気もなく、ただ心（意想）だけで付ける。

詞付 : 詞のたよりだけで、たとえば長いに繩、よるといよに糸を付けるをいう。

埋付うめひ : 表面は付かないようにみえながら、底に深い心を含んで付いているをいう。

対揚たいよう : 春に秋、朝に夕、山に野、昔に今など、対になることをあげて付けるをいう。⁽¹⁾

単純に考えても、先にあげた金子によってまとめられた付け方かた言えば、平付、四手付、詞付、対揚といった付合は詞の一致を生む可能性が高いが、景気付、心付、埋付が増えれば詞が一致する可能性はかなり低くなるのは当然であろう。紹巴没後に、このような変化が起こった可能性も簡単には捨てきれない。

第三は、連歌の俳諧化である。この時期にはすでに俳諧の祖ともされる荒木田守武（一四七三～一五四九）はもちろんのこと、貞門

俳諧の祖、松永貞徳（一五七〇―一六五三）が活躍しだす時期にあたり、そういった俳諧の影響を強く受けたという可能性も十分考えられる。

実際、天正一三年（一五八五）に紹巴が豊臣秀吉（一五三六？―一五九八）のために進献した『至寶抄』という書物には、「付合・寄合の事さして定る事有べからず候、古今の序にも人の心を種として萬の言の葉とぞなれりけると御入候、唯今も面白きと思召候事を仰出され候へば、をのづから古歌の心にも相叶候」、「古き連歌は只言葉の縁のみをとり付、心大形の句共も御入候つる、唯今は用付とて嫌申事多候」などといった連歌の規則を緩和する、もしくは俳諧を志向する態度ともとれる言葉が見られるのも、また事実である。⁽⁴⁾

紹巴の没後、連歌界をまとめ上げるだけの力量をもった宗匠がでなかつたことや、連歌があらゆる階級、地方にまで広まったという事実などが招いた結果かもしれない。ただし、「宗養死して、連歌ハ断絶也」、あるいは紹巴が連歌の流布に努めたことを評して「我身の連歌をやすやすとして、更にふかき事を嫌ければ、いかなる童蒙も思ひつき道に入ることたやすかりき」といった『歌道聞書』（一六四二年成立）の言葉を見ると、すでに宗養が没した時点で、宗祇以来の連歌が廃れてしまったこと、紹巴が連歌を大衆に広めましたが、それによってどんな童蒙（子供たち）もたやすく思いつくままに詠むようになった、つまりは連歌の簡略化と質的変化が起こっ

た、という可能性も考えるべきであろう。江戸時代になり、連歌が急激に衰退したという文学史的記述内容が真実なら、それはある程度の質の低下を伴っていたのであろう。⁽⁵⁾ 少なくともその変化は、江戸時代における大衆の心を捉えることはできなかった。いずれにせよ4や5の時期は連歌が付合、用語などの面において、ドラスティックな変化があったものと考えられる。

これら三つの可能性のうち、いずれが主たる原因であったのか、俄には判断しかねるが、このような要因が複合的に合わさった結果、それが実際の連歌作品にも反映され、表2-1のような結果となつてあらわれたものと推察される。

従来の連歌・俳諧研究では、4や5の時期はあまり注目されてこなかつた。しかし、用語の違いを越えた連歌から俳諧（俳諧の連歌）への道程を考える上で何らかの新しい知見が得られる可能性は十分にあると思われる。

2-3 連想語彙ネットワーク図の変化

次に連想語彙ネットワーク図における時代変化を見てみよう。連想語彙ネットワーク図、および概念図を描くためには、ある程度抽出句数のばらつきを少なくし、かつネットワーク図、および概念図が描ける程度の量を確保しなければならない。そこで、「概念図作

表 2-2 連歌・俳諧DBの時代区分と連想語彙の割合

	【概念図作成のための時代区分】	DBの句数(A)	抽出句数(B)	抽出率(%)
①	1+2:宗祇の没まで	85689	1039	1.21
②	1503~1563年:宗養の活躍から没まで	64437	869	1.35
③	4+5:紹巴の活躍以後	45016	539	1.20

成のための時代区分」(表 2-2)を設定した。このような時代区分をすることによって、抽出率はほぼ同程度になったことがわかるであろう。

この①〜③期について連想語彙ネットワーク、および概念図を作成し、その変化を探った(ネットワーク図:図 2-4〜6、概念図:図 2-7)。なお、全体図では成立年代が不明なものも含めてネットワーク図と概念図の作成を行ったが、ここでは成立年代のわからないものは全て除いた。

ここで注意しておきたいのは、ネットワーク図作成の為に使用し

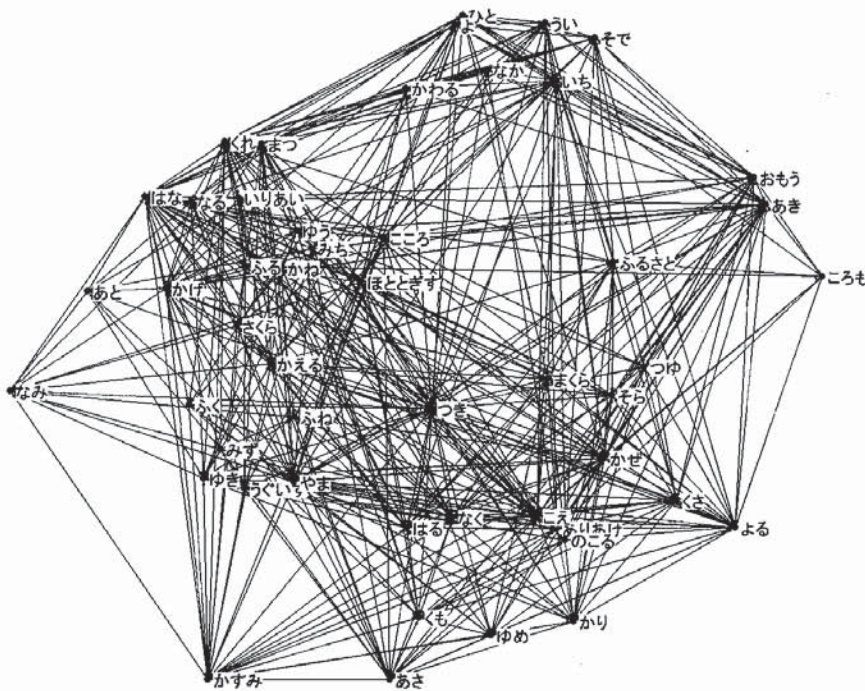


図 2-4 1502年以前の連想語彙ネットワーク図

たソフトウェアの性質上、縦軸、横軸の方向は任意に決まってしまうため、概念図を表示するたびに、変化することである。ここではあえて、それを無理に補正、統一せず、景物の相対的な位置関係のみを分析して論ずる。

この解析の結果、いくつか個々の景物について変化が見られた。最も特徴的なものは、「ほととぎす」である。その変化は「やま」と「ひと」との関係性でみた方がわかりやすいと思われるので、それらの語の大まかな位置を図2-7に示した。図2-7からもわか

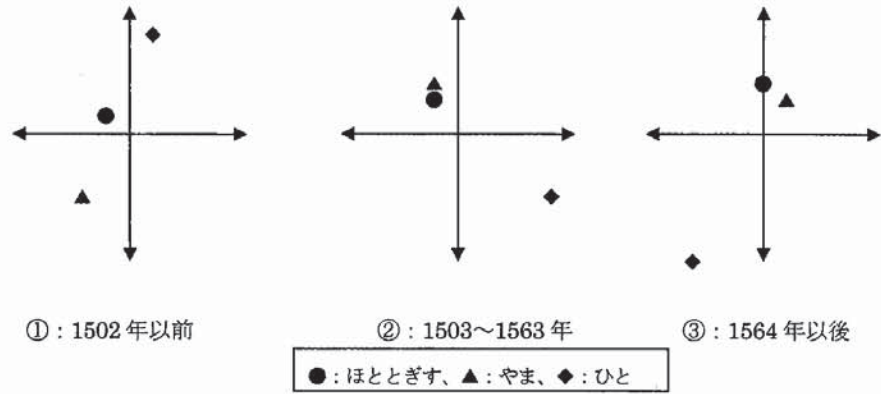


図2-7 「ほととぎす」の位置変化

るように、「ほととぎす」は②の時代以降「やま」との連想関係を強め、「ひと」から距離を取るようになる。その理由を次節で考察する。

2-4 「ほととぎす」のイメージ

前節で見た、「ほととぎす」と「やま」、「ひと」という単語の相対的な位置変化の原因をここでは考える。この変化に対しては、二つの可能性が考えられる。

一つは、寄合書などによって「ほととぎす」と「やま」が付合語となり、直接的な関係がより強化された結果、「やま」とは連想関係を強め、反対に「ひと」との関係性は弱まったという可能性である。表2-3、4は、連歌寄合書における、表2-5は俳諧寄合書における「ほととぎす」の付合語を一覧表にしたものである。⁸⁾

表2-3 連歌寄合書における「ほととぎす」の付合語（鎌倉・室町期）

書名	連歌集	修茂寄合	連歌合纂集	宗祇袖下	連歌作法	宗長歌話	連歌寄合	連歌付合の率
成立年(西暦)	鎌倉時代成立	1472奥書	1476奥書	1489頃	1489奥書	1490	1494奥書	不明
付合語	むら雨	卯の花	鶯	忍びね	卯花	老その森	音羽山	一声
	有明の月	たちはな	卯花	村雨	橘	忍山	石上寺	山ち
	杉のむら立	あやめ	花橘	山路	鳥浦	音羽山	明石浦	山田の原
		五月雨	山	有明	五月雨	くらはし山	老曾の森	豊井
		むらさめ	村雨	鳥浦	村雨	神なび山	淀渡	五月
		くさのいほ	月	待かね山	杉	山田の原	片岡森(賀茂)	杉間
		すき	雲間	五月雨	草の庵	まちな山	杉	木がくれ
		あり明の月	一こゑ	一声	こぬ夜あまた	片岡の森	帰るにしかじ	おもひもあへず
		こぬ夜あまた	鳴ふるす	まつち山	在明の月		村雨	
		ねさめ	五月		ね覚		その他名所	
		なのる	忍ね		なのる			
		なみたなそへそ	ね覚		濃なそへそ			
		つまこふる	杜のしづく		つまこふる			
		神なひのもり	濃なそへそ		神なひのもり			
		かく山			香久山			
		よこ山			相坂山			
		よとの			二村山			
		すかのあらの			待難山			
		ふる			淀野			
		なら			真神山			
		かすか山			手向山			
		まつかね山			倉橋山			
		ふたむら山			美豆野			
		あふさか山			布留			
		ときは山			菅荒野			
		おひそのもり			常葉山			
		しのふのもり			春日山			
		おとは山			奈良			
		うどのはま			明石			
		あかし			宇流浜			
		しか			志賀			
					片岡のもり			
					老曾			
					信太のもり			

表2-4 連歌寄合書における「ほととぎす」の付合語（安土桃山・江戸期）

書名	連歌作法書	拾花集	竹馬集	随葉集
成立年(西暦)	1579奥書	1656刊	1650~80?刊	1670刊
付合語	しける	峯の雲	峯の雲	草の庵
	木すゑ	雨中	雨中	雨
	山	村雨	あやめかほる	杉村
	うのはな	藤浪	村雨	梢の茂る
	たちはな	花	花の名残	有明
	村雨	杜の若ば	花	むらさめ
	草の庵	杉村	杉むら	橘
	月	橘	森のわか葉	淀のわたり
	杉むら	茂る梢	しける梢	片岡の森
	淀の渡り	草の庵	たちはな	さみだれ
	かた岡のもり	山路	やまち	山にやすらふ
	(なき人こふる)	忍ぶ音	草の庵	池の藤浪
	(村雨の跡さひし)	なき人	忍ぶむかし	むかしをおもふ
		有明	有明	山路
		早苗取	なき人	無人
		短夜	関の戸	早苗とる
		関の戸	釣簾の外	関の戸
		ね覚の枕	明石	短夜
		卯花	ねさめの枕	こすの外山
		茂る山	淀のわたり	ね覚の枕
		若葉の花	片岡の森	明石
		あやめ	おひその森	
		旅口伝	山田の原	
		こすのと山	布留の神壇	
		淀のわたり	むさし野	
		片岡の杜	桐荷山	
		明石		
		神なび山		
		相坂		
		神山		
		葛城		
		松浦		
		外に急道		

表2-5 俳諧寄合書における「ほととぎす」の付合語（江戸期）

署名 成立年(西暦)	せわ焼草 1656刊	便船集 1669	初本結 1662上梓	俳諧類松 1676	俳諧小傘 1691
付合語	蜀国王 旅空 月 雲 死出山 山路 卯ノ花 村雨 田植(早稲) 萩 草庵 樽 有明月(有明) 弓張月 死出乃山 明石ノ泊(明石の浦) 音羽(音羽山) 山田乃原 たゞすの森 淀(淀のわたり) 石倉 片岡乃森	橋 五月雨 旅乃空 鶯 鷺 (雲井) 山路 卯ノ花 村雨 田植(早稲) 萩 草庵 樽 有明月(有明) 弓張月 死出乃山 明石ノ泊(明石の浦) 音羽(音羽山) 山田乃原 たゞすの森 淀(淀のわたり) 石倉 片岡乃森	立花 卯花 有明月 村雨 田植る 鷺 さみたれ 片岡の森 明石の泊 山田乃原 夜の雨 源氏花ちる里のごころなど	村雨 霧の雲 藤 花 杉村 早苗 橋 関の戸 短夜 山路 無人 ね寛の枕 有明 こすの外山 草の庵 卯の花 無子 新樹 樽 萩 弓張月 五月雨 旅の空 あやめ草 鶯 鷺 死出の山 石倉 片岡のもり たゞすの杜 山田の原 淀のわたり 音羽山 石上寺 老曾の杜 明石のうら 伽	残花 茶ヲ天ス 妻戀 真山 竹ノ子 早苗 短夜 ね寛 無子 山路 源千月 発句 雲行方 陣空 萬蒲 をち返り さほ衣のあひしらひ

表2-13からわかるのは、最初期の寄合書とされる『連證集』では「ほととぎす」の付合語に「やま」に関する語彙は見られない。ただし、『連證集』には次のようにある。

郭公に杉のむら立^{たち}をつけ侍^{たち}ハいか^{これ}に。是ハ西行^{さいぎょう}か、きかすとも
こゝをせにせむ時鳥^{ときどり}山田^{やまだ}の原^{はら}の杉^{すぎ}のむら立^{たち}、とよめるにて、
杉^{すぎ}のしるしに山やこゑまし

なくかたは雲ふかくとも郭公^{かくら} と付し也。⁽⁹⁾

この場合、「杉のむら立」と「ほととぎす」が連想関係にある訳だが、付句の例の中には前句に「やま」が、付句に「ほととぎす」が詠み込まれている。つまり、寄合書の最初期から「ほととぎす」と「やま」は連想関係になりやすい傾向は十分に有していたものと思われる。一方、「ひと」に関する語彙はほとんど窺えない。しかし全くないとも言いきれない。江戸時代の連歌寄合書には「なき人」という付合語が入っている。この「なき人」との付合がいつ頃成立したのかは不明である。ただ少なくとも一五世紀(一四〇〇年代)の寄合書には見あたらないということは、はっきりしている。

もっとも、一条兼良(一四〇二〜一四八二)編『和歌題林抄』(成立年未詳)には、「時鳥」の説明中に「しでの山にかよふ物なれば、なき人をおもひ出るたよりもよむべし」とあるから、一五〇

○年以前に連歌にも流入していた可能性はある。そしてその淵源が『古今和歌集』巻一六(哀傷部)にある「なき人のやとにかよはば郭公かけてねにのみなくとつげなむ」にあるとすれば、もつと早く連歌の世界で付合となつていてもおかしくはない。残念ながら、資料として一六世紀(一五〇〇年代)の寄合書が少ないので、正確にその時期を比定することはできないが、天正七年(一五七九)の奥書をもつ細川幽斎(一五三四〜一六一〇)『連歌作法書』に、「時鳥の鳴すつるには」という付合語として「なき人こふる」が挙げられていること、そして『随葉集』の成立が慶長八年(一六〇三)以前であることなどから、一六〇〇年以前にはすでに「なき人」は「ほととぎす」の付合語となつていたものと思われる。

ところで、「ひと」との繋がりはともかくとして、寄合書において「ほととぎす」と「やま」の関係性が強まるのは、室町中期の寄合書においてである。文明四年(一四七二)の奥書をもつ『修茂寄合』以降の連歌寄合集には、多くの山の名が付合語として列挙されている。特徴的なのは、そのほとんどがある特定の山であることだ。いわゆる名所、歌枕というものである。反対に特殊なのは、『連珠合璧集』と『連歌作法書』で、単に「山」という語彙を「ほととぎす」の付合語としている。いずれにせよ、鎌倉期にはあまり見られなかった「ほととぎす」と「やま」の連想関係が、室町期に定着、安土桃山期を経て江戸期に至るまで多用されたであろうことは想像

に難くない(表2-3、4参照)。この室町中期以降の「ほととぎす」と「やま」の連想関係の定着が②の時代以降の「ほととぎす」と「やま」の連想関係を強める一要因であった可能性はある。

しかしながら、実際の抽出語彙に戻って検証すると、直接「ほととぎす」と「やま」が付合となつている例は、むしろ①の時代が最も多い。具体的な例(見出し語による付合例)と数字を挙げると、

- 「やまのしたみち」―「ほととぎす」 : 一例
 - 「ほととぎす」―「やまもゆふぐれ」 : 二例
 - 「ほととぎす」―「をちのとほやま」 : 一例
 - 「ほととぎす」―「くらはしやま」 : 一例
 - 「わかるほととぎす」―「ねぎめのあかつきのやま」 : 一例
- 計七例

が①の時代に見いだせるのに対し、②の時代では、

- 「あけぼののそら」―「ほととぎす」 : 一例

のみであり、③の時代に至っては「ほととぎす」と「やま」が直接付合となつている例は見つからなかった。

一方、「ほととぎす」と「ひと」の付合はどうだろう。いずれの時代も「ほととぎす」と「ひと」との連想関係は見出せなかった。

ということは、概念図の解析から得られた両者の接近関係というのは、付合という直接的な連想関係が成立し、強化されたからではなく、むしろ他の景物との総合的、間接的な影響関係によって導か

れたものであると推察できる。

「やま」との接近、「ひと」との離反という結果に対するもう一つの可能性は、「ほととぎす」のイメージに関する問題である。「ほととぎす」がどのようなイメージをもっているのか、まずはそれを現代短歌で見てみよう。佐佐木幸綱の歌集、『百年の船』（角川短歌叢書、平成一七年一月）に載る次の歌には、「ほととぎす」にこれまで重ねられてきた種々のイメージが色濃く表れている。

ほととぎす、雨中を急ぎゆくものよ 春日井健は死に給いけり

これは平成一六年（二〇〇四）五月二二日、中咽頭癌のためこの世を去った歌人、春日井健（一九三八〜二〇〇四）に対する挽歌である。五月雨の中を飛ぶ「ほととぎす」、そして死のイメージをもつ「ほととぎす」、口の中が赤く見えるため赤い血を吐いて啼くことされる「ほととぎす」、そして「懐旧」のイメージをもつ「ほととぎす」という少なくとも四つのイメージが、この歌には詠み込まれている。だが、最も前面に出ているのは死のイメージであり、それが理解されなければ、歌の深みがなくなり、何故ここに「ほととぎす」が詠み込まれているのかさえもわからなくなるだろう。勿論、春日井が亡くなったのが旧暦で言えば夏に当たるので、少なくとも夏のイメージは看取できるかもしれない。けれども、佐佐木は「ほ

ととぎす」における季節の鳥としての表象性だけでなく、死のイメージをもよく知った上で、意識的に用いているのである。

では、その死のイメージとは何か。その前に「ほととぎす」がいつ頃から夏の鳥としての表象性を持つようになったのかを確認しておきたい。

表2-16は「ほととぎす」が歌集のどの部に配されるかを調べたものである。表中に示した値（割合）は、歌集の全歌数中、どのくらい「ほととぎす」が詠み込まれた歌があるかを示したものである。例えば、歌数が約一〇〇首ある『古今和歌集』（九〇五年序）には、三一首（二・八％）の歌が夏部にあり、一五首（一・四％）が夏部以外の部（恋部など）に配されており、その三分の二が夏部に集中していることがわかる。ただし、この表からもわかるように、まだ『後撰和歌集』（九五一年成立）の頃までは、「ほととぎす」が詠み込まれた歌でも、夏以外に配されることが間々あったことがわかる。それが、平安時代中期から後期（一一世紀頃）から、「ほととぎす」はもっぱら夏の鳥として意識され、ほぼ固定化されていたのである。

念のため付言しておく、表中で『拾遺和歌集』や『続拾遺和歌集』、『新後拾遺和歌集』において、夏以外の割合が高いのは「雑春」部に夏の歌が配されているからであり、それを除くと「ほととぎす」が詠み込まれているほぼすべての歌は、夏部に集中しているのであ

る。連歌においても、その最初期から季節の鳥としての表象性を持っていたことは、作品を見れば明らかである。

表2-6：「ほととぎす」が詠み込まれる位置

歌集名	成立年(西暦)	夏の割合	夏以外の割合
古今和歌集	905序	2.8%	1.4%
後撰和歌集	955	2.0%	0.7%
拾遺和歌集	1005頃	2.0%	1.0%
後拾遺和歌集	1087	2.3%	0.5%
金葉和歌集(二度本)	1125	3.5%	0.5%
詞花和歌集	1151	1.9%	0.2%
林葉和歌集	1178?	6.0%	0.3%
千載和歌集	1187	2.2%	0.3%
新古今和歌集	1205	1.9%	0.5%
新勅撰和歌集	1232	2.0%	0.0%
続後撰和歌集	1251	2.0%	0.1%
続古今和歌集	1265	1.9%	0.6%
続拾遺和歌集	1279	1.9%	0.7%
新後撰和歌集	1302	2.6%	0.8%
玉葉和歌集	1312	1.5%	0.8%
続千載和歌集	1320	2.8%	0.7%
風雅和歌集	1346頃	1.5%	0.5%
続後拾遺和歌集	1356	3.3%	0.4%
草庵和歌集	1359	2.8%	0.0%
新拾遺和歌集	1364	2.0%	0.7%
続草庵和歌集	1366	1.5%	0.3%
慶安法師集	1369以降	2.0%	0.0%
新葉和歌集	1381	2.5%	0.6%
新後拾遺和歌集	1385	2.1%	1.5%
李花和歌集	1389以前	3.8%	0.1%
新続古今和歌集	1439	1.8%	0.5%
草根和歌集	1459?	1.1%	0.0%
宗祇法師集	1502?	2.6%	0.0%
閑塵集	1503~1510	2.2%	0.0%
雲玉集	1514	1.7%	0.0%
桂林集	1575	2.7%	0.0%
道遊集	1677	3.1%	0.4%
堀江草	1690	2.2%	0.2%

では、「ほととぎす」の死のイメージとはどんなものなのか。「ほととぎす」は別名「死出の田長たおさ」とも呼ばれ、死出の山から来て鳴く鳥と見なされてきた。また「魂迎え鳥」とも言われ、この世からあの世へ魂を運ぶ鳥ともされてきた。

このようなイメージの淵源は中国にあり、最も早い例として揚雄ようゆう

(紀元前五八〇後一八八)が撰した『蜀王本紀』(前一世紀前漢末)にそれを見いだせるのだが、わが国においては源順(九一一〜九八三)が編纂した平安時代中期の辞書、『和名類聚抄』に見られることから平安時代中期にはすでにそのイメージが入っていたということがわかる。

これは、蜀の王が旅の途中で死に、その魂が鳥となり、春から夏にこの世に飛来するという伝説である。それと共に、平安時代に日本で作られたとされる偽書、『仏説地藏菩薩発心因縁十王経』(以後『十王経』とする)に見られる思想である。この『十王経』で「ほととぎす」は、冥界で亡者を呵責し「ほととぎす」と鳴いているのだという。それ故、「冥土の鳥」、「無常鳥」という異名もあるくらいだ。歌学書類で見ると、元永元年(一一一八)以前に作られた藤原仲実なかざね(一〇五七〜一一一八)の『綺語抄』には「しでのたをさ ほととぎすをいふ」とあるが、それ以上の説明はない。また藤原範兼(一一〇七〜一一六五)が書いた『和歌童蒙抄』(一一五〇年頃の成立)にも「しでの山こえてきつらむほととぎすこひしき人のうへかたらなむ」という『拾遺和歌集』(一一〇五年頃成立)に載る伊勢(生没年未詳)の歌はあるが、これも死と結びついた説明はない。

ところが、永久三年(一一一五)年頃成立したと思われる源俊賴(一〇五五〜一一二九)の『俊頼髓脳』には、次のような逸話が載っ

ている。

帥内大臣と申しける人の御許にて、俄に死入りさわぎければ、しとみのもとにかきのせて、おほちにおきたりけるに、草の葉におきたりける露のあしにさはりける程に、時鳥の鳴きてすぎけるをきよてよめる歌、河内守重之

草の葉にかどではしたり時鳥しでの山ちもかくや露けき

この歌は『金葉和歌集』（一一二七年成立）巻第一〇（雑部下）

に「田口重如」の歌として収載されているものである。歌の意味は、

「草の葉のもとでこの世からの門出をした。時鳥よ、死出の山路と
いうのもこんなに露に濡れているのか」くらいのものか。「ほとと
ぎす」に死出の山路の事を聞いているくらいであるから、「ほとと
ぎす」は死出の山路のことをよく知っているということになる。し
たがって、ここには明らかに死のイメージが表出していると断言し
てよい。また、同時期、藤原清輔（一一〇四～一一七七）の『奥義
抄』（一一二四～一一四四年の間の成立）にも、

問云、ほととぎすはしでの山をすぐる鳥なれば、人などにおく
れて世中なげかしく思ひける時よめる歌にや。我世中にすみわ
びにたりといへよとよめるにこそ。集にも

なき人のやどにかよはととぎすかけてねにのみな
くとつげなむ

などはべり。又

しでの山こえてきつらむほととぎす恋しき人のうへか
たらなむ

などよみたり。萬葉には、

やまとはなきてきつらむほととぎすながなくことに

人ぞおもほゆ

かやうによめる心にや。

とあって、「ほととぎす」が死出の山を通る鳥というイメージがす
でにあったことがわかる。ちなみに「なき人…」の歌は、『古今和
歌集』巻第一六（哀傷歌）にある「よみ人しらず」の歌であり、
「しでの山…」は先述したように『拾遺和歌集』にある伊勢の歌、
そして「やまとには…」の歌は『万葉集』第一〇巻（夏雑歌）にあ
る歌である。ただし、『国歌大観』などでは「やまとにはなきてか
くらむほととぎすながなくことになきひとおもほゆ」という歌の字
句になっている。

さらに、藤原顕昭（一一三〇頃～一一二〇頃）が、文治年間（一
一八五～一一九〇）に著したとされる歌学書『袖中抄』には、次の
ような記述が見える。

一、しでのたをさ

いくばくの田をつくれればかほととぎすしでのたをさを

あさなあさなよぶ

顕昭云、しでのたをさとはしづのたをさと云也。ほととぎすは勸農の鳥とて、過時不熟と鳴とは、ときすぎばみのらじと云義也。それが郭公と鳴とは聞ゆると云り。たをさとは田を作る者也。しづとはしづのを也。(中略) 寂連入道は郭公しでの山より来と云事は慥に経説也。地藏本願経歟、地藏十輪経歟、地藏陀羅尼経歟に見えたるよし申しけり。可考之。

本井牧子は、この「経説」というのは、ここに挙げられた『地藏本願経』などの經典には見えないことから、『十王経』のことであると述べている。とすれば、この頃(平安末期から鎌倉初期)に本来「しづのやま(賤の山)」「あるいは「しでのやま(四手の山)」であったのが「しでのやま(死出の山)」と誤解され、流布していったことになる。恐らく、平安時代中期頃に、先の『俊頼髓脳』にあった逸話が出来、まずは死のイメージが付与され、その後『十王経』の影響によって、「ほととぎす」の死のイメージが増幅されていったものと思われる。ただ、『俊頼髓脳』の逸話は以後、ほとんど伝承されておらず、この逸話の影響力は極めて小さかったのではないか

と思われる。とすると、主として『十王経』が「ほととぎす」に死のイメージを付与したことになる。

『俊頼髓脳』(『金葉和歌集』)の例以外で、実際の和歌作品に死のイメージが表れるのは、同じく平安時代後期(一二世紀)のこと、比較的早い例では、西行(一一一八〜一一九〇)の家集である『山家集』(成立年不詳)に、「侍賢門院の女房堀河の局許より言ひ送られける」という詞書で「この世にて語らひおかむほととぎす死出の山路のしるべともなれ」、その返歌として「ほととぎすなくなくこそは語らはめ死出の山路に君しかからば」という歌がある。

今、連歌・俳諧DBの対象としている時代に限って言えば、一六世紀以後の戦国武将などの辞世に間々「ほととぎす」が詠み込まれていることも、解析結果と何らかの関係があるだろう。例えば、柴田勝家(一五二二〜一五八三)の辞世は、「夏の夜の夢路はかなき跡の名を雲居にあげよ山ほととぎす」であるが、この歌は勝家の妻であるお市の方(一五四七?〜一五八三)の「さらぬだに打ちぬる程も夏の夜の夢路をさそふほととぎすかな」という歌に和した歌である。この話は、勝家の没年(一五八三年)に大村由己(一五三六?〜一五九六)によって書かれた『柴田退治記』が初出である。だから、少なくとも後世に作られた話ではないことは確かだ。この勝家とお市の話は、『柴田退治記』をもとにして、安藤為章(一六五九〜一七一六)の『年山紀聞』(一七〇〇年)などに受け継がれ、後

世に伝えられたものと思われる。ただし、この『年山紀聞』には、勝家とお市の方の歌の後に、勝家自害の介錯をした中村文荷斎（？）（一五八三）という人物の「思ふどち打つれつつも行く道のしるべや死出の山時鳥」という歌も併記されている。

勝家らの他には、室町幕府三代將軍、足利義輝（一五三六～一五六五）の辞世がある。「さみだれは露か涙かほととぎす吾が名をあげよ雲の上まで」という歌である。この歌の初出は、大覚寺義俊（一五〇四～一五六七）の『光源院贈左府追善三十一文字和歌』（成立年不詳；義輝没後すぐの成立か）の「序」である。これが徳川光圀（一六二八～一七〇一）編『扶桑拾葉集』（一六八九年成立）、湯浅常山（一七〇八～一七八一）『常山紀談』（一七三九年自序）などに受け継がれ後世に伝承されていった。

ちなみに、柴田勝家が切腹して果てたのは旧暦の四月二四日であり、また足利義輝が松永久秀（一五一〇～一五七七）や三好三人衆（三好長逸・三好政康・岩成友通）によって討たれたのが旧暦の五月一九日であつて、いずれも季節は夏のことであつた。つまり、彼らの辞世には、「夏」という季節と「ほととぎす」の死のイメージが重ね合わされているのである。「合点じゃ其の暁のほととぎす」という辞世の句を残した蕉門俳人、岩田涼菟（一六五九～一七二七）が没したのも、旧暦の四月二八日であつた。

このように、和歌においてはすでに平安後期以後、死のイメージ

が付加されることが間々あつた。しかしながら、連歌では少し時期がずれる。まずは、連歌学書や寄合集において「ほととぎす」が死のイメージを持つて語られるようになるのはいつ頃かを見てみよう。管見によると、連歌学書においてこのような説明がなされている最も早い例は、明応三年（一四九四）の奥書をもつ『連歌寄合』であり、それは、

帰るにしかじと付く事、不如帰々々と鳴也。郭公は、蜀国の王たりしが、旅にて死し給て時鳥となる（と云）一説あり。仍、旅人を帰るにはしかじとをしへたる声と也と云り。

というものである。室町末期の成立で、寛永八年（一六三一）に版行された連歌故実書、『連集良材』にも「不如帰」の説明として同様の説明がある。

蜀王ノ王名ヲバ杜宇ト申シ、成都蜀都也ヲ出テ旅ニシテ死ス。其魂鳥ト成テ、春夏ニ鳴、コレヲ思帰鳥ト号ス。其故ハ古郷ヲヲコヒテ不如帰々々と鳴間、不如帰鳥トモ云。又子規又蜀魂蜀魄トモ云。皆郭公ノ古事也。文選ニハ鳥ハ、杜宇ガ魄ヨリ出トイヘリ。此鳥オノガ古郷ニ不皈シテ、他郷ニテ死セシコトヲ悲ンデ、萬ノ行人旅客ヲモ不如帰々々とス、メテ、ハヤク古

つまり、一五〇〇年前後、連歌の世界に「ほととぎす」の死のイメージが入り込んだものと思われる。そして、それが先に見た、異界、もしくは他界である「やま」との接近という結果に結びついていくということも十分に考えられよう。湯川洋司が、

山は里とは異質な意味を持つ空間とみなされてきたのであり、記録に残る山男の里への出現、中世の「山野に入る」「山林に交わる」などの語に示されるアジールとしての性格、さらには隠れ里や落人伝説の成立などは、そうした山の持つ異界性を物語っている。このほか、山稜や峠などで示される境界性、埋葬をさす山墓や死者の還る場所を示す山寺などの語が象徴する山中他界観念の成立と展開など、山は日本人の生活や文化に深く浸透し、日本の歴史に独特な彩りを与えてきた³¹。

というように、日本人にとって「やま」は、「異界」であり、「他界」であり、また「あの世」なのである。

表2-5からもわかるように、俳諧寄合書においては、「ほととぎす」と「やま」の関係は往々にして「死出の山」との連想関係にある(『せわ焼草』、『便船集』、『俳諧類船集』など³²)。

これらを鑑みるに、一五〇〇年前後に取り入れられた「ほととぎす」の死のイメージがそれ以後、増幅され、そして江戸時代になるとそれが俳諧の寄合書へと流れ込んでいったのではないかと推察されるのである³³。

では、実際に連歌・俳諧DBで事の真偽を検証してみよう。まずは、連歌において「ほととぎす」、もしくはその別名「しでのたおさ」が死のイメージをもっているのが明白である句を、以下列記する(句の前にある数字はDBに付された句番号である)。

○ 頸証院会千句(第九:何人「えたわけの」:一四四九年)

19:みぬかたにーいるさのはらはーあめふりて

20:なほほととぎすーききおくりつつ

21:なきかゆくーのちのよいかにーうかるらむ

○ 北畠家連歌合／書陵部本(一四七〇年)

224:なけほととぎすーつれてかへらむ

224:のちのよのーふるさとちかしーおいのそら

2351:いまひとこゑもーなけほととぎす

2351:のちのよはーわすられやすきーものなるに

241r: ほととぎすなくーむらぐものうち
 241r: のちのよのーやまをつるきとーきくもうし

○萱草／伊地知本(巻二:夏:一四七四年)

306: やまちやさらにーのちのよのたひ
 307: ほととぎすーなけとかへらむーさともなし

○成立不詳・心敬以前(何路「こころあらは」／存疑:一四七五
 年以前)

26: とりもうかるるーそらののとけさ
 27: ほととぎすーさそなやよひをーいそくらむ
 28: わかのちのよのーちかくなるみち

○難波田千句(第八:□□「はるさめを」:一四八二年)

28: よふかくとほるーむらのしつけさ
 29: たかこゑにーいましのふらむーほととぎす
 30: たたわかみちそーのちのよのやま

○葉守千句(第二:何路「しくるやと」:一四八七年)

36: とほさかりてはーやまもわかれし
 37: やすらひてーゆくへしらせよーほととぎす

38: わかよのなかそーたのむかたなき

○園塵(第三／続群書類従本:雑下:一五〇一年)

1833: こゑはきけともーあふこともなし
 1834: のちのよのーたひひといつくーほととぎす

○永正年間百韻(恋「ちらすなよ」:一五〇六年)

69: こととへはーはかなきひとよーあかしかた
 70: ほととぎすにもーひとはまたれつ
 71: たちはなをーそてのにほひもーあちきなし

○那智箆／北野天満宮本(巻上:一五一五年)

1398: このよのほかにーにたるやまこえ
 1399: たれをよふーこゑとかきかむーほととぎす

○東山千句(第五:唐何「つきこよひ」:一五一八年)

50: なきてやさるのーわれもかなしき
 51: ほととぎすーなにのおもひをーゆつらむ
 52: そはぬををしむーひとのたましひ

○伊勢千句(第一:何船「あさひかけ」:一五二二年)

32：なきてつゆけきーくさもかたみか
33：ほととぎすーふるきのきはーこととひて
34：いまはそれともーいふひとそなき

○伊勢千句（第五：何人「ふかくいりて」：一五二二年）

88：あらしいまはのーのちもはかなし
89：ほととぎすーなつふけかたのーおとつれに
90：みしかのほとやーよひのまのそら

○天文年間百韻（夢想「ちりてなほ」：一五四一年）

26：うきよのつてやーほかになすらむ
27：なきすててーしてのやまちのーほととぎす
28：さらになみたのーあめとふるくれ

○天文十八年梅千句（第六：山何「うめさけは」：一五四九年）

67：まつこともーなすこともなきーくさのとに
68：してのたをさのーこゑいかならし
69：ひとりゆくーしらぬやまちはーゆふへにて

○称名院追善千句（第一：何木「としこと」：一五六三年）

82：こえむまくらのーみねのはるけさ

83：ほととぎすーよもあかつきにーなきすてて
84：なきひとこふるーそてそひかたき

○五吟一日千句（第一〇：薄何「あけほの」：一五八一年）

78：よとのわたりのーあとかすむみち
79：なきすててーほととぎすくるーこゑはをし
80：ひとみなにーむせふかへるさ

その他、成立年はわからないが、『諸家月次連歌抄』に、

944：なほもなけーまくらにをしきーほととぎす
945：ゆめなりけるよーなきひとのあと
という例が見られる。

この結果から、「ほととぎす」に死のイメージがはっきりと表れ始めるのは、一四四九年以降のことであることがわかる。そして、実際には、一五〇〇年以前にも死のイメージを持つ句が少なからず見られた。

だが、一五〇〇年以前のものは、「ほととぎす」と「のちのよ」の関係で詠まれたものが多いことに気付く（八例中六例）。ということは、連歌には時代区分で言えば、表2-2の①の時代から、「あの世」つまりは「のちのよ」にいる鳥として「ほととぎす」がイメージされていたと言えよう。しかしながら、これらの連歌には、

死のイメージはそれほど強烈に表現されていない。それに比べて、時代区分②、③に相当する時代の連歌には死のイメージが濃厚に表れている。すなわち、②、③の時代に、「ほととぎす」における死のイメージが増幅、強化され、定着するようになったものと思われる。「しでのたおさ」という語が連歌で確認できるのも、②の時期以降のことだ。とりわけ『天文年間百韻』や『称名院追善千句』などの例は、死のイメージが顕著である。

以上の事実から、連歌において、「ほととぎす」に死のイメージが付加され、増幅されていったのが②の時期、つまりは連歌師でいえば宗祇の死後であったことがわかるだろう。

では、俳諧ではどうだろう。連句（俳諧の連歌）では、

○ 紅梅千句（第六「うすきりの」：一六五三年）

- 36：ついでりのあめをーこひてかへるさ
- 37：ほととぎすーなんとしてかはーこゑきかん
- 38：してのやまへはーひんきもそなき

○ 紅梅千句（第一〇「けこなりと」：一六五三年）

- 82：いとしさやたたーなつのあめやま
- 83：おもはずもーあのよてきくかーほととぎす
- 84：としみといふもーいまはなはかり

○ 新統犬筑波集（巻二：夏：一六六〇年）

- 389：うたとかへしはーかくへつにきく
- 390：ほととぎすーしてのたをさどーもしかへて
- 391：あとねちむきてーみるおとはやま

○ 貞徳俳諧記（百韻「しやくやくや」：一六六三年）

- 2：しうんかなつにーかかるふちなみ
- 3：ほととぎすーれいちのやまにーなきそめて
- 4：せんけののきにーはるるむらさめ

○ 芭蕉一座連句（一二三九巻 歌仙「とひのはも：去来」：

一六九〇年）

- 21：ひともしにーくるれはのほるーみねのてら
- 22：ほととぎすみなーなきしまひけり
- 23：やせほねのーまたおきなほるーちからなき

付句なら、

○ 新統犬筑波集（巻五：賀：一六六〇年）

- 959：のおくりやーなけきのいろのーころもかへ
- 960：われもちになくーやまほととぎす

発句なら、

○ 新統犬筑波集（巻一四：夏発句上：一六六〇年）

3584：こひしなんーちこくはなかんーほととぎす

3602：ちこくたにやーたたひとこゑのーほととぎす

3623：あふけたたーさんみやくさんほたいのーほととぎす

○ 猿蓑（巻一：夏：一六九一年）

105：ひしなはーわかつかてなけーほととぎす

などの例が見られる。

このことから、俳諧にも死のイメージが受け継がれていることがわかる。さらに付け加えると、所謂、「芭蕉七部集」である『阿羅野』（一六八九年）や『猿蓑』（一六九一年）、『統猿蓑』（一六九八年）などでは「蜀魂」と書いて、「ほととぎす」と読ますということが行われているのである。連歌から俳諧（俳諧の連歌）へ「蜀王の魂が化した鳥」という伝説が受け継がれていき、それが現在まで続いているのである。

以上をまとめると、「ほととぎす」の「やま」への接近と「ひと」からの離反は、単なる言葉への直接的な接近（付合語としての接近）や離反ではなく、「ほととぎす」が死のイメージを伴ったために間接的に起こったものであったことが明らかになった。この事実は、従来行われてきたような、連歌の作品分析からは決して導き出せな

いものであるということは、この際改めて強調しておくべきであろう。

2-5 「ほととぎす」余滴

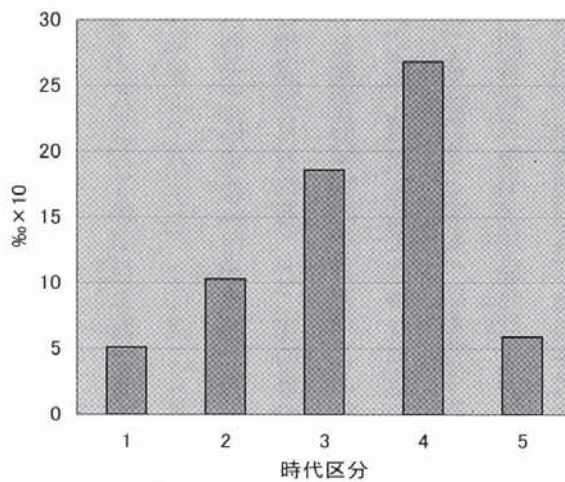
「ほととぎす」に関することをもう一点、付け加えるならば、出語彙に「ほととぎす」が頻出するのが、宗祇の登場以後であることも興味深い。宗祇の出生前、つまり一四二一年以前に限れば抽出例はわずかに四例しかないのである。図2-8でわかるように、1と5の時代で抽出率が低い。5の時代については、全体の抽出率も極端に低下していたから、先に述べた連歌の質的变化、つまり連歌の簡易化と俳諧化などによって説明できると思われる。

問題は1の時代であるが、この時代の抽出率が低い理由は、おそらく「ほととぎす」という語が少なくとも五・七の単位では、定型的な付合をほとんど持たなかったからであろう。なぜなら、表2-1でわかるように、1の時代は他の時代と比べ、抽出率が決して低いとは言えないからである。ということは、五・七の単位である程度の抽出率があるにもかかわらず、「ほととぎす」に関しては特定の連想語彙が少なかったことを、図2-8の数字は物語っている。同様のことが、表1-3、5についても言える。表1-3は、出現

度が高い連想語彙の上位二〇位の時代変化を調べたものであるが、1の時代では、「ほととぎす」は上位二〇位に入っていない。ところが2の時代になると六位に浮上し、さらに3の時代以降は一位に定着する。表1-4は、連歌中に「ほととぎす」という語彙を含む句数を調べたものだが、ここでも1の時代が他の時代に比べ、「ほととぎす」を含む句数が少ないことがわかる。表1-5は和歌中に「ほととぎす」を含む歌数を調べたものだが、これは今までと反対にデータのある3の時代まであまり変化していない。

これらを勘案すると、和歌においては「ほととぎす」が大体一定の量詠まれていた時代に、連歌では「ほととぎす」自体もあまり詠まれることがなく、かつ定型的な付合もなされていなかった、という結論が得られる。さらに、連歌寄合で「ほととぎす」と「やま」が連想関係を深めるのが、種々の連歌寄合書が作られた室町中期以降（一五〇〇年以降）であることを考えると、「ほととぎす」の付合語がまだ定着しておらず、ある程度自由な「付け」がなされていた可能性が高いと考えられる。

■「ほととぎす」の抽出率(C/A)
<C:「ほととぎす」の句数、A:
DBの句数>



また、念のために付言しておく、いわゆる三英傑の

なかぬなら殺してしまへ時鳥 信長
なかぬなら鳴かせてみせよう時鳥 秀吉

図2-8 「ほととぎす」抽出率の時代変化

なかぬなら鳴くまで待とう時鳥 家康

という句は、(当然のことながら)後世(江戸時代後期)に作られたものである。

例えば、根岸鎮衛(二七三七〜一八一五)の『耳囊』(一七八二頃〜一八一四頃)巻一には、「連歌其心自然に顕るゝ事」と題した以下のような一文がある。

古物語にあるや、また人の作り事や、夫はしらざれど、信長秀吉、乍恐 神君御参会の時、卯月のころ、いまだ郭公を聞ずとの物語り出けるに、信長

鳴ずんば殺して仕まへ時鳥

とありしに秀吉

啼すとも啼せて聞ふ時鳥

とありしに

なかぬなら啼時聞ふ時鳥と

あそばされしは、神君の由、自然と其御徳化の温順なる、又残忍広量なる所、其自然をあらはしたるが、紹巴も其席にありて、

啼ぬなら鳴ぬのもよし郭公

と吟しけるとや。

これを見ると、それ以前(天明年間(一七八一〜一七八九))にこの話があったこと、そしてそれは当時の事(信長の没年以前)として語られていたこと、そしてそこには連歌師、紹巴も関わっていたという話であったこと、などがわかる。

その話が、伝承の過程で字句、シチュエーション、登場人物などが少しずつ変化し、伝承されていったのである。小野高潔(一七四七〜一八二九)の『百草露』巻九、作者不明『天保風説見聞録』天保四年(一八三三)一〇月二八日の記事、松浦静山(一七六〇〜一八四一)による『甲子夜話』巻五三などに、それらの句(多少字句の相違が見られる)と、句にまつわるエピソードが見られる。これらを総合的に判断すると、この話は天明以前にあったものであろうが、広く流布するようになったのは、天保年間(一八三〇〜一八四四)前後のことであったとするのが、穏当かと思われる。この話は、明治時代以後も、加藤咄堂(一八七〇〜一九四九)『英雄史』(井列堂、明治三八年四月)や通俗教育研究会編『逸話文庫』(大倉書店、明治四四年一月)などで紹介され、『甲子夜話』の影響が強い)広く流布して、今日に至っているのである。

2-6 まとめ

本章では、連歌DBから抽出された連想語彙のネットワーク図が

どのような構造になっているのか、そしてそれは、時代によってどのように変化するのか、そしてそこにはどんな特徴があるのかを探った。

まず、連想語彙ネットワークの全体像は、春と秋を両極におく季節の軸で二分され、夕（日没前）と夜（日没後）の時間軸によって二分された。

また、各時代での連想語彙の抽出率を比較した結果、紹巴の時代と、その没後の時期に特徴が現れた。紹巴が活躍した時代の抽出率は非常に高いが、反対に紹巴没後の抽出率は極端に低かった。この背景には、付合の変化、あるいは連歌の簡略化と質的变化の影響が考えられる。

そして、ネットワーク図と概念図の時代変化を見た結果、「ほととぎす」、「やま」、「ひと」といった語彙の相対的な関係性に大きな変化が見られた。具体的には、時代が下ると「ほととぎす」は「やま」との連想関係を深め、「ひと」から離れる傾向が観察できた。その原因は、単に単語レベルの付合などの直接的な影響で関係性が変化したのではなく、「ほととぎす」という語が室町中期以降（一五〇〇年以降）、連歌師で言えば宗祇の死後に、死のイメージを増幅させていったため起こったものであることが明らかになった。

さらに、「ほととぎす」が連想語彙として抽出される例が、宗祇の活躍期以後に急激に増え、そして紹巴死後に急激に減少した。宗

祇登場以後の増加に対しては、定型的な付合が増えたことが想定され、紹巴死後の急激な減少には、連歌の簡略化と質的な変化が大きく影響していると思われる。

注

(1) Analytic Technologies 社の NetDraw2.18を用い、図化には、Gower Metric Scaling Layout を使用した。この手法は、結び付きの強い語を近くに、弱い語を遠くに配置するものである。

(2) 金子金治郎「解説」『連歌集・俳諧集』（『新編日本古典文学全集』六一）、小学館、平成一三年七月、二八三頁

(3) 伊地知鉄男編『連歌論集』下、岩波文庫、昭和六〇年一月第二版、二二二〜二二三頁。ルビは適宜省略した。

(4) 荒木田守平編『二根集』（一五九五年成立）には、紹巴の言葉として「中古ハ、たとへば、よき男・よき男、二人だき合て、ねたるがごとし。みめも、心もよけれど、さして心通ぜず。此心ハ、詞をかざりて、風情を求め付ぬ、といふ心也。宗牧をさへ、中古と云。紹巴流ハ、よき男とよき女の、うしろむきてねたるがごとし。つかぬ様なれども、心通じたる也。よく心を付よと也。風情もかざりもいらすと云々。たとへば、鳥類に荷を負せ、馬に翅を付たる体にせよと也。放れたる事を付合によく心を付たるを、当世と云。宗牧いさめにハ、遙なる違ひ也。」（奥野純一編『二根集』下（古典文庫三四三冊）、古典文庫、昭和五〇年八月、六

九頁)とあり、紹巴以後、付合にも大きな変化があったことがわかる。

(5) 伊地知鉄男解題『梵燈庵主返答書・百韻連歌集・歌道聞書』(古典研究会叢書 別刊第四)、汲古書院、昭和五〇年八月、三三五頁。適宜、読点を補った。ちなみに『歌道聞書』は、『日本文学誌要』第一二号(法政大学国文学会、昭和四二年四月)にその全文が翻刻されている。

(6) 前掲『梵燈庵主返答書・百韻連歌集・歌道聞書』、三五七〜三五八頁。適宜、読点を補った。

(7) ちなみに、松永貞徳(二五七〜一六五三)『戴恩記(歌林雑話)』(天和二年(一六八二)刊)には、紹巴の言葉として「今はかやうに一句の道理なき事はせぬによりて、付句によき句なきなり」という記載がある(佐佐木信綱編『日本歌学大系』第六卷、風間書房、昭和六一年一〇月第六版、二三四頁)。

(8) 寄合集は以下のものを用いた。

・『連證集』：『鎌倉末期連歌学書』(中世文芸叢書四)、広島中世文芸研究会、昭和四〇年一月

・『修茂寄合』：三輪正胤・西田正宏「連歌寄合集『修茂寄合』(三輪本)の研究と本文(一)」「人文学論集」第一三号、大阪府立大学人文学会、平成七年三月

・『連珠合璧集』：木藤才蔵・重松裕巳校注『連歌論集(一)』、三弥井書店、昭和四七年四月

・『宗祇袖下』：木藤才蔵校注『連歌論集(二)』、三弥井書店、昭和五

七年一月

・『連歌作法』：木藤才蔵・重松裕巳編著『連歌寄合集と研究』(上)、未刊国文学資料刊行会、昭和五三年六月

・『宗長歌話』：木藤才蔵・重松裕巳編著『連歌寄合集と研究』(下)、未刊国文学資料刊行会、昭和五四年八月

・『連歌寄合』：前掲『連歌寄合集と研究』(上)

・『連歌付合の事』：前掲『連歌論集(一)』

・『連歌作法書』：長谷川強校訂『幼童抄・連歌作法書』(西日本国語国文学会翻刻双書)、西日本国語国文学会翻刻双書刊行会、昭和三七年九月

・『拾花集』：久曾昇昇編『日本歌学大系』別巻八、風間書房、平成元年六月

・『竹馬集』：深沢真二(翻刻)『連歌寄合書『竹馬集』』『調査研究報告』

第一四号、国文学研究資料館文献資料部、平成五年三月

・『随葉集』：木藤才蔵編『随葉集』(古典文庫第四三二冊)、古典文庫、昭和五七年九月

・『玉拾集』：深沢真二(翻刻)『連歌寄合書『玉拾集』』『調査研究報告』第一一号、国文学研究資料館文献資料部、平成二年三月

・『せわ焼草』：米谷巖編『せわ焼草』、ゆまに書房、昭和五一年三月

・『便船集』：金沢近世語研究会編『便船集索引』、金沢近世語研究会、昭和五二年五月

・『初本結』：島本昌一編『初本結―本文と俳諧付合語索引』、勉誠社、昭和六〇年九月

・『俳諧類船集』：野間光辰監修『俳諧類船集』（『近世文芸叢刊』第一巻）、般庵野間光辰先生華甲記念会、昭和四四年一月

・『俳諧小傘』：近世文学書誌研究会編『俳諧小傘』（『近世文学資料類従』参考文献編一三二）、勉誠社、昭和五四年四月

*なお、『随葉集』、『拾花集』、『竹馬集』については、深沢真二編著『近世初期刊行連歌寄合書三種集成』（清文堂出版、平成一七年二月）として、翻刻刊行されている。

*本書における時代区分は、以下の通り。

鎌倉期（時代）：一一九二年～一三三三年

（鎌倉幕府成立から滅亡まで）

室町期（時代）：一三三七年～一五七三年

（室町幕府成立から滅亡まで）

安土桃山期（時代）：一五七三～一六〇三年

（織田信長の天下統一から江戸幕府成立まで）

江戸期（時代）：一六〇三～一八六七年

（江戸幕府成立から大政奉還まで）

(9) 前掲『鎌倉末期連歌学書』、八五頁

(10) 久曾神昇編『日本歌学大系』別巻七、風間書房、昭和六一年一〇月初版、三四四頁

(11) この歌は『万葉集』以来持つ「ほととぎす」の「懐旧」イメージから詠まれたもので、死のイメージで詠まれたものではない。この歌は「詞書」もなく、「よみ人しらず」の歌である。

(12) 岩野真雄編『国語一切経』大集部五、大東出版社、昭和六三年八月改訂六刷、三〇〇頁。経典では、「無常鳥」のことを指す。

(13) 前掲『日本歌学大系』別巻一、昭和五九年六月五版、一〇五頁

(14) 前掲『日本歌学大系』別巻一、二七六頁

(15) 佐佐木信綱編『日本歌学大系』第一巻、風間書房、昭和五八年一月六版、一三七頁

(16) この歌の詞書は「人のもとに侍りけるにはかにたえりうせなんとしければ、しとみのもとに入れておほちにおきたりけるに草の露のあしにさはりける程にほととぎすのなきければ、いきのしたに」（『新編国歌大観』第一巻、角川書店、昭和五八年二月、一五五頁）である。

(17) 前掲『日本歌学大系』第一巻、三二〇～三二二頁

(18) 前掲『日本歌学大系』別巻二、昭和五八年五月、一七八～一七九頁

(19) 本井牧子「十王経とその享受（上）―逆修・追善仏事における唱導を中心に―」（『国語国文』第六七巻第六号、京都大学国文学会、平成一〇年六月）を参照されたい。

(20) 草部了円は本来「農をすゝむる『四手の田長』（播種の日）、田の畦に四手（幣）を立て神事を行なうが、その頃時鳥が飛来して稲の害虫を食べ、稲の成育を守ることからきたとされる―筆者注）であった」ものが、

「『死出の田長』となつてしまつた事は十王経の説が持ち出されたばかりに、四手が死出に相通じたことが重なりゆうであると考えられる」としている（『夏は郭公を聞く―語らふごと』に、死出の山路を契る―『国文学論叢』第一八号、龍谷大学国文学会、昭和四八年三月、三七頁）。さらに草部は歌の解釈から「時鳥が『冥土の鳥』として、和歌に詠まれるようになったのは、拾遺集の頃からだと見て、差支えないのではないだろうか」とその時期を推定している（同、三六頁）。もし『拾遺和歌集』の頃とすれば、その時期は一世紀初頭のことになる。

(21) 今、参考までに荻尾待也編著『辞世千人一首』（柏書房、平成一七年七月）に掲載されている辞世で、歌の中に「ほととぎす」が詠みこまれているものを時代順に列挙しておこう（表記は原文に従つた。ただし送り仮名は省略した）。

〈平安時代〉

▼鳥羽天皇（一一〇三～一一五六）

つねよりもむつまじきかなほととぎす 死出の山路の友と思へば

▼平重衡（一一五七～一一八五）

思ふこと語りあはさむ時鳥 よろこばしくも西へゆくかな

〈室町時代〉

▼足利義輝（一五三六～一五六五）

五月雨は露か涙か時鳥 わが名をあげよ雲の上まで

▼柴田勝家（一五二二～一五八三）

夏の夜の夢路はなかきあとの名を 雲井にあげよ山ほととぎす

▼お市の方（一五四七～一五八三）

さらぬだにうちぬるほども夏の夜の 夢路をさそふほととぎすかな

▼中村文荷斎（生没年未詳）

契りあれば涼しき道に仕へ行く のちの世までもきくほととぎす

▼おこぼ（生没年未詳）

わが恋は深山の奥のほととぎす 泣き悲しみて身は果てにけり

〈江戸時代〉

▼徳川光圀（一六二八～一七〇〇）

ほととぎす誰も一人は淋しきに われを誘へ死出の山路に

▼北村季吟（一六二四～一七〇五）

花も見つほととぎすをも待ち出でつ この世後の世思ふことなき

▼大田南畝（蜀山人：一七四九～一八二二）

時鳥鳴きつるかた身初鏗春と夏との入相の鐘

以上が辞世全一〇〇〇首の中に見られた「ほととぎす」の歌である。

ただし、留意しておくべきは、「辞世」という場合、その定義が曖昧で必ずしも一義的ではないこと、それに、出典が不明瞭であり、後世に作られたものか否かを判別し難いこと、である。これ故、ここではあくまでも参考までに挙げたに過ぎないことを、再度強調しておく。

(22) 日本随筆大成編輯部編『日本随筆大成』第二期第一六卷、吉川弘文館、

昭和四九年八月、三七二～三七三頁

(23) 岩田涼菟の辞世については『俳家奇人談』などに、その記述がある。

例えば『俳人逸話紀行集』『俳諧叢書』第六冊)、博文館、大正四年八月、三七一頁。また辞世については、部矢祥子「辞世の成立と展開―中世和歌の―様相―」(『和歌文学研究』第六九号、和歌文学会、平成六年一月)に詳しい。部矢によると、辞世は鎌倉中期に禅僧による漢詩から始まり、それが室町前期頃に和歌に波及し、以後和歌が細やかな心情表現に適していると想われたからか、その中心になっていくという。さらに室町時代、辞世の和歌は、各階層によって詠まれ、短冊等の料紙に記されるようになり、これによって公家の独占していた和歌が各階層、各地方へと下降・分散化現象を起こすようになった一要因であるという。しかしながら、部矢は辞世の和歌表現に関しては全く触れていない。自己の死に対峙した時の和歌表現には、通常詠まれる和歌との相違点、あるいは共通点(季節の意識など)があるはずであり、辞世研究における今後の検討課題となるであろう。ところで、寛永年間(一六二四―一六四四)の成立とされる『月刈藻集』には、「辞世ノ歌ハイカホトアシクトモ。コレハ志ノホド可感。ナニガ苦痛身ヲ責テイカニ心ノ中シツマルマシキニ。末期歌ヲ残サントハ志シフキコトナリキ」とある(塙保己一編『続群書類従』第三三輯上〈雑部〉、続群書類従完成会、昭和五九年九月訂正三版第六刷、九一頁)。この記述から、辞世は質ではなく、その志を賞賛するものであることがわかる。

(24) 連歌師の和歌観については、奥田勲「連歌と和歌」「和歌の伝統と享受」

(『和歌文学論集一〇』、風間書房、平成八年三月所収)を参照されたい。

奥田によると、宗祇などは連歌を「歌の雑体」と見ているが、異なる部分があることをはっきりと認めている。奥田も引用しているが、心敬(一四〇六―一四七五)も『老のくりごと』(文明三年(一四七一)から同七年までの成立)には、「上古・中比の好士いづれも歌の道にくらく見え侍るにや」という言が見られる。これらのことから、連歌と和歌は、重なる部分とはいええ、基本的には違うものと認識され、連歌師が必ずしも和歌的教養を身につけていたとは限らないことがわかる。「ほととぎす」のイメージについても、同様のことが言えるのではないだろうか。和歌であるイメージが定着していたとしても、必ずしもそれがそのまま連歌の世界にも引き継がれていたとは即断できないのである。

(25) 前掲『連歌寄合書と研究』上、六九頁

(26) 乾安代は「成立が室町末期とされるのは、例句として引用されている句の作者や、その句が収載されている句集の成立と、近世のごく初期に既に出版されている事実などの関係に拠るものと思われるが、『連集良材』の記述から、作者を特定しないしは推定したり、或いは成立の過程等を推測することは、全くできない」が「秘伝のような意識で記したもの(成立当初はこのようであった可能性が全くないわけではない)ではなく、一応連歌師として名乗る以上は知っておくべき、基礎的教養とでもいうような存在であった」と述べている(『連集良材』おぼえがき「徳江元正編『室町文藝論攷』、三弥井書店、平成三年二月、四三三―四三三頁)。

(27) 国書刊行会編『続々群書類従』第一五輯、続群書類従完成会、昭和五

九年九月第四刷、四八五頁。原文には句読点はないが、読み易さを考慮

して適宜句読点を配した。里村紹巴と親交のあった臨濟宗(天竜寺)の

僧、策彦周良(一五〇一〜一五七九)の『蠡測集』(慶長六年(一六〇一)〜

奥書)に「三体詩ニモ蜀魂啼来春寂寞。楚魂吟後月朦朧トアルソ。蜀魂

ハ杜鵑ソ。蜀望帝ノ魂カナリタトテヤカテ望帝ト名ツケタソ。山谷モ一

声望帝花片飛ト作タソ。杜宇ヲ杜主トモシタヲ。祖庭事苑ニ有ソ。」といっ

た記述が見られるのも、こういった時代背景と何らかの関係があるのか

もしれない(塙保己一編『続群書類従』第三二輯下(雑部)、続群書類

従完成会、昭和五六年二月訂正三版第五刷、五八三〜五八四頁)。ここで

は指摘のみにとどめる。その他、僧日信(生没年未詳)編『楊鳴曉筆』

(一五二一〜一五三二年頃の成立)には二箇所に「ほととぎす」の説明が

ある。一つは、第一三に載る「蜀杜鵑」で、次のようなものである。

一、昔漢土に杜鵑と云人あり。蜀国へ流され遂に古郷へかへらで彼

国にして死けり。その魂鳥となりしを杜鵑と名付く。此鳥不如帰

不如帰と鳴、曉に至りて口より血を出すといへり。

今云、ほととぎすと云字を杜鵑とも不如帰とも書く、此故

歟、然るに今の心ならば血をはくといへり。別歟、又ほとと

ぎすを蜀魂とも書るは同事歟。

『楊鳴曉筆』、三弥井書店、平成四年一月、二七六〜二七七頁：繰

り返し記号を該当する文字に変換した)

この文章では、蜀王の伝説ではなくなっている点が注目される。もう一

つは、第二〇に載る「郭公異名」と題された次のような文章である。

又郭公にこそ異名は多く侍めれ。

くらき鳥 あやなし鳥

もゝこゑ鳥 たなかとり

うなひことり しろとり

あみとり よめとり

夜とことり まめやかとり

たまさか鳥 うためとり 以上十二、皆万葉に有

郭公の二字をあきらかなるきみとよむ也。心は国王にはまつりごと

八あり。一食、二貨、三礼、四司、五冠、六司徒、七資、八師也。郭

公は即田速作過時不熟と鳴、これ明王第一の政を轉が故に郭公と云也。

又時鳥と書事は農時の鳥なるが故也。□□(＊ワープロソフトに該当

文字無し)とかく事はしでの山路を越て来る故也と。それは実の死出

の山にはあらず。此鳥とき過ぬれば、石のはざまなどに籠り、はたら

かであるが、時いたればうごき出るを死出の山こゆると云也。心はう

ごかぬ物のうごき来るは死したる者のいきかへるに似たる故也。(中略)

或云、誠に死出の山を越ともいへり。景行天皇崩御し給たりけるに、

御殿の上に郭公一声音づれて物を落したり。后とりて御覧するに前皇の宸筆にて、

わくらはにとふ人あらば死出の山なくなきひとりこへぬと、
いへ

これによりしてかくいへり。(同前書、四三三〜四三四頁)

ここには、他の書籍に見られない「ほととぎす」解釈が見られる。

(28) 福田アジオほか編『日本民俗大辞典』下巻、吉川弘文館、平成一二年四月、七三八頁

(29) 山は「あしびきの」という枕詞をもつことから解るように、元来神が降臨する特別な場所であり、畏怖の対象であった。その後、時代と共に様々な「やま」観が生じた。例えば、地獄も極楽も山中にあるとする思想を「山中他界観」という。佐藤弘夫によると「起請文の分析から、中世では『地獄は近く、極楽は遠い』という仏教本来の世界観が、かなり忠実に受け止められて」おり、「一般的にいわれるような山中他界の観念が日本で一般化するのには、彼岸世界が縮小し現世に内在化していく江戸時代以降の現象と考え」られるという(佐藤弘夫『起請文の精神史―中世世界の神と仏』、講談社選書メチエ、平成一八年四月、五五頁)。もしこの指摘が正しければ、和歌や連歌・俳諧での「やま」のイメージ(「のちのよのやま」「しでのやま」といった用例がいくつも見られることから、「あの世」と「やま」はすでに中世において親密な関係にあったこ

とは確かである)が、後に「山中他界観」が一般に広まり、共有化されていくための一つの要因となった可能性がある。

(30) 延宝四年(一六七六)の奥書を持つ連歌作法書『温故日録』は、「郭公」の説明に「鶯花藤霞などむすひても夏也 杜鵑は弥生の末つかたよりもすへし五月までもまつやうにする也 四手田長 時鳥などといふ事連歌にはきらふ也」とあり、江戸時代初期の連歌において「しでのたおさ」という表現が連歌では忌避されることがあったことがわかる。『温故日録』は『親和女子大学研究論叢』第一号から第六号に翻刻があり、引用部分は第三号(昭和四四年一月)、八七頁に載る。

(31) ただし、里村昌休(二五〇〜二五五二)、宗養に仮託された偽書『連歌天水抄』(慶長年間(二五九六〜一六一五)の成立か)には、「郭公」の説明として「春の内より鳴かし、としたふ心本意也。前句の付様、一かどさはやかに有度候。月うすくして雨そぼふるに鳴物也。月に鳴かしと願ふこころをかんとする也。月になけ同じ雲井の時鳥 といふ分別可有候。四月より五月迄待ていよし。」とあり、また「田長」の項には「時鳥の心にあらず。只五月に田をうふる時分に鳴鳥也。是も猿をましらと言と同。しでのたをさの事也。」とある(木藤才蔵編『宗養連歌伝書集』(古典文庫四三九冊)、古典文庫、昭和六二年一月、五一〜五二頁)。ここでは、「たおさ」を使う場合には「ほととぎす」と違う意識で付けるよう促している。当時このような意見が主流だったのか否かはわからないが、「しでのたおさ」とするときにはその詞を使う必然性からか特別な

意味を込め、単なる「ほととぎす」と違う意識で付けていたことは十分に考えられる。

(32) 俳諧（俳諧の連歌）は、連歌よりも用語が自由であるから「ほととぎす」を「とけん」、「ときのとりの」、「くつてとりの」、「かごとりの」、「しき」などとして詠み込んでいる場合がある。

(33) 三村清三郎ほか編『日本芸林叢書』第九卷、六合館、昭和三年九月、八五〜八六頁

連歌の発想 ー連想語彙用例辞典と、そのネットワークの解析

連想語彙用例辞典

山田奨治・岩井茂樹 編著

国際日本文化研究センター

【凡例】

本辞書は、日文研連歌・俳諧データベースから抽出し、編集した連想語彙をもとに、文書成形ソフトpLaTeX2eを用いて版下を作成した。

[本辞書の構成]

<目次>見出し語と、前句見出し語の頁数を記したもの

<本文>見出し語（502項目を収録）、小見出し（①前句見出し語、②付句見出し語）、用例

<索引>小見出し索引

[見出し]

(1) 本文各項目の見出し語は、太字（ゴシック）で記した。

(2) 項目中には、つぎの二種類の小見出しをつけた。

①前句見出し語：連歌の前句として抽出した語

②付句見出し語：連歌の付句として抽出した語

[配列]

(1) 見出し語（太字）は五十音順に配列した。ただし、濁点のつくものは、清音が終了した後に配置した。

(2) 小見出しも見出し語と同様に配列した。

[用例]

各句の実例を、前句（上段）、付句（下段）の順に記した。さらに、付句の下に作品名、巻名、成立年代を記した。成立年代が全くわからないものについては、空白、もしくは、「成立時不詳」とした。

[表記]

(1) 見出し語、小見出し語、共に現代語、通用漢字、ならびに現代仮名づかいで表記し、古語は一切用いないようにした。

例) あききぬ（用例）→あき（見出し語）、秋が来る（小見出し語）

(2) 小見出し語の上に読み仮名を小文字で記した。

(3) 小見出し語は、できる限り終止形とした。なお、現代語訳の都合で命令形や助詞が語尾となっている例も一部ある。

例) はなをみて（用例）→花を見る（小見出し）

(4) 小見出し語に助動詞がある場合、現代語訳するか、あるいは現代語訳する必要が認められないものについては無視して割愛した。

例1) ころもうつらむ（用例）→衣打つ（小見出し語）

例2) おもははや（用例）→思いたい（小見出し語）

目次

あお	55
あおばのはなのあと（青葉の花の後）	55
あおやぎ（青柳）	55
あおやぎのいと（青柳の糸）	55
あおやぎのかげ（青柳の陰）	55
なびくあおやぎ（靡く青柳）	55
あかしがた	55
あかしがた（明石潟）	55
つきのあかしがた（月の明石潟）	56
あかつき	56
あかつき（暁）	56
あかつきづき（暁月）	56
あかつきのそら（暁の空）	56
あき	56
あきかぜ（秋風）	56
あきかぜがふく（秋風が吹く）	59
あきかぜのこえ（秋風の声）	59
あきがくる（秋が来る）	60
あきくさ（秋草）	60
あきくる（秋来る）	60
あきさむい（秋寒い）	60
あきしぐれ（秋時雨）	60
あきちかくなる（秋近くなる）	61
あきにしぐれる（秋に時雨れる）	61
あきのおもかげ（秋の面影）	61
あきのかわかぜ（秋の川風）	61
あきのくれがた（秋の暮れ方）	61
あきのさびしさ（秋の寂しさ）	61
あきのさわみず（秋の沢水）	62
あきのそら（秋の空）	62
あきのたまくら（秋の手枕）	62
あきのつき（秋の月）	62
あきのはつかぜ（秋の初風）	62
あきのほたる（秋の蛍）	63
あきのむらさめ（秋の村雨）	63
あきのやま（秋の山）	63
あきのよすがら（秋の夜すがら）	63
あきのよなが（秋の夜長）	64
あきのよなよな（秋の夜な夜な）	64
あきのよのつき（秋の夜の月）	64

あきふける (秋更ける)	64
あきふけわたる (秋更け渡る)	65
ういあき (憂い秋)	65
こずえのあき (梢の秋)	65
すごいあきかぜ (凄い秋風)	65
すずしさにあきたつ (涼しさに秋立つ)	65
ただあきのかぜ (ただ秋の風)	65
とおやまのあき (遠山の秋)	66
はつかぜときのうはきいてあきふける (初風と昨日は聞いて秋更ける)	66
はるあきのいろ (春秋の色)	66
ふくかぜのあきのつゆ (吹く風に秋の露)	66
ふるさとのあき (古里の秋)	66
みねのあきかぜ (峰の秋風)	66
よわのあきかぜ (夜半の秋風)	66
あく	67
あきないことのね (飽きない琴の音)	67
あけぼの	67
あけぼののくも (曙の雲)	67
あけぼののそら (曙の空)	67
あけぼののやま (曙の山)	67
つゆのあけぼの (露の曙)	68
にわのあけぼの (庭の曙)	68
のべのあけぼの (野辺の曙)	68
はるのあけぼの (春の曙)	68
はるはあけぼの (春は曙)	69
ゆきのあけぼの (雪の曙)	69
あける	69
あけがたのそら (明け方の空)	69
あけはてる (明け果てる)	69
あけはなれる (明け離れる)	69
あけやすいつき (明けやすい月)	69
あける (明ける)	70
あさけしずか (朝明け静か)	70
たますだれあける (玉簾あける)	70
ゆきのあさあけ (雪の朝明け)	70
よがあける (夜が明ける)	70
あさ	70
あさがすみ (朝霞)	70
あさくるうぐいす (朝来る鶯)	71
あさけしずか (朝明け静か)	71
あさひかげ (朝日影)	71
あさぼらけ (朝ぼらけ)	71
あさまだき (朝まだき)	72
あした (朝)	72
かぜとあさがすみ (風と朝霞)	72
けさのはつゆき (今朝の初雪)	72
ゆきのあさあけ (雪の朝明け)	73
あさがお	73

あさがおのいろ (朝顔の色)	73
あさがおのはな (朝顔の花)	73
しばむあさがお (萎む朝顔)	73
そののあさがお (園の朝顔)	73
あさの	74
あさのさごろも (麻の狭衣)	74
あさのごろも	74
あさごろもうつ (麻衣打つ)	74
あし	74
あしびたくかげ (葦火焚く影)	74
あじけない	74
あじけないよ (味気ない世)	74
あたらしい	74
にいたまくら (新手枕)	74
あだ	74
あだとかかりくる (徒と掛かり来る)	74
げにもあだしむ (げにも徒しむ)	75
あと	75
あおばのはなのあと (青葉の花の後)	75
あとをだにとう (後をだに訪う)	75
あめすぎたあとのしずけさ (雨過ぎた後の静けさ)	75
いにしえのあと (古の後)	75
うしろのやま (後ろの山)	75
きぬぎぬのあと (後朝の後)	75
くもどりのあと (雲鳥の跡)	76
さみだれのあと (五月雨の後)	76
のちのよのみち (後の世の道)	76
のわきのあと (野分の後)	76
はるよりのち (春より後)	76
ふでのあと (筆の跡)	76
むらさめのはれゆくあとはあらし (村雨の晴れゆく後は嵐)	76
ゆうだちのあと (夕立の後)	76
わかれじのあと (別れ路の跡)	77
あま	77
あまおぶね (海人小舟)	77
あまのつりぶね (海人の釣舟)	77
あまた	78
かずあまた (数あまた)	78
あまひこ	78
あまひこのこえ (天彦の声)	78
あめ	78
あめかすむくれ (雨霞む暮れ)	78
あめがふる (雨がふる)	78
あめすぎたあとのしずけさ (雨過ぎた後の静けさ)	78
あめのうち (雨の内)	78
あめのくれ (雨の暮れ)	79
あめのこるそら (雨残る空)	79
あめののどけさ (雨の長閑さ)	79

あめをまつ (雨を待つ)	79
こころをつくすあめのよる (心を尽す雨の夜)	79
ながあめのそら (長雨の空)	79
やよいのあめ (弥生の雨)	79
あやめぐさ	80
あやめぐさ (菖蒲草)	80
あゆ	80
みずのさびあゆ (水の錆鮎)	80
あらし	80
あらしふくやま (嵐吹く山)	80
むらさめのはれゆくあとはあらし (村雨の晴れゆく後は嵐)	80
ゆうあらし (夕嵐)	80
あらそう	80
こころあらそうた (心争う歌)	80
なみだあらそうこえ (涙争う声)	80
あらまし	81
あらまし (あらまし)	81
あらわれる	81
あらわす (現す)	81
あらわれる (現れる)	81
はなのこずえにあらわれる (花の梢に現れる)	81
ありあけ	81
ありあけ (有明)	81
ありあけのかげ (有明の影)	82
ありあけのそら (有明の空)	82
ありあけのつき (有明の月)	82
おぼろにのこるありあけのつき (朧に残る有明の月)	83
つきにありあけのそら (月に有明の空)	83
つきはありあけ (月は有明)	84
のこるありあけ (残る有明)	84
ある	84
あるかなきか (有るか無きか)	84
あるもの (あるもの)	84
ただありなしのちぎり (ただ有り無しの契り)	84
ひともある (人もある)	84
あわれ	85
あわれ (哀れ)	85
あわれしる (哀れ知る)	85
あわれである (哀れである)	85
ちょうのあわれさ (蝶の哀れさ)	85
のべのあわれさ (野辺の哀れさ)	85
い	85
やまのいのみず (山の井の水)	85
いう	85
といいかくいい (と云いかく言い)	85
いえ	86
かくれが (隠れ家)	86
かくれがのやま (隠れ家の山)	86

かくれがはない (隠れ家はない)	86
やまのかくれが (山の隠れ家)	86
いおり	87
くさのいお (草の庵)	87
しばのいお (柴の庵)	87
たにのいお (谷の庵)	87
みねのいお (峰の庵)	87
やまがつのいお (山賤の庵)	87
いかが	87
いかが (如何)	87
いかにねて (如何に寝て)	88
いく	88
うつりもてゆく (移り持て行く)	88
ゆくほととぎす (行く時鳥)	88
いくえ	88
いくえかすみ (幾重霞)	88
いくえとよらのたけのしたみち (幾重豊浦の竹の下道)	88
いけ	88
いけふる (池ふる)	88
いけみず (池水)	88
いさらい	89
いさらいのみず (いさら井の水)	89
いずち	89
とまりぶねおとしていずち (泊まり舟音していずち)	89
ほととぎすまくらのいずちすぎる (時鳥枕のいずち過ぎる)	89
いそぐ	89
いそがれる (急がれる)	89
いそぐ (急ぐ)	89
かえりをいそぐ (帰りを急ぐ)	89
いち	90
うめのひとつもと (梅の一本)	90
おかべのはじのひとつむら (岡辺の櫓の一群)	90
きくのひとつもと (菊の一本)	90
くものひとつむら (雲の一群)	90
けむりひとつすじ (煙一筋)	90
さとのひとつむら (里の一群)	90
たけのひとつむら (竹の一群)	91
ただひとつとおり (ただ一通り)	91
とりのひとつこえ (鳥の一声)	91
なかなかいちはずみよい (中々市は住み良い)	91
はなのひとつえだ (花の一枝)	91
はなのひとつもと (花の一本)	91
ひとしぐれ (一時雨)	92
ひとつすじ (一筋)	92
ひとつとおり (一通り)	92
ひとつむら (一群)	92
ひとつむらさめ (一村雨)	92
ひとりねとかげ (一人寝と影)	92

ひとりねる (一人寝る)	92
ふとむらすすき (一群薄)	93
ほととぎすのひとこえ (時鳥の一声)	93
まつのひとむら (松の一群)	93
まつのひともと (松の一本)	93
みずのひとすじ (水の一筋)	93
みちのひとすじ (道の一筋)	93
いつ	94
いつかさて (何時かさて)	94
いつわり	94
いつわり (偽り)	94
いと	94
あおやぎのいと (青柳の糸)	94
いとう	94
よをいとう (世を厭う)	94
いなとおせどり	94
いなとおせどり (稲負鳥)	94
いなずま	95
いなずまのかけ (稲妻の陰)	95
いにしえ	95
いにしえ (古)	95
いにしえのあと (古の後)	95
いにしえのつき (古の月)	95
いにしえのみや (古の宮)	95
いにしえのゆめ (古の夢)	95
いのち	95
いのちであってほしい (命であってほしい)	95
いのちにて (命にて)	96
いのる	96
かみにただいのる (神にただ祈る)	96
いま	96
むかしをいまの (昔を今の)	96
いも	96
いもがこいしくて (妹が恋しくて)	96
いもにこいつつ (妹に恋いつつ)	96
いりあい	97
いりあいのかね (入相の鐘)	97
いる	98
いりひかげ (入り日影)	98
つきのいりがた (月の入方)	99
はるのいりひ (春の入日)	99
いろ	99
あさがおのいろ (朝顔の色)	99
いろかわる (色変わる)	99
いろかわるころ (色変わる頃)	99
いろづく (色付く)	99
はなのいろ (花の色)	100
はるあきのいろ (春秋の色)	100

いろいろ	100
きぎのいろいろ (木々の色々)	100
そでのいろいろ (袖の色々)	100
のべのいろいろ (野辺の色々)	100
いわ	100
いわがね (岩が根)	100
いわがねのまつ (岩が根の松)	101
いわこすなみ (岩越す浪)	101
くめのいわはし (久米の岩橋)	101
たきのいわなみ (滝の岩浪)	101
いわう	101
かえりにこまいわうこえ (帰りに駒祝う声)	101
うい	101
うい (憂い)	101
ういあき (憂い秋)	102
ういしぎのはねがき (憂い鳴の羽搔き)	102
ういふゆごもり (憂い冬籠り)	102
うきをただなぐさめる (憂きをただ慰める)	102
うくつらい (憂く辛い)	102
たびはうい (旅は憂い)	103
みるのもうい (見るのも憂い)	103
われでなくなるのがうい (我でなくなるのが憂い)	103
うえ	103
うえはつれない (上は連れない)	103
おぎのうわかぜ (荻の上風)	103
かすみのうちのみずのみなかみ (霞の内の水の水上)	104
きりのうえ (霧の上)	104
さくらのうえ (桜の上)	104
つきのかわかみ (月の川上)	104
なみだがわがそでのうえ (涙が我が袖の上)	104
なみのうえ (浪の上)	104
はちすのうえ (蓮の上)	105
まくらのうえ (枕の上)	105
うえる	105
うえるた (植える田)	105
はなうえる (花植える)	105
うく	105
こころうかれる (心浮かれる)	105
たつてうかれる (立って浮かれる)	105
なみのうきふね (浪の浮舟)	106
ゆめのうきはし (夢の浮橋)	106
うぐいす	106
あさくるうぐいす (朝来る鶯)	106
うぐいす (鶯)	106
うぐいすがなく (鶯が鳴く)	108
うぐいすのこえ (鶯の声)	108
のべちかいうぐいす (野辺近い鶯)	111
うける	111

かけいとうけるみず (懸樋に受ける水)	111
うすい	111
うすけむり (薄煙)	111
うた	111
うたのしなじな (歌の品々)	111
こころあらしうた (心争う歌)	111
うち	112
あめのうち (雨の内)	112
うちのゆき (内の雪)	112
かすみのうちのみずのみなかみ (霞の内の水の水上)	112
くさのとのうち (草の戸の内)	112
さみだれのうち (五月雨の内)	112
しばのとのうち (柴の戸の内)	112
ただゆめのうち (ただ夢の内)	112
ふるみやのうち (古宮の内)	112
ゆきのうち (雪の内)	113
うつ	113
あさごろもうつ (麻衣打つ)	113
うちかえすた (打ち返す田)	113
たけをうつこえ (竹を打つ声)	113
うつのやま	113
うつのやま (宇津の山)	113
うつのやまごえ (宇津の山越え)	113
うつる	114
うつりもてゆく (移り持て行く)	114
うつろう (移ろう)	114
こはぎうつろう (小萩移ろう)	114
そでのうつりが (袖の移り香)	114
うのはな	115
うのはな (卵の花)	115
うみ	115
はるのうみつら (春の海面)	115
うめ	115
うめさく (梅咲く)	115
うめにおう (梅匂う)	115
うめにおうころ (梅匂う頃)	115
うめのか (梅の香)	115
うめのかがする (梅の香がする)	116
うめのひとと (梅の一本)	116
くれないのうめ (紅の梅)	116
そでのうめのか (袖の梅の香)	116
におううめのか (匂う梅の香)	117
やどのうめ (宿の梅)	117
やどのうめのか (宿の梅の香)	117
うら	117
しがのうらぶね (志賀の浦舟)	117
すまのうら (須磨の浦)	117
すまのうらなみ (須磨の浦浪)	118

すみよしのうら (住吉の浦)	118
なおすまのうら (なお須磨の浦)	118
ふくなみのうらかぜ (吹く浪の浦風)	118
うらなう	118
みちのつじうら (道の辻占)	118
うらむ	118
こころうらめしい (心恨めしい)	118
つれなさをうらむ (連れなさを恨む)	119
ひとがうらめしい (人が恨めしい)	119
えだ	119
はなのひとえだ (花の一枝)	119
おい	119
おいのゆくすえ (老いの行く末)	119
おうさかのせき	119
おうさかのせき (逢坂の関)	119
こえるおうさかのせき (越える逢坂の関)	119
おうさかのやま	120
おうさかのやま (逢坂の山)	120
こえるおうさかのやま (越える逢坂の山)	120
おおはら	120
おおはらまつり (大原祭り)	120
おか	120
おかべのはじのひとむら (岡辺の櫓の一群)	120
おき	120
おきのしらなみ (沖の白浪)	120
おきのつりぶね (沖の釣舟)	120
おきのなみ (沖の浪)	121
おきのふね (沖の舟)	121
おぎ	121
おぎにかぜ (荻に風)	121
おぎのうわかぜ (荻の上風)	121
おく	122
おくやまのかげ (奥山の陰)	122
みよしののおく (み吉野の奥)	122
やまのおく (山の奥)	122
おくる	122
おくる (送る)	122
そでふきおくるかぜ (袖吹きおくる風)	122
おぐるま	123
おぐるまのおと (小車の音)	123
おいしい	123
おしむ (惜しむ)	123
おしんではなをみる (惜しんで花を見る)	123
ちるのがおいしい (散るのが惜しい)	123
おそい	123
おそざくら (遅桜)	123
おだまき	123
しずのおだまき (賤の苧環)	123

おちこち	124
かすむおちこち (霞む遠近)	124
のべのおちこち (野辺の遠近)	124
おちる	124
おちるあまつかり (落ちる天つ雁)	124
つきおちる (月落ちる)	124
なみだおちる (涙落ちる)	124
むかってなみだおちる (向って涙落ちる)	125
おと	125
あきないことのね (飽きない琴の音)	125
おぐるまのおと (小車の音)	125
かえるとりのね (帰る鳥の音)	125
かわおと (川音)	125
きぬたのおと (砧の音)	125
こないでおとする (来ないで音する)	125
さわみずのおと (沢水の音)	126
しぎのはねおと (鳴の羽音)	126
しげきむしのね (繁き虫の音)	126
ちかいかわおと (近い川音)	126
つゆのおとさくにわ (露の音聞く庭)	126
とまりぶねおとしていずち (泊まり舟音していずち)	126
はるのものね (春の物の音)	126
みずのおと (水の音)	127
むしのね (虫の音)	127
よわのむしのね (夜半の虫の音)	127
おとずれる	127
ひとのおとずれ (人の訪れ)	127
おとめ	127
あまおとめ (天乙女)	127
おとろえる	128
おとろえる (衰える)	128
おとわやま	128
かぜのおとわやま (風の音羽山)	128
おなじ	128
おなじこころ (同じ心)	128
おのえ	128
おのえのはなをみる (尾上の花を見る)	128
おぶね	128
あまおぶね (海人小舟)	128
おぼえる	128
よぎむおぼえる (夜寒おぼえる)	128
おぼろ	129
おぼろづきよ (朧月夜)	129
おぼろにのこるありあけのつき (朧に残る有明の月)	129
やまがおぼろ (山が朧)	129
おみなえし	129
おみなえし (女郎花)	129
おもい	129

きえるならきえるおもい (消えるなら消えるべき思い)	129
おもう	130
おもいかえす (思い返す)	130
おもいたえる (思い耐える)	130
おもいのけむり (思いの煙)	130
おもうこととつき (思う事と月)	130
おもうな (思うな)	130
おもうひとのことは (思う人の言の葉)	130
おもうふるさと (思う古里)	130
なにおもう (何思う)	130
みをおもう (身を思う)	131
むかしをおもうなみだ (昔を思う涙)	131
むねのおもい (胸の思い)	131
ものおもうころ (物思う頃)	131
ものがなしき (物悲しき)	131
ものごと (物毎)	132
ものさびしい (物寂しい)	132
おもかげ	132
あきのおもかげ (秋の面影)	132
おもかげ (面影)	132
かたるばかりにむかうおもかげ (語るばかりに向う面影)	132
そうはおもかげ (添うは面影)	132
ひとのおもかげ (人の面影)	132
ゆめのおもかげ (夢の面影)	133
おりおり	133
かぜのおりおり (風の折々)	133
おれる	133
くさはのこらないゆきのしたおれ (草は残らない雪の下折)	133
おろか	133
おろかなころ (愚かな心)	133
か	134
うめのか (梅の香)	134
うめのかがする (梅の香がする)	134
そでのうつりが (袖の移り香)	134
そでのうめのか (袖の梅の香)	135
におううめのか (匂う梅の香)	135
はなうちかおる (花打ち香る)	135
やどのうめのか (宿の梅の香)	135
かえす	135
うちかえすた (打ち返す田)	135
おもいかえす (思い返す)	136
かえる	136
かえりにこまいわうこえ (帰りに駒祝う声)	136
かえりをいそぐ (帰りを急ぐ)	136
かえる (帰る)	136
かえるかりがね (帰る雁)	137
かえるかりのこえ (帰る雁の声)	137
かえるさ (帰るさ)	137

かえるさとびと (帰る里人)	137
かえるさのみち (帰るさの道)	137
かえるとりのね (帰る鳥の音)	137
かえるふるさと (帰る古里)	138
すててかえる (捨てて帰る)	138
だれかえる (誰帰る)	138
はるかえる (春帰る)	138
はるのかえるさ (春の帰るさ)	138
ひとかえる (人帰る)	138
みやこのつきにかえる (都の月に帰る)	139
かかる	139
あだとかかりくる (徒と掛かり来る)	139
かかる (掛かる)	139
かかるふじなみ (掛かる藤浪)	139
かけはし (掛橋)	139
くもかかるみね (雲かかる峰)	139
くものかけはし (雲の掛橋)	140
そばのかけはし (傍の掛橋)	140
みちのかけはし (道の掛橋)	140
みねのかけはし (峰の掛橋)	140
よばかりかかる (世ばかり掛かる)	140
かき	140
かきねづたい (垣根伝い)	140
かきのもとつば (垣の本つ葉)	140
かぎる	141
ゆうべかぎる (夕べ限る)	141
かく	141
ういしぎのはねがき (憂い鳴の羽搔き)	141
かくもしおぐさ (搔く藻塩草)	141
しぎのはねがき (鳴の羽搔き)	141
かくれる	141
かくれが (隠れ家)	141
かくれがのやま (隠れ家の山)	141
かくれがはない (隠れ家はない)	142
やまのかくれが (山の隠れ家)	142
かけい	142
かけいにうけるみず (懸樋に受ける水)	142
かける	142
なっかけて (夏かけて)	142
かげ	142
あおやぎのかげ (青柳の陰)	142
あさひかげ (朝日影)	142
あしびたくかげ (葦火焚く影)	143
ありあけのかげ (有明の影)	143
いなずまのかげ (稲妻の陰)	143
いりひかげ (入り日影)	143
おくやまのかげ (奥山の陰)	143
かげかすか (影かすか)	143

かげくれる（影暮れる）	143
かげたかくなる（影高くなる）	144
かすかなかげ（微かな影）	144
かりねのつきかげ（仮寝の月影）	144
さくらちるかげ（桜散る陰）	144
つきかげすむ（月影澄む）	144
ともしびのかげ（灯の影）	144
ねやのつきかげ（闇の月影）	145
のこるやまかげ（残る山影）	145
はなのかげ（花の陰）	145
はなのかげにやすらう（花の陰に安らう）	146
ひかりのかげ（光の影）	146
ひとかげもしない（人影もしない）	146
ひとりねとかげ（一人寝と影）	146
みずかげのさびしさ（水影の寂しさ）	146
やまのかげ（山の陰）	146
やまのしたかげ（山の下陰）	147
よもぎうのかげ（蓬生の影）	147
かさなる	147
かさなるやま（重なる山）	147
かしこい	147
かしこい（賢い）	147
かすか	148
かげかすか（影かすか）	148
かすかなかげ（微かな影）	148
かすみ	148
あさがすみ（朝霞）	148
いくえかすみ（幾重霞）	149
うちかすむ（うち霞む）	149
かすみ（霞）	149
かすみくみよる（霞くみよる）	149
かすみこめる（霞こめる）	149
かすみつつ（霞みつつ）	149
かすみにこもる（霞にこもる）	150
かすみにたどるみち（霞にたどる道）	150
かすみのうちのみずのみなかみ（霞の内の水の水上）	150
かすみのそこ（霞の底）	150
かすみのひま（霞のひま）	150
かすみより（霞より）	151
かすむ（霞む）	151
かすむおちこち（霞む遠近）	151
かすむはるのとおやま（霞む春の遠山）	151
かすむひ（霞む日）	151
かすむやまもと（霞む山本）	152
かすむゆうぐれ（霞む夕暮れ）	152
かぜとあさがすみ（風と朝霞）	152
つきがかすむ（月が霞む）	152
つきがかすむよる（月が霞む夜）	152

よこぐもかすむ (横雲霞む)	152
かすむ	153
あめかすむくれ (雨霞む暮れ)	153
かず	153
かずあまた (数あまた)	153
かずならぬ (数ならぬ)	153
かぜ	153
あきかぜ (秋風)	153
あきかぜがふく (秋風が吹く)	156
あきかぜのこえ (秋風の声)	156
あきのかわかぜ (秋の川風)	157
あきのはつかぜ (秋の初風)	157
おぎにかぜ (荻に風)	158
おぎのうわかぜ (荻の上風)	158
かぜがすさまじい (風が凄まじい)	158
かぜがみにしみる (風が身にしみる)	158
かぜとあさがすみ (風と朝霞)	159
かぜににおうたちばな (風に匂う橘)	159
かぜにはなちる (風に花散る)	159
かぜのおとわやま (風の音羽山)	159
かぜのおりおり (風の折々)	159
かぜのしずけさ (風の静けさ)	159
かぜのすずしさ (風の涼しさ)	159
かぜのはげしさ (風の激しさ)	160
かぜのまにまに (風のまにまに)	160
かぜのむらさめ (風の村雨)	160
かぜのゆくすえ (風の行末)	160
かぜみえる (風見える)	160
こがらしのかぜ (木枯しの風)	160
すごいあきかぜ (凄い秋風)	161
そでふきおくるかぜ (袖吹きおくる風)	161
ただあきのかぜ (ただ秋の風)	161
ただまつのかぜ (ただ松の風)	161
つゆふくかぜ (露吹く風)	161
のわきのかぜ (野分の風)	161
はつかぜときのうはきいてあきふける (初風と昨日は聞いて秋更ける)	162
はなのはるかぜ (花の春風)	162
はなのやまかぜ (花の山風)	162
はるかぜがふく (春風が吹く)	162
ふくかぜのあきのつゆ (吹く風に秋の露)	162
ふくなみのうらかぜ (吹く浪の浦風)	162
まつかぜがふく (松風が吹く)	162
まつかぜのこえ (松風の声)	163
まつふくかぜ (松吹く風)	163
みねのあきかぜ (峰の秋風)	163
やまのまつかぜ (山の松風)	163
よわのあきかぜ (夜半の秋風)	164
かた	164

あきのくれがた (秋の暮れ方)	164
あけがたのそら (明け方の空)	164
おちかだのくも (遠方の雲)	164
おちかたのやま (遠方の山)	164
おちかたびとのそで (遠方人の袖)	164
おちのとおやま (遠方の遠山)	165
かたもさだめない (方も定めない)	165
くものおちかた (雲の遠方)	165
くれゆくかた (暮れゆく方)	165
つきのいりがた (月の入方)	165
はるのくれがた (春の暮れ方)	165
かたしく	165
かたしきのそで (片敷の袖)	165
かたしく (片敷く)	166
しものかたしき (霜の片敷)	166
かたみ	166
かたみ (形見)	166
かたむく	166
かたむく (傾く)	166
つきがかたむく (月が傾く)	167
かたよる	167
かたより (片寄)	167
かたる	167
かたるばかりにむかうおもかげ (語るばかりに向う面影)	167
かつらぎ	167
かつらぎのやま (葛城の山)	167
さくらのかつらぎのやま (桜の葛城の山)	167
かなしい	168
たびのかなしさ (旅の悲しさ)	168
たびはかなしい (旅は悲しい)	168
ものがなしき (物悲しき)	168
わかるるたびはかなしい (別れる旅は悲しい)	168
かね	168
いりあいのかね (入相の鐘)	168
かねなる (鐘鳴る)	170
かねごと	171
ひとのかねごと (人の豫言)	171
かみ	171
かみにただいのる (神にただ祈る)	171
まつりするかみ (祭りする神)	171
みだれがみ (乱れ髪)	171
かも	171
かもひよし (賀茂日吉)	171
かや	172
あさじう (浅茅生)	172
あさじうのつゆ (浅茅生の露)	172
から	172
からごろも (唐衣)	172

もろこしぶね (唐土舟)	172
かり	173
おちるあまつかり (落ちる天つ雁)	173
かえるかりがね (帰る雁)	173
かえるかりのこえ (帰る雁の声)	173
かりなく (雁鳴く)	173
かりのいくつら (雁の幾列)	173
かりのこえ (雁の声)	174
かりのこえごえ (雁の声々)	174
かりのたまずさ (雁の玉章)	174
かりのひとこえ (雁の一声)	174
かりのひとつら (雁の一系列)	174
とぶかりのつばさ (飛ぶ雁の翼)	174
はつかりのこえ (初雁の声)	174
はるのかりがね (春の雁)	175
わたるかりがね (渡る雁)	175
かりそめ	175
かりそめ (仮初め)	175
かりの	175
かりねのつきかげ (仮寝の月影)	175
かりねをする (仮寝をする)	175
かりのよるのゆめ (仮の夜の夢)	175
かりふしのゆめ (仮臥の夢)	176
かりまくら (仮枕)	176
のにかりまくら (野に仮枕)	176
のべのかりふし (野辺の仮臥)	176
ゆめのかりまくら (夢の仮枕)	176
かりる	177
やどをかる (宿を借る)	177
かれる	177
かれたくさがもえでる (枯れた草が萌え出る)	177
かれはなすすき (枯れ花薄)	177
ふゆがれ (冬枯れ)	177
かわ	177
あきのかわかぜ (秋の川風)	177
あまのがわ (天の川)	177
かわおと (川音)	177
かわぞいのみち (川沿いの道)	178
かわぞいぶね (川沿い舟)	178
かわつらのさと (川面の里)	178
ちかいかわおと (近い川音)	178
つきのかわかみ (月の川上)	178
なみだがわ (涙河)	178
よどのかわぶね (淀の川舟)	179
かわす	179
かわすことのは (交わす言の葉)	179
かわず	179
かわずなく (蛙鳴く)	179

かわる	180
いろかわる (色変わる)	180
いろかわるころ (色変わる頃)	180
ひとのこころがかわる (人の心が変わる)	180
ひとのこころのかわるよのなか (人の心の変わる世の中)	180
かなづき	183
かなづき (神無月)	183
かなび	183
かなびのもり (神奈備の森)	183
がた	183
かたばかり (潟ばかり)	183
き	183
きぎのいろいろ (木々の色々)	183
このしたつゆ (木の下露)	183
このもとみち (木の下道)	183
なつこだち (夏木立)	183
はなのこのもと (花の木の下)	184
きえる	184
きえるけむり (消える煙)	184
きえるならきえるおもい (消えるなら消えるべき思い)	184
とおぎえ (遠消え)	184
ゆききえる (雪消える)	184
きく	185
きくのひともと (菊の一本)	185
きくのもめずらしい (聞くのも珍しい)	185
きくほととぎす (聞く時鳥)	185
つゆのおときくにわ (露の音聞く庭)	185
はつかぜときのうはきいてあきふける (初風と昨日は聞いて秋更ける)	185
ゆうつけどりをきく (木綿付け鳥を聞く)	185
きし	186
きしのやまぶき (岸の山吹)	186
きじ	186
きぎすなきたつ (雉鳴き立つ)	186
きぬぎぬ	186
きぬぎぬ (後朝)	186
きぬぎぬのあと (後朝の後)	186
きぬぎぬのそで (後朝の袖)	186
きぬた	187
きぬたのおと (砧の音)	187
きのう	187
きのうのくも (昨日の雲)	187
はつかぜときのうはきいてあきふける (初風と昨日は聞いて秋更ける)	187
きみ	187
きみのことのは (君の言の葉)	187
きみがよ	187
きみがよ (君が代)	187
きょう	187
きょうごと (今日毎)	187

きょうばかり（今日ばかり）	187
きよまわり	188
きよまわり（清まわり）	188
きり	188
きりにしも（霧に霜）	188
きりのうえ（霧の上）	188
きりのこる（霧残る）	188
きりのしたみち（霧の下道）	188
きりのまがき（霧の籬）	188
きりはれのぼる（霧晴れ昇る）	188
きりはれる（霧晴れる）	189
ほのかなきり（仄かな霧）	189
きりぎりす	189
きりぎりす（蟋蟀）	189
なくきりぎりす（鳴く蟋蟀）	189
きる	190
うちきせたい（打ち着せたい）	190
きわめる	190
たのしみをきわめる（楽しみを極める）	190
くき	190
もずのくさぐさ（鴟の草茎）	190
くさ	191
あきくさ（秋草）	191
かくもしおぐさ（掻く藻塩草）	191
かれたくさがもえでる（枯れた草が萌え出る）	191
くさのいお（草の庵）	191
くさのつゆ（草の露）	191
くさのとのうち（草の戸の内）	191
くさはのこらないゆきのしたおれ（草は残らない雪の下折）	191
くさはら（草原）	192
くさばのつゆ（草葉の露）	192
くさまくら（草枕）	192
しのぶぐさ（忍草）	192
つゆしぐれのくさ（露時雨の草）	193
もずのくさぐさ（鴟の草茎）	193
もりのしたくさ（森の下草）	193
わかくさまくら（若草枕）	193
わすれとうくさはら（忘れ訪う草原）	193
わすれるなよ（忘れるなよ）	193
くに	194
くににしたがう（国に従う）	194
くむ	194
よるくむさかずき（夜汲む杯）	194
くめ	194
くめのいわはし（久米の岩橋）	194
くも	194
あけぼののくも（曙の雲）	194
おちかたのくも（遠方の雲）	194

きのうのくも (昨日の雲)	194
くもかかるみね (雲かかる峰)	195
くものおちかた (雲の遠方)	195
くものかけはし (雲の掛橋)	195
くものたえま (雲の絶え間)	195
くものひとむら (雲の一群)	195
たなびくよこぐものそら (棚引く横雲の空)	195
つきのむらくも (月の群雲)	195
なかぞらのくも (中空の雲)	195
みねのくも (峰の雲)	196
ゆうぐれのくも (夕暮れの雲)	196
よこぐもかすむ (横雲霞む)	196
よこぐものそら (横雲の空)	196
くもどり	197
くもどりのあと (雲鳥の跡)	197
くる	197
あきがくる (秋が来る)	197
あきくる (秋来る)	197
あさくるうぐいす (朝来る鶯)	197
あだとかかりくる (徒と掛かり来る)	197
こないでおとする (来ないで音する)	197
とおくきた (遠く来た)	198
はるがくる (春が来る)	198
くるしい	198
やまがくるしい (山が苦しい)	198
くるま	198
おぐるまのおと (小車の音)	198
くれ	199
あきのくれがた (秋の暮れ方)	199
あめかすむくれ (雨霞む暮れ)	199
あめのくれ (雨の暮れ)	199
かげくれる (影暮れる)	199
かすむゆうぐれ (霞む夕暮れ)	199
くれごとのそら (暮れごとの空)	199
くれゆくかた (暮れゆく方)	200
くれる (暮れる)	200
はるのくれ (春の暮れ)	200
はるのくれがた (春の暮れ方)	200
はるのゆうぐれ (春の夕暮れ)	200
ひがくれる (日が暮れる)	200
ひぐれにともなう (日暮れに伴う)	201
ほたるとうくれ (蛍訪う暮れ)	201
やどのゆうぐれ (宿の夕暮れ)	201
ゆうぐれのくも (夕暮れの雲)	201
ゆうぐれのそら (夕暮れの空)	201
ゆうぐれのやま (夕暮れの山)	202
くれない	202
くれないのうめ (紅の梅)	202

そでのくれない (袖の紅)	203
けむり	203
うすけむり (薄煙)	203
おもいのけむり (思いの煙)	203
きえるけむり (消える煙)	203
けむりひとすじ (煙一筋)	203
こいしい	203
いもがこいしくて (妹が恋しくて)	203
いもにこいつつ (妹に恋いつつ)	203
みやこがこいしい (都が恋しい)	204
こえ	204
あきかぜのこえ (秋風の声)	204
あまひこのこえ (天彦の声)	204
うぐいすのこえ (鶯の声)	204
おじかなくこえ (牡鹿鳴く声)	206
かえりにこまいわうこえ (帰りに駒祝う声)	207
かえるかりのこえ (帰る雁の声)	207
かりのこえ (雁の声)	207
かりのこえごえ (雁の声々)	207
かりのひとこえ (雁の一声)	207
こえする (声する)	207
こえのさむさ (声の寒さ)	207
さおじかのこえ (さ牡鹿の声)	207
さるさけぶこえ (猿叫ぶ声)	208
すずむしのこえ (鈴虫の声)	208
せみのもろごえ (蟬の諸声)	209
たけをうつこえ (竹を打つ声)	209
ちどりなくこえ (千鳥鳴く声)	209
とりのこえ (鳥の声)	209
とりのこえごえ (鳥の声々)	209
とりのなくこえ (鳥の鳴く声)	209
とりのひとこえ (鳥の一声)	210
なみだあらそうこえ (涙争う声)	210
ねぐらのはるのとりのね (埜の春の鳥の声)	210
はつかりのこえ (初雁の声)	210
ひぐらしのこえ (蝸の声)	210
ほととぎすのひとこえ (時鳥の一声)	211
まつかぜのこえ (松風の声)	211
まつむしのこえ (松虫の声)	211
むしのこえ (虫の声)	211
むしのこえごえ (虫の声々)	212
こえる	212
いわこすなみ (岩越す浪)	212
うつのやまごえ (宇津の山越え)	212
こえるおうさかのせき (越える逢坂の関)	212
こえるおうさかのやま (越える逢坂の山)	213
としこえる (年越える)	213
みずこえる (水越える)	213

みねこえる（峰越える）	213
こおり	213
こおりそめる（氷初める）	213
そでのこおり（袖の氷）	213
つきがこおる（月が氷る）	213
こがらし	214
こがらしのかぜ（木枯しの風）	214
こころ	214
おなじこころ（同じ心）	214
おろかなこころ（愚かな心）	214
かわるよのなか（変わる世の中）	214
こころあらそうた（心争う歌）	214
こころうかれる（心浮かれる）	215
こころうらめしい（心恨めしい）	215
こころがまどのうち（心が窓の内）	215
こころづくし（心尽くし）	215
こころである（心である）	215
こころではない（心ではない）	215
こころながくまで（心長く待て）	215
こころにて（心にて）	216
こころをつくすあめのよる（心を尽す雨の夜）	216
ひとのこころ（人の心）	216
ひとのこころがかわる（人の心が変わる）	216
ひとのこころのかわるよのなか（人の心の変わる世の中）	216
ひとのこころのよのなか（人の心の世の中）	219
こし	219
こしのしらゆき（越の白雪）	219
こずえ	219
こずえのあき（梢の秋）	219
はなのこずえにあらわれる（花の梢に現れる）	219
こたえる	219
こたえようか（答えようか）	219
こちょう	220
こちょうという（胡蝶という）	220
こちょうのたとえ（胡蝶の喩え）	220
こと	220
あきないことのね（飽きない琴の音）	220
ことのは	220
おもうひとのことのは（思う人の言の葉）	220
かわすことのは（交わす言の葉）	220
きみのことのは（君の言の葉）	220
ことのはがない（言の葉がない）	220
のりのことのは（法の言の葉）	221
やまとことのは（大和言の葉）	221
こぼれる	221
こぼれるたけのはのつゆ（零れる竹の葉の露）	221
つゆのつきがこぼれる（露の月が零れる）	221
こま	221

かえりにこまいわうこえ (帰りに駒祝う声)	221
こめる	221
かすみこめる (霞こめる)	221
かすみにこもる (霞にこもる)	222
こもる	222
ういふゆごもり (憂い冬籠り)	222
ふゆこもるころ (冬籠もる頃)	222
ころ	222
いろかわるころ (色変わる頃)	222
さくらさくころ (桜咲く頃)	222
さみだれのころ (五月雨の頃)	223
しのにふるころ (篠にふる頃)	223
ふゆこもるころ (冬籠もる頃)	223
ものおもうころ (物思う頃)	223
ころも	224
あさごろもうつ (麻衣打つ)	224
あさのさごろも (麻の狭衣)	224
からごろも (唐衣)	224
すみのころもで (墨の衣手)	224
たつひのなつごろも (たつ日の夏衣)	224
たびごろも (旅衣)	225
たびのころもで (旅の衣手)	225
ごと	225
きょうごと (今日毎)	225
はなのはるごと (花の春毎)	225
ものごと (物毎)	225
さえずる	225
とりがさえずる (鳥が囀る)	225
とりのさえずり (鳥の囀り)	225
さえる	226
つきさえる (月冴える)	226
さかずき	226
よるくむさかずき (夜汲む杯)	226
さかり	226
はなざかり (花盛り)	226
さく	227
うめさく (梅咲く)	227
さくはるのはな (咲く春の花)	227
さくらさく (桜咲く)	227
さくらさくころ (桜咲く頃)	227
はなさく (花咲く)	227
さくら	228
おそざくら (遅桜)	228
さくらさく (桜咲く)	228
さくらさくころ (桜咲く頃)	228
さくらちるかげ (桜散る陰)	228
さくらのうえ (桜の上)	228
さくらのかつらぎのやま (桜の葛城の山)	228

やまざくら (山桜)	228
さけぶ	229
さるさけぶこえ (猿叫ぶ声)	229
さす	229
つきさしいでる (月差し出る)	229
さそう	229
さそう (誘う)	229
さそわれる (誘われる)	229
さだめる	230
かたもさだめない (方も定めない)	230
さだめない (定めない)	230
まくらさだめない (枕定めない)	230
さと	230
かえるさとびと (帰る里人)	230
かわつらのさと (川面の里)	230
さとのはるかさ (里の遥かさ)	230
さとのひとむら (里の一群)	231
さとはなれたみち (里離れた道)	231
たがさと (誰が里)	231
ちかいやまざと (近い山里)	231
はるのやまざと (春の山里)	231
やまざと (山里)	231
やまもとのさと (山本の里)	231
さびしい	232
あきのさびしさ (秋の寂しさ)	232
つきのさびしさ (月の寂しさ)	232
なおさびしい (なお寂しい)	232
なごりさびしい (名残り寂しい)	232
はるのさびしさ (春の寂しさ)	233
みずかげのさびしさ (水影の寂しさ)	233
ものさびしい (物寂しい)	233
さみだれ	233
さみだれ (五月雨)	233
さみだれのあと (五月雨の後)	233
さみだれのうち (五月雨の内)	233
さみだれのころ (五月雨の頃)	234
さみだれのつゆ (五月雨の露)	234
さむい	234
あきさむい (秋寒い)	234
こえのさむさ (声の寒さ)	234
さむいひ (寒い日)	234
ややさむいそで (やや寒い袖)	235
よざむおぼえる (夜寒おぼえる)	235
さめる	235
ねざめする (寝覚めする)	235
ねざめするよ (寝覚めする夜)	235
ゆめさめる (夢覚める)	235
さやか	235

さやか (さやか)	235
さやかなほし (さやかな星)	236
つきがさやか (月がさやか)	236
つきのさやけさ (月のさやけさ)	236
つきもさやか (月もさやか)	237
さよのなかやま	237
つきのさよのなかやま (月の小夜の中山)	237
さる	237
さるさけぶこえ (猿叫ぶ声)	237
さわ	237
あきのさわみず (秋の沢水)	237
さわみずのおと (沢水の音)	237
しか	237
おじかなくこえ (牡鹿鳴く声)	237
さおじかのこえ (さ牡鹿の声)	238
しが	238
しがのうらぶね (志賀の浦舟)	238
しぎ	239
ういしぎのはねがき (憂い鳴の羽搔き)	239
しぎのはねおと (鳴の羽音)	239
しぎのはねがき (鳴の羽搔き)	239
しく	239
しきわぶ (敷き侘ぶ)	239
しぐれ	239
あきしぐれ (秋時雨)	239
あきにしぐれる (秋に時雨れる)	239
しぐれる (時雨れる)	239
つゆしぐれのくさ (露時雨の草)	240
ひとしぐれ (一時雨)	240
ゆうしぐれ (夕時雨)	240
しげる	240
しげきむしのね (繁き虫の音)	240
しず	240
しずのおだまき (賤の苧環)	240
しずか	240
あさけしずか (朝明け静か)	240
あめすぎたあとのしずけさ (雨過ぎた後の静けさ)	240
かぜのしずけさ (風の静けさ)	241
しずか (静か)	241
した	241
いくえとよらのたけのしたみち (幾重豊浦の竹の下道)	241
きりのしたみち (霧の下道)	241
くさはのこらないゆきのしたおれ (草は残らない雪の下折)	242
このしたつゆ (木の下露)	242
このもとみち (木の下道)	242
つきのもと (月の下)	242
はぎのしたつゆ (萩の下露)	242
はなのこのもと (花の木の下)	242

もりのしたくさ (森の下草)	243
やまのしたかげ (山の下陰)	243
やまのしたみち (山の下道)	243
したう	243
したわれる (慕われる)	243
したがう	243
くににしたがう (国に従う)	243
しな	244
うたのしなじな (歌の品々)	244
しの	244
しのにふるころ (篠にふる頃)	244
しののめ	244
よはしののめ (夜は東雲)	244
しのぶ	244
しのびかねる (忍びかねる)	244
しのぶぐさ (忍草)	244
しば	244
しばのいお (柴の庵)	244
しばのどのうち (柴の戸の内)	245
なれるしばびと (なれる柴人)	245
しばむ	245
しばむあさがお (萎む朝顔)	245
しみる	245
かぜがみにしみる (風が身にしみる)	245
みにしみる (身にしみる)	245
しめる	246
ところをしめる (所を占める)	246
しも	246
きりにし (霧に霜)	246
しもすさまじいやま (霜凌まじい山)	246
しものかたしき (霜の片敷)	246
つきにしも (月に霜)	246
ながつきのしも (長月の霜)	246
しらかわのせき	246
しらかわのせき (白河の関)	246
しる	247
あわれしる (哀れ知る)	247
しる (知る)	247
ほどがしられる (程が知られる)	247
しろ	247
おきのしらなみ (沖の白浪)	247
こしのしらゆき (越の白雪)	247
しらつゆ (白露)	247
みねのしらゆき (峰の白雪)	247
すえ	248
おやまだのすえ (小山田の末)	248
たけのすえすえ (竹の末々)	248
ながれのすえ (流れの末)	248

みずのすえみえる (水の末見える)	248
みちのすえ (道の末)	248
すぎ	248
すぎのむらだち (杉の群立ち)	248
すぎる	249
あめすぎたあとのしずけさ (雨過ぎた後の静けさ)	249
すぎるむらさめ (過ぎる村雨)	249
はるすぎる (春過ぎる)	249
ほととぎすまくらのいづちすぎる (時鳥枕のいづち過ぎる)	249
むらさめすぎる (村雨過ぎる)	249
すごい	249
すごいあきかぜ (凄い秋風)	249
すさまじい	249
かぜがすさまじい (風が凄まじい)	249
しもすさまじいやま (霜凄まじい山)	250
すさまじいそら (凄まじい空)	250
すじ	250
けむりひとすじ (煙一筋)	250
ひとすじ (一筋)	250
みずのひとすじ (水の一筋)	250
みちのひとすじ (道の一筋)	250
すすき	251
かれはなすすき (枯れ花薄)	251
はなすすき (花薄)	251
ふとむらすすき (一群薄)	251
すずしい	251
かぜのすずしさ (風の涼しさ)	251
すずしい (涼しい)	251
すずしさにあきたつ (涼しさに秋立つ)	251
つゆのすずしさ (露の涼しさ)	251
ゆうすずみ (夕涼み)	252
すずむし	252
すずむしのこえ (鈴虫の声)	252
すだれ	252
すだれをまけばゆき (簾を巻けば雪)	252
たますだれ (玉簾)	252
たますだれあける (玉簾あける)	252
すてる	252
すててかえる (捨てて帰る)	252
すてるよのなか (捨てる世の中)	252
すま	253
すまのうら (須磨の浦)	253
すまのうらなみ (須磨の浦浪)	253
すまびと (須磨人)	253
なおすまのうら (なお須磨の浦)	253
すみ	254
すみぞめのそで (墨染の袖)	254
すみのころもで (墨の衣手)	254

すみだがわ	254
すみだがわ (隅田川)	254
すみよし	254
すみよし (住吉)	254
すみよしのうら (住吉の浦)	254
すみよしのまつ (住吉の松)	254
すみよしのまつとたのむ (住吉の松と頼む)	255
すめるふるさと (住める古里)	255
すむ	255
すみどころ (住み所)	255
つきかげすむ (月影澄む)	255
つきすむ (月澄む)	255
なかなかいちはすみよい (中々市は住み良い)	256
みずはすむ (水は澄む)	256
せみ	256
せみのもろごえ (蟬の諸声)	256
そう	256
かわぞいのみち (川沿いの道)	256
かわぞいぶね (川沿い舟)	256
そうはおもかげ (添うは面影)	256
そこ	257
かすみのそこ (霞の底)	257
そで	257
おちかたびとのそで (遠方人の袖)	257
かたしきのそで (片敷の袖)	257
きぬぎぬのそで (後朝の袖)	257
すみぞめのそで (墨染の袖)	257
そでがつゆっぼい (袖が露っぼい)	258
そでぬれる (袖濡れる)	258
そでのいろいろ (袖の色々)	258
そでのうつりが (袖の移り香)	258
そでのうめのか (袖の梅の香)	259
そでのくれない (袖の紅)	259
そでのこおり (袖の氷)	259
そでふきおくるかぜ (袖吹きおくる風)	259
そでをぬらす (袖を濡らす)	260
なみだがわがそでのうえ (涙が我が袖の上)	260
まいのそで (舞の袖)	260
ややさむいそで (やや寒い袖)	260
その	260
そののあさがお (園の朝顔)	260
そのまま	260
そのまま (そのまま)	260
そば	261
そばのかけはし (傍の掛橋)	261
そめる	261
すみぞめのそで (墨染の袖)	261
そら	261

あかつきのそら (暁の空)	261
あきのそら (秋の空)	261
あけがたのそら (明け方の空)	261
あけぼののそら (曙の空)	262
あめのこるそら (雨残る空)	262
ありあけのそら (有明の空)	262
いねがてのそら (寝ねがての空)	262
くれごとのそら (暮れごとの空)	262
すさまじいそら (凄まじい空)	263
たなびくよこぐものそら (棚引く横雲の空)	263
たびのそら (旅の空)	263
つきにありあけのそら (月に有明の空)	263
なかぞら (中空)	263
なかぞらのくも (中空の雲)	263
ながあめのそら (長雨の空)	263
ふかいよるのそら (深い夜の空)	264
ほたとぶそら (蛍飛ぶ空)	264
むらさめのそら (村雨の空)	264
ゆうぐれのそら (夕暮れの空)	264
ゆきのなかぞら (雪の中空)	265
ゆくすえのそら (行く末の空)	265
よこぐものそら (横雲の空)	265
た	265
うえるた (植える田)	265
うちかえすた (打ち返す田)	265
おやまだのすえ (小山田の末)	266
おやまだのはら (小山田の原)	266
たえだえ	266
みずのたえだえ (水の絶え絶え)	266
みちたえだえ (道絶え絶え)	266
たえま	266
くものたえま (雲の絶え間)	266
たえる	266
おもいたえる (思い耐える)	266
たかい	266
かげたかくなる (影高くなる)	266
みねたかい (峰高い)	267
たき	267
たきのいわなみ (滝の岩浪)	267
たく	267
あしびたくかけ (葦火焚く影)	267
たけ	267
いくえとよらのたけのしたみち (幾重豊浦の竹の下道)	267
くれたけ (呉竹)	267
こぼれるたけのはのつゆ (零れる竹の葉の露)	267
たけうちなびく (竹打ち靡く)	268
たけのすえずえ (竹の末々)	268
たけのひとむら (竹の一群)	268

たけをうつこえ (竹を打つ声)	268
なびきあうたけ (靡き合う竹)	268
たける	268
としたける (年長ける)	268
たそがれ	269
ふじのたそがれ (藤の黄昏)	269
たちばな	269
かぜににおうたちばな (風に匂う橘)	269
におうたちばな (匂う橘)	269
のきのたちばな (軒の橘)	269
たつ	269
すぎのむらだち (杉の群立ち)	269
すずしさにあきたつ (涼しさに秋立つ)	270
たつてうかれる (立って浮かれる)	270
たつひのなつごろも (たつ日の夏衣)	270
なつこだち (夏木立)	270
はるたつ (春立つ)	270
むらさめがたつ (村雨がたつ)	270
たとえる	270
こちょうのたとえ (胡蝶の喩え)	270
なににたとえよう (何に譬えよう)	271
たどる	271
かすみにたどるみち (霞にたどる道)	271
たなばた	271
たなばた (七夕)	271
たなびく	271
たなびくよこぐものそら (棚引く横雲の空)	271
たに	271
たにのいお (谷の庵)	271
たのしむ	271
たのしみをきわめる (楽しみを極める)	271
たのしむ (楽しむ)	272
たのむ	272
すみよしのまつとたのむ (住吉の松と頼む)	272
なにたのむ (何頼む)	272
ひとだのみ (人頼み)	272
みをたのむな (身を頼むな)	272
たび	272
いづるたびびと (出る旅人)	272
たびごろも (旅衣)	273
たびにある (旅にある)	273
たびのかなしさ (旅の悲しさ)	273
たびのころもで (旅の衣手)	273
たびのそら (旅の空)	273
たびはうい (旅は憂い)	273
たびはかなしい (旅は悲しい)	273
つきのたびのみち (月の旅の道)	274
わかれるたびはかなしい (別れる旅は悲しい)	274

たましがわ	274
たましがわ (玉島川)	274
たまずさ	274
かりのたまずさ (雁の玉章)	274
たまぼこ	274
たまぼこ (玉銚)	274
たよる	274
まつをたよりに (松を頼りに)	274
だれ	275
たがさと (誰が里)	275
だれかえる (誰帰る)	275
だれなのか (誰なのか)	275
だれにわすれる (誰に忘れる)	275
だれをとおうか (誰を訪おうか)	275
だれをまつ (誰を待つ)	275
だれをまつむしのなく (誰を松虫の鳴く)	276
ちかい	276
あきちかくなる (秋近くなる)	276
ちかいかわおと (近い川音)	276
ちかいやまざと (近い山里)	276
のべちかいうぐいす (野辺近い鶯)	276
やまちかい (山近い)	276
ちぎり	276
ただありなしのちぎり (ただ有り無しの契り)	276
ちぎり (契り)	277
ゆうがおのちぎり (夕顔の契り)	277
ちどり	277
ちどりなく (千鳥鳴く)	277
ちどりなくこえ (千鳥鳴く声)	277
むらちどり (群千鳥)	277
ちょう	278
ちょうのあわれさ (蝶の哀れさ)	278
ちる	278
かぜにはなちる (風に花散る)	278
さくらちるかげ (桜散る陰)	278
ちるのがおいしい (散るのが惜しい)	278
ちるはな (散る花)	278
はなちる (花散る)	278
つかえる	279
つかえびと (仕え人)	279
つき	279
あかつきづき (暁月)	279
あきのつき (秋の月)	279
あきのよのつき (秋の夜の月)	279
あけやすいつき (明けやすいつき)	280
ありあけのつき (有明の月)	280
いにしえのつき (古の月)	281
おぼろづきよ (朧月夜)	281

おぼろにのこるありあけのつき（朧に残る有明の月）	281
おもうこととつき（思う事と月）	281
かりねのつきかげ（仮寝の月影）	282
たまぐらのつき（手枕の月）	282
つきいでやる（月出やる）	282
つきいでる（月出る）	282
つきおちる（月落ちる）	283
つきかげすむ（月影澄む）	283
つきがかすむ（月が霞む）	283
つきがかすむよる（月が霞む夜）	283
つきがかたむく（月が傾く）	283
つきがこおる（月が氷る）	283
つきがさやか（月がさやか）	284
つきがほのめく（月がほのめく）	284
つきさえる（月冴える）	284
つきさしいでる（月差し出る）	284
つきすむ（月澄む）	284
つきにありあけのそら（月に有明の空）	285
つきにしも（月に霜）	285
つきのあかしがた（月の明石瀉）	285
つきのいりがた（月の入方）	285
つきのかわかみ（月の川上）	285
つきのさびしさ（月の寂しさ）	285
つきのさやけさ（月のさやけさ）	286
つきのさよのなかやま（月の小夜の中山）	286
つきのたびのみち（月の旅の道）	286
つきのむらくも（月の群雲）	287
つきのもと（月の下）	287
つきのゆくすえ（月の行く末）	287
つきはありあけ（月は有明）	287
つきふける（月更ける）	287
つきまつ（月待つ）	287
つきもさやか（月もさやか）	287
つきよなよな（月夜な夜な）	287
つきをみる（月を見る）	288
つゆのつきがこぼれる（露の月が零れる）	288
なつのよのつき（夏の夜の月）	288
ねやのつきかげ（闇の月影）	288
はるのよのつき（春の夜の月）	288
ふるさとのつき（古里の月）	288
みじかよのつき（短夜の月）	289
みやこのつきにかえる（都の月に帰る）	289
やまのはのつき（山の端の月）	289
ゆうづくよ（夕月夜）	289
よわのつき（夜半の月）	289
つく	290
いろづく（色付く）	290
つくす	290

こころづくし (心尽くし)	290
こころをつくすあめのよる (心を尽す雨の夜)	290
つじ	291
みちのつじうら (道の辻占)	291
つたう	291
かきねづたい (垣根伝い)	291
つたう (伝う)	291
はまつたう (浜伝う)	291
つな	291
ふねのつなでなわ (舟の綱手縄)	291
つばさ	291
とぶかりのつばさ (飛ぶ雁の翼)	291
つゆ	292
あさじうのつゆ (浅茅生の露)	292
くさのつゆ (草の露)	292
くさばのつゆ (草葉の露)	292
このしたつゆ (木の下露)	292
こぼれるたけのはのつゆ (零れる竹の葉の露)	292
さみだれのつゆ (五月雨の露)	292
しらつゆ (白露)	292
そでがつゆっぼい (袖が露っぼい)	293
つゆがみだれる (露が乱れる)	293
つゆしぐれのくさ (露時雨の草)	293
つゆにみだれる (露に乱れる)	293
つゆのあけぼの (露の曙)	293
つゆのおとくくにわ (露の音聞く庭)	294
つゆのすずしさ (露の涼しさ)	294
つゆのたまくら (露の手枕)	294
つゆのつきがこぼれる (露の月が零れる)	294
つゆのふるさと (露のふる里)	294
つゆのふるみち (露のふる道)	294
つゆふくかぜ (露吹く風)	294
つゆもなみだも (露も涙も)	294
はぎのしたつゆ (萩の下露)	295
ふくかぜのあきのつゆ (吹く風に秋の露)	295
つら	295
かわつらのさと (川面の里)	295
はるのうみつら (春の海面)	295
つらい	295
うくつらい (憂く辛い)	295
つり	295
あまのつりぶね (海人の釣舟)	295
おきのつりぶね (沖の釣舟)	296
つれない	296
うえはつれない (上は連れない)	296
つれない (連れない)	296
つれなさをうらむ (つれなさを恨む)	296
て	297

あきのたまくら (秋の手枕)	297
にいたまくら (新手枕)	297
ふねのつなでなわ (舟の綱手縄)	297
てら	297
はるのやまでら (春の山寺)	297
ふるでら (古寺)	297
みねのふるでら (峰の古寺)	297
てん	298
あまおとめ (天乙女)	298
あまのがわ (天の川)	298
おちるあまつかり (落ちる天つ雁)	298
でる	298
いづるたびびと (出る旅人)	298
いづるふなびと (出る舟人)	298
かれたくさがもえでる (枯れた草が萌え出る)	298
つきいでやる (月出やる)	299
つきいでる (月出る)	299
つきさしいでる (月差し出る)	299
と	299
くさのとのうち (草の戸の内)	299
しばのとのうち (柴の戸の内)	299
とう	300
あとをだにとう (後をだに訪う)	300
だれをとおうか (誰を訪おうか)	300
とわれる (訪われる)	300
ほたるとうくれ (蛍訪う暮れ)	300
やどをとう (宿を訪う)	300
わすれとうくさはら (忘れ訪う草原)	301
とおい	301
おちかたのくも (遠方の雲)	301
おちかたのやま (遠方の山)	301
おちかたびとのそで (遠方人の袖)	301
おちのとおやま (遠方の遠山)	301
かすむはるのとおやま (霞む春の遠山)	301
くものおちかた (雲の遠方)	302
とおきふるさと (遠き古里)	302
とおきむさしの (遠き武蔵野)	302
とおぎえ (遠消え)	302
とおくきた (遠く来た)	302
とおやまのあき (遠山の秋)	302
のがとおい (野が遠い)	302
みやこがとおい (都が遠い)	303
とおり	303
ただひととおり (ただ一通り)	303
ひととおり (一通り)	303
とこ	303
とこをしめる (所を占める)	303
ところ	303

すみどころ (住み所)	303
ところどころ	303
ところどころ (所々)	303
とし	304
としこえる (年越える)	304
としたける (年長ける)	304
としどしのはな (年々の花)	304
となえる	304
ほとけとなえる (仏唱える)	304
とにかく	304
とにかくに (とにかくに)	304
とぶ	305
とぶかりのつばさ (飛ぶ雁の翼)	305
とぶほたる (飛ぶ蛍)	305
ほたるとぶそら (蛍飛ぶ空)	305
みだれてとぶほたる (乱れて飛ぶ蛍)	305
とまる	305
とまりぶね (泊まり舟)	305
とまりぶねおとしていずち (泊まり舟音していずち)	306
ともしび	306
ともしびのかげ (灯の影)	306
ともしびのもと (灯の下)	306
ともなう	306
はるのともない (春の伴い)	306
ひぐれにともなう (日暮れに伴う)	306
とようら	307
いくえとよらのたけのしたみち (幾重豊浦の竹の下道)	307
とり	307
かえるとりのね (帰る鳥の音)	307
とりがさえずる (鳥が轉る)	307
とりなく (鳥鳴く)	307
とりのこえ (鳥の声)	307
とりのこえごえ (鳥の声々)	307
とりのさえずり (鳥の轉り)	308
とりのなくこえ (鳥の鳴く声)	308
とりのひとこえ (鳥の一声)	308
ねぐらのはるのとりのね (埜の春の鳥の声)	308
むらどりがねる (群鳥が寝る)	309
ない	309
あるかなきか (有るか無きか)	309
かくれがはない (隠れ家はない)	309
ただありなしのちぎり (ただ有り無しの契り)	309
なきもの (無き物)	309
ひとかげもしない (人影もしない)	309
みやごともない (宮事もない)	309
なか	310
すてるよのなか (捨てる世の中)	310
なかぞら (中空)	310

なかぞらのくも（中空の雲）	310
ひとのころのかわるよのなか（人の心の変わる世の中）	310
ひとのころのよのなか（人の心の世の中）	313
ゆきのなかぞら（雪の中空）	313
よのなか（世の中）	313
なかなか	313
なかなかいちはすみよい（中々市は住み良い）	313
ながい	313
あきのよなが（秋の夜長）	313
ころながくまで（心長く待て）	313
ながあめのそら（長雨の空）	314
よがながい（夜が長い）	314
よにながらえる（世に長らえる）	314
ながつき	314
ながつきのしも（長月の霜）	314
ながめる	314
ながめる（眺める）	314
ながれる	314
ながれのすえ（流れの末）	314
ながれる（流れる）	314
ながれるみず（流れる水）	315
なく	315
うぐいすがなく（鶯が鳴く）	315
おじかなくこえ（牡鹿鳴く声）	316
かりなく（雁鳴く）	316
かわずなく（蛙鳴く）	316
きぎすなきたつ（雉鳴き立つ）	316
だれをまつむしのなく（誰を松虫の鳴く）	317
ちどりなく（千鳥鳴く）	317
ちどりなくこえ（千鳥鳴く声）	317
とりなく（鳥鳴く）	317
とりのなくこえ（鳥の鳴く声）	317
なくきりぎりす（鳴く蟋蟀）	317
なくほととぎす（鳴く時鳥）	318
なけほととぎす（鳴け時鳥）	318
ほととぎすなく（時鳥鳴く）	319
まつむしがなく（松虫が鳴く）	319
むしなく（虫鳴く）	319
なぐさめる	319
うきをただなぐさめる（憂きをただ慰める）	319
うちがなぐさめる（うちが慰める）	319
なごり	320
なごり（名残り）	320
なごりさびしい（名残り寂しい）	320
なつ	320
たつひのなつごろも（たつ日の夏衣）	320
なつかけて（夏かけて）	320
なつこだち（夏木立）	320

なつのひ (夏の日)	320
なつこのつき (夏の夜の月)	320
なでしこ	321
なでしこ (撫子)	321
なに	321
なにおもう (何思う)	321
なにたのむ (何頼む)	321
なににたとえよう (何に譬えよう)	321
なびく	321
うちなびく (打ち靡く)	321
たけうちなびく (竹打ち靡く)	321
なびきあうたけ (靡き合う竹)	322
なびくあおやぎ (靡く青柳)	322
なみ	322
いわこすなみ (岩越す浪)	322
おきのしらなみ (沖の白浪)	322
おきのなみ (沖の浪)	322
かかるふじなみ (掛かる藤浪)	322
しがのうらぶね (志賀の浦舟)	323
すまのうらなみ (須磨の浦浪)	323
たきのいわなみ (滝の岩浪)	323
なみのうえ (浪の上)	323
なみのうきふね (浪の浮舟)	323
なみのまにまに (浪の間に間に)	324
ふくなみのうらかぜ (吹く浪の浦風)	324
まつのふじなみ (松の藤浪)	324
なみだ	324
つゆもなみだも (露も涙も)	324
なみだ (涙)	324
なみだあらそうこえ (涙争う声)	324
なみだおちる (涙落ちる)	325
なみだがわ (涙河)	325
なみだがわがそでのうえ (涙が我が袖の上)	325
むかしをおもなみだ (昔を思う涙)	325
むかってなみだおちる (向って涙落ちる)	326
ならう	326
よのならい (世の習い)	326
なる	326
あきちかくなる (秋近くなる)	326
かねなる (鐘鳴る)	326
なる (なる)	327
なれるしばびと (なれる柴人)	327
われでなくなるのがうい (我でなくなるのが憂い)	328
なわ	328
ふねのつなでなわ (舟の綱手縄)	328
におう	328
うめにおう (梅匂う)	328
うめにおうころ (梅匂う頃)	328

かぜににおうたちばな (風に匂う橘)	328
におううめのか (匂う梅の香)	328
におうたちばな (匂う橘)	329
みずにおうやまぶき (水に匂う山吹)	329
にしき	329
もみじのにしき (紅葉の錦)	329
にち	329
あさひかげ (朝日影)	329
いりひかげ (入り日影)	329
かすむひ (霞む日)	329
さむいひ (寒い日)	330
たつひのなつごろも (たつ日の夏衣)	330
なつのひ (夏の日)	330
はるのいりひ (春の入り日)	330
ひがくれる (日が暮れる)	330
ひぐれにともなう (日暮れに伴う)	330
にわ	331
つゆのおときくにわ (露の音聞く庭)	331
にわのあけぼの (庭の曙)	331
ぬれる	331
そでぬれる (袖濡れる)	331
そでをぬらす (袖を濡らす)	331
ね	332
いわがね (岩が根)	332
いわがねのまつ (岩が根の松)	332
ねぐら	332
ねぐらのはるのとりね (埸の春の鳥の声)	332
ねや	332
ねやのつきかげ (闇の月影)	332
ねる	332
いかにねて (如何に寝て)	332
いねがてのそら (寝ねがての空)	332
うたたね (うたた寝)	332
かりねのつきかげ (仮寝の月影)	333
かりねをする (仮寝をする)	333
ねざめする (寝覚めする)	333
ねざめするよ (寝覚めする夜)	333
ひとりねとかげ (一人寝と影)	333
ひとりねる (一人寝る)	333
むらどりがねる (群鳥が寝る)	333
の	334
のがとおい (野が遠い)	334
のにかりまくら (野に仮枕)	334
ののしたもえ (野の下萌え)	334
のべちかいうぐいす (野辺近い鶯)	334
のべのあけぼの (野辺の曙)	334
のべのあわれさ (野辺の哀れさ)	334
のべのいろいろ (野辺の色々)	335

のべのおちこち (野辺の遠近)	335
のべのかりふし (野辺の仮臥)	335
のき	335
のきのたちばな (軒の橋)	335
のこる	335
あめのこるそら (雨残る空)	335
おぼろにのこるありあけのつき (朧に残る有明の月)	336
きりのこる (霧残る)	336
くさはのこらないゆきのしたおれ (草は残らない雪の下折)	336
のこる (残る)	336
のこるありあけ (残る有明)	336
のこるやまかげ (残る山影)	336
のどか	337
あめののどけさ (雨の長閑さ)	337
のどか (長閑)	337
ひかりのどか (光長閑)	337
ののみや	337
ののみや (野々宮)	337
のぼる	337
きりはれのぼる (霧晴れ昇る)	337
のり	337
のりのことは (法の言の葉)	337
のわき	338
のわきのあと (野分の後)	338
のわきのかぜ (野分の風)	338
は	338
やまのはのつき (山の端の月)	338
はぎ	338
こはぎうつろう (小萩移ろう)	338
こはぎはら (小萩原)	338
はぎのしたつゆ (萩の下露)	339
はげしい	339
かぜのはげしさ (風の激しさ)	339
はこぶ	339
はこぶみつぎ (運ぶ貢)	339
はし	339
かけはし (掛橋)	339
くめのいわはし (久米の岩橋)	339
くものかけはし (雲の掛橋)	340
そばのかけはし (傍の掛橋)	340
はしばしら (橋柱)	340
みちのかけはし (道の掛橋)	340
みねのかけはし (峰の掛橋)	340
ゆめのうきはし (夢の浮橋)	340
はしら	341
はしばしら (橋柱)	341
はじ	341
おかべのはじのひとむら (岡辺の櫓の一群)	341

はじめる	341
こおりそめる (氷初める)	341
はす	342
はちすのうえ (蓮の上)	342
はつ	342
あきのはつかぜ (秋の初風)	342
けさのはつゆき (今朝の初雪)	343
はじめ (初め)	343
はつかぜときのうはきいてあきふける (初風と昨日は聞いて秋更ける)	343
はつかりのこえ (初雁の声)	343
はつせかぜ	343
はつせかぜ (初瀬風)	343
はつせでら	343
はつせでら (初瀬寺)	343
はてる	344
あけはてる (明け果てる)	344
よわりはてる (弱り果てる)	344
はな	344
あおばのはなのあと (青葉の花の後)	344
あさがおのはな (朝顔の花)	344
おしんではなをみる (惜しんで花を見る)	344
おのえのはなをみる (尾上の花を見る)	344
かぜにはなちる (風に花散る)	345
かれはなすすき (枯れ花薄)	345
さくはるのはな (咲く春の花)	345
ちるはな (散る花)	345
としどしのはな (年々の花)	345
はなうえる (花植える)	345
はなうちかおる (花打ち香る)	346
はなさく (花咲く)	346
はなざかり (花盛り)	346
はなすすき (花薄)	347
はなちる (花散る)	347
はなならで (花ならで)	347
はなのいろ (花の色)	347
はなのかげ (花の陰)	347
はなのかげにやすらう (花の陰に安らう)	348
はなのこずえにあらわれる (花の梢に現れる)	348
はなのこのもと (花の木の下)	348
はなのはる (花の春)	349
はなのはるかぜ (花の春風)	349
はなのはるごと (花の春毎)	349
はなのひとえだ (花の一枝)	349
はなのひともと (花の一本)	349
はなのやまかぜ (花の山風)	350
はなみえる (花見える)	350
はなよもみじよ (花よ紅葉よ)	350
はるのはな (春の花)	350

みよしののはな (み吉野の花)	351
やまなしのはな (山梨の花)	351
よしのがわのはな (吉野川の花)	351
はなれる	351
あけはなれる (明け離れる)	351
さとはなれたみち (里離れた道)	351
はね	352
ういしぎのはねがき (憂い鳴の羽搔き)	352
しぎのはねおと (鳴の羽音)	352
しぎのはねがき (鳴の羽搔き)	352
はま	352
はまつたう (浜伝う)	352
はやい	352
あさまだき (朝まだき)	352
はら	352
おやまだのはら (小山田の原)	352
くさはら (草原)	352
こはぎはら (小萩原)	353
まさごはら (真砂原)	353
わすれとうくさはら (忘れ訪う草原)	353
わすれるなよ (忘れるなよ)	353
はらう	353
はらう (払う)	353
はる	354
かすむはるのとおやま (霞む春の遠山)	354
さくはるのはな (咲く春の花)	354
ねぐらのはるのとりのね (埜の春の鳥の声)	354
はなのはる (花の春)	354
はなのはるかぜ (花の春風)	354
はなのはるごと (花の春毎)	354
はるあきのいろ (春秋の色)	355
はるかえる (春帰る)	355
はるかぜがふく (春風が吹く)	355
はるがくる (春が来る)	355
はるすぎる (春過ぎる)	355
はるたつ (春立つ)	356
はるのあけぼの (春の曙)	356
はるのいりひ (春の入日)	356
はるのうみつら (春の海面)	356
はるのかえるさ (春の帰るさ)	356
はるのかりがね (春の雁)	357
はるのくれ (春の暮れ)	357
はるのくれがた (春の暮れ方)	357
はるのさびしさ (春の寂しさ)	357
はるのともない (春の伴い)	357
はるのはな (春の花)	357
はるのひかり (春の光)	358
はるのふるさと (春の古里)	358

はるのものね (春の物の音)	358
はるのやまざと (春の山里)	358
はるのやまでら (春の山寺)	359
はるのゆうぐれ (春の夕暮れ)	359
はるのよのつき (春の夜の月)	359
はるのよのゆめ (春の夜の夢)	359
はるはあけぼの (春は曙)	359
はるよりのち (春より後)	359
ふるきみやこのはる (古き都の春)	359
はるか	360
さとのはるかさ (里の遙かさ)	360
はるばる	360
はるばる (遙々)	360
はれる	360
きりはれのぼる (霧晴れ昇る)	360
きりはれる (霧晴れる)	360
はれるむらさめ (晴れる村雨)	360
みずはれる (水晴れる)	360
むらさめのはれゆくあとはあらし (村雨の晴れゆく後は嵐)	360
ゆきがふりはれる (雪がふり晴れる)	361
ば	361
あおばのはなのあと (青葉の花の後)	361
かきのもとつば (垣の本つ葉)	361
くさばのつゆ (草葉の露)	361
こぼれるたけのはのつゆ (零れる竹の葉の露)	361
もみじば (紅葉葉)	361
ひ	361
あしびたくかけ (葦火焚く影)	361
ひかり	362
はるのひかり (春の光)	362
ひかりのかげ (光の影)	362
ひかりのどか (光長閑)	362
ひぐらし	362
ひぐらしのこえ (蝸の声)	362
ひだり	362
ひだりみぎ (左右)	362
ひと	363
いづるたびびと (出る旅人)	363
いづるふなびと (出る舟人)	363
おちかたびとのそで (遠方人の袖)	363
おもうひとのことは (思う人の言の葉)	363
かえるさとびと (帰る里人)	363
かわるよのなか (変わる世の中)	363
すまびと (須磨人)	363
つかえびと (仕え人)	363
なれるしばびと (なれる柴人)	364
ひとかえる (人帰る)	364
ひとかげもしない (人影もしない)	364

ひとがうらめしい (人が恨めしい)	364
ひとがまたれる (人が待たれる)	364
ひとだのみ (人頼み)	364
ひとのおとずれ (人の訪れ)	365
ひとのおもかげ (人の面影)	365
ひとのかねごと (人の豫言)	365
ひとのこころ (人の心)	365
ひとのこころがかわる (人の心が変わる)	366
ひとのこころのかわるよのなか (人の心の変わる世の中)	366
ひとのこころのよのなか (人の心の世の中)	368
ひともある (人もある)	369
ひとりねとかげ (一人寝と影)	369
ひとりねる (一人寝る)	369
ふるさとびと (古里人)	369
わびびと (侘人)	369
ひま	369
かすみのひま (霞のひま)	369
ひややか	369
ひややか (冷ややか)	369
みずひややか (水冷ややか)	370
ひよし	370
かもひよし (賀茂日吉)	370
ひらく	370
まどをひらく (窓を開く)	370
ふかい	370
ふかいよるのそら (深い夜の空)	370
やまふかい (山深い)	370
よがふかい (夜が深い)	370
ふく	371
あきかぜがふく (秋風が吹く)	371
あらしふくやま (嵐吹く山)	371
そでふきおくるかぜ (袖吹きおくる風)	371
つゆふくかぜ (露吹く風)	371
はるかぜがふく (春風が吹く)	372
ふくかぜのあきにつゆ (吹く風に秋の露)	372
ふくなみのうらかぜ (吹く浪の浦風)	372
まつかぜがふく (松風が吹く)	372
まつふくかぜ (松吹く風)	372
ふける	373
あきふける (秋更ける)	373
あきふけわたる (秋更け渡る)	373
つきふける (月更ける)	373
はつかぜときのうはきいてあきふける (初風と昨日は聞いて秋更ける)	373
よがふける (夜が更ける)	374
ふじ	374
かかるふじなみ (掛かる藤浪)	374
ふじのたそがれ (藤の黄昏)	374
まつふじなみ (松の藤浪)	374

ふす	374
かりふしのゆめ (仮臥の夢)	374
のべのかりふし (野辺の仮臥)	375
ふで	375
ふでのあと (筆の跡)	375
ふね	375
あまおぶね (海人小舟)	375
あまのつりぶね (海人の釣舟)	375
いづるふなびと (出る舟人)	376
おきのつりぶね (沖の釣舟)	376
おきのふね (沖の舟)	376
かわぞいぶね (川沿い舟)	376
とまりぶね (泊まり舟)	376
とまりぶねおとしていずち (泊まり舟音していずち)	377
なみのうきふね (浪の浮舟)	377
ふねのつなでなわ (舟の綱手縄)	377
ふねひきのぼる (舟曳き上る)	377
もろこしぶね (唐土舟)	377
よどのかわぶね (淀の川舟)	377
わたしぶね (渡し舟)	378
ふみ	378
ふねのまきまき (文の巻々)	378
ふゆ	378
ういふゆごもり (憂い冬籠り)	378
ふゆがれ (冬枯れ)	378
ふゆこもるころ (冬籠もる頃)	378
ふる	378
あめがふる (雨がふる)	378
いけふる (池ふる)	379
しのにふるころ (篠にふる頃)	379
つゆのふるみち (露のふる道)	379
ふる (ふる)	379
ふるきみやこのはる (古き都の春)	379
ふるでら (古寺)	379
ふるみやのうち (古宮の内)	380
みねのふるでら (峰の古寺)	380
ゆきがふりはれる (雪がふり晴れる)	380
ふるさと	380
おもうふるさと (思う古里)	380
かえるふるさと (帰る古里)	380
すめるふるさと (住める古里)	381
つゆのふるさと (露のふる里)	381
とおきふるさと (遠き古里)	381
はるのふるさと (春の古里)	381
ふるさと (古里)	381
ふるさとのあき (古里の秋)	381
ふるさとのつき (古里の月)	382
ふるさとびと (古里人)	382

へだたる	382
へだたる (隔たる)	382
ほし	382
さやかなほし (さやかな星)	382
ほしをいただく (星を頂く)	382
ほそい	383
みちがほそい (道が細い)	383
ほたる	383
あきのほたる (秋の蛍)	383
とぶほたる (飛ぶ蛍)	383
ほたるとうくれ (蛍訪う暮れ)	383
ほたるとぶそら (蛍飛ぶ空)	383
みだれてとぶほたる (乱れて飛ぶ蛍)	383
ほとけ	384
ほとけとなえる (仏唱える)	384
ほととぎす	384
きくほととぎす (聞く時鳥)	384
なくほととぎす (鳴く時鳥)	384
なけほととぎす (鳴け時鳥)	384
ほととぎす (時鳥)	385
ほととぎすなく (時鳥鳴く)	391
ほととぎすのひとこえ (時鳥の一声)	391
ほととぎすまくらのいずちすぎる (時鳥枕のいずち過ぎる)	391
まつほととぎす (待つ時鳥)	392
やまのほととぎす (山の時鳥)	392
やまほととぎす (山時鳥)	392
ゆくほととぎす (行く時鳥)	395
わかるほととぎす (別ける時鳥)	395
ほど	395
ほどがしられる (程が知られる)	395
ほのか	395
つきがほのめく (月がほのめく)	395
ほのか (仄か)	395
ほのかなきり (仄かな霧)	396
まつむしほのめく (松虫ほのめく)	396
ほん	396
うめのひともと (梅の一本)	396
きくのひともと (菊の一本)	396
はなのひともと (花の一本)	396
まつのひともと (松の一本)	396
やまもと (山本)	397
やまもとのさと (山本の里)	397
ま	397
かぜのまにまに (風のまにまに)	397
なみのまにまに (浪の間に間に)	397
まつあいだ (待つ間)	397
まい	398
まいのそで (舞の袖)	398

まえ	398
まえわたり (前渡り)	398
まがき	398
きりのまがき (霧の籬)	398
まき	398
ふねのまきまき (文の巻々)	398
まぎれる	398
まぎれない (紛れない)	398
まく	398
すだれをまけばゆき (簾を巻けば雪)	398
まくら	399
あきのたまくら (秋の手枕)	399
かりまくら (仮枕)	399
くさまくら (草枕)	399
たまくらのつき (手枕の月)	399
つゆのたまくら (露の手枕)	400
にいたまくら (新手枕)	400
のにかりまくら (野に仮枕)	400
ほととぎすまくらのいずちすぎる (時鳥枕のいずち過ぎる)	400
まくらさだめない (枕定めない)	400
まくらのうえ (枕の上)	400
まくらのゆめ (枕の夢)	400
ゆめのかりまくら (夢の仮枕)	401
わかくさまくら (若草枕)	401
まさご	401
まさごはら (真砂原)	401
まつ	401
あめをまつ (雨を待つ)	401
いわがねのまつ (岩が根の松)	401
こころながくまで (心長く待て)	402
すみよしのまつ (住吉の松)	402
すみよしのまつとたのむ (住吉の松と頼む)	402
ただまつのかぜ (ただ松の風)	402
だれをまつ (誰を待つ)	402
つきまつ (月待つ)	402
ひとがまたれる (人が待たれる)	403
まつあいだ (待つ間)	403
まつかぜがふく (松風が吹く)	403
まつかぜのこえ (松風の声)	403
まつのひとむら (松の一群)	403
まつのひとつもと (松の一本)	404
まつのふじなみ (松の藤浪)	404
まつふくかぜ (松吹く風)	404
まつほととぎす (待つ時鳥)	404
まつみえる (松見える)	404
まつをたよりに (松を頼りに)	405
やまのまつかぜ (山の松風)	405
まつむし	405

だれをまつむしのなく（誰を松虫の鳴く）	405
まつむしがなく（松虫が鳴く）	405
まつむしのこえ（松虫の声）	405
まつむしほのめく（松虫ほのめく）	406
まつり	406
おおはらまつり（大原祭り）	406
まつりするかみ（祭りする神）	406
まど	406
こころがまどのうち（心が窓の内）	406
まどをひらく（窓を開く）	406
まどい	407
まどいする（円居する）	407
まぼろし	407
まぼろし（幻）	407
み	407
かぜがみにしみる（風が身にしみる）	407
みにしみる（身にしみる）	407
みのゆくえ（身の行方）	407
みをおもう（身を思う）	408
みをたのむな（身を頼むな）	408
みぎ	408
ひだりみぎ（左右）	408
みじかい	408
みじかよのつき（短夜の月）	408
みじかよのゆめ（短夜の夢）	408
みず	409
あきのさわみず（秋の沢水）	409
いけみず（池水）	409
いさらいのみず（いさら井の水）	409
かけいにうけるみず（懸樋に受ける水）	409
かすみのうちのみずのみなかみ（霞の内の水の水上）	409
さわみずのおと（沢水の音）	409
ながれるみず（流れる水）	409
みずかげのさびしさ（水影の寂しさ）	410
みずこえる（水越える）	410
みずにおうやまぶき（水に匂う山吹）	410
みずのおと（水の音）	410
みずのさびあゆ（水の鯖鮎）	410
みずのすえみえる（水の末見える）	410
みずのたえだえ（水の絶え絶え）	410
みずのひとすじ（水の一筋）	411
みずはすむ（水は澄む）	411
みずはれる（水晴れる）	411
みずひややか（水冷ややか）	411
やまのいのみず（山の井の水）	411
みだれる	411
つゆがみだれる（露が乱れる）	411
つゆにみだれる（露に乱れる）	411

みだれがみ (乱れ髪)	412
みだれてとぶほたる (乱れて飛ぶ螢)	412
みち	412
いくえとよらのたけのしたみち (幾重豊浦の竹の下道)	412
かえるさのみち (帰るさの道)	412
かすみにたどるみち (霞にたどる道)	412
かわぞいのみち (川沿いの道)	412
きりのしたみち (霧の下道)	413
このもとみち (木の下道)	413
さとはなれたみち (里離れた道)	413
つきのたびのみち (月の旅の道)	413
つゆのふるみち (露のふる道)	413
のちのよのみち (後の世の道)	413
みちがほそい (道が細い)	413
みちたえだえ (道絶え絶え)	413
みちである (道である)	414
みちのかけはし (道の掛橋)	414
みちのすえ (道の末)	414
みちのつじうら (道の辻占)	414
みちのひとすじ (道の一筋)	414
みちのやすらい (道の安らい)	415
やまのしたみち (山の下道)	415
わかれじのあと (別れ路の跡)	415
みつぎ	415
はこぶみつぎ (運ぶ貢)	415
みね	416
くもかかるみね (雲かかる峰)	416
みねこえる (峰越える)	416
みねたかい (峰高い)	416
みねのあきかぜ (峰の秋風)	416
みねのいお (峰の庵)	416
みねのかけはし (峰の掛橋)	416
みねのくも (峰の雲)	416
みねのしらゆき (峰の白雪)	416
みねのふるでら (峰の古寺)	417
みねのゆき (峰の雪)	417
みや	417
いにしえのみや (古の宮)	417
ふるみやのうち (古宮の内)	417
みやこ	417
ふるきみやこのはる (古き都の春)	417
みやこがこいしい (都が恋しい)	417
みやこがとおい (都が遠い)	418
みやこのつきにかえる (都の月に帰る)	418
みやごと	418
みやごともない (宮事もない)	418
みる	418
おしんではなをみる (惜しんで花を見る)	418

おのえのはなをみる（尾上の花を見る）	418
かぜみえる（風見える）	418
つきをみる（月を見る）	418
はなみえる（花見える）	419
まつみえる（松見える）	419
みずのすえみえる（水の末見える）	419
みるのもうい（見るのも憂い）	419
むかう	419
かたるばかりにむかうおもかげ（語るばかりに向う面影）	419
むかつてなみだおちる（向って涙落ちる）	419
むかし	419
むかし（昔）	419
むかしをいまの（昔を今の）	420
むかしをおもうなみだ（昔を思う涙）	420
むさしの	420
とおきむさしの（遠き武蔵野）	420
むし	420
しげきむしのね（繁き虫の音）	420
むしなく（虫鳴く）	420
むしのこえ（虫の声）	420
むしのこえごえ（虫の声々）	421
むしのね（虫の音）	421
よわのむしのね（夜半の虫の音）	421
むしろ	422
さむしろ（さ簾）	422
さむしろのつき（さ簾の月）	422
むね	422
むねのおもい（胸の思い）	422
むらさめ	422
あきのむらさめ（秋の村雨）	422
かぜのむらさめ（風の村雨）	422
すぎるむらさめ（過ぎる村雨）	422
はれるむらさめ（晴れる村雨）	422
ひとむらさめ（一村雨）	423
むらさめ（村雨）	423
むらさめがたつ（村雨がたつ）	423
むらさめすぎる（村雨過ぎる）	423
むらさめのそら（村雨の空）	423
むらさめのはれゆくあとはあらし（村雨の晴れゆく後は嵐）	424
むれ	424
うちむれる（打ち群れる）	424
おかべのはじのひとむら（岡辺の櫓の一群）	424
くものひとむら（雲の一群）	424
さとのひとむら（里の一群）	424
すぎのむらだち（杉の群立ち）	424
たけのひとむら（竹の一群）	424
つきのむらくも（月の群雲）	425
ひとむら（一群）	425

ふとむらすすき (一群薄)	425
まつのひとむら (松の一群)	425
むらちどり (群千鳥)	425
むらどりがねる (群鳥が寝る)	425
めずらしい	426
きくのもめずらしい (聞くのも珍しい)	426
もえる	426
かれたくさがもえでる (枯れた草が萌え出る)	426
もしお	426
かくもしおぐさ (掻く藻塩草)	426
もず	426
もずのくさぐき (鶺鴒の草茎)	426
もつ	426
うつりもてゆく (移り持て行く)	426
もと	426
かきのもつば (垣の本つ葉)	426
かすむやまもと (霞む山本)	426
もの	427
なきもの (無き物)	427
はるのものね (春の物の音)	427
ものおもうころ (物思う頃)	427
ものがなしき (物悲しき)	427
ものごと (物毎)	427
ものさびしい (物寂しい)	428
もみじ	428
はなよもみじよ (花よ紅葉よ)	428
もみじのにしき (紅葉の錦)	428
もみじば (紅葉葉)	428
もり	428
かんなびのもり (神奈備の森)	428
もりのしたくさ (森の下草)	428
やしろ	428
よきのみやしろ (与喜の御社)	428
やすらう	429
はなのかげにやすらう (花の陰に安らう)	429
みちのやすらい (道の安らい)	429
やすらい (安らい)	429
やど	429
やどのうめ (宿の梅)	429
やどのうめのか (宿の梅の香)	429
やどのゆうぐれ (宿の夕暮れ)	429
やどをかる (宿を借る)	430
やどをとう (宿を訪う)	430
やなぎ	430
あおやぎ (青柳)	430
あおやぎのいと (青柳の糸)	430
あおやぎのかげ (青柳の陰)	430
なびくあおやぎ (靡く青柳)	430

やま	431
あきのやま (秋の山)	431
あけぼののやま (曙の山)	431
あらしふくやま (嵐吹く山)	431
うしろのやま (後ろの山)	431
うつのやま (宇津の山)	432
うつのやまごえ (宇津の山越え)	432
おくやまのかげ (奥山の陰)	432
おちかたのやま (遠方の山)	432
おちのとおやま (遠方の遠山)	432
おやまだのすえ (小山田の末)	432
おやまだのはら (小山田の原)	432
かくれがのやま (隠れ家の山)	433
かさなるやま (重なる山)	433
かすむはるのとおやま (霞む春の遠山)	433
かすむやまもと (霞む山本)	433
かつらぎのやま (葛城の山)	433
さくらのかつらぎのやま (桜の葛城の山)	434
しもすさまじいやま (霜凄まじい山)	434
ちかいやまざと (近い山里)	434
とおやまのあき (遠山の秋)	434
のこるやまかげ (残る山影)	434
はなのやまかぜ (花の山風)	434
はるのやまざと (春の山里)	434
はるのやまでら (春の山寺)	435
みよしののやま (み吉野の山)	435
やまがくるしい (山が苦しい)	435
やまざくら (山桜)	435
やまざと (山里)	435
やまちかい (山近い)	436
やまのいのみず (山の井の水)	436
やまのおく (山の奥)	436
やまのかくれが (山の隠れ家)	436
やまのかげ (山の陰)	436
やまのしたかげ (山の下陰)	437
やまのしたみち (山の下道)	437
やまのはのつき (山の端の月)	437
やまのほととぎす (山の時鳥)	438
やまのまつかぜ (山の松風)	438
やまぶかい (山深い)	438
やまほととぎす (山時鳥)	438
やまもと (山本)	441
やまもとのさと (山本の里)	441
ゆうぐれのやま (夕暮れの山)	441
やまおろし	442
やまおろし (山風)	442
やまがつ	442
やまがつ (山賤)	442

やまがつのいお (山賤の庵)	442
やまと	442
やまとことのは (大和言の葉)	442
やまなし	442
やまなしのはな (山梨の花)	442
やまぶき	442
きしのやまぶき (岸の山吹)	442
みずになにおうやまぶき (水に匂う山吹)	443
やよい	443
やよいのあめ (弥生の雨)	443
ゆう	443
かすむゆうぐれ (霞む夕暮れ)	443
はるのゆうぐれ (春の夕暮れ)	443
やどのゆうぐれ (宿の夕暮れ)	443
ゆうあらし (夕嵐)	443
ゆうぐれのくも (夕暮れの雲)	444
ゆうぐれのそら (夕暮れの空)	444
ゆうぐれのやま (夕暮れの山)	445
ゆうしぐれ (夕時雨)	445
ゆうすずみ (夕涼み)	445
ゆうづくよ (夕月夜)	445
ゆうべ (夕べ)	445
ゆうべかぎる (夕べ限る)	445
ゆうまぐれ (夕まぐれ)	445
ゆうがお	446
ゆうがお (夕顔)	446
ゆうがおのちぎり (夕顔の契り)	446
ゆうだち	446
ゆうだち (夕立)	446
ゆうだちのあと (夕立の後)	446
ゆうつけどり	447
ゆうつけどりをきく (木綿付け鳥を聞く)	447
ゆき	447
うちのゆき (内の雪)	447
くさはのこらないゆきのしたおれ (草は残らない雪の下折)	447
けさのはつゆき (今朝の初雪)	447
こしのしらゆき (越の白雪)	447
すだれをまけばゆき (簾を巻けば雪)	447
みねのしらゆき (峰の白雪)	447
みねのゆき (峰の雪)	448
ゆきがふりはれる (雪がふり晴れる)	448
ゆききえる (雪消える)	448
ゆきになる (雪になる)	448
ゆきのあけぼの (雪の曙)	448
ゆきのあさあけ (雪の朝明け)	448
ゆきのうち (雪の内)	449
ゆきのなかぞら (雪の中空)	449
ゆくえ	449

みのゆくえ（身の行方）	449
ゆくすえ	449
おいのゆくすえ（老いの行く末）	449
かぜのゆくすえ（風の行末）	449
つきのゆくすえ（月の行く末）	449
ゆくすえのそら（行く末の空）	450
ゆめ	450
いにしえのゆめ（古の夢）	450
かりのよるのゆめ（仮の夜の夢）	450
かりふしのゆめ（仮臥の夢）	450
ただゆめのうち（ただ夢の内）	450
はるのよのゆめ（春の夜の夢）	450
まくらのゆめ（枕の夢）	450
みじかよのゆめ（短夜の夢）	451
ゆめさめる（夢覚める）	451
ゆめのうきはし（夢の浮橋）	451
ゆめのおもかげ（夢の面影）	452
ゆめのかりまくら（夢の仮枕）	452
よるのゆめ（夜の夢）	452
よ	452
あじけないよ（味気ない世）	452
かわるよのなか（変わる世の中）	452
すてるよのなか（捨てる世の中）	453
のちのよのみち（後の世の道）	453
ひとのこころのかわるよのなか（人の心の変わる世の中）	453
ひとのこころのよのなか（人の心の世の中）	455
よにながらえる（世に長らえる）	456
よのなか（世の中）	456
よのならい（世の習い）	456
よばかりかかる（世ばかり掛かる）	456
よをいとう（世を厭う）	456
よき	456
よきのみやしろ（与喜の御社）	456
よこ	456
たなびくよこぐものそら（棚引く横雲の空）	456
よこぐもかすむ（横雲霞む）	457
よこぐものそら（横雲の空）	457
よしの	457
みよしののおく（み吉野の奥）	457
みよしのはな（み吉野の花）	457
みよしののやま（み吉野の山）	457
よしのがわ	458
よしのがわのはな（吉野川の花）	458
よど	458
よどのかわぶね（淀の川舟）	458
よぶこどり	458
よぶこどり（呼子鳥）	458
よもぎ	458

よもぎう (蓬生)	458
よもぎうのかげ (蓬生の影)	458
よる	459
あきのよすがら (秋の夜すがら)	459
あきのよなが (秋の夜長)	459
あきのよなよな (秋の夜な夜な)	459
あきのよのつき (秋の夜の月)	459
おぼろづきよ (朧月夜)	459
かりのよるのゆめ (仮の夜の夢)	460
ころをつくすあめのよる (心を尽す雨の夜)	460
つきがかすむよる (月が霞む夜)	460
つきよなよな (月夜な夜な)	460
なつのよのつき (夏の夜の月)	460
ねざめするよ (寝覚めする夜)	460
はるのよのつき (春の夜の月)	460
はるのよのゆめ (春の夜の夢)	460
ふかいよるのそら (深い夜の空)	461
みじかよのつき (短夜の月)	461
みじかよのゆめ (短夜の夢)	461
ゆうづくよ (夕月夜)	461
よがあげる (夜が明ける)	461
よがながい (夜が長い)	461
よがふかい (夜が深い)	462
よがふける (夜が更ける)	462
よざむおぼえる (夜寒おぼえる)	462
よはしのめ (夜は東雲)	462
よもすがら (夜もすがら)	462
よるくむさかずき (夜汲む杯)	462
よるのゆめ (夜の夢)	463
よわのあきかぜ (夜半の秋風)	463
よわのつき (夜半の月)	463
よわのむしのね (夜半の虫の音)	463
よわる	463
よわりはてる (弱り果てる)	463
れつ	464
かりのいくつら (雁の幾列)	464
かりのひとつら (雁の一行)	464
わかい	464
わかくさまくら (若草枕)	464
わかれる	464
わかれじのあと (別れ路の跡)	464
わかれる (別れる)	464
わかれるたびはかなしい (別れる旅は悲しい)	464
わけるほととぎす (別れる時鳥)	465
わすれる	465
だれにわすれる (誰に忘れる)	465
わすれとうくさはら (忘れ訪う草原)	465
わすれもしない (忘れもしない)	465

わすれようとする (忘れようとする)	465
わすれるなよ (忘れるなよ)	465
わたす	466
うちわたす (打ち渡す)	466
わたる	466
あきふけわたる (秋更け渡る)	466
まえわたり (前渡り)	466
わたしぶね (渡し舟)	466
わたるかりがね (渡る雁)	466
わびる	466
しきわぶ (敷き侘ぶ)	466
わびびと (侘人)	466
われ	467
なみだがわがそでのうえ (涙が我が袖の上)	467
われでなくなるのがうい (我でなくなるのが憂い)	467

あお

あおほのはなのあと
青葉の花の後かがるふちなみ
→掛かる藤浪まつならて—あをはのゆきや—はなのあと
こときのかたに—かがるふちなみ【看聞日記紙背50巻】／山何 [かせやく
も] / 応永 26(1419) 年 10 月 25 日をしめとも—あをはになりぬ—はなのあと
まつにことさら—かがるふちなみ【看聞日記紙背50巻】／山何 [あつさな
ほ] / 応永 32(1425) 年 閏 6 月 25 日あおやぎ
青柳かつらぎやま
→葛城山あをやきの—いととしつけき—あめみえて
こえむもいかか—かつらぎのやま【天文年間百韻38巻】／山何 [つきやけ
さ] / 天文 21(1552) 年 7 月 26 日あをやきの—ほかはふきぬる—かせもなし
よもはかすみの—かつらぎのやま【春夢草／書陵部本】／春／永正 12(1516)
年、13 年あおやぎのいと
青柳の糸うち映える
→打ち映えるたえぬをかけの—あをやきのいと
つゆなから—あさゆふかすみ—うちはへて【宮島千句】／山何 [ことのはや] / 天文
20(1551) 年 5 月 9 日～11 日はるにやさらす—あをやきのいと
えのみつに—かすみのころも—うちはへて【文明年間百韻34巻】／何人 [わすれて
は] / 文明 5(1473) 年 2 月 1 日かわぞい
→川添いのとかにひく—あをやきのいと
かはそひの—ふねのつなての—なかきひに【看聞日記紙背50巻】／唐何 [うめはけ
ふ] / 応永 26(1419) 年 2 月 25 日みたれあひたる—あをやきのいと
かはそひの—つつみやなみの—こえぬらむ【文禄年間百韻12巻】／□□ [あめのひ
の] / 文禄 2(1593) 年 5 月あおやぎのかげ
青柳の陰はなをみる
→花を見るかせもかよはぬ—あをやぎのかげ
けふもまた—なかきひくらし—はなをみて【新撰菟玖波集／実隆本】／春上／明応
4(1495) 年 9 月 26 日しはしたたすむ—あをやぎのかげ
あふひとに—ところせかる—はなをみて

【宗長関係8種】／老耳／天理本／

なびくあおやぎ
靡く青柳かすむ
→霞むかせよりさきも—なびくあをやぎ
ありあけや—なかそらたかく—かすむらむ【看聞日記紙背50巻】／何人 [うめのな
の] / 応永 30(1423) 年 5 月 27 日はるのしるしに—なびくあをやぎ
かつらぎや—くものよそめに—かすむらむ【看聞日記紙背50巻】／唐何 [いやとし
に] / 応永 31(1424) 年 1 月 25 日のこる
→残るくちきなからも—なびくあをやぎ
みちのへの—ゆきはうすくや—のこるらむ【看聞日記紙背50巻】／何路 [ひととせ
に] / 応永 32(1426) 年 12 月 11 日しつえしけりて—なびくあをやぎ
かせやまた—ちりしさくらに—のこるらむ【寛文年間百韻22巻】／□□ [たのもし
な] / 寛文 9(1669) 年 10 月 2 日

あかしがた

あかしがた
明石瀉まくらにちどりなくこえ
→枕に千鳥鳴く声

さらてたに一つきによなよな—あかしかた
まくらにあきの—ちとりなくこゑ

【永禄年間百韻28巻】／山何〔ゆふかほ
に〕／永禄2(1559)年5月20日

わひつつも—うらなれけりな—あかしかた
まくらにちかし—ちとりなくこゑ

【天正年間百韻57巻】／何人〔みれはみ
し〕／天正12(1584)年9月13日

→^{つづくおかこえのみち}続く岡越えの道

あかしかた—しほきをはこふ—ふねよせて
うらまてつつく—をかこえのみち

【看聞日記紙背50巻】／何路〔あききて
は〕／応永27(1420)年7月25日

ともふねの—かよふもちかき—あかしかた
やまにもつつく—をかこえのみち

【看聞日記紙背50巻】／山何〔やよや
ひ〕／応永31(1424)年3月18日

つきのあかしがた
月の明石瀉

→^{おかべのあき}岡辺の秋

すまよりも—よはなほつきに—あかしかた
をかへのあきの—すこきしはのや

【看聞日記紙背50巻】／山何〔まつそひ
て〕／応永26(1419)年2月6日

ゆふきりも—はれゆくつきの—あかしかた
をかへのあきの—うらそさひしき

【看聞日記紙背50巻】／何路〔うのはな
の〕／応永30(1423)年4月4日

あかつき

^{あかつき}
暁

→^{きぬきぬのそで}後朝の袖

あかつきの—かねにあはれは—もよほされ
ひかへかねたる—きぬきぬのそで

【羽柴千句】／何船〔ときはきも〕／天正
6(1578)年5月18・19日

あかつきの—つきもみにしむ—たまくらに
つゆをかたみの—きぬきぬのそで

【永正年間百韻34巻】／何人〔つきはな
を〕／永正2(1505)年9月13日

^{あかつきつき}
暁月

→^{しぐれ}時雨

あかつきつきは—きりにかくれて
さむしろの—つゆのいくたひ—しくらむ

【五吟一日千句】／何木〔としのうちに〕
／天正9(1581)年11月19日

あかつきつきは—われのみもみし
あやにくに—あきのそらなど—しくらむ

【延徳年間百韻16巻】／何路〔かけす
し〕／延徳4(1492)年6月1日

^{あかつきのそら}
暁の空

→^{くさまくら}草枕

わかるるかりや—あかつきのそら
にはとりの—こゑはきこえぬ—くさまくら

【天正四年万句70巻】／山何〔みかつき
の〕／天正4(1576)年5月6日~7月19日

みしゆめしたふ—あかつきのそら
くさまくら—またうきみちに—おきいてて

【行助関係4種】／行助句／伊地地本／

あき

^{あきかぜ}
秋風

→^{ころもうつ}衣打つ

しもまよふ—とほさとをの—あきかせに
たれをりはへて—ころもうつらむ

【太神宮法楽千句】／山何〔のははなに〕
／長享2(1488)年7月

ひまみゆる—ねやのとほその—あきかせに
たかききたへの—ころもうつらむ

【大永四年月並千二百韻】／□□〔そよと
しも〕／月並千二百韻／大永4(1524)年10
月23日

→^{にわのつきかげ}庭の月影

しきたへの一ころもてかれぬ一あきかせに
くもまそひゆく一にはのつきかけ

【天文年間百韻38巻】／朝何〔またてき
く〕／天文9(1540)年4月25日

あきかせに一つゆもたまらす一ちるこすゑ
あらはになりぬ一にはのつきかけ

【文明十四年万句52巻】／何路〔ぬしや
たれ〕／文明14(1482)年7月4日～9月
14日

のべのむしのね
→野辺の虫の音

さとはあれて一うゑしまつふく一あきかせに
かきねのくさは一のへのむしのね

【葉守千句】／白何〔こからしを〕／長享
元(1487)年10月9日～11日>

すすしさを一もとむるそての一あきかせに
いつれかいつれ一のへのむしのね

【飯盛千句】／何人〔くみわすれ〕／永禄
4(1561)年5月27日～29日

はつかりのこゑ
→初雁の声

あきかせに一いさよふほたる一ほのかにて
いつのねさめか一はつかりのこゑ

【永正十花千句】／何木〔ひかすたに〕／
永正13(1516)年3月11日～14日

むさしのや一さすらへきぬる一あきかせに
みやこもさそな一はつかりのこゑ

【永正年間百韻34巻】／山何〔たちはな
に〕／永正18(1521)年5月7日

まつむしのこゑ
→松虫の声

したつゆも一くさかくれなき一あきかせに
しをれはなにか一まつむしのこゑ

【延徳年間百韻16巻】／何路〔うめかか
の〕／延徳4(1492)年1月23日

あちきなく一こぬひとうらむ一あきかせに
なほふるさとの一まつむしのこゑ

【成立不詳・宗長以前15巻】／名号〔な
かはひと〕／成立時不詳

さとはあれて一ひとこそとはね一あきのかせ
ゆふくれかなし一まつむしのこゑ

【称名院追善千句】／何牆〔さかのやま〕
／永禄6(1563)年12月14日～18日

しもかれの一くすはにかはる一あきのかせ
かけはいつこの一まつむしのこゑ

【天正年間百韻57巻】／何船〔もしほく
さ〕／天正7(1579)年1月13日

やまのはのいろ
→山の色

つきしろも一そらすみぬへき一あきかせに
しくてとほる一やまのはのいろ

【元龜年間百韻6巻】／何人〔とめゆけは〕
／元龜3(1572)年9月28日

あきかせに一そらゆくくもや一きえぬらむ
みるみるかはる一やまのはのいろ

【天正四年万句70巻】／唐何〔はなさけ
は〕／天正4(1576)年5月6日～7月19日

ふるまとのゆうべ
→古里の夕べ

かれをきまても一あきかせのこゑ
ふるさとの一ゆふへやつきを一またすらむ

【柴野千句】／何木〔はにしける〕／延文
2(1357)年以後-応安3年6月以前

まつあるかたの一あきかせのこゑ
ふるさとの一つゆのゆふへや一うかるらむ

【文明十四年万句52巻】／夢想〔たにみ
つの〕／文明14(1482)年7月4日～9月
14日

きぬきぬのあと
→後朝の後

もろともに一きくさへかなし一あきのかせ
あさつゆおもへ一きぬきぬのあと

【東山千句】／薄何〔つゆをいろ〕／永正
15(1518)年8月10日～12日

ひとりねの一まくらわひしき一あきのかせ
つきにかさねし一きぬきぬのあと

【天正年間百韻57巻】／□□〔とみなし
に〕／天正18(1590)年11月21日

→衣打つ声

あきのかせーたけのはすさふーそらふけて
ふしみをとほみーころもうつこゑ

【浅間千句】／何路〔ゆくほたる〕／永正
11(1514)年5月13日～19日

すすしさも一つきまつほとの一あきのかせ
よひふけけらしーころもうつこゑ

【永禄石山千句】／三字中略〔こすゑまで〕
／永禄7(1564)年5月12日

→鳴の羽搔き

あきのかせーみやこのゆめをーさそふよに
まくらさためぬーしきのはねかき

【天文年間百韻38巻】／x x〔かめにさ
す〕／天文21(1552)年2月20日

かたとよりーおとしてかよふーあきのかせ
めさますいほのーしきのはねかき

【慶長年間百韻27巻】／□□〔さきつか
む〕／裏白／慶長19(1614)年1月3日

→露が零れる

まつたかしーいほりのうへのーあきのかせ
くさのとほそは一つゆそこほるる

【文安月千句】／何人〔おもかはり〕／文
安2(1445)年8月15日

いまいくよーとははうつろふーあきのかせ
たもとならばす一つゆそこほるる

【秋津洲千句】／山何〔くもよまで〕／天
文15(1546)年8月25日

ふるさとのーゆふへなりけりーあきのかせ
むしのねしけきー一つゆそこほるる

【大永四年月並千二百韻】／□□〔へたつ
なよ〕／月並千二百韻／大永4(1524)年3
月23日

→舟から聞く浪が凄まじい

かけもややーゆふひをおくるーあきのかせ
ふねなからきくーなみはすさまし

【宗牧追善千句】／何路〔のこるなほ〕／
永禄4(1561)年9月14日・15日

ゆめかへるーかりねのとこのーあきのかせ
ふねにきくよのーなみはすさまし

【成立不詳・心敬以前14巻】／何人〔こ
のものと〕／成立時不詳

→蝸の声

ここよりやーたちていつみのーあきのかせ
てるみなつきのーひくらしのこゑ

【浅間千句】／山何〔ここよりや〕／永正
11(1514)年5月13日～19日

すすしさやーやすらふままのーあきのかせ
またかけのこるーひくらしのこゑ

【大永三年月並千三百韻】／□□〔はなに
つき〕／月並千三百韻／大永3(1523)年3
月23日

あつきひはーかけよわるつゆのーあきのかせに
ころもてうすしーひくらしのこゑ

【延徳年間百韻16巻】／何人〔うすゆき
に〕／延徳3(1491)年10月20日

あきかせにーひとむらさめのーそらはれて
やまちをゆけはーひくらしのこゑ

【園塵第四／早稲田大学本】／秋／永正6、7
年

→枕は何処

うたたねのーつきふけけれなーあきのかせ
まくらのいつこーたかきむしのね

【大永三年月並千三百韻】／□□〔はると
ふく〕／月並千三百韻／大永3(1523)年1
月23日

よひよひのーそてにしらるるーあきのかせ
まくらのいつこーころもうつらむ

【大永四年月並千二百韻】／□□〔としな
みの〕／月並千二百韻／大永4(1524)年12
月23日

→山の端の月

あきのかせーほのしたをきのーよひふけて
ゆふへまたれしーやまのはのつき

【永禄年間百韻28巻】／追善〔まれにと
ふ〕／永禄元(1558)年11月5日

たにかはにーほたるみたるるーあきのかせ
くもやへたてしーやまのはのつき

【天正年間百韻57巻】／□□ [なつやま
は] /天正17(1589)年4月26日

→^{きおしかのこえ}さ牡鹿の声

きけはまたーみねよりおつるーあきのかせ
みたるるこのはーさをしかのこゑ

【諸家月次連歌抄】／諸家月次連歌抄／成
立()年未詳

いくたひかーまつにくすはのーあきのかせ
しくれにぬるるーさをしかのこゑ

【那智竈／北野天満宮本】／永正十四年／

→^{つゆのふるさと}露のふる里

たちそめてーいくゆふくれのーあきのかせ
たひもさこそー一つゆのふるさと

【嵯峨千句】／何人 [さきてちる] / (元
龜4) 天正元(1573)年正月9日～11日

をきのはにーきけはくもふくーあきのかせ
みやまににたるー一つゆのふるさと

【園塵第一／統群書類従本】／雑／長享2
年

→^{ひとむらすすき}群薄

はなもなきーこはきかものーあきのかせ
ひとむらすすきーたれまねくらむ

【文明年間百韻34巻】／x x [あきふけ
ぬ] /文明12(1480)年9月28日

つゆきえしーのはらにたちぬーあきのかせ
ひとむらすすきーひとのおもかけ

【心敬関係10種】／吾妻辺云捨／天理本
／

あきかぜがふく
秋風が吹く

→^{なくきりぎりす}鳴く蟋蟀

ここにすみけるーあきかせそふく
たれとなくーふりにしあとのーきりきりす

【伊勢千句】／何木 [すめるよ] /大永
2(1522)年8月4日～8日

かれののあさちーあきかせそふく
くれぬれはーなくねもかはるーきりきりす

【文明年間百韻34巻】／x x [あきふけ
ぬ] /文明12(1480)年9月28日

→^{つゆふる}露ふる

まきのいたまはーあきかせそふく
みのむしのーこゑあはれにもー一つゆふりて

【伊予千句】／何馬 [もろひと] /天文
6(1537)年5月22日

とへはののみやーあきかせそふく
かきりなくーそてのわかれちー一つゆふりて

【成立不詳・宗祇以前15巻】／x x [ち
れはいさ] /成立時不詳

→^{あさじがはら}浅茅が原

さひしきものーあきかせそふく
あさちはらーこころをそむるー一つゆなから

【専順関係2種】／秋／応仁元(1467)年
5月10日

つきはふけつーあきかせそふく
あさちはらーむしのねよりもーわれなきて

【園塵第三／統群書類従本】／秋／文亀元
(1501)年3月18日

→^{はなすすき}花薄

とふかときけはーあきかせそふく
はなすすきーきみかうゑしやーしのふらむ

【文明年間百韻34巻】／何路 [あさなけ
に] /文明8(1476)年1月11日

むかしこひしきーあきかせそふく
ひとすまぬーをのへのみやのーはなすすき

【愚句老葉】／秋／永正17年

あきかぜのこえ
秋風の声

→^{かげさびしい}影寂しい

やなきにたかきーあきかせのこゑ
かけさひしーかりなきわたるーゆふつくよ

【三島千句】／何衣 [はなにつき] /文明
3(1471)年3月21日～23日

このくれよりの一あきかせのこゑ
みにしみて一いくたのもりの一かけさひし

【宗長関係8種】／老耳／天理本／

→^{みにしみる}身にしみる

なみたすすむる一あきかせのこゑ
ものおもへは一くものはたても一みにしみて

【難波田千句】／□□ [あくよを]／文
明 14(1482)年 10月 前後

このくれよりの一あきかせのこゑ
みにしみて一いくたのもりの一かけさひし

【宗長関係8種】／老耳／天理本／

^{あきがくる}
秋が来る

→^{つきいでる}月出る

かせはをきふく一あきはきにけり
くれぬまは一またかけかくす一つきいてて

【永正十花千句】／何田 [はなにこひ]／
永正 13(1516)年 3月 11日～14日

くものゆきかひ一あきはきにけり
あさかほに一そらさへみゆる一つきいてて

【享祿年間百韻8巻】／懷旧 [ゆふたちの]
／享祿 5(1532)年 6月 8日

→^{はぎさく}萩咲く

をきのかせふく一あきはきにけり
つきかけも一いろなるつゆに一はきさきて

【諸家月次連歌抄】／諸家月次連歌抄／成
立()年未詳

なほふるさとの一あきはきにけり
うゑおきし一あさちましりに一はきさきて

【基佐集／静嘉堂文庫本】／秋／永正
6(1509)年以前

→^{いなおせとり}稲負鳥

やなきかけ一それともなしに一あきはきて
かせうちなひき一いなおせとり

【宗長追善千句】／片何 [やまさくら]／
(享祿 5)天文元(1532)年 3月 25日

しはのとの一こころもしらす一あきはきて
こひちをみする一いなおせとり

【基佐集／静嘉堂文庫本】／雑／永正
6(1509)年以前

^{あきくさ}
秋草

→^{なくきりぎりす}鳴く蟋蟀

よもきふに一あらぬはなある一あきのくさ
なくきりぎりす一ねをなつくしそ

【文安月千句】／何田 [ほしのなも]／文
安 2(1445)年 8月 15日

こころとや一つゆをもうくる一あきのくさ
なくきりぎりす一ものなおもひそ

【三島千句】／何衣 [はなにつき]／文明
3(1471)年 3月 21日～23日

^{あきくる}
秋来る

→^{ひぐらしがなく}蛸が鳴く

あききぬと一かせもおとはの一みねこえて
たきよりうへに一ひくらしそなく

【大永年間百韻14巻】／何船 [うめかか
や]／大永 3(1523)年 1月 9日

あききぬと一おもひそむるや一いろならむ
あめうちそそき一ひくらしそなく

【新撰菟玖波集／実隆本】／秋上／明応
4(1495)年 9月 26日

^{あきさむい}
秋寒い

→^{うつあきごろも}打つ麻衣

うらかれの一ささのいほりの一あきさむみ
たえやらすしも一うつあきごろも

【五吟一日千句】／何垣 [つきもなほ]／
天正 9(1581)年 11月 19日

ねさめする一くさのいほりの一あきさむみ
つきのよるよる一うつあきごろも

【元和年間百韻24巻】／□□ [やつかほ
の]／元和 6(1620)年 8月 23日

^{あきしぐれ}
秋時雨

→^{いろづく}色付く

あきのしくれは—ぬるるまもなし
よなよなの—つきのこすゑは—いろつきて

【太神宮法楽千句】／何木〔いつそめし〕
／長享2(1488)年7月

あきのしくれは—たけのはのおと
しつかすむ—かきほのまくす—いろつきて

【称名院追善千句】／初何〔したふなよ〕
／永禄6(1563)年12月14日～18日

あきちかくなる
秋近くなる

こころほそいはなおちるころ
→心細い花落ちる頃

おほつかな—あきもやちかく—なりぬらむ
こころほそしな—はなおつころ

【心敬関係10種】／芝草内岩橋／本能寺本
／

くれそうき—あきもやちかく—なりぬらむ
こころほそしな—はなおつころ

【河越千句】／山何〔うくひすに〕／文明
2(1470)年正月10～12日

あきにしくれる
秋に時雨れる

かぜにつゆがこぼれる
→風に露が零れる

あきのそら—たかあかつきも—しくらむ
のきはのかせに—つゆそこほるる

【文安雪千句】／花之何〔ゆきふれは〕／
文安2(1445)年10月18日

あきさむき—はれてもまたや—しくらむ
かせのたひたひ—つゆそこほるる

【天文廿四年梅千句】／何袋〔ふたあみの〕
／天文24(1555)年正月7日

あきのおもかけ
秋の面影

くれのはなすすき
→暮れの花薄

ととめおかはや—あきのおもかけ
ふゆくれは—つゆもかれのの—はなすすき

【園塵第四／早稲田大学本】／冬／永正6、7
年

いろなるつゆや—あきのおもかけ
はなすすき—たかそてとなく—のはくれて

【壁草／大阪天満宮文庫本】／冬／永正
2(1505)年8月23日以後同3年3月以前

あきのかわかぜ
秋の川風

きりわたる
→霧わたる

まよふやふなち—あきのかはかせ
きりわたる—やまもとつつき—かすかにて

【永正年間百韻34巻】／何人〔ゆふつく
よ〕／永正13(1516)年7月8日

なみにあけたつ—あきのかはかせ
きりわたる—すゑののすすき—むらむらに

【天文年間百韻38巻】／何人〔つきによ
る〕／天文5(1536)年6月15日

あきのくれがた
秋の暮れ方

はつしぐれ
→初時雨

やまかけすこき—あきのくれかた
ふるよりも—あとみえける—はつしぐれ

【延徳年間百韻16巻】／山何〔ふきもこ
ぬ〕／延徳2(1490)年9月20日

をしまぬもやは—あきのくれかた
つゆはかり—さととひわふる—はつしぐれ

【天文年間百韻38巻】／何人〔つきによ
る〕／天文5(1536)年6月15日

あきのさびしさ
秋の寂しさ

あさぎり
→朝霧

ふるきみきりの—あきのさびしさ
あさきりに—のわきのこすゑ—うちしをれ

【延徳年間百韻16巻】／山何〔ふきもこ
ぬ〕／延徳2(1490)年9月20日

みつもかれのの—あきのさびしさ
やまかつの—まへゆくさはの—あさきりに

【天文年間百韻38巻】／何人〔つきによ
る〕／天文5(1536)年6月15日

きりのうち
→霧の内

まつをとなりの—あきのさびしさ
ゆふまくれ—さとなきやまの—きりのうち

【太神宮法楽千句】／薄何〔まきのはや〕
／長享2(1488)年7月

なにはあたりの—あきのさひしさ
いりあひの—こゑさへしめる—きりのうち

【元和年間百韻24巻】/□□ [はなにな
して] /元和8(1622)年3月19日

ゆうまぐれ
→夕まぐれ

わかものかほの—あきのさひしさ
たれもこそ—なかめわふらめ—ゆふまぐれ

【熊野千句】/何路 [かさなるや] /文正
元(1466)年3月以前

まつをとりの—あきのさひしさ
ゆふまぐれ—さとなきやまの—きりのうち

【太神宮法楽千句】/薄何 [まきのはや]
/長享2(1488)年7月

あきのさわみず
秋の沢水

とりなぐ
→鳴鳴く

をふねさをさす—あきのさはみつ
やまかけの—とこさたまらぬ—しきなきて

【伊予千句】/何舟 [わきてみむ] /天文
6(1537)年5月22日

しはふかくれの—あきのさはみつ
ゆふまぐれ—きりふるつきに—しきなきて

【文安年間百韻9巻】/何人 [なもしらぬ]
/文安4(1447)年8月19日

あきのそら
秋の空

つきのおうぐれ
→月の夕暮れ

われそゆく—かりはこしちの—あきのそら
たましひかよふ—つきのゆふくれ

【成立不詳・心敬以前14巻】/何路 [し
ろたへの] /成立時不詳

とはれすは—みをいかにせむ—あきのそら
たのめおきつる—つきのゆふくれ

【成立不詳・心敬以前14巻】/山何 [ほ
とときす] /成立時不詳

あきのたまくら
秋の手枕

はなすすき
→花薄

かたはらさひし—あきのたまくら
ましのの—くすはかれはの—はなすすき

【文龜年間百韻4巻】/何人 [まつこえし]
/文龜3(1503)年4月29日

つゆこそこのれ—あきのたまくら
やまとほく—つきはいるのの—はなすすき

【老葉/吉川本】/秋/文明13(1481)年
夏頃

あきのつき
秋の月

そでがつゆつぼい
→袖が露つぼい

きりはれて—かけすさましき—あきのつき
はらひもあへぬ—そてのつゆけさ

【天正年間百韻57巻】/□□ [まつなら
ぬ] /天正17(1589)年1月4日

しらしらと—すみかもりいる—あきのつき
むかしみさりし—そてのつゆけさ

【文明十四年万句52巻】/花何 [みたす
なよ] /文明14(1482)年7月4日~9月
14日

あきのはつかぜ
秋の初風

つきいでる
→月出る

にしよりむかふ—あきのはつかせ
かみのます—かのをかきよく—つきいてて

【宝徳四年千句】/何船 [いろそそふ] /
宝徳4(1452)年3月12日

あかつきしるき—あきのはつかせ
きよからむ—かけほのめかす—つきいてて

【永正年間百韻34巻】/何路 [ひとはい
さ] /永正17(1520)年2月4日

ふなちにおもふ—あきのはつかせ
くまもなく—なきたるなみに—つきいてて

【天文年間百韻38巻】/朝何 [またてき
く] /天文9(1540)年4月25日

のこるあつきにはしいする
→残る暑さに端居する

ふくとしもなき—あきのはつかせ
ふくるまで—のこるあつきに—はしゐして

【慶長年間百韻27巻】/□□ [はるにま
つ] /裏白/慶長6(1601)年1月3日

おともしつけき—あきのはつかせ
しはしたた—のこるあつきに—はしゐして

【慶長年間百韻27巻】／□□〔はるもこそ〕／裏白／慶長13(1608)年1月3日

→^{むしなく}虫鳴く

たひたつそもーあきのはつかせ
かへるさのーやまちいまはたーむしなきて

【永正年間百韻34巻】／山河〔まちこしや〕／永正12(1515)年11月11日

ふきつたへくるーあきのはつかせ
このさともーさなからのへのーむしなきて

【成立不詳・宗長以前15巻】／何人〔やまみつは〕／成立時不詳

→^{さそう}誘う

こすゑよりこそーあきのはつかせ
ひくらしにーまつむしのねやーさそふらむ

【住吉千句】／白何〔あらのみ〕／大永元(1521)年11月1日～14日

またこぬくれのーあきのはつかせ
したはちるーやなきやかりをーさそふらむ

【竹林抄／新古典文学大系本】／秋／文明8(1476)年5月頃

→^{たなはた}七夕

けふめつらしきーあきのはつかせ
たなはたのーいかにまちみしーくれならむ

【大永四年月並千二百韻】／□□〔うのはなの〕／月並千二百韻／大永4(1524)年4月23日

またそてぬらすーあきのはつかせ
たなはたのーまとほのうらみーいかはかり

【新撰菟玖波集／実隆本】／秋上／明応4(1495)年9月26日

→^{ひとはより}一葉より

たえたえなりしーあきのはつかせ
ひとはよりーのちはきことにーちるをみて

【竹林抄／新古典文学大系本】／秋／文明8(1476)年5月頃

このよをおもふーあきのはつかせ
ひとはよりーかるきはおいのーゆくへにて

【竹林抄／新古典文学大系本】／雑下／文明8(1476)年5月頃

あきのほたる
秋の螢

→^{はしいするそでひややか}端居する袖冷ややか

あきのほたるのーほのかなるかけ
はしみするーそてひややかにーつきいてて

【飯盛千句】／一字露頭〔つきのこる〕／永禄4(1561)年5月27日～29日

あきのほたるのーいつつきゆるむ
はしみするーそてひややかにーあけはなれ

【慶長年間百韻27巻】／□□〔こからしも〕／慶長3(1598)年10月19日

あきのむらさめ
秋の村雨

→^{つゆがうい}露が憂い

うらつたひするーあきのむらさめ
ぬれとほるーわかたひころもーつゆもうし

【文安年間百韻9巻】／山河〔はなはひも〕／文安5(1448)年2月5日

やまのかけゆくーあきのむらさめ
ふりてすむーいほりののきのーつゆもうし

【文明十四年万句52巻】／山河〔あきかせに〕／文明14(1482)年7月4日～9月14日

あきのやま
秋の山

→^{とわのふるみや}永久の布留宮

おもひにはーみわかぬものをーあきのやま
ひとはかけせぬーとはのふるみや

【文明十四年万句52巻】／何人〔やまいかに〕／文明14(1482)年7月4日～9月14日

むしそなくーまことにこれそーあきのやま
みよやかくなるーとはのふるみや

【文明十四年万句52巻】／何路〔あさうみに〕／文明14(1482)年7月4日～9月14日

あきのよすがら
秋の夜すがら

→^{ねられる}寝られる

このはまたちる—あきのよすから
ねられめや—まくらにちかく—うつつころも

【文安頃千句4巻】／朝何〔すゑとほき〕

／

よひのまふくる—あきのよすから
ねられめや—のわきやまかせ—ふきそひて

【文明十五年千句11巻】／二字返音〔は
なははの〕／文明15(1483)年*月*日～
3月2日

あきのよなが
秋の夜長

きりぎりす
→蟋蟀

はしるにあかぬ—あきのよなかさ
ききすてて—たれかいをぬる—きりぎりす

【大永年間百韻14巻】／何人〔つきやふ
ね〕／大永2(1522)年8月

おもひをつくす—あきのよなかさ
きりぎりす—なれかなくねに—まけむやは

【弘治年間百韻8巻】／何人〔うめひとき〕
／裏白／弘治3(1557)年1月3日

あきのよなよな
秋の夜な夜な

くさまくら
→草枕

つきまつころの—あきのよなよな
ふるさとも—さそなつゆけき—くさまくら

【天文年間百韻38巻】／x x〔しかそな
く〕／天文24(1555)年9月19日

おもひをそふる—あきのよなよな
ゆめにわれ—みゆらむものを—くさまくら

【壁草／大阪天満宮文庫本】／旅／永正
2(1505)年8月23日以後同3年3月以前

あきのよのつき
秋の夜の月

みにしみる
→身にしみる

ひとのかたみの—あきのよのつき
しもまよふ—かれののすすき—みにしみて

【表佐千句】／何衣〔よるやあめ〕／文明
8(1476)年3月6日<～8日>

あくかれてゆく—あきのよのつき
ものおもふ—みちののかせは—みにしみて

【諸尊法紙背3巻】／手何〔むすふにも〕

／建武4(1337)年6月23日

のわきする
→野分する

あさちかやとを—あきのよのつき
かこはれし—つゆのたよりも—のわきして

【文龜年間百韻4巻】／何人〔きえしよの〕
／文龜2(1502)年8月6日

むくらかおくの—あきのよのつき
いつこにも—さはるかけなく—のわきして

【宗長関係8種】／老耳／天理本／

あきふける
秋更ける

きぎのしたつゆ
→木々の下露

かせわたる—あさちかすゑも—あきふけて
いろつきそむる—きぎのしたつゆ

【出陣千句】／朝何〔きりもやは〕／永正
元(1504)年10月25日～27日

やまとほき—いそのまつかせ—あきふけて
しくれはのこる—きぎのしたつゆ

【至徳以前百韻7巻】／何所〔ちりぬるか〕
／至徳4(1387)年以前

きおじかのこえ
→き牡鹿の声

みねたかみ—へたつるつきの—あきふけて
つまやいつくの—さをしかのこゑ

【宗長追善千句】／白何〔みしやいつ〕／
享祿5) 天文元(1532)年3月25日

はやたより—おしねもるまで—あきふけて
あらしにかよふ—さをしかのこゑ

【寛正年間百韻20巻】／唐何〔せみのは
の〕／寛正4(1463)年6月23日

よわるむしのね
→弱る虫の音

はなすすき—かれゆくしもに—あきふけて
のにはおしなひ—よわるむしのね

【顯証院会千句】／山何〔あさもよひ〕／
宝徳元(1449)年8月19日～21日

たひはまた—はるけきみちに—あきふけて
わくるくさはに—よわるむしのね

【文明年間百韻34巻】／何人〔よるはつき〕／文明18(1486)年2月6日

ころもうつおと
→衣打つ音

あきやいまーこからしふきてーふけぬらむ
のころかたなくーころもうつおと

【宮島千句】／山何〔ことのはや〕／天文
20(1551)年5月9日～11日

くさまくらーうかれとあきやーふけぬらむ
みにしむかせにーころもうつおと

【文明年間百韻34巻】／x x〔つきをか
せ〕／文明12(1480)年8月

ありあけのつき
→有明の月

ひとはたたーかりにたにこぬーあきふけて
うらみにむかふーありあけのつき

【伊予千句】／何舟〔わきてみむ〕／天文
6(1537)年5月22日

ゆふつゆにーやとかすかのーあきふけて
こむよもてらせーありあけのつき

【宗長関係8種】／興津宛／書陵部本／

あきふけわたる
秋更け渡る

かりなく
→雁鳴く

あきふけわたるーきりのうみつら
ゆふなみのーまつのはこしにーかりなきて

【合点之句／神宮文庫本】／秋／天文
9(1541)年12月25日

あきふけわたるーつきのむらくも
かりなきてーよはいねかてのーたまくらに

【合点之句／神宮文庫本】／雑／天文
9(1541)年12月25日

ういあき
憂い秋

うえなないならきかないおぎのうわかぜ
→植えないなら聞かない萩の上風

うきことはーこころにたえぬーあきなるに
うゑすはきかしーをきのうはかせ

【文和千句】／何人〔なはたかく〕／文和5
年

うきこともーわれとしるへきーあきなるに
うゑすはきかしーをきのうはかせ

【菟玖波集／広島大学本】／雑一／文和
5(1356)年冬～翌年の春

こずえのあき
梢の秋

しかのこゑ
→鹿の声

こすゑのあきのーをちのひとむら
しかのこゑーきりのいつくにーかへるらむ

【大永年間百韻14巻】／山何〔いやまし
に〕／大永5(1525)年1月17日

こすゑのあきのーかけあさきみち
なれきつるーさととほくなるーしかのこゑ

【弘治年間百韻8巻】／何路〔ゆくみつや〕
／弘治2(1556)年3月24日

すごいあきかぜ
凄い秋風

ののひとつまつ
→野のつまつ

とふかひなしやーすこきあきかせ
くれぬとてーかけたのむののーひとつまつ

【竹林抄／新古典文学大系本】／旅／文明
8(1476)年5月頃

ふきとしふくはーすこきあきかせ
かるるののーひとつもとすすきーひとつまつ

【心敬関係10種】／芝草内連歌合／天理本
／

すずしさにあきたつ
涼しさに秋立つ

ひぐらしのこゑ
→蝸の声

すすしくもーゆふひのくもにーあきたちて
こすゑしらるるーひぐらしのこゑ

【永禄元年花千句】／□□〔あたりまで〕
／永禄元(1558)年3月23日～25日

すすしさのーけふよりしるきーあきたちて
やまはくもまのーひぐらしのこゑ

【天文年間百韻38巻】／x x〔したみつ
も〕／天文24(1555)年9月2日

ただあきのかぜ
ただ秋の風

かりなく
→雁鳴く

たのめしあとは一たたあきのかせ
ひとふてのーたよりをまてはーかりなきて

【大永三年月並千三百韻】／□□ [まつか
せや] / 月並千三百韻 / 大永 3(1523) 年 6
月 23 日

をののゆふへはーたたあきのかせ
のこるひもーいろこきいねにーかりなきて

【老葉 / 吉川本】 / 秋 / 文明 13(1481) 年
夏頃

とおやまのあき
遠山の秋

まのうみ
→ 紀伊海

いまつきにみるーとほやまのあき
きのうみやーふねをきりまにーこきいたし

【文明十四年万句 5 2 卷】 / 何木 [すゑの
つゆ] / 文明 14(1482) 年 7 月 4 日～9 月
14 日

なかめわひぬるーとほやまのあき
きのうみやーたまつしままつーきりこめて

【専順関係 2 種】 / 秋 / 応仁元 (1467) 年
5 月 10 日

はつかぜときのはきはきいてあきふける
初風と昨日は聞いて秋更ける

ひとのはのこらないもみじ
→ 人は残らない紅葉

はつかせとーきのふはきしーあきふけて
ひとのはのこらすーもろきもみちは

【三島千句】 / 何人 [しるしらす] / 文明
3(1471) 年 3 月 21 日～23 日

はつかせとーきのふはきしーあきふけて
ひとのはのこらすーもみちちるかけ

【老葉 / 吉川本】 / 秋 / 文明 13(1481) 年
夏頃

はるあきのいろ
春秋の色

うつろう
→ 移ろう

みしはしはしのーはるあきのいろ
やまふきのーつゆはもみちにーうつろひて

【美濃千句】 / 何馬 [まつやしる] / 文明
4(1473) 年 12 月 16 日～21 日

けにはかなしやーはるあきのいろ
ひとはたたーときなるかたにーうつろひて

【宗祇関係 2 種】 / 心敬専順点宗祇付句 /

ふくかぜのあきのつゆ
吹く風に秋の露

ひぐらしのこゑ
→ 蝸の声

かせはまたーふかぬになつもーあきのつゆ
せみにまじるやーひぐらしのこゑ

【平松文庫本千句】 / □□ [なてしこの]
/

まつにふくーかせのしたはのーあきのつゆ
またかけうすきーひぐらしのこゑ

【大永三年月並千三百韻】 / □□ [しくれ
のあめ] / 月並千三百韻 / 大永 3(1523) 年
10 月 23 日

ふるさとのあき
古里の秋

かたみ
→ 形見

とへはなみたのーふるさとのあき
つきをのみーこころみしよのーかたみにて

【大永三年月並千三百韻】 / □□ [うめか
かや] / 月並千三百韻 / 大永 3(1523) 年 2
月 23 日

いつかへりこむーふるさとのあき
わすれしのーつきのみひとのーかたみにて

【新撰菟玖波集 / 実隆本】 / 恋下 / 明応
4(1495) 年 9 月 26 日

みねのあきかぜ
峰の秋風

かりなく
→ 雁鳴く

つきさやかなるーみねのあきかせ
かきつらねーみたれぬくもにーかりなきて

【天文廿四年梅千句】 / 何木 [つみそへよ]
/ 天文 24(1555) 年正月 7 日

たもとふきすくーみねのあきかせ
さよころもーよさむのつきにーかりなきて

【壁草 / 大阪天満宮文庫本】 / 秋 / 永正
2(1505) 年 8 月 23 日以後同 3 年 3 月以前

よわのあきかぜ
夜半の秋風

くさまくら
→ 草枕

すからにさひしーよはのあきかせ
あくるまのーはなのにおそきーくさまくら

【宮島千句】／山何〔ことのはや〕／天文
20(1551)年5月9日～11日

すすしさおくる一よはのあきかせ
くさまくら一しきもさためぬ一いろにして

【五吟一日千句】／何舟〔はなをさへ〕／
天正9(1581)年11月19日

あく

あきないことのお
飽きない琴の音

→まつかぜのつき
松風の月

なほゆふかけに一あかぬことのね
まつかぜの一さそははつきは一おそからし

【秋津洲千句】／何路〔まつなくを〕／天
文15(1546)年8月25日

あまたのうちに一あかぬことのね
まつかぜの一ふきすさひたる一よはのつき

【文禄年間百韻12巻】／□□〔はなのい
ろや〕／文禄4(1595)年1月30日

あけぼの

あけぼののくも
曙の雲

きぬぎぬのおもかけをしたう
→後朝の面影をしたう

なつものこらぬ一あけぼののくも
きぬぎぬの一おもかけをなほ一したひわひ

【天正年間百韻57巻】／□□〔ちりうせ
ぬ〕／天正17(1589)年4月2日

ひきすてにたる一あけぼののくも
きぬぎぬの一おもかけしたふ一さよまくら

【文禄年間百韻12巻】／□□〔うめかえ
や〕／文禄4(1595)年7月21日

あけぼののそら
曙の空

→わかれをいそぐ
別れを急ぐ

よこくものこる一あけぼののそら
うたてなど一とてものわかれ一いそくらむ

【応永年間百韻7巻】／何路〔やまみつの〕
／応永15(1408)年3月11日

うちかすみたる一あけぼののそら
いつくにと一わかれをさても一いそくらむ

【文明十四年万句52巻】／夢想〔たにみ
つの〕／文明14(1482)年7月4日～9月
14日

→きえなない
消えない

なほなかきよの一あけぼののそら
すさましく一くものひとむら一きえやらて

【難波田千句】／□□〔にしきにて〕／文
明14(1482)年10月前後

やまこそわかね一あけぼののそら
しらゆきは一かさなるみねに一きえやらて

【永正年間百韻34巻】／白何〔さみたれや〕
／千句第五／永正15(1518)年5月14日

→かねなる
鐘鳴る

いりえのつきに一あけぼののそら
やまこゆる一かりかねまかふ一かねなりて

【延宝年間百韻3巻】／□□〔おいかせの〕
／延宝2(1674)年8月14日

さくらかうへの一あけぼののそら
かすみより一よしののみたけ一かねなりて

【萱草／伊地知本】／春／文明6(1474)年
2月以前

さくらかうへの一あけぼののそら
かすみより一よしののみたけ一かねなりて

【名所句集／静嘉堂文庫本】／春／(大永
前後)

あけぼののやま
曙の山

→うぐいす
鶯

はるなりけりな一あけぼののやま
うくひすの一なかつはこその一ゆきのうち

【文明年間百韻34巻】／何船〔そめよな
ほ〕／文明14(1482)年9月20日

さくらにねぬる一あけぼののやま
うくひすの一のへのあるしの一くさまくら

【大永年間百韻14巻】／何路〔はままつ
の〕／大永4(1524)年5月1日

→なる

こよひのつきの—あけほののやま
あきさむし—ふなちいくかに—なりぬらむ

【文安雪千句】／何田〔あとそある〕／文
安 2(1445) 年 10 月 18 日

くものあとなる—あけほののやま
みしはなや—たひねのゆめに—なりぬらむ

【親当関係 2 種】／親当句集／赤木文庫本
／

→ほととぎす
時鳥

いくへかすみの—あけほののやま
とひすつる—はるのまくらの—ほととぎす

【嵯峨千句】／三字中略〔まつはなの〕／
(元龜 4) 天正元 (1573) 年正月 9 日～11 日

くものほかなる—あけほののやま
ほととぎす—ききあへぬそらに—つきおちて

【萱草／伊地知本】／夏／文明 6(1474) 年
2 月以前

→横雲

ふるさとさひし—あけほののやま
よこくもに—をちかたひとや—わかるらむ

【老葉／毛利本】／恋上／(文明 17(1485)
年 7 月 23 日頃)

かせもかすみも—あけほののやま
よこくもに—まほのふねゆく—なみのうへ

【宗長関係 8 種】／老耳／天理本／

つゆのあけぼの
露の曙

→くさまくら
草枕

いたつらふしの—つゆのあけほの
くさまくら—あきふくかせに—ゆめもみす

【成立不詳・心敬以前 1 4 巻】／何船〔ま
つかせは〕／成立時不詳

さくらかうへの—つゆのあけほの
くさまくら—はるのかりねの—すきかてに

【天文年間百韻 3 8 巻】／何人〔つきによ
る〕／天文 5(1536) 年 6 月 15 日

にわのあけぼの
庭の曙

→あきのみず
秋の水

つきはかりある—にはのあけほの
きりはれて—いけすみわたる—あきのみつ

【文安雪千句】／朝何〔ゆきさそへ〕／文
安 2(1445) 年 10 月 18 日

のわきしつけき—にはのあけほの
あきのみつ—そらにかなる—つきをみて

【文明十四年万句 5 2 巻】／何桶〔はなと
つゆ〕／文明 14(1482) 年 7 月 4 日～9 月
14 日

のべのあけぼの
野辺の曙

→うぐいすのこゑ
鶯の声

ことしともなき—のへのあけほの
うくひすの—こゑはかりして—ふかきよに

【太神宮法楽千句】／薄日〔まきのはや〕
／長享 2(1488) 年 7 月

ゆきとけそむる—のへのあけほの
うくひすの—こゑにちさとの—はるたちて

【慶長年間百韻 2 7 巻】／□□〔まつやな
ほ〕／裏白／慶長 10(1605) 年 1 月 3 日

はるのあけぼの
春の曙

→うぐいす
鶯

おくつゆふかき—はるのあけほの
うくひすの—つはさのこる—ゆきおちて

【永禄元年花千句】／□□〔みるまに〕
／永禄元 (1558) 年 3 月 23 日～25 日

いまいくかかは—はるのあけほの
うくひすの—かへるふるすや—たとるらむ

【至徳以前百韻 7 巻】／x x〔はなちりて〕
／存疑／至徳 4(1387) 年以前

こころつくしの—はるのあけほの
うくひすの—こゑにまくらを—そはたてて

【天正四年万句 7 0 巻】／何物〔きくやい
かに〕／天正 4(1576) 年 5 月 6 日～7 月
19 日

→かすむよ
霞む夜

こころにとまる一はるのあけほの
かすむよの一つきをなこりの一かりなきて

【新撰菟玖波集／実隆本】／春上／明応
4(1495)年9月26日

はなにほひくる一はるのあけほの
かすむよの一としひうすき一まとにねて

【宗祇関係2種】／心敬専順点宗祇付句／

かすむ
→霞む

よをものこさぬ一はるのあけほの
つきそなき一むかふうちにや一かすむらむ

【成立不詳・宗長以前15巻】／□□[またもなき]／成立時不詳

ふるきみやこの一はるのあけほの
ひさかたの一つきのいくよか一かすむらむ

【下草／龍谷大学本】／春／延徳2(1490)
年～3年春頃

はるはあけほの
春は曙

よこくも
→横雲

かすみはゆふへ一はるはあけほの
よこくもに一よるのうすゆき一きえやらて

【皇学館文庫本千句】／□□[ちらははな]
／永禄6(1563)年11月18日以前

いつはありとも一はるはあけほの
のこるか一ゆめをもたとる一よこくもに

【永正年間百韻34巻】／何人[みやまき
に]／永正14(1517)年3月22日

ゆきのあけほの
雪の曙

やまたかい
→山高

すきむらうすき一ゆきのあけほの
やまたかみ一よるのあらしや一よわるらむ

【難波田千句】／□□[ゆくはるに]／文
明14(1482)年10月前後

ふしにはれたる一ゆきのあけほの
つくりては一おとろくにはの一やまたかみ

【東山千句】／何何[てるつきに]／永正
15(1518)年8月10日～12日

あける

あけがたのそら
明け方の空

つきほなお
→月は猶

あめすくるよの一あけかたのそら
つきはなほ一おちてすすしき一たまくらに

【明応年間百韻22巻】／何人[ふきすて
よ]／明応7(1498)年間10月6日

いそのまらの一あけかたのそら
つきはなほ一かたふくままに一かけすみて

【大永三年月並千三百韻】／□□[はるは
た]／月並千三百韻／大永3(1523)年間
3月23日

あけはてる
明け果てる

いかなる
→如何なる

あけはつるまで一いねかてにして
おもふこと一かすはふみにも一いかならむ

【宮島千句】／白何[ゆふへより]／天文
20(1551)年5月9日～11日

あけはつるまで一ゆめはみえこす
わするなよ一わすれはせしも一いかならむ

【元龜年間百韻6巻】／何人[あきかせの]
／元龜3(1572)年7月13日

あけはなれる
明け離れる

かりがなきかわすそら
→雁が鳴き交わす空

たえたえに一をちのかはきり一あけはなれ
おりみるかりの一なきかはすそら

【称名院追善千句】／白何[かねのこゑ]
／永禄6(1563)年12月14日～18日

つきにしも一したふわかれの一あけはなれ
たのものかりの一なきかはすそら

【天正年間百韻57巻】／□□[いるそて
に]／天正18(1590)年1月7日

あけやすいつき
明けやすい月

あうきぬぎぬほうい
→逢う後朝は憂い

あけやすき一つきのゆくへの一をしまれて
まれにあふよの一きぬきぬはうし

【毛利千句】／何田 [やまとりも] ／文禄
3(1594)年5月12日～16日

あけやすき一ツきのかりふしーおきいてて
あふひとからの一きぬきぬはうし

【延宝年間百韻3巻】／□□ [おいかせの]
／延宝2(1674)年8月14日

あける
明ける

→^{かりねののべ}仮寝の野辺

うくひすのーこゑするつきやーあけぬらむ
かりねののへのーゆめのゆくすゑ

【大永三年月並千三百韻】／□□ [はると
ふく] ／月並千三百韻／大永3(1523)年1
月23日

やまさむみーいくしけれしてーあけぬらむ
かりねののへのーつきのこるそら

【弘治年間百韻8巻】／何船 [にほへうめ]
／弘治元(1556)年11月20日

あさけしずか
朝明け静か

→^{たますだれ}玉簾

あさけしづかにーかせわたるみゆ
ともしひのーかけはよふかきーたますたれ

【大永四年月並千二百韻】／□□ [わけく
らし] ／月並千二百韻／大永4(1524)年7
月23日

あさけしづかにーきぬるうくひす
たますたれーまけはそものーうちかすみ

【天文年間百韻38巻】／何路 [ほととき
す] ／天文24(1555)年4月10日

たますだれあける
玉簾あける

→^{つきのさむしろ}月のさ筵

たますたれーひまひまみえてーあくるよに
しもにかけさすーつきのさむしろ

【石山四吟千句】／玉何 [こゑやまつ] ／
天文24(1555)年8月15日～19日

たますたれーあくるまつまのーなかめして
くもりかちなるーつきのさむしろ

【永正年間百韻34巻】／何船 [あきはそ
てに] ／永正10(1513)年7月29日

ゆきのあさあけ
雪の朝明け

→^{うすがすみ}薄霞

なかめにしかしーゆきのあさあけ
ふもとまでーこしのたかねのーうすかすみ

【文明十四年万句52巻】／一字露頭 [ち
あきふる] ／文明14(1482)年7月4日～
9月14日

たつはるしるきーゆきのあさあけ
やまはまたーこそのまなるーうすかすみ

【論書4種】／宗長／

よがあける
夜が明ける

→^{つきのこる}月残る

あふちさくーやとのとくちにーよはあけて
かせふくそともーつきそのこれる

【伊予千句】／何路 [さみたれの] ／天文
6(1537)年5月22日

たひひとのーともをいさなふーよはあけて
あまのとやまのーつきそのこれる

【長祿三年千句11巻】／何舟 [しほかれ
て] ／長祿3(1459)年12月2日～5日

あさ

あさがすみ
朝霞

→^{くもにありあけのつき}雲に有明の月

たなひけはーはやきえそむるーあさかすみ
よこくもをしきーありあけのつき

【飯盛千句】／何船 [ありあけや] ／永祿
4(1561)年5月27日～29日

やまはかりーなほふるゆきのーあさかすみ
こほりはくもにーありあけのつき

【至徳以前百韻7巻】／何人 [けふいくか]
／千句第五／永徳2(1382)年1月22日

かせゆるくーふきくるのへのーあさかすみ
くもゐにのこるーありあけのつき

【文明十五年千句11巻】／何舟 [かけた
かし] ／文明15(1483)年*月*日～3月2
日

うぐいすのこゑ
→鶯の声

かはかみの一あめになるへき一あさかすみ
たにのといつる一うくひすのこゑ

【看聞日記紙背50巻】／山何〔あめはれ
て〕／応永30(1423)年5月25日

あさかすみ一ひとよのほとに一はるめきて
こころをさそふ一うくひすのこゑ

【永祿年間百韻28巻】／何人〔つきなか
ら〕／永祿5(1562)年8月11日

つきがのこゑ
→月が残る

あさかすみ一うちいつるみつに一はれそめて
ふなちをとほみ一つきそのこゑ

【文明年間百韻34巻】／何人〔きえねよ
し〕／文明14(1482)年2月2日

あさかすみ一のとかなるのに一うちいてて
たひゆくそてに一つきそのこゑ

【文明十二年千句8巻】／何人〔ひとはさ
へ〕／文明12(1480)年4月10日～*日

のこゑつきかけ
→残る月影

かりのなく一しほひのうらの一あさかすみ
なみにうかひて一のこゑつきかけ

【諸尊法紙背3巻】／旧何〔あきまてと〕
／建武4(1337)年6月29日

あさかすみ一のにもやまにも一いろはえて
ゆくそらとほし一のこゑつきかけ

【文明年間百韻34巻】／何木〔うめかか
を〕／文明15(1483)年2月19日

あさくるうぐいす
朝来る鶯

たますだれ
→玉簾

あさけしつかに一きぬるうくひす
たますたれ一まけはそもの一うちかすみ

【天文年間百韻38巻】／何路〔ほととき
す〕／天文24(1555)年4月10日

あさとあくれは一きぬるうくひす
たますたれ一ひま口のとかに一ひのさして

【永祿年間百韻28巻】／□□〔ゆきにう
め〕／永祿5(1562)年2月1日

あさけしつか
朝明け静か

たますだれ
→玉簾

あさけしつかに一かせわたるみゆ
ともしひの一かけはよふかき一たますたれ

【大永四年月並千二百韻】／□□〔わけく
らし〕／月並千二百韻／大永4(1524)年7
月23日

あさけしつかに一きぬるうくひす
たますたれ一まけはそもの一うちかすみ

【天文年間百韻38巻】／何路〔ほととき
す〕／天文24(1555)年4月10日

あさひかけ
朝日影

あまのつりぶね
→海人の釣舟

をちかたの一まつにいさよふ一あさひかけ
さしてそいつる一あまのつりぶね

【永正年間百韻34巻】／何人〔つきはな
を〕／永正2(1505)年9月13日

あさひかけ一みつにみるみる一うつろひて
ゆふしほまでの一あまのつりぶね

【宗長関係8種】／老耳／天理本／

あさぼらけ
朝ぼらけ

ありあけのつき
→有明の月

とりそなく一しもよののちの一あさぼらけ
のこりてしろき一ありあけのつき

【文明年間百韻34巻】／x x〔つきをか
せ〕／文明12(1480)年8月

かれのには一しくるるゆきの一あさぼらけ
くもまにうすき一ありあけのつき

【文明十四年万句52巻】／栗何〔あけて
みむ〕／文明14(1482)年7月4日～9月
14日

かりのなくこゑ
→雁の鳴く声

あさぼらけ一つきのよふねの一とほくきて
きけはあしまに一かりのなくこゑ

【文明十四年万句52巻】／唐何〔はな
はせ〕／文明14(1482)年7月4日～9月
14日

あきかせにーくもたちまよふーあさほらけ
たのものにちかくーかりのなくこゑ

【文明十四年万句5 2巻】／何国〔ほとと
きす〕／文明 14(1482)年 7月 4日～9月
14日

しなうわかれじ
→慕う別れ路

なかむれはーことのはもなきーあさほらけ
かとまていててーしたふわかれち

【文明十四年万句5 2巻】／何田〔ゆくみ
つの〕／文明 14(1482)年 7月 4日～9月
14日

いととさへーこころうかるるーあさほらけ
たもとをひかへーしたふわかれち

【天正四年万句7 0巻】／何路〔ちりとの
み〕／天正 4(1576)年 5月 6日～7月 19日

あまのつりぶね
→海人の釣舟

つきはなほーやすらふはるのーあさほらけ
うらかくれゆくーあまのつりぶね

【葉守千句】／何人〔われもとて〕／長享
元(1487)年 10月 9日<～11日>

わすれめやーなにはのゆふへーあさほらけ
なとまよふらむーあまのつりぶね

【園塵第一／統群書類従本】／雑／長享 2
年

かえるかりがね
→帰る雁

かすみさへーいろつくはなのーあさほらけ
かすはいくつそーかへるかりかね

【看聞日記紙背5 0巻】／山河〔ちよもみ
む〕／応永 19(1412)年 1月 14日

あさほらけーかすみをわけてーふくかせに
をふねいつれはーかへるかりかね

【園塵第三／統群書類従本】／春／文亀元
(1501)年 3月 18日

なにに曇とえよう
→何に曇えよう

なにはかたーおほろのつきのーあさほらけ
みやこのけしきーなににたとへむ

【応永年間百韻7巻】／山河〔ゆきはけふ〕
／応永 30(1423)年 11月 13日

うすきりにーうかへるふねのーあさほらけ
あきのあはれをーなににたとへむ

【論書4種】／宗長／

あさまたき
朝まだき

みちのはるけさ
→道の遥けさ

きえぬるかーしもうすくもるーあさまたき
おきいててゆくーみちのはるけさ

【河越千句】／薄何〔はるもきて〕／文明
2(1470)年 正月 10～12日

いちのともーいそくやあきのーあさまたき
きりのへたてのーみちのはるけさ

【元和年間百韻2 4巻】／□□〔としとし
に〕／元和 6(1620)年 12月 5日

あした
朝

はるかぜがゆるい
→春風が緩い

よもはなにーいこまのやまのーあしたかな
はるかぜゆるくーわたるなにはえ

【寛文年間百韻2 2巻】／□□〔よもはな
に〕／寛文 12(1672)年 3月 16日

はなのかにーゆきものこれるーあしたかな
はるかぜゆるくーかすむとほやま

【園塵第四／早稲田大学本】／春／永正 6、7
年

かぜとあさがすみ
風と朝霞

いつるひかげ
→出る日影

あさかすみーふきとくかせのーなほさえて
いつるひかけのーとりのさへつり

【享徳二年千句】／何木〔はきにつゆ〕／
享徳 2(1453)年 8月 11日～13日

かせたえてーはるのよしるしーあさかすみ
いつるひかけのーおそきやまのは

【天正四年万句7 0巻】／三字中略〔かせ
たえて〕／天正 4(1576)年 5月 6日～7月
19日

けさのはつゆき
今朝の初雪

→^{きえきえる}冴え冴える

ふるきいほりの一けさのはつゆき
おきみつつ一しはたくよはの一さえさえて

【寛正年間百韻 20 卷】／何人 [けふこす
は]／寛正 3(1462) 年 2 月 27 日

むらむらのこる一けさのはつゆき
ふきたゆむ一かせもしはしは一さえさえて

【天文年間百韻 38 卷】／夢想 [ちりてな
ほ]／天文 10(1541) 年 3 月

→^{うずみび}埋火

やまのはまての一けさのはつゆき
うつみひに一よるのあらしや一かへるらむ

【下草／東山御文庫本】／冬／明応 5(1496)
年 11 月 18 日

ふゆともしらし一けさのはつゆき
うつみひに一さむさわすれし一とをあけて

【園塵第四／早稲田大学本】／冬／永正 6、7
年

ゆきのあさあけ
雪の朝明け

→^{うすがすみ}薄霞

なかめにしかし一ゆきのあさあけ
ふもとまで一こしのたかねの一うすかすみ

【文明十四年万句 5 2 卷】／一字露頭 [ち
あきふる]／文明 14(1482) 年 7 月 4 日～
9 月 14 日

たつはるしるき一ゆきのあさあけ
やまはまた一こそのまなる一うすかすみ

【論書 4 種】／宗長／

あさがお

あきがおのいろ
朝顔の色

→^{のちきする}野分する

はかなさみする一あさかほのいろ
ひきかこふ一まかきたわわに一のわきして

【慶長年間百韻 2 7 卷】／□□ [ひめおき
し]／慶長 4(1599) 年 3 月 25 日

しはしはかりの一あさかほのいろ
たけなひく一そのふのうちも一のわきして

【慶長年間百韻 2 7 卷】／□□ [したもえ
に]／慶長 6(1601) 年 1 月 29 日

あきがおのはな
朝顔の花

→^{まつむしのこゑ}松虫の声

あさかほの一はなに□□□の一うちみたれ
すすきかもとは一まつむしのこゑ

【永禄年間百韻 2 8 卷】／□□ [ゆきにう
め]／永禄 5(1562) 年 2 月 1 日

あさかほの一はなをみるから一なみたおち
つひにはかれむ一まつむしのこゑ

【文明十四年万句 5 2 卷】／何路 [あさう
みに]／文明 14(1482) 年 7 月 4 日～9 月
14 日

しほむあきがお
萎む朝顔

→^{ひとみみる}人も見る

まかきのもとに一しほむあさかほ
あきのひに一にたるあはれを一ひとみよ

【成立不詳・宗長以前 1 5 卷】／□□ [ま
たもなき]／成立時不詳

あきよりしもに一しほむあさかほ
てなれぬる一あふきのうへを一ひとみよ

【集百句之連歌／天理本】／集百句之連歌
／不明

そのあきがお
園の朝顔

→^{ひかりさえ隔たる}光りさえ隔たる

うつろひやらぬ一そのあさかほ
ひかりさへ一かこふあたりは一へたたりて

【元和年間百韻 2 4 卷】／□□ [そらにみ
つ]／元和 8(1622) 年 10 月 19 日

さきそめけりな一そのあさかほ
ひかりさへ一きりのまかきに一へたたりて

【元和年間百韻 2 4 卷】／□□ [まつふく
や]／元和 8(1622) 年 10 月 29 日

あさの

あさのさころも
麻の狭衣→^{やまがっ}山賤たけのはわくる—あさのさころも
やまかつの—つまきのはやし—ふゆかれて

【那智竈／北野天満宮本】／永正十二年／

うつつちたかき—あさのさころも
やまかつの—そはのふるみち—あとみえて

【論書4種】／宗教／

あさのごろも

あさごろうつ
麻衣打つ→^{ひとはといこない}人は訪い来ないうらみをも—うちそへかまし—あさごころも
あさましきまで—ひととはとひこす【成立不詳・宗祇以前15巻】／山何〔め
つらしき〕／成立時不詳あさごころも—うつつなるこゑの—ふくるよに
かはるころか—ひととはとひこす【文明十四年万句52巻】／何緑〔あさか
はや〕／文明14(1482)年7月4日～9
14日

あし

あしびたくかけ
葦火焚く影→^{とふほたる}飛ぶ螢おなしみなとの—あしびたくかけ
うちみたれ—くるるかたより—とふほたる【天正年間百韻57巻】／山何〔あをやき
の〕／天正3(1575)年2月2日はなれこしまに—あしびたくかけ
とふほたる—ゆくかたもなく—さよふけて【壁草／大阪天満宮文庫本】／夏／永正
2(1505)年8月23日以後同3年3月以前

あじけない

あじけないよ
味気ない世→^{たのみおく}頼み置くわかきもしらす—あちきなよや
あととへと—たのめおきても—いかならむ【難波田千句】／□□〔みつのおもに〕／
文明14(1482)年10月前後なれこしとしも—あちきなよや
しかはかり—たのめおきても—わするらむ【大永四年月並千二百韻】／□□〔うくひ
すの〕／月並千二百韻／大永4(1524)年2
月23日

あたらしい

にいたまくら
新手枕→^{はじかわす}恥交わすにひたまくらは—ゆめかうつつか
はちかはす—なかこそちは—しのはれめ【伊予千句】／御何〔すすしきは〕／天文
6(1537)年5月22日にひたまくらは—あくるたひたひ
はちかはす—ころふかさを—うらみわひ【五吟一日千句】／三字中略〔くもらさぬ〕
／天正9(1581)年11月19日

あだ

あだとかかりくる
徒と掛かり来る→^{たまのおのすえ}玉の緒の末あたなりと—おもひなからも—かかりきて
いのらはちよも—たまのをのすゑ【天文年間百韻38巻】／山何〔つきやけ
さ〕／天文21(1552)年7月26日ちかひたた—あたしよなから—かかりきて
ひとひひとひの—たまのをのすゑ【弘治年間百韻8巻】／何人〔ときはなる〕
／弘治3(1557)年8月28日

げにもあだしむ
げにも徒しむ→^{ももとせ}百年こてふのとへーけにもあだしみ
ももとせもーすくれはかりのーいのちにて【看聞日記紙背50巻】／何路[うのはな
の]／応永30(1423)年4月4日こてふのとへーけにもあだしみ
ももとせもーちかつくよはひーおもはす□【看聞日記紙背50巻】／何船[ゆきにみ
て]／応永32(1426)年11月25日

あと

あおげのはなのあと
青葉の花の後→^{かかふるふちなみ}掛かる藤浪まつならてーあをはのゆきやーはなのあと
こときのかたにーかかふるふちなみ【看聞日記紙背50巻】／山何[かせやく
も]／応永26(1419)年10月25日をしめともーあをはになりぬーはなのあと
まつにことさらーかかふるふちなみ【看聞日記紙背50巻】／山何[あつきな
ほ]／応永32(1425)年間6月25日あとをだにとう
後をだに訪う→^{ゆきとはなのかけ}雪と花の陰またれしものをーあとをたにとへ
やまさとのーゆきをかきりのーはなのかけ【成立不詳・心敬以前14巻】／何船[は
るはまた]／成立時不詳あすやはあらむーあとをたにとへ
ゆきそふるーそれもきえなむーはなのかけ【長享年間百韻6巻】／何木[わかみつの]
／長享2(1488)年1月1日あめすぎたあとのしずけさ
雨過ぎた後の静けさ→^{やまのは}山の端あめふりはるるーあとのしつけさ
きえやらてーくもはかせまつーやまのはに【永原千句】／何船[はるのそらは]／明
応9(1500)年7月17日さみたれすくるーあとのしつけさ
くもきえてーつきたちのほるーやまのはに

【下草/金子本】／雑上/延徳4(1492)年頃

いにしへのあと
古の後→^{なる}なるたたみつくきのーいにしへのあと
をかのへのーみちやのなかにーなりぬらむ【文安年間百韻9巻】／何路[つききよし]
／文安4(1447)年8月15日かすむはかりのーいにしへのあと
いつのちりーつもりてやまとーなりぬらむ【園塵第一/統群書類従本】／雑/長享2
年うしろのやま
後ろの山→^{みなみはのどか}南は長閑うしろのやまのーかせのはけしき
たひのそらーみなみにゆけはーのとかにて【園塵第四/早稲田大学本】／雑下/永正
6、7年うしろのやまのーあらしこからし
ふゆのひもーみねのみなみはーのとかにて

【宗長関係8種】／老耳/天理本/

きぬぎぬのあと
後朝の後→^{かたみ}形見ひとりうちぬるーきぬぎぬのあと
なみたのみーひかたきそてのーかたみにて【紹巴亡父追善千句】／二字反音[かけた
かき]／天文24(1555)年3月26日〜晦日おもかけとまれーきぬぎぬのあと
たまくらをーおのかものなるーかたみにて【集百句之連歌/天理本】／集百句之連歌
／不明なみたにむかふーきぬぎぬのあと
なくさめぬーものからつきをーかたみにて

【老葉／吉川本】／恋下／文明 13(1481) 年
夏頃

くもどりのあと
雲鳥の跡

あやおるみず
→綾織る水

ゆくかたきゆるーくもどりのあと
かけあをくーあやおるみつのーかすむひに

【天正四年万句 70 巻】／何物 [きくやい
かに] ／天正 4(1576) 年 5 月 6 日～7 月
19 日

かへるはいつこーくもどりのあと
かすみつーあやおるみつのーしろきのに

【老葉／吉川本】／春／文明 13(1481) 年
夏頃

さみだれのあと
五月雨の後

のきばかたむく
→軒端傾く

なみはなきぬるーさみだれのあと
あしのやのーのきはまはらにーかたふきて

【寛永年間百韻 15 巻】／□□ [しつけさ
の] ／裏白／寛永 10(1633) 年 1 月 3 日

あやめなかるーさみだれのあと
ふるさとのーのきはにはまてーかたふきて

【園塵第二／続群書類従本】／雑／明応
4(1495) 年早春

のちのよのみち
後の世の道

やまとうた
→大和歌

いかさまならむーのちのよのみち
かすかすにーかはりもてきぬーやまとうた

【成立不詳・心敬以前 14 巻】／何船 [ち
りしえぬ] ／成立時不詳

くらきそうらみーのちのよのみち
たとたとしーこれよりさきのーやまとうた

【宗砌関係 9 種】／宗砌句／静嘉堂文庫本 b
／

のわきのあと
野分の後

むしのこゑ
→虫の聲

のわきのあとのーまつのつれなさ
なきたゆるーなかにゆふへのーむしのこゑ

【平松文庫本千句】／□□ [なきてたつ]
／

のわきのあとのーくれわたるには
ほのかにもーなきこそいつれーむしのこゑ

【慶長年間百韻 27 巻】／□□ [はるさめ
も] ／慶長 9(1604) 年 10 月 6 日

はるよりのち
春より後

ながきび
→長き日

はるよりのちのーうくひすのこゑ
おくらすもーつれつれはなほーなかきひに

【嵯峨千句】／花之何 [うめかかは] ／(元
龜 4) 天正元 (1573) 年正月 9 日～11 日

はるよりのちのーとももこそあれ
たかさこやーむかしいまはのーなかきひに

【天正四年万句 70 巻】／薄何 [はつかり
の] ／天正 4(1576) 年 5 月 6 日～7 月 19 日

ふでのあと
筆の跡

かすむあけのそほぶね
→霞む朱のそほ舟

たをりくるーさくらのみかはーふてのあと
かすみにくたすーあけのそほふね

【天文廿四年梅千句】／何船 [つきにうめ]
／天文 24(1555) 年正月 7 日

くらへみよーこすゑのはなにーふてのあと
かすむみきりのーあけのそほふね

【毛利千句】／白何 [うすゆきの] ／文禄
3(1594) 年 5 月 12 日～16 日

むらさめのはれゆくあとはあらし
村雨の晴れゆく後は嵐

ひにわたるふねのさむき
→日に渡る舟の寒さ

むらさめのーはれゆくあとはーふくあらし
ゆふひにわたるーふねのさむけさ

【大永年間百韻 14 巻】／何人 [ちあきを
も] ／大永 5(1525) 年 9 月 21 日

むらさめのーはれゆくあとはーゆふあらし
いりひをわたるーふねのさむけさ

【宗長関係 8 種】／老耳／天理本／

ゆうだちのあと
夕立の後

→急ぐ

ひはまたのこる—ゆふたちのあと
こぬあきを—ひくらしのねや—いそくらむ

【慶長年間百韻 27 卷】／□□ [よつのと
き] / 裏白 / 慶長 18(1613) 年 1 月 3 日

いつるひきよき—ゆふたちのあと
□□□をも—くれぬ□□とや—いそくらむ

【天正四年万句 70 卷】／山何 [みかつき
の] / 天正 4(1576) 年 5 月 6 日～7 月 19 日

→雲の途絶えにほのめく

ひととほりせし—ゆふたちのあと
ひのかけは—くものとたえに—ほのめきて

【嵯峨千句】／何人 [さきてちる] / (元
龜 4) 天正元 (1573) 年正月 9 日～11 日

ふりめぐりたる—ゆふたちのあと
むらくもの—たえまのひかり—ほのめきて

【慶長年間百韻 27 卷】／□□ [はるにま
つ] / 裏白 / 慶長 6(1601) 年 1 月 3 日

わかれじのあと
別れ路の跡→おもかげ
面影

あくかれいつる—わかれちのあと
おもかけに—わかたましひや—つれぬらむ

【難波田千句】／□□ [あけほのを] / 文
明 14(1482) 年 10 月前後

くもこそかたみ—わかれちのあと
ゆふへには—あめともなれる—おもかけに

【難波田千句】／□□ [にしきにて] / 文
明 14(1482) 年 10 月前後

あま

あまおぶね
海人小舟→あらいそのなみ
荒磯の浪

うらかけて—はるかによるの—あまをふね
もしほひさひし—あらいそのなみ

【永正年間百韻 34 卷】／何船 [かへるか
り] / 永正 16(1519) 年 2 月 19 日

あけくれを—うきてのみこそ—あまをふね
よるとかへると—あらいそのなみ

【大永年間百韻 14 卷】／山何 [いやまし
に] / 大永 5(1525) 年 1 月 17 日

→わづかにみえるおきのしま
わづかに見えるおきのしま

なみのうへに—なかきひくらす—あまをふね
わづかにみゆる—おきつしまやま

【池田千句】／何人 [はるのはな] / 永正
7(1510) 年春以前～永正 5 年春

ゆふくれは—つりにといつる—あまをふね
わづかにみゆる—おきのとほしま

【嘉吉年間百韻 1 卷】／何木 [たけのはに]
/ 嘉吉 3(1443) 年 10 月 23 日

あまのつりぶね
海人の釣舟→あさほらけ
朝ぼらけ

はなれこしまに—あまのつりぶね
うなはらや—くもはれたる—あさほらけ

【聖廟千句】／何船 [ねにそなく] / 明応
3(1494) 年 2 月 10 日～12 日

うらつたひする—あまのつりぶね
やまかすむ—みきはのまつの—あさほらけ

【天正四年万句 70 卷】／何衣 [うのはな
の] / 天正 4(1576) 年 5 月 6 日～7 月 19 日

→なみにしくれる
浪に時雨れる

おきにかかれる—あまのつりぶね
そことしも—なみにいりひや—しくるらむ

【宮島千句】／何木 [ほかには] / 天文
20(1551) 年 5 月 9 日～11 日

ゆふへにいてし—あまのつりぶね
たかさとの—うらわのなみに—しくるらむ

【那智筆 / 北野天満宮本】 / 永正十四年 /

→まつたてる
松立てる

かつかつうかふ—あまのつりぶね
まつたてる—いそのかくれや—さとならむ

【成立不詳・宗養以前 8 卷】／山何 [ひと
こゑや] / 成立時不詳

はるともしらし—あまのつりぶね
まつたてる—かけにふちえの—うらさひて

【老葉 / 毛利本】 / 雑上 / (文明 17(1485)
年 7 月 23 日頃)

あまた

かずあまた
数あまた

→いかばかり

かすをあまたの—ふみもはかなし
いかばかり—さてもあたる—ひとならむ

【永正十花千句】／唐何 [いろきえぬ] ／
永正 13(1516) 年 3 月 11 日～14 日

かすをあまたの—おもひくるしも
をくるまの—しちのはしかき—いかばかり

【天正四年万句 70 卷】／何田 [しかのね
は] ／天正 4(1576) 年 5 月 6 日～7 月 19 日

あまひこ

あまひこのこえ
天彦の声

→はとぎす
時鳥

いふことおくる—あまひこのこえ
ほととぎす—なくとつくるを—なへてきけ

【宝徳四年千句】／何鳥 [あくるよは] ／
宝徳 4(1452) 年 3 月 12 日

たれかこたへそ—あまひこのこえ
ほととぎす—またきくもりを—すきやらて

【享徳二年千句】／何木 [はきにつゆ] ／
享徳 2(1453) 年 8 月 11 日～13 日

あめ

あめかすむくれ
雨霞む暮れ

→はるかぜ
春風

まさるみきはや—あめかすむくれ
はるかぜの—ふねのはつきも—くちけらし

【天正年間百韻 5 7 卷】／何船 [あをやき
は] ／天正 13(1585) 年 1 月 28 日

をのへのくもに—あめかすむくれ
はるかぜの—よわるにとほき—かねのこえ

【永正年間百韻 1 卷】／何人 [こゑとほく] ／
永正元 (1505) 年 12 月 10 日

→はとぎす
時鳥

ふるのをとほみ—あめかすむくれ
さたかにも—いつかはなかも—ほととぎす

【永原千句】／何木 [おとそなき] ／明応
9(1500) 年 7 月 17 日

ふちかをりつつ—あめかすむくれ
はつこゑや—やよひなからの—ほととぎす

【平松文庫本千句】／□□ [おちはして] ／

あめがふる
雨がふる

→みわがさき
三輪崎

やとりもかなや—あめそふりくる
うちくもり—いりひをすゑに—みわかさき

【文明十四年万句 5 2 卷】／二字反音 [は
なはみな] ／文明 14(1482) 年 7 月 4 日～
9 月 14 日

はつせのかはへ—あめそふりくる
みわかさき—おつるあらしの—のをすきて

【専順関係 2 種】／雑／応仁元 (1467) 年
5 月 10 日

あめすぎたあとのしずけさ
雨過ぎた後の静けさ

→やまのは
山の端

あめふりはるる—あとのしつけさ
きえやらて—くもはかせまつ—やまのはに

【永原千句】／何船 [はるのそらは] ／明
応 9(1500) 年 7 月 17 日

さみたれすくる—あとのしつけさ
くもきえて—つきたちのほる—やまのはに

【下草／金子本】／雑上／延徳 4(1492) 年頃

あめのうち
雨の内

→やまほととぎす
山時鳥

つれつれは—なほまさりゆく—あめのうち
おとつれすてし—やまほととぎす

【元和年間百韻 2 4 卷】／□□ [としとし
に] ／元和 6(1620) 年 12 月 5 日

しつかにと—うちかたらへる—あめのうち
くもぬるまとの—やまほととぎす

【宗長関係 8 種】／老耳／天理本／

あめのくれ
雨の暮れ

やまほととぎす
→山時鳥

あめのくれーあしたのくもにーうかれきて
はつねをきくやーやまほととぎす

【天正四年万句70巻】／白何〔はつはる
や〕／天正4(1576)年5月6日~7月19日

われそすむーみねのいほりのーあめのくれ
やまほととぎすーおとつれてゆけ

【新撰菟玖波集／実隆本】／夏／明応
4(1495)年9月26日

あめのこるそら
雨残る空

ほととぎす
→時鳥

てるひもなつのーあめのこるそら
ほととぎすーゆくゆくわかぬーこゑききて

【永祿石山千句】／三字中略〔こすゑまで〕
／永祿7(1564)年5月12日

やまはみとりにーあめのこるそら
ほととぎすーあしたのくもにーなきすてて

【合点之句／神宮文庫本】／夏／天文
9(1541)年12月25日

あめののとけさ
雨の長閑さ

いずこにかすむ
→何処に霞む

にはにけさふるーあめののとけさ
まとすくるーかせはいつくにーかすむらむ

【長享年間百韻6巻】／何木〔わかみつの〕
／長享2(1488)年1月1日

みれともみえすーあめののとけさ
いつこにかーありあけのつきのーかすむらむ

【享祿年間百韻8巻】／白何〔あさみとり〕
／享祿3(1530)年3月2日

あめをまつ
雨を待つ

とますぎるほととぎす
→時過ぎる時鳥

みなつきのそらのーあめやまつらむ
ときすきてーやすらふこゑのーほととぎす

【大永年間百韻14巻】／何人〔ちあきを
も〕／大永5(1525)年9月21日

みなつきのそらのーあめやまつらむ
ときすくるーなこりやすらぬーほととぎす

【宗長関係8種】／老耳／天理本／

こころをつくすあめのよる
心を尽す雨の夜

ながおいたほととぎす
→身が老いた時鳥

ねられぬこころーつくすあめのよ
まつうちにーみもおいぬへきーほととぎす

【心敬関係10種】／芝草内連歌合／天理本
／

まつにこころをーつくすあめのよ
つれなきにーみもおいぬへきーほととぎす

【心敬関係10種】／吾妻辺云捨／天理本
／

ながあめのそら
長雨の空

ほととぎす
→時鳥

ふりみふらすみーなかあめのそら
ほととぎすーつきになくよやーいつならむ

【永正年間百韻34巻】／山何〔とふひと
や〕／永正18(1521)年8月

なほはれかたきーなかあめのそら
ほととぎすーわかうたかひにーききわひて

【下草／金子本】／夏／延徳4(1492)年頃

やよひのあめ
弥生の雨

ほととぎす
→時鳥

やよひのあめのーゆふくれのやま
なつまたてーなくをきかはやーほととぎす

【享徳二年千句】／手何〔なほみよと〕／
享徳2(1453)年8月11日~13日

やよひのあめのーつきくもるそら
いまよりやーしのひねならしーほととぎす

【天文年間百韻38巻】／山何〔はたと
ふ〕／天文6(1537)年5月10日

あやめぐさ

あやめぐさ
菖蒲草やまほととぎす
→山時鳥

をりにふれ一かりにしあとの一あやめぐさ
かけたにとめよ一やまほととぎす

【宮島千句】／何船 [ちかしてふ] ／天文
20(1551)年5月9日～11日

ふくやとの一のきはにほふ一あやめぐさ
なほねをそへよ一やまほととぎす

【新撰菟玖波集／実隆本】／夏／明応
4(1495)年9月26日

あゆ

みずのさびあゆ
水の錆鮎やなぎかげ
→柳陰

つきにひかるや一みつのさびあゆ
えたかはす一もみちはいかに一やなぎかけ

【応永年間百韻7巻】／□□ [x x はせて]
／応永24(1417)年3月16日

みしふかくれの一みつのさびあゆ
ちるとみて一そてにいろつく一やなぎかけ

【文安年間百韻9巻】／何船 [ときはなる]
／文安元(1444)年10月12日

あらし

あらしふくやま
嵐吹く山おおいがわかつむ
→大井川霞む

のとかにすめは一あらしふくやま
おほるかは一かすめるみつの一たえたえに

【享祿年間百韻8巻】／何人 [からころも]
／享祿3(1530)年1月28日

はなにとゆけは一あらしふくやま
おほるかは一かすみのそこに一おとはして

【文安頃千句4巻】／何路 [やへひとへ]
／

むらさめのはれゆくあとにはあらし
村雨の晴れゆく後は嵐ひにわたるふねのさむさ
→日に渡る舟の寒さ

むらさめの一はれゆくあとは一ふくあらし
ゆふひにわたる一ふねのさむさ

【大永年間百韻14巻】／何人 [ちあきを
も] ／大永5(1525)年9月21日

むらさめの一はれゆくあとは一ゆふあらし
いりひをわたる一ふねのさむさ

【宗長関係8種】／老耳／天理本／

ゆうあらし
夕嵐いりあいのかね
→入相の鐘

やまてらの一かへさをおくる一ゆふあらし
ひとりのみきく一いりあひのかね

【大永四年月並千二百韻】／□□ [ゆふた
ちは] ／月並千二百韻／大永4(1524)年6
月23日

ゆふあらし一もよほすやまの一むらくもに
つねよりさひし一いりあひのかね

【成立不詳・宗長以前15巻】／初何 [た
てなから] ／成立時不詳

あらそう

こころあらそうた
心争う歌うぐいすのこえこえ
→鶯の声々

こころあらそふ一うたのくちくち
はるされは一うくひすかはつ一こゑこゑに

【初瀬千句】／何衣 [しけるとも] ／享徳
元・2(1452)年、4月

こころあらそふ一うたのかちまけ
こゑこゑに一なくうくひすを一こにいれて

【文明十四年万句52巻】／栗何 [あけて
みむ] ／文明14(1482)年7月4日～9月
14日

なみだあらそうこえ
涙争う声かりなく
→雁鳴く

なみたあらそふ一さをしかのこゑ
つきにいま一さそはれわたる一かりなきて

【明応年間百韻 2 2 巻】／何人〔としにあ
りて〕／明応 9(1500) 年 7 月 7 日

なみたあらそふ一むしのこゑこゑ
こはきはら一うつろふゆふへ一かりなきて

【大永三年月並千三百韻】／□□〔はるを
まつ〕／月並千三百韻／大永 3(1523) 年 11
月 23 日

あらまし

あらまし
あらまし

はつほとときす
→初時鳥

あらましの一すゑはひとつも一ことたられて
まつよそあくの一はつほとときす

【宝徳四年千句】／何衣〔はなもはも〕／
宝徳 4(1452) 年 3 月 12 日

あらましの一ほとこそさそへ一やまのおく
はつほとときす一すくるむらさめ

【応仁年間百韻 6 巻】／x x〔ゆきのをる〕
／応仁 2(1469) 年 12 月

あらわれる

あらわす
現す

うぐいすのこゑ
→鶯の声

うめはまつ一つほみにはるを一あらはして
むすほほれたる一うくひすのこゑ

【永禄年間百韻 2 8 巻】／懐旧〔はつゆき
の〕／永禄 6(1563) 年 11 月 18 日

こころのみ一さまさまうたに一あらはして
かすむのやまの一うくひすのこゑ

【那智筆／北野天満宮本】／永正十二年／

あらわれる
現れる

そののうめのか
→園の梅の香

したもえの一くさのはつかに一あらはれて
ふゆかれわかぬ一そののうめかか

【明応年間百韻 2 2 巻】／何人〔あきのい
ろに〕／明応 9(1500) 年 7 月 11 日

さきそめし一はなはしけきに一あらはれて
にほひえならぬ一そののうめかか

【元和年間百韻 2 4 巻】／□□〔よかれせ
ぬ〕／元和 6(1620) 年 10 月 8 日

はなのこすえにあらわれる
花の梢に現れる

ふるてらのみち
→古寺の道

くもまより一はなのこすゑの一あらはれて
まつにふちさく一ふるてらのみち

【永禄年間百韻 2 8 巻】／何路〔きえしそ
の〕／永禄 7(1564) 年 1 月 22 日

すきむらの一こすゑははなに一あらはれて
おくにそつつく一ふるてらのみち

【天正年間百韻 5 7 巻】／□□〔ことのは
も〕／天正 13(1585) 年 1 月 4 日

ありあけ

ありあけ
有明

ころもうつつこゑ
→衣打つ声

かせなから一まつのひまもる一ありあけに
ほのほのをちのころもうつつこゑ

【兼守千句】／山何〔みねとほき〕／長享
元(1487) 年 10 月 9 日<~11 日>

よもすから一つきはこのころ一ありあけに
たたたまらのころもうつつこゑ

【明応年間百韻 2 2 巻】／何路〔こそたち
し〕／明応 6(1497) 年 1 月 1 日

かえるかりがね
→帰る雁

ありあけの一いるやまのはも一おほろにて
こゑもかすかに一かへるかりかね

【看聞日記紙背 5 0 巻】／何人〔まつかえ
に〕／応永 29(1422) 年 3 月 28 日

ありあけの一なこりやなほも一うすかすみ
こしちとはよく一かへるかりかね

【看聞日記紙背 5 0 巻】／山何〔あめはれ
て〕／応永 30(1423) 年 5 月 25 日

つれないなかににしきぎ
→連れなない仲に錦木

ありあけの一つきのかすむは—ならひにて
つれなきなかに—たつるにしきき

【看聞日記紙背50巻】／唐何 [いやとし
に]／応永31(1424)年1月25日

ありあけの—くもににほひて—おほろよに
つれなきなかに—そふはにしきき

【看聞日記紙背50巻】／山何 [せくみつ
の]／応永31(1424)年6月25日

よがかいみち
→夜深い道

ありあけの—□□□□□を—おきいてて
はなにたひたつ—みちそよふかき

【文安年間百韻9巻】／何人 [なもしらぬ]
／文安4(1447)年8月19日

ありあけの一つきのころのに—むしなきて
こころやすらふ—みちそよふかき

【文明年間百韻34巻】／何人 [あきかせ
も]／文明17(1485)年8月30日

ありあけのかげ
有明の影

あきのよ
→秋の夜

あらしのあとに—ありあけのかげ
きしより—かねさやかなる—あきのよに

【永原千句】／千何 [ひととせは]／明応
9(1500)年7月17日

ふねゆくつきや—ありあけのかげ
すすしさを—ともなふまの—あきのよに

【弘治三年春雪千句】／何人 [ゆきにうめ]
／弘治3(1557)年正月7日～9日

ありあけのそら
有明の空

あきのかぜ
→秋の風

つきもなこりの—ありあけのそら
いつまでか—ききてうらみむ—あきのかせ

【表佐千句】／薄何 [ゆきてみむ]／文明
8(1476)年3月6日<～8日>

さたかにのこる—ありあけのそら
なほふくや—よふねのすゑの—あきのかせ

【文明年間百韻34巻】／□□ [したつゆ
は]／文明12(1480)年7月4日

くさまくら
→草枕

ねぬよほとふる—ありあけのそら
くさまくら—うかれとあきや—ふけぬらむ

【文明年間百韻34巻】／x x [つきをか
せ]／文明12(1480)年8月

つきにねしのは—ありあけのそら
くさまくら—いくよともなき—あきくれて

【那智箒／北野天満宮本】／永正十三年／

ありあけのつき
有明の月

ういものはない
→憂いものはない

ありあけの—つれなきつきも—すめるよに
なほあきはかり—うきものはなし

【太神宮法楽千句】／山何 [のほはなに]
／長享2(1488)年7月

ありあけの一つきもなこりと—かへるかり
こひよりほかに—うきものはなし

【看聞日記紙背50巻】／山何 [あつさな
ほ]／応永32(1425)年閏6月25日

かえるかりがね
→帰る雁

ありあけの一つきやあらぬと—かすむよに
きけはくもゐを—かへるかりかね

【永享年間百韻4巻】／山何 [おいまつは]
／万句巻頭／永享9(1437)年3月21日

ありあけの一つきはかすみに—ほのみえて
ゆめもまくらに—かへるかりかね

【園塵第三／統群書類従本】／春／文亀元
(1501)年3月18日

かりのこえ
→雁の声

かすみなからも—ありあけのつき
よもすから—かへるやとほき—かりのこゑ

【文明十二年千句8巻】／何木 [なもしる
し]／文明12(1480)年4月10日～*日

あかつきかたの—ありあけのつき
なかめやる—くももはつかの—かりのこゑ

【天正四年万句70巻】／玉何 [まつはら
も]／天正4(1576)年5月6日～7月19日

→時鳥ほととぎす

なかめをしたふ—ありあけのつき
ほととぎす—なきつるこゑは—とほさかり

【平松文庫本千句】／□□〔ゆきはみちの〕

／

ふるきみやこの—ありあけのつき
ほととぎす—ねさめかたらふ—よはふけて

【文明年間百韻 3 4 巻】／何路〔やまかせ
に〕／文明 15(1483) 年 3 月 2 日

→武蔵野と草枕むさしのとくさまくら

はなのくもまに—ありあけのつき
むさしのや—しのきしくさに—まくらして

【元龜二年千句】／朝何〔あたにちる〕／
元龜 2(1571) 年 3 月 5 日

たひねいくよの—ありあけのつき
むさしのや—わけもつくさぬ—くさまくら

【天正年間百韻 5 7 巻】／何垣〔ゆくそて
に〕／天正 11(1583) 年閏 1 月 1 日

→暁あかつき

みれはみにしむ—ありあけのつき
あかつきの—あらしにゆめの—さめてのち

【文明十四年万句 5 2 巻】／二字反音〔は
なはみな〕／文明 14(1482) 年 7 月 4 日～
9 月 14 日

みよとやのこる—ありあけのつき
あかつきの—かねよりのちも—よはなかし

【菟玖波集／広島大学本】／秋下／文和
5(1356) 年冬～翌年の春

→秋の雲あきのくも

いるかけいそく—ありあけのつき
ふくかせに—たかねはなるる—あきのくも

【天正四年万句 7 0 巻】／何色〔ちるはな
も〕／天正 4(1576) 年 5 月 6 日～7 月 19 日

またもあはなむ—ありあけのつき
うちやまの—あかつきさひし—あきのくも

【下草／龍谷大学本】／秋／延徳 2(1490)
年～3 年春頃

→秋更けるあきふける

ころはよさむの—ありあけのつき
さねこむと—いひしなからに—あきふけて

【弘治三年春雪千句】／何木〔はなならて〕

／弘治 3(1557) 年正月 7 日～9 日

たもとにおつる—ありあけのつき
やまもなき—のへのかりふし—あきふけて

【基佐集／静嘉堂文庫本】／雑／永正
6(1509) 年以前

→風冴えるかぜさえる

むしのねほそき—ありあけのつき
ふきとほす—かへのすきまの—かせさえて

【石山四吟千句】／三字中略〔あさかほの〕

／天文 24(1555) 年 8 月 15 日～19 日

みつのうへなる—ありあけのつき
よこのうみ—よころのあきの—かせさえて

【行助関係 4 種】／行助句集／書陵部本／

→山越えるやまこえる

つゆももらさぬ—ありあけのつき
くもはけさ—しくるあきの—やまこえて

【文明十四年万句 5 2 巻】／夢想〔そのし
なも〕／文明 14(1482) 年 7 月 4 日～9 月
14 日

たもとにかすむ—ありあけのつき
とりのこゑ—はなのほひに—やまこえて

【愚句老葉】／春／永正 17 年

おぼろにのこるありあけのつき
朧に残る有明の月

→棚無し小舟の音たななしおぶねのおと

おぼろにのこる—ありあけのつき
ほそえこく—たななしをふね—おとすみて

【心敬関係 1 0 種】／心玉集／静嘉堂文庫本

／

おぼろにのこる—ありあけのつき
はるのよの—たななしをふね—おとふけて

【論書 4 種】／宗長／

つきにありあけのそら
月に有明の空

→夜をこめる

つきにかすみの一ありあけのそら
かへるかり一おもひたつ□□一よをこめて

【成立不詳・宗祇以前15巻】／何船〔は
なそあをは〕／成立時不詳

つきはきりまに一ありあけのそら
あきちかき一をちのかはおと一よをこめて

【天文年間百韻38巻】／何船〔あさかほ
に〕／天文12(1543)年7月29日

つきはありあけ
月は有明

→時鳥

くもりしままの一つきはありあけ
ほとときす一いまひとこゑは一つれなくて

【壁草／大阪天満宮文庫本】／夏／永正
2(1505)年8月23日以後同3年3月以前

またとへかしの一つきはありあけ
ほとときす一ゆめちをすきて一さむるよに

【合点之句／神宮文庫本】／夏／天文
9(1541)年12月25日

のこるありあけ
残る有明

→朝ぼらけ

かけもすくなく一のこるありあけ
やまのはに一よこくもきゆる一あさほらけ

【文明十二年千句8巻】／一字露頭〔わか
はもて〕／文明12(1480)年4月10日～
*日

それかとはかり一のこるありあけ
あさほらけ一わけゆくかたに一むしなきて

【文明十四年万句52巻】／何船〔あきの
いろ〕／文明14(1482)年7月4日～9月
14日

ある

あるかなきか
有るか無きか

→蜻蛉の岩垣

あるかなきかの一よもきふのやと
かけろふの一いはかきかくれ一にはふりて

【長享年間百韻6巻】／何路〔あらぬなを〕
／長享2(1488)年4月5日

あるかなきかの一やまかけのみち
かけろふの一いはかきしみつ一くさしけみ

【老葉／吉川本】／雑上／文明13(1481)年
夏頃

あるかなきかの一みねのはつゆき
かけろふの一いはかきみつは一おとさえて

【園塵第一／続群書類従本】／冬／長享2
年

あるもの

→雲の上

ものおもひ一あまつかみたに一あるものを
こもるいはとそ一くものうへなる

【文明年間百韻34巻】／何船〔かへれと
て〕／文明18(1486)年3月27日

あらさらむ一くらみもひとは一あるものを
くものうへなる一つきはみまほし

【天正四年万句70巻】／何路〔ちりと
み〕／天正4(1576)年5月6日～7月19日

ただありなしのちぎり
ただ有り無しの契り

→内の形

たたありなしの一ちきりなりけり
あめつちも一うらみのうちの一かたちにて

【文明年間百韻34巻】／何路〔みるま
まに〕／文明12(1480)年8月

たたありなしの一ちきりなりけり
ひともしも一かかみのうちの一かたちにて

【老葉／吉川本】／雑上／文明13(1481)年
夏頃

ひともある
人もある

→数添う

こころかしこき一ひともこそあれ
ことのはは一すゑのよになほ一かすそひて

【永原千句】／何色〔うつろはぬ〕／明応
9(1500)年7月17日

なをききかぬ一ひともこそあれ
かなしくも一にひしまりの一かすそひて

【下草／金子本】／雑上／延徳4(1492)年頃

あわれ

あわれ
哀れ→^{さすらうみ}流離う身

いましはとーやつすかたもーあはれにて
さすらふるみのーはてししられす

【永禄元年花千句】／□□ [みねのまつ]
／永禄元(1558)年3月23日～25日

すててなほーうきよおもへはーあはれにて
さすらふるみのーほとそはかなき

【天正年間百韻57巻】／□□ [うくひす
の]／裏白／天正20(1592)年1月3日

あわれしる
哀れ知る→^{いにしへのあと}古の後

あはれしれーひとひとひとひのーわかよはひ
かへらぬみちやーいにしへのあと

【長享年間百韻6巻】／何路 [さみたれは]
／長享3(1489)年5月11日

よはたれもーつひにはのへのーあはれしれ
つくりみかきしーいにしへのあと

【大永三年月並千三百韻】／□□ [はなに
つき]／月並千三百韻／大永3(1523)年3
月23日

あわれである
哀れである→^{おぎのうわかぜ}萩の上風

つきにたにーめてしあきこそーあはれなれ
のきはにたかきーをきのうはかせ

【因幡千句】／何石 [やまはたか]／文明
7(1475)年11月26日<～28日>

あきすてにーちかくなるこそーあはれなれ
はやしのかねのーをきのうはかせ

【天正四年万句70巻】／白何 [つゆやい
ろ]／天正4(1576)年5月6日～7月19日

ちょうのあわれさ
蝶の哀れさ→^{うちかわす}打ち交わす

ほかよりきたるーてふのあはれさ
はるかぜのーふくのまにまにーうちかすみ

【住吉千句】／何人 [ゆきはれて]／大永
元(1521)年11月1日～14日

そのにひとりのーてふのあはれさ
ひとみえぬーのへのゆくへはーうちかすみ

【天文年間百韻38巻】／何人 [にほへか
つ]／天文13(1544)年1月29日

のべのあわれさ
野辺の哀れさ→^{あさほらけ}朝ぼらけ

なくやとりへのへのあはれさ
やまかすみーかりはのはるのーあさほらけ

【文安年間百韻9巻】／山何 [はなはひも]
／文安5(1448)年2月5日

のわきのあとのへのあはれさ
あさほらけーうすきりわたりーひのいてて

【園塵第一／続群書類従本】／秋／長享2
年

い

やまのいのみず
山の井の水→^{このもと}木の下

むすふはつきぬーやまのいのみつ
このもとにーひとつふたつのーこけのいほ

【成立不詳・宗長以前15巻】／花之何 [ふ
ゆのいろに]／成立時不詳

むすこけふかしーやまのいのみつ
すすしさはーきりのわかはのーこのもとに

【壁草／大阪天満宮文庫本】／夏／永正
2(1505)年8月23日以後同3年3月以前

いう

と^いい^かく^いい→^{なかたち}媒

といひかくいひーなみたもろなる
なかたちのーとかはあらしをーうらみわひ

【浜宮千句】／□□ [つきのいろと]／

といひかくいひーあはしとやする
なかたちのーへたつるかともーおもふよに

【成立不詳・宗長以前15巻】／x x [さ
みたれや]／成立時不詳

ませのうち
→ 籬の内

といひかくいひーあらましのころ
うゑたつるーあきのちくさのーませのうち

【伊勢千句】／青何 [しかそなく]／大永
2(1522)年8月4日～8日

といひかくいひーくらすならはし
あらしのみーうらむ□はなのーませのうち

【天正四年万句70巻】／何船 [とふとり
の]／天正4(1576)年5月6日～7月19日

いえ

かくれが
隠れ家

みよしののおく
→ み吉野の奥

かくれかをーなほふかかれとーふるゆきに
くもはいくへそーみよしののおく

【看聞日記紙背50巻】／何物 [かみとう
め]／応永29(1422)年2月25日

かくれかをーよのうきとてやーたつぬらむ
さとのほかなるーみよしののおく

【看聞日記紙背50巻】／何船 [ゆきにみ
て]／応永32(1426)年11月25日

かくれがのやま
隠れ家の山

うづもれる
→ 埋もれる

はてはひとりのーかくれかのやま
ふみわけしーいはのかけちのーうつもれて

【成立不詳・宗長以前15巻】／何木 [た
ますたれ]／成立時不詳

はなみかてらのーかくれかのやま
みよしのやーふかきかすみにーうつもれて

【天正四年万句70巻】／何垣 [かけすす
し]／天正4(1576)年5月6日～7月19日

すててから
→ 捨ててから

くもはいくへそーかくれかのやま
すてしよりーみはしたひくるーひともなし

【難波田千句】／□□ [うめかかの]／文
明14(1482)年10月前後

ひととひこぬーかくれかのやま
すてしよりーこのよのほかのーみをなして

【新撰菟玖波集／実隆本】／雑五／明応
4(1495)年9月26日

みよしの
→ み吉野

おくかおくなるーかくれかのやま
みよしのはーみねのかけちもーたえはてて

【太神宮法楽千句】／初何 [ほのめくは]
／長享2(1488)年7月

けふりもみえぬーかくれかのやま
みよしのはーさくらにくもるーよはのつき

【園塵第三／続群書類従本】／春／文亀元
(1501)年3月18日

かくれがはない
隠れ家はない

みよしののおく
→ み吉野の奥

たたあらましにーかくれかはなし
みよしののーまたみぬおくをーたつねはや

【看聞日記紙背50巻】／何路 [ふりかつ
け]／応永29(1422)年【B】3月15日

うきよのほかのーかくれかはなし
みよしののーおくもやはなにーとはるらむ

【看聞日記紙背50巻】／唐何 [あすはさ
け]／応永31(1424)年2月25日

やまのかくれが
山の隠れ家

なる
→ なる

むすひかへたるーやまのかくれか
のかれてやーゆめのうきよとーなりぬらむ

【紫野千句】／何木 [はにしける]／延文
2(1357)年以後-応安3年6月以前

あらましちかきーやまのかくれか
つれなきやーのちのなさけとーなりぬらむ

【天正四年万句70巻】／薄何 [やまとほ
み]／天正4(1576)年5月6日～7月19日

いおり

くさのいお
草の庵

やまほととぎす
→山時鳥

さみたれのつゆにうもるるくさのいほ
いててやきかむーやまほととぎす

【熊野千句】／山河【おとなしの】／文正
元(1466)年3月以前

ふくかせのたえまもあれなくさのいほ
くもにまきるるーやまほととぎす

【表佐千句】／何路【みなかみの】／文明
8(1476)年3月6日<~8日>

よはさのみーなけかしのそーくさのいほ
はなのあととふーやまほととぎす

【合点之句／神宮文庫本】／雑／天文
9(1541)年12月25日

しばのいお
柴の庵

いにしへのゆめ
→古の夢

しはのいほーたのむかけとやーたつぬらむ
いとふもしらぬーいにしへのゆめ

【葉守千句】／何路【しくるやと】／長享
元(1487)年10月9日<~11日>

とひくるをーいとふはかりのーしはのいほ
わすれむとするーいにしへのゆめ

【弘治三年春雪千句】／山河【はなそとも】
／弘治3(1557)年正月7日~9日

はなのちるころ
→花の散る頃

うしとみはーたれかはとはむーしはのいほ
まつふくかせにーはなのちるころ

【天文年間百韻38巻】／何路【あきよた
た】／天文12(1543)年8月19日

やまかせもーふかはふかなむーしはのいほ
ありあけのつきにーはなのちるころ

【宗祇関係2種】／心敬専順点宗祇付句／

たにのいお
谷の庵

すむみねのふるでら
→住む峰の古寺

ふくるよにーつきまちかぬるーたにのいほ
すまはやあきのーみねのふるてら

【河越千句】／二字反音【はるみても】／
文明2(1470)年正月10~12日

ちきりてもーひとはとはめやーたにのいほ
みれはつきすむーみねのふるてら

【竹林抄／新古典文学大系本】／秋／文明
8(1476)年5月頃

みねのいお
峰の庵

まつかぜのこゑ
→松風の声

みねのいほーこのはののちもーすみあかて
さひしさならふーまつかぜのこゑ

【長享年間百韻6巻】／何人【ゆきなから】
／長享2(1488)年1月22日

しつけさはーひとりかうへのーみねのいほ
ともたのむもーまつかぜのこゑ

【永正年間百韻34巻】／何路【はやみの
に】／永正12(1515)年11月10日

やまがつのいお
山賤の庵

けむりたてそえる
→煙立て添える

ひもゆふかけのーやまかつのいほ
こりかへるーましはのけふりーたてそへて

【永禄年間百韻28巻】／何船【みのこす
や】／永禄2(1559)年7月16日

かすみのおくのーやまかつのいほ
ほのかにもーはたやくけふりーたてそへて

【那智筆／北野天満宮本】／永正十三年／

いかが

いかが
如何

あきのゆうぐれ
→秋の夕暮れ

なほさりにーこころをみえはーいがかせむ
まれにとひくるーあきのゆふぐれ

【表佐千句】／何馬【はなにひと】／文明
8(1476)年3月6日<~8日>

たえてやはーおもひありともーいがかせむ
むくらのやとのーあきのゆふぐれ

【論書4種】／宗長／

いかにねて
如何に寝て→きのうをこそ
昨日を去年のいかにねて—こよひはきかむ—ほととぎす
きのふをこそ—ゆめかうつつか【寛正年間百韻20巻】／唐何〔せみのは
の〕／寛正4(1463)年6月23日いかにねて—いかにみやこの—ゆめならむ
きのふをこそ—はるのやまのは【大永四年月並千二百韻】／何色〔うめ
はな〕／月並千二百韻／大永4(1524)年1
月23日

いく

うつりもてゆく
移り持て行く→おきいでる
起き出でるうつりもてゆく—あきのかなしさ
いまこむと—なくさめつつも—おきいてて【文禄年間百韻12巻】／□□〔たかには
も〕／文禄2(1593)年5月27日うつりもてゆく—そてのつきかけ
つゆをし—かりねののへ—おきいてて【文明十四年万句52巻】／山何〔つゆや
けさ〕／文明14(1482)年7月4日～9月
14日ゆくほととぎす
行く時鳥→そら
空まつたれをわき—ゆくほととぎす
いつこかは—さみたれそめぬ—そらならむ【宮島千句】／白何〔ゆふへより〕／天文
20(1551)年5月9日～11日おとつれそめて—ゆくほととぎす
ねさめはた—たれもひとしき—そらならむ【弘治三年春雪千句】／何木〔はなならて〕
／弘治3(1557)年正月7日～9日

いくえ

いくえかすみ
幾重霞→かねのひびき
鐘の響きいくへかすみの—つつくやまやま
はるのよや—かねのひびきも—あらさらむ【称名院追善千句】／何人〔せめてさは〕
／永禄6(1563)年12月14日～18日かすかのは—いくへかすみの—しけからし
かねのひびきも—たたかすかなり【天正年間百韻57巻】／□□〔なつやま
は〕／天正17(1589)年4月26日いくえとよらのたけのしたみち
幾重豊浦の竹の下道→またつきあるゆきのほれる
また月ある雪の晴れるいくへとよらの—たけのしたみち
にしにまた—つきあるゆきの—けさはれて【竹林抄／新古典文学大系本】／冬／文明
8(1476)年5月頃いくへとよらの—たけのしたかけ
あめにまた—つきあるゆきの—よるはれて【心敬関係10種】／心玉集／静嘉堂文庫本
／

いけ

いけふる
池ふる→あまのかくやま
天の香具山いけふりて—ほのかにうつる—よはのつき
あきいくあきそ—あまのかくやま【成立不詳・宗祇以前15巻】／何人〔み
つさむし〕／成立時不詳なかむらむ—みきりははるの—いけふりて
みやちたえせぬ—あまのかくやま【永正年間百韻34巻】／何人〔みやまき
に〕／永正14(1517)年3月22日いけみず
池水→こおりけゆく
氷解け行く

いけみつのつきかけあらふーやなきかな
こほりとけゆくーなみのあさかせ

【嵯峨千句】／山河 [いけみつの] ／ (元
龜 4) 天正元 (1573) 年正月 9 日～11 日

いけみつのささなみさそふーはるのかせ
いはまいはまのーこほりとけゆく

【慶長年間百韻 2 7 卷】／□□ [はるさめ
も] ／慶長 9(1604) 年 10 月 6 日

いさらい

いさらいのみず
いさら井の水

→^あ明けの夜

こほりのひまのーいさらみのみつ
かはおとのーあめかときけはーあくるよに

【天文廿四年梅千句】／何木 [つみそへよ]
／天文 24(1555) 年正月 7 日

かすみにむせふーいさらみのみつ
うくひすのーこゑするなかれーあくるよに

【大永四年月並千二百韻】／□□ [うのは
なの] ／月並千二百韻／大永 4(1524) 年 4
月 23 日

いずち

とまりふねおとしていずち
泊まり舟音していずち

→^{たびのくにくにのひと}旅の国々の人

とまりふねーおとしていつちーわたるらむ
たれたひならぬーくにくにのひと

【東山千句】／一字露頭 [つきみつつ] ／
永正 15(1518) 年 8 月 10 日～12 日

とまりふねーおとしていつちーわかるらむ
あはれのたひやーくにくにのひと

【宗長関係 8 種】／興津宛／書陵部本／

ほととぎすまぐらのいすちすぎる
時鳥枕のいすち過ぎる

→^{しずかなあめ}静かな雨

ほととぎすーまぐらのいつちーすきぬらむ
しつかにあめのーうちそそくそら

【伊予千句】／御何 [すすしさは] ／天文
6(1537) 年 5 月 22 日

ほととぎすーまぐらのいつちーすきぬらむ
しつかにあめのーはるるくさふき

【寛永年間百韻 1 5 卷】／□□ [きはみ
な] ／裏白／寛永 4(1627) 年 1 月 3 日

いそぐ

いそがれる
急がれる

→^{やまほととぎす}山時鳥

こころなほーみやこのかたにーいそかれて
いつかはいてむーやまほととぎす

【天正年間百韻 5 7 卷】／□□ [ゆふつゆ
も] ／天正 16(1588) 年 8 月 10 日

とはるへきーころとゆふへのーいそかれて
やまほととぎすーきかむあめのひ

【寛文年間百韻 2 2 卷】／□□ [しらきく
の] ／寛文 11(1671) 年 9 月 29 日

いそぐ
急ぐ

→^{まりのみちのかたがた}霧の道の方々

ひくらしやーつきになるよをーいそくらむ
きりにわかれぬーみちのかたかた

【宗牧追善千句】／山河 [ちるちらぬ] ／
永禄 4(1561) 年 9 月 14 日・15 日

ゆふへをしーくさはのつゆやーいそくらむ
きりたちまよふーみちのかたかた

【寛永年間百韻 1 5 卷】／□□ [x x x x
x] ／裏白／寛永 18(1641) 年 1 月 3 日

かえりをいそぐ
帰りを急ぐ

→^{しばつひと}柴持つ人

くもかへるーやまやゆふへをーいそくらむ
しはもつひとのーやすむかけはし

【表佐千句】／何人 [はなそくも] ／文明
8(1476) 年 3 月 6 日<～8 日>

すゑかけてーかへるいちちやーいそくらむ
しはもつひとのーつるるこゑこゑ

【文明年間百韻 3 4 卷】／□□ [したつゆ
は] ／文明 12(1480) 年 7 月 4 日

いち

うめのひともと
梅の一本

うぐいす
→鶯

さきそめにけむーうめのひともと
うくひすのーうちはふきくるーそののうち
【五吟一日千句】／何木〔としのうちに〕
／天正9(1581)年11月19日

やつれてにほふーうめのひともと
うくひすのーいくはるとなきーこゑおいて
【大永三年月並千三百韻】／□□〔やまい
くへ〕／月並千三百韻／大永3(1523)年8
月23日

こしけきなかのーうめのひともと
うくひすのーうちはふきたるーこゑすなり
【天正年間百韻57巻】／初何〔はるたち
て〕／裏白／天正12(1584)年1月3日

おかべのはしのひとむら
岡辺の櫛の一群

ゆうひがくれ
→夕日隠れ

をかへいろこきーはしのひとむら
つゆやなほーゆふひかくれにーのこるらむ
【出陣千句】／何袋〔はなさかり〕／永正
元(1504)年10月25日～27日

をかへになひくーはしのひとむら
うすきりのーゆふひかくれにーもすなきて
【応仁年間百韻6巻】／何人〔つきのあき〕
／応仁2(1468)年1月1日

をかへになひくーはしのひとむら
うすきりのーゆふひかくれにーもすなきて
【萱草／伊地知本】／秋／文明6(1474)年
2月以前

きくのひともと
菊の一本

やまびと
→山人

しものそなるーきくのひともと
やまひとのーすむあといかにーたつねまし
【天文廿年断簡千句】／□□〔つけのこせ〕
／天文20(1551)年6月10日～12日

ちくさしをれてーきくのひともと
やまひとのーすみかはことーものふるく

【長祿三年千句11巻】／何鳥〔ふかくふ
る〕／長祿3(1459)年12月2日～5日

はやちりそむるーきくのひともと
やまひとのーすさみいかなるーころならむ

【天正四年万句70巻】／朝何〔なみよす
る〕／天正4(1576)年5月6日～7月19日

くものひとむら
雲の一群

すてるほととぎす
→捨てる時鳥

ゆくかたいつちーくものひとむら
ほととぎすのーこれるはなをーとひすてて

【天文年間百韻38巻】／何路〔あきよた
た〕／天文12(1543)年8月19日

うかふあしたのーくものひとむら
なきすつるーあとしたはるるーほととぎす

【天正年間百韻57巻】／□□〔ことのは
も〕／天正13(1585)年1月4日

けむりひとすじ
煙一筋

だれかがうえたまつのこる
→誰かが植えた松残る

かせふきはらふーけふりひとすち
たれうゑてーまつのしるしのーのこるらむ

【文明十四年万句52巻】／堀何〔かるひ
とは〕／文明14(1482)年7月4日～9月
14日

とほさとをのーけふりひとすち
たかうゑてーまつはかりかはーのこるらむ

【文明十四年万句52巻】／何色〔はるな
つを〕／文明14(1482)年7月4日～9月
14日

さとのひとむら
里の一群

くさまくら
→草枕

とひよるやとのーさとのひとむら
くさまくらーつきをよすかにーこよひねむ

【文明十二年千句8巻】／夢想〔うしとし
の〕／文明12(1480)年4月10日～*日

うちけふりたるーさとのひとむら
くさまくらーたつきもしらすーあくるのに

【文明十四年万句52巻】／何船 [みつとりか]／文明14(1482)年7月4日～9月14日

たけのひとむら
竹の一群

→^{かたおかのべ}片岡野辺

たくひのかけは一たけのひとむら
つつしさく一かたをかのへの一あめのうち

【天文廿四年梅千句】／何木 [つみそへよ]／天文24(1555)年正月7日

いほのすさひや一たけのひとむら
ゆくひとも一かたをかのへの一ふゆかれに

【春夢草／書陵部本】／雑／永正12(1516)年、13年

→^{やまもと}山本

なひくやかせの一たけのひとむら
やまもとの一つゆのしたみち一くさかれて

【文明年間百韻34巻】／何人 [ちきりあれや]／文明14(1482)年3月20日

かすみになひく一たけのひとむら
やまもとの一はるのあさかは一ゆきはれて

【老葉／吉川本】／春／文明13(1481)年夏頃

ただひととおり
ただ一通り

→^{なる}なる

たたひととほり一わたるかりかね
ありあけや一つきのよかすに一なりぬらむ

【看聞日記紙背50巻】／山何 [とよとしを]／応永32(1426)年12月6日

たたひととほり一しらむよこくも
しくれつる一あとやゆきけに一なりぬらむ

【応永年間百韻7巻】／何木 [ちよまとと]／応永15(1408)年3月21日

とりのひとこえ
鳥の一声

→^{あける}明けける

はるかにすくる一とりのひとこえ
しつかなる一よはのけしきや一あけぬらむ

【天文年間百韻38巻】／何人 [なやここに]／天文4(1535)年5月1日

はつかになりぬ一とりのひとこえ
またれつる一ねさめのそらや一あけぬらむ

【天文年間百韻38巻】／何路 [あさかほの]／天文10(1541)年7月29日

→^{ほととぎす}時鳥

しはしなくさむ一とりのひとこえ
ねさめては一それかあらぬか一ほととぎす

【天正四年万句70巻】／何船 [なかきよの]／天正4(1576)年5月6日～7月19日

こすゑはるけき一とりのひとこえ
むかしおもふ一たちはなてらの一ほととぎす

【園塵第四／早稲田大学本】／夏／永正6、7年

なかなかいちはすみよい
中々市は住み良い

→^{みわのすきむら}三輪の杉群

ましはりの一なかなかいちは一すみよきに
たちならひたる一みわのすきむら

【看聞日記紙背50巻】／山何 [なつかけよ]／応永26(1419)年3月29日

やまよりも一なかなかいちは一すみよきに
たれたつねこむ一みわのすきむら

【看聞日記紙背50巻】／唐何 [あすはさけ]／応永31(1424)年2月25日

はなのひとえだ
花の一枝

→^{やまざくら}山桜

をるをはゆるせ一はなのひとえだ
ひとをこそ一とむるせきの一やまさくら

【文和千句】／手何 [はにしける]／文和5年

このかけもの一はなのひとえだ
やまさくら一てをもゆるさず一をりもちて

【専順関係2種】／春／応仁元(1467)年5月10日

はなのひともと
花の一本

はるくれる
→春暮れる

おそきものこる一はなのひともと
しらすりしーみやまをとへはーはるくれて

【文明年間百韻34巻】／何人〔ちきりあ
れや〕／文明14(1482)年3月20日

まきのはしのく一はなのひともと
とりのねもーそこはかとなく一はるくれて

【大永四年月並千二百韻】／□□〔ゆきふ
かき〕／月並千二百韻／大永4(1524)年11
月23日

ひとしぐれ
一時雨

このはちるおと
→木の葉散る音

ゆめよりはーあとあるさよのーひとしくれ
ことしもいまはーこのはちるおと

【秋津洲千句】／一字露頭〔わかほより〕
／天文15(1546)年8月25日

ふるもたたーかせのまかひのーひとしくれ
まくらのうへはーこのはちるおと

【弘治三年春雪千句】／何衣〔なくきしの〕
／弘治3(1557)年正月7日～9日

ひとすじ
一筋

けむりふきやるかぜ
→煙吹きやる風

ひとすちのーかはみつしろくーあらはれて
けふりふきやるーさとのあさかせ

【大原野十花千句】／何路〔けふこそは〕
／元龜2(1571)年2月5日～7日

ひとすちのーなかれのすゑにーはしみえて
けふりふきやるーをちのかはかせ

【永祿年間百韻28巻】／何船〔ひきう
る〕／裏白／永祿5(1562)年1月3日

ひととおり
一通り

みちのかたがた
→道の方々

ひととほりーそこはとしるきーみなせかは
くれかかりたるーみちのかたかた

【羽柴千句】／何人〔すくにゆく〕／天正
6(1578)年5月18・19日

ひととほりーふりとほりたるーあきのあめ
つゆはかりなるーみちのかたかた

【羽柴千句】／薄何〔たちはなの〕／天正
6(1578)年5月18・19日

ひとむら
一群

なびくくれたけ
→靡く真竹

ひとむらのーけふりのすゑのーはれわたり
そよきいてつーなひくくれたけ

【毛利千句】／山何〔きくのかは〕／文祿
3(1594)年5月12日～16日

ひとむらのーすゑにつつけるーのをとほみ
かこはぬかたはーなひくくれたけ

【天正年間百韻57巻】／何木〔うくひす
の〕／天正11(1583)年間1月8日

ひとむらさめ
一村雨

なくほととぎす
→鳴く時鳥

ひとむらさめのーつきのこるやま
かへりなくーよはにききつるーほととぎす

【寛永年間百韻15巻】／□□〔はるをう
る〕／裏白／寛永2(1625)年1月3日

ひとむらさめのーすくるをちかた
つゆのまのーやとりにきなけーほととぎす

【天正四年万句70巻】／竹何〔まつほと
や〕／天正4(1576)年5月6日～7月19日

ひとりねとかげ
一人寝と影

かたしく
→片敷く

ひとりやねなむーまきたてるかけ
はなにほふーやまちのこけをーかたしきて

【新撰菟玖波集／実隆本】／春上／明応
4(1495)年9月26日

ひとりやねなむーつきほそきかけ
むしのねもーよわるあらしをーかたしきて

【壁草／大阪天満宮文庫本】／秋／永正
2(1505)年8月23日以後同3年3月以前

ひとりねる
一人寝る

うらみわびる
→恨み侘びる

かせみにしみぬ一ひとりかもねむ
いつはりの一なかたちをのみーうらみわひ

【天文年間百韻38巻】／山何〔なとりかは〕／天文19(1550)年6月16日

まちよわりつつ一ひとりかもねむ
ちかひしに一かはるころをーうらみわひ

【寛文年間百韻22巻】／□□〔きゆるものと〕／寛文12(1672)年8月11日

ひとむらすすき
一群薄

しもまよふやまた
→霜迷う山田

ひとむらすすき一そてふるかけ
しもまよふ一やまたのおしね一かりすてて

【永正年間百韻34巻】／何路〔はやみのに〕／永正12(1515)年11月10日

ひとむらすすき一ひともかけせず
しもまよふ一やまたのこいへーかたふきて

【合点之句／神宮文庫本】／冬／天文9(1541)年12月25日

ほととぎすのひとこえ
時鳥の一声

はるのうくいす
→春の鶯

かへるさを一いまひとこゑの一ほととぎす
なこりやをしむ一はるのうくひす

【皇学館文庫本千句】／□□〔はなにいそき〕／永禄6(1563)年11月18日以前

ほととぎす一ひとこゑをさへーまたせきて
ももさへつりは一はるのうくひす

【永禄年間百韻28巻】／何垣〔ねにかへる〕／永禄4(1561)年3月22日

まつの一とむら
松の一群

よがあける
→夜が明ける

しほひにたかき一まつの一とむら
とふかりの一かすもまきれす一よはあけて

【成立不詳・心敬以前14巻】／何人〔はるふかし〕／成立時不詳

うらのとほきは一まつの一とむら
やまみえぬ一なみのうへより一よはあけて

【菟玖波集／広島大学本】／雑三／文和5(1356)年3月26日

まつの一ととも
松の一本

みののおやま
→美濃の小山

あきをふるやの一まつの一ととも
つゆやもる一みののをやまの一ふはのせき

【享徳二年千句】／手何〔なほみよと〕／享徳2(1453)年8月11日～13日

たてるもさひし一まつの一ととも
さきのけの一みののをやまの一ゆきのくれ

【竹林抄／新古典文学大系本】／冬／文明8(1476)年5月頃

たてるさひさし一まつの一ととも
さきのけの一みののをやまの一ゆきのくれ

【宗砌関係9種】／宗砌句集／大阪天満宮本

みずの一とすじ
水の一筋

たき
→滝

そそくはかりの一みつのひとすぢ
ふりにける一あとやなみたのーたきならむ

【大永四年月並千二百韻】／□□〔しもやひぬ〕／月並千二百韻／大永4(1524)年9月23日

みなかみしらぬ一みつのひとすぢ
そてやたた一うきおとなしの一たきならむ

【名所句集／静嘉堂文庫本】／恋下／(大永前後)

みちの一とすじ
道の一筋

はなれこま
→放れ駒

たなかにつつく一みちの一とすぢ
はなれこま一いはふかたにし一ゆきつれて

【元龜年間百韻6巻】／何人〔はなのときも〕／元龜4(1573)年6月6日

さとはみえぬも一みちの一とすぢ
つななから一いつくよりかは一はなれこま

【文禄年間百韻12巻】／□□〔あつまやの〕／文禄2(1593)年5月6日

ゆきつれる
→行き連れる

たなかにつつくーみちのひとすち
はなれこまーいはふかたにしーゆきつれて

【元龜年間百韻6巻】／何人〔はなのとき
も〕／元龜4(1573)年6月6日

かよふをのへのーみちのひとすち
このかたはーたききしはとりーゆきつれて

【文明十五年千句11巻】／何路〔ひめも
もの〕／文明15(1483)年*月*日～3月2
日

いつ

いつかきさて
何時かきさて

→また恥じらう

いつかさてーものいひかはすーつきはみむ
またはちらへるーつゆのたまくら

【慶長年間百韻27巻】／□□〔ひめおき
し〕／慶長4(1599)年3月25日

いつかさてーうちきせはやのーからころも
またはちらへるーなかのあやなさ

【慶長年間百韻27巻】／□□〔ちひろあ
る〕／慶長4(1599)年5月10日

いつわり

いつわり
偽り

→言の葉の末

いつはりのーちかひをかみやーたたるらむ
たたあやまれるーことのはのすゑ

【難波田千句】／□□〔みつのおもに〕／
文明14(1482)年10月前後

いつはりのーなきなかしたふーつゆなみた
わすれすうれしーことのはのすゑ

【寛文年間百韻22巻】／□□〔つきやあ
らぬ〕／寛文13(1673)年7月19日

いと

あおやぎのいと
青柳の糸

→打ち映える

たえぬをかけのーあをやきのいと
つゆなからーあさゆふかすみーうちはへて

【宮島千句】／山何〔ことのはや〕／天文
20(1551)年5月9日～11日

はるにやさらすーあをやきのいと
えのみつにーかすみのころもーうちはへて

【文明年間百韻34巻】／何人〔わすれて
は〕／文明5(1473)年2月1日

→川添い

のとかになひくーあをやきのいと
かはそひのーふねのつなてのーなかきひに

【看聞日記紙背50巻】／唐何〔うめはけ
ふ〕／応永26(1419)年2月25日

みたれあひたるーあをやきのいと
かはそひのーつつみやなみのーこえぬらむ

【文禄年間百韻12巻】／□□〔あめのひ
の〕／文禄2(1593)年5月

いとう

よをいとう
世を厭う

→すみそめのそで
墨染の袖

うかりけりーよやたたひとをーいとふらむ
こころよりいつーすみそめのそで

【明応年間百韻22巻】／何人〔あきのい
ろに〕／明応9(1500)年7月11日

みつをたにーぬるるはとよをーいとふらむ
あさくしもやはーすみそめのそで

【永正年間百韻34巻】／山家〔ひとめさ
へ〕／永正8(1511)年11月3日

いなおせどり

いなおせどり
稲負鳥

→眺め侘びる

かせうちなひきーいなおほせとり
なかめわひぬーきみかこころやーいつみえむ

【宗長追善千句】／片何〔やまさくら〕／
(享祿5) 天文元(1532)年3月25日

こひちをさそふーいなおほせとり
なかめわひぬーかりはきぬとも一つたへはや

【壁草／大東急記念文庫本】／恋上／永正
8(1512)年11月3日～永正9年

いなづま

いなづまのかけ
稲妻の陰

→宵の間

ほのめきわたるーいなづまのかけ
よひのまにーいつるつきこそーかすかなれ

【文安月千句】／朝何 [ひかりをも]／文
安2(1445)年8月15日

そらたのめなるーいなづまのかけ
さりともとーうちなげかるるーよひのまに

【延徳年間百韻16巻】／薄何 [いろにこ
の]／千句第四／延徳元(1490)年12月
26日

いにしえ

いにしえ
古

→山風が吹く

いにしへのーたたちなしきーゆめさめて
みはならはしのーやまかせそふく

【大永三年月並千三百韻】／□□ [はると
ふく]／月並千三百韻／大永3(1523)年1
月23日

いにしへのーよしののみやをーきてとへは
おいきのはなにーやまかせそふく

【竹林抄／新古典文学大系本】／春／文明
8(1476)年5月頃

いにしえのあと
古の後

→なる

たたみつくきのーいにしへのあと
をかのへのーみちやのなかにーなりぬらむ

【文安年間百韻9巻】／何路 [つききよし]
／文安4(1447)年8月15日

かすむはかりのーいにしへのあと
いつのちりーつもりてやまとーなりぬらむ

【園塵第一／統群書類従本】／雑／長享2
年

いにしえのつき
古の月

→憂い秋

みしはいつそのーいにしへのつき
うきあきにーよのことわりもーおほほえず

【享徳二年千句】／唐何 [こころひく]／
享徳2(1453)年8月11日～13日

おもかけはたたーいにしへのつき
とほからぬーよはのとたえもーうきあきに

【下草／龍谷大学本】／恋下／延徳2(1490)
年～3年春頃

いにしえのみや
古の宮

→花咲く

はるのころはーいにしへのみや
をかのへのーなきさのさくらーはなさきて

【名所句集／静嘉堂文庫本】／春／(大永
前後)

たまをみかけるーいにしへのみや
よしのなるーたきつかはつらーはなさきて

【名所句集／静嘉堂文庫本】／春／(大永
前後)

いにしえのゆめ
古の夢

→小夜枕

わかれしままのーいにしへのゆめ
さよまくらーかねよりのちはーまどろまで

【永原千句】／何木 [おとそなき]／明応
9(1500)年7月17日

みるもくやしきーいにしへのゆめ
つきひとりーかはらぬあきのーさよまくら

【天文十八年梅千句】／青何 [ゆけはうめ]
／天文18(1549)年正月11日

いのち

いのちであってほしい
命であってほしい

→法の道

あはむかきりのーいのちともかな
みはおいぬーいらてやはてむーのりのみち

【表佐千句】／何衣〔よるやあめ〕／文明
8(1476)年3月6日<~8日>

なかきかひあるーいのちともかな
いかにせむーいることかたきーのりのみち

【文明年間百韻34巻】／薄何〔さくをみ
よ〕／文明14(1482)年3月7日

いのちにて
命にて

→頼むおなじよ

わすれしのーなさけにかかるーいのちにて
すゑのちきりをーたのむおなじよ

【看聞日記紙背50巻】／何船〔おちはま
て〕／応永25(1418)年10月25日

またといふーことはかりをーいのちにて
よもわすれしとーたのむおなじよ

【看聞日記紙背50巻】／唐何〔あすはさ
け〕／応永31(1424)年2月25日

こひわひぬーあふをかきりのーいのちにて
せめてはすむをーたのむおなじよ

【看聞日記紙背50巻】／何目〔うめさく
ら〕／応永32(1425)年8月25日

いのる

かみにただいのる
神にただ祈る

→結ぶ契り

かみはたたーいのるにこそはーかひもあれ
むすふちきりのーゆくへたかはし

【天文廿四年梅千句】／何垣〔あさきりに〕
／天文24(1555)年正月7日

かみもたたーいのるにこそはーなひきけれ
むすふちきりのーすゑはしられす

【天正四年万句70巻】／何船〔ときはき
も〕／天正4(1576)年5月6日~7月19日

いま

むかしをいまの
昔を今の

→時鳥

むかしをいまのーおもかけのゆめ
おもひいててーふるきみやこのーほととぎす

【住吉千句】／山何〔そめさらは〕／大永
元(1521)年11月1日~14日

むかしをいまのーころとやせむ
わすれすもーなつはきてなくーほととぎす

【天正四年万句70巻】／花何〔うくひす
の〕／天正4(1576)年5月6日~7月19日

いも

いもがこいしくて
妹が恋しくて

→枕に片敷く

いもこひしらにーみるゆめもなし
よるなみをーいそのまくらにーかたしきて

【浅間千句】／何木〔したふとや〕／永正
11(1514)年5月13日~19日

いもこひしらにーかりふしのそら
つきやとるーもしほのまくらーかたしきて

【天文年間百韻38巻】／何船〔あさかほ
に〕／天文12(1543)年7月29日

いもにこいつつ
妹に恋いつつ

→草枕

のやまもつらしーいもにこひつつ
くさまくらーよるはゆめちもーいくわかれ

【成立不詳・宗長以前15巻】／x x〔さ
みたれや〕／成立時不詳

いもにこひつつーそてそさえゆく
くさまくらーゆふしもはらひーたれとねむ

【那智筆／北野天満宮本】／永正十二年／

いりあい

いりあいのかね
入相の鐘→うちしぐれ
雨

かたやまさひしーいりあひのかね
わくるののーあきのひうすくーうちしぐれ

【成立不詳・宗長以前15巻】／名号〔な
かはひと〕／成立時不詳

ふもにつくるーいりあひのかね
まつたてるーをのへはかりのーうちしぐれ

【文禄二年千句10巻】／何木〔うすきり
や〕／文禄2(1593)年4月8日～10日

→かどさす
門

はなはちるらむーいりあひのかね
しつかなるーはるのふるてらーかどさして

【太神宮法楽千句】／朝何〔つゆにたに〕
／長享2(1488)年7月

きりにこまれるーいりあひのかね
あきのひもーななめにのこるーかどさして

【平松文庫本千句】／□□〔ふゆはつき〕
／

→かえる
帰

さとはそなたのーいりあひのかね
ちれはとてーはなにはなとやーかへるらむ

【柴野千句】／何屋〔すきたかく〕／延文
2(1357)年以後-応安3年6月以前

かすみにさひしーいりあひのかね
なくとりのーをのへや□□てーかへるらむ

【天正年間百韻57巻】／x x〔かすみけ
り〕／天正10(1582)年3月1日

→はなのかげ
花の陰

こころをつくすーいりあひのかね
やまふかみーかへりもやらぬーはなのかけ

【文明年間百韻34巻】／何路〔やまかせ
に〕／文明15(1483)年3月2日

おなしみねこすーいりあひのかね
あすまとーおもひかけきやーはなのかけ

【成立不詳・宗養以前8巻】／何木〔とこ
なつに〕／成立時不詳

→まよう
迷

たけひとむらのーいりあひのかね
おとろきしーとりやねくらにーまよふらむ

【長享年間百韻6巻】／x x〔やまのはの〕
／長享3(1489)年8月2日

をのへにひひくーいりあひのかね
かりひとやーつねならぬかたにーまよふらむ

【天正四年万句70巻】／竹何〔まつほと
や〕／天正4(1576)年5月6日～7月19日

→やまぶかい
山深い

くもよりをちのーいりあひのかね
くさのとにーひともおとせぬーやまぶかみ

【河越千句】／朝何〔うめそのに〕／文明
2(1470)年正月10～12日

こころをつくすーいりあひのかね
やまぶかみーかへりもやらぬーはなのかけ

【文明年間百韻34巻】／何路〔やまかせ
に〕／文明15(1483)年3月2日

→わからない
わからない

とほくそきこゆーいりあひのかね
かすかなるーすみかやたれとーわかさらむ

【伊予千句】／何路〔さみたれの〕／天文
6(1537)年5月22日

ひとりのみきくーいりあひのかね
ちきりおくーころともひとやーわかさらむ

【大永四年月並千二百韻】／□□〔ゆふた
ちは〕／月並千二百韻／大永4(1524)年6
月23日

→あらまし
あらまし

そこともきかぬーいりあひのかね
あらましのーゆくすゑをたにーさためはや

【太神宮法楽千句】／薄何〔まきのはや〕
／長享2(1488)年7月

はるのあはれはーいりあひのかね
あらましのーいまはつきぬるーおいかみに

【菟玖波集／広島大学本】／雑四／文和
5(1356) 年冬～翌年の春

→^{おもいたい}思いたい

みをおとろかすーいりあひのかね
きくことのーうからぬよともーおもははや

【成立不詳・宗叟以前6巻】／何人[みつ
たまり]／成立時不詳

けふまたききつーいりあひのかね
みのうへにーくるるよはひとーおもははや

【菟玖波集／広島大学本】／雑五／文和
5(1356) 年冬～翌年の春

→^{かどみえる}門見える

はるのはやしのーいりあひのかね
やまかすむーふもとにすきのーかどみえて

【表佐千句】／何船[はなやちる]／文明
8(1476) 年3月6日<～8日>

はしよりおくのーいりあひのかね
まつけふるーゆきのやまもとーかどみえて

【園塵第四／早稲田大学本】／冬／永正6、7
年

→^{つづく}続く

なかそらとほきーいりあひのかね
まつのはのーおくやいらかにーつつくらむ

【紹巴亡父追善千句】／二字反音[かけた
かき]／天文24(1555) 年3月26日～晦日

やまとほからぬーいりあひのかね
かすみにやーすゑののてらはーつつくらむ

【行助関係4種】／行助句／伊地地本／

→^{はつせでら}初瀬寺

またあはれそふーいりあひのかね
こもりてはーなにいのるらむーはつせでら

【因幡千句】／薄何[かきはらふ]／文明
7(1475) 年11月26日<～28日>

ちかきをのへのーいりあひのかね
はつせでらーもろこしにたにーあふかすや

【那智籠／北野天満宮本】／永正十三年／

→^{はつせやま}初瀬山

たひねはいつくーいりあひのかね
はつせやまーよもにはなさくーかけわけて

【名所句集／静嘉堂文庫本】／春／(大永
前後)

たひねはいつくーいりあひのかね
はつせやまーよもにはなさくーかけわけて

【竹林抄／新古典文学大系本】／春／文明
8(1476) 年5月頃

けふもまたきくーいりあひのかね
はつせやまーはるけきはなのーおくにきて

【諸家月次連歌抄】／諸家月次連歌抄／成
立() 年末詳

→^{はるになる}春になる

はなはこすゑのーいりあひのかね
ひとかへるーあとはしつけきーはるならむ

【天文年間百韻38巻】／山何[なくやい
つれ]／天文24(1555) 年5月14日

かすむゆふへのーいりあひのかね
あすはたかーいのちのうちのーはるならむ

【萱草／伊地知本】／春／文明6(1474) 年
.2月以前

→^{ひがくれる}日が暮れる

いそくこころやーいりあひのかね
とまりをもーさためぬうらのーひはくれて

【天正四年万句70巻】／初何[ゆふかほ
の]／天正4(1576) 年5月6日～7月19日

あかつきききしーいりあひのかね
ほとときすーゆくへわすれぬーひはくれて

【竹林抄／新古典文学大系本】／夏／文明
8(1476) 年5月頃

いる

→^{いりひかげ}入り日影

→^{さとにひとかえるみゆ}里に人帰る見ゆ

うつろふかーまつのはこしのーいりひかけ
すゑののさとにーひとかへるみゆ

【三島千句】／二字反音 [いけすみて] /
文明 3(1471) 年 3 月 21 日～23 日

くれたけの一みとりのうへのーいりひかけ
たなかのさとにーひとかへるみゆ

【永正年間百韻 3 4 巻】／何船 [うらかせ
の] /永正 14(1517) 年 6 月

つきのいりがた
月の入方

あきのそら
→秋の空

あけなむとするーつきのいりかた
やまのはにーくもひきわたすーあきのそら

【享徳二年千句】／何人 [つきとたか] /
享徳 2(1453) 年 8 月 11 日～13 日

ひかりをさまるーつきのいりかた
なかめすやーおもひなくともーあきのそら

【享禄年間百韻 8 巻】／何船 [はるのいろ]
/享禄 5(1532) 年 1 月 18 日

はるのいりひ
春の入日

たえだえ
→絶え絶え

はるのいりひのーかけかすかなり
たえたえにーかねのひひきのーきこえて

【称名院追善千句】／一字露頭 [くもはれ
て] /永禄 6(1563) 年 12 月 14 日～18 日

はるのいりひのーまつにかかれる
かへりみるーあとにはかすみのーたえたえに

【永禄年間百韻 2 8 巻】／何船 [ひきう
る] /裏白/永禄 5(1562) 年 1 月 3 日

いろ

あさがおのいろ
朝顔の色

のわきする
→野分する

はかなさみするーあさかほのいろ
ひきかこふーまかきたわわにーのわきして

【慶長年間百韻 2 7 巻】／□□ [ひめおき
し] /慶長 4(1599) 年 3 月 25 日

しはしはかりのーあさかほのいろ
たけなひくーそのふのうちもーのわきして

【慶長年間百韻 2 7 巻】／□□ [したもえ
に] /慶長 6(1601) 年 1 月 29 日

いろかわる
色変わる

まつむしのこゑ
→松虫の声

いろかはるーころをたにしれーおもひくさ
ちきりしままやーまつむしのこゑ

【成立不詳・宗祇以前 1 5 巻】／何人 [は
つはなや] /成立時不詳

いろかはるーのへにこてふのーゆめやうき
みしあとはたたーまつむしのこゑ

【永正年間百韻 3 4 巻】／何木 [いろはふ
ちの] /永正 8(1511) 年 4 月 6 日

いろかわるころ
色変わる頃

はなさく
→花咲く

みとりなるのもーいろかはるころ
さはみつにーくさのむらむらーはなさきて

【三島千句】／何船 [とりのねは] /文明
3(1471) 年 3 月 21 日～23 日

このもとまでもーいろかはるころ
ひとしれぬーこくさあはれにーはなさきて

【明応年間百韻 2 2 巻】／何路 [うつろは
て] /明応 3(1494) 年 10 月 30 日

いろづく
色付く

つゆとけきのはつしも
→露と今朝の初霜

あきのたのーかりしほちかくーいろつきて
ゆふへのつゆよーけさのはつしも

【天文廿四年梅千句】／花之何 [かみかき
の] /天文 24(1555) 年正月 7 日

かせおつるーとはたいまはたーいろつきて
つゆにかへたるーけさのはつしも

【皇学館文庫本千句】／□□ [ちらははな]
/永禄 6(1563) 年 11 月 18 日以前

ころもうつこゑ
→衣打つ声

さとちかきーやまはむかひにーいろつきて
まつひとむらにーころもうつこゑ

【成立不詳・宗長以前 1 5 巻】／何船 [し
もしろき] /成立時不詳

つゆふかきーくさもこすゑもーいろつきて
なほこのころはーころもうつこゑ

【文安頃千句4巻】／青何【はなのかの】

／

ひぐらしのこゑ
→ 蝸の声

きりのほるーそとものこすゑもーいろつきて
さひしくのこるーひぐらしのこゑ

【明応年間百韻22巻】／何人【たますた
れ】／明応5(1496)年6月7日

つゆにはやーみねのくすはもーいろつきて
あきものかなしーひぐらしのこゑ

【文亀年間百韻4巻】／何人【きえしよの】
／文亀2(1502)年8月6日

はなのいろ
花の色

うぐいすのこゑ
→ 鶯の声

あをはよりーあらはれそむるーはなのいろ
したひもてゆくーうくひすのこゑ

【羽柴千句】／朝何【よみにふく】／天正
6(1578)年5月18・19日

いまもなほーあをはにのこるーはなのいろ
みきりになるるーうくひすのこゑ

【永禄年間百韻28巻】／□□【つゆはそ
てに】／永禄4(1561)年9月19日

さかりそとーみれはうつろふーはなのいろ
みきりをよそのーうくひすのこゑ

【文禄年間百韻12巻】／□□【けさのま
に】／文禄2(1593)年1月14日

はるあきのいろ
春秋の色

うつろう
→ 移ろう

みしはしはしのーはるあきのいろ
やまふきのーつゆはもみちにーうつろひて

【美濃千句】／何馬【まつやしる】／文明
4(1473)年12月16日～21日

けにはかなしやーはるあきのいろ
ひとはたたーときなるかたにーうつろひて

【宗祇関係2種】／心敬専順点宗祇付句／

いろいろ

きぎのいろいろ
木々の色々

あきくれる
→ 秋暮れる

しもおくころのーきぎのいろいろ
たちのほるーきりのやまもとーあきくれて

【明応年間百韻22巻】／何路【こそたち
し】／明応6(1497)年1月1日

まつはみさをのーきぎのいろいろ
ありあけのーつれなきかけもーあきくれて

【天正四年万句70巻】／何船【なかきよ
の】／天正4(1576)年5月6日～7月19日

そでのいろいろ
袖の色々

つきにかえる
→ 月に帰る

あきはもみちのーそでのいろいろ
たけかりやーつきになりてはーかへるらむ

【永享年間百韻4巻】／山何【おいまつは】
／万句巻頭／永享9(1437)年3月21日

つゆはらふののーそでのいろいろ
はきかえをーつきにやをりもーかへるらむ

【慶長年間百韻27巻】／□□【はるにま
つ】／裏白／慶長6(1601)年1月3日

のべのいろいろ
野辺の色々

からごろも
→ 唐衣

ちくさにをしきーのへのいろいろ
そめてみはーいつれともなしーからごろも

【東山千句】／薄何【つゆをいろ】／永正
15(1518)年8月10日～12日

そてもさなからーのへのいろいろ
からごろもーきりのしづくにーしをれきて

【石山四吟千句】／初何【くれてなほ】／
天文24(1555)年8月15日～19日

いわ

いわがね
岩が根

はしのひとすじ
→ 橋の一筋

いはかねにーをかはのなみの一つららゐて
あさしもふかきーはしのひとすち

【三島千句】／朝何〔やまとほく〕／文明
3(1471)年3月21日～23日

たまささもーかしけてたてるーいはかねに
まつはのへふすーはしのひとすち

【聖廟千句】／何路〔うめかかに〕／明応
3(1494)年2月10日～12日

いわがねのまつ
岩が根の松

いそにふねにひぐれ
→磯に舟に日暮れ

しつえなみよるーいはかねのまつ
あらいそのーふねひきつなくーひはくれて

【弘治三年春雪千句】／何木〔はなならて〕
／弘治3(1557)年正月7日～9日

ひとりかせふくーいはかねのまつ
いそつたひーあまのふねさすーひはくれて

【月村抜句／書陵部本】／永正十四年／

いわこすなみ
岩越す浪

たきおちる
→滝落ちる

いはこすなみはーまつのあらしか
ちるをみるーやまにははなのーたきおちて

【菟玖波集／広島大学本】／春下／文和
5(1356)年冬～翌年の春

いはこすなみはーかはかせそふく
あらいそのーうへなるやまにーたきおちて

【老葉／吉川本】／雑上／文明13(1481)年
夏頃

くめのいわはし
久米の岩橋

ただひとこと
→ただ一言

てらにたれーくめのいははしーつつくらむ
たたひとこともーすくにをしへよ

【享徳二年千句】／唐何〔こころひく〕／
享徳2(1453)年8月11日～13日

わたしもはてぬーくめのいははし
つきみてはーたたひとこともーおもはぬに

【看聞日記紙背50巻】／唐何〔いやとし
に〕／応永31(1424)年1月25日

たきのいわなみ
滝の岩浪

おとわがわ
→音羽川

こすゑにちるやーたきのいはなみ
おとはかはーおとはかりしてーくるるひに

【聖廟千句】／初何〔きのふより〕／明応
3(1494)年2月10日～12日

かすみかくれにーたきのいはなみ
やまとほくーなかれいてたるーおとはかは

【寛正年間百韻20巻】／何人〔けふこす
は〕／寛正3(1462)年2月27日

いわう

かえりにこまいわうこえ
帰りに駒祝う声

みやこびと
→都人

ひくれてかへるーこまいはふこゑ
あふさかをーつきもこゆるやーみやこひと

【大永年間百韻14巻】／何人〔ゆきのう
ちに〕／大永5(1525)年1月25日

たかかへるさそーこまいはふこゑ
みやこひとーうちむれけふのーせきむかへ

【壁草／大阪天満宮文庫本】／旅／永正
2(1505)年8月23日以後同3年3月以前

うい

うい
憂い

あけのとりのかえごえ
→明けの鳥の声々

こころなきもーさそなはるにはーうかるらむ
あくるよいそくーとりのこゑこゑ

【永禄元年花千句】／□□〔ふらぬまも〕
／永禄元(1558)年3月23日～25日

またもなきーわかれやいまもーうかるらむ
あくるをつくるーとりのこゑこゑ

【文安頃千句4巻】／二字返音〔はなをりて〕
／

すみぞめのそで
→墨染の袖

すつるみもーあきのねさめやーうかるらむ
つゆのたつぬるーすみそめのそて

【難波田千句】／□□ [みつのおもに] /
文明 14(1482) 年 10 月前後

あさきえにーいのるちきりやーうかるらむ
ひとつはかなふーすみそめのそて

【文明十四年万句 5 2 巻】／夢想 [そのし
なも] / 文明 14(1482) 年 7 月 4 日～9 月
14 日

ひとよりもーゆふへのいろやーうかるらむ
あはれをのこすーすみそめのそて

【天正四年万句 7 0 巻】／何鳥 [はつしも
は] / 天正 4(1576) 年 5 月 6 日～7 月 19 日

→^{のちのよのみち}
後の世の道

たひのともーわかれむことはーうきものを
たれかのこれるーのちのよのみち

【文明十四年万句 5 2 巻】／何船 [みつと
りか] / 文明 14(1482) 年 7 月 4 日～9 月
14 日

ふるさとのーわかれはたれもーうきものを
しらすわかみのーのちのよのみち

【菟玖波集／広島大学本】／雑四／文和
5(1356) 年冬～翌年の春

ういあき
憂い秋

→^{うえないならきかないおぎのうわかぜ}
植えないなら聞かない萩の上風

うきことはーこころにたえぬーあきなるに
うゑすはきかしーをきのうはかせ

【文和千句】／何人 [なはたかく] / 文和 5
年

うきこともーわれとしるへきーあきなるに
うゑすはきかしーをきのうはかせ

【菟玖波集／広島大学本】／雑一／文和
5(1356) 年冬～翌年の春

ういしぎのはねがき
憂い嶋の羽搔き

→^{はかない}
夢い

かそふるもうきーしきのはねかき
あきならてーかよふころのーはかなしや

【元和年間百韻 2 4 巻】／□□ [あさなあ
さな] / 元和 8(1622) 年 2 月 29 日

うきはまくらのーしきのはねかき
すむつきにーおとろくゆめはーはかなしや

【寛永年間百韻 1 5 巻】／□□ [とよとし
の] / 裏白 / 寛永 20(1643) 年 1 月 3 日

ういふゆごもり
憂い冬籠り

→^{あさなあさな}
朝な朝な

うきふゆごもりーいつかかゝるらむ
しつかなるーなにはのうみのーあさなあさな

【伊勢千句】／山何 [みるめかれ] / 大永
2(1522) 年 8 月 4 日～8 日

うきふゆごもりーなといそくらむ
ふくかせもーまたさむからぬーあさなあさな

【天正四年万句 7 0 巻】／何物 [きくやい
かに] / 天正 4(1576) 年 5 月 6 日～7 月
19 日

うきをただなぐさめる
憂きをただ慰める

→^{ひとふでのあと}
一筆の跡

うきをたたーわすれかたみにーなくさめよ
それさへたゆるーひとふてのあと

【兼守千句】／薄何 [いはほにも] / 長享
元 (1487) 年 10 月 9 日<～11 日>

うきをたたーこころとしはしーなくさめて
しのへはのこすーひとふてのあと

【天文年間百韻 3 8 巻】／朝何 [またてき
く] / 天文 9(1540) 年 4 月 25 日

うくつらい
憂く辛い

→^{はなのやまかせ}
花の山風

うくつらきーほとこそせめてーたのみなれ
きそひそめにしーはなのやまかせ

【東山千句】／何草 [つきにかり] / 永正
15(1518) 年 8 月 10 日～12 日

うくつらきーちきりならずやーゆめになせ
うらむもはかなーはなのやまかせ

【壁草／大阪天満宮文庫本】／春 / 永正
2(1505) 年 8 月 23 日以後同 3 年 3 月以前

たびはうい
旅は憂い

そでが^つゆ^つぼい
→袖が露つぼい

たひそうきーころはあきにーとまりふね
やとなきあまりーそてはつゆけし

【紫野千句】／何路【あふちさく】／延文
2(1357)年以後-応安3年6月以前

たひそうきーくさのまくらをーゆふまくれ
はらふともなくーそてはつゆけし

【太神宮法楽千句】／何路【ふきなかす】
／長享2(1488)年7月

みるのもうい
見るのも憂い

もみぢちるころ
→紅葉散る頃

さもあらぬーなきになしてーみるもうし
あらしのやまのーもみちちるころ

【延徳年間百韻16巻】／何人【まつみよ
と】／延徳4(1492)年2月8日

なかなかにーふたつのかははーみるもうし
みむろたつたのーもみちちるころ

【竹林抄／新古典文学大系本】／冬／文明
8(1476)年5月頃

われでなくなるのがうい
我でなくなるのが憂い

いげの^との^{ゆう}あらし
→苔の戸の夕嵐

うしやわれにもーあらすなりゆく
はなをふくーこけのとほそのーゆふあらし

【春夢草／書陵部本】／春／永正12(1516)
年、13年

うしやわれにもーあらすなりゆく
こけのとのーはなにふきたつーゆふあらし

【論書4種】／宗牧／

うえ

うえはつれない
上は連れない

いろづく
→色づく

うへはつれなきーまつのしたつゆ
ひさきちるーはまちのしらすーいろつきて

【文安年間百韻9巻】／山何【はなはひも】

／文安5(1448)年2月5日

うへはつれなきーあらいそのまつ
なみよするーいはねのこくさーいろつきて

【大永三年月並千三百韻】／□□【あらた
まの】／月並千三百韻／大永3(1523)年12
月23日

おぎの^うわかぜ
萩の上風

→秋の夜

そよともすれはーをきのうはかせ
さらぬたにーねさめかちなるーあきのように

【菟玖波集／広島大学本】／秋上／文和
5(1356)年冬～翌年の春

たまくらなれやーをきのうはかせ
つきしろくーむすはぬゆめのーあきのように

【合点之句／神宮文庫本】／秋／天文
9(1541)年12月25日

ふるさとひと
→古里人

ゆめにうらむるーをきのうはかせ
みしはみなーふるさとひとのーあともうし

【長享年間百韻6巻】／何人【ゆきなから】
／長享2(1488)年1月22日

かりもなくなりーをきのうはかせ
たかあきとーふるさとひとのーまたるらむ

【天文年間百韻38巻】／何船【あさかほ
に】／天文12(1543)年7月29日

おもいう
→思う

ひとはおとせずーをきのうはかせ
あきやきてーわかふるさととーおもふらむ

【壁草／大阪天満宮文庫本】／秋／永正
2(1505)年8月23日以後同3年3月以前

そてをそはらふーをきのうはかせ
いかてかはーさてもとはぬをーおもふらむ

【那智庵／北野天満宮本】／永正十二年／

ふるさと
→古里

そふるやうらみーをきのうはかせ
ひまもなくーのきはくすはふーふるさとに

【永正年間百韻34巻】／何路〔あきにか
せ〕／永正8(1511)年7月14日

おもひたゆまぬーをきのうはかせ
もとあらのーこはきうつろふーふるさとに

【合点之句／神宮文庫本】／独吟百韻／天
文9(1541)年12月25日

ゆうまぐれ
→夕まぐれ

そよそのこととーをきのうはかせ
なかめつつーたちつつわふるーゆふまくれ

【伊予千句】／御何〔すすしさは〕／天文
6(1537)年5月22日

みもあへぬつゆにーをきのうはかせ
むらさめのーくもまにつきのーゆふまくれ

【那智筆／北野天満宮本】／永正十四年／

かすみのうちのみずのみななみ
霞の内の水の水上

ことごと
→言問う

かすみのうちのーみつのみななみ
こととはむーいつくかはるのーみなとかは

【天文年間百韻38巻】／何人〔はなのい
ろも〕／天文14(1545)年2月25日

かすみにおつるーみつのみななみ
はるくるるーうちのしはふねーこととはむ

【行動関係4種】／行動句集／書陵部本／
文正元(1466)年(7月16日)

きりのうえ
霧の上

ゆうまぐれ
→夕まぐれ

きりのうへなるーたかまとのみや
ゆふまくれーろうはあつさやーしらさらむ

【大原野十花千句】／初何〔こからしを〕
／元龜2(1571)年2月5日～7日

きりのうへなるーやまのしつけさ
ひとこゑのーかねよりあきのーゆふまくれ

【平松文庫本千句】／□□〔かきおこせ〕
／

さくらのうえ
桜の上

かねなる
→鐘鳴る

さくらかうへのーやまのはのつき
はるふかきーふもとのさとにーかねなりて

【三島千句】／初何〔うつろふか〕／文明
3(1471)年3月21日～23日

さくらかうへのーあけほののいろ
かすみよりーよしののみたけーかねなりて

【応仁年間百韻6巻】／何人〔つきのあき〕
／応仁2(1468)年1月1日

つきのかわかみ
月の川上

かねのおと
→鐘の音

かけはしとほきーつきのかはかみ
かねのおとーくるるもなみのーまかひにて

【永祿年間百韻28巻】／何人〔ふちかえ
や〕／永祿7(1564)年3月15日

さやかにうつるーつきのかはかみ
きりはるるーゆふへのそらのーかねのおと

【天正年間百韻57巻】／何路〔たちそひ
て〕／天正6(1578)年1月3日

なみだわがそでのうえ
涙が我が袖の上

おもむ
→思う

つゆもなみたもーわかそでのうへ
ひとしれぬーみにはなにをかーおもふらむ

【文安年間百韻9巻】／山何〔ふたたひの〕
／文安5(1448)年11月12日

いつもなみたのーわかそでのうへ
とふひとやーこよひはかりとーおもふらむ

【合点之句／神宮文庫本】／恋／天文
9(1541)年12月25日

なみのうえ
浪の上

もしおのけむり
→藻塩の煙

なくさむるーつきはあかしのーなみのうへ
もしほのけふりーあきふかくみゆ

【伊庭千句】／何人〔うすくもり〕／大永
4(1524)年3月17日～21日

うみやまのーあさゆふかはるーなみのうへ
もしほのけふりーをちのしらくも

【享祿年間百韻8巻】／白何〔あさみとり〕
／享祿3(1530)年3月2日

ふねのうち
→舟の内

なみのうへなる—あまのいへしま
いてぬひも—こころやうかふ—ふねのうち

【伊庭千句】／何文〔たかはらの〕／大永
4(1524)年3月17日～21日

まつらのやまそ—なみのうへなる
ほとときす—ききてやすらふ—ふねのうち

【文明年間百韻34巻】／夕何〔みつみえぬ〕
／千句第□／文明17(1485)年6月26日

はちすのうえ
蓮の上ひぐらし
→蝸

はちすのうへの—たのみたかふな
ひぐらしの—こゑにすすしき—いけのおも

【五吟一日千句】／薄何〔あけほのの〕／
天正9(1581)年11月19日

はちすのうへの—つゆもみたるな
ひぐらしの—なくゆふかせに—つきいてて

【萱草／伊地知本】／秋／文明6(1474)年
2月以前

まくらのうえ
枕の上つきのさやけさ
→月のさやけさ

なかむれは—まくらのうへの—みねのくも
かねにおちくる—つきのさやけさ

【皇学館文庫本千句】／□□〔よははなに〕
／永禄6(1563)年11月18日以前

おきそふや—まくらのうへの—あきのしも
いたまもりいる—つきのさやけさ

【慶長年間百韻27巻】／□□〔はなちれ
は〕／慶長4(1599)年閏3月21日

うえる

うえるた
植える田はれたきみだれのそら
→晴れた五月雨の空

さなへとり—みつせきいれて—ううるたに
いつをはれまそ—さみたれのそら

【看聞日記紙背50巻】／何人〔はなのひ
も〕／応永27(1420)年閏1月13日

ううるたに—よそのかけひを—せきいれて
はれてくもある—さみたれのそら

【看聞日記紙背50巻】／何船〔ことはな
に〕／応永31(1424)年9月27日

はなうえる
花植えるわかぎのさくら
→若木の桜

うきよにも—いのちのをしき—はなうゑて
わかぎのさくら—たのむいくはる

【看聞日記紙背50巻】／唐何〔ひそをし
き〕／応永30(1423)年3月29日

すまひとの—よかたりになる—はなうゑて
わかぎのさくら—はるそひさしき

【看聞日記紙背50巻】／山何〔まつかね
に〕／応永32(1425)年3月25日

うく

こころうかれる
心浮かれるかえる
→帰る

こころうかる—ゆきのあけほの
わかれつる—ひとはいつくに—かへるらむ

【文明十四年万句52巻】／扇何〔かせの
ほり〕／文明14(1482)年7月4日～9月
14日

ゆめのあとにそ—こころうかる
よひのまの—ひとやあたねに—かへるらむ

【心歌関係10種】／芝草内連歌合／天理本
／

たつてうかれる
立って浮かれるまそう
→誘う

かすめるのへに—たちそうかる
そらたかく—ひはりやとを—さそふらむ

【延徳年間百韻16巻】／何人〔このへ
の〕／延徳2(1490)年3月8日

そこはかとなく—たちそうかる
ものおもひ—やとやこころも—さそふらむ

【明応年間百韻22巻】／何路〔こそたち
し〕／明応6(1497)年1月1日

なみのうきふね
浪の浮舟→^{てならい}手習いよるへはいつく一なみのうきふね
てならひは一またいとけなき一ころそかし【看聞日記紙背50巻】／何路[うのはな
の]／応永30(1423)年4月4日ことにこきいる一なみのうきふね
てならひは一にはのをしへの一ほとなるに【看聞日記紙背50巻】／何人[かみにう
め]／応永31(1424)年2月25日ゆめのうきはし
夢の浮橋→^{いにしえ}古ねぬよにくつる一ゆめのうきはし
いにしへの一なからのみやに一つきをみて【老葉／吉川本】／秋／文明13(1481)年
夏頃うつつともかな一ゆめのうきはし
いにしへの一ふてのまきまき一ほのかにて

【宗長関係8種】／興津宛／書陵部本／

→^{みゆきする}御幸するそをたにかけよ一ゆめのうきはし
みゆきせし一あとはしたふも一とほきよに【明応年間百韻22巻】／山河[ほととき
す]／明応9(1500)年4月9日あともこのらぬ一ゆめのうきはし
みゆきせし一そのよこひしき一ふるてらに【園塵第四／早稲田大学本】／雑下／永正
6、7年→^{なみだがわ}涙河つくやまらの一ゆめのうきはし
とこのうへの一うたかたやみの一なみたかは【元龜年間百韻6巻】／何人[はなのとき
も]／元龜4(1573)年6月6日はかなくかよふ一ゆめのうきはし
わたるせは一いつくなるらむ一なみたかは【天正四年万句70巻】／一字露頭[わか
くさも]／天正4(1576)年5月6日～7月
19日→^{はるのよ}春の夜とたえかちなる一ゆめのうきはし
ねぬるまの一ほとはみしかき一はるのよに【永祿石山千句】／何人[つきやかる]／
永祿7(1564)年5月12日たえはてけりな一ゆめのうきはし
いとはやも一あけなむとする一はるのよに【寛正年間百韻20巻】／□□[なかつき
と]／寛正2(1461)年9月→^{みねにわかれる}峰に分かれるたたつゆのまの一ゆめのうきはし
つきいれは一みねにわかるる一よるのくも【美濃千句】／何草[いつくにて]／文明
4(1473)年12月16日～21日

うぐいす

あさくるうぐいす
朝来る鶯→^{たますだれ}玉簾あさけしつかに一きぬるうくひす
たますたれ一まけはそもの一うちかすみ【天文年間百韻38巻】／何路[ほととき
す]／天文24(1555)年4月10日あさとあくれは一きぬるうくひす
たますたれ一ひま□のとかに一ひのさして【永祿年間百韻28巻】／□□[ゆきにう
め]／永祿5(1562)年2月1日うぐいす
鶯→^{あさあけのどか}朝明け長閑うくひすの一こゑにすたれを一まきあけて
ゆきはれわたる一あさけのとけし【慶長年間百韻27巻】／□□[ねふかき
や]／慶長4(1599)年2月8日うくひすの一さへつるみきり一あめすきて
たけのそよきも一あさけのとけし

【寛永年間百韻 1 5 卷】／□□ [かみのま
す] / 裏白 / 寛永 12(1635) 年 1 月 3 日

ありあけのつき
→有明の月

うくひすのーこゑもうつろひーはなおちて
つゆかすむよのーありあけのつき

【永原千句】／何人 [みわたせは] / 明応
9(1500) 年 7 月 17 日

うくひすのー□□□□いつるーたにのとに
みつほのかなるーありあけのつき

【天文年間百韻 3 8 卷】／何木 [しくるる
か] / 天文 19(1550) 年 8 月 25 日

かすむあけほの
→霞む曙

うくひすのーこゑにのはたれーすきやらむ
たひねのそらはーかすむあけほの

【伊勢千句】／何路 [けふみるや] / 大永
2(1522) 年 8 月 4 日～8 日

うくひすのーうちはふきくるーそののうち
まかきのつきのーかすむあけほの

【五吟一日千句】／何木 [としのうちに]
/ 天正 9(1581) 年 11 月 19 日

うくひすのーちきりもふかきーうめかえに
ゆきまほのほのーかすむあけほの

【天正四年万句 7 0 卷】／何色 [ちるはな
も] / 天正 4(1576) 年 5 月 6 日～7 月 19 日

そののむらたけ
→園の群竹

うくひすのーすみかにならすーあさなあさな
ことしかうゑしーそののむらたけ

【宮島千句】／何路 [つきやけさ] / 天文
20(1551) 年 5 月 9 日～11 日

うくひすのーこゑはかすまぬーあさとかな
はるのよのこすーそののむらたけ

【天正四年万句 7 0 卷】／花何 [うくひす
の] / 天正 4(1576) 年 5 月 6 日～7 月 19 日

たにのとのやま
→谷の戸の山

うくひすのーねもうららかにーほころひて
あさひにむかふーたにのとのやま

【天正四年万句 7 0 卷】／青何 [ゆくみつ
に] / 天正 4(1576) 年 5 月 6 日～7 月 19 日

うくひすのーきのふけふかにーすをいてて
またさりやらぬーたにのとのやま

【天正四年万句 7 0 卷】／竹何 [まつほと
や] / 天正 4(1576) 年 5 月 6 日～7 月 19 日

のこるあけほの
→残る曙

うくひすのーまかきこむるーこゑはして
おきあてみればーのこるあけほの

【宗長追善千句】／山何 [こほるるや] /
〔享禄 5〕 天文元 (1532) 年 3 月 25 日

うくひすのーこころしらるるーうめさきて
つきはかすみにーのこるあけほの

【羽柴千句】／薄何 [たちはなの] / 天正
6(1578) 年 5 月 18・19 日

ひかりのどか
→光長閑

うくひすのーこゑにちさとのーはるたちて
そともにつるーひかりのとけし

【慶長年間百韻 2 7 卷】／□□ [まつやな
ほ] / 裏白 / 慶長 10(1605) 年 1 月 3 日

うくひすのーかきほのゆきをーはらひきて
にははあさけのーひかりのとけし

【寛永年間百韻 1 5 卷】／□□ [よのはる
を] / 裏白 / 寛永 8(1631) 年 1 月 3 日

はなをまつ
→花を待つ

うくひすはーかきねのたけのーはつ□にて
うすきかすみにーはなそまたるる

【諸尊法紙背 3 卷】／手何 [むすふにも]
/ 建武 4(1337) 年 6 月 23 日

うくひすはーのとかなるのにーなきそめて
なかきひかけにーはなそまたるる

【文明年間百韻 3 4 卷】／□□ [はたはり
や] / 文明 14(1482) 年 9 月

みちのはるけさ
→道の遠けさ

うくひすのーこゑはとやまのーかけさえて
のへにつれるーみちのはるけさ

【河越千句】／朝何〔うめそのに〕／文明
2(1470)年正月10～12日

うくひすの一つゆふむのへはくれそめて
いそくやとりの一みちのはるけさ

【文明年間百韻34巻】／何路〔やまかせ
に〕／文明15(1483)年3月2日

ゆきはふりつつ
→雪はふりつつ

うくひすの一はつねほのめく一あさまたき
はれみくもりみ一ゆきはふりつつ

【寛正年間百韻20巻】／何路〔うめのは
な〕／寛正3(1462)年2月25日

うくひすの一こゑよりとしはくれそめて
つもるかうへに一ゆきはふりつつ

【天文年間百韻38巻】／何人〔はなにふ
きし〕／天文23(1554)年6月2日

うぐいすがなく
鶯が鳴く

あけがた
→明け方

ねくらしるく一うくひすそなく
つきかすむ一にひたまくらの一あけかたに

【享徳二年千句】／何路〔くまもなき〕／
享徳2(1453)年8月11日～13日

はねならはしの一うくひすそなく
さそはれむ一はるをちさとの一あけかたに

【池田千句】／唐何〔はなにあけて〕／永
正7(1510)年春以前<永正5年春>

またふるゆきを一うくひすそなく
たけあめる一とほそはまたき一あけかたに

【永正年間百韻34巻】／山家〔ひとめさ
へ〕／永正8(1511)年11月3日

はなとあさほらけ
→花と朝ほらけ

あはれをそへて一うくひすそなく
あかすねし一つきとはなとの一あさほらけ

【永禄元年花千句】／□□〔さそふなよ〕
／永禄元(1558)年3月23日～25日

さそふひかけに一うくひすそなく
さきいてぬ一はなのほひや一あさほらけ

【成立不詳・宗長以前15巻】／名号〔な
かはひと〕／成立時不詳

かすむこのあした
→霞むこの朝

はねならはせる一うくひすそなく
このあした一ほのほのかすむ一のいにて

【出陣千句】／何袋〔はなさかり〕／永正
元(1504)年10月25日～27日

たけをはやしと一うくひすそなく
うちなひき一かすみにけりな一このあした

【成立不詳・宗砌以前6巻】／唐何〔なて
しこの〕／成立時不詳

あさほらけ
→朝ほらけ

うくひすのなく一こゑのしつけさ
うちなひく一へのはかすみの一あさほらけ

【天正年間百韻57巻】／何路〔かすむよ
の〕／天正6(1578)年2月18日

きけはかすかに一うくひすのなく
かけひろき一たけのはやしの一あさほらけ

【元和年間百韻24巻】／□□〔とけゆけ
は〕／裏白／元和8(1622)年1月3日

ほととぎす
→時鳥

なつもかへらて一うくひすのなく
はつこゑを一いつしかとまつ一ほととぎす

【天正年間百韻57巻】／□□〔かみかき
の〕／天正17(1589)年5月24日

ゆくをやしたふ一うくひすのなく
ほととぎす一すをたつこゑも一きかまほし

【春夢草／書陵部本】／夏／永正12(1516)
年、13年

うぐいすのこゑ
鶯の声

たにのとはあけてもおそひのひかり
→谷の戸は明けても遅い日の光

かすみにもる一うくひすのこゑ
たにのとは一あけてもおそき一ひのひかり

【天正年間百韻57巻】／□□〔ともなし
に〕／天正18(1590)年11月21日

みきりをよその一うくひすのこゑ
たにのとは一あけてもおそき一ひのひかり

【文禄年間百韻 1 2 巻】／□□ [けさのま
に] / 文禄 2(1593) 年 1 月 14 日

→朝ぼらけ

かけ□みやまのうくひすのこゑ
あさほらけーかすむかたよりーしもとけて

【元龜二年千句】／何路 [はなにつきに]
／元龜 2(1571) 年 3 月 5 日

はかせもゆるきーうくひすのこゑ
こすのとはーさええしよのーあさほらけ

【天文年間百韻 3 8 巻】／何人 [うつせよ
に] / 天文 21(1552) 年 2 月 23 日

→霞む朝まだき

よそにうつろふーうくひすのこゑ
なかめわひぬーかすむのかみのーあさまたき

【永正年間百韻 3 4 巻】／白何 [さみたれや]
／千句第五 / 永正 15(1518) 年 5 月 14 日

ほのかにきぬるーうくひすのこゑ
やまのはのーかすみよふかきーあさまたき

【大永四年月並千二百韻】／□□ [ゆふた
ちは] / 月並千二百韻 / 大永 4(1524) 年 6
月 23 日

いつくかねくらーうくひすのこゑ
あさまたきーけふのきちかくーかすむらむ

【文明十五年千句 1 1 巻】／二字返音 [は
なははの] / 文明 15(1483) 年 * 月 * 日 ~
3 月 2 日

→うちかすみ

なれてひさしきーうくひすのこゑ
くれたけのーかけもちひろにーうちかすみ

【天文廿四年梅千句】／何木 [つみそへよ]
／天文 24(1555) 年正月 7 日

いまこそなけなーうくひすのこゑ
すゑなひくーひとむらたけのーうちかすみ

【文明十四年万句 5 2 巻】／二字反音 [ま
つうきて] / 文明 14(1482) 年 7 月 4 日 ~
9 月 14 日

かきねをしたふーうくひすのこゑ
のきはさへーはるけきみねにーうちかすみ

【天正四年万句 7 0 巻】／何路 [やまかは
も] / 天正 4(1576) 年 5 月 6 日 ~ 7 月 19 日

→枝に梅咲く

すのうちになくーうくひすのこゑ
まつにほふーみなみのえたにーうめさきて

【至徳以前百韻 7 巻】／何所 [ちりぬるか]
／至徳 4(1387) 年以前

かすみにならすーうくひすのこゑ
しもはかつーきえしかたえのーうめさきて

【天文年間百韻 3 8 巻】／何人 [こよひま
つ] / 天文 20(1551) 年 9 月 12 日

やとからさひしーうくひすのこゑ
あさちふにーひともとたてるーうめさきて

【竹林抄 / 新古典文学大系本】／春 / 文明
8(1476) 年 5 月頃

→霞みつつ

わかやととはぬーうくひすのこゑ
かすみつつーありあけのこるーやまにねて

【聖廟千句】／初何 [きのふより] / 明応
3(1494) 年 2 月 10 日 ~ 12 日

いつちこつたふーうくひすのこゑ
かすみつつーしものしづくのーおとはして

【成立不詳・宗長以前 1 5 巻】／何人 [や
まみつは] / 成立時不詳

→霞む野

うめかかなれやーうくひすのこゑ
なくさめとーあれたるむらもーかすむのに

【明応年間百韻 2 2 巻】／何人 [たまた
れ] / 明応 5(1496) 年 6 月 7 日

うめかかとむるーうくひすのこゑ
しもふかきーあけかたとほみーかすむのに

【天文年間百韻 3 8 巻】／何船 [あさかは
に] / 天文 12(1543) 年 7 月 29 日

→霞む

はるまたさむきーうくひすのこゑ
たにのとやーけしきはかりにーかすむらむ

【伊予千句】／山河〔やとりとへ〕／天文
6(1537)年5月22日

いつくかねくらうくひすのこゑ
あさまたきけふのきちかくかすむらむ

【文明十五年千句11巻】／二字返音〔は
なははの〕／文明15(1483)年*月*日～
3月2日

のこりおほかるうくひすのこゑ
のへやなほくれゆくまににかすむらむ

【文禄二年千句10巻】／山河〔まつとし
る〕／文禄2(1593)年4月8日～10日

→^{そことなくかすむ}そことなく霞む

やなきやうきねうくひすのこゑ
そことなくかすみたなひきあくるよに

【天文年間百韻38巻】／朝何〔またてき
く〕／天文9(1540)年4月25日

はねうちかはすうくひすのこゑ
そことなくかすむのもせのむらすすめ

【天正四年万句70巻】／初何〔そてくち
か〕／天正4(1576)年5月6日～7月19日

→^{みずたえだえ}水絶え絶え

やまかけつたふうくひすのこゑ
たけをゆくさとのかけみつたえたえに

【熊野千句】／何船〔のとかなる〕／文正
元(1466)年3月以前

のきはにちかきうくひすのこゑ
こほりとくにはのやりみつたえたえに

【弘治三年春雪千句】／何木〔はなならて〕
／弘治3(1557)年正月7日～9日

→^{はるのころ}春残る

ききてやすらふうくひすのこゑ
あけほのやはるゆくひとにのこるらむ

【秋津洲千句】／唐何〔うめかかの〕／天
文15(1546)年8月25日

はなちるさとのうくひすのこゑ
はるやたたたけひとむらにのこるらむ

【天正四年万句70巻】／何風〔ふちなみ
に〕／天正4(1576)年5月6日～7月19日

→^{ほととぎす}時鳥

したひもてゆくうくひすのこゑ
きかはやも一やよひのすゑのほととぎす

【羽柴千句】／朝何〔よもにふく〕／天正
6(1578)年5月18・19日

またほのかなるうくひすのこゑ
なつきてもいかにつれなきほととぎす

【文禄年間百韻12巻】／□□〔わかたけ
を〕／文禄2(1593)年5月20日

なかぬほとまつうくひすのこゑ
なつちかきみやまのさとのほととぎす

【天正四年万句70巻】／何鳥〔かせにし
るき〕／天正4(1576)年5月6日～7月
19日

→^{ゆききえる}雪消える

けさのきちかきうくひすのこゑ
やまかすむかけにきのふのゆききえて

【美濃千句】／何船〔ひとやいつ〕／文明
4(1473)年12月16日～21日

かりねのやまはうくひすのこゑ
はらひゆくたもとはるのゆききえて

【天文廿四年梅千句】／何人〔うめいつく〕
／天文24(1555)年正月7日

かすみのうちのうくひすのこゑ
ありあけのつきにうちちるゆききえて

【天文年間百韻38巻】／何人〔かせみえ
て〕／千句第四／天文13(1545)年間11月
25日

→^{よわのつき}夜半の月

かすむあしたのうくひすのこゑ
のとかにもねやのとをしきよはのつき

【天文廿四年梅千句】／山河〔うちなひき〕
／天文24(1555)年正月7日

あくれはちかきうくひすのこゑ
まきのとのそともはうすきよはのつき

【天正年間百韻57巻】／何木〔ひとへつ
つ〕／裏白／天正18(1590)年1月3日

はるのの
→春の野

たれすきかてのーうくひすのこゑ
はるののにーこころもみゆるーこまとめて

【永正年間百韻34巻】／何船〔うらかせ
の〕／永正14(1517)年6月

たつねてゆかむーうくひすのこゑ
たれとなくーいへゐゆかしきーはるののに

【壁草／大阪天満宮文庫本】／春／永正
2(1505)年8月23日以後同3年3月以前

のべちかいうぐいす
野辺近い鶯

ゆきのたけのすゑすゑ
→雪の竹の末々

のへちかきーやとのうくひすーねをたえて
ゆきをれふかきーたけのすゑすゑ

【永禄年間百韻28巻】／何船〔うたふよ
の〕／永禄5(1563)年12月9日

のへちかきーにはのうくひすーこゑそひて
ゆきのとけゆくーたけのすゑすゑ

【天正年間百韻57巻】／何路〔いろもか
も〕／裏白／天正14(1586)年1月3日

うける

かけいにうけるみず
懸樋に受ける水

→ここかしこ

かけひにうくるーみつのまにまに
ここかしこーいはのはさまもーううるたに

【浜宮千句】／□□〔ちりうせぬ〕／

かけひにうくるーおほかはのみつ
ここかしこーなかれのすゑかーいせのうみ

【天正四年万句70巻】／下何〔むらさき
の〕／天正4(1576)年5月6日～7月19日

うすい

うすけむり
薄煙

まつのひともと
→松の一本

うすけふりーあともさひしきーたにのおく
こけふむいはのーまつのひともと

【河越千句】／白何〔はるかせに〕／文明
2(1470)年正月10～12日

のへのくれーたけもなひけるーうすけふり
たかすむのきそーまつのひともと

【文明十四年万句52巻】／何国〔ほとと
きす〕／文明14(1482)年7月4日～9月
14日

うた

うたのしなじな
歌の品々

はなのこのもと
→花の木の下

あはれにもーうたのしなじなーよみかはし
しるもしらぬもーはなのこのもと

【慶長年間百韻27巻】／□□〔はるもこ
そ〕／裏白／慶長13(1608)年1月3日

すちかへすーうたのしなじなーたたならす
いつれとめつるーはなのこのもと

【元和年間百韻24巻】／□□〔さほひめ
や〕／元和6(1620)年1月24日

こころあらそうた
心争う歌

うぐいすのこゑごえ
→鶯の声々

こころあらそふーうたのくちくち
はるされはーうくひすかはつーこゑこゑに

【初瀬千句】／何衣〔しけるとも〕／享徳
元・2(1452)年、4月

こころあらそふーうたのかちまけ
こゑこゑにーなくうくひすをーこにいれて

【文明十四年万句52巻】／栗何〔あけて
みむ〕／文明14(1482)年7月4日～9月
14日

うち

あめのうち
雨の内やまほととぎす
→山時鳥つれつれは—なほまさりゆく—あめのうち
おとつれすてし—やまほととぎす【元和年間百韻24巻】／□□〔としとし
に〕／元和6(1620)年12月5日しつかにと—うちかたらへる—あめのうち
くもゐるまとの—やまほととぎす

【宗長関係8種】／老耳／天理本／

うちのゆき
内の雪なみのうきふね
→浪の浮舟もろともに—ひとむわけけり—うちのゆき
よるへはいつく—なみのうきふね【看聞日記紙背50巻】／何路〔うのはな
の〕／応永30(1423)年4月4日あとみする—しのひかよひの—うちのゆき
ことにこきいる—なみのうきふね【看聞日記紙背50巻】／何人〔かみにう
め〕／応永31(1424)年2月25日かすみのうちのみずのみなかみ
霞の内の水の水上こまとらう
→言問うかすみのうちの—みつのみなかみ
こととはむ—いつくかはるの—みなどかは【天文年間百韻38巻】／何人〔はなのい
ろも〕／天文14(1545)年2月25日かすみにおつる—みつのみなかみ
はるくる—うちのしはふね—こととはむ【行助関係4種】／行助句集／書陵部本／
文正元(1466)年(7月16日)くさのとのうち
草の戸の内まちわびる
→待ち侘びるひとりねつらし—くさのとのうち
うちすさふ—ころもかたしき—まちわひて【新撰菟玖波集／実隆本】／恋下／明応
4(1495)年9月26日すみうかるるや—くさのとのうち
すてしみも—いまはのゆふへ—まちわひて【壁草／大阪天満宮文庫本】／雑下／永正
2(1505)年8月23日以後同3年3月以前さみだれのうち
五月雨の内ほととぎす
→時鳥かけはしいつこ—さみだれのうち
ひとこゑは—くもにとわたる—ほととぎす【永禄年間百韻28巻】／何船〔あととふ
を〕／永禄3(1560)年11月9日とふひとまれの—さみだれのうち
ゆめにしも—おとつれてなけ—ほととぎす【文禄二年千句10巻】／何船〔あめかし
た〕／文禄2(1593)年4月8日～10日しばのとのうち
柴の戸の内おもむ
→思ふすめはのとけき—しばのとのうち
ならはしの—みをなとつらく—おもむらむ【三島千句】／何船〔とりのねは〕／文明
3(1471)年3月21日～23日なほたちかへる—しばのとのうち
みをすては—いつくもとなど—おもむらむ【園塵第四／早稲田大学本】／雑下／永正
6、7年ただゆめのうち
ただ夢の内まどろむ
→まどろむおとつれぬるや—ただゆめのうち
つきよよし—とはまちつるも—まどろみて【永禄年間百韻28巻】／何船〔ひきう
る〕／裏白／永禄5(1562)年1月3日ひかりのかけは—ただゆめのうち
ともしひの—ふくるもしらす—まどろみて

【行助関係4種】／行助句集／書陵部本／

ふるみやのうち
古宮の内つばくらめ
→燕すたれやつるる—ふるみやのうち
つばくらめ—いているのきの—ひましけく

【寛正年間百韻20巻】／何人〔うめおく
る〕／寛正6(1465)年1月16日

はるをわすれぬーふるみやのうち
おなしすにーこころやかかくるーつはくらめ

【行助関係4種】／行助句集／書陵部本／

ゆきのうち
雪の内

→冬籠もる頃

むらとりのーたつたにみえぬーゆきのうち
たれとくらさむーふゆこもるころ

【三島千句】／御何〔はるとほし〕／文明
3(1471)年3月21日～23日

たくしはのーのこるともなきーゆきのうち
かせもあたらすーふゆこもるころ

【成立不詳・心敬以前14巻】／何袋〔ま
たしかし〕／成立時不詳

うつ

あさころもうつ
麻衣打つ

→人は訪い来ない

うらみをもーうちそへかましーあさころも
あさましきまでーひとはとひこす

【成立不詳・宗祇以前15巻】／山何〔め
つらしき〕／成立時不詳

あさころもーうつなるこゑのーふくるよに
かはるこころかーひとはとひこす

【文明十四年万句52巻】／何縁〔あさか
はや〕／文明14(1482)年7月4日～9月
14日

うちかえすた
打ち返す田

→蛙鳴く

うちかへすーたのものなかれーあめはれて
をりをえかほにーかはつなくなり

【天文十八年梅千句】／何人〔みしいろは〕
／天文18(1549)年正月11日

うちかへすーこそあらたはーさひしきに
ときもわすれすーかはつなくなり

【天文廿四年梅千句】／花之何〔かみかき
の〕／天文24(1555)年正月7日

たけをうつこえ
竹を打つ声

→夜が更ける

あられときときーたけをうつこゑ
ねぬとりよーあなかまよはもーふけぬらむ

【伊庭千句】／三字中略〔ちりやすき〕／
大永4(1524)年3月17日～21日

ゆふへのあめのーたけをうつこゑ
いつのまにーあられふるよのーふけぬらむ

【竹林抄／新古典文学大系本】／冬／文明
8(1476)年5月頃

うつのやま

うつのやま
宇津の山

→鶯のしたみち

うつのやまーあひみるひとーなみたにて
ふゆはかれぬるーつたのしたみち

【文明十四年万句52巻】／玉何〔ゆきな
らは〕／文明14(1482)年7月4日～9月
14日

わかかたへーふみことつくるーうつのやま
やすらひにけりーつたのしたみち

【文明十五年千句11巻】／何風〔たきな
みや〕／文明15(1483)年*月*日～3月2
日

うつのやまこえ
宇津の山越え

→秋の風

つきにもまよふーうつのやまこえ
しもはらふーみちのゆくてのーあきのかせ

【延徳年間百韻16巻】／初何〔さけはさ
く〕／千句第三／延徳4(1492)年3月3日

あはれはおなしーうつのやまこえ
ふるさとのーゆふへなりけりーあきのかせ

【大永四年月並千二百韻】／□□〔へたつ
なよ〕／月並千二百韻／大永4(1524)年3
月23日

うつる

うつりもてゆく
移り持て行く

→おきいでる

うつりもてゆくーあきのかなしさ
いまこむとーなくさめつつもーおきいてて【文禄年間百韻12巻】／□□[たかには
も]／文禄2(1593)年5月27日うつりもてゆくーそてのつきかけ
つゆをしくーかりねののへをーおきいてて【文明十四年万句52巻】／山何[つゆや
けさ]／文明14(1482)年7月4日～9月
14日うつろう
移ろう→ありあけのつき
有明の月ひのかけはーかたへのやまにーうつろひて
けさまですすしーありあけのつき【弘治三年春雪千句】／何田[うくひすの]
／弘治3(1557)年正月7日～9日さまざまのーあきのくさきもーうつろひて
こころふかきはーありあけのつき【春夢草／書陵部本】／秋／永正12(1516)
年、13年こはきうつろう
小萩移ろう→あきのかぜ
秋の風こはきうつろふーいねかてのころ
しをるなよーみにいまよりのーあきのかせ【延徳年間百韻16巻】／夢想[すみよし
の]／延徳2(1490)年9月こはきうつろふーふるあとのには
とふひともーあらぬすみかのーあきのかせ【天正年間百韻57巻】／何木[けふかへ
よ]／天正9(1581)年4月1日そでのうつりが
袖の移り香→あやめくさ
菖蒲草のこりもふかきーそてのうつりか
ふきすてしーきのふのつまのーあやめくさ

【元龜二年千句】／何木[たきなみの]／

元龜2(1571)年3月5日

なにはかなしやーそてのうつりか
あやめくさーかくるよとのはーあれまさり

【浜宮千句】／□□[ときもよも]／

→おもかげ
面影これそかたみのーそてのうつりか
おもかけはーてにもたまらずーまたきえて【美濃千句】／何草[いつくにて]／文明
4(1473)年12月16日～21日わかれしきみかーそてのうつりか
おもかけはーなかなかつらきーなこりにて【天文年間百韻38巻】／何人[にほへか
つ]／天文13(1544)年1月29日わすれむものかーそてのうつりか
おもかけはーくれしものこるーきくのあき【天正年間百韻57巻】／何船[みちち
を]／天正13(1585)年5月27日→かたみ
形見また□□□□□ーそてのうつりか
ありあけはーあふ□□□□のーかたみにて【看聞日記紙背50巻】／山何[なつかけ
よ]／応永26(1419)年3月29日きゆるもをしやーそてのうつりか
たまくらはーみをはなたれぬーかたみにて【天文年間百韻38巻】／x x[しかそな
く]／天文24(1555)年9月19日→たちばな
橘ともにやとまるーそてのうつりか
たちはなはーむかしのつまのーゆかりにて【看聞日記紙背50巻】／何人[まつちか
し]／応永32(1425)年6月25日ちきりはかなきーそてのうつりか
たちはなはーかけたにみえずーくつるのに【天正四年万句70巻】／玉何[まつはら
も]／天正4(1576)年5月6日～7月19日

うのはな

うのはな
卯の花→^{たまがわのなみ}多摩川の浪うのはなのーかかるかきほやーたわむらむ
ゆふかけちかしーたまかはのなみ【称名院追善千句】／何船 [をしましと]
／永禄6(1563)年12月14日～18日うのはなのーかきほたわわにーさきかかり
さとはいつくのーたまかはのなみ【毛利千句】／何船 [みてもおもふ]／文
禄3(1594)年5月12日～16日

うみ

はるのうみつら
春の海面→^{のどか}長閑かりもかへるなーはるのうみつら
のとかなるーしほひのをちにーやまをみて【文明年間百韻34巻】／何人 [よるはつ
き]／文明18(1486)年2月6日まつみえわたるーはるのうみつら
のとかなるーなみにうかはぬーふねもなし【明応年間百韻22巻】／何木 [やまはゆ
き]／明応7(1498)年11月4日

うめ

うめさく
梅咲く→^{うぐいすのこえ}鶯の声いつはともーわかきにまちしーうめさきて
ほのかにきぬるーうくひすのこゑ【大永四年月並千二百韻】／□□ [ゆふた
ちは]／月並千二百韻／大永4(1524)年6
月23日わかになつむーのをなつかしみーうめさきて
ふりにしあとにーうくひすのこゑ【成立不詳・宗養以前8巻】／山何 [ひと
こゑや]／成立時不詳うめにおう
梅匂う→^{あさほらけ}朝ぼらけかたえほのほのーうめにほふなり
うくひすのーはふきにあくるーあさほらけ【称名院追善千句】／何人 [せめてさは]
／永禄6(1563)年12月14日～18日ふゆきなからにーうめにほふなり
かせはまたーかすむともなきーあさほらけ【文禄年間百韻12巻】／□□ [わかなつ
みし]／文禄2(1593)年1月8日→^{うぐいす}鶯かたえほのほのーうめにほふなり
うくひすのーはふきにあくるーあさほらけ【称名院追善千句】／何人 [せめてさは]
／永禄6(1563)年12月14日～18日つつくかきねのーうめにほふなり
うくひすのーこゑするかたのーこすまきて【天正年間百韻57巻】／何人 [わかくさ
も]／天正11(1583)年1月10日うめにおうころ
梅匂う頃→^{うぐいす}鶯たけのさえたもーうめにほふころ
うくひすのーはふきにつゆやーこほるらむ【天文年間百韻38巻】／何路 [あさかほ
の]／天文10(1541)年7月29日かすめるつきにーうめにほふころ
うくひすのーはなにねぬよのーこゑもかな【心敬関係10種】／心玉集／陽明文庫本
／うめのか
梅の香→^{うぐいすのこえ}鶯の声うめかかのーこすゑにをしきーたもとかな
ききてやすらふーうくひすのこゑ【秋津洲千句】／唐何 [うめかかの]／天
文15(1546)年8月25日うめかかのーかすみふきとけーあさあらし
ゆきにこほれるーうくひすのこゑ

【成立不詳・宗祇以前15巻】／何人〔うめかかの〕／成立時不詳

うめかかや一すたれのほかに一にほふらむ
にはにいりくる一うくひすのこゑ

【寛正年間百韻20巻】／何船〔とりねむる〕／寛正6(1465)年12月14日

うめかかや一そのよのそてに一のこるらむ
あけほのしたふ一うくひすのこゑ

【心敬関係10種】／芝草内岩橋／本能寺本
／

→^{はるをしる}春を知る

うめかかの一まへわたりする一たますたれ
よふかくおきて一はるそしらるる

【天文年間百韻38巻】／x x〔ちりうせぬ〕／天文19(1550)年2月17日

うめかかの一そてよりほかに一うつりきて
かすみのおくも一はるそしらるる

【天文年間百韻38巻】／何木〔しくるるか〕／天文19(1550)年8月25日

うめのかがする
梅の香がする

→^{おきいでる}起き出でる

たをらまほしき一うめかかそする
そことなく一かすむあけほの一おきいてて

【明応年間百韻22巻】／何船〔はなそはる〕／明応2(1493)年3月25日

たちえはかすむ一うめかかそする
はるのよは一またあけぬより一おきいてて

【天正年間百韻57巻】／□□〔ききわくや〕／天正18(1590)年10月8日

→^{ひかげさす}日影さす

しはののきはも一うめかかそする
ひかけさす一ゆきやしづくに一のこるらむ

【伊勢千句】／薄何〔たかため〕／大永2(1522)年8月4日～8日

とほそひらけは一うめかかそする
ひかけさす一のきはのつら一けさとけて

【永禄年間百韻28巻】／何人〔つきなから〕／永禄5(1562)年8月11日

うめのひともと
梅の一本

→^{うぐいす}鶯

さきそめにけむ一うめのひともと
うくひすの一うちはふきくる一そののうち

【五吟一日千句】／何木〔としのうちに〕
／天正9(1581)年11月19日

やつれてにはふ一うめのひともと
うくひすの一いくはるとなき一こゑおいて

【大永三年月並千三百韻】／□□〔やまいくへ〕／月並千三百韻／大永3(1523)年8月23日

こしけきなかの一うめのひともと
うくひすの一うちはふきたる一こゑすなり

【天正年間百韻57巻】／初何〔はるたちて〕／裏白／天正12(1584)年1月3日

くれないのうめ
紅の梅

→^{うぐいす}鶯

しろきかのちのくれないのうめ
うくひすの一しもにあさひを一まちとりて

【大原野十花千句】／何船〔ひときつつ〕
／元龜2(1571)年2月5日～7日

あかぬなかめやくれないのうめ
うくひすの一みきりはなれす一こゑはして

【元和年間百韻24巻】／□□〔やつかほの〕／元和6(1620)年8月23日

ゆきをやそむるくれないのうめ
うくひすの一のきはのみねに一なきそめて

【文明十四年万句52巻】／何水〔たまやとる〕／文明14(1482)年7月4日～9月14日

そでのうめのか
袖の梅の香

→^{うぐいす}鶯

かすみもあへぬ一そでのうめかか
うくひすの一こゑもゆくゆく一とほきのに

【天文年間百韻38巻】／何人〔みれはみし〕／天文13(1545)年12月25日

もるるかたやは一そでのうめかか
うくひすの一そともうつる一こゑすなり

【永禄年間百韻28巻】／何船[あととふ
を]／永禄3(1560)年11月9日

におううめのか
匂う梅の香

あきほらけ
→朝ぼらけ

とへとやつけしーにほふうめかか
はるとしもーあらてゆきふるーあさほらけ

【大永年間百韻14巻】／何人[あきのつ
き]／大永6(1526)年9月13日

こすふくかせにーにほふうめかか
いととさへーこころうかるーあさほらけ

【天正四年万句70巻】／何路[ちりと
の]／天正4(1576)年5月6日～7月19日

やどのうめ
宿の梅

のまのうぐいすのこえ
→軒の鶯の声

ひとやいつーはるとひくるーやとのうめ
けさのきちかきーうくひすのこゑ

【美濃千句】／何船[ひとやいつ]／文明
4(1473)年12月16日～21日

たをるなどーそてにやにほふーやとのうめ
のきはにきなくーうくひすのこゑ

【文明年間百韻34巻】／何人[たをるな
と]／文明15(1483)年1月16日

やどのうめのか
宿の梅の香

うぐいす
→鶯

かこふにもるるーやとのうめかか
うくひすのーのへよりのへにーなきいてて

【五吟一日千句】／何舟[はなをさへ]／
天正9(1581)年11月19日

たちえかくれぬーやとのうめかか
うくひすのーこゑするつきやーあけぬらむ

【大永三年月並千三百韻】／□□[はると
ふく]／月並千三百韻／大永3(1523)年1
月23日

なきひとしたへーやとのうめかか
うくひすのーなくねもたれをーしのふらむ

【享禄年間百韻8巻】／追善[あきのこゑ]
／享禄5(1532)年7月29日

つほみにこもるーやとのうめかか
うくひすのーかきほのゆきをーはらひきて

【寛永年間百韻15巻】／□□[よのはる
を]／裏白／寛永8(1631)年1月3日

うら

しがのうらぶね
志賀の浦舟

かみまつり
→神祭

よもあけかたのーしかのうらぶね
かみまつりーもよほすそてのーいさなひに

【天文十八年梅千句】／山河[うめさけは]
／天文18(1549)年正月11日

なみたにかすむーしかのうらぶね
たひひとにーあくるやけふのーかみまつり

【行助関係4種】／行助連歌／天理本／

すまのうら
須磨の浦

なみこもと
→浪此処許

よもすからーつきのかけのみーすまのうら
なみこもとにー□□□□なる

【看聞日記紙背50巻】／山河[ちよもみ
む]／応永19(1412)年1月14日

うみつらのーかすみそめたるーすまのうら
なみこもとにーちかきしほとき

【看聞日記紙背50巻】／唐何[ひそをし
き]／応永30(1423)年3月29日

ほとちかしーいくたのかはせーすまのうら
なみこもとにーよするとまやか

【文安頃千句4巻】／何路[やへひとへ]
／

つまとうちどりしばなく
→妻訪う千鳥しば鳴く

すまのうらやーわひつつおくるーあけくれに
つまとふちとりーかせにしはなく

【弘治年間百韻8巻】／何路[ゆくみつや]
／弘治2(1556)年3月24日

すまのうらや—あかつきかたの—そらのつき
つまとふちとり—きりにしはなく

【元龜年間百韻6巻】／何人〔はなのとき
も〕／元龜4(1573)年6月6日

すまのうらなみ
須磨の浦浪

→^{もしおやくけむり}藻塩焼く煙

ふなちにあらき—すまのうらなみ
もしほやく—けふりにうみも—かきくれて

【表佐千句】／唐何〔つきはたた〕／文明
8(1476)年3月6日<~8日>

みのうきふしに—すまのうらなみ
もしほやく—けふりはあさな—ゆふなにて

【天正年間百韻57巻】／何路〔かすむよ
の〕／天正6(1578)年2月18日

→^{あわじがた}淡路瀉

ふねさしとむる—すまのうらなみ
あはちかた—うしほのむかふ—せとをみて

【宝徳四年千句】／何人〔はなそころ〕／
宝徳4(1452)年3月12日

つきをみるよの—すまのうらなみ
あはちかた—せとのあきかせ—みにしみて

【菟玖波集／広島大学本】／秋上／文和
5(1356)年冬~翌年の春

すみよしのうら
住吉の浦

→^{あわじしま}淡路島

なみにはるたつ—すみよしのうら
あさみとり—かすみにうかふ—あはちしま

【大永四年月並千二百韻】／□□〔そよと
しも〕／月並千二百韻／大永4(1524)年10
月23日

あくれはかすむ—すみよしのうら
つきもたた—みるみるとほき—あはちしま

【慶長年間百韻27巻】／□□〔いなつま
も〕／慶長9(1604)年7月6日

なおすまのうら
なお須磨の浦

→^{ともちどり}友千鳥

うくともたへて—なほすまのうら
をりをりは—たえすこととへ—ともちとり

【飯盛千句】／x x〔かけすすし〕／永祿
4(1561)年5月27日~29日

なれなむほとも—なほすまのうら
きくたにも—へたてさそなの—ともちとり

【五吟一日千句】／何袋〔さくはなの〕／
天正9(1581)年11月19日

ふくなみのうらかぜ
吹く浪の浦風

→^{とりのなきたつ}鳥の鳴き立つ

ふきまとはせる—なみのうらかせ
さよふかき—うきねのとり—なきたちて

【大永三年月並千三百韻】／□□〔はなに
つき〕／月並千三百韻／大永3(1523)年3
月23日

ふきこそかはれ—なみのうらかせ
なかそらに—まさこのちとり—なきたちて

【元和年間百韻24巻】／□□〔まつふく
や〕／元和8(1622)年10月29日

うらなう

みちのつじうら
道の辻占

→^{まちわびる}待ち侘びる

ききもさためぬ—みちのつじうら
はるかなる—たひのかへさを—まちわひて

【永祿石山千句】／青何〔わくらはの〕／
永祿7(1564)年5月12日

こひにまよへる—みちのつじうら
まちわひて—われとははやと—おもふみに

【文安頃千句4巻】／二字返音〔はなをりて〕
／

うらむ

こころうらめしい
心恨めしい

→^{つれなくみる}連れなく見る

おもひたえよの—こころうらめし
つれなくは—みえぬものから—とにかくに

【老葉／毛利本】／恋下／（文明 17(1485)
年 7 月 23 日頃）

ひるますくせのーこころうらめし
つれなくはーたれあさかほのーはなもみむ

【園塵第四／早稲田大学本】／秋／永正 6、7
年

つれなさをうらむ
連れなさを恨む

ありあけのつき
→有明の月

つれなきをーさのみはいかてーうらむらむ
あはてこよひもーありあけのつき

【河越千句】／何船〔やまかせに〕／文明
2(1470) 年正月 10～12 日

つれなきもーまたつれなきやーうらむらむ
まつのはさはるーありあけのつき

【園塵第一／統群書類従本】／秋／長享 2
年

ひとがうらめしい
人が恨めしい

とらう
→訪う

ふりはへてこぬーひとはうらめし
いつかたのーたよりにわれをーとひつらむ

【萱草／伊地知本】／恋／文明 6(1474) 年
2 月以前

とほさかりぬるーひとはうらめし
おほつかなーたかこころにてーとひつらむ

【下草／龍谷大学本】／恋下／延徳 2(1490)
年～3 年春頃

えだ

はなのひとえだ
花の一枝

やまざくら
→山桜

をるをはゆるせーはなのひとえた
ひとをこそーととむるせきのーやまさくら

【文和千句】／手何〔はにしける〕／文和 5
年

このかけもののーはなのひとえた
やまさくらーてをもゆるさすーをりもちて

【専順関係 2 種】／春／応仁元 (1467) 年
5 月 10 日

おい

おいのゆくすゑ
老いの行く末

もりのしたくさ
→森の下草

あるにまかするーおいのゆくすゑ
たねさへにーもりのしたくさーよもかれし

【寛正年間百韻 20 卷】／何人〔いはかね
に〕／寛正 2(1461) 年 9 月 23 日

たのむもあるやーおいのゆくすゑ
ふゆかれのーもりのしたくさーはるまちて

【新撰菟玖波集／実隆本】／冬／明応
4(1495) 年 9 月 26 日

おうさかのせき

おうさかのせき
逢坂の関

ほととぎす
→時鳥

きのふこえにしーあふさかのせき
ひとこゑをーみやこのそらのーほととぎす

【毛利千句】／何船〔みてもおもふ〕／文
禄 3(1594) 年 5 月 12 日～16 日

こよひかたむるーあふさかのせき
つきになくーおとはのやまのーほととぎす

【名所句集／静嘉堂文庫本】／夏／（大永
前後）

こえるおうさかのせき
越える逢坂の関

こがくれる
→木隠れる

いつこえつらむーあふさかのせき
しけくなるーなけきにわかみーこかくれて

【住吉千句】／何木〔つきはふゆ〕／大永
元 (1521) 年 11 月 1 日～14 日

けふこえそむるーあふさかのせき
すきのはにーいりひのかけのーこかくれて

【文明十四年万句 5 2 卷】／何船〔みつと
りか〕／文明 14(1482) 年 7 月 4 日～9 月
14 日

おうさかのやま

おうさかのやま
逢坂の山

→^{さねかつら}真葛

またもとのむーあふさかのやま
さねかつらーさねしはかりはーなくさまて

【園慶第四／早稲田大学本】／恋／永正6、7
年

なはかりなれやーあふさかのやま
ちきりしはーいつかさねこむーさねかつら

【合点之句／神宮文庫本】／雑／天文
9(1541)年12月25日

こえるおうさかのやま
越える逢坂の山

→^{みやこのはるがすみ}都の春霞

こゆるそつらきーあふさかのやま
へたつなよーかへりみやこのーはるがすみ

【文安雪千句】／何路〔なほつもれ〕／文
安2(1445)年10月18日

こゆるなこりやーあふさかのやま
みやこよりーあらたまりゆくーはるがすみ

【弘治三年春雪千句】／何木〔はなならて〕
／弘治3(1557)年正月7日～9日

おおはら

おおはらまつり
大原祭り

→^{はるのみやびと}春の宮人

おほはらやーまつりのそてのーあまたにて
みゆきことなるーはるのみやひと

【慶長年間百韻27巻】／□□〔はるもこ
そ〕／裏白／慶長13(1608)年1月3日

おほはらやーかみのまつりもーちかつきて
はなをりかさすーはるのみやひと

【天正四年万句70巻】／山何〔みかつき
の〕／天正4(1576)年5月6日～7月19日

おか

おかべのはじのひとむら
岡辺の櫓の一群

→^{ゆうひがくれ}夕日隠れ

をかへいろこきーはしのひとむら
つゆやなほーゆふひかくれにーのこるらむ

【出陣千句】／何袋〔はなさかり〕／永正
元(1504)年10月25日～27日

をかへになひくーはしのひとむら
うすきりのーゆふひかくれにーもすなきて

【応仁年間百韻6巻】／何人〔つきのあき〕
／応仁2(1468)年1月1日

をかへになひくーはしのひとむら
うすきりのーゆふひかくれにーもすなきて

【萱草／伊地知本】／秋／文明6(1474)年
2月以前

おき

おきのしらなみ
沖の白浪

→^{たつたやまのあき}立田山の秋

かせにまかするーおきつしらなみ
たつたやまーみねのこのはにーあきくれて

【壁草／大阪天満宮文庫本】／秋／永正
2(1505)年8月23日以後同3年3月以前

しくれつはれつーおきつしらなみ
たつたやまーあきふかくなるーほとみえて

【宗長関係8種】／壬生宛／書陵部本／

おきのつりぶね
沖の釣舟

→^{なみのうえ}浪の上

かすみはかりのーおきのつりぶね
やまのははーほのかにたにもーなみのうへ

【永正十花千句】／何木〔ひかすたに〕／
永正13(1516)年3月11日～14日

のとかにうかふーおきのつりぶね
あけほののーつきをひたせるーなみのうへ

【慶長年間百韻27巻】／何人〔わかくさ
の〕／慶長4(1599)年1月22日

かすみにかふーおきのつりふね
とふとりもーそれかあらぬかーなみのうへ

【天正四年万句70巻】／一字露頭【わか
くさも】／天正4(1576)年5月6日～7月
19日

おきのなみ
沖の浪

たつたのやま
→立田の山

はるかにもーからくそみゆるーおきつなみ
たつたのやまのーよはのかよひち

【永正十花千句】／何人【かせをのみ】／
永正13(1516)年3月11日～14日

ひとにさてーいかかかたらむーおきつなみ
たつたのやまのーあきのいろいろ

【老葉／吉川本】／秋／文明13(1481)年
夏頃

おきのふね
沖の舟

うらのあさあけ
→浦の朝明け

おきつふねーのとけきなみにーこききえて
つきになきたるーうらのあさあけ

【太神宮法楽千句】／薄何【まきのはや】
／長享2(1488)年7月

おきつふねーつきをともとやーいてぬらむ
あきかせさむきーうらのあさあけ

【文明十四年万句52巻】／堀何【かるひ
とは】／文明14(1482)年7月4日～9月
14日

おぎ

おぎにかぜ
荻に風

ものおもふころ
→物思う頃

をきにかせーほのかにしのふーゆふまくれ
つきにもみえしーものおもふころ

【河越千句】／白何【はるかせに】／文明
2(1470)年正月10～12日

をきにかせーややたさむくーはやなりて
つゆもわかみのーものおもふころ

【太神宮法楽千句】／白何【つゆなから】
／長享2(1488)年7月

おぎのうわかぜ
荻の上風

あきのよ
→秋の夜

そよともすれはーをきのうはかせ
さらぬたにーねさめかちなるーあきのよに

【菟玖波集／広島大学本】／秋上／文和
5(1356)年冬～翌年の春

たまくらなれやーをきのうはかせ
つきしろくーむすはぬゆめのーあきのよに

【合点之句／神宮文庫本】／秋／天文
9(1541)年12月25日

ふるさひと
→古里人

ゆめにうらむるーをきのうはかせ
みしはみなーふるさとひとのーあともうし

【長享年間百韻6巻】／何人【ゆきなから】
／長享2(1488)年1月22日

かりもなくなりーをきのうはかせ
たかあきとーふるさとひとのーまたるらむ

【天文年間百韻38巻】／何船【あさかほ
に】／天文12(1543)年7月29日

おもふ
→思う

ひとはおとせずーをきのうはかせ
あきやきてーわかふるさととーおもふらむ

【壁草／大阪天満宮文庫本】／秋／永正
2(1505)年8月23日以後同3年3月以前

そてをそはらふーをきのうはかせ
いかてかはーさてもとはぬをーおもふらむ

【那智庵／北野天満宮本】／永正十二年／

ふるさと
→古里

そふるやうらみーをきのうはかせ
ひまもなくーのきはくすはふーふるさとに

【永正年間百韻34巻】／何路【あきにか
せ】／永正8(1511)年7月14日

おもひたゆまぬーをきのうはかせ
もとあらのーこはきうつろふーふるさとに

【合点之句／神宮文庫本】／独吟百韻／天
文9(1541)年12月25日

ゆうまぐれ
→夕まぐれ

そよそのことと一をきのうはかせ
なかめつつ一たちつつわふる一ゆふまぐれ

【伊予千句】／御何〔すすしさは〕／天文
6(1537)年5月22日

みもあへぬつゆに一をきのうはかせ
むらさめの一くもまにつきの一ゆふまぐれ

【那智箒／北野天満宮本】／永正十四年／

おく

おくやまのかけ
奥山の陰

うちとけて
→打ち解けて

こころのほかの一おくやまのかけ
まつのとに一はらはぬゆきも一うちとけて

【秋津洲千句】／何人〔しかのねに〕／天
文15(1546)年8月25日

さりとはまた一おくやまのかけ
うちとけて一なかぬみやこの一ほととぎす

【園塵第一／統群書類従本】／夏／長享2
年

みよしののおく
み吉野の奥

かげくれる
→影暮れる

くもはいくへそ一みよしののおく
たつねつる一はなにやすらふ一かけくれて

【看聞日記紙背50巻】／何物〔かみとう
め〕／応永29(1422)年2月25日

さとのほかなる一みよしののおく
かへらしよ一たつぬるはなの一かけくれて

【看聞日記紙背50巻】／何船〔ゆきにみ
て〕／応永32(1426)年11月25日

はなをみる
→花を見る

みをすつへくは一みよしののおく
わかやとと一たつねのみこし一はなをみて

【壁草／書陵部本】／春／永正9年

いりにしひとの一みよしののおく
しるへする一あとさへたゆる一はなをみて

【宗長関係8種】／宗長付句／「雑袋」所
載本／

よぶことり
→呼子鳥

はなをたよりの一みよしののおく
ゆくゆくも一ききこそわかね一よぶことり

【東山千句】／何船〔をきにかせ〕／永正
15(1518)年8月10日～12日

よしひなかさも一みよしののおく
すつるみの一つれつれいつち一よぶことり

【那智箒／北野天満宮本】／永正十二年／

やまのおく
山の奥

みねのまつかぜ
→峰の松風

すみわひぬ一いつらとしふる一やまのおく
ともとはきくを一みねのまつかぜ

【延徳年間百韻16巻】／夢想〔ものおも
はて〕／延徳元(1489)年9月27日

やまのおく一さひしくとても一いてはせし
こころしてふけ一みねのまつかぜ

【大永年間百韻1巻】／何路〔いつのよも〕
／大永5(1525)年4月15日

おくる

おくる
送る

はるのかりがね
→春の雁

いくくにを一すくるもつきや一おくるらむ
きたにたひたつ一はるのかりがね

【享徳二年千句】／唐何〔こころひく〕／
享徳2(1453)年8月11日～13日

ふるさとに一ととけとふみや一おくるらむ
なこりになきぬ一はるのかりがね

【文明十四年万句52巻】／錦何〔つきひ
とつ〕／文明14(1482)年7月4日～9
14日

そでふきおくるかぜ
袖吹きおくる風

たまほこ
→玉鉾

そでふきおくる一みねのこからし
たまほこの一すゑはゆふしも一さえさえて

【天文年間百韻3 8巻】／x x [かめにさ
す] /天文 21(1552) 年 2 月 20 日

そてふきおくる一かせのすすしさ
たまほこの一ゆくへにしはしーやすらひて

【天正年間百韻5 7巻】／□□ [うめかえ
の] /裏白 /天正 19(1591) 年 1 月 3 日

おぐるま

おぐるまのおと
小車の音

ゆうがお
→夕顔

めくらすみちの一をくるまのおと
ゆふかほの一はなのかきほに一さくとみて

【享徳二年千句】 /何人 [つきとたか] /
享徳 2(1453) 年 8 月 11 日～13 日

わかれをつくる一をくるまのおと
ゆふかほの一やとかりそめの一ちきりにて

【看聞日記紙背5 0巻】 /何路 [まつしけ
り] /応永 31(1424) 年 3 月 18 日

おしい

おしむ
惜しむ

あきのはつかぜ
→秋の初風

をしむとも一いへともしらす一はるくれて
なみたをいそく一あきのはつかせ

【文明年間百韻3 4巻】 /何路 [やまかせ
に] /文明 15(1483) 年 3 月 2 日

をしむとも一きぬきぬさそな一あまつかり
つきはこのころ一あきのはつかせ

【享禄年間百韻8巻】 /追善 [あきのこゑ]
/享禄 5(1532) 年 7 月 29 日

おしんではなをみる
惜しんで花を見る

そでのうめのか
→袖の梅の香

みなひとの一をしむによらぬ一はなをみて
をりてかへさは一そてのうめかか

【飯盛千句】 /何路 [しけるきに] /永禄
4(1561) 年 5 月 27 日～29 日

をしまかぬ一ちるにまかする一はなをみて
をらすすきぬる一そてのうめかか

【大永四年月並千二百韻】 /□□ [うくひ
すの] /月並千二百韻 /大永 4(1524) 年 2
月 23 日

ちるのがおしい
散るのが惜しい

うずらなく
→鶉鳴く

うすはなすすき一ちらまくもをし
うつらなく一かたやまくれて一さむきひに

【長享年間百韻6巻】 /何人 [ゆきなから]
/長享 2(1488) 年 1 月 22 日

なみよるをはな一ちらまくもをし
うつらなく一へのふるみち一またやこむ

【大永年間百韻1 4巻】 /何人 [つきやふ
ね] /大永 2(1522) 年 8 月

おそい

おそざくら
遅桜

まつのおしなみ
→松の藤浪

したふとや一さきかへるはなのおそざくら
なつをかけたる一まつのふちなみ

【浅間千句】 /何木 [したふとや] /永正
11(1514) 年 5 月 13 日～19 日

やよやよひ一のこるもひさし一おそざくら
はるちよかけよ一まつのふちなみ

【看聞日記紙背5 0巻】 /山何 [やよやよ
ひ] /応永 31(1424) 年 3 月 18 日

おそざくら一なほこたかくて一はもあをし
はなまちえたる一まつのふちなみ

【文安年間百韻1巻】 /夢想 [おそざくら]
/文安 2(1445) 年 3 月 18 日

おだまき

しずのおだまき
賤の苧環

いにしえ
→古

いかにおもひを一しつのをたまき
いにしへの一なみたにまさる一あきはきぬ

【聖廟千句】／初何〔きのふより〕／明応
3(1494)年2月10日～12日

はかなのすちやーしつのをたまき
いにしへのーゆゑうきかみやーみわのすき

【那智竈／北野天満宮本】／永正十四年／
永正14(1517)年冬

おちこち

かすむおちこち
霞む遠近

いそぐかり
→急ぐ雁

あさとあくれはーかすむをちこち
はるのよをーいくつらかりのーいそくらむ

【大永四年月並千二百韻】／何色〔うめの
はな〕／月並千二百韻／大永4(1524)年1
月23日

わくるのはらのーかすむをちこち
あさかりやーとりのねとめてーいそくらむ

【元和年間百韻24巻】／□□〔まつふく
や〕／元和8(1622)年10月29日

のべのおちこち
野辺の遠近

あらわれる
→現れる

いろになりたるーのへのをちこち
たちそへはーまつさへはなにーあらはれて

【天正年間百韻57巻】／初何〔はるたち
て〕／裏白／天正12(1584)年1月3日

かすむたもとのーのへのをちこち
たまほこのーみちはゆきまにーあらはれて

【天正年間百韻57巻】／□□〔けふひく
や〕／天正12(1584)年1月10日

おちる

おちるあまつかり
落ちる天つ雁

つきのいでしほ
→月の出潮

あまつかりーふかるるかせにーなきおちて
あしまはくらきーつきのいてしほ

【看聞日記紙背50巻】／何船〔あきかせ
の〕／応永15(1408)年7月23日

やまとほきーいりえにおつるーあまつかり
ゆふひにむかふーつきのいてしほ

【成立不詳・宗長以前15巻】／□□〔ち
らぬより〕／成立時不詳

つきおちる
月落ちる

あきのはつしも
→秋の初霜

かきりあるーとりもなくなくーつきおちて
そらにみちゆくーあきのはつしも

【文安雪千句】／朝何〔ゆきさそへ〕／文
安2(1445)年10月18日

ひきすつるーとやまのくもにーつきおちて
めくるのきはにーあきのはつしも

【伊予千句】／何人〔たちはなは〕／天文
6(1537)年5月22日

かけきよきーまさこのうへにーつきおちて
ややさむからしーあきのはつしも

【天文十八年梅千句】／何壺〔しつくさへ〕
／天文18(1549)年正月11日

なみだおちる
涙落ちる

ひともない
→人もない

ゆふへのくもにーなみたおちけり
なかむなよーそらにはおもふーひともなし

【新撰菟玖波集／実隆本】／恋中／明応
4(1495)年9月26日

あはれをしるやーなみたおちけり
ことわりをーうらむるにうきーひともなし

【那智竈／北野天満宮本】／永正十三年／

→古唄

しのふものからーなみたおちけり
とふひともーおもかけかはるーふるさとに

【弘治三年春雪千句】／薄何〔そらにあめ〕
／弘治3(1557)年正月7日～9日

なこりかなしくーなみたおちけり
ふるさとにーまたわかれぬるーゆめさめて

【園塵第三／続群書類従本】／雑下／文亀
元(1501)年3月18日

→^{ゆめさめ}夢覚める

つきにむかふも一なみたおちけり
ひとにそふ一ころははなく一ゆめさめて

【新撰菟玖波集／実隆本】／恋中／明応
4(1495)年9月26日

なこりかなしく一なみたおちけり
ふるさとに一またわかれぬる一ゆめさめて

【園塵第三／統群書類従本】／雑下／文亀
元(1501)年3月18日

むかつてなみだおちる
向って涙落ちる

→なる

むかへはつきに一なみたおちけり
おいさりし一あきはたかよに一なりぬらむ

【竹林抄／新古典文学大系本】／雑下／文
明8(1476)年5月頃

むかふくさきに一なみたおちけり
たかさとの一よもきかそまと一なりぬらむ

【園塵第四／早稲田大学本】／雑下／永正
6、7年

おと

^{あきないことのお}
飽きない琴の音

→^{まつかぜのつき}松風の月

なほゆふかけに一あかぬことのお
まつかぜの一さそははつきは一おそからし

【秋津洲千句】／何路[まつなくを]／天
文15(1546)年8月25日

あまたのうちに一あかぬことのお
まつかぜの一ふきすさひたる一よはのつき

【文禄年間百韻12巻】／□□[はなのい
ろや]／文禄4(1595)年1月30日

おぐるまのおと
小車の音

→^{ゆうがお}夕顔

めくらすみちの一をくるまのおと
ゆふかほの一はなのかきほに一さくとみて

【享徳二年千句】／何人[つきとたか]／
享徳2(1453)年8月11日～13日

わかれをつくる一をくるまのおと
ゆふかほの一やとかりそめの一ちきりにて

【看聞日記紙背50巻】／何路[まつしけ
り]／応永31(1424)年3月18日

^{かえるとりのね}
帰る鳥の音

→^{くれわたる}暮れ渡る

かすみのうちに一かへるとりのね
まよひゆく一はるのやまちの一くれわたり

【天正年間百韻57巻】／何路[いろもか
も]／裏白／天正14(1586)年1月3日

やとりさためす一かへるとりのね
こてふとふ一まかきののへの一くれわたり

【慶長年間百韻27巻】／□□[あらしに
も]／裏白／慶長5(1600)年1月3日

^{かわおと}
川音

→^{つきのみさやけき}月のさやけき

かはおとも一おほみのさとは一かきくもり
いりえにくる一つきのさやけき

【太神宮法楽千句】／玉何[あきとほし]
／長享2(1488)年7月

かはおとも一はるかにかせの一ふきおくり
せせにうつろふ一つきのさやけき

【慶長年間百韻27巻】／□□[ねふかき
や]／慶長4(1599)年2月8日

^{きぬたのおと}
砧の音

→^{たまほこのゆくえ}玉鉾の行方

きぬたのおとは一むらのをちこち
たまほこの一ゆくへもわかす一くれそめて

【嵯峨千句】／初何[はなのこと]／(元
亀4)天正元(1573)年正月9日～11日

きぬたのおとは一かせのまにまに
たまほこの一ゆくへやきりの一へたつらむ

【元龜年間百韻6巻】／何船[むさしのも]
／元龜3(1572)年3月18日

^{こないでおとする}
来ないで音する

→^{うぐいす}鶯

こすにおとす一つゆのあをやき
うくひすの一はねうちはふき一あめすきて

【永正十花千句】／何船〔ねぬるよを〕／
永正 13(1516)年 3月 11日～14日

こすにおとす一かせのとかなり
うくひすの一つはさにもろき一はなちりて

【天文年間百韻 3 8 巻】／山何〔つきやけ
さ〕／天文 21(1552)年 7月 26日

さわみずのおと
沢水の音

ふねくだすふしみ
→舟下す伏見

きけはさむけき一さはみつのおと
ふねくだす一ふしみのつきの一ふくるよに

【竹林抄／新古典文学大系本】／秋／文明
8(1476)年 5月頃

きけはさむけき一さはみつのおと
ふねくだす一ふしみのつきの一ふくるよに

【心敬関係 1 0 種】／心敬僧都百句／岩瀬
文庫本／文明 7(1475)年 4月 16日以前

きけはさむけき一さはみつのおと
ふねくだす一ふしみのつきの一ふくるよに

【名所句集／静嘉堂文庫本】／秋／(大永
前後)

つきもさひしき一さはみつのおと
ふねくだす一ひともふしみの一えはふけて

【心敬関係 1 0 種】／吾妻辺云捨／天理本
／

しぎのはねおと
鳴の羽音

あきのしも
→秋の霜

たつかたしるき一しぎのはねおと
あかつきに一なりにけらしな一あきのしも

【浜宮千句】／□□〔つきのいろと〕／

とほさかりぬる一しぎのはねおと
よなよなに一つきにふりしく一あきのしも

【慶長年間百韻 2 7 巻】／□□〔あとをす
ゑに〕／裏白／慶長 15(1610)年 1月 3日

しげきむしのね
繁き虫の音

よわのつき
→夜半の月

かへのうちにも一しけきむしのね
みえこしも一ゆめとほさかる一よはのつき

【大原野十花千句】／何壩〔かをりきて〕
／元龜 2(1571)年 2月 5日～7日

かせややさむき一しけきむしのね
やとれとは一すみやはあらず一よはのつき

【宗長関係 8 種】／老耳／天理本／

ちかいかわおと
近い川音

すずしさ
→涼しさ

なみたかかれや一ちかきかはおと
すずしさは一またぬにうかふ一あきのくも

【石山四吟千句】／薄何〔うつせみの〕／
天文 24(1555)年 8月 15日～19日

あめのうちより一ちかきかはおと
すずしさは一なつのほかなる一やなきかけ

【成立不詳・宗長以前 1 5 巻】／□□〔ち
らぬより〕／成立時不詳

つゆのおとときくにお
露の音聞く庭

たまだれのきり
→玉垂の霧

つゆのおとときく一にはのゆふかけ
たまだれの一きりのなこりや一はれさらむ

【伊勢千句】／何人〔ふかくいりて〕／大
永 2(1522)年 8月 4日～8日

つゆのおとときく一にはのしたをき
たまだれの一そとのきりの一かたよりて

【天正年間百韻 5 7 巻】／何船〔すまし
みは〕／天正 13(1585)年間 8月 12日

とまりふねおとしていざち
泊まり舟音していざち

たびのくにくにのひと
→旅の国々の人

とまりふね一おとしていつち一わたるらむ
たれたひならぬ一くにくにのひと

【東山千句】／一字露頭〔つきみつ〕／
永正 15(1518)年 8月 10日～12日

とまりふね一おとしていつち一わかるらむ
あはれのたひや一くにくにのひと

【宗長関係 8 種】／興津宛／書陵部本／

はるのもののお
春の物の音

あらればしりのよるのつき
→**鼯走りの夜の月**

ひくてもゆかしーはるのものね
あけのこるーあらればしりの一つきのよに

【住吉千句】／何田【このはちる】／大永
元(1521)年11月1日～14日

しらへえならぬーはるのものね
しつけさやーあらればしりのーよはのつき

【元和年間百韻24巻】／□□【そらにみ
つ】／元和8(1622)年10月19日

みずのおと
水の音

いずこにある
→**何処にある**

うつみつるーたけはかけひのーみつのおと
いしまのこけはーいつくなるらむ

【天正年間百韻57巻】／何人【ときはい
ま】／天正10(1582)年5月24日

とめよれはーくるるいはまのーみつのおと
いつくなるらむーたきつかはかみ

【慶長年間百韻27巻】／□□【さきつか
む】／裏白／慶長19(1614)年1月3日

むしのね
虫の音

ころもでのつゆ
→**衣手の露**

うたたねのーはしみはちかきーむしのねに
おほえすしほるーころもでのつゆ

【称名院追善千句】／初何【したふなよ】
／永禄6(1563)年12月14日～18日

むしのねにーむかしのあとのーこととひて
わけいるのへのーころもでのつゆ

【嵯峨千句】／花之何【うめかかは】／(元
龜4)天正元(1573)年正月9日～11日

ふるさとのおき
→**古里の秋**

むしのねもーみたるるつゆのーしけきのに
とへはなみたのーふるさとのあき

【大永三年月並千三百韻】／□□【うめか
かや】／月並千三百韻／大永3(1523)年2
月23日

むしのねもーきえわたるよのーありあけに
あはれなそへそーふるさとのあき

【天文年間百韻38巻】／夢想【ちりてな
ほ】／天文10(1541)年3月

よわのむしのね
夜半の虫の音

つまにかりまくら
→**月に仮枕**

をささかもとのーよはのむしのね
ねられしなーつきにかせふくーかりまくら

【寛正年間百韻20巻】／何人【うめおく
る】／寛正6(1465)年1月16日

ところさためぬーよはのむしのね
さやかなるーつきをみるみるーかりまくら

【大永年間百韻14巻】／何人【ちあきを
も】／大永5(1525)年9月21日

おとずれる

ひとのおとずれ
人の訪れ

まくらちる
→**桜散る**

いまはおもはしーひとのおとつれ
さくらちるーやまはかさなるーおくにして

【東山千句】／何色【しかのねは】／永正
15(1518)年8月10日～12日

きのふはありしーひとのおとつれ
さくらちるーはるのやまさとーくれやらて

【新撰菟玖波集／実隆本】／春下／明応
4(1495)年9月26日

おとめ

あまおとめ
天乙女

くものかよいじ
→**雲の通り路**

いかにしてーあかるをとめむーあまをとめ
かせはしるらしーくものかよひち

【文明年間百韻34巻】／何木【うめかか
を】／文明15(1483)年2月19日

あらはれしーそのよはさそなーあまをとめ
あとたにとほきーくものかよひち

【明応年間百韻22巻】／何船【やなきふ
く】／明応9(1500)年7月6日

おとろえる

おとろえる
衰える→あまつおとめご
天つ乙女子あさかほのーはなのしたくさーおとろへて
さかりほとなきーあまつをとめこ【紫野千句】／何木〔はにしける〕／延文
2(1357) 年以後-応安 3 年 6 月以前つきははやーあきのしくれにーおとろへて
みはたたつゆのーあまつをとめこ【成立不詳・宗仰以前 6 卷】／唐何〔なて
しこの〕／成立時不詳

おとわやま

かぜのおとわやま
風の音羽山→あふさかのせき
逢坂の関このはふくーあらしのかせのーおとはやま
こえずはたれにーあふさかのせき【顕証院会千句】／何田〔あきくさは〕／
宝徳元(1449) 年 8 月 19 日～21 日あたたかにーふさくるかせのーおとはやま
あさひにむかふーあふさかのせき【五吟一日千句】／何路〔いそのなみ〕／
天正 9(1581) 年 11 月 19 日つきにふるーしくれやかせのーおとはやま
ちらぬもみちにーあふさかのせき【成立不詳・宗祇以前 1 5 卷】／名所〔つ
きにふる〕／存疑／成立時不詳

おなじ

おなじころ
同じ心

→よしや

おなじころにーたのむはかなさ
よしやとてーまたすはひとのーとひやせむ【基佐集／静嘉堂文庫本】／恋／永正
6(1509) 年以前おなじころにーおもはぬそうき
よしやとてーうらみすつれはーゆふまくれ【基佐集／静嘉堂文庫本】／恋／永正
6(1509) 年以前

おのえ

おのえのはなをみる
尾上の花を見る→かすみにくれる
霞に暮れるあすはみむーをのへのはなのーいかならむ
かすみにくるるーたかまとのみや【慶長年間百韻 2 7 卷】／□□〔ゆきにし
も〕／裏白／慶長 9(1604) 年 1 月 3 日くもとみしーをのへのはなのーあともなし
かすみにくるるーかねのさひしさ【慶長年間百韻 2 7 卷】／□□〔うめかか
は〕／裏白／慶長 11(1606) 年 1 月 3 日

おぶね

あまおぶね
海人小舟→あらいそのなみ
荒磯の浪うらかけてーはるかによるのーあまをふね
もしほひさひしーあらいそのなみ【永正年間百韻 3 4 卷】／何船〔かへるか
り〕／永正 16(1519) 年 2 月 19 日あけくれをーうきてのみこそーあまをふね
よるとかへるとーあらいそのなみ【大永年間百韻 1 4 卷】／山何〔いやまし
に〕／大永 5(1525) 年 1 月 17 日→わづかにみえるおきのしま
わづかにみえるおきのしまなみのうへにーなかきひくらすーあまをふね
わづかにみゆるーおきつしまやま【池田千句】／何人〔はるのはな〕／永正
7(1510) 年春以前<永正 5 年春>ゆふくれはーつりにといつるーあまをふね
わづかにみゆるーおきのとほしま【嘉吉年間百韻 1 卷】／何木〔たけのはに〕
／嘉吉 3(1443) 年 10 月 23 日

おぼえる

よざむおぼえる
夜寒おぼえる→からごろも
唐衣

よさむおほゆる一ひとのかたらひ
 あはれみて一とはるなかの一からころも
 【嵯峨千句】／何木〔ちへにみし〕／(元
 龜4) 天正元(1573)年正月9日～11日

よさむおほゆる一かせのたえたえ
 をちこちに一うちいてけりな一からころも
 【永祿年間百韻28巻】／懷旧〔はつゆき
 の〕／永祿6(1563)年11月18日

おぼろ

おぼろつきよ
朧月夜

のどかなまくら
→長閑な枕

おほろつきよに一ゆくそらもなき
 のとかなる一まくらやゆめを一したふらむ
 【難波田千句】／□□〔みつのおもに〕／
 文明14(1482)年10月前後

おほろつきよに一しくあきもやは
 のとかなる一まくらもとらて一あかしはて
 【慶長年間百韻27巻】／□□〔ちりてさ
 へ〕／慶長4(1599)年6月18日

ほととぎすのこえ
→時鳥の声

おほろつきよの一ゆめをのこして
 ほととぎす一はるのまくらの一ひとこゑに
 【紹巴亡父追善千句】／何木〔おとろけと〕
 ／天文24(1555)年3月26日～晦日

おほろつきよの一あけのこるやま
 ほととぎす一それかいまやと一こゑすきて
 【成立不詳・宗祇以前15巻】／何船〔き
 たにみる〕／成立時不詳

おぼろにのこるありあけのつき
朧に残る有明の月

たななしおがねのおと
→棚無し小舟の音

おほろにのこる一ありあけのつき
 ほそえこく一たななしをふね一おとすみて
 【心敬関係10種】／心玉集／静嘉堂文庫本
 ／

おほろにのこる一ありあけのつき
 はるのよの一たななしをふね一おとふけて

【論書4種】／宗長／

やまがおぼる
山が朧

かえるかりがね
→帰る雁

つきいつる一やまものきはも一おほろにて
 いそくかよるも一かへるかりかね

【看聞日記紙背50巻】／山何〔なつかけ
よ〕／応永26(1419)年3月29日

ありあけの一いるやまのはも一おほろにて
 こゑもかすかに一かへるかりかね

【看聞日記紙背50巻】／何人〔まつかえ
に〕／応永29(1422)年3月28日

おみなえし

おみなえし
女郎花

かぜにつゆがおちる
→風に露が落ちる

あたしのに一ありともしらぬ一をみなへし
 あきかせふけは一つゆはおちにき

【明応年間百韻22巻】／何人〔みつかを
り〕／本式／明応2(1493)年3月9日

をみなへし一のはらのつきに一なまめきて
 かせよりくさのつゆはおちにき

【長祿三年千句11巻】／何鳥〔ふかくふ
る〕／長祿3(1459)年12月2日～5日

おもい

きえるならきえるおもい
消えるなら消えるべき思い

みをあきちかくとがほたる
→身を秋近く飛ぶ蛍

きえはきゆへき一おもひならはや
 みるもうし一みをあきちかく一とふほたる

【竹林抄／新古典文学大系本】／夏／文明
8(1476)年5月頃

きえはきゆへき一おもひならはや
 はかなくも一みをあきちかく一とふほたる

【論書4種】／宗長／

おもう

おもいかえす
思い返す→^{さよころもとゆめ}
小夜衣と夢おもひかへせは一なにをうらみむ
かたしくをゆめやはしらぬ一さよころも【延徳年間百韻 1 6 巻】／何路 [かすみさ
へ]／延徳 4(1492) 年 1 月 22 日おもひかへせはうきものこらし
さよころもゆめをせめてのちきりにて【新撰菟玖波集／実隆本】／恋中／明応
4(1495) 年 9 月 26 日おもいたえる
思い耐える→^{つれな}
連れなおもひたえよの一ひのころか
つれなくは一やましといへは一とふもうし【壁草／大東急記念文庫本】／恋上／永正
8(1512) 年 11 月 3 日～永正 9 年おもひたえよのころうらめし
つれなくは一みえぬものから一とにかくに【老葉／毛利本】／恋下／(文明 17(1485)
年 7 月 23 日頃)おもひのけむり
思いの煙→^{あきのくれ}
秋の暮れおもひのけふり一それとたにみよ
ふねとむる一あなたのしほやの一あきのくれ

【老葉／書陵部宗訊筆本】／秋／

おもひのけふり一ふしはかりかは
つきさひし一むろのやしまの一あきのくれ【名所句集／静嘉堂文庫本】／秋／(大永
前後)おもうこととつき
思う事と月→^{あきのあまのはしたて}
秋の天橋立おもふこと一なくてやつきにむかふらむ
あきにもあかぬ一あまのはしたて【寛正年間百韻 2 0 巻】／唐何 [せみのは
の]／寛正 4(1463) 年 6 月 23 日おもふこと一それともわかぬ一つきをみて
いつくのあきか一あまのはしたて【大永三年月並千三百韻】／□□ [やまい
くへ]／月並千三百韻／大永 3(1523) 年 8
月 23 日おもうな
思うな→^{こころである}
心であるうきみとも一よにしまかせて一おもふなよ
たたなにことも一こころなりけり【永禄年間百韻 2 8 巻】／何路 [きえしそ
の]／永禄 7(1564) 年 1 月 22 日たりぬへき一ことをしさのみ一おもふなよ
かたちもよしや一こころなりけり【園塵第一／続群書類従本】／恋／長享 2
年おもうひとのことは
思う人の言の葉→^{われのみひとりそでをぬらす}
我のみ一人袖を濡らすおもふてふ一ひとのことは一たのみなや
われのみひとり一そてはぬらしつ【菟玖波集／広島大学本】／恋上／文和
5(1356) 年冬～翌年の春おもふてふ一ひとのことは一ことならば
われのみひとり一そてはぬらさし【菟玖波集／広島大学本】／恋下／文和
5(1356) 年冬～翌年の春おもうふるさと
思う古里→^{たひのそら}
旅の空ふなちにいと一おもふふるさと
なくさめと一つきはさやけき一たひのそら【聖廟千句】／何木 [きえぬるか]／明応
3(1494) 年 2 月 10 日～12 日かへらむのみを一おもふふるさと
やとりをも一さためぬまの一たひのそら【文禄二年千句 1 0 巻】／何船 [あめかし
た]／文禄 2(1593) 年 4 月 8 日～10 日なにおもう
何思う→^{よのなか}
世の中

くさのいほりに一なにおもふらむ
よのなかに一かかつらふこそ一はかなけれ

【宗牧追善千句】／何路〔のこるなは〕／
永禄4(1561)年9月14日・15日

としへてのちを一なにおもふらむ
けさみしも一ゆふへはかはる一よのなかに

【文明年間百韻34巻】／□□〔ゆきのか
け〕／文明5(1473)年12月5日

みをおもう
身を思う

→^{みよしののおく}み吉野の奥

あれはある一みともいつまで一おもふらむ
たえはやあとを一みよしののおく

【浅間千句】／白何〔たますたれ〕／永正
11(1514)年5月13日～19日

すつるみも一はるはみやこや一おもふらむ
かすめはとほき一みよしののおく

【文明年間百韻34巻】／何船〔かせふか
ぬ〕／文明9(1477)年1月22日

むかしをおもうなみだ
昔を思う涙

→^{あきはかなしい}秋は悲しい

むかしおもふ一なみたにつきや一くもるらむ
いととねさめの一あきそかなしき

【成立不詳・宗長以前15巻】／□□〔ま
たもなき〕／成立時不詳

むかしおもふ一なみたもつゆも一そてのうへ
ひとのこころの一あきそかなしき

【文禄年間百韻12巻】／□□〔けさのま
に〕／文禄2(1593)年1月14日

→^{くさのいお}草の庵

むかしおもふ一こよひはなみた一もよほして
くさのいほりの一あめのさひしさ

【初瀬千句】／何人〔なつやまに〕／享徳
元・2(1452)年、4月

むかしおもふ一なみたにかすむ一よはのつき
くさのいほりの一ゆふくれのはる

【文明十四年万句52巻】／何木〔あきの
ひも〕／文明14(1482)年7月4日～9月
14日

むねのおもい
胸の思い

→^{わがなみだ}我が涙

むねのおもひそ一とふにきえぬる
わかなみた一かさねておちは一いかなかせむ

【弘治三年春雪千句】／何木〔はななて〕
／弘治3(1557)年正月7日～9日

むねのおもひそ一しほしみてうき
わかなみた一いくへのいろを一からころも

【成立不詳・宗砌以前6巻】／何人〔みつ
たまり〕／成立時不詳

ものおもいうころ
物思う頃

→^{いかなる}如何なる

こころくたけて一ものおもふころ
ひとはうし一ゆきてとはむも一いかならむ

【難波田千句】／□□〔あけほのを〕／文
明14(1482)年10月前後

つゆのみたれに一ものおもふころ
よしやとの一ゆふへよあきよ一いかならむ

【永正年間百韻34巻】／何人〔みちしあ
れや〕／永正2(1505)年1月1日

→^{だれがうい}誰が憂い

つゆもわかみの一ものおもふころ
あちきなや一たれゆゑそらも一うかるらむ

【太神宮法楽千句】／白何〔つゆなから〕
／長享2(1488)年7月

なみたすすろに一ものおもふころ
ちきらすよ一たれにゆふへの一うかるらむ

【竹林抄／新古典文学大系本】／恋上／文
明8(1476)年5月頃

ものがなしき
物悲しき

→^{あかつきづき}暁月

ものかなしきの一しもはらふこゑ
ねさめする一あかつきつきの一くさのいほ

【毛利千句】／何田〔やまとりも〕／文禄
3(1594)年5月12日～16日

ふもとは一ものかなしきの一なきすてて
あかつきつきの一いろのさやけさ

【文禄二年千句10巻】／山何〔まつとし
る〕／文禄2(1593)年4月8日～10日

ものごと
物毎

はるあきのそら
→春秋の空

ものことに一ころのとまる一としたけて
ゆくすゑいかに一はるあきのそら

【三島千句】／何船〔とりのねは〕／文明
3(1471)年3月21日～23日

ものことに一みやこをこふる一かたあなな
おくるもつらし一はるあきのそら

【文明年間百韻34巻】／□□〔ゆきのか
け〕／文明5(1473)年12月5日

ものさびしい
物寂しい

こえがきこえる
→声が聞こえる

つねならぬ一としひのかけ一ものさひし
のりのふみよむ一こゑそきこゆる

【浜宮千句】／□□〔くれかたき〕／

ねられすよ一あまよのころ一ものさひし
なくふくろふの一こゑそきこゆる

【長禄三年千句11巻】／何田〔まつちる
や〕／長禄3(1459)年12月2日～5日

おもかけ

あきのおもかけ
秋の面影

くれのはなすすき
→暮れの花薄

ととめおかはや一あきのおもかけ
ふゆくれは一つゆもかれのの一はなすすき

【園塵第四／早稲田大学本】／冬／永正6、7
年

いろなるつゆや一あきのおもかけ
はなすすき一たかそてとなく一のはくれて

【壁草／大阪天満宮文庫本】／冬／永正
2(1505)年8月23日以後同3年3月以前

おもかけ
面影

ありあけのつき
→有明の月

おもかけの一なきこそはるの一わかれなれ
かすみきえたる一ありあけのつき

【菟玖波集／広島大学本】／雜一／文和
5(1356)年冬～翌年の春

おもかけの一おなしすかたを一あらはして
うのはなやまに一ありあけのつき

【老葉／吉川本】／夏／文明13(1481)年
夏頃

かたるばかりにむかうおもかけ
語るばかりに向う面影

→それでないこゑ

かたるはかりに一むかふおもかけ
それならぬ一こゑもむつまし一みやことり

【老葉／吉川本】／旅／文明13(1481)年
夏頃

かたるはかりに一むかふおもかけ
それならぬ一こゑもうらめし一ほととぎす

【論書4種】／宗長／

そうはおもかけ
添うは面影

はなのあと
→花の跡

なみたのあるも一そふはおもかけ
まつならて一あをはのゆきや一はなのあと

【看聞日記紙背50巻】／山何〔かせやく
も〕／応永26(1419)年10月25日

そなたはいかか一そふはおもかけ
はなのあと一かせよりゆきを一ふきたため

【看聞日記紙背50巻】／何物〔いつれみ
む〕／応永32(1425)年9月17日

ひとのおもかけ
人の面影

わかれじ
→別れ路

ゆめかうつつか一ひとのおもかけ
しはしたに一とりとめはやの一わかれちに

【天文廿四年梅千句】／何垣〔あさきりに〕
／天文24(1555)年正月7日

これになくさむ一ひとのおもかけ
けふやかて一こひしかるへき一わかれちに

【応永年間百韻7巻】／□□〔x xはせて〕
／応永24(1417)年3月16日

→秋^{あき}更^かける

つきにみしよの一ひとのおもかけ
のこりなく一よもきかすゑに一あきふけて

【永正十花千句】／何路〔ゆくつきも〕／
永正 13(1516)年 3月 11日～14日

ぬきおくきぬの一ひとのおもかけ
つきすめる一よこのうらかせ一あきふけて

【萱草／伊地知本】／秋／文明 6(1474)年
2月以前

つきにみしよの一ひとのおもかけ
のこれなく一あさちかすゑの一あきふけて

【那智竈／北野天満宮本】／永正十三年／

→慰^{なぐさ}める

まつとはしるや一ひとのおもかけ
うきをたた一こころとしはし一なくさめて

【天文年間百韻 38巻】／朝何〔またてき
く〕／天文 9(1540)年 4月 25日

わすれむとすれは一ひとのおもかけ
あはぬまも一ありつるみそと一なくさめて

【老葉／吉川本】／恋下／文明 13(1481)年
夏頃

→涙^{なみだ}

わすれもやらぬ一ひとのおもかけ
うらみをは一いはぬにもしる一なみたにて

【看聞日記紙背 50巻】／唐何〔としふり
て〕／応永 24(1417)年 11月 23日

あさちかはらの一ひとのおもかけ
つゆはたた一ゆふへのおとす一なみたにて

【竹林抄／新古典文学大系本】／秋／文明
8(1476)年 5月頃

ゆめのおもかけ
夢の面影

→床^{とこのうえ}の上

うつつはかりの一ゆめのおもかけ
まくらかも一あかてまたねの一とこのうへ

【称名院追善千句】／何路〔いるかたの〕
／永禄 6(1563)年 12月 14日～18日

つきをなこりの一ゆめのおもかけ
ふたりねし一あとすさましき一とこのうへ

【毛利千句】／初何〔よととにも〕／文禄
3(1594)年 5月 12日～16日

おりおり

かぜのおりおり
風の折々

→なる^{なる}

このしたつゆは一かぜのをりをり
しかのねや一こはきかいろと一なりぬらむ

【紹巴亡父追善千句】／何人〔なきあとは〕
／天文 24(1555)年 3月 26日～晦日

たもとをしをる一かぜのをりをり
おとつれも一いまやうらみと一なりぬらむ

【天正四年万句 70巻】／初何〔そてくち
か〕／天正 4(1576)年 5月 6日～7月 19日

おれる

くさはのこらないゆきのしたおれ
草は残らない雪の下折

→野^の分^{わか}する庭^にに月^{つき}

くさはのこらぬ一ゆきのしたをれ
のわきせし一にはのつきかけ一よるさえて

【新撰菟玖波集／実隆本】／秋下／明応
4(1495)年 9月 26日

くさはのこらぬ一ゆきのしたをれ
のわきせし一にはをしつかに一つきふけて

【下草／金子本】／秋／延徳 4(1492)年頃

おろか

おろかなこころ
愚かな心

→思^{おも}い初^{はじ}める

おろかなる一こころのすゑも一いかにせむ
おもはぬものを一おもひそめつつ

【紹巴亡父追善千句】／何船〔すみそめの〕
／天文 24(1555)年 3月 26日～晦日

おろかなる一こころよりこそ一まよひつれ
つれなきひとを一おもひそめつつ

【菟玖波集／広島大学本】／恋上／文和
5(1356)年冬～翌年の春

か

うめのか
梅の香うぐいすのこえ
→鶯の声うめかかのーこすゑにをしきーたもとなかな
ききてやすらふーうくひすのこゑ【秋津洲千句】／唐何〔うめかかの〕／天
文 15(1546)年 8月 25日うめかかのーかすみふきとけーあさあらし
ゆきにこほれるーうくひすのこゑ【成立不詳・宗祇以前 15巻】／何人〔う
めかかの〕／成立時不詳うめかかやーすたれのほかにーにほふらむ
にはにいりくるーうくひすのこゑ【寛正年間百韻 20巻】／何船〔とりねむ
る〕／寛正 6(1465)年 12月 14日うめかかやーそのよのそてにーのこるらむ
あけほのしたふーうくひすのこゑ【心敬関係 10種】／芝草内岩橋／本能寺本
／はるをしる
→春を知るうめかかのーまへわたりするーたますたれ
よふかくおきてーはるそしらるる【天文年間百韻 38巻】／x x〔ちりうせ
ぬ〕／天文 19(1550)年 2月 17日うめかかのーそてよりほかにーうつりきて
かすみのおくもーはるそしらるる【天文年間百韻 38巻】／何木〔しくるる
か〕／天文 19(1550)年 8月 25日うめのかがする
梅の香がするおきいでる
→起き出でるたをらまほしきーうめかかそする
そことなくーかすむあけほのーおきいてて【明応年間百韻 22巻】／何船〔はなそは
る〕／明応 2(1493)年 3月 25日たちえはかすむーうめかかそする
はるのよはーまたあけぬよりーおきいてて【天正年間百韻 57巻】／□□〔ききわく
や〕／天正 18(1590)年 10月 8日ひかげさす
→日影さすしはののきはもーうめかかそする
ひかけさすーゆきやしつくにーのこるらむ【伊勢千句】／薄何〔たかため〕／大永
2(1522)年 8月 4日～8日とほそひらけはーうめかかそする
ひかけさすーのきはのつららーけさとけて【永祿年間百韻 28巻】／何人〔つきなか
ら〕／永祿 5(1562)年 8月 11日そでのうつりが
袖の移り香あやめくさ
→菖蒲草のこりもふかきーそでのうつりか
ふきすてしーきのふのつまのーあやめくさ【元龜二年千句】／何木〔たきなみの〕／
元龜 2(1571)年 3月 5日なにはかなしやーそでのうつりか
あやめくさーかくるよとのはーあれまさり

【浜宮千句】／□□〔ときもよも〕／

おもかげ
→面影これそかたみのーそでのうつりか
おもかけはーてにもたまらずーまたきえて【美濃千句】／何草〔いつくにて〕／文明
4(1473)年 12月 16日～21日わかれしきみかーそでのうつりか
おもかけはーなかなかつらきーなこりにて【天文年間百韻 38巻】／何人〔にほへか
つ〕／天文 13(1544)年 1月 29日わすれむものかーそでのうつりか
おもかけはーくれしものこるーきくのあき【天正年間百韻 57巻】／何船〔みちみち
を〕／天正 13(1585)年 5月 27日かたみ
→形見また□□□□□ーそでのうつりか
ありあけはーあふ□□□□のーかたみにて

【看聞日記紙背50巻】／山何〔なつかけよ〕／応永26(1419)年3月29日

きゆるもをしや—そてのうつりか
たまくらは—みをはなたれぬ—かたみにて

【天文年間百韻38巻】／x x〔しかそなく〕／天文24(1555)年9月19日

→ 橘

ともにやとまる—そてのうつりか
たちはなは—むかしのつまの—ゆかりにて

【看聞日記紙背50巻】／何人〔まつちかし〕／応永32(1425)年6月25日

ちきりはかなき—そてのうつりか
たちはなは—かけたにみえす—くつるのに

【天正四年万句70巻】／玉何〔まつはらも〕／天正4(1576)年5月6日～7月19日

そでのうめのか
袖の梅の香

→ 鶯

かすみもあへぬ—そてのうめかか
うくひすの—こゑもゆくゆく—とほきのに

【天文年間百韻38巻】／何人〔みれはみし〕／天文13(1545)年12月25日

もるるかたやは—そてのうめかか
うくひすの—そともにうつる—こゑすなり

【永祿年間百韻28巻】／何船〔あととふを〕／永祿3(1560)年11月9日

におううめのか
匂う梅の香

→ 朝ぼらけ

とへとやつけし—にほふうめかか
はるとしも—あらてゆきふる—あさほらけ

【大永年間百韻14巻】／何人〔あきのつき〕／大永6(1526)年9月13日

こすふくかせに—にほふうめかか
いととさへ—こころうかる—あさほらけ

【天正四年万句70巻】／何路〔ちりとのみ〕／天正4(1576)年5月6日～7月19日

はなうちかおる
花打ち香る

→ 木隠れる

はなうちかをり—とりのなくこゑ
さくうめに—すみかのたけの—こかくれて

【文明十四年万句52巻】／初何〔をるそてに〕／文明14(1482)年7月4日～9月14日

はなうちかをり—のはかすみつつ
ゆふつくよ—うめさくやまに—こかくれて

【合点之句／神宮文庫本】／春／天文9(1541)年12月25日

やどのうめのか
宿の梅の香

→ 鶯

かこふにもるる—やとのうめかか
うくひすの—のへよりのへに—なきいてて

【五吟一日千句】／何舟〔はなをさへ〕／天正9(1581)年11月19日

たちえかくれぬ—やとのうめかか
うくひすの—こゑするつきや—あけぬらむ

【大永三年月並千三百韻】／□□〔はるとふく〕／月並千三百韻／大永3(1523)年1月23日

なきひとしたへ—やとのうめかか
うくひすの—なくねもたれを—しのふらむ

【享祿年間百韻8巻】／追善〔あきのこゑ〕／享祿5(1532)年7月29日

つほみにこもる—やとのうめかか
うくひすの—かきほのゆきを—はらひきて

【寛永年間百韻15巻】／□□〔よのはるを〕／裏白／寛永8(1631)年1月3日

かえす

うちかえすた
打ち返す田

→ 蛙鳴く

うちかへす—たのものなかれ—あめはれて
をりをえかほに—かはつなくなり

【天文十八年梅千句】／何人〔みしいろは〕／天文18(1549)年正月11日

うちかへす一こそこのあらたは一さひしきに
ときもわすれす一かはつなくなり

【天文廿四年梅千句】／花之何〔かみかきの〕／天文 24(1555)年正月 7 日

おもいかえす
思い返す

→^{きよころもとゆめ}小夜衣と夢

おもひかへせは一なにをうらみむ
かたしをゆめやはしらぬ一さよころも

【延徳年間百韻 1 6 卷】／何路〔かすみさへ〕／延徳 4(1492)年 1 月 22 日

おもひかへせは一うきものこらし
さよころも一ゆめをせめての一ちきりにて

【新撰菟玖波集／実隆本】／恋中／明応 4(1495)年 9 月 26 日

かえる

かえりにこまわうこえ
帰りに駒祝う声

→^{みやこびと}都人

ひくれてかへる一こまいはふこゑ
あふさかを一つきもこゆるや一みやこひと

【大永年間百韻 1 4 卷】／何人〔ゆきのうち〕／大永 5(1525)年 1 月 25 日

たかかへるさそ一こまいはふこゑ
みやこひと一うちむれけふの一せきむかへ

【壁草／大阪天満宮文庫本】／旅／永正 2(1505)年 8 月 23 日以後同 3 年 3 月以前

かえりをいそぐ
帰りを急ぐ

→^{しばもつひと}柴持つ人

くもかへる一やまやゆふへを一いそくらむ
しはもつひとの一やすむかけはし

【表佐千句】／何人〔はなそくも〕／文明 8(1476)年 3 月 6 日<~8 日>

すゑかけて一かへるいちちや一いそくらむ
しはもつひとの一つるるこゑこゑ

【文明年間百韻 3 4 卷】／□□〔したつゆは〕／文明 12(1480)年 7 月 4 日

かえる
帰る

→^{いりかひのかね}入相の鐘

いつくとか一ましはおりはへ一かへるらむ
いりあひのかねの一おのかさとさと

【伊勢千句】／何田〔かすやてる〕／大永 2(1522)年 8 月 4 日~8 日

いほにすむ一ひとやはやしに一かへるらむ
いりあひのかねの一のこるふるてら

【至徳以前百韻 7 卷】／何所〔ちりぬるか〕／至徳 4(1387)年以前

→^{うらなみのおと}浦浪の音

よとまりの一ふねやほとなく一かへるらむ
つきをもよする一うらなみのおと

【至徳以前百韻 7 卷】／何木〔かみかきの〕／至徳 4(1387)年以前

むかしもや一おもひいつるに一かへるらむ
あとはなにはの一うらなみのおと

【天文年間百韻 3 8 卷】／何人〔うつせよに〕／天文 21(1552)年 2 月 23 日

→^{おおよどのなみ}大淀の浪

まつのいろ一いくむかしにか一かへるらむ
うらさひしきは一おほよどのなみ

【宝徳四年千句】／何船〔いろそそふ〕／宝徳 4(1452)年 3 月 12 日

わかみにや一うらみはまたも一かへるらむ
まつてふくれは一おほよどのなみ

【伊予千句】／何路〔さみたれの〕／天文 6(1537)年 5 月 22 日

→^{たえだえ}絶え絶え

なくとりも一はるくれぬとや一かへるらむ
たえたえになる一のへのいとゆふ

【太神宮法楽千句】／初何〔ほのめくは〕／長享 2(1488)年 7 月

うくひすの一もとのたににや一かへるらむ
なつやまみちそ一たえたえになる

【文安年間百韻 9 卷】／山何〔はなはひも〕／文安 5(1448)年 2 月 5 日

かえるかりがね
帰る雁→あらわれる
現れる

かすはいくつそーかへるかりかね
とほやまはーゆきののこるにーあらはれて

【看聞日記紙背50巻】／山河〔ちよもみ
む〕／応永19(1412)年1月14日

こゑにしられてーかへるかりかね
とほうらのーほにゆくふねはーあらはれて

【看聞日記紙背50巻】／何路〔あきて
は〕／応永27(1420)年7月25日

→ふるさと
古里

こゑはかりしてーかへるかりかね
ふるさとはーたれすみすててーあれぬらむ

【看聞日記紙背50巻】／何木〔ゆきそは
な〕／応永25(1419)年12月22日

おのかひとつれーかへるかりかね
ふるさとはーたかこころにもーあるものを

【菟玖波集／広島大学本】／羈旅／文和
5(1356)年冬～翌年の春

→やまざくら
山桜

またはるそとやーかへるかりかね
ゆきかたよーこしのしらねのーやまざくら

【看聞日記紙背50巻】／唐何〔いやとし
に〕／応永31(1424)年1月25日

こころつよくもーかへるかりかね
ちるまではーなとかみさりしーやまざくら

【新撰菟玖波集／実隆本】／雑一／明応
4(1495)年9月26日

かえるかりのこゑ
帰る雁の声→あわれをいう
哀れを言う

ひとつらやーかへりおくるるーかりのこゑ
あはれをいははーわかたひのそて

【表佐千句】／何年〔はなにいる〕／文明
8(1476)年3月6日<～8日>

かへるさやーきぬるにかはるーかりのこゑ
あはれをいははーはるのしのめ

【皇学館文庫本千句】／□□〔ちらははな〕

／永禄6(1563)年11月18日以前

かえるさ
帰るさ→かさのはのゆき
笠の端の雪

ともなひてーかたりいちめかーかへるさに
はらへはたまるーかさのはのゆき

【文安雪千句】／何田〔あとそある〕／文
安2(1445)年10月18日

おもくもつーましはのみちのーかへるさに
ふるほとしるきーかさのはのゆき

【永原千句】／唐何〔とりのねに〕／明応
9(1500)年7月17日

かえるさとびと
帰る里人→かた
方

をのへをとほみーかへるさとひと
かねのこゑーいつくきこえぬーかたならむ

【出陣千句】／初何〔けふたつや〕／永正
元(1504)年10月25日～27日

ふねひきすててーかへるさとひと
くれそむるーすゑやふしみのーかたならむ

【元和年間百韻24巻】／□□〔えそすき
ぬ〕／元和8(1622)年4月13日

かえるさのみち
帰るさのみち→なる
なる

あさたかひとのーかへるさのみち
かきくもりーそらやゆきにもーなりつらむ

【天文十八年梅千句】／何船〔つきにうめ〕
／天文18(1549)年正月11日

かすみこめたるーかへるさのみち
なみたにやーおほろつきよとーなりつらむ

【文明十四年万句52巻】／山河〔つゆや
けさ〕／文明14(1482)年7月4日～9月
14日

かえるとりのね
帰る鳥の音→くれわたる
暮れ渡る

かすみのうちにーかへるとりのね
まよひゆくーはるのやまちのーくれわたり

【天正年間百韻57巻】／何路 [いろもかも]／裏白／天正14(1586)年1月3日

やとりさためす一かへるとりのね
こてふとふ一まかきののへの一くれわたり

【慶長年間百韻27巻】／□□ [あらしにも]／裏白／慶長5(1600)年1月3日

かえるふるさと
帰る故里

はるくれる
→春暮れる

よもきになりぬ一かへるふるさと
みつっこしーはなの□□□□ーはるくれて

【延徳年間百韻16巻】／何人 [うめいつこ]／延徳元(1489)年9月27日

みちさへいつこ一かへるふるさと
たまさかのーひとのゆききもーはるくれて

【大永年間百韻14巻】／名号 [なつころも]／大永8(1528)年4月12日

たびごろも
→旅衣

のくれやまくれ一かへるふるさと
たひころもーはなのにしきをーかけにきて

【宗廟関係9種】／宗廟句／静嘉堂文庫本 a
／

ひをふるままにーかへるふるさと
はるさめにーぬれぬれかりのーたひころも

【壁草／大阪天満宮文庫本】／春／永正2(1505)年8月23日以後同3年3月以前

すててかえる
捨てて帰る

おちのひとむら
→遠方の一村

さすふねも一つなきすててや一かへるらむ
ましはのみちはーをちのひとむら

【五吟一日千句】／薄何 [あけほのの]／
天正9(1581)年11月19日

ふえのねやーすなとりすてて一かへるらむ
つきになるよーをちのひとむら

【大永年間百韻14巻】／何人 [つきやふね]／大永2(1522)年8月

だれかえる
誰帰る

ひともなし
→人もなし

わかひへいへにーたれかへるらむ
やまさくらーちるこのもとはーひともなし

【初瀬千句】／何人 [なつやまに]／享徳元・2(1452)年、4月

たれかへるらむーまつかけのさと
みちのへにーかせはおとしてーひともなし

【文明年間百韻34巻】／何人 [よるはつき]／文明18(1486)年2月6日

はるかえる
春帰る

わかぼのくすの掛かるうもれぎ
→若葉の葛の掛かる埋もれ木

ととしのーはるはいつくにーかへるらむ
わかほのくすのーかかろうもれき

【竹林抄／新古典文学大系本】／春／文明8(1476)年5月頃

はるはさてーいくとしとしかーかへるらむ
わかほのくすのーかかろうもれき

【専順関係2種】／法眼専順連歌／赤木文庫本／応仁元(1467)年5月10日

はるのかえるさ
春の帰るさ

あまつかり
→天つ雁

ほとなくおもふーはるのかへるさ
あまつかりーこそそのなこりのーねをなきて

【成立不詳・心敬以前14巻】／何船 [ちりしえぬ]／成立時不詳

おもへはしらぬーはるのかへるさ
ゆきさゆるーこしちにむかふーあまつかり

【成立不詳・宗祇以前15巻】／何椿 [かせきよし]／成立時不詳

ひとかえる
人帰る

のべのひとむら
→野辺の一村

ひとかへるーたけのしたみちーくれやらて
たのもにつつくーのへのひとむら

【永禄石山千句】／何路 [ときはきも]／
永禄7(1564)年5月12日

ひとかへるーあとはしつけきーはるならむ
とりのねかすむーのへのひとむら

【天文年間百韻 3 8 巻】／山河 [なくやい
つれ]／天文 24(1555) 年 5 月 14 日

みやこのつきにかえる
都の月に帰る

→^{くさまくら}草枕

みやこのつきに一たれかへるらむ
しらぬのに一ひとりつゆけき一くさまくら
【応仁年間百韻 6 巻】／x x [そてにみな]
／応仁 2(1468) 年 10 月 22 日

みやこのつきに一われやかへらむ
ゆめもみを一さそひてさめね一くさまくら
【宗長関係 8 種】／興津宛／書陵部本／

かかる

あだとかかりくる
徒と掛かり来る

→^{たまのおのすえ}玉の緒の末

あたなりと一おもひなからも一かかりきて
いのらはちよも一たまのをのすゑ
【天文年間百韻 3 8 巻】／山河 [つきやけ
さ]／天文 21(1552) 年 7 月 26 日

ちかひたた一あたしよなから一かかりきて
ひとひひとひの一たまのをのすゑ
【弘治年間百韻 8 巻】／何人 [ときはなる]
／弘治 3(1557) 年 8 月 28 日

かかる
掛かる

→^{たまのおのすえ}玉の緒の末

わかこころ一ちちになれとや一かかるらむ
たえなむものの一たまのをのすゑ
【天文十八年梅千句】／青何 [ゆけはうめ]
／天文 18(1549) 年正月 11 日

かきりいつ一たのむいなせに一かかるらむ
はかなかりける一たまのをのすゑ
【天正年間百韻 5 7 巻】／初何 [すすしさを]
／天正 2(1574) 年 6 月 10 日

かかるふじなみ
掛かる藤浪

→^{たごのながきひ}田子の長き日

よそのこすゑに一かかるふちなみ
たこのうら一あひきのなはも一なかきひに

【看聞日記紙背 5 0 巻】／何人 [うめのな
の]／応永 30(1423) 年 5 月 27 日

まつにことさら一かかるふちなみ
ひまもなき一たこのしほくみ一なかきひに

【看聞日記紙背 5 0 巻】／山河 [あつきな
ほ]／応永 32(1425) 年間 6 月 25 日

→^{かすみかさやま}霞む三笠山

あをはのころに一かかるふちなみ
あけにけり一かすみのひまに一みかさやま

【看聞日記紙背 5 0 巻】／何人 [はなのひ
も]／応永 27(1420) 年間 1 月 13 日

まつほのほのと一かかるふちなみ
かすみては一なほみねたかし一みかさやま

【看聞日記紙背 5 0 巻】／何船 [ことはな
に]／応永 31(1424) 年 9 月 27 日

かけはし
掛橋

→^{まつのひとつと}松の一本

かけはしの一くちてなかは一たえけらし
よこたはりたる一まつのひとつと

【天正年間百韻 5 7 巻】／何垣 [ゆくそて
に]／天正 11(1583) 年間 1 月 1 日

かけはしの一あ□□□かせの一ふきおくり
こけにかたふく一まつのひとつと

【天正四年万句 7 0 巻】／一字露頭 [やま
のはに]／天正 4(1576) 年 5 月 6 日～7 月
19 日

くもかかるみね
雲かかる峰

→^{ほなざかり}花盛り

みるかうちより一くもかかるみね
ほなざかり一かすみはるれは一あらはれて

【文禄年間百韻 1 2 巻】／□□ [わかなつ
みし]／文禄 2(1593) 年 1 月 8 日

きゆるとみしも一くもかかるみね
かつらきや一さきつつきての一ほなざかり

【文禄年間百韻 1 2 巻】／□□ [うめかえ
や]／文禄 4(1595) 年 7 月 21 日

くものかけはし
雲の掛橋かささぎ
→ 鷗あきかせわたるーくものかけはし
かささきの一つはさもかはすーあまのかは【看聞日記紙背50巻】／何人 [はなのひ
も]／応永27(1420)年閏1月13日みるもすさましーくものかけはし
かささきのーやまとひこゆるーゆふしにも

【宗碩関係2種】／宗碩百句／太田本／

そばのかけはし
傍の掛橋しもはただ
→ 霜はただたえたえなれやーそはのかけはし
しもはただーむすふかうへのーあさほらけ【永禄元年花千句】／□□ [みるままに]
／永禄元(1558)年3月23日～25日くちてあやうきーそはのかけはし
しもはただーふるかうへにもーかさなりて【永禄元年花千句】／□□ [をりのこす]
／永禄元(1558)年3月23日～25日みちのかけはし
道の掛橋てらのかど
→ 寺の角とほくみえぬるーみちのかけはし
とひよるもーひとけまれなるーてらのかと【天正年間百韻57巻】／□□ [まつなら
ぬ]／天正17(1589)年1月4日ゆきとけはつるーみちのかけはし
とひよるもーおくものふかきーてらのかと【慶長年間百韻27巻】／□□ [ちりてさ
へ]／慶長4(1599)年6月18日とらいまる
→ 訪い寄るとほくみえぬるーみちのかけはし
とひよるもーひとけまれなるーてらのかと【天正年間百韻57巻】／□□ [まつなら
ぬ]／天正17(1589)年1月4日ゆきとけはつるーみちのかけはし
とひよるもーおくものふかきーてらのかと【慶長年間百韻27巻】／□□ [ちりてさ
へ]／慶長4(1599)年6月18日みねのかけはし
峰の掛橋さるさけぶ
→ 猿叫ぶかははそこなるーみねのかけはし
さるさけふーこゑさへさむきーたきのもと【顕証院会千句】／何人 [えたわけの]
宝徳元(1449)年8月19日～21日こすゑのあきのーみねのかけはし
さるさけふーやまちのつきのーありあけに【永禄年間百韻28巻】／□□ [つゆはそ
てに]／永禄4(1561)年9月19日よばかり掛かる
世ばかり掛かるつらいたまのお
→ 辛い玉の緒おなしよのーたのみはかりやーかかるとらむ
かすならぬこそーつらきたまのを【大原野十花千句】／何路 [けふこそは]
／元亀2(1571)年2月5日～7日いつのよのーむくひはかりにーかかるとらむ
いとふ□□□□ーつらきたまのを【大永四年月並千二百韻】／□□ [かけき
ゆる]／月並千二百韻／大永4(1524)年8
月23日

かき

かきねづたい
垣根伝いたええ絶え
→ 絶え絶えかきねつたひのーをたのさひしき
かはそひのーしものしははしーたえたえに【薬守千句】／何船 [うゑしうゑは]／長
享元(1487)年10月9日<～11日>かきねつたひのーみつみとりなり
もりいつるーかけひのしつくーたえたえに【天文年間百韻38巻】／夢想 [ちりてな
ほ]／天文10(1541)年3月かきのもとつば
垣の本つ葉

^{みかみみず}
→御溝水

あきにいろつく一かきのもとつは
おもふこと一かきやなかさむ一みかはみつ

【看聞日記紙背50巻】/何目[いろつき
ぬ] / 応永28日5月29日

いろみしそむる一かきのもとつは
はきのとの一はなさへうつる一みかはみつ

【看聞日記紙背50巻】/何路[まっころ
の] / 応永32(1425)年10月15日

かぎる

^{ゆうべかぎる}
夕べ限る

^{おぎのうわかぜ}
→荻の上風

うきことや一ゆふへゆふへに一かきるらむ
ほのかなりつる一をきのうはかせ

【天文廿四年梅千句】/二字反音[くれな
ゐの] / 天文24(1555)年正月7日

さひしさや一わかゆふへにや一かきるらむ
うからはきかし一をきのうはかせ

【成立不詳・心敬以前14巻】/何人[は
るふかし] / 成立時不詳

かく

^{ういしぎのはねがき}
憂い鳴の羽搔き

^{はかない}
→儂い

かそふるもうき一しきのはねかき
あきならて一かよふころの一はかなしや

【元和年間百韻24巻】/□□[あさなあ
さな] / 元和8(1622)年2月29日

うきはまくらの一しきのはねかき
すむつきに一おとろくゆめは一はかなしや

【寛永年間百韻15巻】/□□[とよとし
の] / 裏白 / 寛永20(1643)年1月3日

^{かくもしおぐさ}
搔く藻塩草

^{うみのなぎさにまつのはなおちる}
→海の汀に松の花落ちる

かくてふなるは一たたもしほくさ
みつうみの一みきはにまつの一ははおちて

【論書4種】/宗長 /

かきあつむるは一たたもしほくさ
にほのうみの一みきはにまつの一ははおちて

【論書4種】/宗牧 /

^{しぎのはねがき}
鳴の羽搔き

^{ひとついお}
→一つ庵

あはれなそへそ一しきのはねかき
すむもたた一ちかきのさはの一ひとついほ

【五吟一日千句】/三字中略[くもらさぬ]
 / 天正9(1581)年11月19日

みにしめてゆく一しきのはねかき
はかなきは一かれののすゑの一ひとついほ

【永正年間百韻34巻】/何路[あきにか
せ] / 永正8(1511)年7月14日

かくれる

^{かくれが}
隠れ家

^{みよしののおく}
→み吉野の奥

かくれかを一なほふかかれと一ふるゆきに
くもはいくへそ一みよしののおく

【看聞日記紙背50巻】/何物[かみとう
め] / 応永29(1422)年2月25日

かくれかを一よのうきとてや一たつぬらむ
さとのほかなる一みよしののおく

【看聞日記紙背50巻】/何船[ゆきにみ
て] / 応永32(1426)年11月25日

^{かくれがのやま}
隠れ家の山

^{うずもれる}
→埋もれる

はてはひとりの一かくれかのやま
ふみわけし一いはのかけちの一うつもれて

【成立不詳・宗長以前15巻】/何木[た
ますたれ] / 成立時不詳

はなみかてらの一かくれかのやま
みよしのや一ふかきかすみに一うつもれて

【天正四年万句70巻】/何垣[かけす
し] / 天正4(1576)年5月6日~7月19日

→捨ててから

くもはいくへそーかくれかのやま
すてしよりーみはしたひくるーひともし

【難波田千句】／□□ [うめかかの] / 文

明 14(1482) 年 10 月前後

ひとつとひこぬーかくれかのやま
すてしよりーこのよのほかにーみをなして

【新撰菟玖波集／実隆本】／雑五／明応

4(1495) 年 9 月 26 日

→み吉野

おくかおくなるーかくれかのやま
みよしのはーみねのかけちもーたえはてて

【太神宮法楽千句】／初何 [ほのめくは]

／長享 2(1488) 年 7 月

けふりもみえぬーかくれかのやま
みよしのはーさくらにくもるーよはのつき

【園塵第三／統群書類従本】／春／文亀元

(1501) 年 3 月 18 日

かくれがはない
隠れ家はない

→み吉野の奥

たたあらましにーかくれかはなし
みよしののーまたみぬおくをーたつねはや

【看聞日記紙背 50 卷】／何路 [ふりかつ

け] / 応永 29(1422) 年 [B] 3 月 15 日

うきよのほかのーかくれかはなし
みよしののーおくもやはなにーとはるらむ

【看聞日記紙背 50 卷】／唐何 [あすはさ

け] / 応永 31(1424) 年 2 月 25 日

やまのかくれが
山の隠れ家

→なる

むすひかへたるーやまのかくれか
のかれてやーゆめのうきよとーなりぬらむ

【紫野千句】／何木 [はにしける] / 延文

2(1357) 年以後-応安 3 年 6 月以前

あらましちかきーやまのかくれか
つれなきやーのちのなさけとーなりぬらむ

【天正四年万句 70 卷】／薄何 [やまとほ

み] / 天正 4(1576) 年 5 月 6 日～7 月 19 日

かけい

かけいにうけるみず
懸樋に受ける水

→ここかしこ

かけひにうくるーみつのまにまに
ここかしこーいはのはさまもーううるたに

【浜宮千句】／□□ [ちりうせぬ] /

かけひにうくるーおほかはのみつ
ここかしこーなかれのすゑかーいせのうみ

【天正四年万句 70 卷】／下何 [むらさき

の] / 天正 4(1576) 年 5 月 6 日～7 月 19 日

かける

なっかけて
夏かけて

→岸の卵の花

なっかけてーふちさくかはへーまたもみむ
なみにあらずなーきしのうのはな

【熊野千句】／何田 [おそさくら] / 文正

元 (1466) 年 3 月以前

さかりすくるーゐてのやまふきーなっかけて
はやほころふるーきしのうのはな

【寛文年間百韻 2 2 卷】／□□ [むかしお

もふ] / 寛文 10(1670) 年 2 月 7 日

かけ

あおやぎのかけ
青柳の陰

→花を見る

かせもかよはぬーあをやぎのかけ
けふもまたーなかきひくらしーはなをみて

【新撰菟玖波集／実隆本】／春上／明応

4(1495) 年 9 月 26 日

しはしたたすむーあをやぎのかけ
あふひとにーところせかるるーはなをみて

【宗長関係 8 種】／老耳／天理本 /

あさひかけ
朝日影

→あまのつりぶね
海人の釣舟

をちかたのーまつにいさよふーあさひかけ
さしてそいつるーあまのつりふね

【永正年間百韻34巻】／何人 [つきはな
を]／永正2(1505)年9月13日

あさひかけーみつにみるみるーうつろひて
ゆふしほまでのーあまのつりふね

【宗長関係8種】／老耳／天理本／

あしひたくかげ
葦火焚く影

とふほたる
→飛ぶ蛭

おなしみなとのーあしひたくかけ
うちみたれーくるるかたよりーとふほたる

【天正年間百韻57巻】／山何 [あをやき
の]／天正3(1575)年2月2日

はなれこしまにーあしひたくかけ
とふほたるーゆくかたもなくーさよふけて

【壁草／大阪天満宮文庫本】／夏／永正
2(1505)年8月23日以後同3年3月以前

ありあけのかげ
有明の影

あきのよ
→秋の夜

あらしのあとにーありあけのかげ
ききしよりーかねさやかなるーあきのよに

【永原千句】／千何 [ひととせは]／明応
9(1500)年7月17日

ふねゆくつきやーありあけのかげ
すすしさをーともなふままのーあきのよに

【弘治三年春雪千句】／何人 [ゆきにうめ]
／弘治3(1557)年正月7日～9日

いなづまのかげ
稲妻の陰

よいのま
→宵の間

ほのめきわたるーいなづまのかげ
よひのまにーいつるつきこそーかすかなれ

【文安月千句】／朝何 [ひかりをも]／文
安2(1445)年8月15日

そらたのめなるーいなづまのかげ
さりともとーうちなげかるーよひのまに

【延徳年間百韻16巻】／薄何 [いろにこ
の]／千句第四／延徳元(1490)年12月
26日

いりひかげ
入り日影

まとにひとかへるみゆ
→里に人帰る見ゆ

うつろふかーまつのはこしのーいりひかけ
すゑののさとにーひとかへるみゆ

【三島千句】／二字反音 [いけすみて]／
文明3(1471)年3月21日～23日

くれたけのーみとりのうへのーいりひかけ
たなかのさとにーひとかへるみゆ

【永正年間百韻34巻】／何船 [うらかせ
の]／永正14(1517)年6月

おくやまのかげ
奥山の陰

うちとけて
→打ち解けて

こころのほかのーおくやまのかげ
まつのとにーはらはぬゆきもーうちとけて

【秋津洲千句】／何人 [しかのねに]／天
文15(1546)年8月25日

さりとてはまたーおくやまのかげ
うちとけてーなかなぬみやこのーほととぎす

【園塵第一／統群書類従本】／夏／長享2
年

かげかすか
影かすか

なえなえ
→絶え絶え

はるのいりひのーかけかすかなり
たえたえにーかねのひひきのーきこえて

【称名院追善千句】／一字露頭 [くもはれ
て]／永禄6(1563)年12月14日～18日

よをまつつきのーかけかすかなり
たえたえにーたなひくきりのーうすくもり

【天正年間百韻57巻】／何路 [たちそひ
て]／天正6(1578)年1月3日

かげくれる
影暮れる

きみだれのころ
→五月雨の頃

はなれそのーまつはひときのーかけくれて
なかれもふかしーさみたれのころ

【弘治三年春雪千句】／何舟 [きえてたに]
／弘治3(1557)年正月7日～9日

ゆくみつは—やまもととろに—かけくれて
こりしくもの一さみたれのころ

【享禄年間百韻8巻】／何人〔あさかすみ〕
／享禄5(1532)年1月3日

かげたかくなる
影高くなる

とがほたる
→飛ぶ蛍

しければやまそ—かけたかくなる
なつより—くものうへまで—とふほたる

【熊野千句】／何色〔なみしけし〕／文正
元(1466)年3月以前

さはへのくさそ—かけたかくなる
ひとつつ—やとりをいてて—とふほたる

【園塵第一／統群書類従本】／夏／長享2
年

かすかなかげ
微かな影

とがほたる
→飛ぶ蛍

ともすひかりの—かすかなるかけ
あきかせや—くもるはるかに—とふほたる

【大永四年月並千二百韻】／□□〔ゆふた
ちは〕／月並千二百韻／大永4(1524)年6
月23日

おほみのつきの—かすかなるかけ
ひとつふたつ—そらにみえてや—とふほたる

【元和年間百韻24巻】／□□〔むかしに
や〕／元和5(1619)年7月24日

かりねのつきかげ
仮寝の月影

はなうちかおる
→花打ち香る

かけかすむ—かりねのつきの—あくるよに
はなうちかをり—とりのなくこゑ

【文明十四年万句52巻】／初何〔をるそ
てに〕／文明14(1482)年7月4日～9月
14日

かりねのつきの—かけさむきそら
わくるの—はなうちかをり—すゑくれて

【天正四年万句70巻】／何風〔ふりつも
る〕／天正4(1576)年5月6日～7月19日

さくらちるかげ
桜散る陰

はるながら
→春ながら

なこりもとめす—さくらちるかけ
はるなから—いはなみはやき—よしのかは

【永正年間百韻34巻】／何人〔つきはな
を〕／永正2(1505)年9月13日

ひはらさひしく—さくらちるかけ
はるなから—なほふるゆきの—さえさえて

【天正四年万句70巻】／夕何〔はるさめ
に〕／天正4(1576)年5月6日～7月19日

つきかげすむ
月影澄む

つゆさむいそで
→露寒い袖

ふりにける—のてらのつきの—かけすみて
あかつきおきの—つゆさむきそて

【元和年間百韻24巻】／□□〔そらにみ
つ〕／元和8(1622)年10月19日

やとりとる—つきはゆふへに—かけすみて
むしのねみたれ—つゆさむきそて

【新撰菟玖波集／実隆本】／秋上／明応
4(1495)年9月26日

ともしびのかげ
灯の影

つりぶね
→釣舟

つねにしらる—ともしひのかけ
つりぶねや—はかなさいつと—さささらむ

【秋津洲千句】／初何〔はなならし〕／天
文15(1546)年8月25日

かすかなりける—ともしひのかけ
つりぶねや—をちのしまねを—めくるらむ

【慶長年間百韻27巻】／□□〔はるもこ
そ〕／裏白／慶長13(1608)年1月3日

あきぼるとゆうまくら
→秋蛍と夕枕

つきこそまとの—ともしひのかけ
あききぬと—ほたるすくなき—ゆふまくれ

【延徳年間百韻16巻】／何船〔はるすき
ぬ〕／延徳4(1492)年4月8日

きりのうちなる—ともしひのかけ
あきくさに—ほたるののころ—ゆふまくれ

【文明十四年万句5 2巻】／何路〔あさう
みに〕／文明 14(1482)年 7月 4日～9月
14日

ねやのつきかけ
闇の月影

きりぎりす
→蟋蟀

ほのかたらひしーねやのつきかけ
うちしきりーいまはあなかまーきりぎりす

【伊勢千句】／三字中略〔うめさきて〕／
大永 2(1522)年 8月 4日～8日

よひすきぬらしーねやのつきかけ
かたしきのーたもとにちかきーきりぎりす

【大永三年月並千三百韻】／□□〔うめか
かや〕／月並千三百韻／大永 3(1523)年 2
月 23日

のこるやまかけ
残る山影

かえる
→帰る

おほゐのにしひーのこるやまかけ
みそれせしーあととやくもはーかへるらむ

【永正年間百韻3 4巻】／何船〔うちなひ
き〕／永正 13(1516)年 1月

ほのほのつきのーのこるやまかけ
のにいてしーしかやよをこめーかへるらむ

【天正四年万句7 0巻】／花何〔うくひす
の〕／天正 4(1576)年 5月 6日～7月 19日

はなのかけ
花の陰

つつじやまぶき
→躑躅山吹

ちるあともーみすはうらみむーはなのかけ
さくらのみやはーつつじやまぶき

【池田千句】／何船〔おそくとく〕／永正
7(1510)年春以前<永正 5年春>

やまさととーさもこそならめーはなのかけ
みちもせにさくーつつじやまぶき

【享祿年間百韻8巻】／懷旧〔ゆふたちの〕
／享祿 5(1532)年 6月 8日

とりのさえずり
→鳥の囀り

さきぬへきーころもちかつくーはなのかけ
かこふみきりのーとりのさへつり

【元和年間百韻2 4巻】／□□〔かせにつ
もり〕／元和 7(1622)年 11月 28日

このめさへーまたみえやらぬーはなのかけ
はるのしるへのーとりのさへつり

【天正四年万句7 0巻】／何幣〔いろそふ
や〕／天正 4(1576)年 5月 6日～7月 19日

とりのひとこゑ
→鳥の一声

ひとかへるーあとしつかなるーはなのかけ
かすむゆふへのーとりのひとこゑ

【石山四吟千句】／青何〔つきやふね〕／
天文 24(1555)年 8月 15日～19日

ちるまでとーおもふやまれのーはなのかけ
かへりつくしてーとりのひとこゑ

【享祿年間百韻8巻】／何船〔はるのいろ〕
／享祿 5(1532)年 1月 18日

はるのさかづき
→春の杯

くれぬれはーそてをかたしくーはなのかけ
かへさわするーはるのさかつき

【慶長年間百韻2 7巻】／□□〔ねふかき
や〕／慶長 4(1599)年 2月 8日

いつれにかーまくらをからむーはなのかけ
こころうかるーはるのさかつき

【寛永年間百韻1 5巻】／□□〔ききはみ
な〕／裏白／寛永 4(1627)年 1月 3日

やまかすむくれ
→山霞む暮れ

ひとよをもーあかさてかへるーはなのかけ
まきたつみちにーやまかすむくれ

【文明年間百韻3 4巻】／x x〔あきふけ
ぬ〕／文明 12(1480)年 9月 28日

かりねしてーいろみまほしきーはなのかけ
うちわたすのにーやまかすむくれ

【明応年間百韻2 2巻】／何路〔つゆやに
ほひ〕／明応 5(1496)年 8月 5日

みよしののはる
→み吉野の春

ゆきそふるーそれもきえなむーはなのかけ
やまかせさひしーみよしののはる

【長享年間百韻6巻】／何木〔わかみつの〕
／長享2(1488)年1月1日

さきちるもーおとつれきかぬーはなのかけ
いりにしままのーみよしののはる

【壁草／大阪天満宮文庫本】／雑上／永正
2(1505)年8月23日以後同3年3月以前

はなのかけにやすらう
花の陰に安らう

→はるのかえるさ
春の帰るさ

みるまにーやすらふききのーはなのかけ
おもへはとほしーはるのかへるさ

【宝徳四年千句】／何人〔はなどころ〕／
宝徳4(1452)年3月12日

やすらへはーときこそうつれーはなのかけ
かねのつけこすーはるのかへるさ

【寛正年間百韻20巻】／何路〔ひととせ
に〕／寛正5(1465)年12月9日

ひかりのかげ
光の影

→とぶほたる
飛ぶ蛭

ひかりのかげをーあはれとやみむ
いにしへのーいかなるたまそーとぶほたる

【文安雪千句】／花之何〔ゆきふれは〕／
文安2(1445)年10月18日

ひかりのかげをーをしみとめはや
くれわたるーまとよりをちにーとぶほたる

【成立不詳・心敬以前14巻】／何人〔こ
のもの〕／成立時不詳

ひとかげもしない
人影もしない

→なる
なる

まつとはすれとーひとかけもせず
たのめしやーよそのゆふへにーなりぬらむ

【文安雪千句】／花之何〔ゆきふれは〕／
文安2(1445)年10月18日

まはきかもとのーひとかけもせず
いつすみてーとほさとをのとーなりぬらむ

【下草／東山御文庫本】／雑上／明応
5(1496)年11月18日

ひとりねとかげ
一人寝と影

→かたしく
片敷く

ひとりやねなむーまきたてるかけ
はなにほふーやまちのこけをーかたしきて

【新撰菟玖波集／実隆本】／春上／明応
4(1495)年9月26日

ひとりやねなむーつきほそきかけ
むしのねもーよわるあらしをーかたしきて

【壁草／大阪天満宮文庫本】／秋／永正
2(1505)年8月23日以後同3年3月以前

みずかげのさびしさ
水影の寂しさ

→かえる
帰る

かはへのみつのーかけのさひしさ
うちむれてーみそきせしもやーかへるらむ

【天文年間百韻38巻】／x x〔したみつ
も〕／天文24(1555)年9月2日

いたゐのしみつーかけのさひしさ
ゆふくれやーすすみしひともーかへるらむ

【宗長関係8種】／老耳／天理本／

やまのかげ
山の陰

→すまのうらなみ
須磨の浦浪

こえわひぬーあめにかみなるーやまのかげ
ふなちにあらきーすまのうらなみ

【表佐千句】／唐何〔つきはたは〕／文明
8(1476)年3月6日<~8日>

つらかりしーうきよをかたるーやまのかげ
あはれなかけそーすまのうらなみ

【永禄年間百韻28巻】／山何〔ゆふかほ
に〕／永禄2(1559)年5月20日

→はしのひとすじ
橋の一筋

まははとるーみちのへちかきーやまのかげ
ふみならしたるーはしのひとすじ

【明応年間百韻22巻】／何路〔こそたち
し〕／明応6(1497)年1月1日

すすしさにーしはしかたらふーやまのかげ
ゆききのみちのーはしのひとすじ

【天正年間百韻57巻】／何路〔とふひと
の〕／天正14(1586)年3月19日

まつかぜがふく
→松風が吹く

そことなきーかねもすさましーやまのかけ
こえむをのへはーまつかせそふく

【三島千句】／朝何 [やまとほく]／文明

3(1471)年3月21日～23日

つきもたたーこころつくしーやまのかけ
このはしくれてーまつかせそふく

【難波田千句】／□□ [はるのよの]／文

明 14(1482)年10月前後

すまれすはーたちもかへらむーやまのかけ
たきのひひきもーまつかせそふく

【紹巴亡父追善千句】／何木 [おとろけと]

／天文 24(1555)年3月26日～晦日

けふもまたーくもるいりひのーやまのかけ
みちくるしほにーまつかせそふく

【成立不詳・宗長以前15巻】／何船 [し

もしろき]／成立時不詳

みちのかけはし
→道の掛橋

のるこまをーしはしひかふるーやまのかけ
すゑはあやふきーみちのかけはし

【永禄年間百韻28巻】／何船 [ひきうう

る]／裏白／永禄 5(1562)年1月3日

あきふけてーたれもかよはぬーやまのかけ
さとはなれなるーみちのかけはし

【天正年間百韻57巻】／□□ [あさなあ

さな]／天正 15(1587)年1月3日

やまのしたかげ
山の下陰

そよぐあきかぜ
→そよぐ秋風

ましはわけゆくーやまのしたかけ
ならのはにーそよきもてくるーあきのかせ

【文安月千句】／何水 [つきぬなは]／文

安 2(1445)年8月15日

いろにすすしきーやまのしたかけ
うゑしたもーそよきいてたるーあきのかせ

【紹巴亡父追善千句】／何船 [すみそめの]

／天文 24(1555)年3月26日～晦日

よもぎうのかけ
蓬生の影

きりぎりす
→蟋蟀

のこるはまれのーよもきふのかけ
のわきせしーけさまでつきにーきりぎりす

【弘治年間百韻8巻】／何路 [ゆくみつや]

／弘治 2(1556)年3月24日

すみならひたるーよもきふのかけ
きりぎりすーなくよのつきはーなほさひし

【天正年間百韻57巻】／□□ [うくひす

も]／天正 14(1586)年1月4日

みちわけわふるーよもきふのやと
きりぎりすーのこるこゑするーよるのしも

【美濃千句】／何色 [しくれつつ]／文明

4(1473)年12月16日～21日

つきのみすめるーよもきふのやと
きりぎりすーゆくへはかなきーしもおきて

【大永四年月並千二百韻】／□□ [かけき

ゆる]／月並千二百韻／大永 4(1524)年8

月23日

かさなる

かさなるやま
重なる山

みねのくも
→峰の雲

かさなるやまのーみちはとほくて
かくれるはーいつこならましーみねのくも

【諸尊法紙背3巻】／旧何 [あきまてと]

／建武 4(1337)年6月29日

かさなるやまのーおくそしつげき
みよしのにーいるあとかくせーみねのくも

【諸家月次連歌抄】／諸家月次連歌抄／成

立 () 年未詳

かしこい

かしこい
賢い

よがおさまる
→世が治まる

かしこきはーひとのこころのーかかみにて
うちまかするにーよこそをさまれ

【称名院追善千句】／一字露頭 [くもはれ

て]／永禄 6(1563)年12月14日～18日

かしこきは—いかにたえせぬ—のりならむ
とほきかたまた—よこそをさまれ

【慶長年間百韻27巻】／□□ [いなつま
も] / 慶長 9(1604) 年 7 月 6 日

→^{ことのほのみち}
言の葉の道

かしこきも—なのみこのるは—ゆめなれや
むかしをし—のふ—ことのほのみち

【表佐千句】／何衣 [よるやあめ] / 文明
8(1476) 年 3 月 6 日 <~8 日>

かしこきも—えらふと—きにや—いてぬらむ
ことのほのみち—いろいろになる

【明応年間百韻22巻】／何人 [くもはれ
て] / 明応 5(1496) 年 8 月 22 日

かすか

^{かげかすか}
影かすか

→^{たえたえ}
絶え絶え

はるのいりひの—かけかすかなり
たえたえに—かねのひひきの—きこえきて

【称名院追善千句】／一字露頭 [くもはれ
て] / 永禄 6(1563) 年 12 月 14 日~18 日

よをまつつきの—かけかすかなり
たえたえに—たなひくきりの—うすくもり

【天正年間百韻57巻】／何路 [たちそひ
て] / 天正 6(1578) 年 1 月 3 日

^{かすかなかげ}
微かな影

→^{とふほたる}
飛ぶ螢

ともすひかりの—かすかなるかけ
あきかせや—くもみはるかに—とふほたる

【大永四年月並千二百韻】／□□ [ゆふた
ちは] / 月並千二百韻 / 大永 4(1524) 年 6
月 23 日

おほゐのつきの—かすかなるかけ
ひとつふたつ—そらにみえてや—とふほたる

【元和年間百韻24巻】／□□ [むかしに
や] / 元和 5(1619) 年 7 月 24 日

かすみ

^{あさがすみ}
朝霞

→^{くもにありあけのつき}
雲に有明の月

たなひけは—はやきえそむる—あさかすみ
よこくもをしき—ありあけのつき

【飯盛千句】／何船 [ありあけや] / 永禄
4(1561) 年 5 月 27 日~29 日

やまはかり—なほふるゆきの—あさかすみ
こほりはくもに—ありあけのつき

【至徳以前百韻7巻】／何人 [けふいくか]
／千句第五 / 永徳 2(1382) 年 1 月 22 日

かせゆるく—ふきくるのへの—あさかすみ
くもゐにのこる—ありあけのつき

【文明十五年千句11巻】／何舟 [かけた
かし] / 文明 15(1483) 年 * 月 * 日 ~ 3 月 2
日

→^{うぐいすのこゑ}
鶯の声

かはかみの—あめになるへき—あさかすみ
たにのといつる—うくひすのこゑ

【看聞日記紙背50巻】／山何 [あめはれ
て] / 応永 30(1423) 年 5 月 25 日

あさかすみ—ひとよのほとに—はるめきて
こころをさそふ—うくひすのこゑ

【永禄年間百韻28巻】／何人 [つきなか
ら] / 永禄 5(1562) 年 8 月 11 日

→^{つきがのこゑ}
月が残る

あさかすみ—うちいつるみつに—はれそめて
ふなちをとほみ—つきそのこゑ

【文明年間百韻34巻】／何人 [きえねよ
し] / 文明 14(1482) 年 2 月 2 日

あさかすみ—のとかなるのに—うちいてて
たひゆくそてに—つきそのこゑ

【文明十二年千句8巻】／何人 [ひとはさ
へ] / 文明 12(1480) 年 4 月 10 日 ~ * 日

→^{のこるつきかげ}
残る月影

かりのなくーしほひのうらのーあさかすみ
なみにうかひてーのこるつきかけ

【諸尊法紙背3巻】／旧何 [あきまでと]
／建武 4(1337) 年 6 月 29 日

あさかすみーのにもやまにもーいろはえて
ゆくそらとほしーのこるつきかけ

【文明年間百韻34巻】／何木 [うめかか
を]／文明 15(1483) 年 2 月 19 日

いくえかすみ
幾重霞

かねのひびき
→鐘の響き

いくへかすみのーつつくやまやま
はるのよやーかねのひびきもーあらさらむ

【称名院追善千句】／何人 [せててさは]
／永禄 6(1563) 年 12 月 14 日～18 日

かすかのはーいくへかすみのーしけからし
かねのひびきもーたたかすかなり

【天正年間百韻57巻】／□□ [なつやま
は]／天正 17(1589) 年 4 月 26 日

うちかすむ
うち霞む

ひばりなくこゑ
→雲雀鳴く声

かせたえてーまつのひときのーうちかすみ
くもにきえつつーひばりなくこゑ

【宗牧追善千句】／何路 [のこるなは]／
永禄 4(1561) 年 9 月 14 日・15 日

つゆかかゝるーみちのしはくさーうちかすみ
よふかきあさけーひばりなくこゑ

【大永三年月並千三百韻】／□□ [はなに
つき]／月並千三百韻／大永 3(1523) 年 3
月 23 日

のほるひのーひかりもしるくーうちかすみ
はるたつくもにーひばりなくこゑ

【天文年間百韻38巻】／山何 [ほたと
ふ]／天文 6(1537) 年 5 月 10 日

かすみ
霞

はるのとほやま
→春の遠山

かすみよりーつきのゆふかけーほのかにて
ふなちにむかふーはるのとほやま

【美濃千句】／何人 [かすみさへ]／文明
4(1473) 年 12 月 16 日～21 日

かすみよりーおきつしらなみーうちいてて
くもにあけたるーはるのとほやま

【明応年間百韻22巻】／何人 [あきのい
ろに]／明応 9(1500) 年 7 月 11 日

かすみくみよる
霞くみよる

ながきひ
→長き日

いちのかへさはーかすみくみよる
なかきひもーくれてたとれるーみわのさと

【慶長年間百韻27巻】／□□ [ちひろあ
る]／慶長 4(1599) 年 5 月 10 日

かすみくみよるーかけのさくらと
なかきひもーゆふへになれるーまりのには

【慶長年間百韻27巻】／□□ [よつと
き]／裏白／慶長 18(1613) 年 1 月 3 日

かすみこめる
霞こめる

おほつかない
→覚束ない

やまちゆくゆくーかすみこめたり
おほつかないーくれぬるかたのーよふことり

【天文廿四年梅千句】／二字反音 [くれな
ゐの]／天文 24(1555) 年正月 7 日

はなにさくらもーかすみこめたり
よふことりーしるへはせしもーおほつかない

【天文年間百韻38巻】／x x [したみつ
も]／天文 24(1555) 年 9 月 2 日

よぶこどり
→呼子鳥

やまちゆくゆくーかすみこめたり
おほつかないーくれぬるかたのーよふことり

【天文廿四年梅千句】／二字反音 [くれな
ゐの]／天文 24(1555) 年正月 7 日

はなにさくらもーかすみこめたり
よふことりーしるへはせしもーおほつかない

【天文年間百韻38巻】／x x [したみつ
も]／天文 24(1555) 年 9 月 2 日

かすみつつ
霞みつつ

はるのかりがね
→春の雁

かすみつつ—いつくのそらも—のとやかに
くもにいるらむ—はるのかりがね

【文明十四年万句5 2巻】／何田〔ゆくみ
つの〕／文明14(1482)年7月4日～9月
14日

かすみつつ—ふれともあめに—しをたれて
はねうちかはす—はるのかりがね

【宗長関係8種】／壬生宛／書陵部本／

かすみにももる
霞にこもる

うぐいす
→鶯

かすみにももる—さとはふりにき
うくひすの—つまとふのへ—ゆきのうち

【文安月千句】／何田〔ほしのなも〕／文
安2(1445)年8月15日

かすみにももる—かけのふるてら
うくひすの—のきはにきゐる—こゑすなり

【成立不詳・宗養以前8巻】／山何〔かせ
やする〕／成立時不詳

かねのおと
→鐘の音

かすみにももる—てらのさしいり
はるもたた—けふにくれぬる—かねのおと

【天正年間百韻5 7巻】／□□〔けふひく
や〕／天正12(1584)年1月10日

かすみにももる—みねのまつかせ
かねのおと—ほのかにはるの—ひはおちて

【慶長年間百韻2 7巻】／□□〔ひめおき
し〕／慶長4(1599)年3月25日

はるのあめ
→春の雨

かすみにももる—みきりさひしも
やまちかき—しづくにのこる—はるのあめ

【天正年間百韻5 7巻】／□□〔すたれま
け〕／天正15(1587)年1月10日

かすみにももる—おくのふるてら
つねよりも—ともしひしめる—はるのあめ

【元和年間百韻2 4巻】／□□〔ちちのは
るを〕／裏白／元和4(1618)年1月3日

かすみにとどるみち
霞にとどる道

よごどり
→呼子鳥

かすみにとどる—いはのかけみち
よふことり—なきてこころの—しるへせよ

【葉守千句】／白何〔こかしを〕／長享
元(1487)年10月9日<～11日>

かすみにとどる—みちのをちこち
よふことり—こゑするかたに—ひははくれて

【天文十八年梅千句】／青何〔ゆけはうめ〕
／天文18(1549)年正月11日

かすみのうちのみずのみなかみ
霞の内の水の水上

ことと
→言問う

かすみのうちの—みつのみなかみ
こととはむ—いつくかはるの—みなとかは

【天文年間百韻3 8巻】／何人〔はなのい
ろも〕／天文14(1545)年2月25日

かすみにおつる—みつのみなかみ
はるくるる—うちのしはふね—こととはむ

【行助関係4種】／行助句集／書陵部本／
文正元(1466)年(7月16日)

かすみのそこ
霞の底

かわずなく
→蛙鳴く

やまかくれ—かすみのそこの—みちわけて
とくるこほりに—かはつなくなり

【文明十二年千句8巻】／一字露頭〔わか
はもて〕／文明12(1480)年4月10日～
*日

きこえきつ—かすみのそこの—みつのおと
かはつなくなり—はるふかきころ

【文明十四年万句5 2巻】／山何〔あきか
せに〕／文明14(1482)年7月4日～9月
14日

かすみのひま
霞のひま

はるあさい
→春浅い

かすみのひまの—あさあけのやま
はるあさき—のかせやしもに—くもるらむ

【永享年間百韻4巻】／山河〔くちてけり〕
／永享12(1440)年10月16日

かすみのひまの—なかそらのゆき
はるあさき—ひかけやさすも—うすからむ

【天正年間百韻57巻】／□□〔ひきのこ
せ〕／天正19(1591)年1月3日

かすみより
霞より

たきのしらなみ
→滝の白浪

かすみより—いつくのかねの—きこゆらむ
くものひひきか—たきのしらなみ

【紫野千句】／何物〔したくさの〕／延文
2(1357)年以後-応安3年6月以前

かすみより—うへにみえたる—やまさくら
をられぬはなは—たきのしらなみ

【菟玖波集／広島大学本】／春下／文和
5(1356)年冬~翌年の春

かすみ
霞む

おちるたきなみ
→落ちる滝浪

かすみむらむ—はるのかはかせ—やまおろし
ゆきのひまより—おつるたきなみ

【天文十八年梅千句】／山河〔うめさけは〕
／天文18(1549)年正月11日

はなのきや—それとするしに—かすみむらむ
おとさへはるに—おつるたきなみ

【天文廿四年梅千句】／何垣〔あさきりに〕
／天文24(1555)年正月7日

かえるかりがね
→帰る雁

ありあけや—なかそらたかく—かすみむらむ
くもちはるかに—かへるかりかね

【看聞日記紙背50巻】／何人〔うめのな
の〕／応永30(1423)年5月27日

こころさへ—たなひかれてや—かすみむらむ
みおくるままに—かへるかりかね

【成立不詳・宗養以前8巻】／朝何〔なひ
くよや〕／成立時不詳

はるかぜがふく
→春風が吹く

そことなく—のはらのすゑや—かすみむらむ
ゆくそておくる—はるかせそふく

【永正年間百韻1巻】／何人〔こゑとほく〕
／永正元(1505)年12月10日

みわたしの—そらはいつより—かすみむらむ
やなきいろつく—はるかせそふく

【壁草／大阪天満宮文庫本】／雑上／永正
2(1505)年8月23日以後同3年3月以前

かすみおちこち
霞む遠近

いそぐかり
→急ぐ雁

あさとあくれば—かすみをちこち
はるのよを—いくつらかりの—いそくらむ

【大永四年月並千二百韻】／何色〔うめの
はな〕／月並千二百韻／大永4(1524)年1
月23日

わくるのはらの—かすみをちこち
あさかりや—とりのねとめて—いそくらむ

【元和年間百韻24巻】／□□〔まつふく
や〕／元和8(1622)年10月29日

かすみはるのとおやま
霞む春の遠山

ありあけのつき
→有明の月

かすみかくれの—はるのとほやま
ありあけの—つきもわかれの—かりなきて

【看聞日記紙背50巻】／山河〔まつそひ
て〕／応永26(1419)年2月6日

かすみにのこる—はるのとほやま
ありあけの—つきのひかりの—さえかへり

【天正四年万句70巻】／何鳥〔かせにし
るき〕／天正4(1576)年5月6日~7月
19日

かすみひ
霞む日

ゆきのむらぎえ
→雪の斑消え

かすみひに—としのこえぬる—ほとをみて
ふりかさぬれと—ゆきのむらぎえ

【表佐千句】／何年〔はなにいる〕／文明
8(1476)年3月6日<~8日>

はしたかの—をこしのとたち—かすみひに
いこまかたの—ゆきのむらぎえ

【親当関係2種】／親当句集／赤木文庫本

かすむやまもと
霞む山本

→^{みなせがわ}永無瀬川

くるまくさは一かすむやまもと
ところせき一わたりかねたる一みなせかは

【平松文庫本千句】／□□ [ふくるよの]

あらしのすゑの一かすむやまもと
ゆきてしも一とははやはるの一みなせかは

【天文年間百韻38巻】／何木 [やまかけ
て]／天文21(1552)年3月11日

みれはほのかに一かすむやまもと
はるのよも一ありあけかたの一みなせかは

【永禄年間百韻28巻】／何人 [つきなか
ら]／永禄5(1562)年8月11日

そこともみえす一かすむやまもと
ほのかにも一あけのこりたる一みなせかは

【慶長年間百韻27巻】／□□ [ねのひし
て]／慶長6(1601)年1月26日

かすむゆうぐれ
霞む夕暮れ

→^{つき}月の出

あけほのみか一かすむゆふくれ
いりあひの一かねにをのへの一つきいてて

【池田千句】／何船 [おそくとく]／永正
7(1510)年春以前<永正5年春>

つまきのみちの一かすむゆふくれ
しつかすむ一まかきのそとも一つきいてて

【大永四年月並千二百韻】／□□ [しもや
ひぬ]／月並千二百韻／大永4(1524)年9
月23日

かぜとあさがすみ
風と朝霞

→^{いづるひかげ}出る日影

あさかすみ一ふきとくかせの一なほさえて
いつるひかけの一とりのさへつり

【享徳二年千句】／何木 [はきにつゆ]／
享徳2(1453)年8月11日～13日

かせたえて一はるのよしるし一あさかすみ
いつるひかけの一おそきやまのは

【天正四年万句70巻】／三字中略 [かせ
たえて]／天正4(1576)年5月6日～7月
19日

つきがかすむ
月が霞む

→^{のこる}残る

さかののてらの一つきそかすめる
のとななる一あらしのくもや一のこるらむ

【初瀬千句】／何水 [うのはなの]／享徳
元・2(1452)年、4月

あさとあくれは一つきそかすめる
かやりたく一ねやにけふりや一のこるらむ

【宗祇関係2種】／心敬専順点宗祇付句／

つきがかすむよる
月が霞む夜

→^{くもいをかえるかりがね}雲居を帰る雁

ありあけの一つきやあらぬと一かすむよに
きけはくもをを一かへるかりかね

【永享年間百韻4巻】／山河 [おいまつは]
／万句巻頭／永享9(1437)年3月21日

つきかけは一みえみみえすみ一かすむよに
くもちたとり一かへるかりかね

【成立不詳・宗砌以前6巻】／x x [うめ
なれや]／成立時不詳

よこくもかすむ
横雲霞む

→^{ゆめのうきはし}夢の浮橋

よこくもの一わかるるかたや一かすむらむ
よるちるはなの一ゆめのうきはし

【熊野千句】／何路 [かさなるや]／文正
元(1466)年3月以前

よこくもの一のこれるよも一かすむひに
さめてそなほも一ゆめのうきはし

【文明十二年千句8巻】／白何 [まつりす
る]／文明12(1480)年4月10日～*日

かすむ

あめかすむくれ
雨霞む暮れはるかぜ
→春風まさるみきはや—あめかすむくれ
はるかぜの—ふねのはつきも—くちけらし

【天正年間百韻57巻】／何船[あをやきは]／天正13(1585)年1月28日

をのへのくもに—あめかすむくれ
はるかぜの—よわるにとほき—かねのこゑ

【永正年間百韻1巻】／何人[こゑとほく]／永正元(1505)年12月10日

ほととぎす
→時鳥ふるのをとほみ—あめかすむくれ
さたかにも—いつかはなかむ—ほととぎす

【永原千句】／何木[おとそなき]／明応9(1500)年7月17日

ふちかをりつつ—あめかすむくれ
はつこゑや—やよひなからの—ほととぎす

【平松文庫本千句】／□□[おちはして]／

かず

かずあまた
数あまたいかばかり
→如何ばかりかすをあまたの—ふみもはかなし
いかばかり—さてもあたる—ひとならむ

【永正十花千句】／唐何[いろきえぬ]／永正13(1516)年3月11日～14日

かすをあまたの—おもひくるしも
をくるまの—しちのはしかき—いかばかり

【天正四年万句70巻】／何田[しかのねは]／天正4(1576)年5月6日～7月19日

かずならぬ
数ならぬあきのゆうぐれ
→秋の夕暮れかすならぬ—ちちのうらみも—すてねたた
そのかみよりの—あきのゆふくれ

【難波田千句】／□□[あくるよを]／文

明14(1482)年10月前後

かすならぬ—みはいつととも—とはれめや
うらみなはてそ—あきのゆふくれ

【成立不詳・宗祇以前15巻】／何船[はなそあをは]／成立時不詳

はるがきた
→春が来たかすならぬ—みのしころも—そてぬれて
なきかすみかも—はるはきにけり

【聖廟千句】／初何[きのふより]／明応3(1494)年2月10日～12日

かすならぬ—かきねにさける—うめのはな
ひととおわかず—はるはきにけり

【明応年間百韻22巻】／何人[くもはれて]／明応5(1496)年8月22日

かぜ

あきかぜ
秋風ころもうつ
→衣打つしもまよふ—とほさとをの—あきかぜに
たれをりはへて—ころもうつらむ

【太神宮法楽千句】／山何[のははなに]／長享2(1488)年7月

ひまみゆる—ねやのとほその—あきかぜに
たかきたへの—ころもうつらむ

【大永四年月並千二百韻】／□□[そよとしも]／月並千二百韻／大永4(1524)年10月23日

にわのつきかげ
→庭の月影しきたへの—ころもてかれぬ—あきかぜに
くもまそひゆく—にはのつきかけ

【天文年間百韻38巻】／朝何[またてきく]／天文9(1540)年4月25日

あきかぜに—つゆもたまらず—ちるこすゑ
あらはになりぬ—にはのつきかけ

【文明十四年万句52巻】／何路[ぬしやたれ]／文明14(1482)年7月4日～9月14日

のべのむしのお
→野辺の虫の音

さとはあれてーうゑしまつふくーあきかせに
かきねのくさはーのへのむしのね

【葉守千句】／白何 [こからしを] /長享

元 (1487) 年 10 月 9 日<~11 日>

すすしさをーもとむるそてのーあきかせに
いつれかいつれーのへのむしのね

【飯盛千句】／何人 [くみわすれ] /永禄

4(1561) 年 5 月 27 日~29 日

はつかりのこえ
→初雁の声

あきかせにーいさよふほたるーほのかにて
いつのねさめかーはつかりのこゑ

【永正十花千句】／何木 [ひかすたに] /

永正 13(1516) 年 3 月 11 日~14 日

むさしのやーさすらへきぬるーあきかせに
みやこもさそなーはつかりのこゑ

【永正年間百韻 3 4 巻】／山何 [たちはな

に] /永正 18(1521) 年 5 月 7 日

まつむしのこえ
→松虫の声

したつゆもーくさかくれなきーあきかせに
しをれはなにかーまつむしのこゑ

【延徳年間百韻 1 6 巻】／何路 [うめかか

の] /延徳 4(1492) 年 1 月 23 日

あちきなくーこぬひとらむーあきかせに
なほふるさとのーまつむしのこゑ

【成立不詳・宗長以前 1 5 巻】／名号 [な

かはひと] /成立時不詳

さとはあれてーひとこそとはねーあきのかせ
ゆふくれかなしーまつむしのこゑ

【称名院追善千句】／何牆 [さかのやま]

/永禄 6(1563) 年 12 月 14 日~18 日

しもかれのーくすはにかはるーあきのかせ
かけはいつこのーまつむしのこゑ

【天正年間百韻 5 7 巻】／何船 [もしほく

さ] /天正 7(1579) 年 1 月 13 日

やまのはのいろ
→山の端の色

つきしろもーそらすみぬへきーあきかせに
しくれてとほるーやまのはのいろ

【元龜年間百韻 6 巻】／何人 [とめゆけは]

/元龜 3(1572) 年 9 月 28 日

あきかせにーそらゆくくもやーきえぬらむ
みるみるかはるーやまのはのいろ

【天正四年万句 7 0 巻】／唐何 [はなさけ

は] /天正 4(1576) 年 5 月 6 日~7 月 19 日

ふるさとのゆうべ
→古里の夕べ

かれをきまてもーあきかせのこゑ
ふるさとのーゆふへやつきをーまたすらむ

【紫野千句】／何木 [はにしける] /延文

2(1357) 年以後-応安 3 年 6 月以前

まつあるかたのーあきかせのこゑ
ふるさとのーつゆのゆふへやーうかるらむ

【文明十四年万句 5 2 巻】／夢想 [たにみ

つの] /文明 14(1482) 年 7 月 4 日~9 月

14 日

きぬぎぬのあと
→後朝の後

もろともにーきくさへかなしーあきのかせ
あさつゆおもへーきぬきぬのあと

【東山千句】／薄何 [つゆをいろ] /永正

15(1518) 年 8 月 10 日~12 日

ひとりねのーまくらわひしきーあきのかせ
つきにかさねしーきぬきぬのあと

【天正年間百韻 5 7 巻】／□□ [ともなし

に] /天正 18(1590) 年 11 月 21 日

ころもうつこゑ
→衣打つ声

あきのかせーたけのはすさふーそらふけて
ふしみをとほみーころもうつこゑ

【浅間千句】／何路 [ゆくほたる] /永正

11(1514) 年 5 月 13 日~19 日

すすしさもーつきまつほとどーあきのかせ
よひふけけらしーころもうつこゑ

【永禄石山千句】／三字中略 [こすゑまで]

/永禄 7(1564) 年 5 月 12 日

しぎのはねがき
→ 嶋の羽搔き

あきのかせーみやこのゆめをーさそふよに
まくらさためぬーしぎのはねかき

【天文年間百韻 3 8 巻】 / x x [かめにさ
す] / 天文 21(1552) 年 2 月 20 日

かたとよりーおとしてかよふーあきのかせ
めさますいほのーしぎのはねかき

【慶長年間百韻 2 7 巻】 / □□ [さきつか
む] / 裏白 / 慶長 19(1614) 年 1 月 3 日

つゆがこぼれる
→ 露が零れる

まつたかしーいほりのうへのーあきのかせ
くさのとほそはー一つゆそこほるる

【文安月千句】 / 何人 [おもかはり] / 文
安 2(1445) 年 8 月 15 日

いまいくよーとははうつろふーあきのかせ
たもとならはずー一つゆそこほるる

【秋津洲千句】 / 山何 [くもよまで] / 天
文 15(1546) 年 8 月 25 日

ふるさとのーゆふへなりけりーあきのかせ
むしのねしけきー一つゆそこほるる

【大永四年月並千二百韻】 / □□ [へたつ
なよ] / 月並千二百韻 / 大永 4(1524) 年 3
月 23 日

ふねからきくなみがすさまじい
→ 舟から聞く浪が凄まじい

かけもややーゆふひをおくるーあきのかせ
ふねなからきくーなみはすさまじ

【宗牧追善千句】 / 何路 [のころなは] /
永禄 4(1561) 年 9 月 14 日・15 日

ゆめかへるーかりねのこのーあきのかせ
ふねにきくよのーなみはすさまじ

【成立不詳・心敬以前 1 4 巻】 / 何人 [こ
のものと] / 成立時不詳

ひぐらしのこえ
→ 蝸の声

ここよりやーたちていつみのーあきのかせ
てるみなつきのーひぐらしのこゑ

【浅間千句】 / 山何 [ここよりや] / 永正
11(1514) 年 5 月 13 日~19 日

すすしさやーやすらふままのーあきのかせ
またかけのころーひぐらしのこゑ

【大永三年月並千三百韻】 / □□ [はなに
つき] / 月並千三百韻 / 大永 3(1523) 年 3
月 23 日

あつきひはーかけよわるつゆのーあきのかせに
ころもてうすしーひぐらしのこゑ

【延徳年間百韻 1 6 巻】 / 何人 [うすゆき
に] / 延徳 3(1491) 年 10 月 20 日

あきかせにーひとむらさめのーそらはれて
やまちをゆけはーひぐらしのこゑ

【園塵第四 / 早稲田大学本】 / 秋 / 永正 6、7
年

まくらはいずこ
→ 枕は何処

うたたねのーつきふけけれなーあきのかせ
まくらのいつこーたかきむしのね

【大永三年月並千三百韻】 / □□ [はると
ふく] / 月並千三百韻 / 大永 3(1523) 年 1
月 23 日

よひよひのーそてにしらるるーあきのかせ
まくらのいつこーころもうつらむ

【大永四年月並千二百韻】 / □□ [としな
みの] / 月並千二百韻 / 大永 4(1524) 年 12
月 23 日

やまのはのつき
→ 山の端の月

あきのかせーほのしたをきのーよひふけて
ゆふへまたれしーやまのはのつき

【永禄年間百韻 2 8 巻】 / 追善 [まれにと
ふ] / 永禄元 (1558) 年 11 月 5 日

たにかはにーほたるみたるるーあきのかせ
くもやへたてしーやまのはのつき

【天正年間百韻 5 7 巻】 / □□ [なつやま
は] / 天正 17(1589) 年 4 月 26 日

さおじかのこえ
→ さ牡鹿の声

きけはまたーみねよりおつるーあきのかせ
みたるるこのはーさをしかのこゑ

【諸家月次連歌抄】 / 諸家月次連歌抄 / 成
立 () 年未詳

いくたひか—まつにくすはの—あきのかせ
しくれにぬるる—さをしかのこゑ

【那智竈／北野天満宮本】／永正十四年／

^{つゆのふるさと}
→^{つゆのふるさと}露のふる里

たちそめて—いくゆふくれの—あきのかせ
たひもさこその一つゆのふるさと

【嵯峨千句】／何人【さきてちる】／(元
龜4) 天正元(1573)年正月9日~11日

をきのはに—きけはくもふく—あきのかせ
みやまににたる—つゆのふるさと

【園塵第一／統群書類従本】／雑／長享2
年

^{ひとむらすすき}
→^{ひとむらすすき}群薄

はなもなき—こはきかもとの—あきのかせ
ひとむらすすき—たれまねくらむ

【文明年間百韻34巻】／x x【あきふけ
ぬ】／文明12(1480)年9月28日

つゆきえし—のはらにたちぬ—あきのかせ
ひとむらすすき—ひとのおもかけ

【心敬関係10種】／吾妻辺云捨／天理本
／

^{あきかぜがふく}
秋風が吹く

^{なくきりぎりす}
→^{なくきりぎりす}鳴く蟋蟀

ここにすみける—あきかせそふく
たれとなく—ふりにしあとの—きりきりす

【伊勢千句】／何木【すめるよの】／大永
2(1522)年8月4日~8日

かれののあさち—あきかせそふく
くれぬれは—なくねもかはる—きりきりす

【文明年間百韻34巻】／x x【あきふけ
ぬ】／文明12(1480)年9月28日

^{つゆふる}
→^{つゆふる}露ふる

まきのいたまは—あきかせそふく
みのむしの—こゑあはれにも—つゆふりて

【伊予千句】／何馬【もろひとの】／天文
6(1537)年5月22日

とへはののみや—あきかせそふく
かきりなく—そてのわかれち—つゆふりて

【成立不詳・宗祇以前15巻】／x x【ち
れはいさ】／成立時不詳

^{あさじがはら}
→^{あさじがはら}浅茅が原

さひしきものと—あきかせそふく
あさちはら—こころをそむる—つゆなから

【専順関係2種】／秋／応仁元(1467)年
5月10日

つきはふけつつ—あきかせそふく
あさちはら—むしのねよりも—われなきて

【園塵第三／統群書類従本】／秋／文亀元
(1501)年3月18日

^{はなすすき}
→^{はなすすき}花薄

とふかときけは—あきかせそふく
はなすすき—きみかうゑしや—しのふらむ

【文明年間百韻34巻】／何路【あさなけ
に】／文明8(1476)年1月11日

むかしこひしき—あきかせそふく
ひとすまぬ—をのへのみやの—はなすすき

【愚句老葉】／秋／永正17年

^{あきかぜのこゑ}
秋風の声

^{かげさびしい}
→^{かげさびしい}影寂しい

やなきにたかき—あきかせのこゑ
かけさひし—かりなきわたる—ゆふつくよ

【三島千句】／何衣【はなにつき】／文明
3(1471)年3月21日~23日

このくれよりの—あきかせのこゑ
みにしみて—いくたのもりの—かけさひし

【宗長関係8種】／老耳／天理本／

^{みにしみる}
→^{みにしみる}身にしみる

なみたすすむる—あきかせのこゑ
ものおもへは—くものはたても—みにしみて

【難波田千句】／□□【あくるよを】／文
明14(1482)年10月前後

このくれよりの一あきかせのこゑ
みにしみて一いくたのもりの一かけさひし

【宗長関係8種】／老耳／天理本／

あきのかわかぜ
秋の川風

→霧わたる

まよふやふなち一あきのかはかせ
きりわたる一やまもとつつき一かすかにて

【永正年間百韻34巻】／何人〔ゆふつくよ〕／永正13(1516)年7月8日

なみにあけたつ一あきのかはかせ
きりわたる一すゑののすすき一むらむらに

【天文年間百韻38巻】／何人〔つきによる〕／天文5(1536)年6月15日

あきのはつかぜ
秋の初風

→月出る

にしよりむかふ一あきのはつかぜ
かみのます一かのをかきよく一つきいてて

【宝徳四年千句】／何船〔いろそそふ〕／
宝徳4(1452)年3月12日

あかつきしるき一あきのはつかぜ
きよからむ一かけほのめかす一つきいてて

【永正年間百韻34巻】／何路〔ひとはいさ〕／永正17(1520)年2月4日

ふなちにおもふ一あきのはつかぜ
くまもなく一なきたるなみに一つきいてて

【天文年間百韻38巻】／朝何〔またてきく〕／天文9(1540)年4月25日

→残る暑さに端居する

ふくとしもなき一あきのはつかぜ
ふくるまで一のこるあつさに一はしめして

【慶長年間百韻27巻】／□□〔はるにまつ〕／裏白／慶長6(1601)年1月3日

おともしつけき一あきのはつかぜ
しはしたた一のこるあつさに一はしめして

【慶長年間百韻27巻】／□□〔はるもこそ〕／裏白／慶長13(1608)年1月3日

→虫鳴く

たひたつそも一あきのはつかぜ
かへるさの一やまちいまはた一むしなきて

【永正年間百韻34巻】／山河〔まちこしや〕／永正12(1515)年11月11日

ふきつたへくる一あきのはつかぜ
このさとも一さなからのへの一むしなきて

【成立不詳・宗長以前15巻】／何人〔やまみつは〕／成立時不詳

→誘う

こすゑよりこそ一あきのはつかぜ
ひくらしに一まつむしのねや一さそふらむ

【住吉千句】／白何〔あられのみ〕／大永元(1521)年11月1日～14日

またこぬくれの一あきのはつかぜ
したはちる一やなきやかりを一さそふらむ

【竹林抄／新古典文学大系本】／秋／文明
8(1476)年5月頃

→七夕

けふめつらしき一あきのはつかぜ
たなはたの一いかにまぢみし一くれならむ

【大永四年月並千二百韻】／□□〔うのはなの〕／月並千二百韻／大永4(1524)年4月23日

またそてぬらす一あきのはつかぜ
たなはたの一まとほのうらみ一いかはかり

【新撰菟玖波集／実隆本】／秋上／明応
4(1495)年9月26日

→一葉より

たえたえなりし一あきのはつかぜ
ひとはより一のちはきことに一ちるをみて

【竹林抄／新古典文学大系本】／秋／文明
8(1476)年5月頃

このよをおもふ一あきのはつかぜ
ひとはより一かろきはおいの一ゆくへにて

【竹林抄／新古典文学大系本】／雑下／文
明8(1476)年5月頃

おぎにかぜ
荻に風

→物思う頃

をきにかせーほのかにしのふーゆふまくれ
つきにもみえしーものおもふころ【河越千句】／白何〔はるかぜに〕／文明
2(1470)年正月10～12日をきにかせーややたさむくーはやなりて
つゆもわかみのーものおもふころ【太神宮法楽千句】／白何〔つゆなから〕
／長享2(1488)年7月おぎのうわかせ
荻の上風

→秋の夜

そよともすれはーをきのうはかせ
さらぬたにーねさめかちなるーあきのように【菟玖波集／広島大学本】／秋上／文和
5(1356)年冬～翌年の春たまくらなれやーをきのうはかせ
つきしろくーむすはぬゆめのーあきのように【合点之句／神宮文庫本】／秋／天文
9(1541)年12月25日

→古里人

ゆめにうらむるーをきのうはかせ
みしはみなーふるさとひとのーあともうし【長享年間百韻6巻】／何人〔ゆきなから〕
／長享2(1488)年1月22日かりもなくなりーをきのうはかせ
たかあきとーふるさとひとのーまたるらむ【天文年間百韻38巻】／何船〔あさかほ
に〕／天文12(1543)年7月29日

→思

ひとはおとせずーをきのうはかせ
あきやきてーわかふるさとーおもふらむ【壁草／大阪天満宮文庫本】／秋／永正
2(1505)年8月23日以後同3年3月以前そてをそはらふーをきのうはかせ
いかてかはーさてもとはぬをーおもふらむ

【那智筆／北野天満宮本】／永正十二年／

→古童

そふるやうらみーをきのうはかせ
ひまもなくーのきはくすはふーふるさとに【永正年間百韻34巻】／何路〔あきにか
ぜ〕／永正8(1511)年7月14日おもひたゆまぬーをきのうはかせ
もとあらのーこはきうつろふーふるさとに【合点之句／神宮文庫本】／独吟百韻／天
文9(1541)年12月25日

→夕まぐれ

そよそのこととーをきのうはかせ
なかめつつーたちつつわふるーゆふまくれ【伊予千句】／御何〔すすしは〕／天文
6(1537)年5月22日みもあへぬつゆにーをきのうはかせ
むらさめのーくもまにつきのーゆふまくれ

【那智筆／北野天満宮本】／永正十四年／

かぜがすさまじい
風が凄まじい

→蟋蟀

いたまみえたるーかせはすさまじ
こゑちかきーまぐらのつきにーきりきりす【天文廿四年梅千句】／何船〔つきにうめ〕
／天文24(1555)年正月7日よるのとほそのーかせはすさまじ
きりきりすーなきよるとこをーしきわひて【諸家月次連歌抄】／諸家月次連歌抄／成
立()年未詳かぜがみにしみる
風が身にしみる

→秋の空

なみたしくれてーかせそみにしむ
なほさりとーおもふなひとのーあきのそら【三島千句】／何木〔やまかせに〕／文明
3(1471)年3月21日～23日よふかきやまのーかせそみにしむ
しくれせぬーねさめはいかにーあきのそら

【葉守千句】／何木 [あらかりし]／長享
元(1487)年10月9日<~11日>

かぜとあさがすみ
風と朝霞

いづるひかげ
→出る日影

あさかすみーふきとくかぜのーなほさえて
いづるひかけのーとりのさへつり

【享徳二年千句】／何木 [はきにつゆ]／
享徳2(1453)年8月11日~13日

かせたえてーはるのよしるしーあさかすみ
いづるひかけのーおそきやまのは

【天正四年万句70巻】／三字中略 [かせ
たえて]／天正4(1576)年5月6日~7月
19日

かぜにおうたちばな
風に匂う橘

たますたれ
→玉簾

かせのいつくかーにほふたちはな
ふかきよをーしらてまきつるーたますたれ

【天文廿四年梅千句】／山何 [うちなひき]
／天文24(1555)年正月7日

つゆちるかせにーにほふたちはな
たますたれーのきはのつきにーまきあけて

【新撰菟玖波集／実隆本】／秋下／明応
4(1495)年9月26日

かぜにはなちる
風の花散る

はるのゆめ
→春の夢

かせはなほーあをはにのこるーはなちりて
はるのゆめこそーことにあたなれ

【看聞日記紙背50巻】／何船 [のちやゆ
き]／応永28(1421)年2月25日

いつもふくーまつかせつらきーはなちりて
はるのゆめこそーやかてさめぬれ

【成立不詳・宗祇以前15巻】／xx [あ
らしにも]／存疑／成立時不詳

かぜのおとわやま
風の音羽山

おうさかのせき
→逢坂の関

このはふくーあらしのかせのーおとはやま
こえすはたれにーあふさかのせき

【顕証院会千句】／何田 [あきくさは]／
宝徳元(1449)年8月19日~21日

あたたかにーふきくるかせのーおとはやま
あさひにむかふーあふさかのせき

【五吟一日千句】／何路 [いそのなみ]／
天正9(1581)年11月19日

つきにふるーしくれやかせのーおとはやま
ちらぬもみちにーあふさかのせき

【成立不詳・宗祇以前15巻】／名所 [つ
きにふる]／存疑／成立時不詳

かぜのおりおり
風の折々

なる
→なる

このしたつゆはーかせのをりをり
しかのねやーこはきかいるとーなりぬらむ

【紹巴亡父追善千句】／何人 [なきあとは]
／天文24(1555)年3月26日~晦日

たもとをしをるーかせのをりをり
おとつれもーいまやうらみとーなりぬらむ

【天正四年万句70巻】／初何 [そてくち
か]／天正4(1576)年5月6日~7月19日

かぜのしずけさ
風の静けさ

におう
→匂う

ふきまよひゆくーかせのしつけさ
うめのはなーたかさとまてかーにほふらむ

【大永三年月並千三百韻】／□□ [はなに
つき]／月並千三百韻／大永3(1523)年3
月23日

すたれにふるるーかせのしつけさ
ことのねもーたかころもてにーにほふらむ

【大永三年月並千三百韻】／□□ [あらた
まの]／月並千三百韻／大永3(1523)年12
月23日

かぜのすずしさ
風の涼しさ

やすらう
→安らう

そてふきおくるーかせのすずしさ
たまほこのーゆくへにしはしーやすらひて

【天正年間百韻57巻】／□□ [うめかえ
の]／裏白／天正19(1591)年1月3日

たたすかはらの一かぜのすすしさ
みそきする一みつのほりに一やすらひて

【文明十五年千句1 1巻】／三字中略〔か
たいとを〕／文明15(1483)年*月*日～
3月2日

かぜのはげしさ
風の激しさ

→時雨来る

たもとにさゆる一かぜのはげしさ
あきのそら一またかきくもり一しくれきて

【文明年間百韻3 4巻】／薄何〔さくをみ
よ〕／文明14(1482)年3月7日

たにはふかきも一かぜのはげしさ
つまきをる一みちははるかに一しくれきて

【延徳年間百韻1 6巻】／何路〔かすみさ
へ〕／延徳4(1492)年1月22日

→秋暮れる

うちいつるのの一かぜのはげしさ
したひゆく一なこりもとめす一あきくれて

【弘治三年春雪千句】／何木〔はなならて〕
／弘治3(1557)年正月7日～9日

なるとふきこす一かぜのはげしさ
まきのやも一すみうきはかり一あきくれて

【竹林抄／新古典文学大系本】／秋／文明
8(1476)年5月頃

かぜのまにまに
風のまにまに

→暮れる日

ちりもあくたも一かぜのまにまに
おくれゆく一うしのあゆみの一くるるひに

【大原野十花千句】／何船〔ひときつつ〕
／元龜2(1571)年2月5日～7日

かぜのまにまに一つゆみたるらし
なみかへる一みきはのみちの一くるるひに

【元龜二年千句】／何袋〔ふるさとと〕／
元龜2(1571)年3月5日

→浪返る

かぜのまにまに一つゆみたるらし
なみかへる一みきはのみちの一くるるひに

【元龜二年千句】／何袋〔ふるさとと〕／
元龜2(1571)年3月5日

つゆのたまちる一かぜのまにまに
なみかへる一まさこにうつる一つきのくれ

【寛文年間百韻2 2巻】／□□〔さそなお
く〕／寛文13(1673)年7月28日

かぜのむらさめ
風の村雨

→時鳥

ふきおくらる一かぜのむらさめ
ほとときす一まきれはててや一すきぬらむ

【出陣千句】／何木〔しもなから〕／永正
元(1504)年10月25日～27日

あとよりふれる一かぜのむらさめ
ほとときす一はなもちりあへす一はやなきて

【壁草／続群書類従本】／夏／永正3(1506)
年3月頃

かぜのゆくすえ
風の行末

→植え置く

いかにふきそふ一かぜのゆくすえ
うゑおきし一そのふのたけの一かけふかみ

【天正年間百韻5 7巻】／何人〔わかくさ
も〕／天正11(1583)年1月10日

のとかになりぬ一かぜのゆくすえ
うゑおきし一みきりのまつの一わかみとり

【文禄二年千句1 0巻】／何木〔うすきり
や〕／文禄2(1593)年4月8日～10日

かぜみえる
風見える

→初雁の声

はなすすき一なひくはかりに一かせみえて
つきにほのきく一はつかりのこゑ

【明応年間百韻2 2巻】／何人〔ひかしけ
ふ〕／本式／明応5(1496)年1月9日

むらさめに一つゆふきみたす一かせみえて
すすきになひく一はつかりのこゑ

【新撰菟玖波集／実隆本】／秋上／明応
4(1495)年9月26日

こがらしのかぜ
木枯しの風

かぜのお
→笛の音

ふきもたゆまぬーこからしのかせ
ふえのねはーさそはれかへるーをちこちに

【天文廿四年梅千句】／何木 [つみそへよ]
／天文 24(1555) 年正月 7 日

ろうにふきいるーこからしのかせ
ふえのねはーととめもあへぬーをくるまに

【天文年間百韻 3 8 巻】／何人 [ゆふかけ
て]／天文 11(1542) 年 5 月 7 日

やまのあきくれる
→山の秋暮れる

ひとりさひしきーこからしのかせ
よにとほくーこもるみやまのーあきくれて

【竹林抄／新古典文学大系本】／秋／文明
8(1476) 年 5 月頃

いととはけしきーこからしのかせ
しをれゆくーふかくさやまにーあきくれて

【老葉／吉川本】／秋／文明 13(1481) 年
夏頃

すこいあきかぜ
→凄い秋風

ののひとつまつ
→野の一つ松

とふかひなしやーすこきあきかせ
くれぬとてーかけたのむののーひとつまつ

【竹林抄／新古典文学大系本】／旅／文明
8(1476) 年 5 月頃

ふきとしふくはーすこきあきかせ
かるののーひとつもとすすきーひとつまつ

【心敬関係 1 0 種】／芝草内連歌合／天理本
／

そてふきおくるかぜ
→袖吹きおくる風

たまほこ
→玉鉢

そてふきおくるーみねのこからし
たまほこのーすゑはゆふしもーさえさえて

【天文年間百韻 3 8 巻】／x x [かめにさ
す]／天文 21(1552) 年 2 月 20 日

そてふきおくるーかせのすすしさ
たまほこのーゆくへにしはしーやすらひて

【天正年間百韻 5 7 巻】／□□ [うめかえ
の]／裏白／天正 19(1591) 年 1 月 3 日

ただあきのかぜ
→ただ秋の風

かりなく
→雁鳴く

たのめしあとはーたたあきのかせ
ひとふてのーたよりをまてはーかりなきて

【大永三年月並千三百韻】／□□ [まつか
せや]／月並千三百韻／大永 3(1523) 年 6
月 23 日

をののゆふへはーたたあきのかせ
のこるひもーいろこきいねにーかりなきて

【老葉／吉川本】／秋／文明 13(1481) 年
夏頃

ただまつのかぜ
→ただ松の風

はつしぐれ
→初時雨

ふりたるみやはーたたまつのかせ
さひしさはーかみなきつきーはつしぐれ

【河越千句】／何船 [やまかせに]／文明
2(1470) 年正月 10~12 日

あきのまくらはーたたまつのかせ
さをしかのーなくねにしるきーはつしぐれ

【大永四年月並千二百韻】／□□ [けふひ
くや]／月並千二百韻／大永 4(1524) 年 5
月 23 日

つゆふくかぜ
→露吹く風

むしなく
→虫鳴く

つゆふくかぜはーにしよりそたつ
みやきののーはなのさかりはーむしなきて

【宝徳四年千句】／何衣 [はなもはも]／
宝徳 4(1452) 年 3 月 12 日

つゆふくかぜはーすすのかりいほ
なつころもーひもくれかたはーむしなきて

【永正年間百韻 3 4 巻】／何衣 [あひにあ
ひぬ]／永正 10(1513) 年 2 月 16 日

のわきのかぜ
→野分の風

あけのそほぶね
→朱のそほ舟

のわきのかせの一かよふやまもと
きりまより一あけのそほふね一あらはれて

【享徳二年千句】／何人【つきとたか】／
享徳2(1453)年8月11日～13日

やまもとは一のわきのかせの一ふきたえて
みきはにとむる一あけのそほふね

【文明十四年万句52巻】／何水【たまや
とる】／文明14(1482)年7月4日～9月
14日

はつかぜときのうはきいてあきふける
初風と昨日は聞いて秋更ける

ひとはのこらないもみじ
→人は残らない紅葉

はつかせと一きのふはきし一あきふけて
ひとはのこらす一もろきもみちは

【三島千句】／何人【しるしらす】／文明
3(1471)年3月21日～23日

はつかせと一きのふはきし一あきふけて
ひとはのこらす一もみちちるかけ

【老葉／吉川本】／秋／文明13(1481)年
夏頃

はなのはるかぜ
花の春風

やまさくら
→山桜

とはむといひし一はなのはるかぜ
おくはまた一おそきもあれや一やまさくら

【弘治年間百韻8巻】／何船【たくそてに】
／弘治2(1557)年12月2日

くもをはらふは一はなのはるかぜ
やまさくら一よのまのあめに一さきいてて

【愚句老葉】／春／永正17年

にはのくちきの一はなのはるかぜ
やまさくら一かけひのみつに一なかれきて

【園塵第四／早稲田大学本】／春／永正6、7
年

はなのやまかせ
花の山風

はるになる
→春になる

くもあるつきの一はなのやまかせ
あけほのは一ゆふへわかれし一はるなれや

【至徳以前百韻7巻】／□□【くれなゐの】
／至徳4(1387)年以前

うらみははてし一はなのやまかせ
くれてしも一なほうとまれぬ一はるなれや

【大永三年月並千三百韻】／□□【ひとこ
ゑや】／月並千三百韻／大永3(1523)年4
月23日

はるかぜがふく
春風が吹く

かすむ
→霞む

あしたのはらに一はるかぜそふく
さしのほる一ひもほのかにや一かすむらむ

【葉守千句】／朝何【しもふけて】／長享
元(1487)年10月9日～11日>

かれしはやしも一はるかぜそふく
やまはけさ一いくしもよにか一かすむらむ

【長享年間百韻6巻】／何人【ゆきなから】
／長享2(1488)年1月22日

ふくかぜのあきのつゆ
吹く風に秋の露

ひぐらしのこゑ
→蛸の声

かせはまた一ふかぬになつも一あきのつゆ
せみにまじるや一ひぐらしのこゑ

【平松文庫本千句】／□□【なてしこの】
／

まつにふく一かせのしたはの一あきのつゆ
またかけうすき一ひぐらしのこゑ

【大永三年月並千三百韻】／□□【しくれ
のあめ】／月並千三百韻／大永3(1523)年
10月23日

ふくなみのうらかぜ
吹く浪の浦風

とりのなきたつ
→鳥の鳴き立つ

ふきまとはせる一なみのうらかぜ
さよふかき一うきねのとりの一なきたちて

【大永三年月並千三百韻】／□□【はなに
つき】／月並千三百韻／大永3(1523)年3
月23日

ふきこそかはれ一なみのうらかぜ
なかそらに一まさこのちとり一なきたちて

【元和年間百韻24巻】／□□【まつふく
や】／元和8(1622)年10月29日

まつかぜがふく
松風が吹く

→雲くも浮うく

こえむをのへは—まつかせそふく
くれわたる—そらにひとむら—くもうきて

【三島千句】／朝何〔やまとほく〕／文明
3(1471)年3月21日～23日

こえくるみねは—まつかせそふく
むらさめの—なこりにしはし—くもうきて

【成立不詳・心敬以前14巻】／何船〔は
るはまた〕／成立時不詳

→憂うれい

みちくるしほに—まつかせそふく
とまりても—ふねやこころの—うかるらむ

【成立不詳・宗長以前15巻】／何船〔し
もしろき〕／成立時不詳

こころもしらす—まつかせそふく
ゆふくれや—こけのしたにも—うかるらむ

【萱草／伊地知本】／雑／文明6(1474)年
2月以前

→頼たのむ

あらうみきはは—まつかせそふく
あまをふね—などこのきしを—たのむらむ

【三島千句】／山何〔うくひすの〕／文明
3(1471)年3月21日～23日

こころもしらす—まつかせそふく
ふけいつる—つきはくもをも—たのむらむ

【下草／金子本】／秋／延徳4(1492)年頃

まつかせのこえ
松風の声→月つきをみる

しつこころなき—まつかせのこゑ
つゆふかき—こはきかうへの—つきをみて

【文安月千句】／何船〔つきはなを〕／文
安2(1445)年8月15日

またおとろくや—まつかせのこゑ
ふくるよの—ねやにもりくる—つきをみて

【文明年間百韻34巻】／□□〔はたはり
や〕／文明14(1482)年9月

→花はな散ちる

さひしきやまの—まつかせのこゑ
みはやすを—まちあへぬまの—はなちりて

【天文年間百韻38巻】／何木〔あすのな
を〕／天文17(1548)年8月14日

よにとほやまの—まつかせのこゑ
たつねこし—ひともあとなく—はなちりて

【基佐集／静嘉堂文庫本】／春／永正
6(1509)年以前

まつまつふふくくかせ
松吹まつくく風→散ちるはな花

まつふくかせも—かすみはてけり
ちるはなの—にほひをはるの—なこりにて

【成立不詳・心敬以前14巻】／何人〔こ
のものと〕／成立時不詳

まつふくかせも—ゆめはみせけり
ちるはなの—かをるまくらに—めもあはて

【専順関係2種】／春／応仁元(1467)年
5月10日

みねのあきかせ
峰の秋風→雁かり鳴なくく

つきさやかなる—みねのあきかせ
かきつらね—みたれぬくもに—かりなきて

【天文廿四年梅千句】／何木〔つみそへよ〕
／天文24(1555)年正月7日

たもとふきすく—みねのあきかせ
さよころも—よさむのつきに—かりなきて

【壁草／大阪天満宮文庫本】／秋／永正
2(1505)年8月23日以後同3年3月以前

やまのまつかせ
山の松風→柴しばのい庵

ふるさとよりの—やまのまつかせ
なかなか—かこふそやすき—しはのいほ

【太神宮法楽千句】／何人〔しかのねを〕
／長享2(1488)年7月

なれてもさひし—やまのまつかせ
たれきてか—こころととめむ—しはのいほ

【萱草／伊地知本】／雑／文明6(1474)年
2月以前

^{なかなか}
→中々

ふるさとよりの一やまのまつかせ
なかなかに一かこふそやすき一しはのいほ
【太神宮法楽千句】／何人【しかのねを】
／長享2(1488)年7月

なれつつすめる一やまのまつかせ
なかなかに一こけのころもは一さむからて
【園塵第一／統群書類従本】／雑／長享2
年

^{よわのあきかせ}
夜半の秋風

^{くさまくら}
→草枕

すからにさひし一よはのあきかせ
あくるまの一はなのにおそき一くさまくら
【宮島千句】／山何【ことのはや】／天文
20(1551)年5月9日～11日

すすしさおくる一よはのあきかせ
くさまくら一しきもさためぬ一いろにして
【五吟一日千句】／何舟【はなをさへ】／
天正9(1581)年11月19日

かた

^{あきのくれがた}
秋の暮れ方

^{はつしぐれ}
→初時雨

やまかけすこき一あきのくれかた
ふるよりも一あとはみえける一はつしぐれ
【延徳年間百韻16巻】／山何【ふきもこ
ぬ】／延徳2(1490)年9月20日

をしまぬもやは一あきのくれかた
つゆはかり一さととひわふる一はつしぐれ
【天文年間百韻38巻】／何人【つきによ
る】／天文5(1536)年6月15日

^{あけがたのそら}
明け方の空

^{つきはなお}
→月は猶

あめすくるよの一あけかたのそら
つきはなほ一おちてすすしき一たまくらに

【明応年間百韻22巻】／何人【ふきすて
よ】／明応7(1498)年間10月6日

いそのまくらの一あけかたのそら
つきはなほ一かたふくままに一かけすみて

【大永三年月並千三百韻】／□□【はるは
たた】／月並千三百韻／大永3(1523)年間
3月23日

^{おちかたのくも}
遠方の雲

^{とりなく}
→鳥鳴く

つきはほのめく一をちかたのくも
しくれせし一みねよりいつる一とりなきて

【飯盛千句】／x x【かけすすし】／永祿
4(1561)年5月27日～29日

ゆきをもよほす一をちかたのくも
そことなく一すゑののあした一とりなきて

【明応年間百韻22巻】／何人【あさかす
み】／明応4(1495)年1月6日

^{ひとむら}
→一群

かはなみしろき一をちかたのくも
ひとむらの一たけのはわけの一よはあけて

【称名院追善千句】／何木【としこと】
／永祿6(1563)年12月14日～18日

くるるいろなる一をちかたのくも
ひとむらの一つはさならへて一とふからず

【永祿年間百韻28巻】／何路【あらたま
の】／裏白／永祿10(1567)年1月3日

^{おちかたのやま}
遠方の山

^{わたのはら}
→わたの原

つきのひかりに一をちこちのやま
あけわたる一きりのたえまの一わたのはら

【紹巴亡父追善千句】／唐何【はなのかに】
／天文24(1555)年3月26日～晦日

かねはかすみの一をちこちのやま
わたのはら一いつくのかたに一とまりふね

【五吟一日千句】／何木【としのうちに】
／天正9(1581)年11月19日

^{おちかたびとのそで}
遠方人の袖

→^{おくる}送る

をちかたひとのーそてほのかなり
よこくもやーわかれしゆめをーおくらむ

【大永四年月並千二百韻】／□□ [わけく
らし] /月並千二百韻 /大永 4(1524)年 7
月 23 日

をちかたひとのーそてのむらさめ
ほとときすーなれもたひとやーおくらむ

【那智箴 / 北野天満宮本】 / 永正十三年 /

おちのおやま
遠方の遠山

→^{かりなく}雁鳴く

みつつかすみのーをちのとほやま
わかれしもーおなしゆくへのーかりなきて

【紹巴亡父追善千句】 / 何船 [すみそめの]
 / 天文 24(1555)年 3月 26日 ~ 晦日

あすやこえましーをちのとほやま
わたりかねーふかさせうらにーかりなきて

【心敬関係 10種】 / 苔莖 / 赤木文庫本 /
 文明 3(1471)年秋

かたもきだめない
方も定めない

→^{しるべ}標

ふきかふかせはーかたもさためす
とふほたるーつきなきやみをーしるへにて

【嘉吉年間百韻 1 卷】 / 何木 [たけのはに]
 / 嘉吉 3(1443)年 10月 23 日

おくるふねはーかたもさためす
もしほたくーうらはほかけをーしるへにて

【享徳年間百韻 4 卷】 / 何路 [さくふちの]
 / 享徳 2(1453)年 3月 15 日

くものおちかた
雲の遠方

→^{しとれる}時雨れる

ゆふひみえすくーくものをちかた
いくたひかーつきまつあきのーしくらむ

【応仁年間百韻 6 卷】 / 何人 [ときはきを]
 / 応仁元 (1467)年 10月 17 日

つきもかたふくーくものをちかた
わかれゆくーそてにやつゆのーしくらむ

【新撰菟玖波集 / 実隆本】 / 恋上 / 明応
 4(1495)年 9月 26 日

^{くれゆくかた}
暮れゆく方

→^{かえり}帰る

くれゆくかたのーはるのしらくも
とりのねやーほのかになりてーかへるらむ

【永禄年間百韻 2 8 卷】 / 山何 [ゆふかほ
 に] / 永禄 2(1559)年 5月 20 日

くれゆくかたのーやまきはのみち
つきにしもーましはとりてやーかへるらむ

【文禄年間百韻 1 2 卷】 / □□ [にはくさ
 の] / 文禄 2(1593)年 1月 10 日

つきのいりがた
月の入方

→^{あきのそら}秋の空

あけなむとするーつきのいりかた
やまのはにーくもひきわたすーあきのそら

【享徳二年千句】 / 何人 [つきとたか] /
 享徳 2(1453)年 8月 11日 ~ 13日

ひかりをさまるーつきのいりかた
なかめすやーおもひなくともーあきのそら

【享禄年間百韻 8 卷】 / 何船 [はるのいろ]
 / 享禄 5(1532)年 1月 18 日

はるのくれがた
春の暮れ方

→^{あじさく}藤咲く

やよひのすゑのーはるのくれかた
ものふかきーまつのみまひまーふちさきて

【園塵第三 / 続群書類従本】 / 春 / 文亀元
 (1501)年 3月 18 日

はなをそつくすーはるのくれかた
やまふきのーひとつかきねにーふちさきて

【合点之句 / 神宮文庫本】 / 春 / 天文
 9(1541)年 12月 25 日

かたしく

^{かたしきのそで}
片敷の袖

→^{よわのつき}夜半の月

をれすはひとりーかたしきのそて
さりともーうさはならひぬーよはのつき

【秋津洲千句】／唐何〔うめかかの〕／天
文 15(1546)年 8月 25日

ゑひのまくらのーかたしきのそて
かけはなほーおほろけならぬーよはのつき

【天正年間百韻 5 7 卷】／初何〔すすしさを〕／天正 2(1574)年 6月 10日

かたしく 片敷く

つきのわかつき
→月の暁

さえとほるーあらしをそてにーかたしきて
あきのしもふるーつきのあかつき

【毛利千句】／何路〔はなにふく〕／文禄
3(1594)年 5月 12日～16日

すさましきーちはらのしもをーかたしきて
かりねするののーつきのあかつき

【慶長年間百韻 2 7 卷】／□□〔ゆきにしも〕／裏白／慶長 9(1604)年 1月 3日

しものかたしき 霜の片敷

つきをみる
→月を見る

かせもいとほぬーしものかたしき
さめすはとーゆめちふけゆくーつきをみて

【天文廿四年梅千句】／何人〔うめいつく〕
／天文 24(1555)年 正月 7日

おくつゆのみかーしものかたしき
くさまくらーそてにくちゆくーつきをみて

【那智筆／北野天満宮本】／永正十二年／

かたみ

かたみ 形見

おもいやる
→思いやる

とりかはすーあふきをつらきーかたみにて
はるけきたひをーおもひこそやれ

【元龜二年千句】／何袋〔ふるさとと〕／
元龜 2(1571)年 3月 5日

おもかけはーこころにおかぬーかたみにて
そふはかりにもーおもひこそやれ

【寛正年間百韻 2 0 卷】／何路〔こゑそはな〕／寛正 2(1461)年 1月 25日

におうころもて
→匂う衣手

はなのこるーくさはをあきのーかたみにて
けふつむきくにーにほふころもて

【顕証院会千句】／唐何〔みたれけり〕／
宝徳元(1449)年 8月 19日～21日

かへるさはーかたるをはなのーかたみにて
つみもつすみれーにほふころもて

【因幡千句】／薄何〔かきはらふ〕／文明
7(1475)年 11月 26日～28日

ひとのおもかけ
→人の面影

なみたのみーたひゆくわすれーかたみにて
のやまのみちもーひとのおもかけ

【出陣千句】／夕何〔いくよみし〕／永正
元(1504)年 10月 25日～27日

ありあけはーあふ□□□□のーかたみにて
つゆもわすれぬーひとのおもかけ

【看聞日記紙背 5 0 卷】／山何〔なつかけよ〕
／応永 26(1419)年 3月 29日

ちぎり
→契り

なみたはあたのーかたみなりけり
あさかほのーはなにもにたるーちきりにて

【天正四年万句 7 0 卷】／薄何〔やまとほみ〕
／天正 4(1576)年 5月 6日～7月 19日

かへすもふみはーかたみなりけり
かりそめもーめにはふれけむーちきりにて

【宗長関係 8 種】／老耳／天理本／

かたむく

かたむく
傾く

ふるみやのうち
→古宮の内

はしいたのーところところはーかたふきて
らうもへたたるーふるみやのうち

【慶長年間百韻 2 7 卷】／□□〔ちひろあ
る〕／慶長 4(1599)年 5月 10日

くちにけるーやなきもつきもーかたふきて
はるさへさひしーふるみやのうち

【慶長年間百韻27巻】/□□[ゆきにし
も] /裏白/慶長9(1604)年1月3日

つきがかたむく
月が傾く

ふるさとにあきのかぜ
→古里に秋の風

むかしかたりにーつきそかたふく
ふるさとをーとへはをきふくーあきのかせ

【文明年間百韻34巻】/何船[かへれと
て] /文明18(1486)年3月27日

たひねのまくらーつきそかたふく
ふるさとにーなみたつたへよーあきのかせ

【竹林抄/新古典文学大系本】/旅/文明
8(1476)年5月頃

あきのよ
→秋の夜

つきかたふきぬーたれをまつらむ
たのめねとーひとりはねしのーあきの上に

【葉守千句】/一字露頭[よやさむき] /
長享元(1487)年10月9日<~11日>

かくれてくもにーつきかたふきぬ
あふきをもーおきわすれぬるーあきの上に

【天文十八年梅千句】/青何[ゆけはうめ]
/天文18(1549)年正月11日

かたよる

かたより
片寄

かわそいのみち
→川浴いの道

くれたけのーすゑすゑみつにーかたよりて
つつくともなきーかはそひのみち

【天正年間百韻57巻】/何人[みれはみ
し] /天正12(1584)年9月13日

たまあられーたはしるたけのーかたよりて
なみこそかかれーかはそひのみち

【文禄年間百韻12巻】/□□[あつまや
の] /文禄2(1593)年5月6日

かたる

かたるばかりにむかうおもかけ
語るばかりに向う面影

→それでない声

かたるはかりにーむかふおもかけ
それならぬーこゑもむつましーみやことり

【老葉/吉川本】/旅/文明13(1481)年
夏頃

かたるはかりにーむかふおもかけ
それならぬーこゑもうらめしーほととぎす

【論書4種】/宗長/

かつらぎ

かつらぎのやま
葛城の山

→絶え絶え

ちるややなきのーかつらぎのやま
かはそひのーみちのいははしーたえたえに

【初瀬千句】/何路[おそさくら] /享徳
元・2(1452)年、4月

はなおそけなるーかつらぎのやま
まつたかくーかかれるふちのーたえたえに

【諸家月次連歌抄】/諸家月次連歌抄/成
立()年未詳

さくらのかつらぎのやま
桜の葛城の山

あきがすみたつ
→朝霞立つ

おくもさくらのーかつらぎのやま
あさかすみーたつたやとほくーへたつらむ

【毛利千句】/何田[やまとりも] /文禄
3(1594)年5月12日~16日

さくらさくなるーかつらぎのやま
あさかすみーたつたやはなにーなりぬらむ

【園塵第二/統群書類従本】/春/明応
4(1495)年早春

かなしい

たびのかなしき
旅の悲しさ

ほととぎす
→時鳥

なくさめかねつーたひのかなしき
ほととぎすーまくらのうへにーなきすてて

【顕証院会千句】／唐何〔みたれけり〕／
宝徳元(1449)年8月19日～21日

とほくもなれるーたひのかなしき
ききなるるーやまをいてゆくーほととぎす

【明応年間百韻22巻】／何船〔はなそは
る〕／明応2(1493)年3月25日

たびはかなしい
旅は悲しい

くさまくら
→草枕

あらましにさへーたひそかなしき
くさまくらーいもをおきてはーいかなかねむ

【住吉千句】／何路〔つきすめは〕／大永
元(1521)年11月1日～14日

みやこにはにすーたひそかなしき
くさまくらーとふらふつきはーありなから

【文明十四年万句52巻】／夢想〔そのし
なも〕／文明14(1482)年7月4日～9月
14日

かりまくら
→飯枕

ともはあれともーたひそかなしき
かりまくらーくにかはりたるーかたらひに

【永原千句】／何人〔みわたせは〕／明応
9(1500)年7月17日

にたるをみるもーたひそかなしき
まよひきてーくもゐるみねのーかりまくら

【老葉／毛利本】／恋上／(文明17(1485)
年7月23日頃)

ものがなしき
物悲しき

あかつきづき
→暁月

ものかなしきのーしもはらふこゑ
ねさめするーあかつきづきのーくさのいほ

【毛利千句】／何田〔やまとりも〕／文禄
3(1594)年5月12日～16日

ふもとには一ものかなしきのーなきすてて
あかつきづきのーいろのさやけさ

【文禄二年千句10巻】／山河〔まつとし
る〕／文禄2(1593)年4月8日～10日

わかれるたびはかなしい
別れる旅は悲しい

あうひと
→逢う人

わかれゆくゆくーたひそかなしき
あふひともーかたみになこりーうちなきて

【壁草／大阪天満宮文庫本】／恋下／永正
2(1505)年8月23日以後同3年3月以前

けふわかれしもーたひそかなしき
あふひともーまたふるさとのーなこりにて

【宗長関係8種】／老耳／天理本／

かね

いりあいのかね
入相の鐘

うちしぐれ
→うち時雨

かたやまさひしーいりあひのかね
わくるののーあきのひうすくーうちしくれ

【成立不詳・宗長以前15巻】／名号〔な
かはひと〕／成立時不詳

ふもとにつくるーいりあひのかね
まつたてるーをのへはかりのーうちしくれ

【文禄二年千句10巻】／何木〔うすきり
や〕／文禄2(1593)年4月8日～10日

かどさす
→門さす

はなはちるらむーいりあひのかね
しつかなるーはるのふるてらーかどさして

【太神宮法楽千句】／朝何〔つゆにたに〕
／長享2(1488)年7月

きりにこまれるーいりあひのかね
あきのひもーななめにのこるーかどさして

【平松文庫本千句】／□□〔ふゆはつき〕
／

かえり
→帰る

さとはそなたのーいりあひのかね
ちれはとてーはなにはなとやーかへるらむ

【紫野千句】／何屋【すきたかく】／延文
2(1357)年以後-応安3年6月以前

かすみにさひしーいりあひのかね
なくとりのーをのへや□□てーかへるらむ

【天正年間百韻57巻】／x x【かすみけ
り】／天正10(1582)年3月1日

はなのかけ
→花の陰

こころをつくすーいりあひのかね
やまふかみーかへりもやらぬーはなのかけ

【文明年間百韻34巻】／何路【やまかせ
に】／文明15(1483)年3月2日

おなしみねこすーいりあひのかね
あすまてとーおもひかけきやーはなのかけ

【成立不詳・宗養以前8巻】／何木【とこ
なつに】／成立時不詳

まよう
→迷う

たけひとむらのーいりあひのかね
おとろきしーとりやねくらにーまよふらむ

【長享年間百韻6巻】／x x【やまのはの】
／長享3(1489)年8月2日

をのへにひひくーいりあひのかね
かりひとやーつねならぬかたにーまよふらむ

【天正四年万句70巻】／竹何【まつほと
や】／天正4(1576)年5月6日~7月19日

やまぶかい
→山深い

くもよりをちのーいりあひのかね
くさのとにーひとつもおとせぬーやまふかみ

【河越千句】／朝何【うめそのに】／文明
2(1470)年正月10~12日

こころをつくすーいりあひのかね
やまふかみーかへりもやらぬーはなのかけ

【文明年間百韻34巻】／何路【やまかせ
に】／文明15(1483)年3月2日

わからぬ
→わからない

とほくそきこゆーいりあひのかね
かすかなるーすみかやたれとーわかさらむ

【伊予千句】／何路【さみたれの】／天文
6(1537)年5月22日

ひとりのみきくーいりあひのかね
ちきりおくーころともひとやーわかさらむ

【大永四年月並千二百韻】／□□【ゆふた
ちは】／月並千二百韻／大永4(1524)年6
月23日

→あらまし

そこともきかぬーいりあひのかね
あらましのーゆくすゑをたにーさためはや

【太神宮法楽千句】／薄何【まきのはや】
／長享2(1488)年7月

はるのあはれはーいりあひのかね
あらましのーいまはつきぬるーおいかみに

【菟玖波集／広島大学本】／雑四／文和
5(1356)年冬~翌年の春

→おもいたい

みをおとろかすーいりあひのかね
きくことのーうからぬよともーおもははや

【成立不詳・宗砌以前6巻】／何人【みつ
たまり】／成立時不詳

けふまたききつーいりあひのかね
みのうへにーくるるよはひとーおもははや

【菟玖波集／広島大学本】／雑五／文和
5(1356)年冬~翌年の春

→かどみえる

はるのはやしのーいりあひのかね
やまかすむーふもとにすきのーかどみえて

【表佐千句】／何船【はなやちる】／文明
8(1476)年3月6日<~8日>

はしよりおくのーいりあひのかね
まつけふるーゆきのやまもとーかどみえて

【園塵第四／早稲田大学本】／冬／永正6、7
年

つづく
→続く

なかそらとほきーいりあひのかね
まつのはのーおくやいらかにーつつくらむ
【紹巴亡父追善千句】／二字反音〔かけた
かき〕／天文24(1555)年3月26日～晦日
やまとほからぬーいりあひのかね
かすみにやーすゑののてらはーつつくらむ
【行助関係4種】／行助句／伊地地本／

はつせでら
→初瀬寺

またあはれそふーいりあひのかね
こもりてはーなにのるらむーはつせでら
【因幡千句】／薄何〔かきはらふ〕／文明
7(1475)年11月26日<～28日>

ちかきをのへのーいりあひのかね
はつせでらーもろこしにたにーあふかすや
【那智庵／北野天満宮本】／永正十三年／

はつせやま
→初瀬山

たひねはいつくーいりあひのかね
はつせやまーよもにはなさくーかけわけて
【名所句集／静嘉堂文庫本】／春／(大永
前後)

たひねはいつくーいりあひのかね
はつせやまーよもにはなさくーかけわけて
【竹林抄／新古典文学大系本】／春／文明
8(1476)年5月頃

けふもまたさくーいりあひのかね
はつせやまーはるけきはなのーおくにきて
【諸家月次連歌抄】／諸家月次連歌抄／成
立()年未詳

はるになる
→春になる

はなはこすゑのーいりあひのかね
ひとかへるーあととはしつげきーはるならむ
【天文年間百韻38巻】／山何〔なくやい
つれ〕／天文24(1555)年5月14日
かすむゆふへのーいりあひのかね
あすはたかーいのちのうちのーはるならむ

【萱草／伊地知本】／春／文明6(1474)年
2月以前

ひが暮れる
→日が暮れる

いそくところやーいりあひのかね
とまりをもーさためぬうらのーひはくれて
【天正四年万句70巻】／初何〔ゆふかほ
の〕／天正4(1576)年5月6日～7月19日

あかつききしーいりあひのかね
ほとときすーゆくへわすれぬーひはくれて
【竹林抄／新古典文学大系本】／夏／文明
8(1476)年5月頃

かねなる
鐘鳴る

あかつきのそら
→暁の空

はるふかきーふもとのさとにーかねなりて
しらぬふねゆくーあかつきのそら
【三島千句】／初何〔うつろふか〕／文明
3(1471)年3月21日～23日

かたやまのーゆふへのあめにーかねなりて
つきまちいてむーあかつきのそら
【美濃千句】／山何〔けふみすは〕／文明
4(1473)年12月16日～21日

すぎのむらたち
→杉の群立ち

くれわたるーみねよりおくにーかねなりて
いらかさひしきーすきのむらたち
【弘治年間百韻8巻】／x x〔をりのこす〕
／弘治2(1556)年9月10日

かはかみはーくもゐるいらかーかねなりて
あらしにあくるーすきのむらたち
【成立不詳・宗養以前8巻】／何人〔あを
やきや〕／成立時不詳

つきがなむく
→月が傾く

やまふかくーすむひとしるきーかねなりて
よをおとろけとーつきそかたふく
【明応年間百韻22巻】／何人〔あさかす
み〕／明応4(1495)年1月6日

たちまよふーそらのおくよりーかねなりて
あかつきさむみーつきそかたふく

【明応年間百韻 2 2 巻】／何水 [あけほの
を]／明応 8(1499) 年 2 月 19 日

^{みねのふるでら}
→峰の古寺

われゆかぬーこひちのやまにーかねなりて
こころのかよふーみねのふるてら

【文明十四年万句 5 2 巻】／堀何 [かるひ
とは]／文明 14(1482) 年 7 月 4 日～9 月
14 日

なほくらきーまつのかげにもーかねなりて
たれかとひこむーみねのふるてら

【文明十四年万句 5 2 巻】／何路 [ぬしや
たれ]／文明 14(1482) 年 7 月 4 日～9 月
14 日

^{やまのはのつき}
→山の端の月

あかつきはーまたいりあひのーかねなりて
いつるににたるーやまのはのつき

【宗長追善千句】／薄何 [くもとりや]／
(享祿 5) 天文元 (1532) 年 3 月 25 日

このよころーたのむゆめたにーかねなりて
はなのなこりのーやまのはのつき

【伊予千句】／三字中略 [たけのはの]／
天文 6(1537) 年 5 月 22 日

かねごと

^{ひとのかねごと}
人の豫言

^{ちどり}
→契り

かはるかいか□ーひとのかねごと
ちきりてもーこころのおくのーゆかしきに

【看聞日記紙背 5 0 巻】／山何 [なつかけ
よ]／応永 26(1419) 年 3 月 29 日

いつはりなれやーひとのかねごと
ちきりてもーふたりはしなすーのこるみに

【心敬関係 1 0 種】／心玉集／静嘉堂文庫
本／文正元 (1466) 年 4 月

かみ

^{かみにただいのる}
神にただ祈る

^{むすぶちぎり}
→結ぶ契り

かみはたたーいのるにこそはーかひもあれ
むすぶちきりのーゆくへたかはし

【天文廿四年梅千句】／何垣 [あさきりに]
／天文 24(1555) 年正月 7 日

かみもたたーいのるにこそはーなひきけれ
むすぶちきりのーすゑはしられす

【天正四年万句 7 0 巻】／何船 [ときはき
も]／天正 4(1576) 年 5 月 6 日～7 月 19 日

^{まつりするかみ}
祭りする神

^{もりのこがくれ}
→森の木隠れ

まつりせしーひもくれゆけはーかみさひて
みちはのこれるーもりのこかくれ

【永祿年間百韻 2 8 巻】／追善 [まれにと
ふ]／永祿元 (1558) 年 11 月 5 日

まつりせしーあとはいくかそーかみのまへ
くさうちしけるーもりのこかくれ

【文明十四年万句 5 2 巻】／何紙 [つゆは
けさ]／文明 14(1482) 年 7 月 4 日～9 月
14 日

^{みだれがみ}
乱れ髪

^{あおやぎのいと}
→青柳の糸

たはつけしーすちともあらぬーみたれかみ
つゆにぬれぬるーあをやきのいと

【文祿年間百韻 1 2 巻】／□□ [はなさけ
と]／文祿 2(1593) 年 2 月 18 日

かきやるはーつれなきかけのーみたれかみ
いているかとのーあをやきのいと

【園塵第四／早稲田大学本】／春／永正 6、7
年

かも

^{かもひよし}
賀茂日吉

^{あおいかつら}
→葵桂

かもひよしーみやこにちかきーやまとして
あふひかつらはーまつりにそとる

【宝徳四年千句】／二字反音 [はなにかけ]
／宝徳 4(1452) 年 3 月 12 日

□□さけふーかみかき□□しーかもひよし
あふひかつらはーおなし□□□□

【応永年間百韻 7 卷】／□□ [x x はせて]
／応永 24(1417) 年 3 月 16 日

かや

あさじう
浅茅生

うぐいすのこゑ
→鶯の聲

はるきてもーたちたにいてぬーあさちふに
とふをなさけのーうくひすのこゑ

【伊庭千句】／何草 [はるはけふ]／大永
4(1524) 年 3 月 17 日～21 日

あさちふにーいととふるさとーはるくれて
なみたやおとすーうくひすのこゑ

【壁草／大阪天満宮文庫本】／春／永正
2(1505) 年 8 月 23 日以後同 3 年 3 月以前

あさじうのつゆ
浅茅生の露

たえまない
→耐えない

しのにこほるるーあさちふのつゆ
かせをいたみーたひなるそてやーたへさらむ

【大永三年月並千三百韻】／□□ [ひとこ
ゑや]／月並千三百韻／大永 3(1523) 年 4
月 23 日

そてにくたくるーあさちふのつゆ
くすのはのーうらみにわれやーたへさらむ

【大永三年月並千三百韻】／□□ [あらた
まの]／月並千三百韻／大永 3(1523) 年 12
月 23 日

から

からごろも
唐衣

そでのうつりが
→袖の移り香

かさねてもーむなしきひとのーからころも
わすれむものかーそてのうつりか

【天正年間百韻 5 7 卷】／何船 [みちみち
を]／天正 13(1585) 年 5 月 27 日

けふこそとーかへてうれしきーからころも
わかはのはなのーそてのうつりか

【天正四年万句 7 0 卷】／二字返音 [かせ
やいろ]／天正 4(1576) 年 5 月 6 日～7 月
19 日

よが^よあける^あ
→夜が更ける

かすかのやーそのかみひとのーからころも
さかきはうたふーよはふけにけり

【紫野千句】／片何 [かせかよ]／延文
2(1357) 年以後-応安 3 年 6 月以前

からころもーたちわかれにしーつきのもと
しみつにあきのーよはふけにけり

【天文年間百韻 3 8 卷】／山何 [のきにお
ふる]／天文 19(1550) 年 4 月 24 日

あきのよもぎうのきと
→秋の蓬生の里

からころもーそてとふつきのー□□□□□
あきはたさひしーよもきふのやと

【文安年間百韻 9 卷】／山何 [あきのいろ]
／文安 4(1447) 年 9 月 6 日

わかなみたーいくへのいろをーからころも
あきはむしなくーよもきふのやと

【成立不詳・宗叡以前 6 卷】／何人 [みつ
たまり]／成立時不詳

もろこしがね
唐土舟

まつらがた
→松浦瀉

もろこしふねのーなみのはけしさ
かへるひをーさらについてかーまつらかた

【天正四年万句 7 0 卷】／二字返音 [かせ
やいろ]／天正 4(1576) 年 5 月 6 日～7 月
19 日

もろこしふねのーあとさきのうさ
いさりひにーゆふやみふかきーまつらかた

【春夢草／書陵部本】／雑／永正 12(1516)
年、13 年

かり

おちるあまつかり
落ちる天つ雁

つきのいでしほ
→月の出潮

あまつかり一ふかるるかせに一なきおちて
あしまはくらき一つきのいてしほ

【看聞日記紙背50巻】／何船【あきかせ
の】／応永15(1408)年7月23日

やまとほき一いりえにおつる一あまつかり
ゆふひにむかふ一つきのいてしほ

【成立不詳・宗長以前15巻】／□□【ち
らぬより】／成立時不詳

かえるかりがね
帰る雁

あらわれる
→現れる

かすはいくつそ一かへるかりかね
とほやまは一ゆきののこるに一あらはれて

【看聞日記紙背50巻】／山河【ちよもみ
む】／応永19(1412)年1月14日

こゑにしられて一かへるかりかね
とほうらの一ほにゆくふねは一あらはれて

【看聞日記紙背50巻】／何路【あききて
は】／応永27(1420)年7月25日

ふるさと
→古里

こゑはかりして一かへるかりかね
ふるさとは一たれすみすてて一あれぬらむ

【看聞日記紙背50巻】／何木【ゆきそは
な】／応永25(1419)年12月22日

おのかひとつれ一かへるかりかね
ふるさとは一たかこころにも一あるものを

【菟玖波集／広島大学本】／羈旅／文和
5(1356)年冬～翌年の春

やまさくら
→山桜

またはるそとや一かへるかりかね
ゆきかとよ一こしのしらねの一やまさくら

【看聞日記紙背50巻】／唐何【いやとし
に】／応永31(1424)年1月25日

こころつよくも一かへるかりかね
ちるまては一なとかみさりし一やまさくら

【新撰菟玖波集／実隆本】／雜一／明応
4(1495)年9月26日

かえるかりのこゑ
帰る雁の声

あわれをいう
→哀れを言う

ひとつらや一かへりおくるる一かりのこゑ
あはれをいはは一わかたひのそて

【表佐千句】／何年【はなにいる】／文明
8(1476)年3月6日<~8日>

かへるさや一きぬるにかはる一かりのこゑ
あはれをいはは一はるのしのめ

【皇学館文庫本千句】／□□【ちらははな】
／永禄6(1563)年11月18日以前

かりなく
雁鳴く

あきがふける
→秋が更ける

くもまより一ほのめくつきに一かりなきて
そらもみにしむ一あきはふけけり

【成立不詳・宗祇以前15巻】／何人【は
つはなや】／成立時不詳

あらしのみ一ふくやときけは一かりなきて
をのへのまつも一あきはふけけり

【壁草／大阪天満宮文庫本】／秋／永正
2(1505)年8月23日以後同3年3月以前

ふしみのゆめ
→伏見の夢

つきうつる一まくらのをちに一かりなきて
ふしみのゆめそ一なこりつゆけき

【成立不詳・宗養以前8巻】／何木【とこ
なつに】／成立時不詳

みつしろき一たのものうへに一かりなきて
ふしみのゆめそ一つきにあとなき

【春夢草／書陵部本】／秋／永正12(1516)
年、13年

かりのいくつら
雁の幾列

はるはる
→遙々

なきてすくなる一かりのいくつら
はるはると一あしへをさして一みつしほに

【大永三年月並千三百韻】／□□〔うめか
かや〕／月並千三百韻／大永 3(1523) 年 2
月 23 日

つはさみたれしーかりのいくつら
はるはるとーたのものすゑのーいろつきて

【慶長年間百韻 2 7 巻】／□□〔つゆにみ
を〕／慶長 9(1604) 年 6 月 28 日

かりのこえ
雁の声

→^{かすみこめる}
霞こめる

やまたかみーきたにたなひくーかりのこゑ
はるのふもとはーかすみこめつつ

【太神宮法楽千句】／何人〔しかのねを〕
／長享 2(1488) 年 7 月

なこりもやーおほよとのなみにーかりのこゑ
かすみこめつつーうらのつりふね

【成立不詳・宗養以前 8 巻】／□□〔つゆ
はそての〕／成立時不詳

かりのこえこゑ
雁の声々

→^{うつろう}
移ろう

くもまにおつるーかりのこゑこゑ
あきのたのーほのかにつきもーうつろひて

【新撰菟玖波集／実隆本】／秋上／明応
4(1495) 年 9 月 26 日

おくれさきたつーかりのこゑこゑ
すゑのつゆーもとあらのこはきーうつろひて

【老葉／吉川本】／秋／文明 13(1481) 年
夏頃

かりのたまざさ
雁の玉章

→^{へだつふるさと}
隔つ古里

たかおとつれそーかりのたまつさ
ふるさとのーそらをはきりやーへたつらむ

【文安雪千句】／何船〔かせにとふ〕／文
安 2(1445) 年 10 月 18 日

かりねにたのむーかりのたまつさ
ふるさとはーいくくもぬちをーへたつらむ

【池田千句】／何 x〔ゆきそちる〕／永正
7(1510) 年春以前<永正 5 年春>

かりのひとこゑ
雁の一声

→^{あきふける}
秋更ける

なこりもさむきーかりのひとこゑ
それとなくーよはのけしきもーあきふけて

【文龜年間百韻 4 巻】／何人〔きえしよの〕
／文龜 2(1502) 年 8 月 6 日

まくらおとろくーかりのひとこゑ
いなむしろーつゆしきあへすーあきふけて

【大永四年月並千二百韻】／何色〔うめの
はな〕／月並千二百韻／大永 4(1524) 年 1
月 23 日

かりのひとつら
雁の一系列

→^{そことない}
そことない

あとはかすめるーかりのひとつら
そことなくーなかめにのこるーはるのうみ

【明応年間百韻 2 2 巻】／何人〔あきのい
ろに〕／明応 9(1500) 年 7 月 11 日

ゆくあとしたふーかりのひとつら
そことなくーきりのうなはらーふねうけて

【弘治年間百韻 8 巻】／何人〔うめひととき〕
／裏白／弘治 3(1557) 年 1 月 3 日

とぶかりのつばき
飛ぶ雁の翼

→^{あけわたるそら}
明け渡る空

とぶかりのーつはさやつきをーかけつらむ
なみのうへよりーあけわたるそら

【紹巴亡父追善千句】／何人〔なきあとは〕
／天文 24(1555) 年 3 月 26 日～晦日

とぶかりのーつはさもつゆにーしをるらむ
よさむのつきのーあけわたるそら

【文明十四年万句 5 2 巻】／何木〔まつは
みどり〕／文明 14(1482) 年 7 月 4 日～9
月 14 日

はつかりのこゑ
初雁の声

→^{あまおがね}
海人小舟

たたひとつらのーはつかりのこゑ
ゆふくれはーつりにといつるーあまをふね

【嘉吉年間百韻1巻】／何木〔たけのはに〕
／嘉吉3(1443)年10月23日

あけゆくくもも一はつかりのこゑ
なかめやる一うみへしつけき一あまをふね

【弘治年間百韻8巻】／x x〔をりのこす〕
／弘治2(1556)年9月10日

はるのかりがね
春の雁

→此方彼方

ともまちつれぬ一はるのかりかね
ちきりしは一こなたかなたに一なりはてて

【文明年間百韻34巻】／x x〔あきふけぬ〕
／文明12(1480)年9月28日

またたちかへる一はるのかりかね
たまつさは一こなたかなたに一かよひつつ

【菟玖波集／広島大学本】／恋下／文和
5(1356)年冬～翌年の春

わたるかりがね
渡る雁

→長い夜

ねさめのまくら一わたるかりかね
あかつきと一おもひてたにも一なかきよに

【応永年間百韻7巻】／何路〔やまみつの〕
／応永15(1408)年3月11日

かすさへしるく一わたるかりかね
たつしきの一おのかはねかき一なかきよに

【宗長関係8種】／壬生宛／書陵部本／

かりそめ

かりそめ
仮初め

→入相の鐘

かりそめの一やとうちたのむ一たひのくれ
なれぬるつきに一いりあひのかね

【河越千句】／白何〔はるかせに〕／文明
2(1470)年正月10～12日

かりそめの一ためしはきくも一ゆかしきに
しらすやけふも一いりあひのかね

【大永三年月並千三百韻】／□□〔ひとこゑや〕
／月並千三百韻／大永3(1523)年4月23日

→日暮れ

かりそめの一やとりにゆきの一ふりそひて
かりはのをのの一ひこそくれぬれ

【元龜年間百韻6巻】／何人〔はなのときも〕
／元龜4(1573)年6月6日

かりそめの一ちきりとなるは一まれにして
あひやとりする一ひこそくれぬれ

【文明十四年万句52巻】／何木〔つきみよと〕
／文明14(1482)年7月4日～9月14日

かりの

かりねのつきかげ
仮寝の月影

→花打ち香る

かけかすむ一かりねのつきの一あくるよに
はなうちかをり一とりのなくこゑ

【文明十四年万句52巻】／初何〔をるそてに〕
／文明14(1482)年7月4日～9月14日

かりねのつきの一かけさむきそら
わくるのの一はなうちかをり一すゑくれて

【天正四年万句70巻】／何風〔ふりつもる〕
／天正4(1576)年5月6日～7月19日

かりねをする
仮寝をする

→深い夜

そてうちしをれ一かりねをやせむ
ひとかへる一あとにもいまた一ふかきよに

【表佐千句】／何路〔みなかみの〕／文明
8(1476)年3月6日<～8日>

おもひのほかの一かりねをやせむ
やととほき一のへにいつれは一ふかきよに

【園塵第四／早稲田大学本】／雑下／永正
6、7年

かりのよるのゆめ
仮の夜の夢

→朝の雲

はかなしな一かりにみたりし一よるのゆめ
あしたのくもの一あともとまらす

【成立不詳・宗叡以前6巻】／何人〔みつ
たまり〕／成立時不詳

かりそめに一なれてかへりしーよるのゆめ
あしたのくものーのこるやまのは

【専順関係2種】／雑／応仁元(1467)年
5月10日

かりふしのゆめ
仮臥の夢

かねのこゑ
→鐘の声

いつちさめゆくーかりふしのゆめ
かねのこゑーきこえてのちのーふかきよに

【天文年間百韻38巻】／山何〔つきやけ
さ〕／天文21(1552)年7月26日

むすひもあへぬーかりふしのゆめ
かねのこゑーそこともしらすーあけはてて

【天文年間百韻38巻】／x x〔しかそな
く〕／天文24(1555)年9月19日

かりまくら
仮枕

ふるさとのゆめ
→古里の夢

わけのこすーくさはをむすふーかりまくら
みるやとたのむーふるさとのゆめ

【表佐千句】／何衣〔よるやあめ〕／文明
8(1476)年3月6日<~8日>

はるけさやーおなしやまのーかりまくら
まどろむほとの一ふるさとのゆめ

【称名院追善千句】／何路〔いるかたの〕
／永禄6(1563)年12月14日~18日

かりまくらーかたしくつゆのーふかきのに
むすひもとめよーふるさとのゆめ

【成立不詳・宗養以前8巻】／何木〔とこ
なつに〕／成立時不詳

のにかりまくら
野に仮枕

かたしきのゆめ
→片敷の夢

かりまくらーすそののかたにーかへなまし
いかにねてかはーかたしきのゆめ

【五吟一日千句】／初何〔やまもいさ〕／
天正9(1581)年11月19日

はかなしやーのかみのさとのーかりまくら
いふきおろしをーかたしきのゆめ

【壁草／大阪天満宮文庫本】／旅／永正
2(1505)年8月23日以後同3年3月以前

のべのかりふし
野辺の仮臥

たびまくら
→旅枕

ゆめちをたとるーのへのかりふし
たひまくらーふかきもしらすーいつるよに

【住吉千句】／何田〔このはちる〕／大永
元(1521)年11月1日~14日

ねられぬとこはーのへのかりふし
たひまくらーゆめさへとひやーたえつらむ

【成立不詳・宗祇以前15巻】／何船〔き
りのはに〕／成立時不詳

たびのそら
→旅の空

ところさためぬーのへのかりふし
うきものとーいひしそまことーたひのそら

【明応年間百韻22巻】／十三仏名号〔な
かつきも〕／明応4(1495)年9月30日

みやこわすれぬーのへのかりふし
たちしよのーとりかまたなくーたひのそら

【宗碩関係2種】／宗碩連歌合／静嘉堂文
庫本／

ゆめのかりまくら
夢の仮枕

つきにいくたび
→月に幾度

ならはすはーみえましゆめかーかりまくら
つきにいくたひーかけしふるさと

【成立不詳・宗長以前15巻】／何路〔み
ねちかし〕／成立時不詳

みしゆめのーのちもよなかきーかりまくら
つきにいくたひーとこのやまかせ

【天和年間百韻2巻】／□□〔おいかみに〕
／天和2(1682)年4月3日

むさしののほら
→武蔵野の原

ゆめちにもーゆきつつおなしーかりまくら
またみぬかたやーむさしののほら

【羽柴千句】／薄何〔たちはなの〕／天正
6(1578)年5月18・19日

すゑいかに一みはてぬゆめの一かりまくら
あすもわくへき一むさしののほら

【文明十四年万句52巻】／山何〔あきか
せに〕／文明14(1482)年7月4日～9月
14日

かりる

やどをか
宿を借る

→村雨

せきのこなたに一やとやからまし
むらさめの一おとはのさとに一たちよりて

【行動関係4種】／行動句集／書陵部本／

しはしのほどの一やとやからまし
むらさめの一あとよりすくる一このもとに

【大原三吟／酒竹文庫本】／大原三吟／文
明14(1482)年10月<11月>

かれる

かれたくさがもえでる
枯れた草が萌え出る

→駒祝う声

ふゆかれし一みちのしはくさ一もえいてて
のへのかすみに一こまいはふこゑ

【聖廟千句】／何田〔のこるひに〕／明応
3(1494)年2月10日～12日

こそかれし一くさはつゆけく一もえいてて
のはあさまたき一こまいはふこゑ

【明応年間百韻22巻】／何水〔あけほの
を〕／明応8(1499)年2月19日

かれはなすすき
枯れ花薄

→弱る虫の音

はなすすき一かれゆくしもに一あきふけて
のにはおしなひ一よわるむしのね

【顕証院会千句】／山何〔あさもよひ〕／
宝徳元(1449)年8月19日～21日

つきのこる一かれののすゑの一はなすすき
ほのかになりぬ一よわるむしのね

【因幡千句】／薄何〔かきはらふ〕／文明
7(1475)年11月26日<～28日>

ふゆがれ
冬枯れ

→我が思い草

ふゆかれに一かけなきのこそ一とほくみれ
いつまでのこる一わかおもひくさ

【永原千句】／唐何〔とりのねに〕／明応
9(1500)年7月17日

むさしのも一かきりしらる一ふゆかれに
いかなるたねそ一わかおもひくさ

【老業／吉川本】／恋下／文明13(1481)年
夏頃

かわ

あきのかわけ
秋の川風

→霧わたる

まよふやふなち一あきのかはかせ
きりわたる一やまもとつつき一かすかにて

【永正年間百韻34巻】／何人〔ゆふつく
よ〕／永正13(1516)年7月8日

なみにあけたつ一あきのかはかせ
きりわたる一すゑののすすき一むらむらに

【天文年間百韻38巻】／何人〔つきによ
る〕／天文5(1536)年6月15日

あまのがわ
天の川

→吹く秋の初風

けふとしる一ならひはかりの一あまのかは
ふくにおとろく一あきのはつかせ

【皇学館文庫本千句】／□□〔ちらははな〕
／永禄6(1563)年11月18日以前

かよひけむ一うききよいかに一あまのかは
ふきつたへくる一あきのはつかせ

【成立不詳・宗長以前15巻】／何人〔や
まみつは〕／成立時不詳

かわおと
川音

→^{つき}月のさやけさ

かはおとも—おほみのさとは—かきくもり
いりえにくるる—つきのさやけさ

【太神宮法楽千句】／玉何〔あきとほし〕
／長享 2(1488) 年 7 月

かはおとも—はるかにかせの—ふきおくり
せせにうつろふ—つきのさやけさ

【慶長年間百韻 2 7 卷】／□□〔ねふかき
や〕／慶長 4(1599) 年 2 月 8 日

かわぞいのみち
川沿いの道→^{あかつき}暁

みつうちけふる—かはそひのみち
あかつきの—つきのこるえに—ふねさして

【河越千句】／二字反音〔はるみても〕／
文明 2(1470) 年正月 10～12 日

かすかにのこる—かはそひのみち
あかつきの—やまにかかれる—よはのつき

【文明年間百韻 3 4 卷】／何木〔うめかか
を〕／文明 15(1483) 年 2 月 19 日

→^{わたしがね}渡し舟

くたれはあさき—かはそひのみち
はやきせに—おとさていその—わたしふね

【成立不詳・宗祇以前 1 5 卷】／x x〔は
るやたつ〕／存疑／成立時不詳

つつくともなき—かはそひのみち
くれぬれは—ひとりふたりの—わたしふね

【天正年間百韻 5 7 卷】／何人〔みれはみ
し〕／天正 12(1584) 年 9 月 13 日

かわぞいふね
川沿い舟→^{きしのくれたけ}岸の真竹

さしいつる—かはそひふねに—かせふきぬ
すゑうちなひく—きしのくれたけ

【永原千句】／何袋〔たかそめし〕／明応
9(1500) 年 7 月 17 日

なみもなき—かはそひふねに—さをとりて
をのえてきらむ—きしのくれたけ

【文明十四年万句 5 2 卷】／何色〔はるな
つを〕／文明 14(1482) 年 7 月 4 日～9 月
14 日

かわつらのさと
川面の里→^{はるか}遙か

ありともしらぬ—かはつらのさと
はるかにも—ふねよはふよの—こたへして

【永正十花千句】／何田〔はなにこひ〕／
永正 13(1516) 年 3 月 11 日～14 日

きをきるをの—かはつらのさと
はるかにも—おもひわたせる—はしはしら

【紹巴亡父追善千句】／初何〔たまたれの〕
／天文 24(1555) 年 3 月 26 日～晦日

ちいかかわおと
近い川音→^{すずしき}涼しき

なみたかかれや—ちかきかはおと
すずしきは—またぬにうかふ—あきのくも

【石山四吟千句】／薄何〔うつせみの〕／
天文 24(1555) 年 8 月 15 日～19 日

あめのうちより—ちかきかはおと
すずしきは—なつのほかなる—やなきかけ

【成立不詳・宗長以前 1 5 卷】／□□〔ち
らぬより〕／成立時不詳

つきのかわかみ
月の川上→^{かねのおと}鐘の音

かけはしとほき—つきのかはかみ
かねのおと—くるるもなみの—まかひにて

【永禄年間百韻 2 8 卷】／何人〔ふちかえ
や〕／永禄 7(1564) 年 3 月 15 日

さやかにうつる—つきのかはかみ
きりはるる—ゆふへのそらの—かねのおと

【天正年間百韻 5 7 卷】／何路〔たちそひ
て〕／天正 6(1578) 年 1 月 3 日

なみだがわ
涙河→^{みなかみのもみぢちる}水上の紅葉散る

かけをたに—うつさむせせの—なみたかは
などみなかみの—もみぢちるらむ

【成立不詳・宗廟以前6巻】／唐何〔なて
しこの〕／成立時不詳

いろにさへーあさくはみえぬーなみたかは
なにみなかみのーもみちちるらむ

【親当関係2種】／親当句集／赤木文庫本
／

よどのかわぶね
淀の川舟

むらさめ
→村雨

みつのにつなけーよどのかはふね
むらさめのーあとのみかさやーまさるらむ

【文明十四年万句52巻】／一字露頭〔ち
あきふる〕／文明14(1482)年7月4日～
9月14日

ともにおくるるーよどのかはふね
むらさめのーまたふるまははーほしわひて

【文明十四年万句52巻】／何路〔かみや
しる〕／文明14(1482)年7月4日～9月
14日

ほととぎす
→時鳥

なこりなかむるーよどのかはふね
なきすつるーつきはすむよのーほととぎす

【永原千句】／何色〔うつろはぬ〕／明応
9(1500)年7月17日

はやあけすくるーよどのかはふね
ほととぎすーたひたつあとにーやまみえて

【行助関係4種】／行助連歌／天理本／

さすかにはやきーよどのかはふね
ほととぎすーひとこゑをたにーききやらて

【基佐集／静嘉堂文庫本】／夏／永正
6(1509)年以前

かわす

かわすことのは
交わす言の葉

ほととぎす
→時鳥

きくやいかにとーかはすことのは
しるしらすーかりねのやまのーほととぎす

【新撰菟玖波集／実隆本】／夏／明応
4(1495)年9月26日

ことわりなれやーかはすことのは
うくひすにーしたしきこゑのーほととぎす

【園塵第四／早稲田大学本】／夏／永正6、7
年

かわず

かわすなく
蛙鳴く

うぐいす
→鶯

をりをえかほにーかはつなくなり
うくひすのーこゑよりはるやーさそふらむ

【天文十八年梅千句】／何人〔みしいろは〕
／天文18(1549)年正月11日

おのかつまとふーかはつなくなり
うくひすのーあめうちそそくーはなにねて

【大永四年月並千二百韻】／□□〔としな
みの〕／月並千二百韻／大永4(1524)年12
月23日

きみだれ
→五月雨

ときもわすれすーかはつなくなり
さみたれはーはれてもおなしーにはたつみ

【天文廿四年梅千句】／花之何〔かみかき
の〕／天文24(1555)年正月7日

かはつなくなりーをたのまちまち
さみたれはーさかひもみえすーみちとほみ

【宗牧追善千句】／x x〔くもるなよ〕／
永禄4(1561)年9月14日・15日

ふりたるいけにーかはつなくなり
さみたれはーなこりつきせぬーにはたつみ

【永享年間百韻4巻】／山何〔くちてけり〕
／永享12(1440)年10月16日

にわたづみ
→庭水

ときもわすれすーかはつなくなり
さみたれはーはれてもおなしーにはたつみ

【天文廿四年梅千句】／花之何〔かみかき
の〕／天文24(1555)年正月7日

ふりたるいけにーかはつなくなり
さみたれはーなこりつきせぬーにはたつみ

【永享年間百韻4巻】／山何〔くちてけり〕
／永享12(1440)年10月16日

かわる

いろかわる
色変わる

まつむしのこゑ
→松虫の聲

いろかはる一ころをたにしれ一おもひくさ
ちきりしままや一まつむしのこゑ

【成立不詳・宗祇以前15巻】／何人【は
つはなや】／成立時不詳

いろかはる一のへにこてふの一ゆめやうき
みしあととはたた一まつむしのこゑ

【永正年間百韻34巻】／何木【いろはふ
ちの】／永正8(1511)年4月6日

いろかわるころ
色変わる頃

はなさく
→花咲く

みとりなるのも一いろかはるころ
さはみつに一くさのむらむら一はなさきて

【三島千句】／何船【とりのねは】／文明
3(1471)年3月21日～23日

このもとまでも一いろかはるころ
ひとしれぬ一こくさあはれに一はなさきて

【明応年間百韻22巻】／何路【うつろは
て】／明応3(1494)年10月30日

ひとのこころがかわる
人の心が変わる

うみやま
→海山

ひとのこころの一かはりやすさよ
うみやまの一つきみてあかす一すまのうら

【文明十四年万句52巻】／山何【あきの
はな】／文明14(1482)年7月4日～9月
14日

ひとのこころの一かはるよのなか
うみやまの一なあるところも一たひなれや

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁2(1468)年5月下旬

ひとのこころのかわるよのなか
人の心の変る世の中

あきのくれ
→秋の暮れ

ひとのこころの一かはるよのなか
やまさとを一うかれいてめや一あきのくれ

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁2(1468)年5月下旬

ひとのこころの一かはるよのなか
いまをなほ一とへやよしのの一あきのくれ

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁2(1468)年5月下旬

あきがくる
→秋が来る

ひとのこころの一かはるよのなか
うつせみの一はやまおろしに一あきはきて

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁2(1468)年5月下旬

ひとのこころの一かはるよのなか
しるしらぬ一ひとつなみたに一あきはきて

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁2(1468)年5月下旬

あわれ
→哀れ

ひとのこころの一かはるよのなか
よもきふを一かれぬあるしは一あはれにて

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁2(1468)年5月下旬

ひとのこころの一かはるよのなか
なきあとは一にくなりしたに一あはれにて

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁2(1468)年5月下旬

いろみえる
→色見える

ひとのこころの一かはるよのなか
まちをしむ一はなにほとなき一いろみえて

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁2(1468)年5月下旬

ひとのこころの一かはるよのなか
たけはその一こをおもふとも一いろみえて

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁2(1468)年5月下旬

ういみのとき
→憂い身の時

ひとのこころの一かはるよのなか
うきみさへ一ときにやあふと一はるたちて

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

ひとのころのーかはるよのなか
うきみさへーいまはのときやーをしからむ

【萱草／伊地知本】／雑／文明 6(1474) 年
2 月以前

→^{おとろえる}衰える

ひとのころのーかはるよのなか
そのいへはー一のこれとみちのーおとろへて

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

ひとのころのーかはるよのなか
あかむれはーかみのしるしはーおとろへて

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

→^{そでぬれる}袖濡れる

ひとのころのーかはるよのなか
ききわひぬーしくれこのはにーそでぬれて

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

ひとのころのーかはるよのなか
おいかみはーわかたつむにもーそでぬれて

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

→^{たび}旅

ひとのころのーかはるよのなか
うきにあひーなさけをみるもーたひなれや

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

ひとのころのーかはるよのなか
うみやまのーなあるところもーたひなれや

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

→^{ちぎり}契り

ひとのころのーかはるよのなか
なへてうきーあきなとほしのーちきるらむ

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

ひとのころのーかはるよのなか
むかしたれーはなよりまつをーちきるらむ

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

→^{つきをみる}月を見る

ひとのころのーかはるよのなか
よつときーいつれまさるとーつきをみて

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

ひとのころのーかはるよのなか
すさましとーいひしはすのーつきをみて

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

→^{とりどり}とりどり

ひとのころのーかはるよのなか
さむきひはーみつにいるてふーとりとりに

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

ひとのころのーかはるよのなか
すてかたきーわかふたみちのーとりとりに

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

→^{ほかないほねをならべるとりべやま}儂い羽根を並べる鳥部山

ひとのころのーかはるよのなか
はかなしやーはねをならへしーとりへやま

【萱草／伊地知本】／恋／文明 6(1474) 年
2 月以前

ひとのころのーかはるよのなか
はかなしやーはをもならへしーとりへやま

【老葉／書陵部宗訊筆本】／旅／

→^{はなさく}花咲く

ひとのころのーかはるよのなか
のへをわけーやまちをたるとるーはなさきて

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

ひとのころのーかはるよのなか
みやまきをーかたはらになすーはなさきて

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

→^{はなもない}花もない

ひとのころのーかはるよのなか
うれへあるーみはなかめつるーはなもなし

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

ひとのころのーかはるよのなか
うたのみちーまことをうはーはなもなし

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

→^{はねをならべるとりべやま}羽根を並べる鳥部山

ひとのころのーかはるよのなか
とりへやまーはねをならへしーすゑたえて

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

ひとのころのーかはるよのなか
はかなしやーはねをならへしーとりへやま

【萱草／伊地知本】／恋／文明 6(1474) 年
2 月以前

→^{ひとつ}ひとつ

ひとのころのーかはるよのなか
つきはたたーみやもわらやもーひとつにて

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

ひとのころのーかはるよのなか
こをおもふーみちのみたれもーひとつにて

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

→^{ほととぎす}時鳥

ひとのころのーかはるよのなか
ほととぎすーはななきころをーなくさめて

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

ひとのころのーかはるよのなか
またしよもーなきかやまちのーほととぎす

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

ひとのころのーかはるよのなか
ほととぎすーかへるやまちはーともならて

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

→^{みをしらない}身を知らない

ひとのころのーかはるよのなか
うれしさもーうきもゆめなるーみをしらて

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

ひとのころのーかはるよのなか
ときをえはーなほおそるへきーみをしらて

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

→^{みをしる}身を知る

ひとのころのーかはるよのなか
みをしれはーわれとさためむーやともなし

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

ひとのころのーかはるよのなか
みをしれはーいはむうらみもーなきものを

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

→^{わがうえ}我が上

ひとのころのーかはるよのなか
わかうへにーおもはてたれをーそしるらむ

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

ひとのころのーかはるよのなか
わかうへにーほしのひとよのーあきもかな

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

かなづき

かなづき
神無月

ここのえのうち
→九重の内

かみなつき－はるふくかせの－けしきにて
さひしさしらぬ－ここのへのうち

【永正年間百韻34巻】／何人〔つきはな
を〕／永正2(1505)年9月13日

わすれては－あきかとおもふ－かみなつき
かせまたさえぬ－ここのへのうち

【成立不詳・宗長以前15巻】／何路〔は
なおそし〕／成立時不詳

かなび

かなびのもり
神奈備の森

あきのみむろやま
→秋の三室山

もみちりしく－かみなひのもり
あきふけて－つきもしくる－みむろやま

【名所句集／静嘉堂文庫本】／秋／（大永
前後）

みつつきゆく－かみなひのもり
あきのいろ－いたるやたつた－みむろやま

【成立不詳・心敬以前14巻】／朝何〔し
たみつに〕／成立時不詳

がた

かたばかり
湯ばかり

みやのうち
→宮の内

かたはかりなる－にはのおはしま
みやのうち－ひとけもあらず－ものさひし

【天正年間百韻57巻】／□□〔ききわく
や〕／天正18(1590)年10月8日

すめるもさとは－かたはかりなる
かりにたに－たちいてまうき－みやのうち

【元和年間百韻24巻】／□□〔うくひす
の〕／裏白／元和9(1623)年1月3日

き

きぎのいろいろ
木々の色々

あきくれる
→秋暮れる

しもおくころの－きぎのいろいろ
たちのほる－きりのやまもと－あきくれて

【明応年間百韻22巻】／何路〔こそたち
し〕／明応6(1497)年1月1日

まつはみさをの－きぎのいろいろ
ありあけの－つれなきかけも－あきくれて

【天正四年万句70巻】／何船〔なかさきよ
の〕／天正4(1576)年5月6日～7月19日

このしたつゆ
木の下露

ゆうべ
→夕べ

このしたつゆに－かをるひめゆり
なつのひは－やまのすそのを－ゆふへにて

【成立不詳・宗叟以前6巻】／唐何〔なて
しこの〕／成立時不詳

このしたつゆに－くさそふしたる
みやきのの－あきはしかなく－ゆふへにて

【菟玖波集／広島大学本】／秋下／文和
5(1356)年3月26日

このもとみち
木の下道

かたしく
→片敷く

ゆふへすすしき－このもとのみち
しつかなる－かせのさゆりは－かたしきて

【宗牧追善千句】／山何〔ちるちらぬ〕／
永禄4(1561)年9月14日・15日

あくるもしはし－このもとのみち
さよころも－はなのほひに－かたしきて

【合点之句／神宮文庫本】／春／天文
9(1541)年12月25日

なつこだち
夏木立

やまほととぎす
→山時鳥

しらかしの－ゆきまやみねの－なつこたち
くもよりいつる－やまほととぎす

【永禄石山千句】／初何〔しらかしの〕／
永禄7(1564)年5月12日

はなはきのふーもみちもあすかーなつこたち
またはつねきくーやまほとときす

【園塵第二／統群書類従本】／夏／明応
4(1495)年早春

はなのこのもと
花の木の下

うぐいす
→鶯

いそくこころのーはなのこのもと
うくひすのーはるおとろかすーねになきて

【羽柴千句】／千何【あくるよを】／天正
6(1578)年5月18・19日

いろにいろそふーはなのこのもと
うくひすのーはかせをみるもーのとかにて

【天正四年万句70巻】／夕何【はるさめに】／天正4(1576)年5月6日～7月19日

おとがする
→音がする

たかかへるらむーはなのこのもと
ふるさともーはるのみひとのーおとはして

【聖廟千句】／何田【のこるひに】／明応
3(1494)年2月10日～12日

やまちひくるるーはなのこのもと
さくらちるーみねのあらしのーおとはして

【宗長関係8種】／興津宛／書陵部本／

やまざくら
→山桜

たちもはなれぬーはなのこのもと
おもかけにーなほもむかひのーやまさくら

【行助関係4種】／行助連歌／天理本／

しるしらぬあふーはなのこのもと
やまさくらーさけはみやこをーあくかれて

【壁草／大阪天満宮文庫本】／春／永正
2(1505)年8月23日以後同3年3月以前

きえる

きえるけむり
消える煙

もしおくむ
→藻塩汲む

きえむけふりのーはてもはかなや
もしほくむーうらにとしふるーさすらへに

【伊勢千句】／何衣【そめてほす】／大永
2(1522)年8月4日～8日

きえむけふりのーゆくへをそまつ
もしほくむーそてさへつきをーたのむよに

【明応年間百韻22巻】／何人【かきりさへ】／明応8(1499)年3月20日

きえるならきえるおもい
消えるなら消えるべき思い

みをおまきかくとふほたる
→身を秋近く飛ぶ蛭

きえはきゆへきーおもひならはや
みるもうしーみをあきちかくーとふほたる

【竹林抄／新古典文学大系本】／夏／文明
8(1476)年5月頃

きえはきゆへきーおもひならはや
はかなくもーみをあきちかくーとふほたる

【論書4種】／宗長／

とおぎえ
遠消え

まつひとむら
→松の一群

いそやまもーしほひのあととはーとほきえに
くもこそかかれーまつひとむら

【飯盛千句】／初何【このまもる】／永祿
4(1561)年5月27日～29日

かけさむくーいさりひきえてーとほきえに
しもにけふれるーまつひとむら

【文龜年間百韻4巻】／何衣【たをるなど】
／文龜2(1502)年4月25日

ゆききえる
雪消える

うぐいすのこえ
→鶯の声

たきつせのーまさるはおくのーゆききえて
ふるすをいつるーうくひすのこゑ

【看聞日記紙背50巻】／山何【やよやひ】
／応永31(1424)年3月18日

ふりつつもーのやまをわかつーゆききえて
みきりにちかしーうくひすのこゑ

【天正年間百韻57巻】／何垣【ゆくそてに】
／天正11(1583)年閏1月1日

こおりながれる
→氷流れる

はるのひのーかすみののやまーゆききえて
こほりなかるるーさほのかはなみ

【永享年間百韻4巻】／何木 [ささのはの]
／永享 6(1434) 年 6 月 18 日

うくひすのーこゑのかよひちーゆききえて
こほりなかるるーたきのゆくすゑ

【寛正年間百韻20巻】／何水 [をるひと
を]／寛正 5(1464) 年 3 月 29 日

ききあへぬーゆめのたたちのーほととぎす
のこるほとなきーありあけのそら

【文安月千句】／何鳥 [なにてて]／文
安 2(1445) 年 8 月 15 日

さみたれにーまたいつきかむーほととぎす
ねぬよほとふるーありあけのそら

【文明年間百韻34巻】／x x [つきをか
せ]／文明 12(1480) 年 8 月

つゆのおときくにわ
露の音聞く庭

たまだれのきり
→玉垂の霧

つゆのおときくーにはのゆふかけ
たまたれのーきりのなこりやーはれさらむ

【伊勢千句】／何人 [ふかくいりて]／大
永 2(1522) 年 8 月 4 日～8 日

つゆのおときくーにはのしたをき
たまたれのーそとのきりのーかたよりて

【天正年間百韻57巻】／何船 [すましみ
は]／天正 13(1585) 年間 8 月 12 日

はつかぜときのうはきいてあきふける
初風と昨日は聞いて秋更ける

ひとはのこらなれもみど
→人は残らない紅葉

はつかせとーきのふはききしーあきふけて
ひとはのこらすーもろきもみちは

【三島千句】／何人 [しるしらす]／文明
3(1471) 年 3 月 21 日～23 日

はつかせとーきのふはききしーあきふけて
ひとはのこらすーもみちるかけ

【老葉／吉川本】／秋／文明 13(1481) 年
夏頃

ゆうつけとりをきく
木綿付け鳥を聞く

ふかいよる
→深い夜

ゆふつけとりをーうらみてそきく
いましはしーうちもねぬへくーふかきよに

【葉守千句】／何路 [しくるやと]／長享
元 (1487) 年 10 月 9 日<～11 日>

ゆふつけとりをーなこりにそきく
ゆめひとのーあとはかもなくーふかきよに

【住吉千句】／何木 [つきはふゆ]／大永
元 (1521) 年 11 月 1 日～14 日

きく

きくのひともと
菊の一本

やまびと
→山人

しものそなるーきくのひともと
やまひとのーすむあといかにーたつねまし

【天文廿年断簡千句】／□□ [つけのこせ]
／天文 20(1551) 年 6 月 10 日～12 日

ちくさしをれてーきくのひともと
やまひとのーすみかはことーものふるく

【長祿三年千句11巻】／何鳥 [ふかくふ
る]／長祿 3(1459) 年 12 月 2 日～5 日

はやちりそむるーきくのひともと
やまひとのーすさみいかなるーころならむ

【天正四年万句70巻】／朝何 [なみよす
る]／天正 4(1576) 年 5 月 6 日～7 月 19 日

きくのもめずらしい
聞くのも珍しい

ほととぎす
→時鳥

きくもめつらしーこのみやことり
ほととぎすーけさはおとはのーやまこえて

【竹林抄／新古典文学大系本】／夏／文明
8(1476) 年 5 月頃

まれのみゆきはーきくもめつらし
ゆふかけてーかみまつるよのーほととぎす

【萱草／伊地知本】／夏／文明 6(1474) 年
2 月以前

きくほととぎす
聞く時鳥

ありあけのそら
→有明の空

きし

きしのやまぶき
岸の山吹

かわずなく
→蛙鳴く

こてふとひかふーきしのやまぶき
かはつなくーはるのみつたにーとりおりて

【文安月千句】／朝何 [ひかりをも] ／文
安 2(1445) 年 8 月 15 日

かつうつろへるーきしのやまぶき
かはつなくーさとのかはつらーすきやらて

【永正十花千句】／何木 [ひかすたに] ／
永正 13(1516) 年 3 月 11 日～14 日

はるをのこせるーきしのやまぶき
かはつなくーこゑさへうもれーみつさひて

【成立不詳・宗長以前 1 5 巻】／何路 [あ
ひにあき] ／成立時不詳

きじ

きぎすなきたつ
雉鳴き立つ

こまとめる
→駒止める

きぎすなきたつーこゑのさひしさ
あらしふくーかすみのすゑにーこまとめて

【天文廿四年梅千句】／何木 [つみそへよ]
／天文 24(1555) 年正月 7 日

きぎすなきたつーありあけのつき
さくらかりーはなのしたはにーこまとめて

【大永四年月並千二百韻】／□□ [しもや
ひぬ] ／月並千二百韻／大永 4(1524) 年 9
月 23 日

きぬぎぬ

きぬぎぬ
後朝

ありあけのつき
→有明の月

きぬぎぬのーもすそはつゆにーうちぬれて
みればみにしむーありあけのつき

【文明十四年万句 5 2 巻】／二字反音 [は
なはみな] ／文明 14(1482) 年 7 月 4 日～
9 月 14 日

きぬぎぬのーなみたをたにもーかたみとや
なみたをのこすーありあけのつき

【菟玖波集／広島大学本】／恋中／文和
5(1356) 年冬～翌年の春

そでのうつりが
→袖の移り香

きぬぎぬのーつらきかきはのーしたのおひ
のこりもふかきーそでのうつりか

【元龜二年千句】／何木 [たきなみの] ／
元龜 2(1571) 年 3 月 5 日

きぬぎぬのーおもかけのこるーけさのつき
ともにやとまるーそでのうつりか

【看聞日記紙背 5 0 巻】／何人 [まつちか
し] ／応永 32(1425) 年 6 月 25 日

きぬぎぬのーおもかけかすむーあさほらけ
きゆるもをしやーそでのうつりか

【天文年間百韻 3 8 巻】／x x [しかそな
く] ／天文 24(1555) 年 9 月 19 日

きぬぎぬのあと
後朝の後

かたみ
→形見

ひとりうちぬるーきぬぎぬのあと
なみたのみーひかたきそてのーかたみにて

【紹巴亡父追善千句】／二字反音 [かけた
かき] ／天文 24(1555) 年 3 月 26 日～晦日

おもかけとまれーきぬぎぬのあと
たまくらをーおのかものなるーかたみにて

【集百句之連歌／天理本】／集百句之連歌
／不明

なみたにむかふーきぬぎぬのあと
なくさめぬーものからつきをーかたみにて

【老葉／吉川本】／恋下／文明 13(1481) 年
夏頃

きぬぎぬのそで
後朝の袖

しののめ
→東雲

なみたにむせふーきぬぎぬのそて
しののめのーそらきりわたりーつきおちて

【顕証院会千句】／山何 [あさもよひ] ／
宝徳元 (1449) 年 8 月 19 日～21 日

ぬれにそぬるーきぬぎぬのそて
しののめのーころしもあめのーふりいてて

【那智庵／北野天満宮本】／永正十四年／

きぬた

きぬたのおと
砧の音

たまほこのゆくえ
→玉銚の行方

きぬたのおとは一むらのをちこち
たまほこの一ゆくへもわかす一くれそめて

【嵯峨千句】／初何 [はなのこと] ／ (元
龜 4) 天正元 (1573) 年正月 9 日～11 日

きぬたのおとは一かせのまにまに
たまほこの一ゆくへやきりの一へたつらむ

【元龜年間百韻 6 卷】／何船 [むさしのも]
／元龜 3(1572) 年 3 月 18 日

きのう

きのうのくも
昨日の雲

あさほらけ
→朝ぼらけ

きのふのくもを一わくるむさしの
かりねせし一かややのゆきの一あさほらけ

【萱草／伊地知本】／冬／文明 6(1474) 年
2 月以前

きのふのくもを一またとなかむる
はるといへと一かすみたにせぬ一あさほらけ

【基佐集／静嘉堂文庫本】／春／永正
6(1509) 年以前

はつかぜときのはきいてあきふける
初風と昨日は聞いて秋更ける

ひとはのこらないもみぢ
→人は残らない紅葉

はつかせと一きのふはききし一あきふけて
ひとはのこらす一もろきもみちは

【三島千句】／何人 [しるしらす] ／文明
3(1471) 年 3 月 21 日～23 日

はつかせと一きのふはききし一あきふけて
ひとはのこらす一もみちちるかけ

【老葉／吉川本】／秋／文明 13(1481) 年
夏頃

きみ

きみのことのは
君の言の葉

いつわり
→偽り

しらぬなかれの一きみかことのは
いつはりの一なきはなみたに一あらはれて

【享徳二年千句】／何玉 [くらからぬ] ／
享徳 2(1453) 年 8 月 11 日～13 日

みになほたのめ一きみかことのは
いつはりの一すゑをはかなき一いのちにて

【竹林抄／新古典文学大系本】／恋上／文
明 8(1476) 年 5 月頃

きみがよ

きみがよ
君が代

あう
→逢う

ことのはの一みちさかえたる一きみかよに
あふかさらめや一をさまれるとき

【浅間千句】／何木 [したふとや] ／永正
11(1514) 年 5 月 13 日～19 日

ひらけこし一みそらのままの一きみかよに
すめるころを一あふかさらめや

【永正年間百韻 3 4 卷】／何人 [すすし
や] ／永正 7(1510) 年 7 月 5 日

きょう

きょうごと
今日毎

いりあひのかね
→入相の鐘

けふことの一ゆふへやはるを一さそふらむ
さとつつきなる一いりあひのかね

【紫野千句】／何人 [しけるき] ／延文
2(1357) 年以後-応安 3 年 6 月以前

けふことの一しくれやあきを一おくるらむ
みにしむころの一いりあひのかね

【永正十花千句】／何袋 [つきをゆき] ／
永正 13(1516) 年 3 月 11 日～14 日

きょうばかり
今日ばかり

かりごろも
→狩衣

けふはかりとやーほしまつるらむ
あまのかはーかたののあきのーかりころも

【宗廟関係9種】／宗廟句集／大阪天満宮本

／

けふはかりとやーはなもちりなむ
おもひたてーとほやまさくらーかりころも

【園座第三／統群書類従本】／春／文亀元

(1501)年3月18日

きよまわり

きよまわり
清まわり

ののみ宮のみも
→野々宮の道

ひかすをやーさためおきたるーきよまはり
いるかたふかきーののみやのみち

【五吟一日千句】／山何【むかしやは】／

天正9(1581)年11月19日

かりそめとーおもふほとふるーきよまはり
わけいりにたるーののみやのみち

【毛利千句】／白何【うすゆきの】／文禄

3(1594)年5月12日～16日

きり

きりにしも
霧に霜

つきは出でてでも暗い
→月

きりにしもーきしまよひぬるーふねのうへ
つきはいててもーくらきやまかけ

【天正年間百韻57巻】／□□【ゆふつゆ

も】／天正16(1588)年8月10日

きりにしもーゆふへのひかりーへたたりて
つきはいててもーまたくらきそら

【寛永年間百韻15巻】／□□【ゆきなな

ら】／裏白／寛永21(1644)年1月3日

きりのうえ
霧の上

ゆうまぐれ
→夕まぐれ

きりのうへなるーたかまとのみや
ゆふまぐれーろうはあつさやーしらさらむ

【大原野十花千句】／初何【こからしを】

／元亀2(1571)年2月5日～7日

きりのうへなるーやまのしつけさ
ひとこゑのーかねよりあきのーゆふまぐれ

【平松文庫本千句】／□□【かきおこせ】

／

きりのこる
霧残る

つきほのか
→月仄が

あきのしもーきりのまかきにーのこるらむ
やまをそともーつきほのかなり

【天文年間百韻38巻】／何人【さくふち

の】／天文18(1549)年3月24日

のわきせしーそとみにきりやーのこるらむ
たけのはこしーつきほのかなり

【慶長年間百韻27巻】／□□【あらしに

も】／裏白／慶長5(1600)年1月3日

きりのしたみち
霧の下道

おとがする
→音がする

ましるそてみぬーきりのしたみち
たれとしもーわかすつきまつーおとはして

【伊勢千句】／三字中略【うめさきて】／

大永2(1522)年8月4日～8日

あふひともなきーきりのしたみち
さととほきーみやまにたきのーおとはして

【心敬関係10種】／心敬僧都百句／岩瀬

文庫本／

きりのまがき
霧の籬

あけはなれる
→明け離れる

きりのまかきのーひまそひにけり
のきちかきーやまはみるみるーあけはなれ

【文禄年間百韻12巻】／□□【あつまや

の】／文禄2(1593)年5月6日

きりのまかきのーあらはなりけり
みつおつるーかたとたのつきのーあけはなれ

【元和年間百韻24巻】／□□【むかしに

や】／元和5(1619)年7月24日

きりはれのぼる
霧晴れ昇る

→朝日影

きりはれのほる—なかのかけはし
かすかなる—のわさせしよ—あさひかけ

【出陣千句】／朝何 [きりもやは] ／永正

元 (1504) 年 10 月 25 日～27 日

きりはれのほる—まつのこたかさ
あさひかけ—いろつくみねに—さしそひて

【文明年間百韻 3 4 卷】／□□ [したつゆ

は] ／文明 12(1480) 年 7 月 4 日

きりはれる
霧晴れる

→一筋白

かりのこす—すすきをこめし—きりはれて
ひとすちしろし—しもをふむみち

【弘治三年春雪千句】／初何 [けさみれは]

／弘治 3(1557) 年正月 7 日～9 日

ゆくゆくも—はまへつたひの—きりはれて
ひとすちしろし—つきのかはみつ

【天正年間百韻 5 7 卷】／何人 [ときはい

ま] ／天正 10(1582) 年 5 月 24 日

ほのかなきり
仄かな霧

→衣打つ音

ほのかにも—ふしみのかたは—きりこめて
たえたえさひし—ころもうつおと

【称名院追善千句】／何路 [いるかたの]

／永祿 6(1563) 年 12 月 14 日～18 日

ほのかにも—へたてしさとの—きりはれて
そともあらはに—ころもうつおと

【寛正年間百韻 2 0 卷】／何船 [はなおも

き] ／寛正 2(1461) 年 11 月 22 日

きりぎりす

きりぎりす
蟋蟀

→浅茅生の奥

きりぎりす—なれかなくねに—まけむやは
たへてをすめる—あさちふのおく

【弘治年間百韻 8 卷】／何人 [うめひとき]

／裏白／弘治 3(1557) 年 1 月 3 日

あはれたた—こゑたえたえの—きりぎりす
さひしさいか—あさちふのおく

【慶長年間百韻 2 7 卷】／□□ [よつのと

き] ／裏白／慶長 18(1613) 年 1 月 3 日

→月のさむしろ

かなしけに—はひいててなく—きりぎりす
いねかてになる—つきのさむしろ

【宮島千句】／何袋 [さきこすか] ／天文

20(1551) 年 5 月 9 日～11 日

のわきたつ—かせをかなしむ—きりぎりす
しきわひにたる—つきのさむしろ

【寛永年間百韻 1 5 卷】／□□ [まつにこ

まつ] ／裏白／寛永 19(1642) 年 1 月 3 日

さりとも—ゆめちもはかな—きりぎりす
ものわひしらに—つきのさむしろ

【月村抜句／書陵部本】／永正十三年／

→露の世の中

われならて—あきをうらむる—きりぎりす
おもひやひとつ—つゆのよのなか

【表佐千句】／何船 [はなやちる] ／文明

8(1476) 年 3 月 6 日<～8 日>

すみかたき—かへなたのみそ—きりぎりす
いつまでくさの—つゆのよのなか

【老葉／書陵部宗訊筆本】／秋／

→残る大和撫子

きりぎりす—しもにかかりし—ねもかれて
いつかこのころ—やまとなてしこ

【池田千句】／何田 [をとめこか] ／永正

7(1510) 年春以前<永正 5 年春>

きりぎりす—しけみかくれに—かたよりの
のわきにこのころ—やまとなてしこ

【壁草／書陵部本】／秋／永正 9 年

なくきりぎりす
鳴く蟋蟀

→明かし果てる

あきふけけりと—なくきりぎりす
なからふる—みをなけきつ—あかしはて

【元和年間百韻24巻】／□□ [ちちのは
るを]／裏白／元和4(1618)年1月3日

ゆかにちかより一なくきりきりす
ものおもふ一まくらなからに一あかしはて

【元和年間百韻24巻】／□□ [としとし
に]／元和6(1620)年12月5日

→^{くれつがた}暮れつ方

なくきりきりす一こゑやそふらむ
なかつきの一なかきおもひの一くれつかた

【初瀬千句】／何木 [ほととぎす]／享徳
元・2(1452)年、4月

こゑよわりつつ一なくきりきりす
ふゆされは一いとともうき一くれつかた

【永祿年間百韻28巻】／□□ [ゆきにう
め]／永祿5(1562)年2月1日

→^{みにかきらない}身に限らない

けなげやなげ一ふてのなこりの一きりきりす
おもひすてしは一みにもかきらし

【浅間千句】／唐何 [はなといはは]／永
正11(1514)年5月13日～19日

つひにねぬ一よすかなくなり一きりきりす
あきのつらさは一みにもかきらし

【文明十二年千句8巻】／何人 [ひとはさ
へ]／文明12(1480)年4月10日～*日

→^{みみにみちる}耳に満ちる

なげやなげ一よしうれふとも一きりきりす
みみにみちたる一せみのもろこゑ

【飯盛千句】／何衣 [つきいてて]／永祿
4(1561)年5月27日～29日

ねになくは一おもひあれはや一きりきりす
みみにみちたる一かせそみにしむ

【至徳以前百韻7巻】／何路 [ゆきませの]
／至徳4(1387)年以前

きる

^{うちきせたい}
打ち着せたい

→^{おちかたびと}遠方人

おもふにし一うちきせはやの一からころも
をちかたひとの一そてやつゆけき

【天正年間百韻57巻】／何垣 [ゆくそて
に]／天正11(1583)年閏1月1日

うちきせはやの一きぬたあやなき
あきさへも一をちかたひとの一つてたえて

【慶長年間百韻27巻】／□□ [はるにま
つ]／裏白／慶長6(1601)年1月3日

きわめる

^{たのしみをきわめる}
楽しみを極める

→^{かりのこのよ}仮のこの世

たのしみを一きはめよとのみ一とくのりに
かりのこのよは一すみもわひめや

【飯盛千句】／何路 [しけるきに]／永祿
4(1561)年5月27日～29日

たのしみを一きはむるくには一たのもしや
かりのこのよは一とにもかくにも

【文明十四年万句52巻】／二字反音 [は
なはみな]／文明14(1482)年7月4日～
9月14日

くき

^{もずのくさぐき}
鴟の草茎

→^{はしもみじ}端紅葉

しもにあとなき一もすのくさぐき
ちりにけり一きりにかせふく一はしもみち

【壁草／続群書類従本】／秋／永正3(1506)
年3月頃

ちきりはかなや一もすのくさぐき
はしもみち一かたえにのこる一かせたちて

【宗長関係8種】／老耳／天理本／

くさ

あきくさ

秋草

なくきりぎりす
→鳴く蟋蟀よもきふにーあらぬはなあるーあきのくさ
なくきりぎりすーねをなつくしそ【文安月千句】／何田〔ほしのなも〕／文
安 2(1445)年 8月 15日こころとやーつゆをもうくるーあきのくさ
なくきりぎりすーものなおもひそ【三島千句】／何衣〔はなにつき〕／文明
3(1471)年 3月 21日～23日

かくもしおぐさ

搔く藻塩草

うみのなぎさにまつのはなおちる
→海の汀に松の花落ちるかくてふなるはーたたもしほくさ
みつうみのーみきはにまつのーははおちて

【論書 4種】／宗長／

かきあつむるはーたたもしほくさ
にほのうみのーみきはにまつのーははおちて

【論書 4種】／宗牧／

かれたくさがもえでる

枯れた草が萌え出る

こまいわうこえ
→駒祝う声ふゆかれしーみちのしはくさーもえいてて
のへのかすみにーこまいはふこゑ【聖廟千句】／何田〔のこるひに〕／明応
3(1494)年 2月 10日～12日こそかれしーくさはつゆけくーもえいてて
のはあさまたきーこまいはふこゑ【明応年間百韻 2 2 巻】／何水〔あけほの
を〕／明応 8(1499)年 2月 19日

くさのおお

草の庵

やまほととぎす
→山時鳥さみたれのーつゆにうもるるーくさのいほ
いててやきかむーやまほととぎす【熊野千句】／山何〔おとなしの〕／文正
元(1466)年 3月以前ふくかせのーたえまもあれなーくさのいほ
くもにまきるるーやまほととぎす【表佐千句】／何路〔みなかみの〕／文明
8(1476)年 3月 6日<～8日>よはさのみーなけかしものそーくさのいほ
はなのあととふーやまほととぎす【合点之句／神宮文庫本】／雑／天文
9(1541)年 12月 25日

くさのつゆ

草の露

むしのなくこゑ
→虫の鳴く声つきかけにーはなのやとかすーくさのつゆ
かせいとふらしーむしのなくこゑ【成立不詳・心敬以前 1 4 巻】／何船〔は
るはまた〕／成立時不詳ゆふつきのーかけははことのーくさのつゆ
おもひのあるかーむしのなくこゑ【文明十五年千句 1 1 巻】／何風〔たきな
みや〕／文明 15(1483)年 *月 *日～3月 2
日

くさのとのうち

草の戸の内

まちわびる
→待ち侘びるひとりねつらしーくさのとのうち
うちすさふーころもかたしきーまちわひて【新撰菟玖波集／実隆本】／恋下／明応
4(1495)年 9月 26日すみうかるるやーくさのとのうち
すてしみもーいまはのゆふへーまちわひて【壁草／大阪天満宮文庫本】／雑下／永正
2(1505)年 8月 23日以後同 3年 3月以前

くさはのこらないゆきのしたおれ

草は残らない雪の下折

のわきするにわにつき
→野分する庭に月くさはのこらぬーゆきのしたをれ
のわきせしーにはのつきかけーよるさえて【新撰菟玖波集／実隆本】／秋下／明応
4(1495)年 9月 26日くさはのこらぬーゆきのしたをれ
のわきせしーにはをしつかにーつきふけて

くさはら
草原だれをとおうか
→誰を訪おうか

ゆくゆくも一かすみをしののくさのはら
たれにとはまし一はるのわかれち

【紫野千句】／何木 [はにしける]／延文
2(1357) 年以後-応安 3 年 6 月以前

みちそなき一はなのゆきまのくさのはら
たれにとはまし一やまとことのは

【文安年間百韻 9 卷】／朝何 [さかきはに]
／文安 4(1447) 年 10 月 18 日

くさばのつゆ
草葉の露あだしの
→化野

くさはのつゆも一おなじなみたか
あたしのや一おくれさきたち一いろつきて

【飯盛千句】／千何 [こぬあきや]／永祿
4(1561) 年 5 月 27 日～29 日

くさはのつゆも一かせにみたれぬ
あたしのや一たれもさこそと一そてぬれて

【新撰菟玖波集／実隆本】／哀傷／明応
4(1495) 年 9 月 26 日

くさまくら
草枕しるべおきいづるみち
→標置き出る道

くさまくら一ゆめのつてさへ一あくるよに
かねこそしるへ一おきいづるみち

【天文年間百韻 3 8 卷】／何木 [しくる
か]／天文 19(1550) 年 8 月 25 日

にはとりの一こゑはきこえぬ一くさまくら
つきをしるへに一おきいづるみち

【天正四年万句 7 0 卷】／山何 [みかつき
の]／天正 4(1576) 年 5 月 6 日～7 月 19 日

きけはあらし
→聞けば風

くさまくら一あくへきころも一よをこめて
きけはあらしの一さはるまきのと

【寛正年間百韻 2 0 卷】／何船 [とりねむ
る]／寛正 6(1465) 年 12 月 14 日

くさまくら一かれのにそてを一しきわひて
きけはあらしの一しもをふくそら

【文明年間百韻 3 4 卷】／□□ [はなにく
も]／文明 14(1482) 年 2 月 27 日

ながきよのゆめ
→長き夜の夢

さらしなや一つゆけきさとのくさまくら
われをはすてつ一なかきよのゆめ

【河越千句】／何路 [ひそさむき]／文明
2(1470) 年正月 10～12 日

わかやとは一はるかにあきのくさまくら
かよふやいかか一なかきよのゆめ

【宮島千句】／玉何 [はるといへは]／天
文 20(1551) 年 5 月 9 日～11 日

ふるさとのゆめ
→古里の夢

たゆますも一あらしふくよのくさまくら
いつむすはまし一ふるさとのゆめ

【永正年間百韻 3 4 卷】／玉何 [ちりてわ
か]／永正 2(1505) 年 8 月 22 日

くさまくら一むすひかねての一あさかすみ
なこりはわかぬ一ふるさとのゆめ

【永正年間百韻 3 4 卷】／x x [なつころ
も]／永正 7(1510) 年 4 月 1 日

ゆめのおもかけ
→夢の面影

あふひとも一あらのはらのくさまくら
つきをなこりのゆめのおもかけ

【毛利千句】／初何 [よとどもに]／文祿
3(1594) 年 5 月 12 日～16 日

さきたつや一あかつきちかき一くさまくら
したふもあはれ一ゆめのおもかけ

【天正年間百韻 5 7 卷】／何船 [もしほく
さ]／天正 7(1579) 年 1 月 13 日

しのぶぐさ
忍草ふるきのきば
→古き軒端

はるあきに一かれてはもゆる一しのふくさ
ふるきのきはのゆきのむらきえ

【那智箴／北野天満宮本】／永正十四年／

ものおもふ—こころひとつの—しのふくさ
ふるきのきはの—あきのさひしさ

【宗長関係8種】／老耳／天理本／

つゆしくれのくさ
露時雨の草

わたるかりがね
→渡る雁

つゆしくれ—よものくさきの—いろつきて
たのみにちかく—わたるかりがね

【看聞日記紙背50巻】／片何〔しくれて
も〕／応永26(1419)年9月25日

つゆしくれ—ききのしたくさ—そめわけて
たたひととほり—わたるかりがね

【看聞日記紙背50巻】／山何〔とよとし
を〕／応永32(1426)年12月6日

もずのくさぐさ
鴟の草茎

はしもみぢ
→端紅葉

しもにあとなき—もすのくさぐさ
ちりにけり—きりにかせふく—はしもみぢ

【壁草／統群書類従本】／秋／永正3(1506)
年3月頃

ちきりはかなや—もすのくさぐさ
はしもみぢ—かたえにのこる—かせたちて

【宗長関係8種】／老耳／天理本／

もりのしたくさ
森の下草

はなれごま
→放れ駒

うらかれわたる—もりのしたくさ
つなかる—しつかたなれの—はなれごま

【葉守千句】／何路〔しくるやと〕／長享
元(1487)年10月9日<~11日>

かけふかくなる—もりのしたくさ
たつぬへき—あともなつの—はなれごま

【竹林抄／新古典文学大系本】／夏／文明
8(1476)年5月頃

わかくさまくら
若草枕

あきふける
→秋更ける

わかくさまくら—うつらふすこゑ
とこさむき—たひにしあれば—あきふけて

【紫野千句】／何船〔はれてたに〕／延文
2(1357)年以後-応安3年6月以前

わかくさまくら—つきややつさむ
いたつらに—あかすよおほく—あきふけて

【長享年間百韻6巻】／何人〔ゆきなから〕
／長享2(1488)年1月22日

わすれとくさきはら
忘れ訪う草原

かろさど
→苦蝸

わするなよ—とはむとちきる—くさのはら
たよりはかりに—かかふるさと

【太神宮法楽千句】／山何〔のははなに〕
／長享2(1488)年7月

わすれすも—とほきあととふ—くさのはら
なれこしたれそ—かかふるさと

【永正十花千句】／二字反音〔こまなへて〕
／永正13(1516)年3月11日~14日

わすれるなよ
忘れるなよ

わかれである
→別れである

はなはまた—なれしをわれも—わするなよ
はるころなき—わかれならずや

【紫野千句】／何目〔いつもみむ〕／延文
2(1357)年以後-応安3年6月以前

なくさむる—ひとにうきよを—わするなよ
そふともつひの—わかれならずや

【永正十花千句】／何路〔ゆくつきも〕／
永正13(1516)年3月11日~14日

ほどはくもい
→程は雲居

わするなよ—たひねにかすむ—よはのつき
ほどはくもゐの—はつほとときす

【難波田千句】／□□〔あけほのを〕／文
明14(1482)年10月前後

とほくなる—やとのわかれも—わするなよ
ほどはくもゐの—ふるさとのやま

【菟玖波集／広島大学本】／羈旅／文和
5(1356)年冬~翌年の春

くに

くににしたがう
国に従う

やまとことのは
→大和言の葉

きみかよに—えひすのくにも—したかひて
こころやはらく—やまとことのは

【成立不詳・心敬以前14巻】／何草〔よ
におほふ〕／成立時不詳

くにもたた—みちしあるより—したかひて
よろつよまでの—やまとことのは

【天正年間百韻57巻】／x x〔はなさか
り〕／天正6(1578)年3月10日

くむ

よるくむさかずき
夜汲む杯

つきのもと
→月の下

よさむわすれて—くめるさかつき
もろともに—なかめあかせる—つきのもと

【毛利千句】／初何〔よとともに〕／文禄
3(1594)年5月12日～16日

よるはすからに—くめるさかつき
あくるをも—しらてともなふ—つきのもと

【平松文庫本千句】／□□〔ふくるよの〕
／

くめ

くめのいわはし
久米の岩橋

ただひとこと
→ただ一言

てらにたれ—くめのいははし—つつくらむ
たたひとことも—すくにをしへよ

【享徳二年千句】／唐何〔こころひく〕／
享徳2(1453)年8月11日～13日

わたしもはてぬ—くめのいははし
つきみては—たたひとことも—おもはぬに

【看聞日記紙背50巻】／唐何〔いやとし
に〕／応永31(1424)年1月25日

くも

あけほのくも
曙の雲

きぬぎぬのおもかけをしたう
→後朝の面影をしたう

なつものこらぬ—あけほのくも
きぬぎぬの—おもかけをなほ—したひわひ

【天正年間百韻57巻】／□□〔ちりうせ
ぬ〕／天正17(1589)年4月2日

ひきすてにたる—あけほのくも
きぬぎぬの—おもかけしたふ—さよまくら

【文禄年間百韻12巻】／□□〔うめかえ
や〕／文禄4(1595)年7月21日

おちかたのくも
遠方の雲

とりなく
→鳥鳴く

つきはほのめく—をちかたのくも
しくれせし—みねよりいつる—とりなきて

【飯盛千句】／x x〔かけすすし〕／永禄
4(1561)年5月27日～29日

ゆきをもよほす—をちかたのくも
そことなく—すゑののあした—とりなきて

【明応年間百韻22巻】／何人〔あさかす
み〕／明応4(1495)年1月6日

ひとむら
→一群

かはなみしろき—をちかたのくも
ひとむらの—たけのはわけの—よはあけて

【称名院追善千句】／何木〔としことの〕
／永禄6(1563)年12月14日～18日

くるるいろなる—をちかたのくも
ひとむらの—つはさならへて—とふからす

【永禄年間百韻28巻】／何路〔あらたま
の〕／裏白／永禄10(1567)年1月3日

きのうのくも
昨日の雲

あさほらけ
→朝ぼらけ

きのふのくもを—わくるむさしの
かりねせし—かやのゆきの—あさほらけ

【萱草／伊地知本】／冬／文明6(1474)年
2月以前

きのふのくもを一またとなかむる
はるといへと一かすみたにせぬ一あさほらけ

【基佐集／静嘉堂文庫本】／春／永正
6(1509)年以前

くもかかるみね
雲かかる峰

はなさかり
→花盛り

みるかうちより一くもかかるみね
はなさかり一かすみはるれは一あらはれて

【文禄年間百韻12巻】／□□〔わかなく
みし〕／文禄2(1593)年1月8日

きゆるとみしも一くもかかるみね
かつらきや一さきつつきての一はなさかり

【文禄年間百韻12巻】／□□〔うめかえ
や〕／文禄4(1595)年7月21日

くものおちかた
雲の遠方

しぐれる
→時雨れる

ゆふひみえすく一くものをちかた
いくたひか一つきまつあきの一しくらむ

【応仁年間百韻6巻】／何人〔ときはきを〕
／応仁元(1467)年10月17日

つきもかたふく一くものをちかた
わかれゆく一そてにやつゆの一しくらむ

【新撰菟玖波集／実隆本】／恋上／明応
4(1495)年9月26日

くものかけはし
雲の掛橋

かささぎ
→鶺鴒

あきかせわたる一くものかけはし
かささきの一つはさもかはす一あまのかは

【看聞日記紙背50巻】／何人〔はなのひ
も〕／応永27(1420)年間1月13日

みるもすさまし一くものかけはし
かささきの一やまとひこゆる一ゆふしにも

【宗碩関係2種】／宗碩百句／太田本／

くものたえま
雲の絶え間

みねのあらし
→峰の嵐

くものたえまに一ほのくるるやま
ふきおくる一みねのあらしの一はつしくれ

【天文年間百韻38巻】／何木〔やまかけ
て〕／天文21(1552)年3月11日

くれそむる一くものたえまに一つきみえて
みねのあらしの一むかふしはのと

【竹林抄／新古典文学大系本】／雑上／文
明8(1476)年5月頃

くものひとむら
雲の一群

すてるほととぎす
→捨てる時鳥

ゆくかたいつち一くものひとむら
ほととぎす一のこれるはなを一とひすてて

【天文年間百韻38巻】／何路〔あきよた
た〕／天文12(1543)年8月19日

うかふあしたの一くものひとむら
なきすつる一あとしたはるる一ほととぎす

【天正年間百韻57巻】／□□〔ことのは
も〕／天正13(1585)年1月4日

たなびくよこくものそら
棚引く横雲の空

つきのころ
→月残る

やまにたなひく一よこくものそら
つきのよや一あくとみえて一のころらむ

【紫野千句】／何木〔はにしける〕／延文
2(1357)年以後-応安3年6月以前

みねにたなひく一よこくものそら
つきやまた一かすみかくれに一のころらむ

【文明十二年千句8巻】／何田〔あめのよ
は〕／文明12(1480)年4月10日～*日

つきのむらくも
月の群雲

よるにかりなく
→夜に雁鳴く

はるくれかたの一つきのむらくも
かへるよの一あまとひかくれ一かりなきて

【月村抜句／書陵部本】／永正十四年／

あきふけわたる一つきのむらくも
かりなきて一よはいねかての一たまくらに

【合点之句／神宮文庫本】／雑／天文
9(1541)年12月25日

なかぞらのくも
中空の雲

みえかくれする
→見え隠れする

はつあきなれや—なかそらのくも
ふしはその—きりよりうへに—みえかくれ
【文明十四年万句52巻】／山何〔なほさ
こそ〕／文明14(1482)年7月4日～9月
14日

こころさわかす—なかそらのくも
ふるさ—to—ちかつくやまの—みえかくれ
【竹林抄／新古典文学大系本】／旅／文明
8(1476)年5月頃

みねのくも
峰の雲

やまほととぎす
→山時鳥

あらましに—こよひもあけぬ—みねのくも
かならずいつの—やまほととぎす
【永正十花千句】／何船〔ねぬるよを〕／
永正13(1516)年3月11日～14日

なかめつつ—かたみもつらき—みねのくも
いつらはこえし—やまほととぎす
【成立不詳・宗養以前8巻】／何木〔とこ
なつに〕／成立時不詳

ゆうぐれのくも
夕暮れの雲

しづれる
→時雨れる

をのへにのこる—ゆふくれのくも
やまさとや—はるるともなく—しくるらむ
【延徳年間百韻16巻】／何人〔はなやあ
らぬ〕／延徳2(1490)年2月25日

へたつるかたの—ゆふくれのくも
やまとのり—をのへのまつや—しくるらむ
【大永三年月並千三百韻】／□□〔はなに
つき〕／月並千三百韻／大永3(1523)年3
月23日

ほととぎす
→時鳥

なかめこそやれ—ゆふくれのくも
きのふかも—なきつとききし—ほととぎす
【天文十八年梅千句】／何壻〔しつさへ〕
／天文18(1549)年正月11日

わかやまのはの—ゆふくれのくも
こころとや—なくねをしまぬ—ほととぎす

【大永四年月並千二百韻】／□□〔へたつ
なよ〕／月並千二百韻／大永4(1524)年3
月23日

みねこえろ
→峰越える

それもともなる—ゆふくれのそら
くもにけふ—はなちりはつる—みねこえて
【長享年間百韻6巻】／何人〔ゆきなから〕
／長享2(1488)年1月22日

すすしきやまの—ゆふくれのそら
かせさそふ—ひとむらさめの—みねこえて
【成立不詳・宗祇以前15巻】／何船〔き
たにみる〕／成立時不詳

よこくもかすむ
横雲霞む

ゆめのうきはし
→夢の浮橋

よこくもの—わかるるかたや—かすむらむ
よるちるはなの—ゆめのうきはし
【熊野千句】／何路〔かさなるや〕／文正
元(1466)年3月以前

よこくもの—のこれるよもも—かすむひに
さめてそなほも—ゆめのうきはし
【文明十二年千句8巻】／白何〔まつりす
る〕／文明12(1480)年4月10日～*日

よこくものそら
横雲の空

はるのよ
→春の夜

かすみのまよふ—よこくものそら
はるのよの—ゆめのわかれは—たとたとし
【文明十四年万句52巻】／手何〔はふつ
たに〕／文明14(1482)年7月4日～9月
14日

ひきわかれゆく—よこくものそら
はるのよの—つきにひとすち—かりとひて
【論書4種】／宗長／

くもどり

くもどりのあと
雲鳥の跡

あやおるみず
→綾織る水

ゆくかたきゆるーくもどりのあと
かけあをくーあやおるみつのーかすむひに

【天正四年万句70巻】／何物[きくやい
かに]／天正4(1576)年5月6日～7月
19日

かへるはいつこーくもどりのあと
かすみつつーあやおるみつのーしろきのに

【老葉／吉川本】／春／文明13(1481)年
夏頃

くる

あきがくる
秋が来る

つきいでる
→月出る

かせはをきふくーあきはきにけり
くれぬまはーまたかけかくすーつきいてて

【永正十花千句】／何田[はなにこひ]／
永正13(1516)年3月11日～14日

くものゆきかひーあきはきにけり
あさかほにーそらさへみゆるーつきいてて

【享祿年間百韻8巻】／懷旧[ゆふたちの]
／享祿5(1532)年6月8日

はぎさく
→萩咲く

をきのかせふくーあきはきにけり
つきかけもーいろなるつゆにーはきさきて

【諸家月次連歌抄】／諸家月次連歌抄／成
立()年未詳

なほふるさとのーあきはきにけり
うゑおきしーあさちましりにーはきさきて

【基佐集／静嘉堂文庫本】／秋／永正
6(1509)年以前

いなおせどり
→稲負鳥

やなきかけーそれともなしにーあきはきて
かせうちなひきーいなおほせとり

【宗長追善千句】／片何[やまさくら]／
(享祿5)天文元(1532)年3月25日

しはのとのーころもしらすーあきはきて
こひちをみするーいなおほせとり

【基佐集／静嘉堂文庫本】／雑／永正
6(1509)年以前

あきくる
秋来る

ひぐらしがなく
→蝸が鳴く

あききぬとーかせもおとはのーみねこえて
たきよりうへにーひぐらしそなく

【大永年間百韻14巻】／何船[うめかか
や]／大永3(1523)年1月9日

あききぬとーおもひそむるやーいろならむ
あめうちそそきーひぐらしそなく

【新撰菟玖波集／実隆本】／秋上／明応
4(1495)年9月26日

あきくるうぐいす
朝来る鶯

たますだれ
→玉簾

あさけしつかにーきぬるうくひす
たますたれーまけはそものーうちかすみ

【天文年間百韻38巻】／何路[ほととき
す]／天文24(1555)年4月10日

あさとあくれはーきぬるうくひす
たますたれーひま口のとかにーひのさして

【永祿年間百韻28巻】／□□[ゆきにう
め]／永祿5(1562)年2月1日

あだとかかりくる
徒と掛かり来る

たまのおのすえ
→玉の緒の末

あたなりとーおもひなからもーかかりきて
いのらはちよもーたまのをのすゑ

【天文年間百韻38巻】／山河[つきやけ
さ]／天文21(1552)年7月26日

ちかひたたーあたしよなからーかかりきて
ひとひひとひのーたまのをのすゑ

【弘治年間百韻8巻】／何人[ときはなる]
／弘治3(1557)年8月28日

こないでおとする
来ないで音する

うぐいす
→ 鶯

こすにおとする一つゆのあをやき
うくひすの一はねうちはふき一あめすきて

【永正十花千句】／何船〔ねぬるよを〕／
永正 13(1516)年 3月 11日～14日

こすにおとする一かせのとかなり
うくひすの一つはさにもろき一はなちりて

【天文年間百韻 3 8 巻】／山何〔つきやけ
さ〕／天文 21(1552)年 7月 26日

とおくきた
遠く来た

おきのふね
→ 沖の舟

かへりみすれは一とほくきにけり
ほともへす一こきもてつる一おきつふね

【大永年間百韻 1 4 巻】／何人〔ゆきのう
ちに〕／大永 5(1525)年 1月 25日

ひなかきころは一とほくきにけり
くるるまで一つなてうちはへ一おきつふね

【壁草／統群書類従本】／旅／永正 3(1506)
年 3月頃

はるがくる
春が来る

うぐいすがなく
→ 鶯が鳴く

やまさとの一みちのなきたに一はるのきて
けさをはつねのうくひすそなく

【紫野千句】／唐何〔かせやこれ〕／延文
2(1357)年以後-応安 3年 6月以前

のちのちに一はなのさくへき一はるのきて
やとのあしたにうくひすそなく

【文明十四年万句 5 2 巻】／何寺〔きりう
すみ〕／文明 14(1482)年 7月 4日～9月
14日

ふるとしの一ゆきのこなたに一はるはきて
おくるあしたにうくひすそなく

【享徳二年千句】／何船〔よもにちる〕／
享徳 2(1453)年 8月 11日～13日

たれかはと一おもふさとにも一はるはきて
わかみのともとうくひすそなく

【延徳年間百韻 1 6 巻】／山何〔ふきもこ
ぬ〕／延徳 2(1490)年 9月 20日

うちかすむ
→ うち霞む

このあけほのの一はるはきにけり
まきのとを一いてぬるにはのうちかすみ

【成立不詳・心敬以前 1 4 巻】／何袋〔ま
たしかし〕／成立時不詳

かけひのすゑに一はるはきにけり
くれたけの一ひとよあくればうちかすみ

【園塵第一／統群書類従本】／春／長享 2
年

うめさく
→ 梅咲く

このさとまでも一はるはきにけり
ひとしれぬ一しはのまかきも一うめさきて

【園塵第一／統群書類従本】／春／長享 2
年

こころうれしき一はるはきにけり
あひにあふ一にひまくらかに一うめさきて

【論書 4 種】／宗長／

くるしい

やまがくるしい
山が苦しい

おいのさか
→ 老の坂

ちかきかよひも一やまそくるしき
こしをおし一てをひくほとの一おいのさか

【河越千句】／何路〔ひそさむき〕／文明
2(1470)年正月 10～12日

こえてまたある一やまそくるしき
かさなれる一としかむかふ一おいのさか

【文明十四年万句 5 2 巻】／山何〔ことた
るは〕／文明 14(1482)年 7月 4日～9月
14日

くるま

おくるまのおと
小車の音

ゆうがお
→ 夕顔

めくらすみちの一をくるまのおと
ゆふかほの一はなのかきほに一さくとみて

【享徳二年千句】／何人〔つきとたか〕／
享徳 2(1453) 年 8 月 11 日～13 日

わかれをつくる一をくるまのおと
ゆふかほの一やとかりそめの一ちきりにて

【看聞日記紙背 50 巻】／何路〔まつしけ
り〕／応永 31(1424) 年 3 月 18 日

くれ

あきのくれがた
秋の暮れ方

はつしぐれ
→初時雨

やまかけすこき一あきのくれかた
ふるよりも一あとはいえける一はつしぐれ

【延徳年間百韻 16 巻】／山何〔ふきもこ
ぬ〕／延徳 2(1490) 年 9 月 20 日

をしまぬもやは一あきのくれかた
つゆはかり一さととひわふる一はつしぐれ

【天文年間百韻 38 巻】／何人〔つきによ
る〕／天文 5(1536) 年 6 月 15 日

あめかすむくれ
雨霞む暮れ

はるかぜ
→春風

まさるみきはや一あめかすむくれ
はるかぜの一ふねのはつきも一くちけらし

【天正年間百韻 57 巻】／何船〔あをやき
は〕／天正 13(1585) 年 1 月 28 日

をのへのくもに一あめかすむくれ
はるかぜの一よわるにとほき一かねのこゑ

【永正年間百韻 1 巻】／何人〔こゑとほく〕
／永正元(1505) 年 12 月 10 日

ほととぎす
→時鳥

ふるのをとほみ一あめかすむくれ
さたかにも一いつかはなかむ一ほととぎす

【永原千句】／何木〔おとそなき〕／明応
9(1500) 年 7 月 17 日

ふちかをりつつ一あめかすむくれ
はつこゑや一やよひなからの一ほととぎす

【平松文庫本千句】／〇〇〔おちはして〕
／

あめのくれ
雨の暮れ

やまほととぎす
→山時鳥

あめのくれ一あしたのくもに一うかれきて
はつねをきくや一やまほととぎす

【天正四年万句 70 巻】／白何〔はつはる
や〕／天正 4(1576) 年 5 月 6 日～7 月 19 日

われそすむ一みねのいほりの一あめのくれ
やまほととぎす一おとつれてゆけ

【新撰菟玖波集／実隆本】／夏／明応
4(1495) 年 9 月 26 日

かげくれる
影暮れる

さみたれのころ
→五月雨の頃

はなれその一まつはひときの一かけくれて
なかれもふかし一さみたれのころ

【弘治三年春雪千句】／何舟〔きてたに〕
／弘治 3(1557) 年正月 7 日～9 日

ゆくみつは一やまもととろに一かけくれて
こりしくもの一さみたれのころ

【享禄年間百韻 8 巻】／何人〔あさかすみ〕
／享禄 5(1532) 年 1 月 3 日

かすむゆうぐれ
霞む夕暮れ

つきので
→月の出

あけほのみか一かすむゆふくれ
いりあひの一かねにをのへの一つきいてて

【池田千句】／何船〔おそくとく〕／永正
7(1510) 年春以前<永正 5 年春>

つまきのみちの一かすむゆふくれ
しつかすむ一まかきのそとも一つきいてて

【大永四年月並千二百韻】／〇〇〔しもや
ひぬ〕／月並千二百韻／大永 4(1524) 年 9
月 23 日

くれごとのそら
暮れごとの空

ほととぎす
→時鳥

ふるきをしのふ一くれごとのそら
ほととぎす一あれたるさとを一かれやらて

【永正十花千句】／山何〔けふそみな〕／
永正 13(1516) 年 3 月 11 日～14 日

いつかとまちは—くれことのそら
ほととぎす—あやめひくひも—はやすきて

【壁草／大阪天満宮文庫本】／夏／永正
2(1505)年8月23日以後同3年3月以前

くれゆくかた
暮れゆく方

→帰る

くれゆくかたの—はるのしらくも
とりのねや—ほのかになりて—かへるらむ

【永禄年間百韻28巻】／山何〔ゆふかほ
に〕／永禄2(1559)年5月20日

くれゆくかたの—やまきはのみち
つきにしも—ましはとりてや—かへるらむ

【文禄年間百韻12巻】／□□〔にはくさ
の〕／文禄2(1593)年1月10日

くれる
暮れる

→帰る舟人

くれぬれは—あらいそなみに—ふねとめて
うらかせさむみ—かへるふなひと

【太神宮法楽千句】／何船〔とこよにや〕
／長享2(1488)年7月

くれぬれは—かせやはるとも—わかさらむ
さをさしすて—かへるふなひと

【羽柴千句】／何人〔すくにゆく〕／天正
6(1578)年5月18・19日

はるのくれ
春の暮れ

→霞む入相の鐘

あらしたつ—はつせのやまの—はるのくれ
かすみとほき—いりあひのこゑ

【応仁年間百韻6巻】／x x〔えたふりぬ〕
／応仁2(1469)年12月

はかなくて—をしみなれこし—はるのくれ
かすみはてたる—いりあひのこゑ

【大永四年月並千二百韻】／□□〔へたつ
なよ〕／月並千二百韻／大永4(1524)年3
月23日

はるのくれがた
春の暮れ方

→藤咲く

やよひのすゑの—はるのくれかた
ものふかき—まつのひまひま—ふちさきて

【園塵第三／統群書類従本】／春／文亀元
(1501)年3月18日

はなをそつくす—はるのくれかた
やまふきの—ひとつかきねに—ふちさきて

【合点之句／神宮文庫本】／春／天文
9(1541)年12月25日

はるのゆうぐれ
春の夕暮れ

→月出る

まさこちとほき—はるのゆふくれ
とけわたる—みきはもこほる—つきいてて

【天正年間百韻57巻】／何船〔もしほく
さ〕／天正7(1579)年1月13日

こけふむやまの—はるのゆふくれ
しつかなる—はなのおくより—つきいてて

【合点之句／神宮文庫本】／春／天文
9(1541)年12月25日

ひがくれる
日が暮れる

→ふる雪

ゆくふねとめよ—ひこそくれぬれ
ふるゆきに—やまもかくる—みちのすゑ

【延徳年間百韻16巻】／何船〔はるすき
ぬ〕／延徳4(1492)年4月8日

かはかせさむみ—ひこそくれぬれ
ふるゆきに—つまきこるをの—たにのみち

【大永年間百韻14巻】／何人〔ちあきを
も〕／大永5(1525)年9月21日

→入相の鐘

ものふかき—たけよりおくに—ひはくれて
とよらのにし—いりあひのかね

【顯証院会千句】／唐何〔みたれけり〕／
宝徳元(1449)年8月19日～21日

みちのへの—ゆききかきたえ—ひはくれて
とほくそきこゆ—いりあひのかね

【伊予千句】／何路〔さみたれの〕／天文
6(1537)年5月22日

ふくかぜ
→吹く風

つきさしいつる一ひはくれにけり
きりはるる一おきついそさき一ふくかせに

【享徳二年千句】／何人〔つきとたか〕／
享徳2(1453)年8月11日～13日

はれみくもりみ一ひはくれにけり
たけのはの一おきふすのきは一ふくかせに

【因幡千句】／何船〔そらやゆき〕／文明
7(1475)年11月26日<～28日>

ひぐれにともなう
日暮れに伴う

うたうこえこえ
→歌う声々

くるるひに一かへるきこりの一ともなひて
ふしもひとつに一うたふこゑこゑ

【因幡千句】／何木〔ゆきとふる〕／文明
7(1475)年11月26日<～28日>

くるひとの一ひのくるるまで一ともなひて
むかひてつきに一うたふこゑこゑ

【文明十四年万句52巻】／初何〔をるそ
てに〕／文明14(1482)年7月4日～9月
14日

ほたるとうくれ
蛍訪う暮れ

つきはまだ
→月はまだ

かはかみよりや一ほたるとふくれ
つきはまた一いてぬひかりの一みねこえて

【永祿年間百韻28巻】／何路〔なつくさ
の〕／永祿9(1566)年5月9日

たのものはらに一ほたるとふくれ
つきはまた一おそき□やまの一あめ□□□

【寛永年間百韻15巻】／□□〔まつにこ
まつ〕／裏白／寛永19(1642)年1月3日

やどのゆうぐれ
宿の夕暮れ

はなのかげ
→花の陰

くさかるをかの一やとのゆふくれ
たちよらむ一こまつかれゆく一はなのかけ

【竹林抄／新古典文学大系本】／春／文明
8(1476)年5月頃

あらしさひしき一やとのゆふくれ
たかためか一ゆきをはらはむ一はなのかけ

【専順関係2種】／春／応仁元(1467)年
5月10日

ゆうぐれのくも
夕暮れの雲

しぐれ
→時雨れる

をのへにのこる一ゆふぐれのくも
やまさとや一はるるともなく一しくるらむ

【延徳年間百韻16巻】／何人〔はなやあ
らぬ〕／延徳2(1490)年2月25日

へたつるかたの一ゆふぐれのくも
やまのりの一をのへのまつや一しくるらむ

【大永三年月並千三百韻】／□□〔はなに
つき〕／月並千三百韻／大永3(1523)年3
月23日

ほととぎす
→時鳥

なかめこそやれ一ゆふぐれのくも
きのふかも一なきつとききし一ほととぎす

【天文十八年梅千句】／何壻〔しつくさへ〕
／天文18(1549)年正月11日

わかやまのはの一ゆふぐれのくも
こころとや一なくねをしまぬ一ほととぎす

【大永四年月並千二百韻】／□□〔へたつ
なよ〕／月並千二百韻／大永4(1524)年3
月23日

みねこえる
→峰越える

それもともなる一ゆふぐれのそら
くもにけふ一はなちりはつる一みねこえて

【長享年間百韻6巻】／何人〔ゆきなから〕
／長享2(1488)年1月22日

すすしきやまの一ゆふぐれのそら
かせさそふ一ひとむらさめの一みねこえて

【成立不詳・宗祇以前15巻】／何船〔き
たにみる〕／成立時不詳

ゆうぐれのそら
夕暮れの空

なる
→なる

やますみふかき一ゆふくれのそら
いつしかも一まなくしくれに一なりぬらむ

【永正年間百韻34巻】／何路〔あきにか
せ〕／永正8(1511)年7月14日

つくつくむかふ一ゆふくれのそら
きえにしは一いつれのくもと一なりぬらむ

【園塵第三／統群書類従本】／雑下／文亀
元(1501)年3月18日

ほとときす
→時鳥

あつきひしのく一ゆふくれのそら
ひとこゑも一まれになりたる一ほとときす

【永禄元年花千句】／□□〔さそふなよ〕
／永禄元(1558)年3月23日～25日

そことなにはの一ゆふくれのそら
ほとときす一あしのしのひに一なきすきて

【竹林抄／新古典文学大系本】／夏／文明
8(1476)年5月頃

うらみをかくる一ゆふくれのそら
ほとときす一またせてもたた一ひとこゑに

【壁草／大阪天満宮文庫本】／雑上／永正
2(1505)年8月23日以後同3年3月以前

やまざと
→山里

なくさめかねつ一ゆふくれのそら
やまさとは一ことわりよりも一さひしくて

【竹林抄／新古典文学大系本】／雑上／文
明8(1476)年5月頃

あしたのかすみ一ゆふくれのそら
やまさとは一はなのほひに一とりのこゑ

【論書4種】／宗長／

わがこころ
→我が心

なかめわひぬる一ゆふくれのそら
さりとも一おもひななれそ一わかこころ

【竹林抄／新古典文学大系本】／恋下／文
明8(1476)年5月頃

おもひなつけそ一ゆふくれのそら
こひしさも一たかなすことそ一わかこころ

【北畠家連歌合／書陵部本】／北畠家連歌
合／文明2(1470)年正月6日

ゆうぐれのやま
夕暮れの山

ひとごもり
→曇り

ゆきふりむかふ一ゆふくれのやま
ひとくもり一しくれしそらは一はるるひに

【顕証院会千句】／白何〔にはにさせ〕／
宝徳元(1449)年8月19日～21日

ほともまちかき一ゆふくれのやま
ひとくもり一あらしのあとの一ゆきはれて

【称名院追善千句】／山河〔ことつてむ〕
／永禄6(1563)年12月14日～18日

みねのくも
→峰の雲

ひもさむけなる一ゆふくれのやま
みねのくも一かへるやゆきを一さそふらむ

【難波田千句】／□□〔あけほのを〕／文
明14(1482)年10月前後

つきをはいそけ一ゆふくれのやま
あらましの一こころにかかると一みねのくも

【文明年間百韻34巻】／夕何〔みつみえぬ〕
／千句第□／文明17(1485)年6月26日

くれない

くれないのうめ
紅の梅

うぐいす
→鶯

しろきかのちの一くれなゐのうめ
うぐいすの一しもにあさひを一まちとりて

【大原野十花千句】／何船〔ひときつつ〕
／元亀2(1571)年2月5日～7日

あかぬなかめや一くれなゐのうめ
うぐいすの一みきりはなれす一こゑはして

【元和年間百韻24巻】／□□〔やつかほ
の〕／元和6(1620)年8月23日

ゆきをやそむる一くれなゐのうめ
うぐいすの一のきはのみねに一なきそめて

【文明十四年万句52巻】／何水〔たまや
とる〕／文明14(1482)年7月4日～9
14日

そでのくれない
袖の紅たつたがわ
→立田川みせはやふかき—そでのくれない
たつたかは—あきのなこりに—おりたちて【永正年間百韻34巻】／何船[うちなひ
き]／永正13(1516)年1月なみたのいろは—そでのくれない
なにゆゑに—かかろうきな—たつたかは【菟玖波集／広島大学本】／恋下／文和
5(1356)年冬～翌年の春みせはやふかき—そでのくれない
たつたかは—あきのかきりに—おりたちて

【那智筆／北野天満宮本】／永正十三年／

けむり

うすけむり
薄煙まつひともと
→松の一本うすけふり—あともさひしき—たにのおく
こけふむいはの—まつひともと【河越千句】／白何[はるかせに]／文明
2(1470)年正月10～12日のへのくれ—たけもなひける—うすけふり
たかすむのきそ—まつひともと【文明十四年万句52巻】／何国[ほとと
きす]／文明14(1482)年7月4日～9月
14日おもひのけむり
思いの煙あきのくれ
→秋の暮れおもひのけふり—それとたにみよ
ふねとむる—なたのしほやの—あきのくれ

【老葉／書陵部宗訊筆本】／秋／

おもひのけふり—ふしはかりかは
つきさひし—むろのやしまの—あきのくれ【名所句集／静嘉堂文庫本】／秋／(大永
前後)きえるけむり
消える煙もしおくるむ
→藻塩汲むきえむけふりの—はてもはかなや
もしほくむ—うらにとしふる—さすらへに【伊勢千句】／何衣[そめてほす]／大永
2(1522)年8月4日～8日きえむけふりの—ゆくへをそまつ
もしほくむ—そてさへつきを—たのむよに【明応年間百韻22巻】／何人[かきりさ
へ]／明応8(1499)年3月20日けむりひとすじ
煙一筋だれかがうえたまつのこる
→誰かが植えた松残るかせふきはらふ—けふりひとすち
たれうゑて—まつのしるしの—のこるらむ【文明十四年万句52巻】／堀何[かるひ
とは]／文明14(1482)年7月4日～9月
14日とほさとをのの—けふりひとすち
たかうゑて—まつはかりかは—のこるらむ【文明十四年万句52巻】／何色[はるな
つを]／文明14(1482)年7月4日～9月
14日

こいしい

いもがこいしくて
妹が恋しくてまくらにかなしく
→枕に片敷くいもこひしらに—みるゆめもなし
よるなみを—いそのまくらに—かたしきて【浅間千句】／何木[したふとや]／永正
11(1514)年5月13日～19日いもこひしらに—かりふしのそら
つきやとる—もしほのまくら—かたしきて【天文年間百韻38巻】／何船[あさかほ
に]／天文12(1543)年7月29日いもにこいつつ
妹に恋いつつくさまくら
→草枕のやまもつらし—いもにこいつつ
くさまくら—よるはゆめちも—いくわかれ

【成立不詳・宗長以前15巻】／x x [さ
みたれや]／成立時不詳

いもにこひつつーそてそさえゆく
くさまくらーゆふしもはらひーたれとねむ

【那智筆／北野天満宮本】／永正十二年／

みやこがこいしい
都が恋しい

なくほととぎす
→鳴く時鳥

むかしにならのーみやここひしも
つきそすむーなきてきつらむーほととぎす

【享祿年間百韻8巻】／何船 [はるのいろ]
／享祿5(1532)年1月18日

いやとほくなるーみやここひしも
なきすてしーくさのまらのーほととぎす

【天文年間百韻38巻】／何人 [にほへか
つ]／天文13(1544)年1月29日

こえ

あきかせのこえ
秋風の声

かげさびしい
→影寂しい

やなきにたかきーあきかせのこえ
かけさひしーかりなきわたるーゆふつくよ

【三島千句】／何衣 [はなにつき]／文明
3(1471)年3月21日～23日

このくれよりのーあきかせのこえ
みにしみてーいくたのもりのーかけさひし

【宗長関係8種】／老耳／天理本／

みにしみる
→身にしみる

なみたすすむるーあきかせのこえ
ものおもへはーくものはたてもーみにしみて

【難波田千句】／□□ [あくるよを]／文
明14(1482)年10月前後

このくれよりのーあきかせのこえ
みにしみてーいくたのもりのーかけさひし

【宗長関係8種】／老耳／天理本／

あまひこのこえ
天彦の声

ほととぎす
→時鳥

いふことおくるーあまひこのこえ
ほととぎすーなくとつくるをーなへてきけ

【宝徳四年千句】／何鳥 [あくるよは]／
宝徳4(1452)年3月12日

たれかこたへそーあまひこのこえ
ほととぎすーまたきくもりをーすきやらて

【享徳二年千句】／何木 [はきにつゆ]／
享徳2(1453)年8月11日～13日

うぐいすのこえ
鶯の声

たにのとはあけてもおそいひのひかり
→谷の戸は明けても遅い日の光

かすみにもるるーうくひすのこえ
たにのとはーあけてもおそきーひのひかり

【天正年間百韻57巻】／□□ [ともなし
に]／天正18(1590)年11月21日

みきりをよそのーうくひすのこえ
たにのとはーあけてもおそきーひのひかり

【文祿年間百韻12巻】／□□ [けさのま
に]／文祿2(1593)年1月14日

あきぼらけ
→朝ぼらけ

かけ□みやまのーうくひすのこえ
あさぼらけーかすむかたよりーしもとけて

【元龜二年千句】／何路 [はなにつきに]
／元龜2(1571)年3月5日

はかせもゆるきーうくひすのこえ
こすのとはーさえさえしよのーあさぼらけ

【天文年間百韻38巻】／何人 [うつせよ
に]／天文21(1552)年2月23日

かすむあさまだき
→霞む朝まだき

よそにうつろふーうくひすのこえ
なかめわひぬーかすむのかみのーあさまだき

【永正年間百韻34巻】／白何 [さみたれや]
／千句第五／永正15(1518)年5月14日

ほのかにきぬるーうくひすのこえ
やまのはのーかすみよふかきーあさまだき

【大永四年月並千二百韻】／□□ [ゆふた
ちは]／月並千二百韻／大永4(1524)年6
月23日

いつくかねくらうくひすのこゑ
あさまたき一けふのきちかく一かすむらむ

【文明十五年千句1 1巻】／二字返音〔は
なははの〕／文明 15(1483)年*月*日～
3月2日

→^{うちかすむ}
うち霞む

なれてひさしきうくひすのこゑ
くれたけの一かけもちひろにうちかすみ

【天文廿四年梅千句】／何木〔つみそへよ〕
／天文 24(1555)年正月7日

いまこそなけなうくひすのこゑ
すゑなひく一ひとむらたけのうちかすみ

【文明十四年万句5 2巻】／二字返音〔ま
つうきて〕／文明 14(1482)年7月4日～
9月14日

かきねをしたふうくひすのこゑ
のきはさへ一はるけきみねにうちかすみ

【天正四年万句7 0巻】／何路〔やまかは
も〕／天正 4(1576)年5月6日～7月19日

→^{えだにうめさく}
枝に梅咲く

すのうちになくうくひすのこゑ
まつにほふ一みなみのえたにうめさきて

【至徳以前百韻7巻】／何所〔ちりぬるか〕
／至徳 4(1387)年以前

かすみにならすうくひすのこゑ
しもはかつ一きえしかたえのうめさきて

【天文年間百韻3 8巻】／何人〔こよひま
つ〕／天文 20(1551)年9月12日

やとからさひしうくひすのこゑ
あさちふに一ひととたてるうめさきて

【竹林抄／新古典文学大系本】／春／文明
8(1476)年5月頃

→^{かすみつつ}
霞みつつ

わかやとははぬうくひすのこゑ
かすみつつ一ありあけのこる一やまにねて

【聖廟千句】／初何〔きのふより〕／明応
3(1494)年2月10日～12日

いつくこつたふうくひすのこゑ
かすみつつ一しものしつくのとおはして

【成立不詳・宗長以前1 5巻】／何人〔や
まみつは〕／成立時不詳

→^{かすむの}
霞む野

うめかかなれやうくひすのこゑ
なくさめと一あれたるむらも一かすむのに

【明応年間百韻2 2巻】／何人〔たますた
れ〕／明応 5(1496)年6月7日

うめかかとむるうくひすのこゑ
しもふかき一あけかたとほみ一かすむのに

【天文年間百韻3 8巻】／何船〔あさかほ
に〕／天文 12(1543)年7月29日

→^{かすむ}
霞む

はるまたさむきうくひすのこゑ
たにのとや一けしきはかりに一かすむらむ

【伊予千句】／山何〔やとりとへ〕／天文
6(1537)年5月22日

いつくかねくらうくひすのこゑ
あさまたき一けふのきちかく一かすむらむ

【文明十五年千句1 1巻】／二字返音〔は
なははの〕／文明 15(1483)年*月*日～
3月2日

のこりおほかるうくひすのこゑ
のへやなほ一くれゆくままに一かすむらむ

【文禄二年千句1 0巻】／山何〔まつとし
る〕／文禄 2(1593)年4月8日～10日

→^{そことなくかすむ}
そことなく霞む

やなきやうきねうくひすのこゑ
そことなく一かすみたなひき一あくるよに

【天文年間百韻3 8巻】／朝何〔またてき
く〕／天文 9(1540)年4月25日

はねうちかはすうくひすのこゑ
そことなく一かすむのもせの一むらすすめ

【天正四年万句7 0巻】／初何〔そてくち
か〕／天正 4(1576)年5月6日～7月19日

みすたえだえ
→水絶え絶え

やまかけつたふーうくひすのこゑ
たけをゆくーさとのかけみつーたえたえに

【熊野千句】／何船 [のとかなる]／文正
元 (1466) 年 3 月以前

のきはにちかきーうくひすのこゑ
こほりとくーにはのやりみつーたえたえに

【弘治三年春雪千句】／何木 [はなならて]
／弘治 3(1557) 年正月 7 日～9 日

はるのころ
→春残る

ききてやすらふーうくひすのこゑ
あけほのやーはるゆくひとにーのころらむ

【秋津洲千句】／唐何 [うめかかの]／天
文 15(1546) 年 8 月 25 日

はなちるさとのーうくひすのこゑ
はるやたたーたけひとむらにーのころらむ

【天正四年万句 70 卷】／何風 [ふちなみ
に]／天正 4(1576) 年 5 月 6 日～7 月 19 日

ほととぎす
→時鳥

したひもてゆくーうくひすのこゑ
きかはやもーやよひのすゑのーほととぎす

【羽柴千句】／朝何 [よにもふく]／天正
6(1578) 年 5 月 18・19 日

またほのかなるーうくひすのこゑ
なつきてもーいかにつれなきーほととぎす

【文禄年間百韻 12 卷】／□□ [わかたけ
を]／文禄 2(1593) 年 5 月 20 日

なかぬほとまつーうくひすのこゑ
なつちかきーみやまのさとのーほととぎす

【天正四年万句 70 卷】／何鳥 [かせにし
るき]／天正 4(1576) 年 5 月 6 日～7 月
19 日

ゆききえる
→雪消える

けさのきちかきーうくひすのこゑ
やまかすむーかけにきのふのーゆききえて

【美濃千句】／何船 [ひとやいつ]／文明
4(1473) 年 12 月 16 日～21 日

かりねのやまはーうくひすのこゑ
はらひゆくーたもとはるのーゆききえて

【天文廿四年梅千句】／何人 [うめいつく]
／天文 24(1555) 年正月 7 日

かすみのうちのーうくひすのこゑ
ありあけのーつきにうちちるーゆききえて

【天文年間百韻 38 卷】／何人 [かせみえ
て]／千句第四／天文 13(1545) 年間 11 月
25 日

よわのつき
→夜半の月

かすむあしたのーうくひすのこゑ
のとかにもーねやのとをしきーよはのつき

【天文廿四年梅千句】／山何 [うちなひき]
／天文 24(1555) 年正月 7 日

あくれはちかきーうくひすのこゑ
まきのとのーそともはうすきーよはのつき

【天正年間百韻 57 卷】／何木 [ひとへつ
つ]／裏白／天正 18(1590) 年 1 月 3 日

はるのの
→春の野

たれすきかてのーうくひすのこゑ
はるののにーこころもみゆるーこまとめて

【永正年間百韻 34 卷】／何船 [うらかせ
の]／永正 14(1517) 年 6 月

たつねてゆかむーうくひすのこゑ
たれとなくーいへるゆかしきーはるののに

【壁草／大阪天満宮文庫本】／春／永正
2(1505) 年 8 月 23 日以後同 3 年 3 月以前

おじかなくこえ
牡鹿鳴く声

ねさめればつき
→寝覚めれば月

あかつきさひしーをしかなくこゑ
ねさむれはーつきすむあきのーこからしに

【紹巴亡父追善千句】／二字反音 [かけた
かき]／天文 24(1555) 年 3 月 26 日～晦日

かすかなりけりーをしかなくこゑ
ねさむれはーつきはありあけのーまくらにて

【五吟一日千句】／何舟 [はなをさへ]／
天正 9(1581) 年 11 月 19 日

かえりにこまいわうこえ
帰りに駒祝う声みやこびと
→都人ひくれてかへる—こまいはふこゑ
あふさかを—つきもこゆるや—みやこひと【大永年間百韻14巻】／何人〔ゆきのう
ちに〕／大永5(1525)年1月25日たかかへるさそ—こまいはふこゑ
みやこひと—うちむれけふの—せきむかへ【壁草／大阪天満宮文庫本】／旅／永正
2(1505)年8月23日以後同3年3月以前かえるかりのこえ
帰る雁の声あわれをいう
→哀れを言うひとつらや—かへりおくる—かりのこゑ
あはれをいはは—わかたひのそて【表佐千句】／何年〔はなにいる〕／文明
8(1476)年3月6日<~8日>かへるさや—きぬるにかはる—かりのこゑ
あはれをいはは—はるのしのめ【皇学館文庫本千句】／□□〔ちらははな〕
／永禄6(1563)年11月18日以前かりのこえ
雁の声かすみこめる
→霞こめるやまたかみ—きたにたなひく—かりのこゑ
はるのふもとは—かすみこめつつ【太神宮法楽千句】／何人〔しかのねを〕
／長享2(1488)年7月なこりもや—おほよとのなみに—かりのこゑ
かすみこめつつ—うらのつりふね【成立不詳・宗養以前8巻】／□□〔つゆ
はそての〕／成立時不詳かりのこえごえ
雁の声々うつろう
→移ろうくもまにおつる—かりのこゑこゑ
あきのたの—ほのかにつきも—うつろひて【新撰菟玖波集／実隆本】／秋上／明応
4(1495)年9月26日おくれさきたつ—かりのこゑこゑ
すゑのつゆ—もとあらのこはき—うつろひて【老葉／吉川本】／秋／文明13(1481)年
夏頃かりのひとこえ
雁の一声あきふける
→秋更けるなこりもさむき—かりのひとこゑ
それとなく—よはのけしきも—あきふけて【文龜年間百韻4巻】／何人〔きえしよの〕
／文龜2(1502)年8月6日まくらおとろく—かりのひとこゑ
いなむしろ—つゆしきあへす—あきふけて【大永四年月並千二百韻】／何色〔うめの
はな〕／月並千二百韻／大永4(1524)年1
月23日こえする
声するかこいすてる
→囲い捨てるのをとほみ—つきにすかるの—こゑすなり
かこひすてたる—つゆのふるあと【五吟一日千句】／何路〔いそのなみ〕／
天正9(1581)年11月19日あさはらけ—さへつるとりの—こゑすなり
かこひすてたる—しつかなはしろ【天正年間百韻57巻】／何船〔かはらめ
や〕／天正18(1590)年1月9日こえのさむさ
声の寒さあきのかぜ
→秋の風とわたるかりの—こゑのさむけさ
ふけにけり—しもよのつきに—あきのかせ【明応年間百韻22巻】／何人〔たますた
れ〕／明応5(1496)年6月7日あさはむとりの—こゑのさむけさ
ぬさちらし—たひたつせきの—あきのかせ【心敬関係10種】／芝草内連歌合／松平
文庫本／さおじかのこえ
さ牡鹿の声いかばかり
→如何ばかり

ちしほとこむる一さをしかのこゑ
ささのはの一みやまはおくも一いかはかり

【永正年間百韻 3 4 卷】／経文 [しもにさ
めて]／永正 4(1507) 年 11 月 3 日

さそふかつきに一さをしかのこゑ
おきいてむ一やまちのつゆの一いかはかり

【永正年間百韻 3 4 卷】／何人 [すすし
や]／1510(1510) 年 8 月 9 日

→^{つき}月の小夜更ける

ふもとにくたる一さをしかのこゑ
つきのこる一くもにあらしの一さよふけて

【河越千句】／何船 [やまかせに]／文明
2(1470) 年正月 10～12 日

あとなるみねの一さをしかのこゑ
つきははや一いるさのやまの一さよふけて

【大永三年月並千三百韻】／□□ [こほる
なよ]／月並千三百韻／大永 3(1523) 年 7
月 23 日

→^{つゆ}露落ちる

みやまのあきの一さをしかのこゑ
わけまよふ一みちはきりふり一つゆおちて

【石山四吟千句】／何木 [おくつゆの]／
天文 24(1555) 年 8 月 15 日～19 日

かりほにちかき一さをしかのこゑ
もるをたの一いなはしとろに一つゆおちて

【称名寺連歌 3 卷】／x x [つきはあき]
／正慶元 (1332) 年 9 月 13 夜

→なる

わかゆふへまつ一さをしかのこゑ
くもそある一いつよりつきに一なりぬらむ

【文安雪千句】／初何 [ふりしける]／文
安 2(1445) 年 10 月 18 日

ふけゆくつきに一さをしかのこゑ
くさまくら一いくよさむきに一なりぬらむ

【浅間千句】／唐何 [はなといはは]／永
正 11(1514) 年 5 月 13 日～19 日

→^の野が^と遠い

をりしりかほの一さをしかのこゑ
かりすてて一ひとものこらぬ一のをとほみ

【出陣千句】／何木 [しもなから]／永正
元 (1504) 年 10 月 25 日～27 日

まちけるよはの一さをしかのこゑ
をたもりの一あかしかねたる一のをとほみ

【天正四年万句 7 0 卷】／何船 [とふとり
の]／天正 4(1576) 年 5 月 6 日～7 月 19 日

→^{むら}群^す薄

きりのうちなる一さをしかのこゑ
むらすすき一みたれあひてや一ちりぬらむ

【飯盛千句】／何船 [ありあけや]／永禄
4(1561) 年 5 月 27 日～29 日

ふしとしらるる一さをしかのこゑ
あれわたる一たなかはしけき一むらすすき

【文禄年間百韻 1 2 卷】／□□ [あめのひ
の]／文禄 2(1593) 年 5 月

→^さ猿^さけ^ぶこ^え声

→^あ秋^さむ^いい

つきはさやかに一さるさけふこゑ
あきさむき一いりえのふねに一めはさめて

【美濃千句】／山何 [けふみすは]／文明
4(1473) 年 12 月 16 日～21 日

やまかけふかく一さるさけふこゑ
あきさむき一みねのしひしは一ふきかせに

【那智竈／北野天満宮本】／永正十二年／

→^す鈴^むしの^こえ

→^ふ振^り延^える

たつねいるのの一すすむしのこゑ
つきにはと一ちきりしかたに一ふりはへて

【享徳二年千句】／何人 [つきとたか]／
享徳 2(1453) 年 8 月 11 日～13 日

すすきかもとの一すすむしのこゑ
ふりはへて一ゆくやたもとの一かせならし

【永禄元年花千句】／□□ [たきなみも]
／永禄元 (1558) 年 3 月 23 日～25 日

せみのもろこえ
蟬の諸声→^{からころも}唐衣

やまやさつきのーせみのもろこえ
すすしはーたたあきかせのーからころも

【永正十花千句】／二字反音 [こまなへて]
／永正 13(1516) 年 3 月 11 日～14 日

さよのしくれかーせみのもろこえ
からころもーもすそもそてもーうちぬれて

【文明十四年万句 5 2 卷】／何木 [あきの
ひも]／文明 14(1482) 年 7 月 4 日～9 月
14 日

たけをうつこえ
竹を打つ声→^{よがふける}夜が更ける

あられときときーたけをうつこえ
ねぬとりよーあなかまよはもーふけぬらむ

【伊庭千句】／三字中略 [ちりやすき]／
大永 4(1524) 年 3 月 17 日～21 日

ゆふへのあめのーたけをうつこえ
いつのまにーあられふるよのーふけぬらむ

【竹林抄／新古典文学大系本】／冬／文明
8(1476) 年 5 月頃

ちどりなくこえ
千鳥鳴く声→^{おもいかねる}思いかねる

ゆくかたをなみーちどりなくこえ
おもひかねーたつぬるみちにーさよふけて

【三島千句】／何路 [なへてよの]／文明
3(1471) 年 3 月 21 日～23 日

よふねにきくはーちどりなくこえ
おもひかねーいもねぬたひをーしるままに

【至徳以前百韻 7 卷】／何木 [かみかきの]
／至徳 4(1387) 年以前

とりのこえ
鳥の声→^{あめのなごり}雨の名残

とりのこえーのきはにかすむーあさほらけ
あめのなごりのーひはのとかなり

【天正年間百韻 5 7 卷】／□□ [すたれま
け]／天正 15(1587) 年 1 月 10 日

しらくもかーはなかあらぬかーとりのこえ
あめのなごりのーをちかたのはる

【天正四年万句 7 0 卷】／朝何 [さみたれ
に]／天正 4(1576) 年 5 月 6 日～7 月 19 日

とりのこえこえ
鳥の声々→^{くれるる}暮れる

さるかたしらぬーとりのこえこえ
くれぬれはーあたりのやまもーきりこめて

【天文年間百韻 3 8 卷】／何路 [ほととき
す]／天文 24(1555) 年 4 月 10 日

ねくらもとむるーとりのこえこえ
くれぬれはーつきになるかとーよをまちて

【文明十四年万句 5 2 卷】／山何 [なほさ
こそ]／文明 14(1482) 年 7 月 4 日～9 月
14 日

→^{つきおちる}月落ちる

またいつかはのーとりのこえこえ
あふさかやーせきちこゆれはーつきおちて

【天文年間百韻 3 8 卷】／何船 [あさかほ
に]／天文 12(1543) 年 7 月 29 日

あくるをつくるーとりのこえこえ
たちさわきーからすなくよのーつきおちて

【文安頃千句 4 卷】／二字反音 [はなをりて]
／

→^{のがとおい}野が遠い

あけわたるよのーとりのこえこえ
かりまくらーつきにおきゆくーのをとほみ

【石山四吟千句】／何船 [もろひとの]／
天文 24(1555) 年 8 月 15 日～19 日

かへるささそふーとりのこえこえ
あめはるるーあとはひのさすーのをとほみ

【永禄年間百韻 2 8 卷】／何人 [いへはえ
に]／永禄 6(1563) 年 2 月 23 日

とりのなくこえ
鳥の鳴く声→^{せきのと}関の戸

よなかさいつらーとりのなくこえ
せきのとのーもみちむしろをーしきすてて

【文禄年間百韻12巻】／□□〔たかには
も〕／文禄2(1593)年5月27日

いつくのそらそーとりのなくこゑ
せきのとのーまつあけわたるーゆきはれて

【諸家月次連歌抄】／諸家月次連歌抄／成
立()年未詳

とりのひとこえ
鳥の一声

→^{あける}明ける

はるかにすくるーとりのひとこゑ
しつかなるーよはのけしきやーあけぬらむ

【天文年間百韻38巻】／何人〔なやここ
に〕／天文4(1535)年5月1日

はつかになりぬーとりのひとこゑ
またれつるーねさめのそらやーあけぬらむ

【天文年間百韻38巻】／何路〔あさかほ
の〕／天文10(1541)年7月29日

→^{ほととぎす}時鳥

しはしなくさむーとりのひとこゑ
ねさめてはーそれかあらぬかーほととぎす

【天正四年万句70巻】／何船〔なかきよ
の〕／天正4(1576)年5月6日～7月19日

こすゑはるけきーとりのひとこゑ
むかしおもふーたちはなてらのーほととぎす

【園塵第四／早稲田大学本】／夏／永正6、7
年

なみだあらそうこえ
涙争う声

→^{かりなく}雁鳴く

なみたあらそふーさをしかのこゑ
つきにいまーさそはれわたるーかりなきて

【明応年間百韻22巻】／何人〔としにあ
りて〕／明応9(1500)年7月7日

なみたあらそふーむしのこゑこゑ
こはきはらーうつろふゆふへーかりなきて

【大永三年月並千三百韻】／□□〔はるを
まつ〕／月並千三百韻／大永3(1523)年11
月23日

ねぐらのはるのとりのね
塹の春の鳥の声

→^{しずか}静か

しはしねくらのーはるのとりのね
しつかなるーあしたのほとはーおそきひに

【元龜二年千句】／何袋〔ふるさとと〕／
元龜2(1571)年3月5日

たけをねくらのーはるのとりのね
しつかなるーかきほやのへにーつつくらむ

【平松文庫本千句】／□□〔おちはして〕

／

はつかりのこえ
初雁の声

→^{あまおがね}海人小舟

たたひとつらのーはつかりのこゑ
ゆふくれはーつりにといつるーあまをふね

【嘉吉年間百韻1巻】／何木〔たけのはに〕
／嘉吉3(1443)年10月23日

あけゆくももーはつかりのこゑ
なかめやるーうみへしつけきーあまをふね

【弘治年間百韻8巻】／x x〔をりのこす〕
／弘治2(1556)年9月10日

ひぐらしのこえ
蝸の声

→^{やまのかげ}山の陰

うちおとろけるーひぐらしのこゑ
あきにさへーなりぬとおくるーやまのかげ

【伊庭千句】／御何〔うくひすや〕／大永
4(1524)年3月17日～21日

つゆにしをるるーひぐらしのこゑ
むらさめやーすくるまもなきーやまのかげ

【天正四年万句70巻】／□何〔□□□□
□〕／天正4(1576)年5月6日～7月19日

→^{ゆうづくよ}夕月夜

はやしらつゆにーひぐらしのこゑ
ゆふつくよーあきかせふかぬーやまもなし

【永原千句】／何色〔うつろはぬ〕／明応
9(1500)年7月17日

ややものさひしーひぐらしのこゑ
やまのはにーまたかけうすきーゆふつくよ

【東山千句】／何色 [しかのねは] ／永正
15(1518)年 8月 10日～12日

ほととぎすのひとこえ
時鳥の一声

はるのうぐいす
→春の鶯

かへるさを一いまひとこゑの一ほととぎす
なこりやをしむ一はるのうくひす

【皇学館文庫本千句】／□□ [はなにいそ
き] ／永禄 6(1563)年 11月 18日以前

ほととぎす一ひとこゑをさへ一またせきて
ももさへつりは一はるのうくひす

【永禄年間百韻 2 8巻】／何垣 [ねにかへ
る] ／永禄 4(1561)年 3月 22日

まつかぜのこえ
松風の声

つきをみる
→月を見る

しつこころなき一まつかぜのこゑ
つゆふかき一こはきかうへの一つきをみて

【文安月千句】／何船 [つきはなを] ／文
安 2(1445)年 8月 15日

またおとろくや一まつかぜのこゑ
ふくるよの一ねやにもりくる一つきをみて

【文明年間百韻 3 4巻】／□□ [はたはり
や] ／文明 14(1482)年 9月

はなちる
→花散る

さひしきやまの一まつかぜのこゑ
みはやすを一まちあへぬまの一はなちりて

【天文年間百韻 3 8巻】／何木 [あすのな
を] ／天文 17(1548)年 8月 14日

よにとほやまの一まつかぜのこゑ
たつねこし一ひともあとなく一はなちりて

【基佐集／静嘉堂文庫本】／春／永正
6(1509)年以前

まつむしのこえ
松虫の声

あらしのやま
→風の山

あきといふあきは一まつむしのこゑ
たへてやは一あらしのやまの一つきのもと

【永正年間百韻 3 4巻】／述懐 [なけくか
な] ／永正 8(1511)年 1月 21日

したくさかるる一まつむしのこゑ
なにしおふ一あらしのやまのくれわたり

【文安頃千句 4巻】／朝何 [すゑとほき]

／

つきよの
→月の夜

なれもたれをか一まつむしのこゑ
ふたりみし一かけもわすれぬ一つきのよに

【文明十四年万句 5 2巻】／一字露頭 [ち
あきふる] ／文明 14(1482)年 7月 4日～
9月 14日

えらひかねたる一まつむしのこゑ
いつよりも一ひかりさやけき一つきのよに

【天正四年万句 7 0巻】／何船 [そらにま
つ] ／天正 4(1576)年 5月 6日～7月 19日

なる
→なる

いかなるときを一まつむしのこゑ
ちきりしも一いまやかれのとなりぬらむ

【聖廟千句】／山何 [ぬるとりの] ／明応
3(1494)年 2月 10日～12日

はしめになるる一まつむしのこゑ
うらかれの一のはらやさむく一なりぬらむ

【天正四年万句 7 0巻】／二字返音 [かせ
やいろ] ／天正 4(1576)年 5月 6日～7月
19日

むらすすき
→群薄

なほふるさとの一まつむしのこゑ
さたてたに一たとりしみちの一むらすすき

【成立不詳・宗長以前 1 5巻】／名号 [な
かはひと] ／成立時不詳

いろいろなれや一まつむしのこゑ
いつしかに一しけきそもの一むらすすき

【寛永年間百韻 1 5巻】／□□ [よのはる
を] ／裏白／寛永 8(1631)年 1月 3日

むしのこえ
虫の声

あきふける
→秋更ける

むしのこゑ一のこるまかきの一はなおちて
こすゑうつろひ一あきはふけけり

【葉守千句】／何路 [しくるやと]／長享
元(1487)年10月9日<~11日>

たつねても一あかすよほそき一むしのこゑ
あさなあさなに一あきはふけり

【成立不詳・心敬以前14巻】／何路 [し
ろたへの]／成立時不詳

つゆがみだれる
→露が乱れる

むしのこゑ一きけはいまはた一をりはへて
ゆふくれふかき一つゆそみたるる

【大永三年月並千三百韻】／□□ [あらた
まの]／月並千三百韻／大永3(1523)年12
月23日

みちのへに一なきよわりたる一むしのこゑ
ゆけはもすそに一つゆそみたるる

【文明十四年万句52巻】／錦何 [つきひ
とつ]／文明14(1482)年7月4日~9月
14日

ひとむらすすき
→一群薄

かれのにも一なほかけたのむ一むしのこゑ
ひとむらすすき一ちりなつくしそ

【三島千句】／何路 [なへてよの]／文明
3(1471)年3月21日~23日

わひしきは一かれのこりたる一むしのこゑ
ひとむらすすき一うちなひくかけ

【五吟一日千句】／何路 [いそのなみ]／
天正9(1581)年11月19日

むしのこゑ
虫の声々

こはきはら
→小萩原

なみたあらそふ一むしのこゑこゑ
こはきはら一うつろふゆふへ一かりなきて

【大永三年月並千三百韻】／□□ [はるを
まつ]／月並千三百韻／大永3(1523)年11
月23日

あきのゆふへの一むしのこゑこゑ
あかすしも一なかむるはなの一こはきはら

【天正年間百韻57巻】／何人 [わかくさ
も]／天正11(1583)年1月10日

ふくかぜ
→吹く風

つゆもあたる一むしのこゑこゑ
かりまくら一よさむのつきを一ふくかせに

【永禄年間百韻28巻】／□□ [ゆきにう
め]／永禄5(1562)年2月1日

あきはすゑのの一むしのこゑこゑ
しもかれの一をはなくすはな一ふくかせに

【宗碩関係2種】／宗碩百句／太田本／

こえる

いわこすなみ
岩越す浪

たきおちる
→滝落ちる

いはこすなみは一まつのあらしか
ちるをみる一やまにははなの一たきおちて

【菟玖波集／広島大学本】／春下／文和
5(1356)年冬~翌年の春

いはこすなみは一かはかせそふく
あらいその一うへなるやまに一たきおちて

【老葉／吉川本】／雑上／文明13(1481)年
夏頃

うつのやまこゑ
宇津の山越え

あきのかぜ
→秋の風

つきにもまよふ一うつのやまこゑ
しもはらふ一みちのゆくての一あきのかせ

【延徳年間百韻16巻】／初何 [さけはさ
く]／千句第三／延徳4(1492)年3月3日

あはれはおなし一うつのやまこゑ
ふるさとの一ゆふへなりけり一あきのかせ

【大永四年月並千二百韻】／□□ [へたつ
なよ]／月並千二百韻／大永4(1524)年3
月23日

こえるおうさかのせき
越える逢坂の関

こがくれる
→木隠れる

いつこえつらむ一あふさかのせき
しけくなる一なけきにわかみ一こかくれて

【住吉千句】／何木 [つきはふゆ]／大永
元(1521)年11月1日~14日

けふこえそむるーあふさかのせき
すきのはにーいりひのかげのーこかくれて

【文明十四年万句52巻】／何船 [みつと
りか]／文明14(1482)年7月4日～9月
14日

こえるおうさかのやま
越える逢坂の山

みやこのはるがすみ
→都の春霞

こゆるそつらきーあふさかのやま
へたつなよーかへりみやこのーはるかすみ

【文安雪千句】／何路 [なほつもれ]／文
安2(1445)年10月18日

こゆるなこりやーあふさかのやま
みやこよりーあらたまりゆくーはるかすみ

【弘治三年春雪千句】／何木 [はなならて]
／弘治3(1557)年正月7日～9日

としこえる
年越える

かすむあけほの
→霞む曙

きのふよりーかせさへよわるーとしこえて
いりあひのかねのーかすむあけほの

【河越千句】／何船 [やまかせに]／文明
2(1470)年正月10～12日

たかさともーけふあらたまるーとしこえて
やまのあさまのーかすむあけほの

【嵯峨千句】／何人 [さきてちる]／(元
龜4)天正元(1573)年正月9日～11日

みずこえる
水越える

なみのうきはし
→浪の浮橋

のをめくるーよとのかはきしーみつこえて
うへにゆきふるーなみのうきはし

【紫野千句】／何物 [したくさの]／延文
2(1357)年以後-応安3年6月以前

さみたれにーさはへのなかれーみつこえて
ふめはあやふきーなみのうきはし

【因幡千句】／山河 [ふるゆきは]／文明
7(1475)年11月26日<～28日>

みねこえる
峰越える

はるのかりがね
→春の雁

くもにけふーはなちりはつるーみねこえて
きけはいまはのーはるのかりかね

【長享年間百韻6巻】／何人 [ゆきなから]
／長享2(1488)年1月22日

ゆきおくれーひとりかすみのーみねこえて
よはあけかたのーはるのかりかね

【大永三年月並千三百韻】／□□ [はるを
まつ]／月並千三百韻／大永3(1523)年11
月23日

こおり

こおりそめる
氷初める

しもふる
→霜ふる

あらしよりまつーこほりそめけり
ころもてにーしみつくはかりーしもふりて

【天文廿四年梅千句】／山河 [うちなひき]
／天文24(1555)年正月7日

いはねやたよりーこほりそめけり
うちわたすーまへのたなはしーしもふりて

【明応年間百韻22巻】／何人 [くもはれ
て]／明応5(1496)年8月22日

そでのこおり
袖の氷

しらない
→知らない

そでのこほりはーわれそくるしき
よかれしやーわふるまくらもーしらさらむ

【永正年間百韻34巻】／山河 [たちはな
に]／永正18(1521)年5月7日

そでのこほりはーいつとけてまし
ものおもふーこころやはるもーしらさらむ

【天正年間百韻57巻】／何船 [なひきそ
はむ]／天正10(1582)年1月5日

つきがこおる
月が氷る

むしのお
→虫の音

ちはらかつゆのーつきそこほるる
むしのねをーたもとにかくるーよはふけて

【河越千句】／何船 [やまかせに]／文明
2(1470)年正月10～12日

みなからつゆのつぎそこほるる
むしのねを—まそてにえらふ—よはふけて

【弘治年間百韻 8 卷】／何人 [うのはなの]
／弘治 2(1556) 年 4 月 27 日

→夜が更ける

ちはらかつゆのつぎそこほるる
むしのねを—たもにかくる—よはふけて

【河越千句】／何船 [やまかせに]／文明
2(1470) 年正月 10~12 日

みなからつゆのつぎそこほるる
むしのねを—まそてにえらふ—よはふけて

【弘治年間百韻 8 卷】／何人 [うのはなの]
／弘治 2(1556) 年 4 月 27 日

こがらし

こがらしのかぜ
木枯しの風

→笛の音

ふきもたゆまぬ—こがらしのかせ
ふえのねは—さそはれかへる—をちこちに

【天文廿四年梅千句】／何木 [つみそへよ]
／天文 24(1555) 年正月 7 日

ろうにふきいる—こがらしのかせ
ふえのねは—ととめもあへぬ—をくるまに

【天文年間百韻 3 8 卷】／何人 [ゆふかけ
て]／天文 11(1542) 年 5 月 7 日

→山のおきくれる

ひとりさひしき—こがらしのかせ
よにとほく—こもるみやまの—あきくれて

【竹林抄／新古典文学大系本】／秋／文明
8(1476) 年 5 月頃

いととはけしき—こがらしのかせ
しをれゆく—ふかくさやまに—あきくれて

【老葉／吉川本】／秋／文明 13(1481) 年
夏頃

こころ

おなじこころ
筒じ心

→よしや

おなしこころに—たのむはかなさ
よしやとて—またすはひとの—とひやせむ

【基佐集／静嘉堂文庫本】／恋／永正
6(1509) 年以前

おなしこころに—おもはぬそうき
よしやとて—うらみすつれは—ゆふまくれ

【基佐集／静嘉堂文庫本】／恋／永正
6(1509) 年以前

おろかなこころ
愚かな心

→思い初める

おろかなる—こころのすゑも—いかにせむ
おもはぬものを—おもひそめつつ

【紹巴亡父追善千句】／何船 [すみそめの]
／天文 24(1555) 年 3 月 26 日~晦日

おろかなる—こころよりこそ—まよひつれ
つれなきひとを—おもひそめつつ

【菟玖波集／広島大学本】／恋上／文和
5(1356) 年冬~翌年の春

かわるよのなか
変わる世の中

→夏衣

ひとのこころの—かはるよのなか
なつころも—はるのはなそめ—ぬきすてて

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

さめてむちうに—かはるよのなか
なつころも—ついたちきたる—よはあけて

【新統犬筑波集】／夏／万治 3(1660) 年正月

こころあらそうた
心争う歌

→鶯の声々

こころあらそふ—うたのくちくち
はるされは—うくひすかはつ—こゑこゑに

【初瀬千句】／何衣 [しけるとも]／享徳
元・2(1452) 年、4 月

こころあらそふうたのかちまけ
こゑこゑにーなくうくひすをーこにいれて

【文明十四年万句52巻】／栗何〔あけて
みむ〕／文明14(1482)年7月4日～9月
14日

こころうかれる
心浮かれる

→^{かえる}帰る

こころうかるるーゆきのあけほの
わかれつるーひとはいつくにーかへるらむ

【文明十四年万句52巻】／扇何〔かせの
ほり〕／文明14(1482)年7月4日～9月
14日

ゆめのあとにそーこころうかるる
よひのまのーひとやあたねにーかへるらむ

【心敬関係10種】／芝草内連歌合／天理本
／

こころうらめしい
心恨めしい

→^{つれなくみる}連れなく見る

おもひたえよのーこころうらめし
つれなくはーみえぬものからーとにかくに

【老葉／毛利本】／恋下／（文明17(1485)
年7月23日頃）

ひるますくせのーこころうらめし
つれなくはーたれあさかほのーはなもみむ

【園塵第四／早稲田大学本】／秋／永正6、7
年

こころがまどのうち
心が窓の内

→^{ともしひのかげ}灯の影

しつかなれーこころをしむるーまどのうち
かせふくよるのーともしひのかげ

【寛正年間百韻20巻】／何人〔ひはなか
く〕／寛正3(1462)年1月25日

いつおもひーたえむこころそーまどのうち
かかけてはまつーともしひのかげ

【合点之句／神宮文庫本】／恋／天文
9(1541)年12月25日

こころつくし
心尽くし

→^{なみのおと}浪の音

こころつくしのーふなていそくな
なみのおとーとまやにちかきーまくらして

【天正年間百韻57巻】／□□〔ともなし
に〕／天正18(1590)年11月21日

こころつくしのーおきつふなひと
なみのおとーつきにあれゆくーあきはきて

【那智庵／北野天満宮本】／永正十四年／

こころである
心である

→^{しらない}知らない

ひとさわかすもーこころなりけり
しらさらむーことをはいかてーかこつらむ

【太神宮法楽千句】／何木〔いつそめし〕
／長享2(1488)年7月

たのむはかなきーこころなりけり
さけはちるーはなとはたれかーしらさらむ

【東山千句】／何路〔のわきせし〕／永正
15(1518)年8月10日～12日

こころではない
心ではない

→^{ながらえる}長らえる

こころともなきーおいのうたたね
うくつらきーよにつれなくもーなからへて

【永原千句】／何船〔はるのそらは〕／明
応9(1500)年7月17日

みはなともとのーこころともなき
なからへてーすむよのなかはーかはらぬに

【文明年間百韻34巻】／何船〔そめよな
ほ〕／文明14(1482)年9月20日

こころながくまで
心長く待て

→^{つなひくわたしぶね}綱引く渡し舟

こころなかくもーわれにまでとや
わたしふねーむかひにつなをーひきすてて

【新撰菟玖波集／実隆本】／羈旅下／明応
4(1495)年9月26日

こころなかくもーひとをこそまで
くるるまでーつなひきはふるーわたしふね

【北畠家連歌合／書陵部本】／北畠家連歌
合／文明 2(1470) 年正月 6 日

こころにて
心にて

→^{かすみあさつゆ}
霞む朝露

かへるへき一みやこのはるをこころにて
かりのなみたや一かすみあさつゆ

【天正四年万句 70 巻】／竹何 [うつらな
く]／天正 4(1576) 年 5 月 6 日～7 月 19 日

はかなきは一ひとよをちきるこころにて
すみれさくのに一かすみあさつゆ

【園塵第三／統群書類従本】／春／文亀元
(1501) 年 3 月 18 日

こころをつくすあめのよる
心を尽す雨の夜

→^{みがおいたほととぎす}
身が老いた時鳥

ねられぬこころ一つくすあめのよ
まつうちに一みもおいぬへき一ほととぎす

【心敬関係 10 種】／芝草内連歌合／天理本
／

まつにこころを一つくすあめのよ
つれなきに一みもおいぬへき一ほととぎす

【心敬関係 10 種】／吾妻辺云捨／天理本
／

ひとのこころ
人の心

→^{なみだおちる}
涙落ちる

たひのやと一かすはまれなる一ひとこころ
なさけのなきに一なみたおちけり

【文明十四年万句 5 2 巻】／手何 [はふつ
たに]／文明 14(1482) 年 7 月 4 日～9 月
14 日

たまさかに一ちきりおきつる一ひとこころ
かたみのふみに一なみたおちけり

【文明十四年万句 5 2 巻】／何水 [たまや
とる]／文明 14(1482) 年 7 月 4 日～9 月
14 日

→^{はかない}
儂い

ひとのこころの一あやしうつしゑ
はかなくも一すきにしもの一おもはれて

【天正年間百韻 5 7 巻】／何木 [けふかへ
よ]／天正 9(1581) 年 4 月 1 日

ひとのこころの一かはるよのなか
はかなくも一おとろふるをは一ともにせて

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

ひとのこころがかわる
人の心が変わる

→^{うみやま}
海山

ひとのこころの一かはりやすさよ
うみやまの一つきみてあかす一すまのうら

【文明十四年万句 5 2 巻】／山何 [あきの
はな]／文明 14(1482) 年 7 月 4 日～9 月
14 日

ひとのこころの一かはるよのなか
うみやまの一なあるところも一たひなれや

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

ひとのこころのかわるよのなか
人の心の変わる世の中

→^{あきのくれ}
秋の暮れ

ひとのこころの一かはるよのなか
やまさとを一うかれいてめや一あきのくれ

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

ひとのこころの一かはるよのなか
いまをなほ一とへやよしのの一あきのくれ

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

→^{あきがくる}
秋が来る

ひとのこころの一かはるよのなか
うつせみの一はやまおろしに一あきはきて

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

ひとのこころの一かはるよのなか
しるしらぬ一ひとつなみたに一あきはきて

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

^{あわれ}
→哀れ

ひとのこころの—かはるよのなか
よもきふを—かれぬあるしは—あはれにて

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

ひとのこころの—かはるよのなか
なきあとは—にくかりしたに—あはれにて

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

^{いろみえる}
→色見える

ひとのこころの—かはるよのなか
まちをしむ—はなにほとなき—いろみえて

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

ひとのこころの—かはるよのなか
たけはその—こをおもふとも—いろみえて

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

^{ういみのとき}
→憂い身の時

ひとのこころの—かはるよのなか
うきみさへ—ときにやあふと—はるたちて

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

ひとのこころの—かはるよのなか
うきみさへ—いまはのときや—をしからむ

【萱草／伊地知本】／雑／文明 6(1474) 年
2 月以前

^{おとろえる}
→衰える

ひとのこころの—かはるよのなか
そのいへは—のこれとみちの—おとろへて

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

ひとのこころの—かはるよのなか
あかむれは—かみのしるしは—おとろへて

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

^{そでぬれる}
→袖濡れる

ひとのこころの—かはるよのなか
ききわひぬ—しくれこのはに—そでぬれて

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

ひとのこころの—かはるよのなか
おいかみは—わかになつむにも—そでぬれて

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

^{たび}
→旅

ひとのこころの—かはるよのなか
うきにあひ—なさけをみるも—たひなれや

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

ひとのこころの—かはるよのなか
うみやまの—なあるところも—たひなれや

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

^{ちぎり}
→契り

ひとのこころの—かはるよのなか
なへてうき—あきなとほしの—ちきるらむ

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

ひとのこころの—かはるよのなか
むかしたれ—はなよりまつを—ちきるらむ

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

^{つきをみる}
→月を見る

ひとのこころの—かはるよのなか
よつのとき—いつれまさると—つきをみて

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

ひとのこころの—かはるよのなか
すさましと—いひししはすの—つきをみて

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

→とりどり

ひとのこころのーかはるよのなか
さむきひはーみつにいるてふーとりとりに

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応

仁 2(1468) 年 5 月下旬

ひとのこころのーかはるよのなか
すてかたきーわかふたみちのーとりとりに

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応

仁 2(1468) 年 5 月下旬

→^{はかないはねをならべるとりべやま}儂い羽根を並べる鳥部山

ひとのこころのーかはるよのなか
はかなしやーはねをならへしーとりへやま

【萱草／伊地知本】／恋／文明 6(1474) 年

2 月以前

ひとのこころのーかはるよのなか
はかなしやーはをもならへしーとりへやま

【老葉／書陵部宗訊筆本】／旅／

→^{はなまき}花咲ぐ

ひとのこころのーかはるよのなか
のへをわけーやまちをたとるーはなさきて

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応

仁 2(1468) 年 5 月下旬

ひとのこころのーかはるよのなか
みやまきをーかたはらになすーはなさきて

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応

仁 2(1468) 年 5 月下旬

→^{はなもない}花もない

ひとのこころのーかはるよのなか
うれへあるーみはなかめつるーはなもなし

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応

仁 2(1468) 年 5 月下旬

ひとのこころのーかはるよのなか
うたのみちーまことをうるはーはなもなし

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応

仁 2(1468) 年 5 月下旬

→^{はねをならべるとりべやま}羽根を並べる鳥部山

ひとのこころのーかはるよのなか
とりへやまーはねをならへしーすゑたえて

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応

仁 2(1468) 年 5 月下旬

ひとのこころのーかはるよのなか
はかなしやーはねをならへしーとりへやま

【萱草／伊地知本】／恋／文明 6(1474) 年

2 月以前

→^{ひとつ}一つ

ひとのこころのーかはるよのなか
つきはたたーみやもわらやもーひとつにて

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応

仁 2(1468) 年 5 月下旬

ひとのこころのーかはるよのなか
こをおもふーみちのみたれもーひとつにて

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応

仁 2(1468) 年 5 月下旬

→^{ほととぎす}時鳥

ひとのこころのーかはるよのなか
ほととぎすーはななきころをーなくさめて

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応

仁 2(1468) 年 5 月下旬

ひとのこころのーかはるよのなか
またしよもーなきかやまちのーほととぎす

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応

仁 2(1468) 年 5 月下旬

ひとのこころのーかはるよのなか
ほととぎすーかへるやまちはーともならて

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応

仁 2(1468) 年 5 月下旬

→^{みをしらない}身を知らない

ひとのこころのーかはるよのなか
うれしさもーうきもゆめなるーみをしらて

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応

仁 2(1468) 年 5 月下旬

ひとのこころのーかはるよのなか
ときをえはーなほおそるへきーみをしらて

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

→^{みまをしる}身を知る

ひとのこころのーかはるよのなか
みをしれはーわれとさためむーやともなし

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

ひとのこころのーかはるよのなか
みをしれはーいはむうらみもーなきものを

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

→^{わがうえ}我が上

ひとのこころのーかはるよのなか
わかうへにーおもはてたれをーそしるらむ

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

ひとのこころのーかはるよのなか
わかうへにーほしのひとよのーあきもかな

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

ひとのこころのよのなか
人の心の世の中

→^{はなをうらむ}花を恨む

ひとのこころのーあたしよのなか
はなをたれーうつろふものとーうらむらむ

【竹林抄／新古典文学大系本】／春／文明
8(1476) 年 5 月頃

ひとのこころのーかはるよのなか
なつやまとーみなすをはなやーうらむらむ

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

こし

こしのしらゆき
越の白雪

→^{かえるかりがね}帰る雁

はるふかきまでーこしのしらゆき
ありあけのーつきもなこりとーかへるかり

【看聞日記紙背 5 0 卷】／山何 [あつさな
ほ]／応永 32(1425) 年閏 6 月 25 日

きゆるひもなきーこしのしらゆき
かへるかりーいつかたこえてーまたはこむ

【享祿年間百韻 8 卷】／白何 [あさみとり]
／享祿 3(1530) 年 3 月 2 日

こずえ

こずえのあき
梢の秋

→^{しかのこえ}鹿の声

こすゑのあきのーをちのひとむら
しかのこゑーきりのいつくにーかへるらむ

【大永年間百韻 1 4 卷】／山何 [いやまし
に]／大永 5(1525) 年 1 月 17 日

こすゑのあきのーかけあさきみち
なれきつるーさととほくなるーしかのこゑ

【弘治年間百韻 8 卷】／何路 [ゆくみつや]
／弘治 2(1556) 年 3 月 24 日

はなのこずえにあらわれる
花の梢に現れる

→^{ふるてらのみち}古寺の道

くもまよりーはなのこすゑのーあらはれて
まつにふちさくーふるてらのみち

【永祿年間百韻 2 8 卷】／何路 [きえしそ
の]／永祿 7(1564) 年 1 月 22 日

すきむらのーこすゑははなにーあらはれて
おくにそつつくーふるてらのみち

【天正年間百韻 5 7 卷】／□□ [ことのは
も]／天正 13(1585) 年 1 月 4 日

こたえる

こたえようか
答えようか

→^{ことのはにする}言の葉にする

やまさとのーうきをとへかしーこたへまし
まつかせをわかーことのはにせむ

【伊勢千句】／三字中略 [うめさきて]／
大永 2(1522) 年 8 月 4 日～8 日

なにゆゑとーとはれはいかかーこたへまし
ぬるるそてをやーことのはにせむ

【那智庵／北野天満宮本】／永正十三年／

こちょう

こちょうという
胡蝶という→^{つゆのくさむら}
露の草群こてふとふーのはわけすてむーみちならて
あまそきせしーつゆのくさむら【天正年間百韻57巻】／□□〔ひきのこ
せ〕／天正19(1591)年1月3日こてふとふーまかきののへのーくれわたり
おきそふまのーつゆのくさむら【慶長年間百韻27巻】／□□〔あらしに
も〕／裏白／慶長5(1600)年1月3日こちょうのたとえ
胡蝶の喩え→^{ももとせ}
百年こてふのたとへーけにもあたし
ももとせもーすくれはかりのーいのちにて【看聞日記紙背50巻】／何路〔うのはな
の〕／応永30(1423)年4月4日こてふのたとへーけにもあたし
ももとせもーちかつくよはひーおもはず□【看聞日記紙背50巻】／何船〔ゆきにみ
て〕／応永32(1426)年11月25日

こと

あきないことのお
飽きない琴の音→^{まつかぜのつき}
松風の月なほゆふかけにーあかぬことのお
まつかぜのーさそははつきはーおそからし【秋津洲千句】／何路〔まつなくを〕／天
文15(1546)年8月25日あまたのうちにーあかぬことのお
まつかぜのーふきすさひたるーよはのつき【文禄年間百韻12巻】／□□〔はなのい
ろや〕／文禄4(1595)年1月30日

ことのは

おもひひとのことのは
思ふ人の言の葉→^{われのみひとりそでをぬらす}
我のみ一人袖を濡らすおもふてふーひとのことのはーたのみなや
われのみひとりーそてはぬらしつ【菟玖波集／広島大学本】／恋上／文和
5(1356)年冬～翌年の春おもふてふーひとのことはーことならば
われのみひとりーそてはぬらさし【菟玖波集／広島大学本】／恋下／文和
5(1356)年冬～翌年の春かわすことのは
交わす言の葉→^{ほととぎす}
時鳥きくやいかにとーかはすことのは
しるしらすーかりねのやまのーほととぎす【新撰菟玖波集／実隆本】／夏／明応
4(1495)年9月26日ことわりなれやーかはすことのは
うくひすにーしたしきこゑのーほととぎす【園塵第四／早稲田大学本】／夏／永正6、7
年きみのことのは
君の言の葉→^{いつわり}
偽りしらぬなかれのーきみかことのは
いつはりのーなきはなみたにーあらはれて【享徳二年千句】／何玉〔くらからぬ〕／
享徳2(1453)年8月11日～13日みになほたのめーきみかことのは
いつはりのーすゑをはかなきーいのちにて【竹林抄／新古典文学大系本】／恋上／文
明8(1476)年5月頃ことのはがない
言の葉がない→^{かすむたまつしま}
霞む玉津島はるをうれしとーことのはそなき
たまつしまーかすみやそてにーつつむらむ【専順関係2種】／春／応仁元(1467)年
5月10日

のこしおくへき—ことのはそなき
あけほのや—かすむしほひの—たまつしま

【萱草/伊地知本】/春/文明6(1474)年
2月以前

のりのことのは
法の言の葉

→駒止める

たまたまあへる—のりのことのは
こまとめて—おなしやとかれ—たひのとも

【竹林抄/新古典文学大系本】/旅/文明
8(1476)年5月頃

みみにもふれよ—のりのことのは
わたりえぬ—こたかかりはに—こまとめて

【基佐集/静嘉堂文庫本】/秋/永正
6(1509)年以前

やまとことのは
大和言の葉

→唐土

みちこそたかき—やまとことのは
もろこしの—ふみをよろつの—うへにみて

【延徳年間百韻16巻】/何船[きよかせ
も]/延徳2(1490)年7月23日

いのらはいたれ—やまとことのは
もろこしの—たひのひとまつ—あさゆふに

【老葉/吉川本】/旅/文明13(1481)年
夏頃

こぼれる

こぼれるたけのはのつゆ
零れる竹の葉の露

→片敷の枕

こぼれてつたふ—たけのはのつゆ
かたしきの—まくらのうへの—あきのかせ

【弘治三年春雪千句】/何舟[きえてたに]
/弘治3(1557)年正月7日~9日

こぼれきにけり—たけのはのつゆ
かたしきの—そてもまくらも—ひややかに

【元和年間百韻24巻】/□□[くにくに
の]/元和6(1620)年9月15日

つゆのつきがこぼれる
露の月が零れる

→虫の音に夜が更ける

ちはらかつゆの—つきそこほるる
むしのねを—たもとにかくる—よはふけて

【河越千句】/何船[やまかせに]/文明
2(1470)年正月10~12日

みなからつゆの—つきそこほるる
むしのねを—まそてにえらふ—よはふけて

【弘治年間百韻8巻】/何人[うのはなの]
/弘治2(1556)年4月27日

こま

かえりにこまいわうこえ
帰りに駒祝う声

→都人

ひくれてかへる—こまいはふこゑ
あふさかを—つきもこゆるや—みやこひと

【大永年間百韻14巻】/何人[ゆきのう
ちに]/大永5(1525)年1月25日

たかかへるさそ—こまいはふこゑ
みやこひと—うちむれけふの—せきむかへ

【壁草/大阪天満宮文庫本】/旅/永正
2(1505)年8月23日以後同3年3月以前

こめる

かすみこめる
霞こめる

→覚束ない

やまちゆくゆく—かすみこめたり
おほつかな—くれぬるかたの—よふことり

【天文廿四年梅千句】/二字反音[くれな
ゐの]/天文24(1555)年正月7日

はなにさくらも—かすみこめたり
よふことり—しるへはせしも—おほつかな

【天文年間百韻38巻】/x x[したみつ
も]/天文24(1555)年9月2日

→呼子鳥

やまちゆくゆく—かすみこめたり
おほつかな—くれぬるかたの—よふことり

【天文廿四年梅千句】／二字反音〔くれな
ゐの〕／天文 24(1555) 年正月 7 日

はなにさくらもーかすみこめたり
よふことりーしるへはせしもーおほつかな

【天文年間百韻 3 8 巻】／x x [したみつ
も]／天文 24(1555) 年 9 月 2 日

かすみにこもる
霞にこもる

→^{うぐいす}
鶯

かすみにこもるーさとはふりにき
うくひすのーつまとふのへのーゆきのうち

【文安月千句】／何田 [ほしのなも]／文
安 2(1445) 年 8 月 15 日

かすみにこもるーかけのふるてら
うくひすのーのきはにきゐるーこゑすなり

【成立不詳・宗養以前 8 巻】／山何 [かせ
やしる]／成立時不詳

かのおとおと
→鐘の音

かすみにこもるーてらのさしいり
はるもたたーけふにくれぬるーかねのおと

【天正年間百韻 5 7 巻】／□□ [けふひく
や]／天正 12(1584) 年 1 月 10 日

かすみにこもるーみねのまつかせ
かねのおとーほのかにはるのーひはおちて

【慶長年間百韻 2 7 巻】／□□ [ひめおき
し]／慶長 4(1599) 年 3 月 25 日

はるのあめ
→春の雨

かすみにこもるーみきりさひしも
やまちかきーしづくにのこるーはるのあめ

【天正年間百韻 5 7 巻】／□□ [すたれま
け]／天正 15(1587) 年 1 月 10 日

かすみにこもるーおくのふるてら
つねよりもーともしひしめるーはるのあめ

【元和年間百韻 2 4 巻】／□□ [ちちのは
るを]／裏白／元和 4(1618) 年 1 月 3 日

こもる

ういふゆごもり
憂い冬籠り

あさなあさな
→朝な朝な

うきふゆこもりーいつかかかるらむ
しつかなるーなにはのうみのーあさなあさな

【伊勢千句】／山何 [みるめかれ]／大永
2(1522) 年 8 月 4 日～8 日

うきふゆこもりーなといそくらむ
ふくかせもーまたさむからぬーあさなあさな

【天正四年万句 7 0 巻】／何物 [きくやい
かに]／天正 4(1576) 年 5 月 6 日～7 月
19 日

ふゆこもるころ
冬籠もる頃

うめがはるまつ
→梅が春待つ

ゆきよりさきとーふゆこもるころ
はなにかつーつほめるうめのーはるまちて

【住吉千句】／白何 [あられのみ]／大永
元 (1521) 年 11 月 1 日～14 日

かせもあたらすーふゆこもるころ
かめにさすーはなのうめかえーはるまちて

【成立不詳・心敬以前 1 4 巻】／何袋 [ま
たしかし]／成立時不詳

ころ

いろかわるころ
色変わる頃

はなさく
→花咲く

みとりなるのもーいろかはるころ
さはみつにーくさのむらむらーはなさきて

【三島千句】／何船 [とりのねは]／文明
3(1471) 年 3 月 21 日～23 日

このもとまでもーいろかはるころ
ひとしれぬーこくさあはれにーはなさきて

【明応年間百韻 2 2 巻】／何路 [うつろは
て]／明応 3(1494) 年 10 月 30 日

さくらさくころ
桜咲く頃

かすむ
→霞む

をちこちかけて一さくらさくころ
 もろこしの一よしのもはるや一かすむらむ

【皇学館文庫本千句】／□□ [いろみえて]
 ／永禄 6(1563) 年 11 月 18 日以前

よはみなそらを一さくらさくころ
 あさなあさな一うすくもるひや一かすむらむ

【永正年間百韻 3 4 巻】／何船 [かへるか
 り]／永正 16(1519) 年 2 月 19 日

さみだれのころ
 五月雨の頃

→^{たにうえやらない}
 田に植えやらない

なにはわたりの一さみだれのころ
 ひとかたは一ひろきたのもを一うゑやらて

【毛利千句】／初何 [よとともに]／文禄
 3(1594) 年 5 月 12 日～16 日

みきはまされる一さみだれのころ
 すゑとほき一さとのふかたは一うゑやらて

【寛永年間百韻 1 5 巻】／□□ [ゆきとけ
 て]／裏白／寛永 3(1626) 年 1 月 3 日

→^{ほととぎす}
 時鳥

おほりもわかぬ一さみだれのころ
 ほととぎす一おとはのみねを一こえすてて

【浅間千句】／何人 [すすしさを]／永正
 11(1514) 年 5 月 13 日～19 日

うらのとまやの一さみだれのころ
 ほととぎす一おのかなのりそ一かすかにて

【宗長追善千句】／何色 [うくひすの]／
 (享禄 5) 天文元 (1532) 年 3 月 25 日

ふるきのきはの一さみだれのころ
 ほととぎす一わすれはくさの一なもつらし

【長享年間百韻 6 巻】／何木 [わかみつの]
 ／長享 2(1488) 年 1 月 1 日

→^{ねざめのほととぎす}
 寝覚めの時鳥

いもせのかはの一さみだれのころ
 ねさめして一われもたひよそ一ほととぎす

【文明十四年万句 5 2 巻】／何人 [よにひ
 ろく]／文明 14(1482) 年 7 月 4 日～9 月
 14 日

つれつれのみの一さみだれのころ
 ねさめして一きくはむかしの一ほととぎす

【天正四年万句 7 0 巻】／何風 [ふちなみ
 に]／天正 4(1576) 年 5 月 6 日～7 月 19 日

しのにふるころ
 篠にふる頃

→^{ころもがひがたい}
 衣が干難い

あしやのゆきの一しのにふるころ
 たくひにも一わかころもては一ひかたくて

【文安雪千句】／何田 [あとそある]／文
 安 2(1445) 年 10 月 18 日

ひとむらしくれ一しのにふるころ
 おりかくる一くものころもは一ひかたくて

【初瀬千句】／何水 [うのはなの]／享徳
 元・2(1452) 年、4 月

ふゆこもるころ
 冬籠もる頃

→^{うめがはるまつ}
 梅が春待つ

ゆきよりさきと一ふゆこもるころ
 はなにかつ一つほめるうめの一はるまちて

【住吉千句】／白何 [あられのみ]／大永
 元 (1521) 年 11 月 1 日～14 日

かせもあたらす一ふゆこもるころ
 かめにさす一はなのうめかえ一はるまちて

【成立不詳・心敬以前 1 4 巻】／何袋 [ま
 たしかし]／成立時不詳

ものおもふころ
 物思ふ頃

→^{いかなる}
 如何なる

こころくたけて一ものおもふころ
 ひとはうし一ゆきてとはむも一いかならむ

【難波田千句】／□□ [あけほのを]／文
 明 14(1482) 年 10 月前後

つゆのみたれに一ものおもふころ
 よしやとの一ゆふへよあきよ一いかならむ

【永正年間百韻 3 4 巻】／何人 [みちしあ
 れや]／永正 2(1505) 年 1 月 1 日

→^{だれがうい}
 誰が憂い

つゆもわかみの一ものおもふころ
 あちきなや一たれゆゑそらも一うかるらむ

【太神宮法楽千句】／白何 [つゆなから]
／長享 2(1488) 年 7 月

なみだすすろにーものおもふころ
ちきらすよーたれにゆふへのーうかるらむ

【竹林抄／新古典文学大系本】／恋上／文
明 8(1476) 年 5 月頃

ころも

あきごろもうつ
麻衣打つ

→人は訪い来ない

うらみをもーうちそへかましーあさころも
あさましきまてーひととはとひこす

【成立不詳・宗祇以前 1 5 卷】／山何 [め
つらしき]／成立時不詳

あさころもーうつなるこゑのーふくるよに
かはるころかーひととはとひこす

【文明十四年万句 5 2 卷】／何緑 [あさか
はや]／文明 14(1482) 年 7 月 4 日～9 月
14 日

あさのさころも
麻の狭衣

→山賤

たけのはわくるーあさのさころも
やまかつのーつまきのはやしーふゆかれて

【那智筆／北野天満宮本】／永正十二年／

うつつちたかきーあさのさころも
やまかつのーそはのふるみちーあとみえて

【論書 4 種】／宗牧／

からごろも
唐衣

→袖の移り香

かさねてもーむなしきひとのーからころも
わすれむものかーそてのうつりか

【天正年間百韻 5 7 卷】／何船 [みちみち
を]／天正 13(1585) 年 5 月 27 日

けふこそとーかへてうれしきーからころも
わかはのはなのーそてのうつりか

【天正四年万句 7 0 卷】／二字返音 [かせ
やいろ]／天正 4(1576) 年 5 月 6 日～7 月
19 日

→夜が更ける

かすかのやーそのかみひとのーからころも
さかきはうたふーよはふけにけり

【紫野千句】／片何 [かせかとよ]／延文
2(1357) 年以後-応安 3 年 6 月以前

からころもーたちわかれにしーつきのもと
しみつにあきのーよはふけにけり

【天文年間百韻 3 8 卷】／山何 [のきにお
ふる]／天文 19(1550) 年 4 月 24 日

→秋の蓬生の里

からころもーそてとふつきのー□□□□□
あきはたさひしーよもきふのやと

【文安年間百韻 9 卷】／山何 [あきのいろ]
／文安 4(1447) 年 9 月 6 日

わかなみたーいくへのいろをーからころも
あきはむしなくーよもきふのやと

【成立不詳・宗砌以前 6 卷】／何人 [みつ
たまり]／成立時不詳

すみのころもで
墨の衣手

→形見

ころをそめよーすみのころもで
そのままのーふてのあとこそーかたみなれ

【文和千句】／何物 [さみたれは]／文和 5
年

やつれいとはしーすみのころもで
わかれてのーなみたたにこそーかたみなれ

【弘治年間百韻 8 卷】／何人 [ときはなる]
／弘治 3(1557) 年 8 月 28 日

たつひのなつころも
たつ日の夏衣

→山時鳥

つゆそおくーたちていくかのーなつころも
たひにはつれよーやまほととときす

【池田千句】／何路 [はなはしるや]／永
正 7(1510) 年春以前<永正 5 年春>

なつころもーたちかふるひかすーほともなし
うへなくときかーやまほととときす

【大永年間百韻14巻】／名号 [なつころも]／大永8(1528)年4月12日

たびごろも
旅衣

→野は遙か^{のははるか}

たひころもーたちやすらはむーかけもなし
のるこまなつむーのははるかなり

【天文年間百韻38巻】／何路 [ひとこゑや]／天文14(1545)年5月8日

たひころもーひもなかあめのーそほふりて
かすみわけこしーのははるかなり

【天和年間百韻2巻】／□□ [おいかみに]／天和2(1682)年4月3日

たびのころもで
旅の衣手

→里もない^{きともない}

しくれそぬるーたひのころもて
めにかけてーいそくこかくれーさともなし

【聖廟千句】／山何 [ぬるとりの]／明応3(1494)年2月10日～12日

つゆけささそなーたひのころもて
やとるへきーのはくれそめてーさともなし

【明応年間百韻22巻】／何人 [ふきすてよ]／明応7(1498)年間10月6日

ごと

きょうごと
今日毎

→入相の鐘^{いりあひのかね}

けふことのーゆふへやはるをーさそふらむ
さつつきなるーいりあひのかね

【紫野千句】／何人 [しけるきの]／延文2(1357)年以後-応安3年6月以前

けふことのーしくれやあきをーおくるらむ
みにしむころのーいりあひのかね

【永正十花千句】／何袋 [つきをゆき]／永正13(1516)年3月11日～14日

はなのはるごと
花の春毎

→鶯の声^{うぐいすのこゑ}

うゑおきてーまたるるはなのーはることに
わかやととはぬーうくひすのこゑ

【聖廟千句】／初何 [きのふより]／明応3(1494)年2月10日～12日

ほともなくーうつろふはなのーはることに
みをあくからすーうくひすのこゑ

【那智筆／北野天満宮本】／永正十四年／

ものごと
物毎

→春秋の空^{はるあきのそら}

ものことにーこころのとまるーとしたけて
ゆくすゑいかにーはるあきのそら

【三島千句】／何船 [とりのねは]／文明3(1471)年3月21日～23日

ものことにーみやこをこふるーかたみなか
おくるもつらしーはるあきのそら

【文明年間百韻34巻】／□□ [ゆきのかけ]／文明5(1473)年12月5日

さえずる

とりがさえずる
鳥が囀る

→返し置く^{かえし置く}

いまをはるとやーとりのさへつる
かへしおくーなはしろをたにーひととはなし

【文明十四年万句52巻】／何船 [あきのいろ]／文明14(1482)年7月4日～9月14日

とりのさへつるーのへのあさあけ
かへしおくーたつらにたみのーかけもなし

【文明十四年万句52巻】／玉何 [ゆきならは]／文明14(1482)年7月4日～9月14日

とりのさえずり
鳥の囀り

→霞^{かすみ}

ふるすわかなくーとりのさへつり
かすみこそーきみかめくみのーそらならめ

【天文十八年梅千句】／何袋 [かそうめを]／天文18(1549)年正月11日

あつまりきぬる一とりのさへつり
かすみこそ一ひろきめくりの—まかきなれ

【天正年間百韻57巻】／□□ [いるそて
に] / 天正 18(1590) 年 1 月 7 日

たにのとのうぐいす
→谷の戸の鶯

ふるすなからや一とりのさへつり
うくひすの—くるとしつくる—たにの—toに

【寛文年間百韻22巻】／□□ [しらきく
の] / 寛文 11(1671) 年 9 月 29 日

はるのしるへの—とりのさへつり
たにの—toに—のころうくひす—なつかけて

【天正四年万句70巻】／何番 [いろそふ
や] / 天正 4(1576) 年 5 月 6 日～7 月 19 日

ひのかげ
→日の影

こゑつむけなる—とりのさへつり
ひのかげの—めくるもうとき—たにかくれ

【元和年間百韻24巻】／□□ [あさなあ
さな] / 元和 8(1622) 年 2 月 29 日

きくもたへなる—とりのさへつり
ひのかげの—うつるかきほは—うららかに

【寛永年間百韻15巻】／□□ [あさひか
け] / 裏白 / 寛永 11(1634) 年 1 月 3 日

さえる

つきさえる
月冴える

ちどりなくこえ
→千鳥鳴く声

おほそらに—こよひみちたる—つきさえて
ゆふしほさひし—ちとりなくこゑ

【出陣千句】／薄何 [ちきりきや] / 永正
元 (1504) 年 10 月 25 日～27 日

かはみつの—ともにこほれる—つきさえて
よふねにきくは—ちとりなくこゑ

【至徳以前百韻7巻】／何木 [かみかきの]
／至徳 4(1387) 年以前

さかずき

よるくむさかずき
夜汲む杯

つきのもと
→月の下

よさむわすれて—くめるさかつき
もろともに—ななめあかせる—つきのもと

【毛利千句】／初何 [よとともに] / 文禄
3(1594) 年 5 月 12 日～16 日

よるはずからに—くめるさかつき
あくるをも—しらてともなふ—つきのもと

【平松文庫本千句】／□□ [ふくるよの]
／

さかり

はなざかり
花盛り

うぐいすのこえ
→鶯の声

うちむれて—ひとのなかむる—はなざかり
いつくのさとそ—うくひすのこゑ

【聖廟千句】／何人 [つきならし] / 明応
3(1494) 年 2 月 10 日～12 日

おくやまと—いへともあらぬ—はなざかり
ひとにけちかき—うくひすのこゑ

【文龜年間百韻4巻】／千何 [うつろはぬ]
／文龜 3(1503) 年 7 月 25 日

をしめとも—さきみたれたる—はなざかり
こすゑにたかき—うくひすのこゑ

【文明十四年万句52巻】／山何 [つゆや
けさ] / 文明 14(1482) 年 7 月 4 日～9 月
14 日

かかふるなみ
→掛かる藤浪

さきそひて—まつこそみえね—はなざかり
よそのこすゑに—かかふるなみ

【看聞日記紙背50巻】／何人 [うめのな
の] / 応永 30(1423) 年 5 月 27 日

たておくも—ううるもにはの—はなざかり
いはかきつつき—かかふるなみ

【永禄年間百韻28巻】／何路 [のこりな
く] / 永禄 3(1560) 年 11 月 10 日

はるのすきむら
→春の杉群

くももきをうつつむはかりのーはなさかり
せきのとあくるーはるのすきむら

【弘治三年春雪千句】／初何 [けさみれは]
／弘治 3(1557) 年正月 7 日～9 日

いはかねのーこけにこたかきーはなさかり
かたはらさひしーはるのすきむら

【壁草／大阪天満宮文庫本】／春／永正
2(1505) 年 8 月 23 日以後同 3 年 3 月以前

さく

うめさく
梅咲く

うぐいすのこえ
→鶯の声

いつはともーわかきにまちしーうめさきて
ほのかにきぬるーうくひすのこゑ

【大永四年月並千二百韻】／□□ [ゆふた
ちは] ／月並千二百韻／大永 4(1524) 年 6
月 23 日

わかなつむーのをなつかしみーうめさきて
ふりにしあとにーうくひすのこゑ

【成立不詳・宗養以前 8 巻】／山何 [ひと
こゑや] ／成立時不詳

さくはるのはな
咲く春の花

まくらとやどのうめのえだ
→桜と宿の梅の枝

ちれはさくーちきりもはかなーはるのはな
さくらにかはすーやとのうめかえ

【大永四年月並千二百韻】／□□ [けふひ
くや] ／月並千二百韻／大永 4(1524) 年 5
月 23 日

さくこともーちらむためかはーはるのはな
さくらほのめくーやとのうめかえ

【園塵第三／統群書類従本】／春／文亀元
(1501) 年 3 月 18 日

さくらさく
桜咲く

はるさめのそら
→春雨の空

さくらさくーこすゑのくもをーふくかせに
ほのくれわたるーはるさめのそら

【成立不詳・宗祇以前 1 5 巻】／何船 [き
りのはに] ／成立時不詳

さくらさくーこのまのゆふひーかすかにて
けふはれけりなーはるさめのそら

【宗長関係 8 種】／老耳／天理本／

さくらさくころ
桜咲く頃

かすむ
→霞む

をちこちかけてーさくらさくころ
もろこしのーよしのもはるやーかすむらむ

【皇学館文庫本千句】／□□ [いろみえて]
／永禄 6(1563) 年 11 月 18 日以前

よはみなそらをーさくらさくころ
あさなあさなーうすくもるひやーかすむらむ

【永正年間百韻 3 4 巻】／何船 [かへるか
り] ／永正 16(1519) 年 2 月 19 日

はなさく
花咲く

うすがすみ
→薄霞

やへくもとーみゆるよかはのーはなさきて
うすきがすみはーつきそすみよき

【宝徳年間百韻 3 巻】／以呂波 [いをねぬ
や] ／宝徳 3(1451) 年 8 月 15 日

おくやまもーよそめしけきのーはなさきて
うすきがすみはーたつとしもなし

【文明十二年千句 8 巻】／一字露頭 [わか
はもて] ／文明 12(1480) 年 4 月 10 日～
* 日

うぐいすがなく
→鶯が鳴く

くれたけのーはやしつつきにーはなさきて
ねくらさためすーうくひすそなく

【延徳年間百韻 1 6 巻】／何路 [かすみさ
へ] ／延徳 4(1492) 年 1 月 22 日

はるやまのーみねのいほりにーはなさきて
たにをわかよとーうくひすそなく

【宗叟関係 9 種】／宗叟発句並付句抜書／
小松天満宮本／

まつにふじのたすがれ
→松に藤の黄昏

はなさけは—やまのなかはも—なみこえて
まつのかすゑの—ふちのたそかれ

【毛利千句】／一字露頭 [なつのひも] /
文禄 3(1594) 年 5 月 12 日～16 日

はなさけは—このまにうとき—はるのつき
まつにかかれる—ふちのたそかれ

【天文年間百韻 3 8 卷】／夢想 [ちりてな
ほ] / 天文 10(1541) 年 3 月

さくら

おそざくら
遅桜

まつのかじなみ
→松の藤浪

したふとや—さきかへるはなの—おそざくら
なつをかけたる—まつのふちなみ

【浅間千句】／何木 [したふとや] / 永正
11(1514) 年 5 月 13 日～19 日

やよやよひ—のこるもひさし—おそざくら
はるちよかけよ—まつのふちなみ

【看聞日記紙背 5 0 卷】／山何 [やよやよ
ひ] / 応永 31(1424) 年 3 月 18 日

おそざくら—なほこたかくて—はもあをし
はなまちえたる—まつのふちなみ

【文安年間百韻 1 卷】／夢想 [おそざくら]
/ 文安 2(1445) 年 3 月 18 日

さくらさく
桜咲く

はるさめのそら
→春雨の空

さくらさく—こすゑのくもを—ふくかせに
ほのくれわたる—はるさめのそら

【成立不詳・宗祇以前 1 5 卷】／何船 [き
りのはに] / 成立時不詳

さくらさく—このまのゆふひ—かすかにて
けふはれけりな—はるさめのそら

【宗長関係 8 種】／老耳 / 天理本 /

さくらさくころ
桜咲く頃

かすむ
→霞む

をちこちかけて—さくらさくころ
もろこしの—よしのもはるや—かすむらむ

【皇学館文庫本千句】／□□ [いろみえて]
/ 永禄 6(1563) 年 11 月 18 日以前

よはみなそらを—さくらさくころ
あさなあさな—うすくもるひや—かすむらむ

【永正年間百韻 3 4 卷】／何船 [かへるか
り] / 永正 16(1519) 年 2 月 19 日

さくらちるかけ
桜散る陰

はるながら
→春ながら

なこりもとめす—さくらちるかけ
はるなから—いはなみはやき—よしのかは

【永正年間百韻 3 4 卷】／何人 [つきはな
を] / 永正 2(1505) 年 9 月 13 日

ひはらさひしく—さくらちるかけ
はるなから—なほふるゆきの—さえさえて

【天正四年万句 7 0 卷】／夕何 [はるさめ
に] / 天正 4(1576) 年 5 月 6 日～7 月 19 日

さくらのうえ
桜の上

かねなる
→鐘鳴る

さくらかうへの—やまのはのつき
はるふかき—ふもとのさとに—かねなりて

【三島千句】／初何 [うつろふか] / 文明
3(1471) 年 3 月 21 日～23 日

さくらかうへの—あけほののいろ
かすみより—よしののみたけ—かねなりて

【応仁年間百韻 6 卷】／何人 [つきのあき]
/ 応仁 2(1468) 年 1 月 1 日

さくらのかつらぎのやま
桜の葛城の山

あさかすみ
→朝霞立つ

おくもさくらの—かつらぎのやま
あさかすみ—たつたやとほく—へたつらむ

【毛利千句】／何田 [やまとりも] / 文禄
3(1594) 年 5 月 12 日～16 日

さくらさくなる—かつらぎのやま
あさかすみ—たつたやはなに—なりぬらむ

【園塵第二 / 続群書類従本】／春 / 明応
4(1495) 年早春

やまざくら
山桜

かすむあけほの
→霞む曙

くもとのみーみゆるやとほきーやまさくら
こすゑひとつにかすむあけほの

【因幡千句】／何人〔みるたひに〕／文明

7(1475)年11月26日<~28日>

のこるともーのちはあらしのーやまさくら
つきをもをしめーかすむあけほの

【成立不詳・宗祇以前15巻】／何船〔き
りのはに〕／成立時不詳

はるのまつのはる
→春の松の枝

をりそへてーつまきにまじるーやまさくら
みとりたちそふーはるのまつかえ

【看聞日記紙背50巻】／何路〔まつころ
の〕／応永32(1425)年10月15日

たかこころーやすらふいそのーやまさくら
をのへしつけきーはるのまつかえ

【成立不詳・心敬以前14巻】／何路〔こ
ころあらは〕／存疑／成立時不詳

ゆくすゑのはる
→行く末の春

もみちさへーもろくうつろふーやまさくら
たのむもはかなーゆくすゑのはる

【難波田千句】／□□〔みつのおもに〕／
文明14(1482)年10月前後

みやまにやーさきもならひしーやまさくら
はなのさかりのーゆくすゑのはる

【永正十花千句】／何路〔みやまにや〕／
永正13(1516)年3月11日~14日

さけぶ

さるさけぶこえ
猿叫ぶ声

あきまひ
→秋寒い

つきはさやかにーさるさけぶこゑ
あきさむきーいりえのふねにーめはさめて

【美濃千句】／山何〔けふみすは〕／文明
4(1473)年12月16日~21日

やまかけふかくーさるさけぶこゑ
あきさむきーみねのしひしはーふきかせに

【那智筆／北野天満宮本】／永正十二年／

さす

つきさしいでる
月差し出る

あきかぜ
→秋風

つきさしいつるーふねのしらなみ
あきかせにーあまのいさりひーよるきえて

【葉守千句】／薄何〔いはほにも〕／長享
元(1487)年10月9日<~11日>

つきさしいつるーをちかたのやま
あきかせにーしのひゆくよはーやすからて

【延徳年間百韻16巻】／初何〔さけはさ
く〕／千句第三／延徳4(1492)年3月3日

さそう

さそう
誘う

こころうかれる
→心浮かれる

つきさうきーひとをいそくにーさそふらむ
こころうかるるーやまさとのあき

【文明年間百韻34巻】／何木〔きのふよ
り〕／文明6(1474)年1月5日

ゆくみつのーみをいつくとかーさそふらむ
こころうかるるーくれことのそら

【延徳年間百韻16巻】／何人〔まつみよ
と〕／延徳4(1492)年2月8日

みちのかたがた
→道の方々

あらかりしーあめやあくたをーさそふらむ
はらひきよむるーみちのかたかた

【天正年間百韻57巻】／何木〔けふかへ
よ〕／天正9(1581)年4月1日

くさかりやーこころこころにーさそふらむ
かのをかこえのーみちのかたかた

【文禄年間百韻12巻】／□□〔うめさき
て〕／文禄2(1593)年2月12日

さそわれる
誘われる

つきのゆくすゑ
→月の行く末

さそはれてーかりかねかへるーあまのはら
かけもはるかにーつきのゆくすゑ

【紹巴亡父追善千句】／玉何〔はるよたた〕
／天文 24(1555) 年 3 月 26 日～晦日

うくひすの一こゑにまくらを一さそはれて
かすみにあくる一つきのゆくすゑ

【天正年間百韻 5 7 巻】／□□〔すたれま
け〕／天正 15(1587) 年 1 月 10 日

みづのうきくさ
→水の浮草

したはちる一やなきはなみに一さそはれて
たたよひいつる一みつのうきくさ

【毛利千句】／初何〔よとともに〕／文禄
3(1594) 年 5 月 12 日～16 日

さそはれて一けふやみやこに一いてぬらむ
あやめにまじる一みつのうきくさ

【園塵第二／統群書類従本】／夏／明応
4(1495) 年早春

さだめる

かたもさだめない
方も定めない

しるべ
→標

ふきかふかせは一かたもさためす
とふほたる一つきなきやみを一しるへにて

【嘉吉年間百韻 1 巻】／何木〔たけのはに〕
／嘉吉 3(1443) 年 10 月 23 日

おくるるふねは一かたもさためす
もしほたく一うらはほかけを一しるへにて

【享徳年間百韻 4 巻】／何路〔さくふちの〕
／享徳 2(1453) 年 3 月 15 日

さだめない
定めない

かわるよのなか
→変わる世の中

さためなき一しくれもをりは一しるものを
ひとのころの一かはるよのなか

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

さためなき一うきよにけふも一すくしきて
ふちせあすかの一かはるよのなか

【名所句集／静嘉堂文庫本】／恋上／(大
永前後)

まくらさだめない
枕定めない

つきをみる
→月を見る

まくらさためぬ一なつのうたたね
うかれめは一おもはぬかたの一つきをみて

【看聞日記紙背 5 0 巻】／片何〔まつはあ
め〕／応永 32(1425) 年 7 月 25 日

まくらさためぬ一あきのさひしさ
うたたねは一つらき□□□□一つきをみて

【成立不詳・心敬以前 1 4 巻】／何木〔ゆ
くみつの〕／成立時不詳

さと

かえるさとびと
帰る里人

かた
→方

をのへをとほみ一かへるさとひと
かねのこゑ一いつくきこえぬ一かたならむ

【出陣千句】／初何〔けふたつや〕／永正
元(1504) 年 10 月 25 日～27 日

ふねひきすてて一かへるさとひと
くれそむる一すゑやふしみの一かたならむ

【元和年間百韻 2 4 巻】／□□〔えそすき
ぬ〕／元和 8(1622) 年 4 月 13 日

かわつらのさと
川面の里

はるか
→遥か

ありともしらぬ一かはつらのさと
はるかにも一ふねよはふよの一こたへして

【永正十花千句】／何田〔はなにこひ〕／
永正 13(1516) 年 3 月 11 日～14 日

きをきるをのの一かはつらのさと
はるかにも一おもひわたせる一はしはしら

【紹巴亡父追善千句】／初何〔たまたれの〕
／天文 24(1555) 年 3 月 26 日～晦日

さとのはるかさ
里の遥かさ

おだのはら
→小田の原

やなきかくれの一さとのはるけさ
すゑはなほ一かへしのこせる一をたのはら

【天正年間百韻 5 7 卷】／□□ [うくひす
も] / 天正 14(1586) 年 1 月 4 日

かすみわけゆく一さとのはるけさ
すきわたし一かへれはくるる一をたのはら

【慶長年間百韻 2 7 卷】／□□ [はるもこ
そ] / 裏白 / 慶長 13(1608) 年 1 月 3 日

さとのひとむら
里の一群

→ ^{くさまくら}草枕

とひよるやとの一さとのひとむら
くさまくら一つきをよすかに一こよひねむ

【文明十二年千句 8 卷】／夢想 [うしとし
の] / 文明 12(1480) 年 4 月 10 日～* 日

うちけふりたる一さとのひとむら
くさまくら一たつきもしらす一あくるのに

【文明十四年万句 5 2 卷】／何船 [みつと
りか] / 文明 14(1482) 年 7 月 4 日～9 月
14 日

さとはなれたみち
里離れた道

→ ^{かさなる}重なる

さとはなれなる一まつかけのみち
おちはなほ一くつるかうへに一かさなりて

【称名院追善千句】／何牆 [さかのやま]
/ 永禄 6(1563) 年 12 月 14 日～18 日

さとはなれなる一みちのたえたえ
かひすつる一まくさはみとり一かさなりて

【文禄年間百韻 1 2 卷】／□□ [わかなつ
みし] / 文禄 2(1593) 年 1 月 8 日

たがさと
誰が里

→ ^{ありあけがた}有明方

うめのはな一たかさとまたか一にほふらむ
ありあけかたの一はるのよのつき

【大永三年月並千三百韻】／□□ [はなに
つき] / 月並千三百韻 / 大永 3(1523) 年 3
月 23 日

たかさとまたか一しくれゆくらむ
かみなつき一ありあけかたの一ねさめして

【大永三年月並千三百韻】／□□ [つゆも
をし] / 月並千三百韻 / 大永 3(1523) 年 9
月 23 日

ちかいやまさと
近い山里

→ ^{おもひやる}思いやる

めさますかねの一ちかきやまさと
おもひやる一みやこのつきに一まくらして

【表佐千句】／何衣 [よるやあめ] / 文明
8(1476) 年 3 月 6 日<～8 日>

ゆきのつまきの一ちかきやまさと
おもひやる一ひなのすまひの一ふゆこもり

【明応年間百韻 2 2 卷】／何人 [ふきすて
よ] / 明応 7(1498) 年閏 10 月 6 日

はるのやまさと
春の山里

→ ^{うぐいす}鶯

さくらのことを一はるのやまさと
うくひすの一こゑはかすみの一のきはにて

【太神宮法楽千句】／玉何 [あきとほし]
/ 長享 2(1488) 年 7 月

やかてもとへや一はるのやまさと
うくひすの一ふるすのたにの一ゆききえて

【東山千句】／何路 [のわきせし] / 永正
15(1518) 年 8 月 10 日～12 日

やまざと
山里

→ ^{あかつきのあめ}暁の雨

やまざとの一はるをさひしく一なしはてて
かすめるかねに一あかつきのあめ

【長享年間百韻 6 卷】／何路 [さみたれは]
/ 長享 3(1489) 年 5 月 11 日

やまざとの一かせひややかに一めはさめて
はなによふかき一あかつきのあめ

【合点之句 / 神宮文庫本】／春 / 天文
9(1541) 年 12 月 25 日

やまもとのさと
山本の里

→ ^{かけはし}掛橋

なかはかすみの一やまもとのさと
かけはしは一のきはのみねに一よこたはり

【池田千句】／何船【おそくとく】／永正
7(1510)年春以前<永正5年春>

いつくなるらむ一やまもとのさと
かけはしは一ふむあともなく一くちはてて

【慶長年間百韻27巻】／□□【つゆにみ
を】／慶長9(1604)年6月28日

さびしい

あきのさびしさ
秋の寂しさ

→朝霧

ふるきみきりの一あきのさひしさ
あさきりに一のわきのこすゑ一うちしをれ

【延徳年間百韻16巻】／山何【ふきもこ
ぬ】／延徳2(1490)年9月20日

みつもかれのの一あきのさひしさ
やまかつの一まへゆくさはの一あさきりに

【天文年間百韻38巻】／何人【つきによ
る】／天文5(1536)年6月15日

→霧の内

まつをとりの一あきのさひしさ
ゆふまくれ一さとなきやまの一きりのうち

【太神宮法楽千句】／薄何【まきのはや】
／長享2(1488)年7月

なにはあたりの一あきのさひしさ
いりあひの一こゑさへしめる一きりのうち

【元和年間百韻24巻】／□□【はなにな
して】／元和8(1622)年3月19日

→夕まぐれ

わかものかほの一あきのさひしさ
たれもこそ一なかめわふらめ一ゆふまくれ

【熊野千句】／何路【かさなるや】／文正
元(1466)年3月以前

まつをとりの一あきのさひしさ
ゆふまくれ一さとなきやまの一きりのうち

【太神宮法楽千句】／薄何【まきのはや】
／長享2(1488)年7月

つきのさびしさ
月の寂しさ

→映る

ほのかにすめる一つきのさひしさ
あきのよも一いくねさめにか一うつらむ

【大永四年月並千二百韻】／□□【へたつ
なよ】／月並千二百韻／大永4(1524)年3
月23日

□もきにまじる一つきのさひしさ
まつむしの一なくねにさよ一うつらむ

【天正四年万句70巻】／何木【さくはな
の】／天正4(1576)年5月6日～7月19日

→秋の空

あかつきちかき一つきのさひしさ
あきのそら一くもはいつくに一わかるらむ

【文明年間百韻34巻】／何船【ことのは
の】／文明8(1476)年4月23日

すみたかはらの一つきのさひしさ
あきのそら一ひとりかもねむ一よはもうし

【那智筆／北野天満宮本】／永正十三年／

なおさびしい
なお寂しい

→山のおく

かせのおとこそ一なほさひしけれ
あさちふの一やとりにかはる一やまのおく

【因幡千句】／初何【ゆきはなほ】／文明
7(1475)年11月26日<～28日>

まつひとりこそ一なほさひしけれ
すまれむと一おもひしことよ一やまのおく

【聖廟千句】／二字返音【よにひととき】／
明応3(1494)年2月10日～12日

なごりさびしい
名残り寂しい

→冬籠り

なごりさひしき一とりのひとこゑ
はるきても一つれなきはなの一ふゆこもり

【伊予千句】／山何【やとりとへ】／天文
6(1537)年5月22日

かれののはらこそ一なごりさひしき
くさのとを一すむかけにする一ふゆこもり

【明応年間百韻22巻】／何人〔としにあ
りて〕／明応9(1500)年7月7日

はるのさびしさ
春の寂しさ

はなまきく
→花咲く

やとからなれやーはるのさびしさ
にはうつむーこけにひともとーはなさきて

【宗祇関係2種】／心敬専順点宗祇付句／

あめふりすさふーはるのさびしさ
やまふかみーくもゆくみねのーはなさきて

【宗長関係8種】／老耳／天理本／

みづかげのさびしさ
水影の寂しさ

かえる
→帰る

かはへのみつのーかけのさびしさ
うちむれてーみそきせしもやーかへるらむ

【天文年間百韻38巻】／x x〔したみつ
も〕／天文24(1555)年9月2日

いたゐのしみつーかけのさびしさ
ゆふくれやーすすみしひともーかへるらむ

【宗長関係8種】／老耳／天理本／

ものさびしい
物寂しい

こえがきこえる
→声が聞こえる

つねならぬーとしひのかけーものさびし
のりのふみよむーこゑそきこゆる

【浜宮千句】／□□〔くれかたき〕／

ねられすよーあまよのこころーものさびし
なくふくろふのーこゑそきこゆる

【長祿三年千句11巻】／何田〔まつちる
や〕／長祿3(1459)年12月2日～5日

さみだれ

さみだれ
五月雨

なくほととぎす
→鳴く時鳥

たまほこのーみちやすからぬーさみたれに
なくほととぎすーなにとすくらむ

【延徳年間百韻16巻】／何人〔まつみよ
と〕／延徳4(1492)年2月8日

さみたれにーかけひのみつはーおともなし
のきはをちかみーなくほととぎす

【天正四年万句70巻】／何鳥〔さみたれ
に〕／天正4(1576)年5月6日～7月19日

くもになくほととぎす
→雲に鳴く時鳥

さみたれのーはれましられてーうちいてて
くもゐるかたやーなくほととぎす

【宗長追善千句】／夕何〔はるのひに〕／
(享祿5) 天文元(1532)年3月25日

さみたれのーふらすはつきのーころそかし
くもくらしとやーなくほととぎす

【諸尊法紙背3巻】／旧何〔あきまてと〕
／建武4(1337)年6月29日

やまほととぎす
→山時鳥

さみたれのーつゆにうもるるーくさのいほ
いててやきかむーやまほととぎす

【熊野千句】／山何〔おとなしの〕／正文
元(1466)年3月以前

さみたれのーふるののねさめーおもひやれ
わかさとうときーやまほととぎす

【成立不詳・宗砌以前6巻】／何人〔みつ
たまり〕／成立時不詳

さみだれのあと
五月雨の後

のきぼかたむく
→軒端傾く

なみはなきぬるーさみたれのあと
あしのやのーのきはまはらにーかたふきて

【寛永年間百韻15巻】／□□〔しつけさ
の〕／裏白／寛永10(1633)年1月3日

あやめなかるるーさみたれのあと
ふるさとのーのきはにはまてーかたふきて

【園塵第二／統群書類従本】／雑／明応
4(1495)年早春

さみだれのうち
五月雨の内

ほととぎす
→時鳥

かけはしいつこーさみたれのうち
ひとこゑはーくもとわたるーほととぎす

【永禄年間百韻28巻】／何船 [あととふを]／永禄3(1560)年11月9日

とふひとまれのーさみたれのうち
ゆめにしもーおとつれてなけーほととぎす

【文禄二年千句10巻】／何船 [あめかし]／文禄2(1593)年4月8日～10日

さみだれのころ
五月雨の頃

→^{たにうえを}田に植えやらない

なにはわたりのーさみたれのころ
ひとかたはーひろきたのもをーうゑやらて

【毛利千句】／初何 [よとともに]／文禄3(1594)年5月12日～16日

みきはまされるーさみたれのころ
すゑとほきーさとのふかたはーうゑやらて

【寛永年間百韻15巻】／□□ [ゆきとけ]／裏白／寛永3(1626)年1月3日

→^{ほととぎす}時鳥

おほみもわかぬーさみたれのころ
ほととぎすーおとはのみねをーこえすてて

【浅間千句】／何人 [すすしさを]／永正11(1514)年5月13日～19日

うらのとまやのーさみたれのころ
ほととぎすーおのかなのりそーかすかにて

【宗長追善千句】／何色 [うくひすの]／(享禄5)天文元(1532)年3月25日

ふるきのきはのーさみたれのころ
ほととぎすーわすれはくさのーなもつらし

【長享年間百韻6巻】／何木 [わかみつの]／長享2(1488)年1月1日

→^{ねざめのほととぎす}寝覚めの時鳥

いもせのかはのーさみたれのころ
ねさめしてーわれもたひよそーほととぎす

【文明十四年万句52巻】／何人 [よにひろく]／文明14(1482)年7月4日～9月14日

つれつれのみーさみたれのころ
ねさめしてーきくはむかしのーほととぎす

【天正四年万句70巻】／何風 [ふちなみに]／天正4(1576)年5月6日～7月19日

さみだれのつゆ
五月雨の露

→^{ほととぎす}時鳥

こほるるあともーさみたれのつゆ
なきかはすーなみたやしけきーほととぎす

【元龜二年千句】／何木 [たきなみの]／元龜2(1571)年3月5日

もすそもそてもーさみたれのつゆ
ほととぎすーこゑまつやまのーかけにきて

【成立不詳・心敬以前14巻】／何船 [まつやしる]／成立時不詳

さむい

あきさむい
秋寒い

→^{うつあきころも}打つ麻衣

うらかれのーささのいほりのーあきさむみ
たえやらすしもーうつあきころも

【五吟一日千句】／何垣 [つきもなほ]／天正9(1581)年11月19日

ねさめするーくさのいほりのーあきさむみ
つきのよるよるーうつあきころも

【元和年間百韻24巻】／□□ [やつかほの]／元和6(1620)年8月23日

こえのさむさ
声の寒さ

→^{あきのかぜ}秋の風

とわたるかりのーこゑのさむけさ
ふけにけりーしもよのつきにーあきのかせ

【明応年間百韻22巻】／何人 [たまたれ]／明応5(1496)年6月7日

あさはむとりのーこゑのさむけさ
ぬさちらしーたひたつせきのーあきのかせ

【心敬関係10種】／芝草内連歌合／松平文庫本／

さむいひ
寒い日

→^{たびのころもて}旅の衣手

このねぬる一あさなあさなの一さむきひに
かさねまほしき一たひのころもて

【浅間千句】／薄何〔ほととぎす〕／永正
11(1514)年5月13日～19日

さむきひに一かはてやこまの一なつむらむ
あらしをしのか一たひのころもて

【寛文年間百韻22巻】／□□〔なれてこ
し〕／寛文10(1670)年2月27日

ややさむいそで
やや寒い袖

あきのしも
→秋の霜

かりねのゆめも一ややさむきそて
おけはたた一つきにまかへる一あきのしも

【大原野十花千句】／何衣〔つきはなに〕
／元龜2(1571)年2月5日～7日

はまへたとれは一ややさむきそて
つきになほ一まさこちしろき一あきのしも

【延宝年間百韻3巻】／□□〔おいかせの〕
／延宝2(1674)年8月14日

よさむおほえる
夜寒おほえる

からころも
→唐衣

よさむおほゆる一ひとのかたらひ
あはれみて一とはるるなかの一からころも

【嵯峨千句】／何木〔ちへにみし〕／(元
龜4)天正元(1573)年正月9日～11日

よさむおほゆる一かせのたえたえ
をちこちに一うちいてけりな一からころも

【永禄年間百韻28巻】／懷旧〔はつゆき
の〕／永禄6(1563)年11月18日

さめる

ねざめする
寝覚めする

よがながい
→夜が長い

つきもはや一かたふくそらに一ねさめして
こしかたおもふ一よこそなかけれ

【明応年間百韻22巻】／何人〔ふきすて
よ〕／明応7(1498)年閏10月6日

いろいろに一あきはこころの一ねさめして
あらましつくす一よこそなかけれ

【大永年間百韻14巻】／山何〔うめやな
き〕／大永7(1527)年1月19日

ねざめするよ
寝覚めする夜

まくら
→枕

ねさめするよの一うつるたにをし
おときけは一よそのしくれを一まくらにて

【延徳年間百韻16巻】／夢想〔すみよし
の〕／延徳2(1490)年9月

ねさめするよの一さをしかのこゑ
つきにもる一いなはのかせを一まくらにて

【壁草／大阪天満宮文庫本】／秋／永正
2(1505)年8月23日以後同3年3月以前

ゆめさめる
夢覚める

やまかせがふく
→山風が吹く

ものうかる一をののかりねに一ゆめさめて
ふかきよかはの一やまかせそふく

【享徳二年千句】／手何〔なほみよと〕／
享徳2(1453)年8月11日～13日

いにしへの一たたちなしき一ゆめさめて
みはならはしの一やまかせそふく

【大永三年月並千三百韻】／□□〔はると
ふく〕／月並千三百韻／大永3(1523)年1
月23日

さやか

さやか

あきかぜのそら
→秋風の空

ひとはみな一ぬるよのつきの一さやかにて
ひとりそむかふ一あきかぜのそら

【聖廟千句】／何木〔きえぬるか〕／明応
3(1494)年2月10日～12日

しもはらふ一こゑこゑかりの一さやかにて
たつなきわたる一あきかぜのそら

【大永四年月並千二百韻】／□□〔しもや
ひぬ〕／月並千二百韻／大永4(1524)年9
月23日

はるがみえる
→春が見える

こほりとくーいけのかかみはーさやかにて
もちみらるへきーはるはみえけり

【東山千句】／唐何 [つきこよひ] ／永正

15(1518)年8月10日～12日

あまのとやーあくるひかりのーさやかにて
よもにあまねきーはるはみえけり

【永禄年間百韻28巻】／何船 [うたふよ

の] ／永禄5(1563)年12月9日

さやかなほし
さやかな星

もしきのにわ
→百敷の庭

さやかなるーほしやまよひをーてらすらむ
つかさつかさにーもしきには

【石山四吟千句】／青何 [つきやふね] ／

天文24(1555)年8月15日～19日

さやかなるーほしのひかりのーうすくもり
はるあらたまるーもしきには

【慶長年間百韻27巻】／□□ [あらしに

も] ／裏白／慶長5(1600)年1月3日

つきがさやか
月がさやか

きりはれる
→霧晴れる

やまよりほかのーつきそさやけき
やりみつにーまかきとみえしーきりはれて

【因幡千句】／何路 [たけにこゑ] ／文明

7(1475)年11月26日<～28日>

てらすくもみのーつきそさやけき
きりはれてーかすこそみゆれーあまつかり

【応仁年間百韻6巻】／何人 [ときはきを]

／応仁元(1467)年10月17日

つきのさやけき
月のさやけき

あきのかぜ
→秋の風

ときならぬゆきかーつきのさやけき
あきのかせーたけのはすさふーそらふけて

【浅間千句】／何路 [ゆくほたる] ／永正

11(1514)年5月13日～19日

くもよりうへのーつきのさやけき
ひととほりーふきてすくるやーあきのかせ

【天文廿四年梅千句】／花之何 [かみかき
の] ／天文24(1555)年正月7日

いしのおもてもーつきのさやけさ
あけわたるーかかみのみやのーあきのかせ

【大永三年月並千三百韻】／□□ [つゆも

をし] ／月並千三百韻／大永3(1523)年9

月23日

ひややか
→冷ややか

よひよひことのーつきのさやけさ
うたたねのーつゆのかたしきーひややかに

【永正年間百韻34巻】／山何 [とこなつ

に] ／永正15(1518)年4月23日

なみよりいつるーつきのさやけさ
とふほたるーよをまつかけのーひややかに

【永禄年間百韻28巻】／何船 [ふくやい

かに] ／永禄5(1562)年3月7日

きりかへる
→更け更ける

のきにもりいるーつきのさやけさ
いなつまのーかけせしまくらーふけふけて

【天正年間百韻57巻】／何船 [なはしろ

の] ／天正3(1575)年3月8日

いたまもりいるーつきのさやけさ
ゆめをたにーむすはぬよはのーふけふけて

【慶長年間百韻27巻】／□□ [はなちれ

は] ／慶長4(1599)年間3月21日

あきふける
→秋更ける

しつかにむかふーつきのさやけさ
とふひともーはやよもきふにーあきふけて

【新撰菟玖波集／実隆本】／恋下／明応

4(1495)年9月26日

よなかになりぬーつきのさやけさ
なみのおとーいやたかしまのーあきふけて

【壁草／書陵部本】／秋／永正9年

なきそめる
→鳴き初める

きりのうへなるーつきのさやけさ
むしのねもーいまひとしほにーなきそめて

【天正四年万句70巻】／薄何〔やまとほみ〕／天正4(1576)年5月6日～7月19日

なかそらになる一ツきのさやけさ
あきはいま一わさたかりかね一なきそめて

【宗碩関係2種】／宗碩連歌合／静嘉堂文庫本／

つきもさやか
月もさやか

あかつきがた
→ 暁方

はるのよの一つきもさやけき一みねのいほ
あかつきかたの一かせのさひしさ

【天正四年万句70巻】／何馬〔あをやきの〕／天正4(1576)年5月6日～7月19日

しもよそみつの一つきもさやけき
ふねよはふ一あかつきかたの一よとのさと

【竹林抄／新古典文学大系本】／旅／文明8(1476)年5月頃

さよのなかやま

つきのさよのなかやま
月の小夜の中山

あきふける
→ 秋更ける

みるみるつきは一さよのなかやま
たひころも一あらしをそてに一あきふけて

【大永年間百韻14巻】／何人〔ゆきのうちに〕／大永5(1525)年1月25日

つきもなこりの一さよのなかやま
うらかれの一みちのしはくさ一あきふけて

【延宝年間百韻3巻】／□□〔おいかせの〕／延宝2(1674)年8月14日

さる

さるさけぶこえ
猿叫ぶ声

あきさむい
→ 秋寒い

つきはさやかに一さるさけふこゑ
あきさむき一いりえのふねに一めはさめて

【美濃千句】／山何〔けふみすは〕／文明4(1473)年12月16日～21日

やまかけふかく一さるさけふこゑ
あきさむき一みねのしひしは一ふきかせに

【那智庵／北野天満宮本】／永正十二年／

さわ

あきのさわみず
秋の沢水

しぎなく
→ 鳴鳴く

をふねさをさす一あきのさはみつ
やまかけの一とこさたまらぬ一しきなきて

【伊予千句】／何舟〔わきてみむ〕／天文6(1537)年5月22日

しはふかくれの一あきのさはみつ
ゆふまくれ一きりふるつきに一しきなきて

【文安年間百韻9巻】／何人〔なもしらぬ〕／文安4(1447)年8月19日

さわみずのおと
沢水の音

ふねくだすふしみ
→ 舟下す伏見

きけはさむけき一さはみつのおと
ふねくたす一ふしみのつきの一ふくるよに

【竹林抄／新古典文学大系本】／秋／文明8(1476)年5月頃

きけはさむけき一さはみつのおと
ふねくたす一ふしみのつきの一ふくるよに

【心敬関係10種】／心敬僧都百句／岩瀬文庫本／文明7(1475)年4月16日以前

きけはさむけき一さはみつのおと
ふねくたす一ふしみのつきの一ふくるよに

【名所句集／静嘉堂文庫本】／秋／(大永前後)

つきもさひしき一さはみつのおと
ふねくたす一ひともふしみの一えはふけて

【心敬関係10種】／吾妻辺云捨／天理本

しか

おじかなくこえ
牡鹿鳴く声

ねさめればつき
→ 寝覚めれば月

あかつきさひし一をしかなくこゑ
ねさむれは一つきすむあきの一こからしに

【紹巴亡父追善千句】／二字反音〔かけたかき〕／天文24(1555)年3月26日～晦日

かすかなりけり一をしかなくこゑ
ねさむれは一つきはありあけの一まくらにて

【五吟一日千句】／何舟 [はなをさへ] /
天正 9(1581) 年 11 月 19 日

さおじかのこえ
さ牡鹿の声

→如何ばかり

ちしほとこむる一さをしかのこゑ
ささのはの一みやまはおくも一いかはかり

【永正年間百韻 3 4 巻】／経文 [しもにさ
めて] /永正 4(1507) 年 11 月 3 日

さそふかつきに一さをしかのこゑ
おきいてむ一やまのつゆの一いかはかり

【永正年間百韻 3 4 巻】／何人 [すすしさ
や] / 1510(1510) 年 8 月 9 日

→月の小夜更ける

ふもとにくたる一さをしかのこゑ
つきのコる一くもにあらしの一さよふけて

【河越千句】／何船 [やまかせに] /文明
2(1470) 年正月 10~12 日

あとなるみねの一さをしかのこゑ
つきははや一いるさのやまの一さよふけて

【大永三年月並千三百韻】／□□ [こほる
なよ] /月並千三百韻/大永 3(1523) 年 7
月 23 日

→露落ちる

みやまのあきの一さをしかのこゑ
わけまよふ一みちはきりふり一つゆおちて

【石山四吟千句】／何木 [おくつゆの] /
天文 24(1555) 年 8 月 15 日~19 日

かりほにちかき一さをしかのこゑ
もるをたの一いなはしとろに一つゆおちて

【称名寺連歌 3 巻】／x x [つきはあき]
/正慶元 (1332) 年 9 月 13 夜

→なる

わかゆふへまつ一さをしかのこゑ
くもそある一いつよりつきに一なりぬらむ

【文安雪千句】／初何 [ふりしける] /文
安 2(1445) 年 10 月 18 日

ふけゆくつきに一さをしかのこゑ
くさまくら一いくよさむきに一なりぬらむ

【浅間千句】／唐何 [はなといはは] /永
正 11(1514) 年 5 月 13 日~19 日

→野が遠い

をりしりかほの一さをしかのこゑ
かりすてて一ひとものこらぬ一のをとほみ

【出陣千句】／何木 [しもなから] /永正
元 (1504) 年 10 月 25 日~27 日

まちけるよはの一さをしかのこゑ
をたもりの一あかしかねたる一のをとほみ

【天正四年万句 7 0 巻】／何船 [とふとり
の] /天正 4(1576) 年 5 月 6 日~7 月 19 日

→群薄

きりのうちなる一さをしかのこゑ
むらすすき一みたれあひてや一ちりぬらむ

【飯盛千句】／何船 [ありあけや] /永禄
4(1561) 年 5 月 27 日~29 日

ふしとしらるる一さをしかのこゑ
あれわたる一たなかはしけき一むらすすき

【文禄年間百韻 1 2 巻】／□□ [あめのひ
の] /文禄 2(1593) 年 5 月

しが

しがのうらぶね
志賀の浦舟

→神祭

よもあけかたの一しかのうらぶね
かみまつり一もよほすそての一いさなひに

【天文十八年梅千句】／山河 [うめさけは]
/天文 18(1549) 年正月 11 日

なみたにかすむ一しかのうらぶね
たひひとに一あくるやけふの一かみまつり

【行助関係 4 種】／行助連歌/天理本/

しぎ

ういしぎのはねがき
憂い鳴の羽搔き

はかない
→儂い

かそふるもうきーしきのはねかき
あきならてーかよふころのーはかなしや

【元和年間百韻24巻】／□□ [あさなあ
さな] / 元和 8(1622) 年 2 月 29 日

うきはまくらのーしきのはねかき
すむつきにーおとろくゆめはーはかなしや

【寛永年間百韻15巻】／□□ [とよとし
の] / 裏白 / 寛永 20(1643) 年 1 月 3 日

しぎのはねおと
鳴の羽音

あきのしも
→秋の霜

たつかたしるきーしきのはねおと
あかつきにーなりにけらしなーあきのしも

【浜宮千句】／□□ [つきのいと] /

とほさかりぬるーしきのはねおと
よなよなにーつきにふりしくーあきのしも

【慶長年間百韻27巻】／□□ [あとをす
ゑに] / 裏白 / 慶長 15(1610) 年 1 月 3 日

しぎのはねがき
鳴の羽搔き

ひとついお
→一つ庵

あはれなそへそーしきのはねかき
すむもたたーちかきのさはのーひとついほ

【五吟一日千句】／三字中略 [くらさぬ]
/ 天正 9(1581) 年 11 月 19 日

みにしめてゆくーしきのはねかき
はかなきはーかれののすゑのーひとついほ

【永正年間百韻34巻】／何路 [あきにか
せ] / 永正 8(1511) 年 7 月 14 日

しく

しきわぶ
敷き侘ぶ

はらうころもでのつゆ
→払う衣手の露

しきわひてーつきにいくよのーかりまくら
はらひつくさぬーころもでのつゆ

【天正年間百韻57巻】／何船 [なはしろ
の] / 天正 3(1575) 年 3 月 8 日

ちりつもるーあきのさむしろーしきわひて
いつかはらはむーころもでのつゆ

【文明十五年千句11巻】／三字中略 [か
たいとを] / 文明 15(1483) 年 * 月 * 日 ~
3 月 2 日

しぐれ

あきしぐれ
秋時雨

いろづく
→色付く

あきのしぐれはーぬるるまもなし
よなよなのーつきのこすゑはーいろつきて

【太神宮法楽千句】／何木 [いつめし]
/ 長享 2(1488) 年 7 月

あきのしぐれはーたけのはのおと
しつかすむーかきほのまくすーいろつきて

【称名院追善千句】／初何 [したふなよ]
/ 永禄 6(1563) 年 12 月 14 日 ~ 18 日

あきにしぐれる
秋に時雨れる

かぜにつゆがこぼれる
→風に露が零れる

あきのそらーたかあかつきもーしくるらむ
のきはのかせにーつゆそこほるる

【文安雪千句】／花之何 [ゆきふれは] /
文安 2(1445) 年 10 月 18 日

あきさむきーはれてもまたやーしくるらむ
かせのたひたひーつゆそこほるる

【天文廿四年梅千句】／何袋 [ふたあみの]
/ 天文 24(1555) 年 正月 7 日

しぐれる
時雨れる

おもふふるさと
→思う故里

つゆやなほーくさのまくらにーしくるらむ
たひなるひとをーおもふふるさと

【長享年間百韻6巻】／x x [やまのはの]
/ 長享 3(1489) 年 8 月 2 日

なかめやるーそらよりあきやーしくるらむ
はつかりかねにーおもふふるさと

【永禄年間百韻28巻】／山河〔かきつは
た〕／永禄10(1567)年4月28日

つゆしぐれのくさ
露時雨の草

わたるかりかね
→渡る雁

つゆしくれーよものくさきのーいろつきで
たのみにちかくーわたるかりかね

【看聞日記紙背50巻】／片何〔しくれて
も〕／応永26(1419)年9月25日

つゆしくれーききのしたくさーそめわけて
たたひととほりーわたるかりかね

【看聞日記紙背50巻】／山河〔とよとし
を〕／応永32(1426)年12月6日

ひとしぐれ
一時雨

このはちるおと
→木の葉散る音

ゆめよりはーあとあるさよのーひとしくれ
ことしもいまはーこのはちるおと

【秋津洲千句】／一字露頭〔わかほより〕
／天文15(1546)年8月25日

ふるもたたーかせのまかひのーひとしくれ
まくらのうへはーこのはちるおと

【弘治三年春雪千句】／何衣〔なくきしの〕
／弘治3(1557)年正月7日～9日

ゆうしぐれ
夕時雨

くものむらむら
→雲の群々

きほふかとーおもへはよそのーゆふしくれ
はれてもさむきーくものむらむら

【天文廿四年梅千句】／二字反音〔くれな
ゐの〕／天文24(1555)年正月7日

はるるかどーみれはあとよりーゆふしくれ
こすゑにのこるーくものむらむら

【紹巴亡父追善千句】／何船〔すみそめの〕
／天文24(1555)年3月26日～晦日

しげる

しげきむしのね
繁き虫の音

よわのつき
→夜半の月

かへのうちにもーしげきむしのね
みえこしもーゆめとほさかるーよはのつき

【大原野十花千句】／何壙〔かをりきて〕
／元龜2(1571)年2月5日～7日

かせややさむきーしげきむしのね
やとれとはーすみやはあらずーよはのつき

【宗長関係8種】／老耳／天理本／

しず

しずのおだまき
賤の苧環

いにしえ
→古

いかにおもひをーしつのをたまき
いにしへのーなみたにまさるーあきはきぬ

【聖廟千句】／初何〔きのふより〕／明応
3(1494)年2月10日～12日

はかなのすちやーしつのをたまき
いにしへのーゆゑうきかみやーみわのすき

【那智籠／北野天満宮本】／永正十四年／
永正14(1517)年冬

しずか

あさけしずか
朝明け静か

たますだけ
→玉簾

あさけしつかにーかせわたるみゆ
ともしひのーかけはよふかきーたますたれ

【大永四年月並千二百韻】／□□〔わけく
らし〕／月並千二百韻／大永4(1524)年7
月23日

あさけしつかにーきぬるうくひす
たますたれーまけはそとのーうちかすみ

【天文年間百韻38巻】／何路〔ほととき
す〕／天文24(1555)年4月10日

あめすぎたあとのしずけさ
雨過ぎた後の静けさ

やまのは
→山の端

あめふりはるるーあとのしつけさ
きえやらてーくもはかせまつーやまのはに

【永原千句】／何船 [はるのそらは] ／明
 応 9(1500) 年 7 月 17 日

さみたれすくるーあとのしつけさ
 くもきえてーつきたちのほるーやまのはに

【下草／金子本】／雑上／延徳 4(1492) 年頃

かぜのしずけさ
 風の静けさ

→^{におう}匂う

ふきまよひゆくーかせのしつけさ
 うめのはなーたかさとまたかーにほふらむ

【大永三年月並千三百韻】／□□ [はなに
 つき] ／月並千三百韻／大永 3(1523) 年 3
 月 23 日

すたれにふるるーかせのしつけさ
 ことのねもーたかころもてにーにほふらむ

【大永三年月並千三百韻】／□□ [あらた
 まの] ／月並千三百韻／大永 3(1523) 年 12
 月 23 日

しずか
 静か

→^{ういてねるかもめ}浮いて寝る鴬

しつかなるーはるのいそきはーふねさして
 うきてかもめのーねむるゆふなみ

【永禄石山千句】／何路 [ときはきも] ／
 永禄 7(1564) 年 5 月 12 日

しつかなるーしかつのあきのーうらのなみ
 うきてかもめのーねむるかたはら

【平松文庫本千句】／□□ [くれてゆく]
 ／

→^{みずのすずしさ}水の涼しさ

しつかなるーゆふへやあきをーふかむらむ
 いはになかるるーみつのすずしさ

【東山千句】／薄何 [つゆをいる] ／永正
 15(1518) 年 8 月 10 日～12 日

しつかなるーなかれをとほみーふねさして
 なかめをうつすーみつのすずしさ

【大永三年月並千三百韻】／□□ [はると
 ふく] ／月並千三百韻／大永 3(1523) 年 1
 月 23 日

→^{あかつきふかき}暁深い

くもかかるーみねのいはやはーしつかにて
 あかつきふかきーさるのひとこゑ

【三島千句】／御何 [はるとほし] ／文明
 3(1471) 年 3 月 21 日～23 日

しのふまにーはやねやのとのーしつかにて
 あかつきふかきーをきのはのつゆ

【石山四吟千句】／初何 [くれてなほ] ／
 天文 24(1555) 年 8 月 15 日～19 日

→^{あけはなれる}明け離れる

かちをたえーつなきしふねのーしつかにて
 あけはなれてもーのちそゆめみる

【永禄年間百韻 2 8 巻】／懐旧 [はつゆき
 の] ／永禄 6(1563) 年 11 月 18 日

おくつゆもーはるのみきりはーしつかにて
 あけはなれてもーかずみぬるそら

【慶長年間百韻 2 7 巻】／□□ [よつのと
 き] ／裏白／慶長 18(1613) 年 1 月 3 日

した

いくえとよらのたけのしたみち
 幾重豊浦の竹の下道

→^{またつきあるゆきのはれる}また月ある雪の晴れる

いくへとよらのーたけのしたみち
 にしにまたーつきあるゆきのーけさはれて

【竹林抄／新古典文学大系本】／冬／文明
 8(1476) 年 5 月頃

いくへとよらのーたけのしたかけ
 あめにまたーつきあるゆきのーよるはれて

【心敬関係 1 0 種】／心玉集／静嘉堂文庫本
 ／

きりのしたみち
 霧の下道

→^{おとがする}音がする

ましろそてみぬーきりのしたみち
 たれとしもーわかすつきまつーおとはして

【伊勢千句】／三字中略 [うめさきて] ／
 大永 2(1522) 年 8 月 4 日～8 日

あふひともなき一きりのしたみち
 さととほき一みやまにたきの一おとはして

【心敬関係10種】／心敬僧都百句／岩瀬
 文庫本／

くさはのこらないゆきのしたおれ
 草は残らない雪の下折

のわきするにわにつき
 →野分する庭に月

くさはのこらぬ一ゆきのしたをれ
 のわきせし一にはのつきかけ一よるさえて

【新撰菟玖波集／実隆本】／秋下／明応
 4(1495)年9月26日

くさはのこらぬ一ゆきのしたをれ
 のわきせし一にはをしつかに一つきふけて

【下草／金子本】／秋／延徳4(1492)年頃

このしたつゆ
 木の下露

ゆうべ
 →夕べ

このしたつゆに一かをるひめゆり
 なつのひは一やまのすそのを一ゆふへにて

【成立不詳・宗叟以前6巻】／唐何〔なて
 しこの〕／成立時不詳

このしたつゆに一くさそふしたる
 みやきのの一あきはしかなく一ゆふへにて

【菟玖波集／広島大学本】／秋下／文和
 5(1356)年3月26日

このもとみち
 木の下道

かたしく
 →片敷く

ゆふへすすしき一このもとのみち
 しつかなる一かせのさゆりは一かたしきて

【宗牧追善千句】／山何〔ちるちらぬ〕／
 永禄4(1561)年9月14日・15日

あくるもしはし一このもとのみち
 さよころも一はなのほひに一かたしきて

【合点之句／神宮文庫本】／春／天文
 9(1541)年12月25日

つきのもと
 月の下

ころもでのつゆ
 →衣手の露

しのひよる一とほそしつけき一つきのもと
 ゆきかへりての一ころもてのつゆ

【紹巴亡父追善千句】／二字反音〔かけた
 かき〕／天文24(1555)年3月26日～晦日

あくるをも一しらてともなふ一つきのもと
 いつのまにかは一ころもてのつゆ

【平松文庫本千句】／□□〔ふくるよの〕

はぎのしたつゆ
 萩の下露

うすぎりのまがき
 →薄霧の籬

うらかれてゆく一はきのしたつゆ
 うすきりの一まかきのこたち一むらむらに

【皇学館文庫本千句】／□□〔はなにいそ
 き〕／永禄6(1563)年11月18日以前

のほるはかりの一はきのしたつゆ
 うすきりの一まかきのゆふへ一いつかみむ

【永正年間百韻34巻】／山何〔まちこし
 や〕／永正12(1515)年11月11日

はなのこのもと
 花の木の下

うぐいす
 →鶯

いそくこころの一はなのこのもと
 うくひすの一はるおとろかす一ねになきて

【羽柴千句】／千何〔あくるよを〕／天正
 6(1578)年5月18・19日

いろにいろそふ一はなのこのもと
 うくひすの一はかせをみるも一のとかにて

【天正四年万句70巻】／夕何〔はるさめ
 に〕／天正4(1576)年5月6日～7月19日

おとがする
 →音がする

たかかへるらむ一はなのこのもと
 ふるさとも一はるのみひとの一おとはして

【聖廟千句】／何田〔のこるひに〕／明応
 3(1494)年2月10日～12日

やまちひくる一はなのこのもと
 さくらちる一みねのあらしの一おとはして

【宗長関係8種】／興津宛／書陵部本／

やまざくら
 →山桜

たちもはなれぬ—はなのこのもと
おもかけに—なほもむかひの—やまさくら

【行助関係4種】／行助連歌／天理本／

しるしらぬあふ—はなのこのもと
やまさくら—さけはみやこを—あくかれて

【壁草／大阪天満宮文庫本】／春／永正
2(1505)年8月23日以後同3年3月以前

もりのしたくさ
森の下草

はなれごま
→放れ駒

うらかれわたる—もりのしたくさ
つなかる—しつかたなれの—はなれごま

【葉守千句】／何路[しくるやと]／長享
元(1487)年10月9日<~11日>

かけふかくなる—もりのしたくさ
たつぬへき—あともなつの—はなれごま

【竹林抄／新古典文学大系本】／夏／文明
8(1476)年5月頃

やまのしたかげ
山の下陰

もよぐあきかせ
→そよぐ秋風

ましはわけゆく—やまのしたかけ
ならのはに—そよきもてくる—あきのかせ

【文安月千句】／何水[つきぬなは]／文
安2(1445)年8月15日

いろにすすしき—やまのしたかけ
うゑしたも—そよきいてたる—あきのかせ

【紹巴亡父追善千句】／何船[すみそめの]
／天文24(1555)年3月26日~晦日

やまのしたみち
山の下道

ほととぎす
→時鳥

むらさめすくる—やまのしたみち
まちてみよ—なかてはあらし—ほととぎす

【文明年間百韻34巻】／何人[ゆきのや
ま]／文明14(1482)年1月16日

とふにならはぬ—やまのしたみち
またときく—たひのゆくての—ほととぎす

【永正年間百韻34巻】／何人[みやまき
に]／永正14(1517)年3月22日

さおしかのこえ
→さ牡鹿の声

そよくたのものは—やまのしたみち
さをしかの—たちとしらるる—こゑすなり

【天正年間百韻57巻】／何路[なみこえ
て]／天正9(1581)年2月3日

きりのあしたの—やまのしたみち
さをしかの—いまひとこゑは—かすかにて

【合点之句／神宮文庫本】／秋／天文
9(1541)年12月25日

しかなぐ
→鹿鳴く

きこりたたすむ—やまのしたみち
くさかりの—ふえにはよらぬ—しかなきて

【親当関係2種】／親当自連歌合／早稲田
大学本／

ゆふきりふかき—やまのしたみち
いりあひの—こゑしつまれば—しかなきて

【基佐集／静嘉堂文庫本】／秋／永正
6(1509)年以前

したう

したわれる
慕われる

かえるかりがね
→帰る雁

このはるも—こそみしはなの—したはれて
をしめやなこり—かへるかりかね

【看聞日記紙背50巻】／何人[まつちか
し]／応永32(1425)年6月25日

むかしより—ひとになこりを—したはれて
おのかこころと—かへるかりかね

【菟玖波集／広島大学本】／春上／文和
5(1356)年冬~翌年の春

したがう

くににしたがう
国に従う

やまとことのは
→大和言の葉

きみかよに—えひすのくにも—したかひて
こころやはらく—やまとことのは

【成立不詳・心敬以前14巻】／何草〔よ
におほふ〕／成立時不詳

くにもたたーみちしあるよりーしたかひて
よろつよまでのーやまとことのは

【天正年間百韻57巻】／x x〔はなさか
り〕／天正6(1578)年3月10日

【永正十花千句】／何船〔ねぬるよを〕／
永正13(1516)年3月11日～14日

よはしののめにーはるのたまくら
わかれてのーきはやはとほきーわするなよ

【永正年間百韻34巻】／何衣〔あひにあ
ひぬ〕／永正10(1513)年2月16日

しな

うたのしな
歌の品々

はなのこのもと
→花の木の下

あはれにもーうたのしなしなーよみかはし
しるもしらぬもーはなのこのもと

【慶長年間百韻27巻】／□□〔はるもこ
そ〕／裏白／慶長13(1608)年1月3日

すちかへすーうたのしなしなーたたならす
いつれとめつるーはなのこのもと

【元和年間百韻24巻】／□□〔さほひめ
や〕／元和6(1620)年1月24日

しの

しのにふるころ
篠にふる頃

ころもがひがたい
→衣が干難い

あしやのゆきのーしのにふるころ
たくひにもーわかころもてはーひかたくて

【文安雪千句】／何田〔あとそある〕／文
安2(1445)年10月18日

ひとむらしくれーしのにふるころ
おりかくるーくものころもはーひかたくて

【初瀬千句】／何水〔うのはなの〕／享徳
元・2(1452)年、4月

しののめ

よはしののめ
夜は東雲

わかれる
→別れる

よはしののめにーしくれてそゆく
わかれてのーそてのけしきをーひともみよ

しのぶ

しのびかねる
忍びかねる

すぎるゆうぐれ
→過ぎる夕暮れ

しのひかねーなとひとなつとーたのむらむ
つれなきにのみーすくるゆふぐれ

【宗牧追善千句】／山河〔ちるちらぬ〕／
永禄4(1561)年9月14日・15日

しのひかねーわれとわかなやーもらすらむ
ほとときすとてーすくるゆふぐれ

【心敬関係10種】／心玉集／静嘉堂文庫本
／

しのぶくさ
忍草

ふるきのきば
→古き軒端

はるあきにーかれてはもゆるーしのふくさ
ふるきのきはのーゆきのむらきえ

【那智筆／北野天満宮本】／永正十四年／

ものおもふーこころひとつのーしのふくさ
ふるきのきはのーあきのさひしき

【宗長関係8種】／老耳／天理本／

しば

しばのいお
柴の庵

いにしへのゆめ
→古の夢

しはのいほーたのむかけとやーたつぬらむ
いとふもしらぬーいにしへのゆめ

【葉守千句】／何路〔しくるやと〕／長享
元(1487)年10月9日～11日

とひくるをーいとふはかりのーしはのいほ
わすれむとするーいにしへのゆめ

【弘治三年春雪千句】／山何〔はなそとも〕
／弘治 3(1557)年正月 7 日～9 日

→^{はなのちるころ}花の散る頃

うしとみは―たれかはとはむ―しはのいほ
まつふくかせに―はなのちるころ

【天文年間百韻 3 8 巻】／何路〔あきよた
た〕／天文 12(1543)年 8 月 19 日

やまかせも―ふかはふかなむ―しはのいほ
ありあけのつきに―はなのちるころ

【宗祇関係 2 種】／心敬専順点宗祇付句／

しほのとのうち
柴の戸の内

→^{おも}思

すめはのとけき―しはのとのうち
ならはしの―みをなとつらく―おもふらむ

【三島千句】／何船〔とりのねは〕／文明
3(1471)年 3 月 21 日～23 日

なほたちかへる―しはのとのうち
みをすては―いつくもとなど―おもふらむ

【園塵第四／早稲田大学本】／雑下／永正
6、7 年

なれるしほびと
なれる柴人

→^{からすとぶ}鳥飛ぶ

ひとりひとりに―なれるしはひと
からすとぶ―いちちのむらに―ひはおちて

【池田千句】／何人〔はるのはな〕／永正
7(1510)年春以前<永正 5 年春>

いりひかくれに―なれるしはひと
からすとぶ―すそののさとの―うすけふり

【永正年間百韻 3 4 巻】／何人〔すすしさ
や〕／永正 7(1510)年 7 月 5 日

しほむ

しほむあきが
萎む朝顔

→^{ひともみる}人も見る

まかきのもとに―しほむあさかほ
あきのひに―にたるあはれを―ひともみよ

【成立不詳・宗長以前 1 5 巻】／□□〔ま
たもなき〕／成立時不詳

あきよりしもに―しほむあさかほ
てなれぬる―あふきのうへを―ひともみよ

【集百句之連歌／天理本】／集百句之連歌
／不明

しみる

かぜがみにしみる
風が身にしみる

→^{あきのそら}秋の空

なみたしくれて―かせそみにしむ
なほさりと―おもふなひとの―あきのそら

【三島千句】／何木〔やまかせに〕／文明
3(1471)年 3 月 21 日～23 日

よふかきやまの―かせそみにしむ
しくれせぬ―ねさめはいかに―あきのそら

【葉守千句】／何木〔あらかりし〕／長享
元(1487)年 10 月 9 日<～11 日>

みにしみる
身にしみる

→^{そでにかける}袖に掛ける

みにしめて―おもふきよみか―いそまくら
なみのおとをも―そてにかけつ

【紹巴亡父追善千句】／何木〔おとろけと〕
／天文 24(1555)年 3 月 26 日～晦日

みにしめて―わすれぬこそは―かたみなれ
ひとのなみたを―そてにかけつ

【永禄元年花千句】／□□〔さそふなよ〕
／永禄元(1558)年 3 月 23 日～25 日

→^{つきさやか}月さやか

ことのねの―あかぬしらへを―みにしめて
おきゐてみれば―つきさやかなり

【飯盛千句】／何木〔かすかのの〕／永禄
4(1561)年 5 月 27 日～29 日

みつのえや―ゆふへのあはれ―みにしめて
よさのみなどの―つきさやかなり

【寛永年間百韻 1 5 巻】／□□〔ふたよあ
けて〕／裏白／寛永 5(1628)年 1 月 3 日

しめる

とこをしめる
所を占める

しずか
→静か

くれてうつらそ—とこをしめたる
ひとかへる—あとのつきかけ—しつかにて

【文明十四年万句5 2巻】／二字反音 [ま
つうきて] / 文明 14(1482) 年 7 月 4 日～
9 月 14 日

いけのかはつそ—とこをしめたる
ひとすまぬ—こやのはるさめ—しつかにて

【萱草/伊地知本】／春/文明 6(1474) 年
2 月以前

しも

きりにしも
霧に霜

つきはいでてもくらい
→月は出でても暗い

きりにしも—こきまよひぬる—ふねのうへ
つきはいてても—くらきやまかけ

【天正年間百韻 5 7 巻】／□□ [ゆふつゆ
も] / 天正 16(1588) 年 8 月 10 日

きりにしも—ゆふへのひかり—へたたりて
つきはいてても—またくらきそら

【寛永年間百韻 1 5 巻】／□□ [ゆきなか
ら] / 裏白/寛永 21(1644) 年 1 月 3 日

しもすさまじいやま
霜凄まじい山

まつあらわれる
→松現れる

しもすさましく—からすなくやま
かはきりに—ふもとのまつは—あらはれて

【葉守千句】／何船 [うゑしうゑは] / 長
享元 (1487) 年 10 月 9 日<~11 日>

しもすさましく—まよふやまもと
けふりより—いろなきまつ—あらはれて

【元和年間百韻 2 4 巻】／□□ [うくひす
の] / 裏白/元和 9(1623) 年 1 月 3 日

しものかたしき
霜の片敷

つきをみる
→月を見る

かせもいとほぬ—しものかたしき
さめすはと—ゆめちふけゆく—つきをみて

【天文廿四年梅千句】／何人 [うめいつく]
/ 天文 24(1555) 年 正月 7 日

おくつゆのみか—しものかたしき
くさまくら—そてにくちゆく—つきをみて

【那智筆/北野天満宮本】／永正十二年/

つきにしも
月に霜

ちかいかりがね
→近い雁

つきにしも—いそきてこゆる—やまたかみ
くもみのいつち—ちかきかりかね

【五吟一日千句】／何路 [いそのなみ] /
天正 9(1581) 年 11 月 19 日

つきにしも—さはたのすゑの—みつおちて
きりのひまより—ちかきかりかね

【慶長年間百韻 2 7 巻】／□□ [うめかか
は] / 裏白/慶長 11(1606) 年 1 月 3 日

ながつきのしも
長月の霜

ありあけ
→有明

あらしはけしき—なかつきのしも
ありあけに—ころもうつよの—そらさえて

【美濃千句】／何心 [つゆにきえ] / 文明
4(1473) 年 12 月 16 日~21 日

かしらそしろき—なかつきのしも
ありあけに—なくやよなかの—やまからす

【宗硯関係 9 種】／宗硯発句並付句抜書/
小松天満宮本/

しらかわのせき

しらかわのせき
白河の関

みちのおく
→道の奥

とほくもきぬる—しらかわのせき
おとにのみ—ききつつけそ—みちのおく

【大永年間百韻 1 4 巻】／何路 [はままつ
の] / 大永 4(1524) 年 5 月 1 日

こえしをしのふ—しらかわのせき
みるふみや—なほつらきめを—みちのおく

【月村抜句／書陵部本】／永正十四年／

こえしをしのふーしらかはのせき
いしふみやーなほつらきめをーみちのおく

【宗碩関係2種】／宗碩連歌合／静嘉堂文
庫本／

しろ

あわれしる
衰れ知る

いしえのあと
→古の後

あはれしれーひとひひとひのーわかよはひ
かへらぬみちやーいにしへのあと

【長享年間百韻6巻】／何路【さみたれは】
／長享3(1489)年5月11日

よはたれもーつひにはのへのーあはれしれ
つくりみかきしーいにしへのあと

【大永三年月並千三百韻】／□□【はなに
つき】／月並千三百韻／大永3(1523)年3
月23日

しろ
知る

なくほととぎす
→鳴く時鳥

すきぬともーみしかきねとはーしるらめや
われこそねにはーなくほととぎす

【伊庭千句】／何船【やまさむみ】／大永
4(1524)年3月17日～21日

ものおもふーわかゆふくれをーしるらめや
なくほととぎすーなくさめてゆけ

【竹林抄／新古典文学大系本】／夏／文明
8(1476)年5月頃

ほどがしられる
程が知られる

いししばかりにあき
→言いしばかりに秋

さひしさをなれぬーほとそしらるる
つきはたたーいひしはかりにーあきくれて

【宗長追善千句】／何色【うくひすの】／
(享祿5)天文元(1532)年3月25日

はるにつれなきーほとそしらるる
このくれとーいひしはかりにーあきかけて

【心敬関係10種】／芝草内連歌合／天理本
／

しろ

おきのしらなみ
沖の白浪

たつたやまのあき
→立田山の秋

かせにまかするーおきつしらなみ
たつたやまーみねのこのはにーあきくれて

【壁草／大阪天満宮文庫本】／秋／永正
2(1505)年8月23日以後同3年3月以前

しくれつはれつーおきつしらなみ
たつたやまーあきふかくなるーほとみえて

【宗長関係8種】／壬生宛／書陵部本／

こしのしらゆき
越の白雪

かえるかりがね
→帰る雁

はるふかきまでーこしのしらゆき
ありあけのーつきもなこりとーかへるかり

【看聞日記紙背50巻】／山何【あつさな
ほ】／応永32(1425)年閏6月25日

きゆるひもなきーこしのしらゆき
かへるかりーいつかたこえてーまたはこむ

【享祿年間百韻8巻】／白何【あさみとり】
／享祿3(1530)年3月2日

しらつゆ
白露

おもかけばかり
→面影ばかり

くれてよりーあふきのいろもーしらつゆに
おもかけはかりーあさかほのはな

【弘治三年春雪千句】／何人【ゆきにうめ】
／弘治3(1557)年正月7日～9日

うつしゑのーつきはくもらぬーしらつゆに
おもかけはかりーのこすいにしへ

【天文年間百韻38巻】／何人【かすむよ
は】／天文23(1554)年3月26日

みねのしらゆき
峰の白雪

のころ
→残る

のはしもかれのーみねのしらゆき
さとふりぬーたかかよひちのーのころらむ

【柴野千句】／何路【あふちさく】／延文
2(1357)年以後-応安3年6月以前

それとはかりのーみねのしらゆき
いつおきてーかれののしもはーのこるらむ

【紫野千句】／山何 [ゆふたちは]／延文
2(1357) 年以後-応安 3 年 6 月以前

ふりそめけりなーみねのしらゆき
まつたかくーしくれのくもやーのこるらむ

【熊野千句】／何色 [なみしけし]／文正
元 (1466) 年 3 月以前

すえ

おやまだのすえ
小山田の末

→^{しもがれ}霜枯れ

かへしすてたるーをやまたのすゑ
しもかれのーくすはにかはるーあきのかせ

【天正年間百韻 5 7 巻】／何船 [もしほく
さ]／天正 7(1579) 年 1 月 13 日

かりのこしぬるーをやまたのすゑ
しもかれのーひとむらすすきーほのかにて

【天正年間百韻 5 8 巻】／□□ [あさなあ
さな]／天正 15(1587) 年 1 月 3 日

たけのすえずえ
竹の末々

→^{かすか}微か

ゆきをれふかきーたけのすゑすゑ
かすかにもーしはけふらせてーひとつもなし

【永祿年間百韻 2 8 巻】／何船 [うたふよ
の]／永祿 5(1563) 年 12 月 9 日

ふくかせしるきーたけのすゑすゑ
かすかにもーみちあるかたやーさとならむ

【文祿年間百韻 1 2 巻】／□□ [はなのい
ろや]／文祿 4(1595) 年 1 月 30 日

ながれのすえ
流れの末

→^{たのものはら}田の面の原

たちさわくーなかれのすゑのーむらちとり
たのものはらのーいりひさむけし

【天正年間百韻 5 7 巻】／何路 [かすむよ
の]／天正 6(1578) 年 2 月 18 日

うろくつはーなかれのすゑのーかたよりに
たのものはらのーひかりさやけし

【元和年間百韻 2 4 巻】／□□ [やつかほ
の]／元和 6(1620) 年 8 月 23 日

みずのすえみえる
水の末見える

→^{暮れるはしのひとすぢ}暮れる橋の一筋

たききとりーみつをむすひしーすゑみえて
やまくれかかるとはしーはしのひとすぢ

【秋津洲千句】／何木 [ひとさかり]／天
文 15(1546) 年 8 月 25 日

こほりとくーみつをつつみのーすゑみえて
たえたえくるるーはしのひとすぢ

【元龜年間百韻 6 巻】／何船 [むさしのも]
／元龜 3(1572) 年 3 月 18 日

みちのすえ
道の末

→^{たちやすらう}立ち安らう

なつころもーはるはるきぬるーみちのすゑ
みつゆくはしにーたちそやすらふ

【天文年間百韻 3 8 巻】／何人 [さくふち
の]／天文 18(1549) 年 3 月 24 日

くれかかるとーものみくるまのーみちのすゑ
やとりさためすーたちそやすらふ

【天正四年万句 7 0 巻】／何鳥 [まつむし
の]／天正 4(1576) 年 5 月 6 日～7 月 19 日

すぎ

すぎのむらだち
杉の群立ち

→^{すえにちるはな}末に散る花

いらかさひしきーすきのむらたち
かすかなるーこけちのすゑはーちるはなに

【弘治年間百韻 8 巻】／x x [をりのこす]
／弘治 2(1556) 年 9 月 10 日

あらしにあくるーすきのむらたち
さきかくすーこすゑわかれてーちるはなに

【成立不詳・宗養以前 8 巻】／何人 [あを
やきや]／成立時不詳

すぎる

あめすぎたあとのしずけさ
雨過ぎた後の静けさ

→^{やまのは}山の端

あめふりはるるーあとのしずけさ
きえやられてーくもはかせまつーやまのはに

【永原千句】／何船 [はるのそらは]／明
応 9(1500)年 7月 17日

さみたれすくるーあとのしずけさ
くもきえてーつきたちのほるーやまのはに

【下草/金子本】／雑上/延徳 4(1492)年頃

すぎるむらさめ
過ぎる村雨

→^{ほととぎす}時鳥

くもるとすれはーすくるむらさめ
したふともーいらはやいかてーほととぎす

【長享年間百韻 6 卷】／朝何 [はるくさは]
／長享 2(1488)年 4月

むらくもとほくーすくるむらさめ
ひとこゑのーほかにはきかぬーほととぎす

【天正四年万句 7 0 卷】／三字中略 [かせ
たえて]／天正 4(1576)年 5月 6日~7月
19日

はるすぎる
春過ぎる

→^{ひがながい}日が高い

おのつからーとはれしころのーはるすきて
まつひとはこすーひこそなかけれ

【紫野千句】／山何 [ゆふたちは]／延文
2(1357)年以後-応安 3年 6月以前

はなにわれーこころつくしのーはるすきて
のとかにくらすーひこそなかけれ

【宗長関係 8 種】／老耳/天理本/

ほととぎすまくらのいずちすぎる
時鳥枕のいずち過ぎる

→^{しずかなあめ}静かな雨

ほととぎすーまくらのいつちーすきぬらむ
しつかにあめのーうちそそくそら

【伊予千句】／御何 [すすしきは]／天文
6(1537)年 5月 22日

ほととぎすーまくらのいつちーすきぬらむ
しつかにあめのーはるるくさふき

【寛永年間百韻 1 5 卷】／□□ [ききはみ
な]／裏白/寛永 4(1627)年 1月 3日

むらさめすぎる
村雨過ぎる

→^{ほととぎす}時鳥

むらさめすくるーをちのかけはし
さたかにはーたれかききけむーほととぎす

【平松文庫本千句】／□□ [したみつの]
/

むらさめすくるーやまのしたみち
まちてみよーなかくてはあらしーほととぎす

【文明年間百韻 3 4 卷】／何人 [ゆきのや
ま]／文明 14(1482)年 1月 16日

すごい

すごいあきかせ
凄しい秋風

→^{ののひとつまつ}野のいつまつ

とふかひなしやーすこきあきかせ
くれぬとてーかけたのむののーひとつまつ

【竹林抄/新古典文学大系本】／旅/文明
8(1476)年 5月頃

ふきとしふくはーすこきあきかせ
かるるののーひともとすすきーひとつまつ

【心敬関係 1 0 種】／芝草内連歌合/天理本
/

すさまじい

かぜがすさまじい
風が凄まじい

→^{きりぎりす}蟋蟀

いたまみえたるーかせはすさまじ
こゑちかきーまくらのつきにーきりぎりす

【天文廿四年梅千句】／何船 [つきにうめ]
/天文 24(1555)年 正月 7日

よるのとはそのーかせはすさまじ
きりぎりすーなきよるとこをーしきわひて

【諸家月次連歌抄】／諸家月次連歌抄／成

立()年未詳

しもすさまじいやま
霜凄まじい山まつあらわれる
→松現れるしもすさましく一からすなくやま
かはきりに一ふもとのまちは一あらはれて

【葉守千句】／何船[うゑしうゑは]／長

享元(1487)年10月9日<~11日>

しもすさましく一まよふやまもと
けふりより一いろなきまつの一あらはれて

【元和年間百韻24巻】／□□[うくひす

の]／裏白／元和9(1623)年1月3日

すさまじいそら
凄まじい空たびごろも
→旅衣ふけゆくままに一すさましきそら
たひころも一かさねまほしき一きぬたにて

【嵯峨千句】／花之何[うめかかは]／(元

龜4)天正元(1573)年正月9日~11日

しもふるはかり一すさましきそら
たひころも一たかうつさとに一いそくらむ

【大永三年月並千三百韻】／□□[うめか

かや]／月並千三百韻／大永3(1523)年2

月23日

すじ

けむりひとすじ
煙一筋だれかがうえたまつのこる
→誰かが植えた松残るかせふきはらふ一けふりひとすち
たれうゑて一まつのしるしの一のこるらむ

【文明十四年万句52巻】／堀何[かるひ

とは]／文明14(1482)年7月4日~9月

14日

とほさとをのの一けふりひとすち
たかうゑて一まつはかりかは一のこるらむ

【文明十四年万句52巻】／何色[はるな

つを]／文明14(1482)年7月4日~9月

14日

ひとすじ
一筋けむりふきやるかせ
→煙吹きやる風ひとすちの一かはみつしろく一あらはれて
けふりふきやる一さとのあさかせ

【大原野十花千句】／何路[けふこそは]

／元龜2(1571)年2月5日~7日

ひとすちの一なかれのすゑに一はしみえて
けふりふきやる一をちのかはかせ

【永禄年間百韻28巻】／何船[ひきうう

る]／裏白／永禄5(1562)年1月3日

みずのひとすじ
水の一筋たぎ
→滝そそくはかりの一みつのひとすち
ふりにける一あとやなみたの一たきならむ

【大永四年月並千二百韻】／□□[しもや

ひぬ]／月並千二百韻／大永4(1524)年9

月23日

みなかみしらぬ一みつのひとすち
そてやたた一うきおとなしの一たきならむ

【名所句集／静嘉堂文庫本】／恋下／(大

永前後)

みちのひとすじ
道の一筋はなれごま
→放れ駒たなかにつつく一みちのひとすち
はなれごま一いはふかたにし一ゆきつれて

【元龜年間百韻6巻】／何人[はなのとき

も]／元龜4(1573)年6月6日

さとはみえぬも一みちのひとすち
つななから一いつくよりかは一はなれごま

【文禄年間百韻12巻】／□□[あつまや

の]／文禄2(1593)年5月6日

ゆきつれる
→行き連れるたなかにつつく一みちのひとすち
はなれごま一いはふかたにし一ゆきつれて

【元龜年間百韻6巻】／何人[はなのとき

も]／元龜4(1573)年6月6日

かよふをのへの一みちのひとすち
このかたは一たきしはとり一ゆきつれて

【文明十五年千句11巻】／何路[ひめも

もの]／文明15(1483)年*月*日~3月2

日

すすき

かれはなすすき
枯れ花薄

よわるむしのね
→弱る虫の音

はなすすき-かれゆくしもに-あきふけて
のにはおしなひ-よわるむしのね

【頭証院会千句】/山何 [あさもよひ] /
宝徳元 (1449) 年 8 月 19 日~21 日

つきのこる-かれののすゑの-はなすすき
ほのかになりぬ-よわるむしのね

【因幡千句】/薄何 [かきはらふ] /文明
7(1475) 年 11 月 26 日<~28 日>

はなすすき
花薄

まつむしのこゑ
→松虫の声

ほのめくや-たかたまくら-はなすすき
ふけゆくまでに-まつむしのこゑ

【天文年間百韻 3 8 巻】/何船 [あさかほ
に] /天文 12(1543) 年 7 月 29 日

ひともとや-かれののうちの-はなすすき
したはにすたく-まつむしのこゑ

【永禄年間百韻 2 8 巻】/何船 [たちなら
せ] /永禄元 (1558) 年 7 月 18 日

かむらすすき
一群薄

しもまようやまだ
→霜迷う山田

ひとむらすすすき-そてふるるかけ
しもまよふ-やまたのおしね-かりすてて

【永正年間百韻 3 4 巻】/何路 [はやみの
に] /永正 12(1515) 年 11 月 10 日

ひとむらすすすき-ひともかけせず
しもまよふ-やまたのこいへ-かたふきて

【合点之句/神宮文庫本】/冬/天文
9(1541) 年 12 月 25 日

すずしい

かぜのすずしさ
風の涼しさ

やすらう
→安らう

そてふきおくる-かせのすすしさ
たまほこの-ゆくへにしはし-やすらひて

【天正年間百韻 5 7 巻】/□□ [うめかえ
の] /裏白/天正 19(1591) 年 1 月 3 日

たたすかはらの-かせのすすしさ
みそきする-みつのほとりに-やすらひて

【文明十五年千句 1 1 巻】/三字中略 [か
たいとを] /文明 15(1483) 年 *月 *日~
3 月 2 日

すずしい
涼しい

ほたるとひかう
→蛍飛び交う

すすしくも-くさはにむすふ-つゆちりて
みるみるたかし-ほたとひかう

【天文年間百韻 3 8 巻】/山何 [ふむあと
も] /天文 13(1544) 年 10 月 15 日

すすしくも-まとのくれたけ-うちそよき
ほたとひかう-かけかすかなり

【慶長年間百韻 2 7 巻】/□□ [ひめおき
し] /慶長 4(1599) 年 3 月 25 日

すずしさにあきたつ
涼しさに秋立つ

ひぐらしのこゑ
→蝸の声

すすしくも-ゆふひのくもに-あきたちて
こすゑしらるる-ひぐらしのこゑ

【永禄元年花千句】/□□ [あたりまで]
/永禄元 (1558) 年 3 月 23 日~25 日

すすしさの-けふよりしるき-あきたちて
やまはくもまの-ひぐらしのこゑ

【天文年間百韻 3 8 巻】/x x [したみつ
も] /天文 24(1555) 年 9 月 2 日

つゆのすずしさ
露の涼しさ

ゆうだち
→夕立

わくるのやまの-つゆのすすしさ
ゆふたちの-くもはかたへの-みねこえて

【天正年間百韻 5 7 巻】/何船 [みちみち
を] /天正 13(1585) 年 5 月 27 日

ちりなきにはの-つゆのすすしさ
ゆふたちの-あとのやまみつ-いはこえて

【園塵第二／統群書類従本】／夏／明応
4(1495)年早春

ゆうすずみ
夕涼み

あきかせがふく
→秋風が吹く

すきたてゝ一いくきのもとの一ゆふすすみ
ここにすみける一あきかせそふく

【伊勢千句】／何木〔すめるよの〕／大永
2(1522)年8月4日～8日

なつ□たた一いはゐにちきる一ゆふすすみ
そてにをりをり一あきかせそふく

【文明年間百韻34巻】／何船〔かへれと
て〕／文明18(1486)年3月27日

すずむし

すずむしのこゑ
鈴虫の声

ふりはえる
→振延える

たつねいるのの一すすむしのこゑ
つきにはと一ちきりしかたに一ふりはへて

【享徳二年千句】／何人〔つきとたか〕／
享徳2(1453)年8月11日～13日

すすきかもの一すすむしのこゑ
ふりはへて一ゆくやたもとの一かせならし

【永禄元年花千句】／□□〔たきなみも〕
／永禄元(1558)年3月23日～25日

すだれ

すだれをまけばゆき
簾を巻けば雪

よもすがら
→夜もすがら

すだれをまけは一ゆきしろきやま
よもすから一しくれしつきの一けさすみて

【弘治年間百韻8巻】／何船〔たくそてに〕
／弘治2(1557)年12月2日

すだれをまけは一けさのうすゆき
よもすから一あらしをそてに一かたしきて

【成立不詳・宗養以前8巻】／朝何〔なひ
くよや〕／成立時不詳

たますだれ
玉簾

しずかなとしびのかけ
→静かな灯の影

くれかかゝる一ひまほのかなる一たますだれ
しつかにみゆる一ともしひのかけ

【大永四年月並千二百韻】／何色〔うめの
はな〕／月並千二百韻／大永4(1524)年1
月23日

あめそそく一かすみのつゆの一たますだれ
しつかにあくる一ともしひのかけ

【天文年間百韻38巻】／何人〔みれはみ
し〕／天文13(1545)年12月25日

たますだれあける
玉簾あける

つきのさむしろ
→月のさむしろ

たますだれ一ひまひまみえて一あくるよに
しもにかけさす一つきのさむしろ

【石山四吟千句】／玉何〔こゑやまつ〕／
天文24(1555)年8月15日～19日

たますだれ一あくるまつまの一なかくめして
くもりかちなる一つきのさむしろ

【永正年間百韻34巻】／何船〔あきはそ
てに〕／永正10(1513)年7月29日

すてる

すててかえる
捨てて帰る

おちのひとむら
→遠方の一村

さすふねも一つなきすててや一かへるらむ
ましはのみちは一をちのひとむら

【五吟一日千句】／薄何〔あけほのの〕／
天正9(1581)年11月19日

ふえのねや一すなとりすてて一かへるらむ
つきになるよの一をちのひとむら

【大永年間百韻14巻】／何人〔つきやふ
ね〕／大永2(1522)年8月

すてるよのなか
捨てる世の中

わびぬればおも
→侘ぬれば思う

なほいかならむ一すつるよのなか
わびぬれは一おもひしことの一まさるみに

【表佐千句】／何人〔はなそくも〕／文明
8(1476)年3月6日<~8日>

まよふうちにも一すつるよのなか
わひぬれは一おもふこにさへーちかつかて

【基佐集／静嘉堂文庫本】／雑／永正
6(1509)年以前

すま

すまのうら
須磨の浦なみこもと
→浪此処許

よもすから一つきのかげのみ一すまのうら
なみこもとに一□□□□なる

【看聞日記紙背50巻】／山何〔ちよもみ
む〕／応永19(1412)年1月14日

うみつらの一かすみそめたる一すまのうら
なみこもとに一ちかきしほとき

【看聞日記紙背50巻】／唐何〔ひそをし
き〕／応永30(1423)年3月29日

ほとちかし一いくたのかはせ一すまのうら
なみこもとに一よすとまやか

【文安頃千句4巻】／何路〔やへひとへ〕
／

すまとうちどりしはなく
→妻訪う千鳥しは鳴く

すまのうらや一わひつつおくる一あけくれに
つまとふちとり一かせにしはなく

【弘治年間百韻8巻】／何路〔ゆくみつや〕
／弘治2(1556)年3月24日

すまのうらや一あかつきかたの一そらのつき
つまとふちとり一きりにしはなく

【元龜年間百韻6巻】／何人〔はなのとき
も〕／元龜4(1573)年6月6日

すまのうらなみ
須磨の浦浪もしおやくけむり
→藻塩焼く煙

ふなちにあらき一すまのうらなみ
もしほやく一けふりにうみも一かきくれて

【表佐千句】／唐何〔つきはたた〕／文明
8(1476)年3月6日<~8日>

みのうきふしに一すまのうらなみ
もしほやく一けふりはあさな一ゆふなにて

【天正年間百韻57巻】／何路〔かすむよ
の〕／天正6(1578)年2月18日

あわじがた
→淡路瀧

ふねさしとむる一すまのうらなみ
あはちかた一うしほのむかふ一せとをみて

【宝徳四年千句】／何人〔はなところ〕／
宝徳4(1452)年3月12日

つきをみるよの一すまのうらなみ
あはちかた一せとのあきかせ一みにしみて

【菟玖波集／広島大学本】／秋上／文和
5(1356)年冬~翌年の春

すまびと
須磨人わかぎのきくら
→若木の桜

すまひとの一よかたりになる一はなうゑて
わかきのさくら一はるそひさしき

【看聞日記紙背50巻】／山何〔まつかね
に〕／応永32(1425)年3月25日

すまひとの一うゑけるはなに一なくさみて
わかきのさくら一さかりいつころ

【看聞日記紙背50巻】／何路〔ひととせ
に〕／応永32(1426)年12月11日

なおすまのうら
なお須磨の浦ともちどり
→友千鳥

うくともたへて一なほすまのうら
をりをりは一たえすこととへーともちとり

【飯盛千句】／x x〔かけすすし〕／永祿
4(1561)年5月27日~29日

なれなむほとも一なほすまのうら
きくたにも一へたてさそなの一ともちとり

【五吟一日千句】／何袋〔さくはなの〕／
天正9(1581)年11月19日

すみ

すみぞめのそで
墨染の袖→^{あめのくれ}雨の暮れ

いろかをすつる一すみそめのそで
やとりかせ一えくちのさとの一あめのくれ

【難波田千句】／□□ [ゆくはるに] / 文
明 14(1482) 年 10 月前後

つゆなこほれそ一すみそめのそで
すみかとも一こかけをたのむ一あめのくれ

【明応年間百韻 2 2 巻】 / 何木 [やまはゆ
き] / 明応 7(1498) 年 11 月 4 日

→^{しばのいお}柴の庵

よしせはくとも一すみそめのそで
かくすみも一いくほとならむ一しはのいほ

【延徳年間百韻 1 6 巻】 / 何船 [さよかせ
も] / 延徳 2(1490) 年 7 月 23 日

あれはやまとや一すみそめのそで
はなにのみ一むすふににたる一しはのいほ

【成立不詳・宗長以前 1 5 巻】 / 初何 [た
てなから] / 成立時不詳

→^{なみだ}涙

うきよにやなほ一すみそめのそで
いまはみに一のそみのなきも一なみたにて

【菟玖波集 / 広島大学本】 / 雑五 / 文和
5(1356) 年冬~翌年の春

こころならすの一すみそめのそで
こほるも一おほえぬものは一なみたにて

【合点之句 / 神宮文庫本】 / 恋 / 天文
9(1541) 年 12 月 25 日

すみのころもて
墨の衣手→^{かたみ}形見

こころをそめよ一すみのころもて
そのままの一ふてのあとこそ一かたみなれ

【文和千句】 / 何物 [さみたれは] / 文和 5
年

やつれいとはし一すみのころもて
わかれての一なみたたにこそ一かたみなれ

【弘治年間百韻 8 巻】 / 何人 [ときはなる]
 / 弘治 3(1557) 年 8 月 28 日

すみだかわ

すみだかわ
隅田川→^{こえるいせき}越える井関

ふねとむる一なみのまかひの一すみたかは
こゆるみせきの一みつしろきくれ

【皇学館文庫本千句】 / □□ [きてかへる]
 / 永禄 6(1563) 年 11 月 18 日以前

なくとりも一はなのはるし一すみたかは
こゆるみせきの一なみののとけさ

【永禄年間百韻 2 8 巻】 / 何船 [あととふ
を] / 永禄 3(1560) 年 11 月 9 日

すみよし

すみよし
住吉→^{ことのほのみち}言の葉の道

すみよしの一かみにいのりを一かけおきて
すなほならはの一ことのほのみち

【天正年間百韻 5 7 巻】 / □□ [こすゑを
も] / 天正 11(1583) 年間 1 月 27 日

すみよしの一にはのまつかせ一ものさひて
かみもうくらむ一ことのほのみち

【文明十四年万句 5 2 巻】 / 何国 [ほとと
きす] / 文明 14(1482) 年 7 月 4 日~9 月
14 日

すみよしのうら
住吉の浦→^{あわじしま}淡路島

なみにはるたつ一すみよしのうら
あさみとり一かすみにうかふ一あはちしま

【大永四年月並千二百韻】 / □□ [そよと
しも] / 月並千二百韻 / 大永 4(1524) 年 10
月 23 日

あくれはかすむ一すみよしのうら
つきもたた一みるみるとほき一あはちしま

【慶長年間百韻 2 7 巻】 / □□ [いなつま
も] / 慶長 9(1604) 年 7 月 6 日

すみよしのまつ
住吉の松

かきのやはたやま
→垣の八幡山

かけとちきるやーすみよしのまつ
みつかきのーひさしくなりぬーやはたやま

【伊庭千句】／三字中略 [ちりやすき] /
大永 4(1524) 年 3 月 17 日～21 日

おひやかはれるーすみよしのまつ
かみかきにーすきのこたかきーやはたやま

【成立不詳・心敬以前 1 4 卷】／何路 [か
すみかは] / 成立時不詳

すみよしのまつとたのむ
住吉の松と頼む

あだなみがそでぬらす
→徒浪が袖濡らす

すみよしのーまつとたのめしーかひもなく
なにあたなみのーそでぬらすらむ

【菟玖波集／広島大学本】／恋上／文和
5(1356) 年冬～翌年の春

すみよしのーまつとたのめしーほかにまた
なにあたなみのーそでぬらすらむ

【菟玖波集／広島大学本】／恋中／文和
5(1356) 年冬～翌年の春

すめるふるさと
住める古里

おもいう
→思う

なほあらましとーすめるふるさと
たひゆくやーあとをいかにとーおもふらむ

【表佐千句】／唐何 [つきはたた] / 文明
8(1476) 年 3 月 6 日<～8 日>

あはれかくてもーすめるふるさと
つれもなきーわかみやまつもーおもふらむ

【大永四年月並千二百韻】／□□ [そよと
しも] / 月並千二百韻 / 大永 4(1524) 年 10
月 23 日

すむ

すみどころ
住み所

ういすのこゑ
→鶯の聲

ひをへつつーのやまをはるはーすみどころ
やよひのすゑのーうくひすのこゑ

【慶長年間百韻 2 7 卷】／懷旧 [みなそこ
の] / 慶長 4(1599) 年 5 月 2 日

みよしのやーはなをよすかのーすみところ
ともとこそなれーうくひすのこゑ

【慶長年間百韻 2 7 卷】／□□ [みつのう
へに] / 裏白 / 慶長 17(1612) 年 1 月 3 日

つきかげすむ
月影澄む

つゆきむいそで
→露寒い袖

ふりにけるーのてらのつきのーかけすみて
あかつきおきのーつゆきむきそで

【元和年間百韻 2 4 卷】／□□ [そらにみ
つ] / 元和 8(1622) 年 10 月 19 日

やとりとるーつきはゆふへにーかけすみて
むしのねみたれーつゆきむきそで

【新撰菟玖波集／実隆本】／秋上／明徳
4(1495) 年 9 月 26 日

つきすむ
月澄む

あきかぜがふく
→秋風が吹く

かみよよりーたましまかはのーつきすみて
かきりもなみにーあきかせそふく

【弘治三年春雪千句】／何衣 [なくきしの]
/ 弘治 3(1557) 年正月 7 日～9 日

つゆしものーふ□□□やとはーつきすみて
かれののあさちーあきかせそふく

【文明年間百韻 3 4 卷】／x x [あきふけ
ぬ] / 文明 12(1480) 年 9 月 28 日

あまつかりがね
→天つ雁

かけもみにーさしやとほとーつきすみて
ねぬめもさむるーあまつかりかね

【池田千句】／唐何 [つゆかけて] / 永正
7(1510) 年春以前<永正 5 年春>

おほろけにーかたへよふかきーつきすみて
まくらにちかしーあまつかりかね

【天文十八年梅千句】／青何 [ゆけはうめ]
/ 天文 18(1549) 年正月 11 日

ころもつづ
→衣打つ聲

ことさらに一おもふはしらむ一つきすみて
ひひきはわかす一ころもうつこゑ

【浅間千句】／一字露頭 [にほふひは] /

永正 11(1514) 年 5 月 13 日～19 日

やまかせの一ふきそふよはの一つきすみて
いくさとさとの一ころもうつこゑ

【天正年間百韻 5 7 巻】／何路 [いろもかも] / 裏白 / 天正 14(1586) 年 1 月 3 日

なかなかいちはすみよい
中々市は住み良い

→^{みわのすきむら}三輪の杉群

ましはりの一なかなかいちは一すみよきに
たちならひたる一みわのすきむら

【看聞日記紙背 5 0 巻】／山何 [なつかけよ] / 応永 26(1419) 年 3 月 29 日

やまよりも一なかなかいちは一すみよきに
たれたつねこむ一みわのすきむら

【看聞日記紙背 5 0 巻】／唐何 [あすはさけ] / 応永 31(1424) 年 2 月 25 日

みずはすむ
水は澄む

→^{あけがた}明け方

あかてみなせの一みつはすみけり
あけかたの一たきよりうへも一つきなれや

【石山四吟千句】／青何 [つきやふね] / 天文 24(1555) 年 8 月 15 日～19 日

くむにいハマの一みつはすみけり
あけかたの一つきにいてぬる一そてみえて

【慶長年間百韻 2 7 巻】／□□ [けふことに] / 裏白 / 慶長 8(1603) 年 1 月 3 日

せみ

せみのもろごえ
蟬の諸声

→^{からころも}唐衣

やまやさつきの一せみのもろごえ
すすしさは一たたあきかせの一からころも

【永正十花千句】／二字反音 [こまなへて] / 永正 13(1516) 年 3 月 11 日～14 日

さよのしくれか一せみのもろごえ
からころも一もすもそても一うちぬれて

【文明十四年万句 5 2 巻】／何木 [あきのひも] / 文明 14(1482) 年 7 月 4 日～9 月 14 日

そう

かわぞいのみち
川浴いの道

→^{あかつき}暁

みつうちけふる一かはそひのみち
あかつきの一つきのこるえに一ふねさして

【河越千句】／二字反音 [はるみても] / 文明 2(1470) 年正月 10～12 日

かすかにのこる一かはそひのみち
あかつきの一やまにかかれる一よはのつき

【文明年間百韻 3 4 巻】／何木 [うめかかを] / 文明 15(1483) 年 2 月 19 日

→^{わたしふね}渡し舟

くたれはあさき一かはそひのみち
はやきせに一おとさていその一わたしふね

【成立不詳・宗祇以前 1 5 巻】／x x [はるやたつ] / 存疑 / 成立時不詳

つつくともなき一かはそひのみち
くれぬれは一ひとりふたりの一わたしふね

【天正年間百韻 5 7 巻】／何人 [みれはみし] / 天正 12(1584) 年 9 月 13 日

かわぞいふね
川浴い舟

→^{きしのくれたけ}岸の呉竹

さしいつる一かはそひふねに一かせふきぬ
すゑうちなひく一きしのくれたけ

【永原千句】／何袋 [たかそめし] / 明応 9(1500) 年 7 月 17 日

なみもなき一かはそひふねに一さをとりて
をのえてきらむ一きしのくれたけ

【文明十四年万句 5 2 巻】／何色 [はるなつを] / 文明 14(1482) 年 7 月 4 日～9 月 14 日

そうはおもかけ
添うは面影

→^{はなのあと}花の跡

なみたのあるも一そふはおもかけ
まつならて一あをはのゆきや一はなのあと

【看聞日記紙背 5 0 巻】／山何 [かせやくも] / 応永 26(1419) 年 10 月 25 日

そなたはいかかーそふはおもかけ
はなのあとーかせよりゆきをーふきためて

【看聞日記紙背50巻】／何物 [いつれみ
む] / 応永 32(1425) 年 9 月 17 日

そこ

かすみのそこ
霞の底

かわずなく
→蛙鳴く

やまかくれーかすみのそこのーみちわけて
とくるこほりにーかはつなくなり

【文明十二年千句8巻】／一字露頭 [わか
はもて] / 文明 12(1480) 年 4 月 10 日～
* 日

きこえきつーかすみのそこのーみつのおと
かはつなくなりーはるふかきころ

【文明十四年万句52巻】／山河 [あきか
せに] / 文明 14(1482) 年 7 月 4 日～9 月
14 日

そで

おちかたびとのそで
遠方人の袖

おくろ
→送る

をちかたひとのーそでほのかなり
よこくもやーわかれしゆめをーおくるらむ

【大永四年月並千二百韻】／□□ [わけく
らし] / 月並千二百韻 / 大永 4(1524) 年 7
月 23 日

をちかたひとのーそでのむらさめ
ほとときすーなれもたひとやーおくるらむ

【那智籠 / 北野天満宮本】 / 永正十三年 /

かたしきのそで
片敷の袖

よわのつき
→夜半の月

をれすはひとりーかたしきのそで
さりともーうさはならひぬーよはのつき

【秋津洲千句】／唐何 [うめかかの] / 天
文 15(1546) 年 8 月 25 日

ゑひのまくらのーかたしきのそで
かけはなほーおほろけならぬーよはのつき

【天正年間百韻57巻】／初何 [すすしさを] / 天正 2(1574) 年 6 月 10 日

きぬぎぬのそで
後朝の袖

しのめ
→東雲

なみたにむせふーきぬぎぬのそで
しののめのーそらきりわたりーつきおちて

【顕証院会千句】／山河 [あさもよひ] /
宝徳元 (1449) 年 8 月 19 日～21 日

ぬれにそぬるるーきぬぎぬのそで
しののめのーころしもあめのーふりいてて

【那智籠 / 北野天満宮本】 / 永正十四年 /

すみぞめのそで
墨染の袖

あめのくれ
→雨の暮れ

いろかをすつるーすみぞめのそで
やとりかせーえくちのさとのーあめのくれ

【難波田千句】／□□ [ゆくはるに] / 文
明 14(1482) 年 10 月前後

つゆなこほれそーすみぞめのそで
すみかともーこかけをたのむーあめのくれ

【明応年間百韻22巻】／何木 [やまはゆ
き] / 明応 7(1498) 年 11 月 4 日

しばのいお
→柴の庵

よしせはくともーすみぞめのそで
かくすみもーいくほとならむーしはのいほ

【延徳年間百韻16巻】／何船 [さよかせ
も] / 延徳 2(1490) 年 7 月 23 日

あれはやまとやーすみぞめのそで
はなにのみーむすふににたるーしはのいほ

【成立不詳・宗長以前15巻】／初何 [た
てなから] / 成立時不詳

なみだ
→涙

うきよにやなほーすみぞめのそで
いまはみにーそのみのなきもーなみたにて

【菟玖波集 / 広島大学本】 / 雑五 / 文和
5(1356) 年冬～翌年の春

こころならすの一すみそめのそで
こほるも一おほえぬものは一なみたにて

【合点之句／神宮文庫本】／恋／天文
9(1541)年12月25日

そでが^つゆ^つばい
袖が^露つばい

→^うい
憂い

のをわけころも一そでそつゆけき
いととなほ一あきそふたひや一うかるらむ

【看聞日記紙背50巻】／何路[うのはな
の]／応永30(1423)年4月4日

こころつくしの一そでそつゆけき
いくたひか一かのひとゆゑに一うかるらむ

【文明十四年万句52巻】／何人[ちくさ
みな]／文明14(1482)年7月4日～9月
14日

→^{ものおもひ}
物思い

たえぬしくれに一そでそつゆけき
いかにとも一とふひとあれな一ものおもひ

【熊野千句】／何路[かさなるや]／文正
元(1466)年3月以前

くさをわけゆく一そでそつゆけき
しのひちは一ころをつくす一ものおもひ

【文明十四年万句52巻】／何寺[きりう
すみ]／文明14(1482)年7月4日～9月
14日

→^{ものおもひ}
物思う

はらふもおなし一そでのつゆけき
ものおもふ一ころをいつち一やりてねむ

【出陣千句】／何木[しもなから]／永正
元(1504)年10月25日～27日

こひするのみか一そでのつゆけき
ものおもふ一われやはつきに一はちさらむ

【伊予千句】／唐何[うつせみの]／天文
6(1537)年5月22日

そでぬれる
袖濡れる

→^{くさのほら}
草の原

おほろつきよに一そでそぬれぬる
つゆをたに一わするなきえむ一くさのほら

【竹林抄／新古典文学大系本】／恋下／文
明8(1476)年5月頃

ゆくへもしらす一そでそぬれぬる
みしひとを一とへはかせふく一くさのほら

【心敬関係10種】／心玉集／静嘉堂文庫本
／

→^{あかつき}
暁

たのまぬよはも一そではぬれけり
あかつきの一つきにおちくる一かねのおと

【大永年間百韻14巻】／山何[うめやな
き]／大永7(1527)年1月19日

おとろくほとに一そではぬれけり
あかつきの一かねこそゆめの一わかれなれ

【菟玖波集／広島大学本】／恋中／文和
5(1356)年冬～翌年の春

そでのいろいろ
袖の色々

→^{つきにかえる}
月に帰る

あきはもみちの一そでのいろいろ
たけかりや一つきになりては一かへるらむ

【永享年間百韻4巻】／山何[おいまつは]
／万句巻頭／永享9(1437)年3月21日

つゆはらふの一そでのいろいろ
はきかえを一つきにやをりも一かへるらむ

【慶長年間百韻27巻】／□□[はるにま
つ]／裏白／慶長6(1601)年1月3日

そでのうつりが
袖の移り香

→^{あやめくさ}
菖蒲草

のこりもふかき一そでのうつりか
ふきすてし一きのふのつまの一あやめくさ

【元龜二年千句】／何木[たきなみの]／
元龜2(1571)年3月5日

なにはかなしや一そでのうつりか
あやめくさ一かくるよのほら一あれまさり

【浜宮千句】／□□[ときもよも]／

おもかけ
→面影

これそかたみのそでのうつりか
おもかけは一てにもたまらず一またきえて
【美濃千句】／何草 [いつくにて]／文明
4(1473)年12月16日～21日

わかれしきみかそでのうつりか
おもかけは一なかなかつらき一なこりにて
【天文年間百韻38巻】／何人 [にほへか
つ]／天文13(1544)年1月29日

わすれむものかそでのうつりか
おもかけは一くれしものこる一きくのあき
【天正年間百韻57巻】／何船 [みちみち
を]／天正13(1585)年5月27日

かたみ
→形見

また□□□□□そでのうつりか
ありあけは一あふ□□□□の一かたみにて
【看聞日記紙背50巻】／山何 [なつかけ
よ]／応永26(1419)年3月29日

きゆるもをしやそでのうつりか
たまくらは一みをはなたれぬ一かたみにて
【天文年間百韻38巻】／x x [しかそな
く]／天文24(1555)年9月19日

たちばな
→橘

ともにやとまるそでのうつりか
たちはなは一むかしのつまの一ゆかりにて
【看聞日記紙背50巻】／何人 [まつちか
し]／応永32(1425)年6月25日

ちきりはかなきそでのうつりか
たちはなは一かけたにみえす一くつるのに
【天正四年万句70巻】／玉何 [まつはら
も]／天正4(1576)年5月6日～7月19日

そでのうめのか
袖の梅の香

うぐいす
→鶯

かすみもあへぬそでのうめかか
うくひすの一こゑもゆくゆく一とほきのに
【天文年間百韻38巻】／何人 [みれはみ
し]／天文13(1545)年12月25日

もるるかたやは一そでのうめかか
うくひすの一そともにつる一こゑすなり
【永祿年間百韻28巻】／何船 [あととふ
を]／永祿3(1560)年11月9日

そでのくれない
袖の紅

たつたがわ
→立田川

みせはやふかきそでのくれない
たつたかは一あきのなこりに一おりたちて
【永正年間百韻34巻】／何船 [うちなひ
き]／永正13(1516)年1月

なみたのいろは一そでのくれない
なにゆゑに一かかろうきなの一たつたかは
【菟玖波集／広島大学本】／恋下／文和
5(1356)年冬～翌年の春

みせはやふかきそでのくれない
たつたかは一あきのかきりに一おりたちて
【那智箒／北野天満宮本】／永正十三年／

そでのこおり
袖の氷

しらない
→知らない

そでのこほりは一われそくるしき
よかれしや一わふるまくらも一しらさらむ
【永正年間百韻34巻】／山何 [たちはな
に]／永正18(1521)年5月7日

そでのこほりは一いつとけてまし
ものおもふ一こころやはるも一しらさらむ
【天正年間百韻57巻】／何船 [なひきそ
はむ]／天正10(1582)年1月5日

そでふきおくるかぜ
袖吹きおくる風

たまほこ
→玉鉾

そでふきおくる一みねのこからし
たまほこの一すゑはゆふしも一さえさえて
【天文年間百韻38巻】／x x [かめにさ
す]／天文21(1552)年2月20日

そでふきおくる一かせのすすしき
たまほこの一ゆくへにしはし一やすらひて
【天正年間百韻57巻】／□□ [うめかえ
の]／裏白／天正19(1591)年1月3日

そでをぬらす
袖を濡らす

→立ち別れ

ゆめにみえても一そでぬらしけり
なこりさへーゆゆしきはかりーたちわかれ

【出陣千句】／薄何〔ちきりきや〕／永正
元(1504)年10月25日～27日

ゆふへのかすみ一そでぬらしけり
まくらかるーあしたのくもにーたちわかれ

【伊勢千句】／三字中略〔うめさきて〕／
大永2(1522)年8月4日～8日

→草の仮庵

よのなかに一あるかすならすーそでぬれて
いつをかきりそーくさのかりいほ

【文明年間百韻34巻】／何人〔よるはつ
き〕／文明18(1486)年2月6日

なかなかのーなさけおもへはーそでぬれて
ゆきにやとかすーくさのかりいほ

【文明十四年万句52巻】／夢想〔そのし
なも〕／文明14(1482)年7月4日～9月
14日

なみだがわがそでのうえ
涙が我が袖の上

→思う

つゆもなみたも一わかそでのうへ
ひとしれぬーみにはなにをかーおもふらむ

【文安年間百韻9巻】／山何〔ふたたひの〕
／文安5(1448)年11月12日

いつもなみたのーわかそでのうへ
とふひとやーこよひはかりとーおもふらむ

【合点之句／神宮文庫本】／恋／天文
9(1541)年12月25日

まいのそで
舞の袖

→欄干の奥

あしふみも一さすかよしあるーまひのそで
なこりをおもふーおはしまのおく

【五吟一日千句】／三字中略〔くらさぬ〕
／天正9(1581)年11月19日

いりあやも一したはれてまたーまひのそで
おもかけさたかーおはしまのおく

【天正年間百韻57巻】／x x〔はなさか
り〕／天正6(1578)年3月10日

ややさむいそで
やや寒い袖

→秋の霜

かりねのゆめもーややさむきそで
おけはたたーつきにまかへるーあきのしも

【大原野十花千句】／何衣〔つきはなに〕
／元龜2(1571)年2月5日～7日

はまへたとれはーややさむきそで
つきになほーまさこちしろきーあきのしも

【延宝年間百韻3巻】／□□〔おいかせの〕
／延宝2(1674)年8月14日

その

そのあきがお
園の朝顔

→光りさえ隔たる

うつろひやらぬーそののあさかほ
ひかりさへーかこふあたりはーへたたりて

【元和年間百韻24巻】／□□〔そらにみ
つ〕／元和8(1622)年10月19日

さきそめけりなーそののあさかほ
ひかりさへーきりのまかきにーへたたりて

【元和年間百韻24巻】／□□〔まつふく
や〕／元和8(1622)年10月29日

そのまま

そのまま
そのまま

→ただ面影

みにつるるーたひのなみたのーそのままに
たたおもかけはーあとのふるさと

【文和千句】／何木〔なにしるし〕／文和5
年

そのままにーしきもすてたるーしとねにて
たたおもかけはーありあけのゆめ

【永禄年間百韻28巻】／何路〔なつくさ
の〕／永禄9(1566)年5月9日

そば

そばのかけはし
傍の掛橋

→霜はただ

たえたえなれやーそはのかけはし
しもはたたーむすふかうへーあさほらけ
【永禄元年花千句】／□□ [みるままに]
／永禄元(1558)年3月23日～25日

くちてあやうきーそはのかけはし
しもはたたーふるかうへにもーかさなりて
【永禄元年花千句】／□□ [をりのこす]
／永禄元(1558)年3月23日～25日

そめる

すみそめのそで
墨染の袖

→雨の暮れ

いろかをすつるーすみそめのそで
やとりかせーえくちのさとのーあめのくれ
【難波田千句】／□□ [ゆくはるに] /文
明14(1482)年10月前後

つゆなこほれそーすみそめのそで
すみかともーこかけをたのむーあめのくれ
【明応年間百韻22巻】／何木 [やまはゆき]
／明応7(1498)年11月4日

→柴の庵

よしせはくともーすみそめのそで
かくすみもーいくほとならむーしはのいほ
【延徳年間百韻16巻】／何船 [さよかせも]
／延徳2(1490)年7月23日

あれはやまとやーすみそめのそで
はなにのみーむすふににたるーしはのいほ
【成立不詳・宗長以前15巻】／初何 [たてなから]
／成立時不詳

→涙

うきよにやなほーすみそめのそで
いまはみにーのそみのなきもーなみたにて

【菟玖波集／広島大学本】／雑五／文和
5(1356)年冬～翌年の春

こころならすのーすみそめのそで
こほるもーおほえぬものはーなみたにて

【合点之句／神宮文庫本】／恋／天文
9(1541)年12月25日

そら

あかつきのそら
暁の空

→草枕

わかるるかりやーあかつきのそら
にはとりのーこゑはきこえぬーくさまくら
【天正四年万句70巻】／山何 [みかつき
の] /天正4(1576)年5月6日～7月19日

みしゆめしたふーあかつきのそら
くさまくらーまたうきみちにーおきいてて
【行助関係4種】／行助句／伊地地本／

あきのそら
秋の空

→月の夕暮れ

われそゆくーかりはこしちのーあきのそら
たましひかよふーつきのゆふくれ
【成立不詳・心敬以前14巻】／何路 [し
ろたへの] /成立時不詳

とはれすはーみをいかにせむーあきのそら
たのめおきつるーつきのゆふくれ
【成立不詳・心敬以前14巻】／山何 [ほ
とときす] /成立時不詳

あけがたのそら
明け方の空

→月は猶

あめすくるよのーあけがたのそら
つきはなほーおちてすすしきーたまくらに
【明応年間百韻22巻】／何人 [ふきすて
よ] /明応7(1498)年間10月6日

いそのまぐらのーあけがたのそら
つきはなほーかたふくまみにーかけすみて
【大永三年月並千三百韻】／□□ [はるは
た] /月並千三百韻／大永3(1523)年間
3月23日

あけほのそら
曙の空→^{わかれをいそぐ}別れを急ぐよこくものこる—あけほののそら
うたてなど—とてもわかれ—いそくらむ【応永年間百韻7巻】／何路 [やまみつの]
／応永15(1408)年3月11日うちかすみたる—あけほののそら
いつくにと—わかれをさても—いそくらむ【文明十四年万句52巻】／夢想 [たにみ
つの]／文明14(1482)年7月4日～9月
14日→^{きえない}消えないなほなかきよの—あけほののそら
すさましく—くものひとむら—きえやらて【難波田千句】／□□ [にしきにて]／文
明14(1482)年10月前後やまこそわかね—あけほののそら
しらゆきは—かさなるみねに—きえやらて【永正年間百韻34巻】／白何 [さみたれや]
／千句第五／永正15(1518)年5月14日→^{かねなる}鐘鳴るいりえのつきに—あけほののそら
やまこゆる—かりかねまかふ—かねなりて【延宝年間百韻3巻】／□□ [おいかせの]
／延宝2(1674)年8月14日さくらかうへの—あけほののそら
かすみより—よしののみたけ—かねなりて【萱草／伊地知本】／春／文明6(1474)年
2月以前さくらかうへの—あけほののそら
かすみより—よしののみたけ—かねなりて【名所句集／静嘉堂文庫本】／春／(大永
前後)あめのこるそら
雨残る空→^{ほととぎす}時鳥てるひもなつの—あめのこるそら
ほととぎす—ゆくゆくわかぬ—こゑききて【永禄石山千句】／三字中略 [こすゑまで]
／永禄7(1564)年5月12日やまはみとりに—あめのこるそら
ほととぎす—あしたのくもに—なきすてて【合点之句／神宮文庫本】／夏／天文
9(1541)年12月25日ありあけのそら
有明の空→^{あきのかぜ}秋の風つきもなこりの—ありあけのそら
いつまでか—ききてうらみむ—あきのかせ【表佐千句】／薄何 [ゆきてみむ]／文明
8(1476)年3月6日<～8日>さたかにのこる—ありあけのそら
なほふくや—よふねのすゑの—あきのかせ【文明年間百韻34巻】／□□ [したつゆ
は]／文明12(1480)年7月4日→^{くさまくら}草枕ねぬよほとふる—ありあけのそら
くさまくら—うかれとあきや—ふけぬらむ【文明年間百韻34巻】／x x [つきをか
せ]／文明12(1480)年8月つきにねしのは—ありあけのそら
くさまくら—いくよともなき—あきくれて

【那智筆／北野天満宮本】／永正十三年／

いねがてのそら
寝ねがての空→^{つきをまくらに}月を枕におしあけかたの—いねかてのそら
しはのとは—みやまのつきを—まくらにて【成立不詳・心敬以前14巻】／何船 [は
るはまた]／成立時不詳さらてもよはは—いねかてのそら
たのめしは—うつろふつきを—まくらにて【合点之句／神宮文庫本】／恋／天文
9(1541)年12月25日くれごとのそら
暮れごとの空→^{ほととぎす}時鳥

ふるきをしのふーくれことのそら
ほととぎすーあれたるさとをーかれやらて
【永正十花千句】／山河〔けふそみな〕／
永正13(1516)年3月11日～14日

いつかとまつはーくれことのそら
ほととぎすーあやめひくひもーはやすきて
【壁草／大阪天満宮文庫本】／夏／永正
2(1505)年8月23日以後同3年3月以前

すさまじいそら
凄まじい空

→^{たびごろも}旅衣

ふけゆくまにーすさましきそら
たひころもーかさねまほしきーきぬたにて
【嵯峨千句】／花之何〔うめかかは〕／(元
龜4)天正元(1573)年正月9日～11日

しもふるはかりーすさましきそら
たひころもーたかうつさとにーいそくらむ
【大永三年月並千三百韻】／□□〔うめか
かや〕／月並千三百韻／大永3(1523)年2
月23日

たなびくよこぐものそら
棚引く横雲の空

→^{つきのこる}月残る

やまにたなひくーよこぐものそら
つきのよやーあくとみえてーのこるらむ
【紫野千句】／何木〔はにしける〕／延文
2(1357)年以後-応安3年6月以前

みねにたなひくーよこぐものそら
つきやまたーかすみかくれにーのこるらむ
【文明十二年千句8巻】／何田〔あめのよ
は〕／文明12(1480)年4月10日～*日

たびのそら
旅の空

→^{くさのまくら}草の枕

なくさめとーつきはさやけきーたひのそら
くさのまくらのーあかつきのつゆ
【聖廟千句】／何木〔きえぬるか〕／明応
3(1494)年2月10日～12日

かへるさのーあととほさかるーたひのそら
くさのまくらのーよなよなのつき

【大永三年月並千三百韻】／□□〔はるを
まつ〕／月並千三百韻／大永3(1523)年11
月23日

つきにありあけのそら
月に有明の空

→^{よをこめる}夜をこめる

つきにかすみのーありあけのそら
かへるかりーおもひたつ□□ーよをこめて
【成立不詳・宗祇以前15巻】／何船〔は
なそあをは〕／成立時不詳

つきはきりまにーありあけのそら
あきちかきーをちのかはおとーよをこめて
【天文年間百韻38巻】／何船〔あさかほ
に〕／天文12(1543)年7月29日

なかぞら
中空

→^{あきのはつかぜ}秋の初風

なかそらにーくるれはつきのーほのかにて
ふきたちけりなーあきのはつかせ
【毛利千句】／何船〔みてもおもふ〕／文
禄3(1594)年5月12日～16日

ゆくすゑもーおなしみやこのーなかそらに
ふなちにおもふーあきのはつかせ
【天文年間百韻38巻】／朝何〔またてき
く〕／天文9(1540)年4月25日

なかぞらのくも
中空の雲

→^{みえかくれする}見え隠れする

はつあきなれやーなかそらのくも
ふしはそのーきりよりうへにーみえかくれ
【文明十四年万句52巻】／山河〔なほさ
こそ〕／文明14(1482)年7月4日～9月
14日

こころさわかすーなかそらのくも
ふるさとにーちかつくやまのーみえかくれ
【竹林抄／新古典文学大系本】／旅／文明
8(1476)年5月頃

ながあめのそら
長雨の空

→^{ほととぎす}時鳥

ふりみふらすみーなかあめのそら
ほととぎすーつきになくよやーいつならむ

【永正年間百韻34巻】／山河〔とふひと
や〕／永正18(1521)年8月

なほはれかたきーなかあめのそら
ほととぎすーわかうたかひにーききわひて

【下草／金子本】／夏／延徳4(1492)年頃

ふかいよのそら
深い夜の空

ありあけ
→有明

かへすもまつもーふかきよのそら
をくるまのーつきさへにほふーありあけに

【永正年間百韻34巻】／何色〔うゑてみ
ぬ〕／永正6(1509)年間8月29日

とりのなくねはーふかきよのそら
あふさかやーすきのはしろきーありあけに

【永禄年間百韻28巻】／何人〔つきな
ら〕／永禄5(1562)年8月11日

ほたるとぶそら
蛍飛ぶ空

あきがくる
→秋が来る

たとるみちをやーほたるとぶそら
うすものーそてにおほゆるーあきのきて

【天文廿四年梅千句】／二字反音〔くれな
みの〕／天文24(1555)年正月7日

かせのよるよるーほたるとぶそら
あしかきのーすまひはかなきーあきのきて

【永正年間百韻34巻】／何船〔うちなひ
き〕／永正13(1516)年1月

むらさめのそら
村雨の空

やまのは
→山の端

たたくはかりのーむらさめのそら
やまのはのーくもにいりひのーかたわけて

【天正年間百韻57巻】／追悼〔としをふ
る〕／天正5(1577)年9月22日

なこりしはしのーむらさめのそら
やまのはのーきりまにうすきーよはのつき

【慶長年間百韻27巻】／〇〇〔ちりてさ
へ〕／慶長4(1599)年6月18日

ほととぎす
→時鳥

すすしくなりぬーむらさめのそら
ほととぎすーあきまつころやーかへるらむ

【行助関係4種】／行助連歌／天理本／

すくるもはやきーむらさめのそら
ほととぎすーいつれのくもにーやとるらむ

【専順関係2種】／夏／応仁元(1467)年
5月10日

ゆうぐれのそら
夕暮れの空

なる
→なる

やますみふかきーゆふくれのそら
いつしかもーまなくしくれにーなりぬらむ

【永正年間百韻34巻】／何路〔あきにか
せ〕／永正8(1511)年7月14日

つくつくむかふーゆふくれのそら
きえにしはーいつれのくもにーなりぬらむ

【園塵第三／統群書類従本】／雑下／文龜
元(1501)年3月18日

ほととぎす
→時鳥

あつきひしのくーゆふくれのそら
ひとこゑもーまれになりたるーほととぎす

【永禄元年花千句】／〇〇〔さそふなよ〕
／永禄元(1558)年3月23日～25日

そことなにはのーゆふくれのそら
ほととぎすーあしのしのひにーなきすきて

【竹林抄／新古典文学大系本】／夏／文明
8(1476)年5月頃

うらみをかくるーゆふくれのそら
ほととぎすーまたせてもたたーひとこゑに

【壁草／大阪天満宮文庫本】／雑上／永正
2(1505)年8月23日以後同3年3月以前

やまさ
→山荘

なくさめかねつーゆふくれのそら
やまさとはーことわりよりもーさひしくて

【竹林抄／新古典文学大系本】／雑上／文
明8(1476)年5月頃

あしたのかすみ一ゆふくれのそら
やまさとは一はなのほひに一とりのこゑ

【論書4種】／宗長／

^{わがこころ}
→我が心

なかめわひぬる一ゆふくれのそら
さりとも一おもひななれそ一わかこころ

【竹林抄／新古典文学大系本】／恋下／文
明8(1476)年5月頃

おもひなつけそ一ゆふくれのそら
こひしさも一たかなすことそ一わかこころ

【北畠家連歌合／書陵部本】／北畠家連歌
合／文明2(1470)年正月6日

^{ゆきのなかぞら}
雪の中空

^{ふきとふく}
→ふきと吹く

くれわたりたる一ゆきのなかぞら
ふきとふく一あらしのおとは一しつかにて

【羽柴千句】／何人[すくにゆく]／天正
6(1578)年5月18・19日

のはちりきゆる一ゆきのなかぞら
ふきとふく一かせよりのちの一あさつくひ

【天正年間百韻57巻】／x x [わけゆか
は]／天正4(1576)年8月19日

^{ゆくすゑのそら}
行く末の空

^{かえるき}
→帰るき

こたへかたしや一ゆくすゑのそら
ことのはも一およはぬはなの一かへるさに

【葉守千句】／唐何[したをれを]／長享
元(1487)年10月9日<~11日>

おもへはやすき一ゆくすゑのそら
かへるさに一なるをのふなち一やまみえて

【大永四年月並千二百韻】／□□ [かけき
ゆる]／月並千二百韻／大永4(1524)年8
月23日

^{うゑ置く}
→うゑ置く

□□□□□□一ゆくすゑのそら
とくおそき一はなをかすかす一うゑおきて

【天正四年万句70巻】／何鳥[はつしも
は]／天正4(1576)年5月6日~7月19日

まかひやせまし一ゆくすゑのそら
しらゆきの一ほとをとほなを一うゑおきて

【基佐集／静嘉堂文庫本】／春／永正
6(1509)年以前

^{よこぐものそら}
横雲の空

^{はるのよ}
→春の夜

かすみのまよふ一よこぐものそら
はるのよの一ゆめのわかれは一たとたとし

【文明十四年万句52巻】／手何[はふつ
たに]／文明14(1482)年7月4日~9月
14日

ひきわかれゆく一よこぐものそら
はるのよの一つきにひとすち一かりとひて

【論書4種】／宗長／

た

^{うえるた}
植える田

^{はれたさみだれのそら}
→晴れた五月雨の空

さなへとり一みつせきいれて一ううるたに
いつをはれまそ一さみだれのそら

【看聞日記紙背50巻】／何人[はなのひ
も]／応永27(1420)年閏1月13日

ううるたに一よそのかけひを一せきいれて
はれてくもある一さみだれのそら

【看聞日記紙背50巻】／何船[ことはな
に]／応永31(1424)年9月27日

^{うちかえすた}
打ち返す田

^{かわずなく}
→蛙鳴く

うちかへす一たのものなかれ一あめはれて
をりをえかほに一かはつなくなり

【天文十八年梅千句】／何人[みしいろは]
／天文18(1549)年正月11日

うちかへす一こそあらたは一さひしきに
ときもわすれす一かはつなくなり

【天文廿四年梅千句】／花之何 [かみかきの]／天文 24(1555) 年正月 7 日

おやまだのすえ
小山田の末

→霜枯れ

かへしすてたる一をやまたのすゑ
しもかれの一くすはにかはる一あきのかせ

【天正年間百韻 5 7 巻】／何船 [もしほくさ]／天正 7(1579) 年 1 月 13 日

かりのこしぬる一をやまたのすゑ
しもかれの一ひとむらすすき一ほのかにて

【天正年間百韻 5 8 巻】／□□ [あさなあさな]／天正 15(1587) 年 1 月 3 日

おやまだのはら
小山田の原

→秋更ける

やへにきりふる一をやまたのはら
ひとはたた一かりにたにこぬ一あきふけて

【伊予千句】／何舟 [わきてみむ]／大永 2(1522) 年 8 月 4 日～8 日

かりのゆくへの一をやまたのはら
みねたかみ一ふきこすかせの一あきふけて

【永正年間百韻 3 4 巻】／何船 [うちなひき]／永正元 (1504) 年 7 月

たえだえ

みずのたえだえ
水の絶え絶え

→朝氷

むすひすてたる一みつのたえたえ
ふゆはまた一あさかのぬまの一あさこほり

【園塵第一／統群書類従本】／冬／長享 2 年

かけひのいほに一みつのたえたえ
あさこほり一こよひはしめて一むすふらむ

【宗長関係 8 種】／老耳／天理本／

みちたえだえ
道絶え絶え

→雪ふる

みちたえたえの一みねのふるてら
あくれとも一かをとちたる一ゆきふりて

【表佐千句】／何路 [みなかみの]／文明 8(1476) 年 3 月 6 日<～8 日>

みちたえたえの一すゑのふるはた
つまきこる一そはのいはかき一ゆきふりて

【宗長関係 8 種】／老耳／天理本／

たえま

くものたえま
雲の絶え間

→峰の嵐

くものたえまに一ほのくるるやま
ふきおくる一みねのあらしの一はつしくれ

【天文年間百韻 3 8 巻】／何木 [やまかけ]／天文 21(1552) 年 3 月 11 日

くれそむる一くものたえまに一つきみえて
みねのあらしの一むかふしはのと

【竹林抄／新古典文学大系本】／雑上／文明 8(1476) 年 5 月頃

たえる

おもいたえる
思い耐える

→連れない

おもひたえよの一ひとのこころか
つれなくは一やましといへは一とふもうし

【壁草／大東急記念文庫本】／恋上／永正 8(1512) 年 11 月 3 日～永正 9 年

おもひたえよの一こころうらめし
つれなくは一みえぬものから一とにかくに

【老葉／毛利本】／恋下／(文明 17(1485) 年 7 月 23 日頃)

たかい

かげたかくなる
影高くなる

→飛ぶ螢

しければやまそ一かけたかくなる
なつのより一くものうへまで一とふほたる

【熊野千句】／何色〔なみしけし〕／文正

元(1466)年3月以前

さはへのくさそーかけたかくなる

ひとつつつーやとりをいててーとふほたる

【園塵第一／統群書類従本】／夏／長享2

年

みねたかい
峰高いきおじかのこえ
→さ牡鹿の声みねたかみーへたつるつきのーあきふけて
つまやいつくのーさをしかのこゑ

【宗長追善千句】／白何〔みしやいつ〕／

(享禄5)天文元(1532)年3月25日

かたをかのーへのむかひのーみねたかみ

あけはなれてもーさをしかのこゑ

【元龜年間百韻6巻】／何人〔はなのとき

も〕／元龜4(1573)年6月6日

たき

たきのいわなみ
滝の岩浪おとわがわ
→音羽川

こすゑにちるやーたきのいはなみ

おとはかはーおとはかりしてーくるるひに

【聖廟千句】／初何〔きのふより〕／明応

3(1494)年2月10日～12日

かすみかくれにーたきのいはなみ

やまとほくーなかれいてたるーおとはかは

【寛正年間百韻20巻】／何人〔けふこす

は〕／寛正3(1462)年2月27日

たく

あしひたくかけ
葦火焚く影とがほたる
→飛ぶ螢

おなしみなとのーあしひたくかけ

うちみたれーくるるかたよりーとふほたる

【天正年間百韻57巻】／山何〔あをやき

の〕／天正3(1575)年2月2日

はなれこしまにーあしひたくかけ

とふほたるーゆくかたもなくーさよふけて

【壁草／大阪天満宮文庫本】／夏／永正

2(1505)年8月23日以後同3年3月以前

たけ

いくえとよらのたけのしたみち
幾重豊浦の竹の下道またつきあるゆきのほれる
→また月ある雪の晴れる

いくへとよらのーたけのしたみち

にしにまたーつきあるゆきのーけさはれて

【竹林抄／新古典文学大系本】／冬／文明

8(1476)年5月頃

いくへとよらのーたけのしたかけ

あめにまたーつきあるゆきのーよるはれて

【心敬関係10種】／心玉集／静嘉堂文庫本

／

くれたけ
呉竹ゆきのしたいお
→雪の下庵

くれたけにーいくたひあられーみたるらむ

けさこそつもるーゆきのしたいほ

【池田千句】／何船〔おそくとく〕／永正

7(1510)年春以前<永正5年春>

をりふしもーすきゆくとしのーくれたけに

いてむかたなきーゆきのしたいほ

【弘治三年春雪千句】／何木〔はなならて〕

／弘治3(1557)年正月7日～9日

をしめともーふゆもほとなくーくれたけに

つもりにけりなーゆきのしたいほ

【至徳以前百韻7巻】／x x〔はなちりて〕

／存疑／至徳4(1387)年以前

とりのこえごえ
→鳥の声々

くれたけのーよはのあらしにーめはさめて

かねもきこゆるーとりのこゑこゑ

【文明年間百韻34巻】／何船〔そめよな

ほ〕／文明14(1482)年9月20日

くれたけのーはやしやかせのーさわくらむ

やとりさためぬーとりのこゑこゑ

【元和年間百韻24巻】／□□〔そらにみ

つ〕／元和8(1622)年10月19日

こぼれるたけのはのつゆ
零れる竹の葉の露かたしきのまくら
→片敷の枕

こほれてつたふーたけのはのつゆ
かたしきのーまらのうへのーあきのかせ

【弘治三年春雪千句】／何舟〔きえてたに〕
／弘治 3(1557) 年正月 7 日～9 日

こほれきにけりーたけのはのつゆ
かたしきのーそてもまくらもーひややかに

【元和年間百韻 2 4 巻】／□□〔くにくに
の〕／元和 6(1620) 年 9 月 15 日

たけうちなびく
竹打ち靡く

とふほたる
→飛ぶ虫

たけうちなびくーをちのかはきり
とふほたるーここにかしこにーくれそめて

【石山四吟千句】／何人〔うめかえは〕／
天文 24(1555) 年 8 月 15 日～19 日

たけうちなびくーかけのすすしさ
ほのかにもーかせのまにまにーとふほたる

【天正年間百韻 5 7 巻】／初何〔はるたち
て〕／裏白／天正 12(1584) 年 1 月 3 日

たけのすえざえ
竹の末々

かすか
→微か

ゆきをれふかきーたけのすゑすゑ
かすかにもーしはけふらせてーひともなし

【永禄年間百韻 2 8 巻】／何船〔うたふよ
の〕／永禄 5(1563) 年 12 月 9 日

ふくかせしるきーたけのすゑすゑ
かすかにもーみちあるかたやーさとならむ

【文禄年間百韻 1 2 巻】／□□〔はなのい
ろや〕／文禄 4(1595) 年 1 月 30 日

たけのひとむら
竹の一群

かたおかのべ
→片岡野辺

たくひのかけはーたけのひとむら
つつしさくーかたをかのへのーあめのうち

【天文廿四年梅千句】／何木〔つみそへよ〕
／天文 24(1555) 年正月 7 日

いほのすさひやーたけのひとむら
ゆくひともーかたをかのへのーふゆかれに

【春夢草／書陵部本】／雑／永正 12(1516)
年、13 年

やまもと
→山本

なひくやかせのーたけのひとむら
やまもとのーつゆのしたみちーくさかれて

【文明年間百韻 3 4 巻】／何人〔ちきりあ
れや〕／文明 14(1482) 年 3 月 20 日

かすみになひくーたけのひとむら
やまもとのーはるのあさはーゆきはれて

【老葉／吉川本】／春／文明 13(1481) 年
夏頃

たけをうつこえ
竹を打つ声

よがふける
→夜が更ける

あられときときーたけをうつこえ
ねぬとりよーあなかまよはもーふけぬらむ

【伊庭千句】／三字中略〔ちりやすき〕／
大永 4(1524) 年 3 月 17 日～21 日

ゆふへのあめのーたけをうつこえ
いつのまにーあられふるよのーふけぬらむ

【竹林抄／新古典文学大系本】／冬／文明
8(1476) 年 5 月頃

なびきあうたけ
靡き合う竹

つづく
→続く

なひきあひたるーたけのすゑすゑ
つきうつるーたのもやさにとーつつくらむ

【天正年間百韻 5 7 巻】／何人〔わかくさ
も〕／天正 11(1583) 年 1 月 10 日

なひきあひたるーたけのむらむら
まつたてるーけふりやたえすーつつくらむ

【天正年間百韻 5 7 巻】／□□〔ゆふたち
の〕／天正 17(1589) 年 6 月 16 日

たける

としたける
年長ける

ゆめもうつつも
→夢も現も

いにしへをーおもひわすれすーとしたけて
ゆめもうつつもーおなしかりのよ

【看聞日記紙背 5 0 巻】／山何〔まつそひ
て〕／応永 26(1419) 年 2 月 6 日

つゆのみとーおもはぬほとにーとしたけて
ゆめもうつつもーあらましのうち

【看聞日記紙背50巻】／片何[しもやいと]／応永31(1424)年10月26日

たそがれ

ふじのたそがれ
藤の黄昏

はるのほととぎす
→春の時鳥

おほつかなきはーふちのたそがれ
はるとてやーしのひねならしーほととぎす

【称名院追善千句】／何牆[さかのやま]／永禄6(1563)年12月14日～18日

まつのこすゑのーふちのたそがれ
はるこそとーはつねまたるれーほととぎす

【毛利千句】／一字露頭[なつのひも]／文禄3(1594)年5月12日～16日

たちばな

かぜにおうたちばな
風に匂う橘

たますだれ
→玉簾

かせのいつくかーにほふたちはな
ふかきよをーしらてまきつるーたますたれ

【天文廿四年梅千句】／山河[うちなひき]／天文24(1555)年正月7日

つゆちるかせにーにほふたちはな
たますたれーのきはのつきにーまきあけて

【新撰菟玖波集／実隆本】／秋下／明応4(1495)年9月26日

におうたちばな
匂う橘

→小簾の外

したかせとほくーにほふたちはな
こすのとにーくもますすしきーつきふけて

【天文年間百韻38巻】／何路[ひとこゑや]／天文14(1545)年5月8日

くちきのかたえーにほふたちはな
こすのとにーたちすすみつつーはしるして

【天正四年万句70巻】／何文[しのひねに]／天正4(1576)年5月6日～7月19日

あきつゆ
→朝露

こかくれてのみーにほふやまふき
あさつゆにーぬれてやてふのーめくるらむ

【大永年間百韻14巻】／何木[はなにたて]／大永8(1528)年2月23日

みちのへかけてーにほふやまふき
おきこほれーかすむまかきのーあさつゆに

【月村抜句／書陵部本】／永正十四年／

のきのたちばな
軒の橘

ほととぎす
→時鳥

かけさしおほふーのきのたちはな
くれぬとてーこのさととふかーほととぎす

【成立不詳・宗砌以前6巻】／唐何[なてしこの]／成立時不詳

うゑしをおもふーのきのたちはな
こゑたててーきなけみきりのーほととぎす

【成立不詳・宗祇以前15巻】／何船[あけほのや]／存疑／成立時不詳

ははかりのこるーのきのたちはな
いつくともーしらすなきゆくーほととぎす

【文禄二年千句10巻】／夕何[しくれても]／文禄2(1593)年4月8日～10日

たつ

すぎのむらだち
杉の群立ち

すえにちるはな
→末に散る花

いらかさひしきーすぎのむらたち
かすかなるーこけちのすゑはーちるはなに

【弘治年間百韻8巻】／x x[をりのこす]／弘治2(1556)年9月10日

あらしにあくるーすぎのむらたち
さきかくすーこすゑわかれてーちるはなに

【成立不詳・宗養以前8巻】／何人[あをやきや]／成立時不詳

すずしさにあきたつ
涼しさに秋立つ

ひぐらしのこゑ
→ 蝸の声

すすしくも一ゆふひのくもに一あきたちて
こすゑしらるる一ひぐらしのこゑ

【永禄元年花千句】／□□ [あたりまで]
／永禄元(1558)年3月23日～25日

すすしさの一けふよりしるき一あきたちて
やまはくもまの一ひぐらしのこゑ

【天文年間百韻38巻】／x x [したみつ
も]／天文24(1555)年9月2日

たつてうかれる
立って浮かれる

きそろう
→ 誘う

かすめるのへに一たちそうかるる
そらたかく一ひはりやともを一さそふらむ

【延徳年間百韻16巻】／何人 [ここのへ
の]／延徳2(1490)年3月8日

そこはかとなく一たちそうかるる
ものおもひ一やとやこころも一さそふらむ

【明応年間百韻22巻】／何路 [こそたち
し]／明応6(1497)年1月1日

たつひのなつごろも
たつ日の夏衣

やまほととぎす
→ 山時鳥

つゆそおく一たちていくかの一なつころも
たひにはつれよ一やまほととぎす

【池田千句】／何路 [はなはしるや]／永
正7(1510)年春以前<永正5年春>

なつころも一たちかふるひかす一ほともなし
うへなくときか一やまほととぎす

【大永年間百韻14巻】／名号 [なつころ
も]／大永8(1528)年4月12日

なつこたち
夏木立

やまほととぎす
→ 山時鳥

しらかしの一ゆきまやみねの一なつこたち
くもよりいつる一やまほととぎす

【永禄石山千句】／初何 [しらかしの]／
永禄7(1564)年5月12日

はなはきのふ一もみちもあすか一なつこたち
またはつねきく一やまほととぎす

【園塵第二／統群書類従本】／夏／明応
4(1495)年早春

はるたつ
春立つ

ひかりのどか
→ 光長閑

ひさかたの一くもぬのにはの一はるたちて
すたれをまけは一ひかりのとけし

【文禄年間百韻12巻】／□□ [わかなつ
みし]／文禄2(1593)年1月8日

うくひすの一こゑにちさとの一はるたちて
そとにもうつる一ひかりのとけし

【慶長年間百韻27巻】／□□ [まつやな
ほ]／裏白／慶長10(1605)年1月3日

むらさめがたつ
村雨がたつ

つゆにうつろう
→ 露に移ろう

むらさめの一けしきをそらに一さきたてて
のへのくさはそ一つゆにうつろふ

【池田千句】／何田 [をとめこか]／永正
7(1510)年春以前<永正5年春>

むらさめの一あとはほのかに一きりたちて
つゆにうつろふ一ありあけのかけ

【大永四年月並千二百韻】／□□ [としな
みの]／月並千二百韻／大永4(1524)年12
月23日

たとえる

こちようのたとえ
胡蝶の喩え

ももとせ
→ 昔年

こてふのたとへ一けにもあたしみ
ももとせも一すくれはかりの一いのちにて

【看聞日記紙背50巻】／何路 [うのはな
の]／応永30(1423)年4月4日

こてふのたとへ一けにもあたしみ
ももとせも一ちかつくよはひ一おもはず口

【看聞日記紙背50巻】／何船 [ゆきにみ
て]／応永32(1426)年11月25日

なににたとえよう
何に譬えよう

ふくかせ
→吹く風

かかるうらみを一なににたとへむ
あつきひの—ころものすそを—ふくかせに

【宝徳四年千句】／何路〔はなにほふ〕／
宝徳4(1452)年3月12日

よのなかを—なににたとへむ
ふくかせに—とまりさためぬ—あまのつり
ふね

【菟玖波集／広島大学本】／雑体／文和
5(1356)年冬～翌年の春

たどる

かすみにたどるみち
霞にたどる道

よふことり
→呼子鳥

かすみにたどる—いはのかけみち
よふことり—なきてころの—しるへせよ

【葉守千句】／白何〔こかしを〕／長享
元(1487)年10月9日<～11日>

かすみにたどる—みちのをちこち
よふことり—こゑするかたに—ひはくれて

【天文十八年梅千句】／青何〔ゆけはうめ〕
／天文18(1549)年正月11日

たなばた

たなばた
七夕

ありあけのそら
→有明の空

たなはたの—まれのひとよも—よよはへぬ
まちえしあきの—ありあけのそら

【熊野千句】／何人〔よろつとせ〕／文正
元(1466)年3月以前

たなはたの—いとよりけなる—はきのつゆ
かりなくつきは—ありあけのそら

【天文年間百韻38巻】／何人〔はなのい
ろも〕／天文14(1545)年2月25日

たなびく

たなびくよこぐものそら
棚引く横雲の空

つきのころ
→月残る

やまにたなびく—よこぐものそら
つきのよや—あくとみえて—のころらむ

【紫野千句】／何木〔はにしける〕／延文
2(1357)年以後-応安3年6月以前

みねにたなびく—よこぐものそら
つきやまた—かすみかくれに—のころらむ

【文明十二年千句8巻】／何田〔あめのよ
は〕／文明12(1480)年4月10日～*日

たに

たにのいお
谷の庵

すむみねのふるでら
→住む峰の古寺

ふくるよに—つきまちかぬる—たにのいほ
すまはやあきの—みねのふるてら

【河越千句】／二字反音〔はるみても〕／
文明2(1470)年正月10～12日

ちきりても—ひととははめや—たにのいほ
みれはつきすむ—みねのふるてら

【竹林抄／新古典文学大系本】／秋／文明
8(1476)年5月頃

たのしむ

たのしみをきわめる
楽しみを極める

かりのこのよ
→仮のこの世

たのしみを—きはめよとのみ—とくのりに
かりのこのよは—すみもわひめや

【飯盛千句】／何路〔しけるきに〕／永祿
4(1561)年5月27日～29日

たのしみを—きはむるくには—たのもしや
かりのこのよは—とにもかくにも

【文明十四年万句52巻】／二字反音〔は
なはみな〕／文明14(1482)年7月4日～
9月14日

たのしむ
楽しむ→^{きとのとみくさ}里の菫草

たみまでも一をさまるよをは一たのしみて
ゆるすみつきは一さとのとみくさ

【看聞日記紙背50巻】／山河〔ちよもみ
む〕／応永19(1412)年1月14日

けふりたつ一あきのかまとは一たのしみて
かりをさめたる一さとのとみくさ

【看聞日記紙背50巻】／何木〔としもは
や〕／応永27(1421)年12月12日

たのむ

すみよしのまつとたのむ
任吉の松と頼む→^{あだなみがそでぬらす}徒浪が袖濡らす

すみよしの一まつとたのめし一かひもなく
なにあたなみの一そでぬらすらむ

【菟玖波集／広島大学本】／恋上／文和
5(1356)年冬～翌年の春

すみよしの一まつとたのめし一ほかにまた
なにあたなみの一そでぬらすらむ

【菟玖波集／広島大学本】／恋中／文和
5(1356)年冬～翌年の春

ないたのむ
何頼む→^{あさがおのはな}朝顔の花

わかよのつゆに一ないたのむらむ
あさかほの一はなにもみをは一おとろかて

【明応年間百韻22巻】／何人〔たますた
れ〕／明応5(1496)年6月7日

はかなきころ一ないたのむらむ
あさかほの一はなに□□□の一うちみたれ

【永禄年間百韻28巻】／□□〔ゆきにう
め〕／永禄5(1562)年2月1日

ひとだのみ
人頼み→^{おとずれて}訪れて

みにしむかせそ一ひとたのめなる
いまこむと一ゆふくれことに一おとつれて

【因幡千句】／初何〔ゆきはなほ〕／文明
7(1475)年11月26日<~28日>

はかなのゆめや一ひとたのめなる
わすらるる一ちきりになせは一おとつれて

【明応年間百韻22巻】／何路〔うつろは
て〕／明応3(1494)年10月30日

→^{なれなれる}慣れ慣れる

そよきてをきの一ひとたのめなる
さをしかの一きりのまかきに一なれなれて

【平松文庫本千句】／□□〔ふゆはつき〕

／

ひとたのめなる一くれもあやなし
ささかにの一かねてしるきも一なれなれて

【那智筆／北野天満宮本】／永正十三年／

みわたのむな
身を頼むな→^{いのち}命

いつくもかりの一みをなたのみそ
たれもよに一ありははてしの一いのちにて

【永禄年間百韻28巻】／山河〔ゆふかほ
に〕／永禄2(1559)年5月20日

ゆふへのつゆの一みをなたのみそ
けさのまを一つきかけろふの一いのちにて

【宗砌関係9種】／宗砌句／静嘉堂文庫本a

／

たび

いづるたびびと
出る旅人→^{かりまくら}仮枕

まろみあへす一いづるたびひと
かりまくら一かねややまちに一さそふらむ

【寛正年間百韻20巻】／唐何〔せみのは
の〕／寛正4(1463)年6月23日

やすらふのへを一いづるたびひと
かりまくら一むすへはつきの一おつるよに

【老葉／吉川本】／旅／文明13(1481)年
夏頃

たびごろも
旅衣

→野は遥か

たひころも一たちやすらはむ一かけもなし
のるこまなつむ一のははるかなり

【天文年間百韻38巻】／何路〔ひとこゑ
や〕／天文14(1545)年5月8日

たひころも一ひもなかあめの一そほふりて
かすみわけこし一のははるかなり

【天和年間百韻2巻】／□□〔おいかみに〕
／天和2(1682)年4月3日

たびにある
旅にある

→草枕

たひにしあれは一やとりとらなむ
いりひさす一あさちかもとの一くさまくら

【伊庭千句】／山何〔たまたれの〕／大永
4(1524)年3月17日～21日

たひにしあれは一はるそのうき
とほきののつぎにゆふへの一くさまくら

【永享年間百韻4巻】／山何〔くちてけり〕
／永享12(1440)年10月16日

たびのかなしさ
旅の悲しさ

→時鳥

なくさめかねつ一たひのかなしさ
ほととぎす一まくらのうへに一なきすてて

【顕証院会千句】／唐何〔みたれけり〕／
宝徳元(1449)年8月19日～21日

とほくもなれる一たひのかなしさ
ききなるる一やまをいてゆく一ほととぎす

【明応年間百韻22巻】／何船〔はなそは
る〕／明応2(1493)年3月25日

たびのころもで
旅の衣手

→里もない

しくれそぬるる一たひのころもて
めにかけて一いそくこかくれ一さともなし

【聖廟千句】／山何〔ぬるとりの〕／明応
3(1494)年2月10日～12日

つゆけささそな一たひのころもて
やとるへき一のはくれそめて一さともなし

【明応年間百韻22巻】／何人〔ふきすて
よ〕／明応7(1498)年間10月6日

たびのそら
旅の空

→草の枕

なくさめと一つきはさやけき一たひのそら
くさのまくらの一あかつきのつき

【聖廟千句】／何木〔きえぬるか〕／明応
3(1494)年2月10日～12日

かへるさの一あととほさかる一たひのそら
くさのまくらの一よなよなのつき

【大永三年月並千三百韻】／□□〔はるを
まつ〕／月並千三百韻／大永3(1523)年11
月23日

たびはうい
旅は憂い

→袖が露つぼい

たひそうき一こころはあきに一とまりふね
やとなきあまり一そてはつゆけし

【紫野千句】／何路〔あふちさく〕／延文
2(1357)年以後～応安3年6月以前

たひそうき一くさのまくらを一ゆふまくれ
はらふともなく一そてはつゆけし

【太神宮法楽千句】／何路〔ふきなかす〕
／長享2(1488)年7月

たびはかなしい
旅は悲しい

→草枕

あらましにさへ一たひそかなしき
くさまくら一いもをおきては一いかかねむ

【住吉千句】／何路〔つきすめは〕／大永
元(1521)年11月1日～14日

みやこにはにす一たひそかなしき
くさまくら一とふらふつきは一ありなから

【文明十四年万句52巻】／夢想〔そのし
なも〕／文明14(1482)年7月4日～9月
14日

→仮枕

ともはあれとも一たひそかなしき
かりまくら一くにかはりたる一かたらひに

【永原千句】／何人〔みわたせは〕／明応
9(1500)年7月17日

にたるをみるも一たひそかなしき
まよひきて一くもゐるみねの一かりまくら

【老葉／毛利本】／恋上／(文明17(1485)
年7月23日頃)

つきのたびのみち
月の旅の道

→後の世の秋

つきならば一いさとてゆかむ一たひのみち
まよふななけく一のちのよのあき

【文明十四年万句5 2巻】／花何〔みたす
なよ〕／文明14(1482)年7月4日～9月
14日

はれよくも一つきこそたより一たひのみち
おもふもつらし一のちのよのあき

【宗硯関係9種】／宗硯句／静嘉堂文庫本b

／

わかれるたびはかなしい
別れる旅は悲しい

→逢う人

わかれゆくゆく一たひそかなしき
あふひとも一かたみになこり一うちなきて

【壁草／大阪天満宮文庫本】／恋下／永正
2(1505)年8月23日以後同3年3月以前

けふわかれしも一たひそかなしき
あふひとも一またふるさとの一なこりにて

【宗長関係8種】／老耳／天理本／

たましまがわ

たましまがわ
玉島川

→水の錆鮎

なみにちる一たましまかはの一とまりふね
つきにひかるや一みつのさひあゆ

【応永年間百韻7巻】／□□〔x xはせて〕
／応永24(1417)年3月16日

よるひかる一たましまかはの一あきのつき
みしふかくれの一みつのさひあゆ

【文安年間百韻9巻】／何船〔ときはなる〕
／文安元(1444)年10月12日

たまずさ

かりのたまずさ
雁の玉章

→隔つ古里

たかおとつれそ一かりのたまつさ
ふるさとの一そらをはきりや一へたつらむ

【文安雪千句】／何船〔かせにとふ〕／文
安2(1445)年10月18日

かりねにたのむ一かりのたまつさ
ふるさとは一いくくもみちを一へたつらむ

【池田千句】／何x〔ゆきそちる〕／永正
7(1510)年春以前<永正5年春>

たまぼこ

たまぼこ
玉鉢

→袖の色々

たまぼこの一たそかれときを一ゆきすきて
あやめもわかぬ一そでのいろいろ

【紹巴亡父追善千句】／何袋〔みつのあわ
の〕／天文24(1555)年3月26日～晦日

たまぼこの一ゆくへわかれぬ一ひはくれて
かすみにかはす一そでのいろいろ

【大永三年月並千三百韻】／□□〔こほる
なよ〕／月並千三百韻／大永3(1523)年7
月23日

たよる

まつをたよりに
松を頼りに

→立ち返る

まつをたよりに一すめるしはのと
たちかへる一やとははしらの一くちのこり

【天正年間百韻5 7巻】／□□〔うくひす
も〕／天正14(1586)年1月4日

まつをたよりに一かこふしはかき
たちかへる一はるもこころも一わかやかに

【文明十四年万句5 2巻】／二字反音〔ま
つうきて〕／文明14(1482)年7月4日～
9月14日

だれ

たがさと
誰が里ありあけがた
→有明方うめのはな一たかさとまてかーにほふらむ
ありあけかたの一はるのよのつき【大永三年月並千三百韻】／□□〔はなに
つき〕／月並千三百韻／大永 3(1523) 年 3
月 23 日たかさとまてかーしくれゆくらむ
かみなつきーありあけかたの一ねさめして【大永三年月並千三百韻】／□□〔つゆも
をし〕／月並千三百韻／大永 3(1523) 年 9
月 23 日だれかえる
誰帰るひともし
→人もなしわかひへいへにーたれかへるらむ
やまさくらーちるこのもとはーひともし【初瀬千句】／何人〔なつやまに〕／享徳
元・2(1452) 年、4 月たれかへるらむーまつかけのさと
みちのへにーかせはおとしてーひともし【文明年間百韻 3 4 巻】／何人〔よるはつ
き〕／文明 18(1486) 年 2 月 6 日だれなのか
誰なのかこころであればなあ
→心であればなあおろそかのーすまひもゆかしーたれならむ
きよきをまなふーこころともかな【永原千句】／薄何〔ふきとちよ〕／明応
9(1500) 年 7 月 17 日よにすみてーしをれぬそてよーたれならむ
うきにつれなきーこころともかな【壁草／大阪天満宮文庫本】／雑下／永正
2(1505) 年 8 月 23 日以後同 3 年 3 月以前だれにわすれる
誰に忘れるつらい
→辛いおもひなそへそーたれにわすれむ
つらしとてーうつるならひはーしらぬよに【文明年間百韻 3 4 巻】／山何〔かせにた
ちし〕／文明 18(1486) 年 9 月 30 日こひしきことをーたれにわすれむ
つらしとてーまたいつかたにーうつらまし【延徳年間百韻 1 6 巻】／何路〔かけすす
し〕／延徳 4(1492) 年 6 月 1 日だれをとおうか
誰を訪おうかくさのほら
→草の原たれをかとはむーしらぬゆふくれ
さきたたはーはなもあはれめーくさのほら【葉守千句】／薄何〔いはほにも〕／長享
元(1487) 年 10 月 9 日～11 日>たれをかとはむーあはれともみし
ちきりてもーえやはなへてのーくさのほら【明応年間百韻 2 2 巻】／何人〔かきりさ
へ〕／明応 8(1499) 年 3 月 20 日きえなむつゆをーたれにとはまし
よのつねのーあはれをたのむーくさのほら【享禄年間百韻 8 巻】／何船〔はるのいろ〕
／享禄 5(1532) 年 1 月 18 日あきになるかとーたれにとはまし
つきをたたーすむひとなれやーくさのほら【竹林抄／新古典文学大系本】／秋／文明
8(1476) 年 5 月頃だれをまつ
誰を待つゆうべ
→夕べたまゆらのよにーたれをまつらむ
いのちこそーものおもはするーゆふへなれ【宝徳四年千句】／唐何〔さすはなや〕／
宝徳 4(1452) 年 3 月 12 日をきふくかせにーたれをまつらむ
うきあきもーきみこそしらむーゆふへなれ

【老葉／書陵部宗訳筆本】／恋下／

よぶこどり
→呼子鳥はるゆくまでにーたれをまつらむ
みをつくすーこゑのかなしきーよぶこどり

【享禄年間百韻8巻】／懐旧〔ゆふたちの〕
／享禄5(1532)年6月8日

はなのあるしの一たれをまつらむ
こえくれは一なほはなふかく一よふことり

【下草／龍谷大学本】／春／延徳2(1490)
年～3年春頃

だれをまつむしのなく
誰を松虫の鳴く

とうひともあらしのやまのあきのくれ
→訪う人も嵐の山の秋の暮れ

あかつきたれを一まつむしのなく
とふひとも一あらしのやまの一あきのくれ

【竹林抄／新古典文学大系本】／秋／文明
8(1476)年5月頃

いまはたれをか一まつむしのなく
とふひとも一あらしのやまの一あきのくれ

【行助関係4種】／行助句／伊地地本／

ちかい

あきちかくなる
秋近くなる

こころほそいはなおちるころ
→心細い花落ちる頃

おほつかな一あきもやちかく一なりぬらむ
こころほそしな一はなおつころ

【心敬関係10種】／芝草内岩橋／本能寺本
／

くれそうき一あきもやちかく一なりぬらむ
こころほそしな一はなおつころ

【河越千句】／山何〔うくひすに〕／文明
2(1470)年正月10～12日

ちかいかわおと
近い川音

すずしさ
→涼しさ

なみたかかれや一ちかきかはおと
すずしさは一またぬにうかふ一あきのくも

【石山四吟千句】／薄何〔うつせみの〕／
天文24(1555)年8月15日～19日

あめのうちより一ちかきかはおと
すずしさは一なつのほかなる一やなきかけ

【成立不詳・宗長以前15巻】／□□〔ち
らぬより〕／成立時不詳

ちかいやまざと
近い山里

おもひやる
→思ひやる

めさますかねの一ちかきやまざと
おもひやる一みやこのつきに一まくらして

【表佐千句】／何衣〔よるやあめ〕／文明
8(1476)年3月6日～8日>

ゆきのつまきの一ちかきやまざと
おもひやる一ひなのすまひの一ふゆこもり

【明応年間百韻22巻】／何人〔ふきすて
よ〕／明応7(1498)年間10月6日

のべちかいうぐいす
野辺近い鶯

ゆきのたけのすえづえ
→雪の竹の末々

のへちかき一やとのうくひす一ねをたえて
ゆきをれふかき一たけのすえすえ

【永禄年間百韻28巻】／何船〔うたふよ
の〕／永禄5(1563)年12月9日

のへちかき一にはのうくひす一こゑそひて
ゆきのとけゆく一たけのすえすえ

【天正年間百韻57巻】／何路〔いろもか
も〕／裏白／天正14(1586)年1月3日

やまちかい
山近い

はなまちどおい
→花待ち遠い

やまちかき一よしののさとは一かせさえて
はなまちとほに一おもふはつはる

【美濃千句】／何心〔つゆにきえ〕／文明
4(1473)年12月16日～21日

やまちかき一いほのきたまと一ひきとちて
はなまちとほに一おくるつれつれ

【寛文年間百韻22巻】／□□〔つきやあ
らぬ〕／寛文13(1673)年7月19日

ちぎり

ただありなしのちぎり
ただ有り無しの契り

うちのかたち
→内の形

ただありなしの一ちぎりなりけり
あめつちも一うらみのうちの一かたちにて

【文明年間百韻 3 4 卷】／何路 [みるま
ま] 文明 12(1480) 年 8 月

たたありなしの一ちきりなりけり
ひともよも一かかみのうちの一かたちにて

【老葉／吉川本】／雑上／文明 13(1481) 年
夏頃

ちぎり
契り

ひとのおもかけ
→人の面影

またこぬは一ゆめにまさらぬ一ちきりにて
これになくさむ一ひとのおもかけ

【応永年間百韻 7 卷】／□□ [x x はせて]
／応永 24(1417) 年 3 月 16 日

はかなきに一なしもはてぬは一ちきりにて
とことにはそふ一ひとのおもかけ

【永正年間百韻 3 4 卷】／何人 [つきはな
を] 永正 2(1505) 年 9 月 13 日

ゆめのおもかけ
→夢の面影

かりそめに一みしをこのよの一ちきりにて
さむれはしたふ一ゆめのおもかけ

【宝徳四年千句】／何路 [はなにほふ] /
宝徳 4(1452) 年 3 月 12 日

うらかたも一たのむもあたし一ちきりにて
みえこしもたた一ゆめのおもかけ

【羽柴千句】／山何 [なきめくる] / 天正
6(1578) 年 5 月 18・19 日

ゆうがおのちぎり
夕顔の契り

なすがれどき
→黄昏時

ゆふかほの一やともかりなる一ちきりにて
たそかれときそ一ひとはまたるる

【看聞日記紙背 5 0 卷】／唐何 [いやとし
に] 応永 31(1424) 年 1 月 25 日

ゆふかほの一はなはちきりの一しるへにて
たそかれときそ一こころうかるる

【看聞日記紙背 5 0 卷】／何物 [いつれみ
む] 応永 32(1425) 年 9 月 17 日

ちどり

ちどりなく
千鳥鳴く

→うち時雨れる

かせにたたよふ一ちとりなくなり
いくたひも一ねさめのまくら一うちしくれ

【天文廿四年梅千句】／何路 [とりのねも]
／天文 24(1555) 年正月 7 日

ゆけきになれは一ちとりなくなり
ふるさとの一さほのかはらの一うちしくれ

【壁草／書陵部本】／冬／永正 9 年

かえろ
→帰る

つきまつなみに一ちとりなくなり
あととめぬ一ゆめやよのまに一かへるらむ

【表佐千句】／何船 [はなやちる] / 文明
8(1476) 年 3 月 6 日 < ~ 8 日 >

きけははるかに一ちとりなくなり
ふきくらす一あらしやまつに一かへるらむ

【大永四年月並千二百韻】／□□ [しもや
ひぬ] / 月並千二百韻 / 大永 4(1524) 年 9
月 23 日

ちどりなくこえ
千鳥鳴く声

おもいかねる
→思いかねる

ゆくかたをなみ一ちとりなくこゑ
おもひかね一たつぬるみちに一さよふけて

【三島千句】／何路 [なへてよの] / 文明
3(1471) 年 3 月 21 日 ~ 23 日

よふねにきくは一ちとりなくこゑ
おもひかね一いもねぬたひを一しるまに

【至徳以前百韻 7 卷】／何木 [かみかきの]
／至徳 4(1387) 年以前

むらちどり
群千鳥

まさごじのすえ
→真砂路の末

ゆくかたは一いつこなるらむ一むらちどり
ゆふかけさむき一まさごちのすえ

【羽柴千句】／千何 [あくるよを] / 天正
6(1578) 年 5 月 18・19 日

したるも一たちさわきぬる一むらちとり
かへるとまやは一まさこちのすゑ

【慶長年間百韻27巻】／懐旧〔みなそこの〕／慶長4(1599)年5月2日

かたかたに一なきたちてゆく一むらちとり
おくしもふかき一まさこちのすゑ

【慶長年間百韻27巻】／□□〔けふことに〕／裏白／慶長8(1603)年1月3日

ちょう

ちょうのあわれさ
蝶の哀れさ

→打ち交わす

ほかよりきたる一てふのあはれさ
はるかぜの一ふくのまにまに一うちかすみ

【住吉千句】／何人〔ゆきはれて〕／大永元(1521)年11月1日～14日

そのにひとりの一てふのあはれさ
ひとみえぬ一へのゆくへは一うちかすみ

【天文年間百韻38巻】／何人〔にはへかつ〕／天文13(1544)年1月29日

ちる

かぜにはなちる
風に花散る

→春の夢

かせはなほ一あをはにのこる一はなちりて
はるのゆめこそ一ことにあなれ

【看聞日記紙背50巻】／何船〔のちやゆき〕／応永28(1421)年2月25日

いつもふく一まつかせつらき一はなちりて
はるのゆめこそ一やかてさめぬれ

【成立不詳・宗祇以前15巻】／xx〔あらしにも〕／存疑／成立時不詳

さくらちるかげ
桜散る陰

→春ながら

なこりもとめす一さくらちるかけ
はるなから一いはなみはやき一よしのかは

【永正年間百韻34巻】／何人〔つきはなを〕／永正2(1505)年9月13日

ひはらさひしく一さくらちるかけ
はるなから一なほふるゆきの一さえさえて

【天正四年万句70巻】／夕何〔はるさめに〕／天正4(1576)年5月6日～7月19日

ちるの^{ちるの}が^がお^おしい^{しい}
散る^るの^のが^が惜^惜しい^{しい}

→鶉^{うずらなく}鳴く

うすはなすすき一ちらまくもをし
うつらなく一かたやまくれて一さむきひに

【長享年間百韻6巻】／何人〔ゆきなから〕／長享2(1488)年1月22日

なみよるをはな一ちらまくもをし
うつらなく一へのふるみち一またやこむ

【大永年間百韻14巻】／何人〔つきやふね〕／大永2(1522)年8月

ちるはな
散る花

→鶯^{うぐいすのこゑ}の声

ちるはなの一なみのしたくさ一かせみえて
やなきやうきね一うくひすのこゑ

【天文年間百韻38巻】／朝何〔またてきく〕／天文9(1540)年4月25日

ちるはなの一やまちやきりに一まかふらむ
たにのといつる一うくひすのこゑ

【元龜年間百韻6巻】／何船〔むさしのも〕／元龜3(1572)年3月18日

→鶯^{うぐいすがなく}が鳴く

ちるはなの一のちにはいかて一つけぬらむ
けさはつこゑの一うくひすそなく

【天正四年万句70巻】／何船〔そらにまつ〕／天正4(1576)年5月6日～7月19日

ちるはなの一とかをはかせに一なしてて
こつたひすてす一うくひすそなく

【下草／龍谷大学本】／春／延徳2(1490)年～3年春頃

はなちる
花散る

のこりおおい
→残り多い

やよひにも一またなりやらぬ一はなちりて
のこりおほくも一ひこそなかけれ

【伊勢千句】／薄何〔たかための〕／大永

2(1522)年8月4日～8日

みはやすを一まちあへぬまの一はなちりて
のこりおほくも一はるはいぬめり

【天文年間百韻38巻】／何木〔あすのな

を〕／天文17(1548)年8月14日

はるのくれがた
→春の暮れ方

とはぬをも一みれはわすれし一はなちりて
ふるさとさひし一はるのくれかた

【美濃千句】／何色〔しくれつつ〕／文明

4(1473)年12月16日～21日

したもえの一くさのいろとも一はなちりて
のもあをみゆく一はるのくれかた

【天正四年万句70巻】／何船〔そらにま

つ〕／天正4(1576)年5月6日～7月19日

はるのさびしさ
→春の寂しさ

あめかせの一こころあはする一はなちりて
とりさへかへる一はるのさびしさ

【三島千句】／何衣〔はなにつき〕／文明

3(1471)年3月21日～23日

うゑしよは一しるひともなき一はなちりて
ふるののおくの一はるのさびしさ

【宮島千句】／何袋〔さきこすか〕／天文

20(1551)年5月9日～11日

つかえる

つかえびと
仕え人

いせいのかぜ
→家々の風

あふききて一きみにいくよを一つかへひと
いやさかえゆく一いへいへのかせ

【熊野千句】／初何〔をるはなに〕／文正

元(1466)年3月以前

かりそめの一いとまもなみの一つかへひと
ほまれあるこそ一いへいへのかせ

【永禄元年花千句】／□□〔みるまにに〕

／永禄元(1558)年3月23日～25日

つき

あかつきつき
暁月

しくれ
→時雨

あかつきつきは一きりにかくれて
さむしろの一つゆのいくたひ一しくるらむ

【五吟一日千句】／何木〔としのうちに〕

／天正9(1581)年11月19日

あかつきつきは一われのみもみし
あやにくに一あきのそらなど一しくるらむ

【延徳年間百韻16巻】／何路〔かけすす

し〕／延徳4(1492)年6月1日

あきのつき
秋の月

そでが つゆ ぼい
→袖が露つぼい

きりはれて一かけすさましき一あきのつき
はらひもあへぬ一そてのつゆけさ

【天正年間百韻57巻】／□□〔まつなら

ぬ〕／天正17(1589)年1月4日

しらしらと一すみかもりいる一あきのつき
むかしみさりし一そてのつゆけさ

【文明十四年万句52巻】／花何〔みたす

なよ〕／文明14(1482)年7月4日～9月

14日

あきのよのつき
秋の夜の月

みにしみる
→身にしみる

ひとのかたみの一あきのよのつき
しもまよふ一かれののすすき一みにしみて

【表佐千句】／何衣〔よるやあめ〕／文明

8(1476)年3月6日～8日

あくかれてゆく一あきのよのつき
ものおもふ一みちののかせは一みにしみて

【諸尊法紙背3巻】／手何〔むすふにも〕

／建武4(1337)年6月23日

のわきする
→野分する

あさちかやとを一あきのよのつき
かこはれし一つゆのたよりも一のわきして

【文龜年間百韻4巻】／何人〔きえしよの〕

／文龜2(1502)年8月6日

むくらかおくのーあきのよのつき
いつこにもーさはるかけなくーのわきして

【宗長関係8種】／老耳／天理本／

あけやすいつき
明けやすい月

あうきぬぎぬはうい
→逢う後朝は憂い

あけやすきーつきのゆくへのーをしまれて
まれにあふよのーきぬぎぬはうし

【毛利千句】／何田〔やまとりも〕／文禄
3(1594)年5月12日～16日

あけやすきーつきのかりふしーおきいてて
あふひとからのーきぬぎぬはうし

【延宝年間百韻3巻】／□□〔おいかせの〕
／延宝2(1674)年8月14日

ありあけのつき
有明の月

ういものはない
→憂いものはない

ありあけのーつれなきつきもーすめるよに
なほあきはかりーうきものはなし

【太神宮法楽千句】／山何〔のははなに〕
／長享2(1488)年7月

ありあけのーつきもなこりとーかへるかり
こひよりほかにーうきものはなし

【看聞日記紙背50巻】／山何〔あつさな
ほ〕／応永32(1425)年閏6月25日

かえるかりがね
→帰る雁

ありあけのーつきやあらぬとーかすむよに
きけはくもゐをーかへるかりかね

【永享年間百韻4巻】／山何〔おいまつは〕
／万句巻頭／永享9(1437)年3月21日

ありあけのーつきはかすみにーほのみえて
ゆめもまくらにーかへるかりかね

【園塵第三／統群書類従本】／春／文亀元
(1501)年3月18日

かりのこゑ
→雁の声

かすみなからもーありあけのつき
よもすからーかへるやとほきーかりのこゑ

【文明十二年千句8巻】／何木〔なもしろ
し〕／文明12(1480)年4月10日～*日

あかつきかたのーありあけのつき
なかめやるーくもはつかのーかりのこゑ

【天正四年万句70巻】／玉何〔まつはら
も〕／天正4(1576)年5月6日～7月19日

ほととぎす
→時鳥

なかめをしたふーありあけのつき
ほととぎすーなきつるこゑはーとほさかり

【平松文庫本千句】／□□〔ゆきはみちの〕
／

ふるきみやこのーありあけのつき
ほととぎすーねさめかたらふーよはふけて

【文明年間百韻34巻】／何路〔やまかせ
に〕／文明15(1483)年3月2日

むさしのとくさまくら
→武蔵野と草枕

はなのくもまにーありあけのつき
むさしのやーしきしくさにーまくらして

【元亀二年千句】／朝何〔あたにちる〕／
元亀2(1571)年3月5日

たひねいくよのーありあけのつき
むさしのやーわけもつくさぬーくさまくら

【天正年間百韻57巻】／何垣〔ゆくそて
に〕／天正11(1583)年閏1月1日

あかつき
→暁

みれはみにしむーありあけのつき
あかつきのーあらしにゆめのーさめてのち

【文明十四年万句52巻】／二字反音〔は
なはみな〕／文明14(1482)年7月4日～
9月14日

みよとやのこるーありあけのつき
あかつきのーかねよりのちもーよはなかし

【菟玖波集／広島大学本】／秋下／文和
5(1356)年冬～翌年の春

あきのくも
→秋の雲

いるかけいそくーありあけのつき
ふくかせにーたかねはなるるーあきのくも

【天正四年万句70巻】／何色〔ちるはな
も〕／天正4(1576)年5月6日～7月19日

またもあはなむーありあけのつき
うちやまのーあかつきさひしーあきのくも

【下草／龍谷大学本】／秋／延徳 2(1490)
年～3 年春頃

→^{あきふける}秋更ける

ころはよさむのーありあけのつき
さねこむとーいひしなからにーあきふけて

【弘治三年春雪千句】／何木 [はなならて]
／弘治 3(1557) 年正月 7 日～9 日

たもとにおつるーありあけのつき
やまもなきーのへのかりふしーあきふけて

【基佐集／静嘉堂文庫本】／雑／永正
6(1509) 年以前

→^{かせさえる}風冴える

むしのねほそきーありあけのつき
ふきとほすーかへのすきまのーかせさえて

【石山四吟千句】／三字中略 [あさかほの]
／天文 24(1555) 年 8 月 15 日～19 日

みつのうへなるーありあけのつき
よこのうみーよころのあきのーかせさえて

【行助関係 4 種】／行助句集／書陵部本／

→^{やまこえる}山越える

つゆももらさぬーありあけのつき
くもはけさーしくるるあきのーやまこえて

【文明十四年万句 5 2 巻】／夢想 [そのし
なも]／文明 14(1482) 年 7 月 4 日～9 月
14 日

たもとにかすむーありあけのつき
とりのこゑーはなのほひにーやまこえて

【愚句老葉】／春／永正 17 年

いにしへのつき
古の月

→^{ういあき}憂い秋

みしはいつそのーいにしへのつき
うきあきにーよのことわりもーおほほえず

【享徳二年千句】／唐何 [こころひく]／
享徳 2(1453) 年 8 月 11 日～13 日

おもかけはたたーいにしへのつき
とほからぬーよはのとたえもーうきあきに

【下草／龍谷大学本】／恋下／延徳 2(1490)
年～3 年春頃

おほろつきよ
朧月夜

→^{のどかなまくら}長閑な枕

おほろつきよにーゆくそらもなき
のどかなるーまくらやゆめをーしたふらむ

【難波田千句】／□□ [みつのおもに]／
文明 14(1482) 年 10 月前後

おほろつきよにーしくあきもやは
のどかなるーまくらもとらてーあかしはて

【慶長年間百韻 2 7 巻】／□□ [ちりてさ
へ]／慶長 4(1599) 年 6 月 18 日

→^{ほととぎすのこゑ}時鳥の声

おほろつきよのーゆめをのこして
ほととぎすーはるのまくらのーひとこゑに

【紹巴亡父追善千句】／何木 [おとろけど]
／天文 24(1555) 年 3 月 26 日～晦日

おほろつきよのーあけのこるやま
ほととぎすーそれかいまやとーこゑすきて

【成立不詳・宗祇以前 1 5 巻】／何船 [き
たにみる]／成立時不詳

おほろにのこるありあけのつき
朧に残る有明の月

→^{たななしおぶねのおと}棚無し小舟の音

おほろにのこるーありあけのつき
ほそえこくーたななしをふねーおとすみて

【心敬関係 1 0 種】／心玉集／静嘉堂文庫本
／

おほろにのこるーありあけのつき
はるのよのーたななしをふねーおとふけて

【論書 4 種】／宗長／

おもふこととつき
思ふ事と月

→^{あきのあまのはしだて}秋の天橋立

おもふことーなくてやつきにーむかふらむ
あきにもあかぬーあまのはしたて

【寛正年間百韻 20 卷】／唐何 [せみのは
の]／寛正 4(1463) 年 6 月 23 日

おもふこと一それともわかぬ一つきをみて
いつくのあきか一あまのはしたて

【大永三年月並千三百韻】／□□ [やまい
くへ]／月並千三百韻／大永 3(1523) 年 8
月 23 日

かりねのつきかけ
仮寝の月影

はなうちかおる
→花打ち香る

かけかすむ一かりねのつきの一あくるよに
はなうちかをり一とりのなくこゑ

【文明十四年万句 5 2 卷】／初何 [をるそ
てに]／文明 14(1482) 年 7 月 4 日～9 月
14 日

かりねのつきの一かけさむきそら
わくるのの一はなうちかをり一すゑくれて

【天正四年万句 7 0 卷】／何風 [ふりつも
る]／天正 4(1576) 年 5 月 6 日～7 月 19 日

たまくらのつき
手枕の月

ゆめさめる
→夢覚める

なみたにかかる一たまくらのつき
ものうかる一をののかりねに一ゆめさめて

【享徳二年千句】／手何 [なほみよと]／
享徳 2(1453) 年 8 月 11 日～13 日

かたみかほなる一たまくらのつき
いにしへの一たたちかなしき一ゆめさめて

【大永三年月並千三百韻】／□□ [はると
ふく]／月並千三百韻／大永 3(1523) 年 1
月 23 日

つきいでやる
月出やる

いなづまのかけ
→稲妻の陰

つきにこそ一ちきりしものを一いてやらて
よひふけかたの一いなづまのかけ

【宗長追善千句】／夕何 [はるのひに]／
(享祿 5) 天文元 (1532) 年 3 月 25 日

みねたかみ一まちまつつきの一いてやらて
いくたひくもに一いなづまのかけ

【伊予千句】／x x [いつはとは]／天文
6(1537) 年 5 月 22 日

つきいでる
月出る

あきのむらさめ
→秋の村雨

かけほそく一ゆふへのそらに一つきいてて
ひややかにふる一あきのむらさめ

【聖廟千句】／何人 [つきならし]／明応
3(1494) 年 2 月 10 日～12 日

かせわたる一くものはやしに一つきいてて
いろもこすゑの一あきのむらさめ

【天文年間百韻 3 8 卷】／何路 [はなをお
きて]／天文 20(1551) 年 3 月 26 日

かせわたる
→風渡る

かけやとす一つゆをたつぬる一つきいてて
のはうすきりに一かせわたるなり

【石山四吟千句】／薄何 [うつせみの]／
天文 24(1555) 年 8 月 15 日～19 日

ますらをか一しけみのゆくて一つきいてて
ものすさまじき一かせわたるなり

【大永四年月並千二百韻】／□□ [ゆふた
ちは]／月並千二百韻／大永 4(1524) 年 6
月 23 日

まさごじのすゑ
→真砂路の末

ふきわくる一まつはのかせに一つきいてて
しはしやすらふ一まさごちのすゑ

【天文年間百韻 3 8 卷】／何木 [しくる
か]／天文 19(1550) 年 8 月 25 日

くれぬれは一みきはにしろく一つきいてて
なみのつゆちる一まさごちのすゑ

【文明十四年万句 5 2 卷】／何霜 [はつあ
きの]／文明 14(1482) 年 7 月 4 日～9 月
14 日

よがながい
→夜が長い

ゆふやまの一いろあるくもに一つきいてて
しかなくころは一よこそなかけれ

【看聞日記紙背 5 0 卷】／何船 [あきかせ
の]／応永 15(1408) 年 7 月 23 日

ふけてのちーやまち□□□は一つきいてて
かねきくまで□ーよこそなかけれ

【看聞日記紙背50巻】／山何 [かせやく
も]／応永26(1419)年10月25日

つきおちる
月落ちる

あきのはつしも
→秋の初霜

かきりあるーとりもなくなく一つきおちて
そらにみちゆくーあきのはつしも

【文安雪千句】／朝何 [ゆきさそへ]／文
安2(1445)年10月18日

ひきすつるーとやまのくもに一つきおちて
めくるのきはにーあきのはつしも

【伊予千句】／何人 [たちはなは]／天文
6(1537)年5月22日

かけきよきーまさこのうへに一つきおちて
ややさむからしーあきのはつしも

【天文十八年梅千句】／何壻 [しつくさへ]
／天文18(1549)年正月11日

つきかげすむ
月影澄む

つゆまひいそで
→露寒い袖

ふりにけるーのてらのつきのーかけすみて
あかつきおきのーつゆさむきそて

【元和年間百韻24巻】／□□ [そらにみ
つ]／元和8(1622)年10月19日

やとりとる一つきはゆふへにーかけすみて
むしのねみたれーつゆさむきそて

【新撰菟玖波集／実隆本】／秋上／明応
4(1495)年9月26日

つきがかすむ
月が霞む

のこる
→残る

さかののてらの一つきそかすめる
のとかなるーあらしのくもやーのこるらむ

【初瀬千句】／何水 [うのはなの]／享徳
元・2(1452)年、4月

あさとあくれは一つきそかすめる
かやりたくーねやにけふりやーのこるらむ

【宗祇関係2種】／心敬専順点宗祇付句／

つきがかすむよる
月が霞む夜

くもいをかえりかりがね
→雲居を帰る雁

ありあけの一つきやあらぬとーかすむよに
きけはくもみを一かへるかりかね

【永享年間百韻4巻】／山何 [おいまつは]
／万句巻頭／永享9(1437)年3月21日

つきかけはーみえみみえすみーかすむよに
くもみちたとりーかへるかりかね

【成立不詳・宗砌以前6巻】／x x [うめ
なれや]／成立時不詳

つきがかたむく
月が傾く

ふるさとにあきのかぜ
→古里に秋の風

むかしかたりに一つきそかたふく
ふるさとをーとへはをきふくーあきのかせ

【文明年間百韻34巻】／何船 [かへれと
て]／文明18(1486)年3月27日

たひねのまくら一つきそかたふく
ふるさとにーなみたつたへよーあきのかせ

【竹林抄／新古典文学大系本】／旅／文明
8(1476)年5月頃

あきのよ
→秋の夜

つきかたふきぬーたれをまつらむ
たのめねとーひとりはねしのーあきのよに

【葉守千句】／一字露頭 [よやさむき]／
長享元(1487)年10月9日<~11日>

かくれてくもに一つきかたふきぬ
あふきをもーおきわすれぬるーあきのよに

【天文十八年梅千句】／青何 [ゆけはうめ]
／天文18(1549)年正月11日

つきがおおる
月が氷る

むしのお
→虫の音

ちはらかつゆの一つきそこほるる
むしのねをーたもとにかくるーよはふけて

【河越千句】／何船 [やまかせに]／文明
2(1470)年正月10~12日

みなからつゆの一つきそこほるる
むしのねをーまそてにえらふーよはふけて

【弘治年間百韻 8 卷】／何人 [うのはなの]
／弘治 2(1556) 年 4 月 27 日

→夜が更ける

ちはらかつゆのつきそこほるる
むしのねを一たもとにかくる一よはふけて

【河越千句】／何船 [やまかせに]／文明
2(1470) 年正月 10～12 日

みなからつゆのつきそこほるる
むしのねを一まそてにえらふ一よはふけて

【弘治年間百韻 8 卷】／何人 [うのはなの]
／弘治 2(1556) 年 4 月 27 日

つきがさやか
月がさやか

→霧はれる

やまよりほかのつきそさやけき
やりみつに一まかきとみえし一きりはれて

【因幡千句】／何路 [たけにこゑ]／文明
7(1475) 年 11 月 26 日<～28 日>

てらすくもゐのつきそさやけき
きりはれて一かすこそみゆれ一あまつかり

【応仁年間百韻 6 卷】／何人 [ときはきを]
／応仁元 (1467) 年 10 月 17 日

つきがほのめく
月がほのめく

→秋風

やまをしみれはつきそほのめく
あきかせに一くさのとほそを一たちいてて

【永原千句】／千何 [ひととせは]／明応
9(1500) 年 7 月 17 日

ふかきみねよりつきそほのめく
いはかねわ一かりねのとこの一あきかせに

【大永四年月並千二百韻】／□□ [うのは
なの]／月並千二百韻／大永 4(1524) 年 4
月 23 日

つきさえる
月冴える

→千鳥鳴く声

おほそらに一こよひみちたる一つきさえて
ゆふしほさひし一ちとりなくこゑ

【出陣千句】／薄何 [ちきりきや]／永正
元 (1504) 年 10 月 25 日～27 日

かはみつの一ともにこほれる一つきさえて
よふねにきくは一ちとりなくこゑ

【至徳以前百韻 7 卷】／何木 [かみかきの]
／至徳 4(1387) 年以前

つきさしいでる
月差し出る

→秋風

つきさしいつる一ふねのしらなみ
あきかせに一あまのいさりひ一よるきえて

【葉守千句】／薄何 [いはほにも]／長享
元 (1487) 年 10 月 9 日<～11 日>

つきさしいつる一をちかたのやま
あきかせに一しのひゆくよは一やすからて

【延徳年間百韻 1 6 卷】／初何 [さけはさ
く]／千句第三／延徳 4(1492) 年 3 月 3 日

つきすむ
月澄む

→秋風が吹く

かみよより一たましまかはのつきすみて
かきりもなみに一あきかせそふく

【弘治三年春雪千句】／何衣 [なくしし]
／弘治 3(1557) 年正月 7 日～9 日

つゆしもの一ふ□□□やとは一つきすみて
かれののあさち一あきかせそふく

【文明年間百韻 3 4 卷】／x x [あきふけ
ぬ]／文明 12(1480) 年 9 月 28 日

→天つ雁

かけもみに一さしやとほると一つきすみて
ねぬめもさむる一あまつかりかね

【池田千句】／唐何 [つゆかけて]／永正
7(1510) 年春以前<永正 5 年春>

おほろけに一かたへよふかき一つきすみて
まくらにちかし一あまつかりかね

【天文十八年梅千句】／青何 [ゆけはうめ]
／天文 18(1549) 年正月 11 日

→衣打つ声

ことさらに—おもふはしらむ—つきすみて
ひひきはわかす—ころもうつこゑ

【浅間千句】／一字露頭 [にほふひは] /
永正 11(1514) 年 5 月 13 日～19 日

やまかせの—ふきそふよはの—つきすみて
いくさとさとの—ころもうつこゑ

【天正年間百韻 5 7 巻】／何路 [いろもか
も] / 裏白 / 天正 14(1586) 年 1 月 3 日

つきにありあけのそら
月に有明の空

→夜をこめる

つきにかすみの—ありあけのそら
かへるかり—おもひたつ□□—よをこめて

【成立不詳・宗祇以前 1 5 巻】／何船 [は
なそあをは] / 成立時不詳

つきはきりまに—ありあけのそら
あきちかき—をちのかはおと—よをこめて

【天文年間百韻 3 8 巻】／何船 [あさかほ
に] / 天文 12(1543) 年 7 月 29 日

つきにしも
月に霜

→近い雁

つきにしも—いそきてこゆる—やまたかみ
くもゐのいつち—ちかきかりかね

【五吟一日千句】／何路 [いそのなみ] /
天正 9(1581) 年 11 月 19 日

つきにしも—さはたのすゑの—みつおちて
きりのひまより—ちかきかりかね

【慶長年間百韻 2 7 巻】／□□ [うめかか
は] / 裏白 / 慶長 11(1606) 年 1 月 3 日

つきのあかしがた
月の明石瀉

→岡辺の秋

すまよりも—よはなほつきに—あかしがた
をかへのあきの—すこきしはのや

【看聞日記紙背 5 0 巻】／山何 [まつそひ
て] / 応永 26(1419) 年 2 月 6 日

ゆふきりも—はれゆくつきの—あかしがた
をかへのあきの—うらそさひしき

【看聞日記紙背 5 0 巻】／何路 [うのはな
の] / 応永 30(1423) 年 4 月 4 日

つきのいりがた
月の入方

→秋の空

あけなむとする—つきのいりかた
やまのはに—くもひきわたす—あきのそら

【享徳二年千句】／何人 [つきとたか] /
享徳 2(1453) 年 8 月 11 日～13 日

ひかりをさまる—つきのいりかた
なかめすや—おもひなくとも—あきのそら

【享禄年間百韻 8 巻】／何船 [はるのいろ]
／享禄 5(1532) 年 1 月 18 日

つきのかわかみ
月の川上

→鐘の音

かけはしとほき—つきのかはかみ
かねのおと—くるるもなみの—まかひにて

【永禄年間百韻 2 8 巻】／何人 [ふちかえ
や] / 永禄 7(1564) 年 3 月 15 日

さやかにうつる—つきのかはかみ
きりはるる—ゆふへのそらの—かねのおと

【天正年間百韻 5 7 巻】／何路 [たちそひ
て] / 天正 6(1578) 年 1 月 3 日

つきのさびしさ
月の寂しさ

→映る

ほのかにすめる—つきのさびしさ
あきのよも—いくねさめに—か—うつるらむ

【大永四年月並千二百韻】／□□ [へたつ
なよ] / 月並千二百韻 / 大永 4(1524) 年 3
月 23 日

□もきにまじる—つきのさびしさ
まつむしの—なくねに—さよや—うつるらむ

【天正四年万句 7 0 巻】／何木 [さくはな
の] / 天正 4(1576) 年 5 月 6 日～7 月 19 日

→秋の空

あかつきちかき—つきのさびしさ
あきのそら—くもはいつく—to—わかるらむ

【文明年間百韻 3 4 巻】／何船 [ことのは
の] / 文明 8(1476) 年 4 月 23 日

すみたかはらの一つきのさひしさ
あきのそら一ひとりかもねむ一よはもうし

【那智籠／北野天満宮本】／永正十三年／

つきのさやけさ
月のさやけさ

あきのかぜ
→秋の風

ときならぬゆきか一つきのさやけさ
あきのかせ一たけのはすさふ一そらふけて

【浅間千句】／何路〔ゆくほたる〕／永正

11(1514)年5月13日～19日

くもよりうへの一つきのさやけさ
ひととほり一ふきてすくるや一あきのかせ

【天文廿四年梅千句】／花之何〔かみかき

の〕／天文24(1555)年正月7日

いしのおもても一つきのさやけさ
あけわたる一かかみのみやの一あきのかせ

【大永三年月並千三百韻】／□□〔つゆも

をし〕／月並千三百韻／大永3(1523)年9月23日

ひややか
→冷ややか

よひよひことの一つきのさやけさ
うたたねの一つゆのかたしき一ひややかに

【永正年間百韻34巻】／山何〔とこなつ

に〕／永正15(1518)年4月23日

なみよりいつる一つきのさやけさ
とふほたる一よをまつかけの一ひややかに

【永禄年間百韻28巻】／何船〔ふくやい

かに〕／永禄5(1562)年3月7日

ふけあける
→更け更ける

のきにもりいる一つきのさやけさ
いなつまの一かけせしまくら一ふけふけて

【天正年間百韻57巻】／何船〔なはしろ

の〕／天正3(1575)年3月8日

いたまもりいる一つきのさやけさ
ゆめをたに一むすはぬよはの一ふけふけて

【慶長年間百韻27巻】／□□〔はなちれ

は〕／慶長4(1599)年間3月21日

あきあける
→秋更ける

しつかにむかふ一つきのさやけさ
とふひとも一はやよもきふに一あきふけて

【新撰菟玖波集／実隆本】／恋下／明応

4(1495)年9月26日

よなかになりぬ一つきのさやけさ
なみのおと一いやたかしまの一あきふけて

【壁草／書陵部本】／秋／永正9年

なきそめる
→鳴き初める

きりのうへなる一つきのさやけさ
むしのねも一いまひとしほに一なきそめて

【天正四年万句70巻】／薄何〔やまとほ

み〕／天正4(1576)年5月6日～7月19日

なかそらになる一つきのさやけさ
あきはいま一わさたかりかね一なきそめて

【宗碩関係2種】／宗碩連歌合／静嘉堂文

庫本／

つきのさよのなかやま
月の小夜の中山

あきあける
→秋更ける

みるみるつきは一さよのなかやま
たひころも一あらしをそてに一あきふけて

【大永年間百韻14巻】／何人〔ゆきのう

ちに〕／大永5(1525)年1月25日

つきもなこりの一さよのなかやま
うらかれの一みちのしはくさ一あきふけて

【延宝年間百韻3巻】／□□〔おいかせの〕

／延宝2(1674)年8月14日

つきのたびのみち
月の旅の道

のちのよのあき
→後の世の秋

つきならは一いさとてゆかむ一たひのみち
まよふななく一のちのよのあき

【文明十四年万句52巻】／花何〔みたす

なよ〕／文明14(1482)年7月4日～9月

14日

はれよくも一つきこそたより一たひのみち
おもふもつらし一のちのよのあき

【宗砌関係9種】／宗砌句／静嘉堂文庫本b

／

つきのむらくも
月の群雲よるにかりなく
→夜に雁鳴くはるくれかたのつきのむらくも
かへるよの—あまとひかくれ—かりなきて

【月村抜句／書陵部本】／永正十四年／

あきふけわたるつきのむらくも
かりなきて—よはいねかての—たまくらに

【合点之句／神宮文庫本】／雑／天文

9(1541)年12月25日

つきのもと
月の下ころもでのつゆ
→衣手の露しのひよる—とほそしつけき—つきのもと
ゆきかへりての—ころもでのつゆ【紹巴亡父追善千句】／二字反音 [かけた
かき]／天文24(1555)年3月26日～晦日あくるをも—しらてともなふ—つきのもと
いつのまにかは—ころもでのつゆ

【平松文庫本千句】／□□ [ふくるよの]

／

つきのゆくすえ
月の行く末しぐれるる
→時雨れるなみにかたふく—つきのゆくすえ
をしかなく—あはちのやまや—しくるらむ【大永年間百韻14巻】／何人 [ゆきのう
ちに]／大永5(1525)年1月25日あかつきかたのつきのゆくすえ
つゆさむき—まぐらのうへや—しくるらむ【天正年間百韻57巻】／何路 [とふひと
の]／天正14(1586)年3月19日つきはありあけ
月はありあけほととぎす
→時鳥くもりしままのつきはありあけ
ほととぎす—いまひとこゑは—つれなくて【壁草／大阪天満宮文庫本】／夏／永正
2(1505)年8月23日以後同3年3月以前またとへかしのつきはありあけ
ほととぎす—ゆめちをすきて—さむるよに

【合点之句／神宮文庫本】／夏／天文

9(1541)年12月25日

つきふける
月更けるそでのつゆけさ
→袖の露けさたれならず—つきみるよはや—ふけぬらむ
なくさめかぬる—そでのつゆけさ【大永年間百韻14巻】／山何 [うめやな
き]／大永7(1527)年1月19日かたるまのつきはいつしか—ふけぬらむ
みえしこころも—そでのつゆけさ【天文年間百韻38巻】／何木 [しくる
か]／天文19(1550)年8月25日つきまつ
月待つかわるよのなか
→変わる世の中いててたに—くもの□□□□—つきまちて
さためなやけに—かはるよのなか【看聞日記紙背50巻】／何船 [ことはな
に]／応永31(1424)年9月27日ともしする—やまにはいとふ—つきまちて
ひとのこころの—かはるよのなか【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁2(1468)年5月下旬つきもさやか
月もさやかあかつきがた
→暁方はるのよの—つきもさやけき—みねのいほ
あかつきかたの—かせのさひしさ【天正四年万句70巻】／何馬 [あをやき
の]／天正4(1576)年5月6日～7月19日しもよそみつの—つきもさやけき
ふねよはふ—あかつきかたの—よとのさと【竹林抄／新古典文学大系本】／旅／文明
8(1476)年5月頃つきよなよな
月夜な夜なさむしろのつゆ
→さ籬の露

しのふれは一つきもさはりの一よなよなに
はらふとするも一さむしろのつゆ

【元龜二年千句】／何船 [はなにとふ] /
元龜2(1571)年3月5日

よなよなに一つきもうつろふ一あきさひし
みはかたはらの一さむしろのつゆ

【文祿年間百韻12巻】／□□ [わかなた
みし] /文祿2(1593)年1月8日

つきをみる
月を見る

あきかぜがふく
→秋風が吹く

たのむよに一またふけはてぬ一つきをみて
とふかときけは一あきかせそふく

【文明年間百韻34巻】／何路 [あさなけ
に] /文明8(1476)年1月11日

あらましの一いたつらふしに一つきをみて
ちきりしものを一あきかせそふく

【老葉/吉川本】／恋上/文明13(1481)年
夏頃

つゆのつきがこぼれる
露の月が零れる

むしのねに夜が更ける
→虫の音に夜が更ける

ちはらかつゆの一つきそこほるる
むしのねを一たもとにかくる一よはふけて

【河越千句】／何船 [やまかせに] /文明
2(1470)年正月10~12日

みなからつゆの一つきそこほるる
むしのねを一まそてにえらふ一よはふけて

【弘治年間百韻8巻】／何人 [うのはなの]
/弘治2(1556)年4月27日

なつのよのつき
夏の夜の月

ほととぎす
→時鳥

ことかはすまも一なつのよのつき
きくもたた一それかあらぬか一ほととぎす

【天正年間百韻57巻】／山何 [かせふけ
は] /天正2(1574)年5月8日

なかめあかせる一なつのよのつき
ほととぎす一やはひとこゑに一まとろまで

【園塵第三/続群書類従本】／夏/文龜元
(1501)年3月18日

ねやのつきかけ
闇の月影

きりぎりす
→蟋蟀

ほのかたらひし一ねやのつきかけ
うちしきり一いまはあなかま一きりきりす

【伊勢千句】／三字中略 [うめさきて] /
大永2(1522)年8月4日~8日

よひすきぬらし一ねやのつきかけ
かたしきの一たもとにちかき一きりきりす

【大永三年月並千三百韻】／□□ [うめか
かや] /月並千三百韻/大永3(1523)年2
月23日

はるのよのつき
春の夜の月

こゑこゑ
→声々

いてたにやらす一はるのよのつき
あめはれて一かはつうるさき一こゑこゑに

【秋津洲千句】／一字露頭 [わかはより]
/天文15(1546)年8月25日

こころうかるる一はるのよのつき
うちわひて一なきゆくかりの一こゑこゑに

【明応年間百韻22巻】／何船 [はなそは
る] /明応2(1493)年3月25日

ふるさとのつき
古里の月

くさまくら
→草枕

すむもあはれは一ふるさとのつき
あかつきを一ゆめのなかはの一くさまくら

【天文年間百韻38巻】／何木 [やまかけ
て] /天文21(1552)年3月11日

そてにかたしく一ふるさとのつき
あしひきの一やまちくらし一くさまくら

【永祿年間百韻28巻】／何路 [きえしそ
の] /永祿7(1564)年1月22日

なくむし
→鳴く虫

なみたにむかふ一ふるさとのつき
なくむしも一しるへきものを一わかおもひ

【長享年間百韻6巻】／何路 [さみたれは]
/長享3(1489)年5月11日

ゆくへなほうきーふるさとのつき
なくむしもーなれしともをやーしたふらむ

【文明十四年万句52巻】／山河〔あきのはな〕／文明14(1482)年7月4日～9月14日

みじかよのつき
短夜の月

ほととぎす
→時鳥

ありあけになるーみしかよのつき
ほととぎすーなほしのひねのーつれなくて

【宝徳四年千句】／山河〔みにしむは〕／宝徳4(1452)年3月12日

こころをすますーみしかよのつき
ほととぎすーまたるるそらにーかねなりて

【寛文年間百韻22巻】／□□〔なつなきは〕／寛文13(1673)年6月12日

あまりみしかきーみしかよのつき
なつかりのーあしのしのひのーほととぎす

【天正四年万句70巻】／何心〔やまかけや〕／天正4(1576)年5月6日～7月19日

みやこのつきにかえる
都の月に帰る

くさまくら
→草枕

みやこのつきにーたれかへるらむ
しらぬのにーひとりつゆけきーくさまくら

【応仁年間百韻6巻】／x x〔そてにみな〕／応仁2(1468)年10月22日

みやこのつきにーわれやかへらむ
ゆめもみをーさそひてさめねーくさまくら

【宗長関係8種】／興津宛／書陵部本／

やまのはのつき
山の端の月

あきかぜ
→秋風

くれてまちとるーやまのはのつき
あきかぜにーよふねこたふるーかちのおと

【河越千句】／山河〔うくひすに〕／文明2(1470)年正月10～12日

しはしはのこれーやまのはのつき
あきかぜにーつゆのいのちもーをしまれて

【聖廟千句】／何人〔つきならし〕／明応3(1494)年2月10日～12日

うきをはすてのーやまのはのつき
あきかぜにーふせやといへとーまとろまで

【伊庭千句】／三字中略〔ちりやすき〕／大永4(1524)年3月17日～21日

あきふける
→秋更ける

ねさめにむかふーやまのはのつき
みをすてむーほともいまはのーあきふけて

【三島千句】／何路〔なへてよの〕／文明3(1471)年3月21日～23日

まつひとさへそーやまのはのつき
さととほきーしはのいほりにーあきふけて

【長享年間百韻6巻】／何路〔さみたれは〕／長享3(1489)年5月11日

いるかけのこるーやまのはのつき
いねかてのーしはのとほそのーあきふけて

【大永年間百韻14巻】／山河〔そめしつゆ〕／大永3(1523)年9月2日

いてしはいつのーやまのはのつき
たひころもーさむさおほゆるーあきふけて

【慶長年間百韻27巻】／□□〔みつうへに〕／裏白／慶長17(1612)年1月3日

ゆうづくよ
夕月夜

おぼつかない
→覚束ない

まつかけはーみえてすくなきーゆふつくよ
おぼつかなしやーあきのくるみち

【嘉吉年間百韻1巻】／何木〔たけのはに〕／嘉吉3(1443)年10月23日

かすみけりーさらてたにもとーゆふつくよ
おぼつかなしやーなによふことり

【永正年間百韻34巻】／x x〔なつころも〕／永正7(1510)年4月1日

よわのつき
夜半の月

あきかぜのそら
→秋風の空

くもはれてーさたまりけりなーよはのつき
しくれつくせるーあきかぜのそら

【称名院追善千句】／一字露頭〔くもはれて〕／永禄6(1563)年12月14日～18日

ひとはいさーみしはわすれぬーよはのつき
たのむるすゑはーあきかせのそら

【永正年間百韻3 4巻】／何船〔うちなひ
き〕／永正13(1516)年1月

かねかすか
→鐘微か

さしこもるーとほやまてらのーよはのつき
きりまもれたるーかねかすかなり

【宗牧追善千句】／山河〔ちるちらぬ〕／
永禄4(1561)年9月14日・15日

まつかせのーふきすさひたるーよはのつき
ふけゆくあきのーかねかすかなり

【文禄年間百韻1 2巻】／□□〔はなのい
ろや〕／文禄4(1595)年1月30日

そでのあきかぜ
→袖の秋風

よはのつきーまたあるやとをーたひたちて
せきちこえゆくーそでのあきかせ

【宝徳四年千句】／唐何〔さすはなや〕／
宝徳4(1452)年3月12日

やまのはのーすすしさそふるーよはのつき
うたたねしまのーそでのあきかせ

【天文年間百韻3 8巻】／夢想〔ちりてな
ほ〕／天文10(1541)年3月

おじかなくやま
→牡鹿鳴く山

うかるへきーあきのそらかはーよはのつき
すみてやみましーをしかなくやま

【延徳年間百韻1 6巻】／何船〔はるすき
ぬ〕／延徳4(1492)年4月8日

なかめすはーうらみやせましーよはのつき
まつかせふきてーをしかなくやま

【論書4種】／宗長／

つく

いろづく
色付く

つゆとけきはつしも
→露と今朝の初霜

あきのたのーかりしほちかくーいろつきて
ゆふへのつゆよーけさのはつしも

【天文廿四年梅千句】／花之何〔かみかき
の〕／天文24(1555)年正月7日

かせおつるーとはたいまはたーいろつきて
つゆにかへたるーけさのはつしも

【皇学館文庫本千句】／□□〔ちらははな〕
／永禄6(1563)年11月18日以前

ころもうつこゑ
→衣打つ声

さとちかきーやまはむかひにーいろつきて
まつひとむらにーころもうつこゑ

【成立不詳・宗長以前1 5巻】／何船〔し
もしろき〕／成立時不詳

つゆふかきーくさもこすゑもーいろつきて
なほこのころはーころもうつこゑ

【文安頃千句4巻】／青何〔はなのかの〕
／

ひぐらしのこゑ
→蝸の声

きりのほるーそとのこすゑもーいろつきて
さひしくのころーひぐらしのこゑ

【明応年間百韻2 2巻】／何人〔たますた
れ〕／明応5(1496)年6月7日

つゆにはやーみねのくすはもーいろつきて
あきものかなしーひぐらしのこゑ

【文龜年間百韻4巻】／何人〔きえしよの〕
／文龜2(1502)年8月6日

つくす

こころづくし
心尽くし

なみのおと
→浪の音

こころつくしのーふなていそくな
なみのおとーとまやにちかきーまくらして

【天正年間百韻5 7巻】／□□〔ともなし
に〕／天正18(1590)年11月21日

こころつくしのーおきつふなひと
なみのおとーつきにあれゆくーあきはきて

【那智庵／北野天満宮本】／永正十四年／

こころをつくすあめのよる
心を尽くす雨の夜

^{みがおいたほととぎす}
→身が老いた時鳥

ねられぬころ一つくすあめのよ
まつうちに一みもおいぬへき一ほととぎす

【心敬関係10種】／芝草内連歌合／天理本
／

まつにこころを一つくすあめのよ
つれなきに一みもおいぬへき一ほととぎす

【心敬関係10種】／吾妻辺云捨／天理本
／

つじ

^{みちのつじうら}
道の辻占

^{まちおひる}
→待ち侘びる

ききもさためぬ一みちのつじうら
はるかなる一たひのかへさを一まちわひて

【永禄石山千句】／青何【わくらはの】／
永禄7(1564)年5月12日

こひにまよへる一みちのつじうら
まちわひて一われとははやと一おもふみに

【文安頃千句4巻】／二字返音【はなをりて】
／

つたう

^{かきねつたい}
垣根伝い

^{たえだえ}
→絶え絶え

かきねつたひの一をたのさひしさ
かはそひの一しものしははし一たえたえに

【葉守千句】／何船【うゑしうゑは】／長
享元(1487)年10月9日<~11日>

かきねつたひの一みつみとりなり
もりいつる一かけひのしつく一たえたえに

【天文年間百韻38巻】／夢想【ちりてな
ほ】／天文10(1541)年3月

つたう
伝う

^{そばのかけはし}
→傍の掛橋

あつきひは一あせもそてをや一つたふらむ
やすきかたなき一そはのかけはし

【成立不詳・心敬以前14巻】／何人【こ
のものと】／成立時不詳

やまかけの一みちとやゆきを一つたふらむ
くもにつつける一そはのかけはし

【文安頃千句4巻】／朝何【すゑとほき】
／

^{はまつたう}
浜伝う

^{かえりつりふね}
→帰る釣舟

なみのおと一かはるやあきの一はまつたひ
きりにみたれて一かへるつりふね

【毛利千句】／何人【せせにすむ】／文禄
3(1594)年5月12日~16日

はまつたひ一ゆふしほときに一なりけらし
かせにつれつつ一かへるつりふね

【元和年間百韻24巻】／□□【くにくに
の】／元和6(1620)年9月15日

つな

^{ふねのつなでなわ}
舟の綱手縄

^{しおがまのうら}
→塩釜の浦

ふねにすむ一あまのしわさのつなでなは
なみもたたならぬ一しほかまのうら

【大永年間百韻14巻】／何船【うめかか
や】／大永3(1523)年1月9日

あさほらけ一いそくやふねのつなでなは
あまそかひなき一しほかまのうら

【園塵第二／統群書類従本】／雑／明応
4(1495)年早春

つばさ

^{とぶかりのつばさ}
飛ぶ雁の翼

^{あけわたるそら}
→明け渡る空

とぶかりのつばさはさやつきを一かけつらむ
なみのうへより一あけわたるそら

【紹巴亡父追善千句】／何人【なきあととは】
／天文24(1555)年3月26日~晦日

とふかりのつはさもつゆに一しをるらむ
よさむのつきの一あけわたるそら

【文明十四年万句52巻】／何木〔まつは
みどり〕／文明14(1482)年7月4日～9
月14日

つゆ

あさじょうのつゆ
浅茅生の露

→耐えない

しのにこほるる一あさちふのつゆ
かせをいたみ一たひなるそてや一たへさらむ

【大永三年月並千三百韻】／□□〔ひとこ
ゑや〕／月並千三百韻／大永3(1523)年4
月23日

そてにくたくる一あさちふのつゆ
くすのはのーうらみにわれや一たへさらむ

【大永三年月並千三百韻】／□□〔あらた
まの〕／月並千三百韻／大永3(1523)年12
月23日

くさのつゆ
草の露

→虫の鳴く声

つきかけに一はなのやとかす一くさのつゆ
かせいとふらし一むしのなくこゑ

【成立不詳・心敬以前14巻】／何船〔は
るはまた〕／成立時不詳

ゆふつきの一かけははことの一くさのつゆ
おもひのあるか一むしのなくこゑ

【文明十五年千句11巻】／何風〔たきな
みや〕／文明15(1483)年*月*日～3月2
日

くさばのつゆ
草葉の露

→化野

くさはのつゆも一おなじなみたか
あたしはや一おくれさきたち一いろつきて

【飯盛千句】／千何〔こぬあきや〕／永祿
4(1561)年5月27日～29日

くさはのつゆも一かせにみたれぬ
あたしはや一たれもさこそと一そてぬれて

【新撰菟玖波集／実隆本】／哀傷／明応
4(1495)年9月26日

このしたつゆ
木の下露

→夕べ

このしたつゆに一かをるひめゆり
なつのひは一やまのすそのを一ゆふへにて

【成立不詳・宗叡以前6巻】／唐何〔なて
しこの〕／成立時不詳

このしたつゆに一くさそふしたる
みやきのの一あきはしかなく一ゆふへにて

【菟玖波集／広島大学本】／秋下／文和
5(1356)年3月26日

こぼれるたけのはのつゆ
零れる竹の葉の露

→片敷の枕

こほれてつたふ一たけのはのつゆ
かたしきの一まらのうへの一あきのかせ

【弘治三年春雪千句】／何舟〔きてたに〕
／弘治3(1557)年正月7日～9日

こほれきにけり一たけのはのつゆ
かたしきの一そてもまくらも一ひややかに

【元和年間百韻24巻】／□□〔くにくに
の〕／元和6(1620)年9月15日

さみだれのつゆ
五月雨の露

→時鳥

こほるるあとも一さみだれのつゆ
なきかはす一なみたやしけき一ほとときす

【元龜二年千句】／何木〔たきなみの〕／
元龜2(1571)年3月5日

もすそもそても一さみだれのつゆ
ほとときす一こゑまつやまの一かけにきて

【成立不詳・心敬以前14巻】／何船〔ま
つやしる〕／成立時不詳

しらつゆ
白露

→面影ばかり

くれてより一あふきのいろも一しらつゆに
おもかけばかり一あさかほのはな

【弘治三年春雪千句】／何人〔ゆきにうめ〕
／弘治3(1557)年正月7日～9日

うつしゑのつきはくもらぬしらつゆに
おもかけはかりのこすいにしへ

【天文年間百韻38巻】／何人〔かすむよ
は〕／天文23(1554)年3月26日

そでが^{つゆ}つぼい
袖が^{つゆ}つぼい

→^{うい}憂い

のをわけころもそてそつゆけき
いととなほあきそふたひやうかるらむ

【看聞日記紙背50巻】／何路〔うのはな
の〕／応永30(1423)年4月4日

こころつくしのそてそつゆけき
いくたひかかかひとゆゑにうかるらむ

【文明十四年万句52巻】／何人〔ちくさ
みな〕／文明14(1482)年7月4日～9月
14日

→^{ものおもひ}物思い

たえぬしぐれにそてそつゆけき
いかにともとふひとあれなものおもひ

【熊野千句】／何路〔かさなるや〕／文正
元(1466)年3月以前

くさをわけゆくそてそつゆけき
しのひちはこころをつくすものおもひ

【文明十四年万句52巻】／何寺〔きりう
すみ〕／文明14(1482)年7月4日～9月
14日

→^{ものおもひ}物思ひ

はらふもおなしそてのつゆけさ
ものおもふこころをいつちやりてねむ

【出陣千句】／何木〔しもなから〕／永正
元(1504)年10月25日～27日

こひするのみかそてのつゆけさ
ものおもふわれやはつきにはちさらむ

【伊予千句】／唐何〔うつせみの〕／天文
6(1537)年5月22日

つゆがみだれる
露が乱れる

→^{あきぎり}朝霧

つゆそみたるるにはのたまささ
あきぎりのまかきにつきのさしのこり

【浜宮千句】／□□〔くれかたき〕／

あめにもまさりつゆそみたるる
あきぎりのみのしろころもしをれきて

【壁草／統群書類従本】／秋／永正3(1506)
年3月頃

つゆしぐれのくさ
露時雨の草

→^{わたるかりかね}渡る雁

つゆしぐれよものくさきのいろつきて
たのみにちかくわたるかりかね

【看聞日記紙背50巻】／片何〔しくれて
も〕／応永26(1419)年9月25日

つゆしぐれききのしたくさそめわけて
たたひととほりわたるかりかね

【看聞日記紙背50巻】／山河〔とよとし
を〕／応永32(1426)年12月6日

つゆにみだれる
露に乱れる

→^{とがほたる}飛ぶ螢

つゆにみたるるあしのひとむら
くれぬれはきりのひまひまとふほたる

【浜宮千句】／□□〔ときもよも〕／

ねにこそなかれつゆにみたるる
したもえをしのふのきにとふほたる

【心敬関係10種】／心敬僧都百句／岩瀬
文庫本／

つゆのあけほの
露の曙

→^{くさまくら}草枕

いたつらふしのつゆのあけほの
くさまくらあきふくかせにゆめのみす

【成立不詳・心敬以前14巻】／何船〔ま
つかせは〕／成立時不詳

さくらかうへのつゆのあけほの
くさまくらはるのかりねのすきかてに

【天文年間百韻38巻】／何人〔つきによ
る〕／天文5(1536)年6月15日

つゆのおとさきくにお
露の音聞く庭→^{たまだれのきり}玉垂の霧つゆのおとさきく一にはのゆふかけ
たまたれのきりのなこりや一はれさらむ【伊勢千句】／何人〔ふかくいりて〕／大
永 2(1522)年 8月 4日～8日つゆのおとさきく一にはのしたをき
たまたれのそともきりのかたよりて【天正年間百韻 5 7 卷】／何船〔すましみ
は〕／天正 13(1585)年間 8月 12日つゆのすずしさ
露の涼しさ→^{ゆうだち}夕立わくるのやまのつゆのすずしさ
ゆふたちのくもはかたへのみねこえて【天正年間百韻 5 7 卷】／何船〔みちみち
を〕／天正 13(1585)年 5月 27日ちりなきにはのつゆのすずしさ
ゆふたちのあとのやまみつ一いはこえて【園塵第二／続群書類従本】／夏／明応
4(1495)年 早春つゆのたまくら
露の手枕→^{おみなえし}女郎花おきあかしたるつゆのたまくら
なつかしや一やとかるのへのをみなへし【文安雪千句】／朝何〔ゆきさそへ〕／文
安 2(1445)年 10月 18日くるれはいとつゆのたまくら
をみなへし一まねくをはなにうちみたれ【天文十八年梅千句】／何路〔ふきよわる〕
／天文 18(1549)年 正月 11日つゆのつきがこぼれる
露の月が零れる→^{むしのねによがふける}虫の音に夜が更けるちはらかつゆのつきそこほるる
むしのねをたもとにかくる一よはふけて【河越千句】／何船〔やまかせに〕／文明
2(1470)年 正月 10～12日みなからつゆのつきそこほるる
むしのねをたまそてにえらふ一よはふけて【弘治年間百韻 8 卷】／何人〔うのはなの〕
／弘治 2(1556)年 4月 27日つゆのふるさと
露のふる里→^{あきかぜ}秋風かたるにおつるつゆのふるさと
あきかせのならのかれはに一そよめきて【太神宮法楽千句】／何船〔とこよにや〕
／長享 2(1488)年 7月たひねさそなのつゆのふるさと
あきかせのふきいてぬれはうつころも【毛利千句】／初何〔よとともに〕／文禄
3(1594)年 5月 12日～16日つゆのふるみち
露のふる道→^{よわのつき}夜半の月わけはやたゆるつゆのふるみち
ひとはいさ一みしはわすれぬ一よはのつき【永正年間百韻 3 4 卷】／何船〔うちなひ
き〕／永正 13(1516)年 1月ぬれてみなせのつゆのふるみち
しらきくにうつろひふくる一よはのつき【天文年間百韻 3 8 卷】／何人〔にほへか
つ〕／天文 13(1544)年 1月 29日つゆふくかぜ
露吹く風→^{むしなく}虫鳴くつゆふくかせは一にしよりそたつ
みやきののはなのさかりは一むしなきて【宝徳四年千句】／何衣〔はなもはも〕／
宝徳 4(1452)年 3月 12日つゆふくかせは一すすのかりいほ
なつころも一ひもくれかたは一むしなきて【永正年間百韻 3 4 卷】／何衣〔あひにあ
ひぬ〕／永正 10(1513)年 2月 16日つゆもなみだも
露も涙も→^{おもい草}思い草

つゆもなみたもーそてのみそしる
のはいまたーいろこそみえねーおもひくさ

【浜宮千句】／□□ [ちりうせぬ] /

つゆもなみたもーたれをうらみむ
こころよりーねをさすものそーおもひくさ

【園塵第一／統群書類従本】／恋／長享2
年

はぎのしたつゆ
秋の下露

うすぎりのまがき
→薄霧の籬

うらかれてゆくーはぎのしたつゆ
うすきりのーまかきのこたちーむらむらに

【皇学館文庫本千句】／□□ [はなにいそ
き] /永禄6(1563)年11月18日以前

のほるはかりのーはぎのしたつゆ
うすきりのーまかきのゆふへーいつかみむ

【永正年間百韻34巻】／山何 [まちこし
や] /永正12(1515)年11月11日

ふくかぜのあきのつゆ
吹く風に秋の露

ひぐらしのこゑ
→蝸の声

かせはまたーふかぬになつもーあきのつゆ
せみにまじるやーひくらしのこゑ

【平松文庫本千句】／□□ [なてしこの]
/

まつにふくーかせのしたはのーあきのつゆ
またかけうすきーひくらしのこゑ

【大永三年月並千三百韻】／□□ [しくれ
のあめ] /月並千三百韻／大永3(1523)年
10月23日

つら

かわつらのきと
川面の里

はるか
→遙か

ありともしらぬーかはつらのさと
はるかにもーふねよはふよのーこたへして

【永正十花千句】／何田 [はなにこひ] /
永正13(1516)年3月11日～14日

きをきるをののーかはつらのさと
はるかにもーおもひわたせるーはしはしら

【紹巴亡父追善千句】／初何 [たまたれの]
/天文24(1555)年3月26日～晦日

はるのうみつら
春の海面

のどか
→長閑

かりもかへるなーはるのうみつら
のとかなるーしほひのをちにーやまをみて

【文明年間百韻34巻】／何人 [よるはつ
き] /文明18(1486)年2月6日

まつみえわたるーはるのうみつら
のとかなるーなみにうかはぬーふねもなし

【明応年間百韻22巻】／何木 [やまはつ
き] /明応7(1498)年11月4日

つらい

うくつらい
憂く辛い

はなのやまがせ
→花の山風

うくつらきーほとこそせめてーたのみなれ
きそひそめにしーはなのやまかせ

【東山千句】／何草 [つきにかり] /永正
15(1518)年8月10日～12日

うくつらきーちきりならずやーゆめになせ
うらむもはかなーはなのやまかせ

【壁草／大阪天満宮文庫本】／春／永正
2(1505)年8月23日以後同3年3月以前

つり

あまのつりぶね
海人の釣舟

あさぼらけ
→朝ぼらけ

はなれこしまにーあまのつりぶね
うなはらやーくももはれたるーあさぼらけ

【聖廟千句】／何船 [ねにそなく] /明応
3(1494)年2月10日～12日

うらつたひするーあまのつりぶね
やまかすむーみきはのまつのーあさぼらけ

【天正四年万句70巻】／何衣〔うのはなの〕／天正4(1576)年5月6日～7月19日

→浪に時雨れる
なみにしぐれる

おきにかかれるーあまのつりふね
そことしもーなみにいりひやーしくらむ

【宮島千句】／何木〔ほかには〕／天文
20(1551)年5月9日～11日

ゆふへにいてしーあまのつりふね
たかさとのーうらわのなみにーしくらむ

【那智筆／北野天満宮本】／永正十四年／

→松立てる
まつたてる

かつかつうかふーあまのつりふね
まつたてるーいそのかくれやーさとならむ

【成立不詳・宗養以前8巻】／山何〔ひとこゑや〕／成立時不詳

はるともしらしーあまのつりふね
まつたてるーかけにふちえのーうらさひて

【老葉／毛利本】／雑上／(文明17(1485)
年7月23日頃)

おきのつりがね
沖の釣舟

→浪の上
なみのうえ

かすみはかりのーおきのつりふね
やまのははーほのかにたにもーなみのうへ

【永正十花千句】／何木〔ひかすたに〕／
永正13(1516)年3月11日～14日

のとかにうかふーおきのつりふね
あけほののーつきをひたせるーなみのうへ

【慶長年間百韻27巻】／何人〔わかくさ
の〕／慶長4(1599)年1月22日

かすみにうかふーおきのつりふね
とふとりもーそれがあらぬかーなみのうへ

【天正四年万句70巻】／一字露頭〔わか
くさも〕／天正4(1576)年5月6日～7月
19日

つれない

うえはつれない
上は連れない

→色付く
いろづく

うへはつれなきーまつのしたつゆ
ひさきちるーはまちのしらすーいろつきて

【文安年間百韻9巻】／山何〔はなはひも〕
／文安5(1448)年2月5日

うへはつれなきーあらいそのまつ
なみよするーいはねのこくさーいろつきて

【大永三年月並千三百韻】／□□〔あらた
まの〕／月並千三百韻／大永3(1523)年12
月23日

つれない
連れない

→鳴く山時鳥
なくやまほととぎす

つれなきにーなとつれなくてーすくさまし
まつにはなかぬーやまほととぎす、

【天正四年万句70巻】／何路〔みそきす
る〕／天正4(1576)年5月6日～7月19日

つれなきにーなほまつかせはーきくもうし
やまほととぎすーみねこえてなけ

【下草／統群書類従本】／夏／不明

→有明の月
ありあけのつき

つれなきもーつみのよるへとーなりやせむ
あかつきかたのーありあけのつき

【天正四年万句70巻】／玉何〔まつはら
も〕／天正4(1576)年5月6日～7月19日

つれなきもーまたつれなきやーうらむらむ
まつのはさはるーありあけのつき

【園塵第一／統群書類従本】／秋／長享2
年

つれなきをうらむ
連れなきを恨む

→有明の月
ありあけのつき

つれなきをーさのみはいかてーうらむらむ
あはてこよひもーありあけのつき

【河越千句】／何船〔やまかせに〕／文明
2(1470)年正月10～12日

つれなきもーまたつれなきやーうらむらむ
まつのはさはるーありあけのつき

【園塵第一／統群書類従本】／秋／長享2
年

て

あきのたまくら
秋の手枕はなすすき
→花薄かたはらさひしーあきのたまくら
ましろののーくすはかれはのーはなすすき【文龜年間百韻4巻】／何人〔まつこえし〕
／文龜3(1503)年4月29日つゆこそこのこれーあきのたまくら
やまとほくーつきはいるののーはなすすき【老葉／吉川本】／秋／文明13(1481)年
夏頃にいたまくら
新手枕はじかわす
→恥交わすにひたまくらはーゆめかうつつか
はちかはすーなかこそちはーしのはれめ【伊予千句】／御何〔すすしは〕／天文
6(1537)年5月22日にひたまくらはーあくるたひたひ
はちかはすーこころふかさをーうらみわひ【五吟一日千句】／三字中略〔くもらさぬ〕
／天正9(1581)年11月19日ふねのつなでなわ
舟の綱手縄しおがまのうら
→塩釜の浦ふねにすむーあまのしわさのーつなでなは
なみもたたならぬーしほかまのうら【大永年間百韻14巻】／何船〔うめかか
や〕／大永3(1523)年1月9日あさほらけーいそくやふねのーつなでなは
あまそかひなきーしほかまのうら【園塵第二／続群書類従本】／雑／明応
4(1495)年早春

てら

はるのやまでら
春の山寺きさらぎのわかれをとう
→如月の別れを訪うしきみにとほきーはるのやまでら
きさらぎのーわかれのにはをーとひすてて【嵯峨千句】／何人〔さきてちる〕／(元
龜4)天正元(1573)年正月9日～11日かねさたかなるーはるのやまでら
きさらぎのーわかれをたれもーとひいてて【寛永年間百韻15巻】／□□〔とよとし
の〕／裏白／寛永20(1643)年1月3日ふるでら
古寺ともしひのもと
→灯の下ふるでらにーたのむはやしのーかけふかみ
かりねめさますーともしひのもと【河越千句】／初何〔ゆふつくよ〕／文明
2(1470)年正月10～12日かたらはむーともなみたのーふるでらに
ほととぎすきつーともしひのもと【行助関係4種】／行助句集／大阪天満宮本
／ともしひのかけ
→灯の影いりあひのーかねちかくなるーふるでらに
ややくれそむるーともしひのかけ【伊予千句】／何舟〔わきてみむ〕／天文
6(1537)年5月22日よもすからーまつはかせふくーふるでらに
つきこそまとのーともしひのかけ【延徳年間百韻16巻】／何船〔はるすき
ぬ〕／延徳4(1492)年4月8日いりあひのかね
→入相の鐘ふるでらのーにははしもよりーうつろひて
としもすゑののーいりあひのかね【永原千句】／山何〔うすくく〕／明応
9(1500)年7月17日ふるでらのーみのりにとほきーみをわひて
こゑかすかなりーいりあひのかね【文明年間百韻34巻】／□□〔はたはり
や〕／文明14(1482)年9月みねのふるでら
峰の古寺

→花咲く

くものなかはのーみねのふるてら
まつたてるーはやしのおくにーはなさきて
【因幡千句】／何人 [みるたひに]／文明
7(1475)年11月26日<~28日>

かさなるのきのーみねのふるてら
をはつせやーちるあともなほーはなさきて
【天正年間百韻57巻】／何木 [こころあ
てに]／天正3(1575)年1月7日

てん

あまおとめ
天乙女

→雲の通い路

いかにしてーあかるをとめむーあまをとめ
かせはしるらしーくものかよひち
【文明年間百韻34巻】／何木 [うめかか
を]／文明15(1483)年2月19日

あらはれしーそのよはさそなーあまをとめ
あとたにとほきーくものかよひち
【明応年間百韻22巻】／何船 [やなきふ
く]／明応9(1500)年7月6日

あまのがわ
天の川

→吹く秋の初風

けふとしるーならひはかりのーあまのかは
ふくにおとろくーあきのはつかせ
【皇学館文庫本千句】／□□ [ちらははな]
／永祿6(1563)年11月18日以前

かよひけむーうききよいかにーあまのかは
ふきつたへくるーあきのはつかせ
【成立不詳・宗長以前15巻】／何人 [や
まみつは]／成立時不詳

おちるあまつかり
落ちる天つ雁

→月の出潮

あまつかりーふかるるかせにーなきおちて
あしまはくらきーつきのいてしほ
【看聞日記紙背50巻】／何船 [あきかせ
の]／応永15(1408)年7月23日

やまとほきーいりえにおつるーあまつかり
ゆふひにむかふーつきのいてしほ

【成立不詳・宗長以前15巻】／□□ [ち
らぬより]／成立時不詳

でる

いつるたびびと
出る旅人

→仮枕

まとろみあへすーいつるたびひと
かりまくらーかねややまちにーさそふらむ
【寛正年間百韻20巻】／唐何 [せみのは
の]／寛正4(1463)年6月23日

やすらふのへをーいつるたびひと
かりまくらーむすへはつきのーおつるよに
【老葉／吉川本】／旅／文明13(1481)年
夏頃

いつるふなびと
出る舟人

→明け渡る

みなとのはるにーいつるふなひと
あけわたるーうらのかすみにーなみこえて
【宗御関係9種】／百番連歌／赤木文庫本
／享徳2()年8月13日以後-寛正6年3
月以前

こころやとむるーいつるふなひと
あけわたるーいりえのゆきのーとまやかた
【専順関係2種】／冬／応仁元(1467)年
5月10日

かれたくさがもえでる
枯れた草が萌え出る

→駒祝う声

ふゆかれしーみちのしはくさーもえいてて
のへのかすみにーこまいはふこゑ
【聖廟千句】／何田 [のこるひに]／明応
3(1494)年2月10日~12日

こそかれしーくさはつゆけくーもえいてて
のはあさまたきーこまいはふこゑ
【明応年間百韻22巻】／何水 [あけほの
を]／明応8(1499)年2月19日

つきいでやる
月出やるいなづまのかけ
→稲妻の陰つきにこそ一ちきりしものを一いてやらて
よひふけかたの一いなつまのかけ【宗長追善千句】／夕何〔はるのひに〕／
(享祿5) 天文元(1532)年3月25日みねたかみ一まちまつつきの一いてやらて
いくたひくもに一いなつまのかけ【伊予千句】／x x〔いつはとは〕／天文
6(1537)年5月22日つきいでる
月出るあきのむらさめ
→秋の村雨かけほそく一ゆふへのそらに一つきいてて
ひややかにふる一あきのむらさめ【聖廟千句】／何人〔つきならし〕／明応
3(1494)年2月10日～12日かせわたる一くものはやしに一つきいてて
いろもこすゑの一あきのむらさめ【天文年間百韻38巻】／何路〔はなをお
きて〕／天文20(1551)年3月26日かせわたる
→風渡るかけやとす一つゆをたつぬる一つきいてて
のはうすきりに一かせわたるなり【石山四吟千句】／薄何〔うつせみの〕／
天文24(1555)年8月15日～19日ますらをか一しけみのゆくて一つきいてて
ものすさまじき一かせわたるなり【大永四年月並千二百韻】／□□〔ゆふた
ちは〕／月並千二百韻／大永4(1524)年6
月23日まきごじのすえ
→真砂路の末ふきわくる一まつはのかせに一つきいてて
しはしやすらふ一まさこちのすゑ【天文年間百韻38巻】／何木〔しくるる
か〕／天文19(1550)年8月25日くれぬれは一みきはにしろく一つきいてて
なみのつゆちる一まさこちのすゑ【文明十四年万句52巻】／何霜〔はつあ
きの〕／文明14(1482)年7月4日～9月
14日よがながい
→夜が長いゆふやまの一いろあるくもに一つきいてて
しかなくころは一よこそなかけれ【看聞日記紙背50巻】／何船〔あきかせ
の〕／応永15(1408)年7月23日ふけてのち一やまち□□□は一つきいてて
かねきくまで□一よこそなかけれ【看聞日記紙背50巻】／山何〔かせやく
も〕／応永26(1419)年10月25日つきさしいでる
月差し出るあまがぜ
→秋風つきさしいつる一ふねのしらなみ
あきかせに一あまのいさりひ一よるきえて【葉守千句】／薄何〔いはほにも〕／長享
元(1487)年10月9日<～11日>つきさしいつる一をちかたのやま
あきかせに一しのひゆくよは一やすからて【延徳年間百韻16巻】／初何〔さけはさ
く〕／千句第三／延徳4(1492)年3月3日

と

くさのとのうち
草の戸の内まちわびる
→待ち侘びるひとりねつらし一くさのとのうち
うちすさふ一ころもかたしき一まちわひて【新撰菟玖波集／実隆本】／恋下／明応
4(1495)年9月26日すみうかるるや一くさのとのうち
すてしみも一いまはのゆふへ一まちわひて【壁草／大阪天満宮文庫本】／雑下／永正
2(1505)年8月23日以後同3年3月以前しばのとのうち
柴の戸の内おもう
→思う

すめはのとけき—しはのどのうち
 ならはしの—みをなとつらく—おもふらむ

【三島千句】／何船〔とりのねは〕／文明
 3(1471)年3月21日～23日

なほたちかへる—しはのどのうち
 みをすては—いつくもとなど—おもふらむ

【園塵第四／早稲田大学本】／雑下／永正
 6、7年

とう

あとをだにとう
 後をだに訪う

→^{ゆきとはなのかげ}雪と花の陰

またれしものを—あとをたにとへ
 やまさとの—ゆきをかきりの—はなのかけ

【成立不詳・心敬以前14巻】／何船〔は
 るはまた〕／成立時不詳

あすやはあらむ—あとをたにとへ
 ゆきそふる—それもきえなむ—はなのかけ

【長享年間百韻6巻】／何木〔わかみつの〕
 ／長享2(1488)年1月1日

だれをとおうか
 誰を訪おうか

→^{くさのはら}草の原

たれをかとはむ—しらぬゆふくれ
 さきたたは—はなもあはれめ—くさのはら

【葉守千句】／薄何〔いはほにも〕／長享
 元(1487)年10月9日<～11日>

たれをかとはむ—あはれともみし
 ちきりても—えやはなへての—くさのはら

【明応年間百韻22巻】／何人〔かきりさ
 へ〕／明応8(1499)年3月20日

きえなむつゆを—たれにとはまし
 よのつねの—あはれをたのむ—くさのはら

【享禄年間百韻8巻】／何船〔はるのいろ〕
 ／享禄5(1532)年1月18日

あきになるかと—たれにとはまし
 つきをたた—すむひとなれや—くさのはら

【竹林抄／新古典文学大系本】／秋／文明
 8(1476)年5月頃

とわられる
 訪われる

→^{ひとりすむ}一人住む

いまははるへと—とはれもやせむ
 ひとりすむ—みやまのゆふへ—うちかすみ

【文安雪千句】／何木〔しらくもの〕／文
 安2(1445)年10月18日

いのちのうちに—とはれもやせむ
 ひとりすむ—かたやまさ—to—はなさきて

【文明十四年万句52巻】／何寺〔きりう
 すみ〕／文明14(1482)年7月4日～9月
 14日

→^{はなさく}花咲く

いのちのうちに—とはれもやせむ
 ひとりすむ—かたやまさ—to—はなさきて

【文明十四年万句52巻】／何寺〔きりう
 すみ〕／文明14(1482)年7月4日～9月
 14日

とひもやせまし—とはれもやせむ
 わかやとも—よそのいほりも—はなさきて

【園塵第三／続群書類従本】／春／文亀元
 (1501)年3月18日

ほたるとうくれ
 蛍訪う暮れ

→^{つきはまだ}月はまだ

かはかみよりや—ほたるとふくれ
 つきはまた—いてぬひかりの—みねこえて

【永禄年間百韻28巻】／何路〔なつくさ
 の〕／永禄9(1566)年5月9日

たのものはらに—ほたるとふくれ
 つきはまた—おそき□やまの—あめ□□□

【寛永年間百韻15巻】／□□〔まつにこ
 まつ〕／裏白／寛永19(1642)年1月3日

やとをととう
 宿を訪う

→^{おもかげ}面影

ゆきすきかたき—やとやとはまし
 おもかけの—ひかふるあたり—こまとめて

【宗長関係8種】／興津宛／書陵部本／

をしへすてたる一やとやとはまし
おもかけの一さきたつはかり一しるへして

【宗長関係8種】／老耳／天理本／

わすれとうくきはら
忘れ訪う草原

→古壁

わするなよ一とはむとちきる一くさのはら
たよりはかりに一かかふるさと

【太神宮法楽千句】／山何〔のははなに〕
／長享2(1488)年7月

わすれすも一とほきあととふ一くさのはら
なれこしたれそ一かかふるさと

【永正十花千句】／二字反音〔こまなへて〕
／永正13(1516)年3月11日～14日

とおい

おちかたのくも
遠方の雲

→鳥鳴く

つきはほのめく一をちかたのくも
しくれせし一みねよりいつる一とりなきて

【飯盛千句】／x x〔かけすすし〕／永禄
4(1561)年5月27日～29日

ゆきをもよほす一をちかたのくも
そことなく一すゑののあした一とりなきて

【明応年間百韻2巻】／何人〔あさかす
み〕／明応4(1495)年1月6日

→一群

かはなみしろき一をちかたのくも
ひとむらの一たけのはわけの一よはあけて

【称名院追善千句】／何木〔としことの〕
／永禄6(1563)年12月14日～18日

くるるいろなる一をちかたのくも
ひとむらの一つはさならへて一とふからす

【永禄年間百韻2巻】／何路〔あらたま
の〕／裏白／永禄10(1567)年1月3日

おちかたのやま
遠方の山

→わたのはら

つきのひかりに一をちこちのやま
あけわたる一きりのたえまの一わたのはら

【紹巴亡父追善千句】／唐何〔はなのかに〕
／天文24(1555)年3月26日～晦日

かねはかすみの一をちこちのやま
わたのはら一いつくのかたに一とまりふね

【五吟一日千句】／何木〔としのうちに〕
／天正9(1581)年11月19日

おちかたびとのそで
遠方人の袖

→送る

をちかたひとの一そてほのかなり
よこくもや一わかれしゆめを一おくるらむ

【大永四年月並千二百韻】／□□〔わけく
らし〕／月並千二百韻／大永4(1524)年7
月23日

をちかたひとの一そてのむらさめ
ほとときす一なれもたひとや一おくるらむ

【那智筆／北野天満宮本】／永正十三年／

おちのとのおやま
遠方の遠山

→雁鳴く

みつつかすみの一をちのとほやま
わかれしも一おなしゆくへの一かりなきて

【紹巴亡父追善千句】／何船〔すみそめの〕
／天文24(1555)年3月26日～晦日

あすやこえまし一をちのとほやま
わたりかね一ふかきせうらに一かりなきて

【心敬関係10種】／苔筵／赤木文庫本／
文明3(1471)年秋

かすむはるのおやま
霞む春の遠山

→有明の月

かすみかくれの一はるのとほやま
ありあけの一つきもわかれの一かりなきて

【看聞日記紙背50巻】／山何〔まつそひ
て〕／応永26(1419)年2月6日

かすみにのこる一はるのとほやま
ありあけの一つきのひかりの一さえかへり

【天正四年万句70巻】／何鳥〔かせにし
るき〕／天正4(1576)年5月6日～7月
19日

くものおちかた
雲の遠方

→時雨れる

ゆふひみえすくーくものをちかた
いくたひかーつきまつあきのーしくらむ

【応仁年間百韻6巻】／何人〔ときはきを〕
／応仁元(1467)年10月17日

つきもかたふくーくものをちかた
わかれゆくーそてにやつゆのーしくらむ

【新撰菟玖波集／実隆本】／恋上／明応
4(1495)年9月26日

とおきふるさと
遠き古里

→旅衣

さていくひかすーとほきふるさと
たひころもーせきちかさなるーあつまかた

【看聞日記紙背50巻】／何路〔ひととせ
に〕／応永32(1426)年12月11日

かへらむほとどのーとほきふるさと
あめののちーいそきてゆかむーたひころも

【成立不詳・心敬以前14巻】／朝何〔し
たみつに〕／成立時不詳

とおきむさしの
遠き武蔵野

→草枕

ゆけともいまたーとほきむさしの
くさまくらーゆめもみなからーあはれにて

【天文十八年梅千句】／何壙〔しつくさへ〕
／天文18(1549)年正月11日

わけてもすゑのーとほきむさしの
おのつからーやとかるかやのーくさまくら

【看聞日記紙背50巻】／何人〔まつちか
し〕／応永32(1425)年6月25日

とおぎえ
遠消え

→松の一群

いそやまもーしほひのあととほきえに
くもこそかかれーまつのひとつむら

【飯盛千句】／初何〔このまもる〕／永禄
4(1561)年5月27日～29日

かけさむくーいさりひきえてーとほきえに
しもにけふれるーまつのひとつむら

【文龜年間百韻4巻】／何衣〔たをるなど〕
／文龜2(1502)年4月25日

とおくきた
遠く来た

→沖の舟

かへりみすれはーとほききにけり
ほともへすーこきもてつるるーおきつふね

【大永年間百韻14巻】／何人〔ゆきのう
ちに〕／大永5(1525)年1月25日

ひなかきころはーとほききにけり
くるるまでーつなてうちはへーおきつふね

【壁草／続群書類従本】／旅／永正3(1506)
年3月頃

とおやまのあき
遠山の秋

→紀伊海

いまつきにみるーとほやまのあき
きのうみやーふねをきりまにーこきいたし

【文明十四年万句52巻】／何木〔すゑの
つゆ〕／文明14(1482)年7月4日～9月
14日

なかめわひぬるーとほやまのあき
きのうみやーたまつしままつーきりこめて

【専順関係2種】／秋／応仁元(1467)年
5月10日

のがとおい
野が遠い

→安らい

ゆくゆくくらすーのこそとほけれ
ほとはたたーむかひのさとにーやすらひに

【浅間千句】／山何〔ここよりや〕／永正
11(1514)年5月13日～19日

けしきもはるのーのこそとほけれ
やすらひにーなかきひくらしーあかさらむ

【天文廿年断簡千句】／□□〔やまかせや〕
／天文20(1551)年6月10日～12日

いりかひのかね
→入相の鐘

のをとほみ一わけくらしでの一たひまくら
さとはありとや一いりあひのかね

【永禄年間百韻 2 8 卷】／何船 [ひきうう
る]／裏白／永禄 5(1562) 年 1 月 3 日

のをとほみ一ゆきかふみちの一やすらひに
かへさをつくる一いりあひのかね

【文禄二年千句 1 0 卷】／何人 [はなにあ
くる]／文禄 2(1593) 年 4 月 8 日～10 日

みやごとおい
都が遠い

あすかかせ
→明日香風

みやこをとほみ一わかれぬるみち
あすかかせ一たつねてふかむ一そてもなし

【表佐千句】／薄何 [ゆきてみむ]／文明
8(1476) 年 3 月 6 日<～8 日>

みやこをとほみ一すめるわひしさ
あすかかせ一いたつらにのみ一みのふりて

【永正十花千句】／初何 [はなはたた]／
永正 13(1516) 年 3 月 11 日～14 日

とおり

ただひととおりの
ただ一通り

なる
→なる

たたひととほり一わたるかりかね
ありあけや一つきのよかすに一なりぬらむ

【看聞日記紙背 5 0 卷】／山何 [とよとし
を]／応永 32(1426) 年 12 月 6 日

たたひととほり一しらむよこくも
しくれつる一あとやゆきけに一なりぬらむ

【応永年間百韻 7 卷】／何木 [ちよまとと]
／応永 15(1408) 年 3 月 21 日

ひととおりの
一通り

みちのかたがた
→道の方々

ひととほり一そこはとしるき一みなせかは
くれかかりたる一みちのかたかた

【羽柴千句】／何人 [すくにゆく]／天正
6(1578) 年 5 月 18・19 日

ひととほり一ふりとほりたる一あきのあめ
つゆはかりなる一みちのかたかた

【羽柴千句】／薄何 [たちはなの]／天正
6(1578) 年 5 月 18・19 日

とこ

とこをしめる
所を占める

しずか
→静か

くれてうつらそ一とこをしめたる
ひとかへる一あとのつきかけ一しつかにて

【文明十四年万句 5 2 卷】／二字反音 [ま
つうきて]／文明 14(1482) 年 7 月 4 日～
9 月 14 日

いけのかはつそ一とこをしめたる
ひとすまぬ一こやのはるさめ一しつかにて

【萱草／伊地知本】／春／文明 6(1474) 年
2 月以前

ところ

すみどころ
住み所

うぐいすのこゑ
→鶯の声

ひをへつつ一のやまをはるは一すみどころ
やよひのすゑのーうくひすのこゑ

【慶長年間百韻 2 7 卷】／懐旧 [みなそこ
の]／慶長 4(1599) 年 5 月 2 日

みよしのや一はなをよすかの一すみどころ
ともとこそなれーうくひすのこゑ

【慶長年間百韻 2 7 卷】／□□ [みつのう
へに]／裏白／慶長 17(1612) 年 1 月 3 日

ところどころ

ところどころ
所々

わかっ
→分かっ

ところところの一まこもかるあと
なかれにや一むらのさかひを一わかっらむ

【元龜年間百韻 6 卷】／何人 [はなのとき
も]／元龜 4(1573) 年 6 月 6 日

ところどころの一ひとにあひつつ
ぬるかうちの一ゆめにもみをや一わかつらむ

【菟玖波集／広島大学本】／雑二／文和
5(1356)年冬～翌年の春

→^{なきいでる}鳴き出る

ところどころに一うもれきのえた
やまからす一くものそこより一なきいてて

【称名院追善千句】／初何【したふなよ】
／永禄6(1563)年12月14日～18日

ところどころに一なれるうめその
しろたへの一ゆきにうくひす一なきいてて

【大原野十花千句】／二字返音【つゆなら
て】／元亀2(1571)年2月5日～7日

→^{かけはし}掛橋

ところどころの一もしろきいろ
かけはしの一くちたるかたは一こすなみに

【天正年間百韻57巻】／何路【とふひと
の】／天正14(1586)年3月19日

ところどころの一こけのいはかね
かけはしの一とたえもかりに一うちわたし

【天正年間百韻57巻】／□□【ききわく
や】／天正18(1590)年10月8日

とし

としこえる
年越える

→^{かすむあけほの}霞む曙

きのふより一かせさへよわる一としこえて
いりあひのかねの一かすむあけほの

【河越千句】／何船【やまかせに】／文明
2(1470)年正月10～12日

たかさとも一けふあらたまる一としこえて
やまのあさまの一かすむあけほの

【嵯峨千句】／何人【さきてちる】／(元
亀4)天正元(1573)年正月9日～11日

としたける
年長ける

→^{ゆめもうつつも}夢も現も

いにしへを一おもひわすれす一としたけて
ゆめもうつつも一おなじかりのよ

【看聞日記紙背50巻】／山何【まつそひ
て】／応永26(1419)年2月6日

つゆのみと一おもはぬほとに一としたけて
ゆめもうつつも一あらましのうち

【看聞日記紙背50巻】／片何【しもやい
と】／応永31(1424)年10月26日

としどしのはな
年々の花

→^{ふるやまさくら}ふる山桜

みしにかはらぬ一としどしのはな
すゑもなほ一いくよをふるの一やまさくら

【顯証院会千句】／何人【えたわけの】／
宝徳元(1449)年8月19日～21日

あかれぬものを一としどしのはな
みやすてむ一ふるきいほりの一やまさくら

【表佐千句】／何路【みなかみの】／文明
8(1476)年3月6日～8日

となえる

ほとけとなえる
仏唱える

→^{こもりいろ}籠り居る

よをしるひとや一ほとけとなふる
こもりゐて一むすふもなつの一ものならし

【皇学館文庫本千句】／□□【たきいつこ】
／永禄6(1563)年11月18日以前

ほとけとなふる一みこそふりぬれ
ひとしれぬ一かたやまてらに一こもりゐて

【行動関係4種】／行動連歌／天理本／

とにかく

とにかくくに

→^{あかしくらす}明かし暮らす

あらましの一こころひとつを一とにかくに
うちまどろまで一あかしくらしつ

【東山千句】／薄何【つゆをいろ】／永正
15(1518)年8月10日～12日

すてかたき一よのましはりの一とにかくに
あかしくらしつー□□□あらまし

【応永年間百韻7巻】／□□ [x x はせて]
／応永 24(1417) 年 3 月 16 日

くれぬれは一みたれあひつつ一とふほたる
やすらひいつる一そてのすすしき

【天正年間百韻57巻】／□□ [すたれま
け]／天正 15(1587) 年 1 月 10 日

とぶ

とぶかりのつばき
飛ぶ雁の翼

→^{あけわたるそら}
明け渡る空

とぶかりのつばきはさやつきを一かけつらむ
なみのうへより一あけわたるそら

【紹巴亡父追善千句】／何人 [なきあととは]
／天文 24(1555) 年 3 月 26 日～晦日

とぶかりのつばきはさもつゆに一しをるらむ
よさむのつきの一あけわたるそら

【文明十四年万句52巻】／何木 [まつは
みどり]／文明 14(1482) 年 7 月 4 日～9
月 14 日

とふほたる
飛ぶ蛭

→^{かぜのすすしき}
風の涼しさ

はるはると一かほのほとりを一とふほたる
なかれふきくる一かせのすすしき

【元龜二年千句】／山何 [はなのかの]／
元龜 2(1571) 年 3 月 5 日

ゆふなきに一きえてはもえて一とふほたる
むらくさたかく一かせのすすしき

【永正年間百韻34巻】／山何 [まちこし
や]／永正 12(1515) 年 11 月 11 日

かけとほく一あしやのさとに一とふほたる
つきにくれゆく一かせのすすしき

【成立不詳・宗長以前15巻】／x x [さ
みたれや]／成立時不詳

→^{そでのすすしき}
袖の涼しさ

むしのなく一かたへはくれて一とふほたる
なつをわする一そてのすすしき

【皇学館文庫本千句】／□□ [きてかへる]
／永祿 6(1563) 年 11 月 18 日以前

ほたるとふそら
蛭飛ぶ空

→^{あきがくる}
秋が来る

たとるみちをや一ほたるとふそら
うすもの一そてにおほゆる一あきのきて

【天文廿四年梅千句】／二字反音 [くれな
ゐの]／天文 24(1555) 年正月 7 日

かせのよるよる一ほたるとふそら
あしかきの一すまひはかなき一あきのきて

【永正年間百韻34巻】／何船 [うちなひ
き]／永正 13(1516) 年 1 月

みだれてとふほたる
乱れて飛ぶ蛭

→^{みずのすすしき}
水の涼しさ

とふほたる一つゆにみたれて一くるるのに
ひとかけする一みつのすすしき

【葉守千句】／初何 [わかこゑを]／長享
元 (1487) 年 10 月 9 日<～11 日>

かたしきの一そてにみたれて一とふほたる
なかるおとも一みつのすすしき

【石山四吟千句】／青何 [つきやふね]／
天文 24(1555) 年 8 月 15 日～19 日

とまる

とまりぶね
泊まり舟

→^{おきのしらなみ}
沖の白浪

うらかせも一あまけありとや一とまりぶね
いくしほあひの一おきつしらなみ

【永祿年間百韻28巻】／何船 [たちなら
せ]／永祿元 (1558) 年 7 月 18 日

よをこめて一つきにそいてし一とまりぶね
かたへきりふる一おきつしらなみ

【文祿年間百韻12巻】／□□ [わかになつ
みし]／文祿 2(1593) 年 1 月 8 日

まつかぜのおと
→松風の音

のとかなる一なみをまくのーとまりふね
さそあらいそのーまつかぜのおと

【聖廟千句】／何人〔つきならし〕／明応
3(1494)年2月10日～12日

さしよせてーいそのあたりにーとまりふね
まくらにちかきーまつかぜのおと

【文明十四年万句52巻】／何紙〔つゆは
けさ〕／文明14(1482)年7月4日～9月
14日

とまりふねおとしていずち
泊まり舟音していずち

たびのくにくにのひと
→旅の国々の人

とまりふねーおとしていつちーわたるらむ
たれたひならぬーくにくにのひと

【東山千句】／一字露頭〔つきみつつ〕／
永正15(1518)年8月10日～12日

とまりふねーおとしていつちーわかるらむ
あはれのたひやーくにくにのひと

【宗長関係8種】／興津宛／書陵部本／

ともしび

ともしびのかげ
灯の影

つりふね
→釣舟

つねにしらるるーともしひのかけ
つりふねやーはかなさいつとーさささらむ

【秋津洲千句】／初何〔はなならし〕／天
文15(1546)年8月25日

かすかなりけるーともしひのかけ
つりふねやーをちのしまねをーめくるらむ

【慶長年間百韻27巻】／□□〔はるもこ
そ〕／裏白／慶長13(1608)年1月3日

あきぼたるとゆうまくら
→秋蛸と夕枕

つきこそまとのーともしひのかけ
あききぬとーほたるすくなきーゆふまくれ

【延徳年間百韻16巻】／何船〔はるすき
ぬ〕／延徳4(1492)年4月8日

きりのうちなるーともしひのかけ
あきくさにーほたるののこるーゆふまくれ

【文明十四年万句52巻】／何路〔あさう
みに〕／文明14(1482)年7月4日～9月
14日

ともしびのもと
灯の下

つりふね
→釣舟

よるもおほえぬーともしひのもと
つりふねのーうらふくかせにーひとりきて

【明応年間百韻22巻】／何路〔つゆやに
ほひ〕／明応5(1496)年8月5日

こころをよするーともしひのもと
つりふねのーふけてさひしきーなみのうへ

【享祿年間百韻8巻】／追善〔あきのこゑ〕
／享祿5(1532)年7月29日

ともなう

はるのともない
春の伴い

ゆうがすみ
→夕霞

おくれつつうきーはるのともなひ
ことのはにーあらそふあさなーゆふかすみ

【永祿年間百韻28巻】／山何〔かきつは
た〕／永祿10(1567)年4月28日

かたみにうときーはるのともなひ
てふとりのーやとりへたつるーゆふかすみ

【文祿年間百韻12巻】／□□〔うめかえ
や〕／文祿4(1595)年7月21日

ひぐれにともなう
日暮れに伴う

うたうこゑ
→歌う声々

くるるひにーかへるきこりのーともなひて
ふしもひとつにーうたふこゑこゑ

【因幡千句】／何木〔ゆきとふる〕／文明
7(1475)年11月26日<～28日>

くるひとのーひのくるるまでーともなひて
むかひてつきにーうたふこゑこゑ

【文明十四年万句52巻】／初何〔をるそ
てに〕／文明14(1482)年7月4日～9月
14日

とようら

いくえとよらのたけのしたみち
幾重豊浦の竹の下道

→またつきあるゆきのはれる

いくへとよらの一たけのしたみち
にしにまた一つきあるゆきの一けさはれて【竹林抄/新古典文学大系本】/冬/文明
8(1476)年5月頃いくへとよらの一たけのしたかけ
あめにまた一つきあるゆきの一よるはれて【心敬関係10種】/心玉集/静嘉堂文庫本
/

とり

かえるとりのお
帰る鳥の音

→暮れ渡る

かすみのうちに一かへるとりのね
まよひゆく一はるのやまちのくれわたり【天正年間百韻57巻】/何路[いろもか
も]/裏白/天正14(1586)年1月3日やとりさためす一かへるとりのね
こてふとふ一まかきののへのくれわたり【慶長年間百韻27巻】/□□[あらしに
も]/裏白/慶長5(1600)年1月3日とりがさえずる
鳥が囀る

→返し置く

いまをはるとや一とりのさへつる
かへしおく一なはしろをたに一ひとはなし【文明十四年万句52巻】/何船[あきの
いろ]/文明14(1482)年7月4日~9月
14日とりのさへつる一のへのあさあげ
かへしおく一たつらにたみのかけもなし【文明十四年万句52巻】/玉何[ゆきな
らは]/文明14(1482)年7月4日~9月
14日とりなく
鳥鳴くかたおかのみち
→片岡の道あはゆきを一□□□□はらふ一とりなきで
あさまたきゆく一かたをかのみち【永禄年間百韻28巻】/□□[ゆきにう
め]/永禄5(1562)年2月1日くれわたる一たのもつつきに一とりなきで
ひかりほのめく一かたをかのみち【天正年間百韻57巻】/□□[うめかえ
の]/裏白/天正19(1591)年1月3日とりのこえ
鳥の声あめのなごり
→雨の名残とりのこゑ一のきはにかすむ一あさほらけ
あめのなごりの一ひはのとかなり【天正年間百韻57巻】/□□[すたれま
け]/天正15(1587)年1月10日しらくもか一はなかあらぬか一とりのこゑ
あめのなごりの一をちかたのはる【天正四年万句70巻】/朝何[さみたれ
に]/天正4(1576)年5月6日~7月19日とりのこえこえ
鳥の声々

→暮れる

さるかたしらぬ一とりのこゑこゑ
くれぬれは一あたりのやまも一きりこめて【天文年間百韻38巻】/何路[ほととき
す]/天文24(1555)年4月10日ねくらもとむる一とりのこゑこゑ
くれぬれは一つきになるかと一よをまちて【文明十四年万句52巻】/山何[なほさ
こそ]/文明14(1482)年7月4日~9月
14日つきおちる
→月落ちるまたいつかはの一とりのこゑこゑ
あふさかや一せきちゆれは一つきおちて【天文年間百韻38巻】/何船[あさかほ
に]/天文12(1543)年7月29日あくるをつくる一とりのこゑこゑ
たちさわき一からすなくよの一つきおちて

【文安頃千句4巻】／二字返音 [はなをりて]

／

→野が遠い

あけわたるよのーとりのこゑこゑ
かりまくらーつきにおきゆくーのをとほみ

【石山四吟千句】／何船 [もろひとの] ／
天文 24(1555) 年 8 月 15 日～19 日

かへるささそふーとりのこゑこゑ
あめはるるーあとのはひのさすーのをとほみ

【永禄年間百韻 2 8 巻】／何人 [いへはえ
に] ／永禄 6(1563) 年 2 月 23 日

とりのさえずり
鳥の囀り

→霞

ふるすわかなくーとりのさへつり
かすみこそーきみかめくみのーそらならめ

【天文十八年梅千句】／何袋 [かそうめを]
／天文 18(1549) 年正月 11 日

あつまりきぬるーとりのさへつり
かすみこそーひろきめくりのーまかきなれ

【天正年間百韻 5 7 巻】／□□ [いるそて
に] ／天正 18(1590) 年 1 月 7 日

→谷の戸の鶯

ふるすなからやーとりのさへつり
うくひすのーくるとしつくるーたにのとに

【寛文年間百韻 2 2 巻】／□□ [しらくく
の] ／寛文 11(1671) 年 9 月 29 日

はるのしるへのーとりのさへつり
たにのとにーのこるうくひすーなつかけて

【天正四年万句 7 0 巻】／何帯 [いろそふ
や] ／天正 4(1576) 年 5 月 6 日～7 月 19 日

→日の影

こゑつむけなるーとりのさへつり
ひのかげのーめくるもうときーたにかくれ

【元和年間百韻 2 4 巻】／□□ [あさなあ
さな] ／元和 8(1622) 年 2 月 29 日

きくもたへなるーとりのさへつり
ひのかげのーうつるかきほはーうららかに

【寛永年間百韻 1 5 巻】／□□ [あさひか
け] ／裏白／寛永 11(1634) 年 1 月 3 日

とりのなくこゑ
鳥の鳴く声

→関の戸

よなかさいつらーとりのなくこゑ
せきのとのーもみちむしろをーしきすてて

【文禄年間百韻 1 2 巻】／□□ [たかには
も] ／文禄 2(1593) 年 5 月 27 日

いつくのそらそーとりのなくこゑ
せきのとのーまつあけわたるーゆきはれて

【諸家月次連歌抄】／諸家月次連歌抄／成
立 () 年未詳

とりのひとこゑ
鳥の一声

→明ける

はるかにすくるーとりのひとこゑ
しつかなるーよはのけしきやーあけぬらむ

【天文年間百韻 3 8 巻】／何人 [なやここ
に] ／天文 4(1535) 年 5 月 1 日

はつかになりぬーとりのひとこゑ
またれつるーねさめのそらやーあけぬらむ

【天文年間百韻 3 8 巻】／何路 [あさかほ
の] ／天文 10(1541) 年 7 月 29 日

→時鳥

しはしなくさむーとりのひとこゑ
ねさめてはーそれかあらぬかーほととぎす

【天正四年万句 7 0 巻】／何船 [なかきよ
の] ／天正 4(1576) 年 5 月 6 日～7 月 19 日

こすゑはるけきーとりのひとこゑ
むかしおもふーたちはなてらのーほととぎす

【園塵第四／早稲田大学本】／夏／永正 6、7
年

ねぐらのはるのとりのね
埜の春の鳥の声

→静か

しはしねくらのーはるのとりのね
しつかなるーあしたのほとはーおそきひに

【元龜二年千句】／何袋 [ふるさとと] ／
元龜 2(1571) 年 3 月 5 日

たけをねくらの一はらのとりのね
しつかなる一かきほやのへに一つつくらむ

【平松文庫本千句】／□□ [おちはして]
／

むらどりがねる
群鳥が寝る

→^{われおどろく}我驚く

むらどりの一ねにゆくかねや一くれぬらむ
けふもすきぬと一われそおとろく

【美濃千句】／何草 [いつくにて] ／文明
4(1473) 年 12 月 16 日～21 日

むらどりの一ねくらのたけの一ゆきをれに
われそおとろく一さむきよのゆめ

【伊予千句】／何馬 [もろひとの] ／天文
6(1537) 年 5 月 22 日

ない

あるかなきか
有るか無きか

→^{かげろうのいわがき}蜻蛉の岩垣

あるかなきかの一よもきふのやと
かけろふの一いはかきかくれ一にはふりて

【長享年間百韻 6 卷】／何路 [あらぬなを]
／長享 2(1488) 年 4 月 5 日

あるかなきかの一やまかけのみち
かけろふの一いはかきしみつ一くさしけみ

【老葉／吉川本】／雑上／文明 13(1481) 年
夏頃

あるかなきかの一みねのはつゆき
かけろふの一いはかきみつは一おとさえて

【園塵第一／続群書類従本】／冬／長享 2
年

かくれがはない
隠れ家ははない

→^{みよしののおく}み吉野の奥

たたあらましに一かくれかはなし
みよしのの一またみぬおくを一たつねはや

【看聞日記紙背 5 0 卷】／何路 [ふりかつ
け] ／応永 29(1422) 年【B】 3 月 15 日

うきよのほかの一かくれかはなし
みよしのの一おくもやはなに一とはるらむ

【看聞日記紙背 5 0 卷】／唐何 [あすはさ
け] ／応永 31(1424) 年 2 月 25 日

ただありなしのちぎり
ただ有り無しの契り

→^{うちのかたち}内の形

たたありなしの一ちきりなりけり
あめつちも一うらみのうちの一かたちにて

【文明年間百韻 3 4 卷】／何路 [みるま
ま] ／文明 12(1480) 年 8 月

たたありなしの一ちきりなりけり
ひともよも一かかみのうちの一かたちにて

【老葉／吉川本】／雑上／文明 13(1481) 年
夏頃

なきもの
無き物

→^{ふるさとのほろ}古里の春

たひにして一いつくもさため一なきものを
いそくやかへる一ふるさとのほろ

【寛正年間百韻 2 0 卷】／□□ [なかつき
と] ／寛正 2(1461) 年 9 月

むかしには一かへるにならひ一なきものを
あはれのとときや一ふるさとのほろ

【大永年間百韻 1 4 卷】／何木 [うめかか
を] ／大永 7(1527) 年 1 月 18 日

ひとかげもしない
人影もしない

→^{なる}なる

まつとはすれと一ひとかけもせず
たのめしや一よそのゆふへに一なりぬらむ

【文安雪千句】／花之何 [ゆきふれは] ／
文安 2(1445) 年 10 月 18 日

まはきかもの一ひとかけもせず
いつすみて一とほさとをのと一なりぬらむ

【下草／東山御文庫本】／雑上／明応
5(1496) 年 11 月 18 日

みやごともない
宮事もない

はながおとろえる
→花が衰える

かすみのほらは一みやこともなし
ときすくる一こころのはなの一おとろへて

【三島千句】／三字中略〔はるよまで〕／
文明 3(1471) 年 3 月 21 日～23 日

うきときはまた一みやこともなし
あきふかみ一はなのきともも一おとろへて

【心敬関係 10 種】／吾妻辺云捨／天理本
／

なか

すてるよのなか
捨てる世の中

おびぬればおもう
→佗ぬれば思う

なほいかならむ一ずつるよのなか
わひぬれは一おもひしことの一まさるみに

【表佐千句】／何人〔はなそくも〕／文明
8(1476) 年 3 月 6 日<～8 日>

まよふうちにも一ずつるよのなか
わひぬれは一おもふこにさへ一ちかつかて

【基佐集／静嘉堂文庫本】／雑／永正
6(1509) 年以前

なかぞら
中空

あきのはつかぜ
→秋の初風

なかそらに一くるれはつきの一ほのかにて
ふきたちけりな一あきのはつかせ

【毛利千句】／何船〔みてもおもふ〕／文
禄 3(1594) 年 5 月 12 日～16 日

ゆくすゑも一おなしみやこの一なかそらに
ふなちにおもふ一あきのはつかせ

【天文年間百韻 3 8 巻】／朝何〔またてき
く〕／天文 9(1540) 年 4 月 25 日

なかぞらのくも
中空の雲

みえかくれする
→見え隠れする

はつあきなれや一なかそらのくも
ふしはその一きりよりうへに一みえかくれ

【文明十四年万句 5 2 巻】／山河〔なほさ
こそ〕／文明 14(1482) 年 7 月 4 日～9 月
14 日

こころさわかす一なかそらのくも
ふるさとに一ちかつくやまの一みえかくれ

【竹林抄／新古典文学大系本】／旅／文明
8(1476) 年 5 月頃

ひとのこころのかわるよのなか
人の心の変わる世の中

あきのくれ
→秋の暮れ

ひとのこころの一かはるよのなか
やまさとを一うかれいてめや一あきのくれ

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

ひとのこころの一かはるよのなか
いまをなほ一とへやよしのの一あきのくれ

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

あきがくる
→秋が来る

ひとのこころの一かはるよのなか
うつせみの一はやまおろしに一あきはきて

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

ひとのこころの一かはるよのなか
しるしらぬ一ひとつなみたに一あきはきて

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

あわれ
→哀れ

ひとのこころの一かはるよのなか
よもきふを一かれぬあるしは一あはれにて

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

ひとのこころの一かはるよのなか
なきあとは一にくなりしたに一あはれにて

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

いろみえる
→色見える

ひとのころのーかはるよのなか
 まちをしむーはなにほとなきーいろみえて

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
 仁 2(1468) 年 5 月下旬

ひとのころのーかはるよのなか
 たけはそのーこをおもふともーいろみえて

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
 仁 2(1468) 年 5 月下旬

ういみのとき
 →憂い身の時

ひとのころのーかはるよのなか
 うきみさへーときにやあふとーはるたちて

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
 仁 2(1468) 年 5 月下旬

ひとのころのーかはるよのなか
 うきみさへーいまはのときやーをしからむ

【萱草／伊地知本】／雑／文明 6(1474) 年
 2 月以前

おとろえる
 →衰える

ひとのころのーかはるよのなか
 そのいへはーのこれとみちのーおとろへて

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
 仁 2(1468) 年 5 月下旬

ひとのころのーかはるよのなか
 あかむれはーかみのしるしはーおとろへて

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
 仁 2(1468) 年 5 月下旬

そでぬれる
 →袖濡れる

ひとのころのーかはるよのなか
 ききわひぬーしくれこのはにーそてぬれて

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
 仁 2(1468) 年 5 月下旬

ひとのころのーかはるよのなか
 おいかみはーわかたつむにもーそてぬれて

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
 仁 2(1468) 年 5 月下旬

たび
 →旅

ひとのころのーかはるよのなか
 うきにあひーなさをみるもーたひなれや

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
 仁 2(1468) 年 5 月下旬

ひとのころのーかはるよのなか
 うみやまのーなあるところもーたひなれや

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
 仁 2(1468) 年 5 月下旬

ちぎり
 →契り

ひとのころのーかはるよのなか
 なへてうきーあきなとほしのーちきるらむ

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
 仁 2(1468) 年 5 月下旬

ひとのころのーかはるよのなか
 むかしたれーはなよりまつをーちきるらむ

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
 仁 2(1468) 年 5 月下旬

つきをみる
 →月を見る

ひとのころのーかはるよのなか
 よつのときーいつれまさるとーつきをみて

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
 仁 2(1468) 年 5 月下旬

ひとのころのーかはるよのなか
 すさましとーいひしはすのーつきをみて

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
 仁 2(1468) 年 5 月下旬

とりどり
 →とりどり

ひとのころのーかはるよのなか
 さむきひはーみつにいてふーとりとりに

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
 仁 2(1468) 年 5 月下旬

ひとのころのーかはるよのなか
 すてかたきーわかたみちのーとりとりに

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
 仁 2(1468) 年 5 月下旬

はかないはねをならべるとりべやま
 →儂い羽根を並べる鳥部山

ひとのこころのーかはるよのなか
はかなしやーはねをならへしーとりへやま

【萱草／伊地知本】／恋／文明 6(1474)年
2月以前

ひとのこころのーかはるよのなか
はかなしやーはをもならへしーとりへやま

【老葉／書陵部宗訊筆本】／旅／

→^{はなさきく}花咲く

ひとのこころのーかはるよのなか
のへをわけーやまちをたとるーはなさきて

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁 2(1468)年 5月下旬

ひとのこころのーかはるよのなか
みやまきをーかたはらになすーはなさきて

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁 2(1468)年 5月下旬

→^{はなもない}花もない

ひとのこころのーかはるよのなか
うれへあるーみはなかめつるーはなもなし

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁 2(1468)年 5月下旬

ひとのこころのーかはるよのなか
うたのみちーまことをうるはーはなもなし

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁 2(1468)年 5月下旬

→^{はねをならべるとりべやま}羽根を並べる鳥部山

ひとのこころのーかはるよのなか
とりへやまーはねをならへしーすゑたえて

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁 2(1468)年 5月下旬

ひとのこころのーかはるよのなか
はかなしやーはねをならへしーとりへやま

【萱草／伊地知本】／恋／文明 6(1474)年
2月以前

→^{ひとつ}ひとつ

ひとのこころのーかはるよのなか
つきはたたーみやもわらやもーひとつにて

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁 2(1468)年 5月下旬

ひとのこころのーかはるよのなか
こをおもふーみちのみたれもーひとつにて

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁 2(1468)年 5月下旬

→^{ほととぎす}時鳥

ひとのこころのーかはるよのなか
ほととぎすーはななきころをーなくさめて

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁 2(1468)年 5月下旬

ひとのこころのーかはるよのなか
またしよもーなきかやまちのーほととぎす

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁 2(1468)年 5月下旬

ひとのこころのーかはるよのなか
ほととぎすーかへるやまちはーともならて

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁 2(1468)年 5月下旬

→^{みをしらない}身を知らない

ひとのこころのーかはるよのなか
うれしさもーうきもゆめなるーみをしらて

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁 2(1468)年 5月下旬

ひとのこころのーかはるよのなか
ときをえはーなほおそるへきーみをしらて

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁 2(1468)年 5月下旬

→^{みをしる}身を知る

ひとのこころのーかはるよのなか
みをしれはーわれとさためむーやともなし

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁 2(1468)年 5月下旬

ひとのこころのーかはるよのなか
みをしれはーいはむうらみもーなきものを

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

^{わがうへ}
→我が上

ひとのこころの一かはるよのなか
わかうへに—おもはてたれを—そしるらむ

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

ひとのこころの一かはるよのなか
わかうへに—ほしのひとよの—あきもかな

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

ひとのこころのよのなか
人の心の世の中

^{はなをうらむ}
→花を恨む

ひとのこころの一あたしよのなか
はなをたれ—うつろふものと—うらむらむ

【竹林抄／新古典文学大系本】／春／文明
8(1476) 年 5 月頃

ひとのこころの一かはるよのなか
なつやまと—みなすをはなや—うらむらむ

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

ゆきのなかぞら
雪の中

^{ふきとふく}
→ふきと吹く

くれわたりたる—ゆきのなかぞら
ふきとふく—あらしのおとは—しつかにて

【羽柴千句】／何人 [すくにゆく]／天正
6(1578) 年 5 月 18・19 日

のはちりきゆる—ゆきのなかぞら
ふきとふく—かせよりのちの—あさつくひ

【天正年間百韻 5 7 巻】／x x [わけゆか
は]／天正 4(1576) 年 8 月 19 日

よのなか
世の中

^{みもやすく}
→身を安く

たのむこと—あれはなほうき—よのなかに
おいてやひとは—みをやすくせむ

【延徳年間百韻 1 6 巻】／何人 [うすゆき
に]／延徳 3(1491) 年 10 月 20 日

をくるまの一くるしくめくる—よのなかに
うしやいつかは—みをやすくせむ

【延徳年間百韻 1 6 巻】／初何 [さけはさ
く]／千句第三／延徳 4(1492) 年 3 月 3 日

なかなか

なかなかいちはすみよい
中々市は住み良い

^{みわのすぎむら}
→三輪の杉群

ましはりの—なかなかいちは—すみよきに
たちならひたる—みわのすぎむら

【看聞日記紙背 5 0 巻】／山何 [なつかけ
よ]／応永 26(1419) 年 3 月 29 日

やまよりも—なかなかいちは—すみよきに
たれたつねこむ—みわのすぎむら

【看聞日記紙背 5 0 巻】／唐何 [あすはさ
け]／応永 31(1424) 年 2 月 25 日

ながい

あきのよなが
秋の夜長

^{きりぎりす}
→蟋蟀

はしるにあかぬ—あきのよなかさ
ききすてて—たれかいをぬる—きりぎりす

【大永年間百韻 1 4 巻】／何人 [つきやふ
ね]／大永 2(1522) 年 8 月

おもひをつくす—あきのよなかさ
きりぎりす—なれかなくねに—まけむやは

【弘治年間百韻 8 巻】／何人 [うめひととき]
／裏白／弘治 3(1557) 年 1 月 3 日

こころながくまで
心長く待て

^{つなひくわたしがね}
→綱引く渡し舟

こころなかくも—われにまでとや
わたしふね—むかひにつなを—ひきすてて

【新撰菟玖波集／実隆本】／霧旅下／明応
4(1495) 年 9 月 26 日

こころなかくも—ひとをこそまで
くるるまで—つなひきはふる—わたしふね

【北畠家連歌合／書陵部本】／北畠家連歌
合／文明 2(1470) 年正月 6 日

ながあめのそら
長雨の空

ほととぎす
→時鳥

ふりみふらすみーなかあめのそら
ほととぎすーつきになくよやーいつならむ

【永正年間百韻 3 4 卷】／山河 [とふひと
や]／永正 18(1521) 年 8 月

なほはれかたきーなかあめのそら
ほととぎすーわかうたかひにーききわひて

【下草／金子本】／夏／延徳 4(1492) 年頃

よがながい
夜が長い

おもいわびる
→思い侘びる

ゆめいくたひのーよこそなかけれ
こひそうきーあきはものかはーおもひわひ

【看聞日記紙背 5 0 卷】／山河 [ちよもみ
む]／応永 19(1412) 年 1 月 14 日

ひとりはなつもーよこそなかけれ
おもひわひーみしかきこころーいかかせむ

【文明年間百韻 3 4 卷】／何人 [ゆきのや
ま]／文明 14(1482) 年 1 月 16 日

つきをみる
→月を見る

はつしもふれるーよこそなかけれ
まとろますーかりねののへのーつきをみて

【熊野千句】／何田 [おそさくら]／文正
元 (1466) 年 3 月以前

ねさめののちもーよこそなかけれ
ふるさとにーをはすてやまのーつきをみて

【新撰菟玖波集／実隆本】／秋上／明応
4(1495) 年 9 月 26 日

よにながらえる
世に長らえる

はなのひとつ
→花の一本

あるはみなーなきよかなしきーなからへに
えたももききのーはなのひとつ

【永禄元年花千句】／□□ [さそふなよ]
／永禄元 (1558) 年 3 月 23 日～25 日

あたなりしーよはけふのみのーなからへに
くちきにのこるーはなのひとつ

【天正四年万句 7 0 卷】／何路 [うすきり
に]／天正 4(1576) 年 5 月 6 日～7 月 19 日

ながつき

ながつきのしも
長月の霜

ありあけ
→有明

あらしはけしきーながつきのしも
ありあけにーころもうつよのーそらさえて

【美濃千句】／何心 [つゆにきえ]／文明
4(1473) 年 12 月 16 日～21 日

かしらそしろきーながつきのしも
ありあけにーなくやよなかのーやまからす

【宗砌関係 9 種】／宗砌発句並付句抜書/
小松天満宮本／

ながめる

ながめる
眺める

あわじしまやま
→淡路島山

あかしかたーふねのゆくへのーなかめして
なみにうかへるーあはちしまやま

【天正年間百韻 5 7 卷】／□□ [ゆふつゆ
も]／天正 16(1588) 年 8 月 10 日

ゆきになるーなにはわたりのーなかめして
たなひくくもやーあはちしまやま

【寛文年間百韻 2 2 卷】／□□ [くるかり
も]／寛文 12(1672) 年 8 月 23 日

ながれる

ながれるすえ
流れの末

たのものはら
→田の面の原

たちさわくーなかれのすゑのーむらちとり
たのものはらのーいりひさむけし

【天正年間百韻 5 7 卷】／何路 [かすむよ
の]／天正 6(1578) 年 2 月 18 日

うろくつはーなかれのすゑのーかたよりに
たのものはらのーひかりさやけし

【元和年間百韻 2 4 卷】／□□ [やつかほ
の]／元和 6(1620) 年 8 月 23 日

ながれる
流れる

ゆくえしれない
→行方知れない

よとかはのーよとますきりやーなかるらむ
ふなちもあきもーゆくへしられぬ

【浜宮千句】／□□ [つきのいろと] /

とほさかるーほとやさかひもーなかるらむ
めわたるとりそーゆくへしられぬ

【成立不詳・宗長以前15巻】／山河 [う
のはなや] / 成立時不詳

ながれるみず
流れる水

よしのがわ
→吉野川

なかるるみつのーととまらしとや
なみにはなーそをたにのこせーよしのかは

【園塵第三／続群書類従本】／春／文亀元
(1501)年3月18日

なかるるみつのーゆくへしらすや
かたとこそーはなもきゆらめーよしのかは

【園塵第四／早稲田大学本】／春／永正6、7
年

なかるるみつのーゆくへしらはや
あわとこそーはなもきゆらめーよしのかは

【名所句集／静嘉堂文庫本】／春／(大永
前後)

なく

うぐいすがなく
鶯が鳴く

あけがた
→明け方

ねくらもしるくーうくひすそなく
つきかすむーにひたまくらーあけかたに

【享徳二年千句】／何路 [くまもなき] /
享徳2(1453)年8月11日～13日

はねならはしのーうくひすそなく
さそはれむーはるをちさとのーあけかたに

【池田千句】／唐何 [はなにあけて] / 永
正7(1510)年春以前<永正5年春>

またふるゆきをーうくひすそなく
たけあめるーとほそはまたきーあけかたに

【永正年間百韻34巻】／山家 [ひとめさ
へ] / 永正8(1511)年11月3日

はなとあさぼらけ
→花と朝ぼらけ

あはれをそへてーうくひすそなく
あかすねしーつきとはなのーあさぼらけ

【永禄元年花千句】／□□ [さそふなよ]
／永禄元(1558)年3月23日～25日

さそふひかけにーうくひすそなく
さきいてぬーはなのにはひやーあさぼらけ

【成立不詳・宗長以前15巻】／名号 [な
かはひと] / 成立時不詳

かすむこのあした
→霞むこの朝

はねならはせるーうくひすそなく
このあしたーほのほのかすむーのにいてて

【出陣千句】／何袋 [はなさかり] / 永正
元(1504)年10月25日～27日

たけをはやしとーうくひすそなく
うちなひきーかすみにけりなーこのあした

【成立不詳・宗朝以前6巻】／唐何 [なて
しこの] / 成立時不詳

あさぼらけ
→朝ぼらけ

うくひすのなくーこゑのしつけさ
うちなひくーのへはかすみのーあさぼらけ

【天正年間百韻57巻】／何路 [かすむよ
の] / 天正6(1578)年2月18日

きけはかすかにーうくひすのなく
かけひろきーたけのはやしのーあさぼらけ

【元和年間百韻24巻】／□□ [とけゆけ
は] / 裏白 / 元和8(1622)年1月3日

ほととぎす
→時鳥

なつもかへらてーうくひすのなく
はつこゑをーいつしかとまつーほととぎす

【天正年間百韻57巻】／□□ [かみかき
の] / 天正17(1589)年5月24日

ゆくをやしたふーうくひすのなく
ほととぎすーすをたつこゑもーきかまほし

【春夢草／書陵部本】／夏／永正12(1516)
年、13年

おじかなくこえ
牡鹿鳴く声

→寝覚めれば月

あかつきさひしーをしかなくこゑ
ねさむれは一つきすむあきのーこからしに

【紹巴亡父追善千句】／二字反音 [かけた
かき]／天文24(1555)年3月26日～晦日

かすかなりけりーをしかなくこゑ
ねさむれは一つきはありあけのーまくらにて

【五吟一日千句】／何舟 [はなをさへ]／
天正9(1581)年11月19日

かりなく
雁鳴く

→秋が更ける

くもまよりーほのめくつきにーかりなきて
そらもみにしむーあきはふけり

【成立不詳・宗祇以前15巻】／何人 [は
つはなや]／成立時不詳

あらしのみーふくやときけはーかりなきて
をのへのまつもーあきはふけり

【壁草／大阪天満宮文庫本】／秋／永正
2(1505)年8月23日以後同3年3月以前

→伏見の夢

つきうつるーまぐらのをちにーかりなきて
ふしみのゆめそーなこりつゆけき

【成立不詳・宗養以前8巻】／何木 [とこ
なつに]／成立時不詳

みつしろきーたのものうへにーかりなきて
ふしみのゆめそーつきにあとなき

【春夢草／書陵部本】／秋／永正12(1516)
年、13年

かわずなく
蛙鳴く

→鶯

をりをえかほにーかはつなくなり
うくひすのーこゑよりはるやーさそふらむ

【天文十八年梅千句】／何人 [みしいろは]
／天文18(1549)年正月11日

おのかつまとふーかはつなくなり
うくひすのーあめうちそそくーはなにねて

【大永四年月並千二百韻】／□□ [としな
みの]／月並千二百韻／大永4(1524)年12
月23日

→五月雨

ときもわすれすーかはつなくなり
さみたれはーはれてもおなしーにはたつみ

【天文廿四年梅千句】／花之何 [かみかき
の]／天文24(1555)年正月7日

かはつなくなりーをたのまちまち
さみたれはーさかひもみえすーみちとほみ

【宗牧追善千句】／x x [くもるなよ]／
永禄4(1561)年9月14日・15日

ふりたるいけにーかはつなくなり
さみたれはーなこりつきせぬーにはたつみ

【永享年間百韻4巻】／山河 [くちてけり]
／永享12(1440)年10月16日

→庭水

ときもわすれすーかはつなくなり
さみたれはーはれてもおなしーにはたつみ

【天文廿四年梅千句】／花之何 [かみかき
の]／天文24(1555)年正月7日

ふりたるいけにーかはつなくなり
さみたれはーなこりつきせぬーにはたつみ

【永享年間百韻4巻】／山河 [くちてけり]
／永享12(1440)年10月16日

きぎすなきたつ
雉鳴き立つ

→駒止める

きぎすなきたつーこゑのさひしさ
あらしふくーかすみのすゑにーこまとめて

【天文廿四年梅千句】／何木 [つみそへよ]
／天文24(1555)年正月7日

きぎすなきたつーありあけのつき
さくらかりーはなのしたはにーこまとめて

【大永四年月並千二百韻】／□□ [しもや
ひぬ]／月並千二百韻／大永4(1524)年9
月23日

だれをまつむしのなく
誰を松虫の鳴く

→^{とうひともあらしのやまのあきのくれ}訪う人も風の山の秋の暮れ

あかつきたれを—まつむしのなく
とふひとも—あらしのやまの—あきのくれ

【竹林抄／新古典文学大系本】／秋／文明
8(1476)年5月頃

いまはたれをか—まつむしのなく
とふひとも—あらしのやまの—あきのくれ

【行助関係4種】／行助句／伊地地本／

ちどりなく
千鳥鳴く

→^{うちしぐれる}うち時雨れる

かせにたたよふ—ちとりなくなり
いくたひも—ねさめのまくら—うちしくれ

【天文廿四年梅千句】／何路【とりのねも】
／天文24(1555)年正月7日

ゆけきになれは—ちとりなくなり
ふるさとの—さほのかはらの—うちしくれ

【壁草／書陵部本】／冬／永正9年

→^{かえる}帰る

つきまつなみに—ちとりなくなり
あととめぬ—ゆめやよのまに—かへるらむ

【表佐千句】／何船【はなやちる】／文明
8(1476)年3月6日<~8日>

きけははるかに—ちとりなくなり
ふきくらす—あらしやまつに—かへるらむ

【大永四年月並千二百韻】／□□【しもや
ひぬ】／月並千二百韻／大永4(1524)年9
月23日

ちどりなくこえ
千鳥鳴く声

→^{おもいかねる}思いかねる

ゆくかたをなみ—ちとりなくこゑ
おもひかね—たつぬるみちに—さよふけて

【三島千句】／何路【なへてよの】／文明
3(1471)年3月21日~23日

よふねにきくは—ちとりなくこゑ
おもひかね—いもねぬたひを—しるままに

【至徳以前百韻7巻】／何木【かみかきの】
／至徳4(1387)年以前

とりなく
鳥鳴く

→^{かなおかのみち}片岡の道

あはゆきを—□□□□はらふ—とりなきて
あさまたきゆく—かたをかのみち

【永禄年間百韻28巻】／□□【ゆきにう
め】／永禄5(1562)年2月1日

くれわたる—たのもつつきに—とりなきて
ひかりほのめく—かたをかのみち

【天正年間百韻57巻】／□□【うめかえ
の】／裏白／天正19(1591)年1月3日

とりのなくこえ
鳥の鳴く声

→^{ききのと}関の声

よなかさいつら—とりのなくこゑ
せきのとの—もみちむしろを—しきすてて

【文禄年間百韻12巻】／□□【たかには
も】／文禄2(1593)年5月27日

いつくのそらそ—とりのなくこゑ
せきのとの—まつあけわたる—ゆきはれて

【諸家月次連歌抄】／諸家月次連歌抄／成
立()年未詳

なくきりきりす
鳴く蟋蟀

→^{あかしほてる}あかし果てる

あきふけり—なくきりきりす
なからふる—みをなけきつつ—あかしはて

【元和年間百韻24巻】／□□【ちちのは
るを】／裏白／元和4(1618)年1月3日

ゆかにちかより—なくきりきりす
ものおもふ—まくらなからに—あかしはて

【元和年間百韻24巻】／□□【としとし
に】／元和6(1620)年12月5日

→^{くれつがた}暮れつ方

なくきりきりす—こゑやそふらむ
なかつきの—なかきおもひの—くれつがた

【初瀬千句】／何木【ほととぎす】／享徳
元・2(1452)年、4月

こゑよわりつつなくきりきりす
ふゆされはーいとともうきーくれつかた

【永禄年間百韻28巻】／□□〔ゆきにう
め〕／永禄5(1562)年2月1日

→^{みにかぎらない}身に限らない

けなげやなげーふてのなこりのーきりきりす
おもひすてしはーみにもかきらし

【浅間千句】／唐何〔はなといはは〕／永
正11(1514)年5月13日～19日

つひにねぬーよすかなくなりーきりきりす
あきのつらさはーみにもかきらし

【文明十二年千句8巻】／何人〔ひとはさ
へ〕／文明12(1480)年4月10日～*日

→^{みみにみちる}耳に満ちる

なげやなげーよしうれふともーきりきりす
みみにみちたるーせみのもろこゑ

【飯盛千句】／何衣〔つきいてて〕／永禄
4(1561)年5月27日～29日

ねになくはーおもひあれはやーきりきりす
みみにみちたるーかせそみにしむ

【至徳以前百韻7巻】／何路〔ゆきませの〕
／至徳4(1387)年以前

なくほととぎす
鳴く時鳥

→^{ありあけのつき}有明の月

やまよりやまにーなくほととぎす
ありあけのーつきはくもまにーかけみえて

【天正年間百韻57巻】／何路〔かすむよ
の〕／天正6(1578)年2月18日

くさのまくらにーなくほととぎす
ありあけのーつきをなこりのーよはのゆめ

【天正年間百韻57巻】／□□〔ともなし
に〕／天正18(1590)年11月21日

→^{つきはありあけ}月は有明

ほととぎすーはなのなかはにーきてもなげ
つきはありあけのーおほろなるころ

【弘治三年春雪千句】／何衣〔なくきしの〕
／弘治3(1557)年正月7日～9日

たかかたのーあめになくらむーほととぎす
つきはありあけのーなつのよのそら

【那智笔／北野天満宮本】／永正十四年／

→^{はなざかり}花盛り

まくらのくもにーなくほととぎす
のをひろみーやとかるかけのーはなざかり

【紹巴亡父追善千句】／玉何〔はるよたた〕
／天文24(1555)年3月26日～晦日

なくほととぎすーほのかなるそら
くももきをーうつむはかりのーはなざかり

【弘治三年春雪千句】／初何〔けさみれは〕
／弘治3(1557)年正月7日～9日

→^{あまそそき}雨注ぎ

はるはよのまをーなくほととぎす
やよひはたーけふにつきぬるーあまそそき

【嵯峨千句】／山何〔いけみつの〕／(元
龜4)天正元(1573)年正月9日～11日

くもよりをちにーなくほととぎす
はなにそへーたそかれをしきーあまそそき

【月村抜句／書陵部本】／永正十四年／

なくほととぎす
鳴け時鳥

→^{あめすぎる}雨過ぎる

なげほととぎすーよをまたすとも
くもふかきーなつやまかけにーあめすきて

【看聞日記紙背50巻】／何人〔うのはな
は〕／永享9(1437)年4月25日

つきかたふきぬーなげほととぎす
たちいつるーくさのいほりのーあめすきて

【永禄年間百韻28巻】／何木〔きりのは
の〕／永禄5(1562)年7月4日

→^{くもまよう}雲迷う

ひもゆふかけにーなげほととぎす
くもまよふーかたはあめにやーむかふるむ

【因幡千句】／何草〔ふるゆきは〕／文明
7(1475)年11月26日<～28日>

なけほとときすーすきのひとむら
くもまよふーこすゑのうへにーあめみえて

【那智筆／北野天満宮本】／永正十四年／

→^{みじかよ}短夜

なけほとときすーひとこゑの□□
にしにゆくーこころのつきのーみじかよに

【成立不詳・心敬以前14巻】／何船【は
るはまた】／成立時不詳

かかるをりふしーなけほとときす
うたたねのーゆめのうきはしーみじかよに

【春夢草／書陵部本】／夏／永正12(1516)
年、13年

ほととぎすなく
時鳥鳴く

→なる

ほととぎすなくーくものをちかた
みじかよもーたれかねさめにーなりぬらむ

【文明十四年万句52巻】／朝何【ひにそ
ひて】／文明14(1482)年7月4日～9月
14日

ほととぎすなくーあとをこそみれ
むかしたかーうゑきのもりとーなりぬらむ

【心敬関係10種】／心玉集／静嘉堂文庫本
／

まつむしがなく
松虫が鳴く

→^{くさのはら}草の原

つゆのやとりにーまつむしのなく
くさのはらーあたなるいろにーうつろひて

【美濃千句】／何色【しくれつつ】／文明
4(1473)年12月16日～21日

なにをまてとかーまつむしのなく
つきもはやーかけさすつゆのーくさのはら

【永原千句】／何木【おとそなき】／明応
9(1500)年7月17日

→^{あきのくれ}秋の暮れ

なれしはしるやーまつむしのなく
かりころもーいくつゆしものーあきのくれ

【永正年間百韻34巻】／何船【うちなひ
き】／永正13(1516)年1月

あかつきたれをーまつむしのなく
とふひともーあらしのやまのーあきのくれ

【竹林抄／新古典文学大系本】／秋／文明
8(1476)年5月頃

むしなく
虫鳴く

→^{きりのしたみち}霧の下道

をかのへのーかきほはまたきーむしなきて
ゆふかけふかきーきりのしたみち

【飯盛千句】／何衣【つきいてて】／永禄
4(1561)年5月27日～29日

あさほらけーわけゆくかたにーむしなきて
そてさむくなるーきりのしたみち

【文明十四年万句52巻】／何船【あきの
いろ】／文明14(1482)年7月4日～9月
14日

なぐさめる

うきをただなぐさめる
憂きをただ慰める

→^{ひとふてのあと}一筆の跡

うきをたたーわすれかたみにーなくさめよ
それさへたゆるーひとふてのあと

【葉守千句】／薄何【いはほにも】／長享
元(1487)年10月9日～11日

うきをたたーこころとしはしーなくさめて
しのへはのこすーひとふてのあと

【天文年間百韻38巻】／朝何【またてき
く】／天文9(1540)年4月25日

→^{うちがなぐさめる}うちが慰める

→^{くさまくら}草枕

ひなのなかちもーうちそなくさむ
おもひおくーみやこをゆめのーくさまくら

【永正年間百韻34巻】／何人【かせなか
ら】／永正7(1510)年10月20日

のをなつかしみーうちそなくさむ
くさまくらーいもにむすひしーゆめさめて

【那智筆／北野天満宮本】／永正十三年／

なごり

なごり
名残りまつむしのこゑ
→松虫の声あさちふを一ふかきみやこの一なごりにて
ききすてかたき一まつむしのこゑ【永正年間百韻34巻】／白何【さみたれや】
／千句第五／永正15(1518)年5月14日もみちする一あとにはくもゐの一なごりにて
すゑかれにけり一まつむしのこゑ【文明十四年万句52巻】／何人【よにひ
ろく】／文明14(1482)年7月4日～9月
14日なごりさびしい
名残り寂しいあゆこもり
→冬籠りなごりさひしき一とりのひとこゑ
はるきても一つれなきはなの一ふゆこもり【伊予千句】／山何【やとりとへ】／天文
6(1537)年5月22日かれののはらそ一なごりさひしき
くさのとを一すむかけにする一ふゆこもり【明応年間百韻22巻】／何人【としにあ
りて】／明応9(1500)年7月7日

なつ

なつひのなつごろも
たつ日の夏衣やまほととぎす
→山時鳥つゆそおく一たちていくかの一なつごろも
たひにはつれよ一やまほととぎす【池田千句】／何路【はなはしるや】／永
正7(1510)年春以前<永正5年春>なつごろも一たちかふるひかす一ほともなし
うへなくときか一やまほととぎす【大永年間百韻14巻】／名号【なつごろ
も】／大永8(1528)年4月12日なつかけて
夏かけてましのうのはな
→岸の卯の花なつかけて一ふちさくかはへ一またもみむ
なみにあらずな一きしのうのはな【熊野千句】／何田【おそさくら】／文正
元(1466)年3月以前さかりすくる一ゐてのやまふき一なつかけて
はやほころふる一きしのうのはな【寛文年間百韻22巻】／□□【むかしお
もふ】／寛文10(1670)年2月7日なつこたち
夏木立やまほととぎす
→山時鳥しらかしの一ゆきまやみねの一なつこたち
くもよりいつる一やまほととぎす【永禄石山千句】／初何【しらかしの】／
永禄7(1564)年5月12日はなはきのふ一もみちもあすか一なつこたち
またはつねきく一やまほととぎす【園塵第二／続群書類従本】／夏／明応
4(1495)年早春なつひ
夏の日むらさめのくも
→村雨の雲なつひは一かたふくそらも一さやかにて
めくりもあへぬ一むらさめのくも【永正年間百韻34巻】／何人【ゆふつく
よ】／永正13(1516)年7月8日なつひは一やまのあなたに一へたたりて
ふもとにめくる一むらさめのくも【寛永年間百韻15巻】／□□【ふたよあ
けて】／裏白／寛永5(1628)年1月3日なつひのよのつき
夏の夜の月ほととぎす
→時鳥ことかはすまも一なつひのよのつき
きくもたた一それかあらぬか一ほととぎす【天正年間百韻57巻】／山何【かせふけ
は】／天正2(1574)年5月8日なかめあかせる一なつひのよのつき
ほととぎす一やはひとこゑに一まどろまで【園塵第三／続群書類従本】／夏／文亀元
(1501)年3月18日

なでしこ

なでしこ
撫子ひぐらしのこゑ
→ 蝸の声なでしこのーおひゆくすゑをーまちかねて
あきのこなたのーひぐらしのこゑ【大永四年月並千二百韻】／□□ [けふひ
くや] / 月並千二百韻 / 大永 4(1524) 年 5
月 23 日なでしこのーつゆはまそでのーいろそめて
ゆきすきかてのーひぐらしのこゑ【天文年間百韻 3 8 卷】 / 何人 [なやここ
に] / 天文 4(1535) 年 5 月 1 日

なに

なにおもう
何思う上のなか
→ 世の中くさのいほりにーなににおもふらむ
よのなかにーかかつらふこそーはかなけれ【宗牧追善千句】 / 何路 [のこるなは] /
永禄 4(1561) 年 9 月 14 日・15 日としへてのちをーなににおもふらむ
けさみしもーゆふへはかはるーよのなかに【文明年間百韻 3 4 卷】 / □□ [ゆきのか
け] / 文明 5(1473) 年 12 月 5 日なにしたのむ
何頼むあきがおのはな
→ 朝顔の花わかよのつゆにーなにたのむらむ
あさかほのーはなにもみをはーおとろかて【明応年間百韻 2 2 卷】 / 何人 [たますた
れ] / 明応 5(1496) 年 6 月 7 日はかなきころーなにたのむらむ
あさかほのーはなに□□□のーうちみたれ【永禄年間百韻 2 8 卷】 / □□ [ゆきにう
め] / 永禄 5(1562) 年 2 月 1 日なににたとえよう
何に譬えようふくかぜ
→ 吹く風かかるうらみをーなににたとへむ
あつきひのーころものすそをーふくかせに【宝徳四年千句】 / 何路 [はなにほふ] /
宝徳 4(1452) 年 3 月 12 日よのなかをーなににたとへむ
ふくかせにーとまりさためぬーあまのつり
ふね【菟玖波集 / 広島大学本】 / 雑体 / 文和
5(1356) 年冬~翌年の春

なびく

うちなびく
打ち靡くつゆもたまらない
→ 露も溜まらないかりわくるーかとたのいなはーうちなひき
あしのまるやはーつゆもたまらず【顕証院会千句】 / 何鳥 [みたれあふ] /
宝徳元 (1449) 年 8 月 19 日~21 日うちなひきーそとのきりのーあさほらけ
たけのさえたのーつゆもたまらず【天文廿四年梅千句】 / 何船 [つきにうめ]
/ 天文 24(1555) 年正月 7 日ひとはおとしない
→ 人は音しないかせかよふーのへのなつくさーうちなひき
ひとはおとせぬーやまのしたいほ【初瀬千句】 / 何船 [はなはなほ] / 享徳
元・2(1452) 年、4 月ふねうかふーきしのくれたけーうちなひき
ひとはおとせぬーつきのゆふかせ【明応年間百韻 2 2 卷】 / 何船 [みやこと
し] / 明応 8(1499) 年 1 月 4 日たけうちなびく
竹打ち靡くとがほたる
→ 飛ぶ螢たけうちなびくーをちのかはきり
とふほたるーここにかしこにーくれそめて【石山四吟千句】 / 何人 [うめかえは] /
天文 24(1555) 年 8 月 15 日~19 日

たけうちなひく一かけのすすしさ
ほのかにも一かせのまにまに一とふほたる

【天正年間百韻57巻】／初何〔はるたち
て〕／裏白／天正12(1584)年1月3日

なびきあうたけ
靡き合う竹

→^{つづく}続く

なひきあひたる一たけのすゑすゑ
つきうつる一たのもやさとに一つつくらむ

【天正年間百韻57巻】／何人〔わかくさ
も〕／天正11(1583)年1月10日

なひきあひたる一たけのむらむら
まつたてる一けふりやたえす一つつくらむ

【天正年間百韻57巻】／□□〔ゆふたち
の〕／天正17(1589)年6月16日

なびくあおやぎ
靡く青柳

→^{かすむ}霞む

かせよりさきも一なひくあをやき
ありあけや一なかそらたかく一かすむらむ

【看聞日記紙背50巻】／何人〔うめのな
の〕／応永30(1423)年5月27日

はるのしるしに一なひくあをやき
かつらきや一くものよそめに一かすむらむ

【看聞日記紙背50巻】／唐何〔いやとし
に〕／応永31(1424)年1月25日

→^{のこる}残る

くちきなからも一なひくあをやき
みちのへの一ゆきはうすくや一のこるらむ

【看聞日記紙背50巻】／何路〔ひととせ
に〕／応永32(1426)年12月11日

しつえしけりて一なひくあをやき
かせやまた一ちりしきくらに一のこるらむ

【寛文年間百韻22巻】／□□〔たのもし
な〕／寛文9(1669)年10月2日

なみ

いわこすなみ
岩越す浪

→^{なみおちる}滝落ちる

いはこすなみは一まつのあらしか
ちるをみる一やまにははなの一たきおちて

【菟玖波集／広島大学本】／春下／文和
5(1356)年冬～翌年の春

いはこすなみは一かはかせそふく
あらいその一うへなるやまに一たきおちて

【老葉／吉川本】／雑上／文明13(1481)年
夏頃

おきのしらなみ
沖の白浪

→^{たつたやまのあき}立田山の秋

かせにまかする一おきつしらなみ
たつたやま一みねのこのはに一あきくれて

【壁草／大阪天満宮文庫本】／秋／永正
2(1505)年8月23日以後同3年3月以前

しくれつはれつ一おきつしらなみ
たつたやま一あきふかくなる一ほとみえて

【宗長関係8種】／壬生宛／書陵部本／

おきのなみ
沖の浪

→^{たつたのやま}立田の山

はるかにも一からくそみゆる一おきつなみ
たつたのやまの一よはのこよひち

【永正十花千句】／何人〔かせをのみ〕／
永正13(1516)年3月11日～14日

ひとにさて一いかかかたらむ一おきつなみ
たつたのやまの一あきのいろいろ

【老葉／吉川本】／秋／文明13(1481)年
夏頃

かかふるなみ
掛かる藤浪

→^{たこのながきひ}田子の長き日

よそのこすゑに一かかふるちなみ
たこのうら一あひきのなはも一なかきひに

【看聞日記紙背50巻】／何人〔うめのな
の〕／応永30(1423)年5月27日

まつにことさら一かかふるちなみ
ひまもなき一たこのしほくみ一なかきひに

【看聞日記紙背50巻】／山何〔あつさな
ほ〕／応永32(1425)年閏6月25日

かすみみかさやま
→霞む三笠山

あをはのころに一かかふるちなみ
あけにけり一かすみのひまに一みかさやま

【看聞日記紙背50巻】／何人〔はなのひ
も〕／応永27(1420)年閏1月13日

まつほのほのと一かかふるちなみ
かすみては一なほみねたかし一みかさやま

【看聞日記紙背50巻】／何船〔ことはな
に〕／応永31(1424)年9月27日

しがのうらぶね
志賀の浦舟

かみまつり
→神祭

よもあけかたの一しかのうらぶね
かみまつり一もよほすそての一いさなひに

【天文十八年梅千句】／山何〔うめさけは〕
／天文18(1549)年正月11日

なみたにかすみ一しかのうらぶね
たひひとに一あくるやけふの一かみまつり

【行助関係4種】／行助連歌／天理本／

すまのうらなみ
須磨の浦浪

もしおやくけむり
→藻塩焼く煙

ふなちにあらき一すまのうらなみ
もしほやく一けふりにうみも一かきくれて

【表佐千句】／唐何〔つきはたた〕／文明
8(1476)年3月6日<~8日>

みのうきふしに一すまのうらなみ
もしほやく一けふりはあさな一ゆふなにて

【天正年間百韻57巻】／何路〔かすみよ
の〕／天正6(1578)年2月18日

あわしがた
→淡路瀧

ふねさしとむる一すまのうらなみ
あはちかた一うしほのむかふ一せとをみて

【宝徳四年千句】／何人〔はなそころ〕／
宝徳4(1452)年3月12日

つきをみるよの一すまのうらなみ
あはちかた一せとのあきかせ一みにしみて

【菟玖波集／広島大学本】／秋上／文和
5(1356)年冬~翌年の春

たきのいわなみ
滝の岩浪

おとわがわ
→音羽川

こすゑにちるや一たきのいはなみ
おとはかは一おとはかりして一くるるひに

【聖廟千句】／初何〔きのふより〕／明徳
3(1494)年2月10日~12日

かすみかくれに一たきのいはなみ
やまとほく一なかれていたる一おとはかは

【寛正年間百韻20巻】／何人〔けふこす
は〕／寛正3(1462)年2月27日

なみのうえ
浪の上

もしおのけむり
→藻塩の煙

なくさむる一つきはあかしの一なみのうへ
もしほのけふり一あきふかくみゆ

【伊庭千句】／何人〔うすくもり〕／大永
4(1524)年3月17日~21日

うみやまの一あさゆふかはる一なみのうへ
もしほのけふり一をちのしらくも

【享祿年間百韻8巻】／白何〔あさみとり〕
／享祿3(1530)年3月2日

おねのうち
→舟の内

なみのうへなる一あまのいへしま
いてぬひも一こころやうかふ一ふねのうち

【伊庭千句】／何文〔たかはるの〕／大永
4(1524)年3月17日~21日

まつらのやまそ一なみのうへなる
ほとときす一ききてやすらふ一ふねのうち

【文明年間百韻34巻】／夕何〔みつみえぬ〕
／千句第口／文明17(1485)年6月26日

なみのうきふね
浪の浮舟

てならい
→手習い

よるへはいつく一なみのうきふね
てならひは一またいとけなき一ころそかし

【看聞日記紙背50巻】／何路[うのはなの]／応永30(1423)年4月4日

ことにこきいる一なみのうきふね
てならひは一にはのをしへの一ほとなるに

【看聞日記紙背50巻】／何人[かみにうめ]／応永31(1424)年2月25日

なみのまにまに
浪の間に間に

→寝覚めがち

おとはたた一なみのまにまに一ししてくきて
ねさめかちなる一とまふきのうち

【嵯峨千句】／何路[あけほのの]／(元
龜4)天正元(1573)年正月9日~11日

なみのまにまに一ちとりむれたつ
とまふきに一ねさめかちなる一さよあらし

【寛文年間百韻22巻】／□□[なつなき
は]／寛文13(1673)年6月12日

ふくなみのうらかぜ
吹く浪の浦風

→鳥の鳴き立つ

ふきまとはせる一なみのうらかせ
さよふかき一うきねのとりの一なきたちて

【大永三年月並千三百韻】／□□[はなに
つき]／月並千三百韻／大永3(1523)年3
月23日

ふきこそかはれ一なみのうらかせ
なかそらに一まさこのちとり一なきたちて

【元和年間百韻24巻】／□□[まつふく
や]／元和8(1622)年10月29日

まつのおじなみ
松の藤浪

→月出る

はるちよかけよ一まつのふちなみ
なかきひも一くるれはやかて一つきいてて

【看聞日記紙背50巻】／山何[やよやよ
ひ]／応永31(1424)年3月18日

はなまちえたる一まつのふちなみ
はるのよの一ひかりをそふる一つきいてて

【文安年間百韻1巻】／夢想[おそさくら]
／文安2(1445)年3月18日

ほととぎす
→時鳥

なつをかけたる一まつのふちなみ
ほとときす一このゆふつくよ一ほのめきて

【浅間千句】／何木[したふとや]／永正
11(1514)年5月13日~19日

こえてやたかき一まつのふちなみ
ここになく一こゑもくもゐの一ほとときす

【成立不詳・宗長以前15巻】／□□[ち
らぬより]／成立時不詳

ところところの一まつのふちなみ
またれぬる一こゑはやよひの一ほとときす

【天正年間百韻57巻】／x x [かすみけ
り]／天正10(1582)年3月1日

なみだ

つゆもなみだも
露も涙も

→慰い章

つゆもなみだも一そてのみそしる
のはいまた一いろこそみえね一おもひくさ

【浜宮千句】／□□[ちりうせぬ]／

つゆもなみだも一たれをうらみむ
こころより一ねをさすものそ一おもひくさ

【園塵第一／続群書類従本】／恋／長享2
年

なみだ
涙

そでのまゆずみ
→袖の眉墨

したひわひ一おもひあまるは一なみたにて
かたみにのこす一そてのまゆすみ

【看聞日記紙背50巻】／何船[おちはま
て]／応永25(1418)年10月25日

くろかみの一まぐらのつきは一なみたにて
うつりやすさよ一そてのまゆすみ

【看聞日記紙背50巻】／何船[ゆきにみ
て]／応永32(1426)年11月25日

なみだあらそうこえ
涙争う声

かりなく
→雁鳴く

なみたあらそふーさをしかのこゑ
つきにいまーさそはれわたるーかりなきて

【明応年間百韻22巻】／何人〔としにあ
りて〕／明応9(1500)年7月7日

なみたあらそふーむしのごゑこゑ
こはきはらーうつろふゆふへーかりなきて

【大永三年月並千三百韻】／□□〔はるを
まつ〕／月並千三百韻／大永3(1523)年11
月23日

なみだおちる
涙落ちる

ひともない
→人もない

ゆふへのくもにーなみたおちけり
なかむなよーそらにはおもふーひともなし

【新撰菟玖波集／実隆本】／恋中／明応
4(1495)年9月26日

あはれをしるやーなみたおちけり
ことわりをーうらむるにうきーひともなし

【那智筆／北野天満宮本】／永正十三年／

ふるきと
→古里

しのふものからーなみたおちけり
とふひともーおもかけかはるーふるさとに

【弘治三年春雪千句】／薄何〔そらにあめ〕
／弘治3(1557)年正月7日～9日

なこりかなしくーなみたおちけり
ふるさとにーまたわかれぬるーゆめさめて

【園塵第三／統群書類従本】／雑下／文亀
元(1501)年3月18日

ゆめさめる
→夢覚める

つきにむかふもーなみたおちけり
ひとにそふーこころはかなくーゆめさめて

【新撰菟玖波集／実隆本】／恋中／明応
4(1495)年9月26日

なこりかなしくーなみたおちけり
ふるさとにーまたわかれぬるーゆめさめて

【園塵第三／統群書類従本】／雑下／文亀
元(1501)年3月18日

なみだがわ
涙河

みなかみのもみちちる
→水上の紅葉散る

かけをたにーうつさむせせのーなみたかは
などみなかみのーもみちちるらむ

【成立不詳・宗廟以前6巻】／唐何〔なて
しこの〕／成立時不詳

いろにさへーあさくはみえぬーなみたかは
なにみなかみのーもみちちるらむ

【親当関係2種】／親当句集／赤木文庫本
／

なみだがわがそでのうえ
涙が我が袖の上

おもいう
→思

つゆもなみたもーわかそてのうへ
ひとしれぬーみにはなにをかーおもふらむ

【文安年間百韻9巻】／山何〔ふたひの〕
／文安5(1448)年11月12日

いつもなみたのーわかそてのうへ
とふひとやーこよひはかりとーおもふらむ

【合点之句／神宮文庫本】／恋／天文
9(1541)年12月25日

むかしをおもうなみだ
昔を思いう涙

あきはかなしい
→秋は悲しい

むかしおもふーなみたにつきやーくもるらむ
いととねさめのーあきそかなしき

【成立不詳・宗長以前15巻】／□□〔ま
たもなき〕／成立時不詳

むかしおもふーなみたもつゆもーそてのうへ
ひとのこころのーあきそかなしき

【文禄年間百韻12巻】／□□〔けさのま
に〕／文禄2(1593)年1月14日

くさのいお
→草の庵

むかしおもふーこよひはなみたーもよほして
くさのいほりのーあめのさひしき

【初瀬千句】／何人〔なつやまに〕／享徳
元・2(1452)年、4月

むかしおもふーなみたにかすむーよはのつき
くさのいほりのーゆふくれのはる

【文明十四年万句52巻】／何木〔あきの
ひも〕／文明14(1482)年7月4日～9月
14日

むかつてなみだおちる
向って涙落ちる

→なる

むかへはつきにーなみたおちけり
おいさりしーあきはたかよにーなりぬらむ

【竹林抄／新古典文学大系本】／雑下／文
明8(1476)年5月頃

むかふくさきにーなみたおちけり
たかさとのーよもきかそまとーなりぬらむ

【園塵第四／早稲田大学本】／雑下／永正
6、7年

ならう

よのならい
世の習い

→よもぎうのかげ
蓬生の影

おとろへもーさかえもおなしーよのならひ
さそふにいてぬーよもきふのかげ

【元和年間百韻24巻】／□□〔よにおほ
へ〕／元和7(1621)年1月19日

しのふるもーかくれかたしよーよのならひ
けふりととのーよもきふのかげ

【天正四年万句70巻】／手何〔はつあら
れ〕／天正4(1576)年5月6日～7月19日

なる

あきちかくなる
秋近くなる

→こころほそいはなおちるころ
心細い花落ちる頃

おほつかなーあきもやちかくーなりぬらむ
こころほそしなーはなおつころ

【心敬関係10種】／芝草内岩橋／本能寺本
／

くれそうきーあきもやちかくーなりぬらむ
こころほそしなーはなおつころ

【河越千句】／山何〔うくひすに〕／文明
2(1470)年正月10～12日

かねなる
鐘鳴る

→あかつきのそら
暁の空

はるふかきーふもとのさとにーかねなりて
しらぬふねゆくーあかつきのそら

【三島千句】／初何〔うつろふか〕／文明
3(1471)年3月21日～23日

かたやまのーゆふへのあめにーかねなりて
つきまちいてむーあかつきのそら

【美濃千句】／山何〔けふみすは〕／文明
4(1473)年12月16日～21日

→すぎのむらたち
杉の群立ち

くれわたるーみねよりおくにーかねなりて
いらかさひしきーすきのむらたち

【弘治年間百韻8巻】／xx〔をりのこす〕
／弘治2(1556)年9月10日

かはかみはーくもゐるいらかーかねなりて
あらしにあくるーすきのむらたち

【成立不詳・宗養以前8巻】／何人〔あを
やきや〕／成立時不詳

→つきがかなむく
月が傾く

やまふかくーすむひとしるきーかねなりて
よをおとろけとーつきそかたふく

【明応年間百韻22巻】／何人〔あさかす
み〕／明応4(1495)年1月6日

たちまよふーそらのおくよりーかねなりて
あかつきさむみーつきそかたふく

【明応年間百韻22巻】／何水〔あけほの
を〕／明応8(1499)年2月19日

→みねのふるでら
峰の古寺

われゆかぬーこひちのやまにーかねなりて
こころのかよふーみねのふるてら

【文明十四年万句52巻】／堀何〔かるひ
とは〕／文明14(1482)年7月4日～9月
14日

なほくらきーまつのかげにもーかねなりて
たれかとひこむーみねのふるてら

【文明十四年万句52巻】／何路【ぬしや
たれ】／文明14(1482)年7月4日～9月
14日

→^{やまのはのつき}山の端の月

あかつきは—またいりあひの—かねなりて
いつるににたる—やまのはのつき

【宗長追善千句】／薄何【くもとりや】／
(享祿5)天文元(1532)年3月25日

このよころ—たのむゆめたに—かねなりて
はなのなこりの—やまのはのつき

【伊予千句】／三字中略【たけのはの】／
天文6(1537)年5月22日

なる

→^{きりたちのぼる}霧立ち上る

くもそある—いつよりつきに—なりぬらむ
きりたちのぼる—しくれふるそら

【文安雪千句】／初何【ふりしける】／文
安2(1445)年10月18日

あききてや—そてもなみたと—なりぬらむ
きりたちのぼる—あとのをすすき

【文明十四年万句52巻】／山何【つゆや
けさ】／文明14(1482)年7月4日～9月
14日

→^{いさをくだすかわ}筏を下す川

みなかみや—あめのひまにも—なりぬらむ
くたすいかたの—たきつかはなみ

【宮島千句】／何人【うらとほく】／天文
20(1551)年5月9日～11日

たきつせの—すゑやあさみに—なりぬらむ
くたすいかたの—さはるかはきし

【長祿三年千句11巻】／何舟【しほかれ
て】／長祿3(1459)年12月2日～5日

→^{ところどころ}所々

いつすみて—とほさとをのと—なりぬらむ
ところどころに—けふるいへいへ

【延徳年間百韻16巻】／何人【まつみよ
と】／延徳4(1492)年2月8日

さはみつの—すゑやすくなく—なりぬらむ
ところどころに—つくるをやまた

【天正四年万句70巻】／何路【うすきり
に】／天正4(1576)年5月6日～7月19日

→^{ふるづかのまつ}古塚の松

たままつる—のちはなににか—なりぬらむ
さひしくたてる—ふるづかのまつ

【文明十四年万句52巻】／山何【あきの
はな】／文明14(1482)年7月4日～9月
14日

みしひとや—おもかけにのみ—なりぬらむ
うゑしはいつそ—ふるづかのまつ

【文明十四年万句52巻】／二字反音【は
なはみな】／文明14(1482)年7月4日～
9月14日

→^{ゆきのやまもと}雪の山本

とほきの—はらもやさ—to—なりぬらむ
ひとすちけふる—ゆきのやまもと

【長享年間百韻6巻】／何路【あらぬなを】
／長享2(1488)年4月5日

かりそなく—たひひといか—to—なりぬらむ
さととたえたる—ゆきのやまもと

【成立不詳・宗長以前15巻】／名号【な
かはひと】／成立時不詳

→^{ありあけのつき}有明の月

にはにたく—ひかりやうすく—なりぬらむ
いまみえそめし—ありあけのつき

【天文十八年梅千句】／何路【ふきよわる】
／天文18(1549)年正月11日

ときのまの—はるやむかし—to—なりぬらむ
おもかけかすむ—ありあけのつき

【菟玖波集／広島大学本】／春上／文和
5(1356)年冬～翌年の春

なれるしほびと
なれる柴人

→^{からすとぶ}鳥飛ぶ

ひとりひとりに—なれるしはひと
からすとぶ—いちちのむら—to—ひはおちて

【池田千句】／何人〔はるのはな〕／永正
7(1510)年春以前<永正5年春>

いりひかくれにーなれるしはひと
からすとふーすそののさとのーうすけふり

【永正年間百韻34巻】／何人〔すすしさ
や〕／永正7(1510)年7月5日

われでなくなるのがうい
我でなくなるのが憂い

→^{しげのとのゆうあらし}
苔の戸の夕嵐

うしやわれにもーあらすなりゆく
はなをふくーこけのとほそのーゆふあらし

【春夢草／書陵部本】／春／永正12(1516)
年、13年

うしやわれにもーあらすなりゆく
こけのとのーはなにふきたつーゆふあらし

【論書4種】／宗牧／

なわ

ふねのつなでなわ
舟の綱手縄

→^{しおがまのうら}
塩釜の浦

ふねにすむーあまのしわさのーつなでなは
なみもたたならぬーしほかまのうら

【大永年間百韻14巻】／何船〔うめかか
や〕／大永3(1523)年1月9日

あさほらけーいそくやふねのーつなでなは
あまそかひなきーしほかまのうら

【園塵第二／続群書類従本】／雑／明応
4(1495)年早春

におう

うめにおう
梅匂う

→^{あさほらけ}
朝ぼらけ

かたえほのほのーうめにほふなり
うくひすのーはふきにあくるーあさほらけ

【称名院追善千句】／何人〔せめてさは〕
／永禄6(1563)年12月14日～18日

ふゆきなからにーうめにほふなり
かせはまたーかすむともなきーあさほらけ

【文禄年間百韻12巻】／□□〔わかなつ
みし〕／文禄2(1593)年1月8日

→^{うぐいす}
鶯

かたえほのほのーうめにほふなり
うくひすのーはふきにあくるーあさほらけ

【称名院追善千句】／何人〔せめてさは〕
／永禄6(1563)年12月14日～18日

つつくかきねのーうめにほふなり
うくひすのーこゑするかたのーこすまきて

【天正年間百韻57巻】／何人〔わかきさ
も〕／天正11(1583)年1月10日

うめにおうころ
梅匂う頃

→^{うぐいす}
鶯

たけのさえたもーうめにほふころ
うくひすのーはふきにつゆやーこほるらむ

【天文年間百韻38巻】／何路〔あさかほ
の〕／天文10(1541)年7月29日

かすめるつきにーうめにほふころ
うくひすのーはなにねぬよのーこゑもかな

【心敬関係10種】／心玉集／陽明文庫本
／

かぜにおうたちばな
風に匂う橘

→^{たますだれ}
玉簾

かせのいつくかーにほふたちはな
ふかきよをーしらてまきつるーたますたれ

【天文廿四年梅千句】／山何〔うちなひき〕
／天文24(1555)年正月7日

つゆちるかせにーにほふたちはな
たますたれーのきはのつきにーまきあけて

【新撰菟玖波集／実隆本】／秋下／明応
4(1495)年9月26日

におううめのか
匂う梅の香

→^{あさほらけ}
朝ぼらけ

とへとやつけしーにほふうめかか
はるとしもーあらてゆきふるーあさほらけ

【大永年間百韻14巻】／何人〔あきのつ
き〕／大永6(1526)年9月13日

こすふくかせにーにほふうめかか
いととさへーこころうかるーあさほらけ

【天正四年万句70巻】／何路〔ちりとの
み〕／天正4(1576)年5月6日～7月19日

におうたちばな
句う橘

こすのと
→小簾の外

したかせとほくーにほふたちはな
こすのとにーくもますすしきーつきふけて

【天文年間百韻38巻】／何路〔ひとこゑ
や〕／天文14(1545)年5月8日

くちきのかたえーにほふたちはな
こすのとにーたちすすみつつーはしめして

【天正四年万句70巻】／何文〔しのひね
に〕／天正4(1576)年5月6日～7月19日

あきつゆ
→朝露

こかくれてのみーにほふやまふき
あさつゆにーぬれてやてふのーめくるらむ

【大永年間百韻14巻】／何木〔はなにた
て〕／大永8(1528)年2月23日

みちのへかけてーにほふやまふき
おきこほれーかすむまかきのーあさつゆに

【月村抜句／書陵部本】／永正十四年／

みずにおうやまがき
水に句う山吹

あめはれたはるのくれ
→雨晴れた春の暮れ

こふかきみつにーにほふやまふき
なかあめのーひをうつすまにーはるくれて

【三島千句】／二字反音〔いけすみて〕／
文明3(1471)年3月21日～23日

いしはしるみつにーにほふやまふき
あめはるるーせせのしらなみーはるくれて

【成立不詳・宗長以前15巻】／初何〔た
てなから〕／成立時不詳

にしき

もみじのにしき
紅葉の錦

ちるさ
→古里

もみちのにしきーかさねきころ
ふたたひはーいなしとおもふーふるさとに

【天正四年万句70巻】／夕何〔はるさめ
に〕／天正4(1576)年5月6日～7月19日

もみちのにしきーきてやゆかまし
ぬれぬれもーあきはしくれのーふるさとに

【菟玖波集／広島大学本】／雑一／文和
5(1356)年冬～翌年の春

にち

あさひかげ
朝日影

あまのつりがね
→海人の釣舟

をちかたのーまつにいさよふーあさひかけ
さしてそいつるーあまのつりふね

【永正年間百韻34巻】／何人〔つきはな
を〕／永正2(1505)年9月13日

あさひかけーみつにみるみるーうつろひて
ゆふしほまてのーあまのつりふね

【宗長関係8種】／老耳／天理本／

いりひかげ
入り日影

きとにひとかえるみゆ
→里に人帰る見ゆ

うつろふかーまつのはこしのーいりひかけ
すゑののさとにーひとかへるみゆ

【三島千句】／二字反音〔いけすみて〕／
文明3(1471)年3月21日～23日

くれたけのーみとりのうへのーいりひかけ
たなかのさとにーひとかへるみゆ

【永正年間百韻34巻】／何船〔うらかせ
の〕／永正14(1517)年6月

かすむひ
霞む日

ゆきのむらぎえ
→雪の斑消え

かすむひにーとしのこえぬるーほとをみて
ふりかさぬれとーゆきのむらぎえ

【表佐千句】／何年〔はなにいろ〕／文明
8(1476)年3月6日～8日>

はしたかのーをこしのとたちーかすむひに
いこまかたのーゆきのむらぎえ

【親当関係2種】／親当句集／赤木文庫本

／

さむいひ
寒い日→^{たびのころもて}旅の衣手このねぬるーあさなあさなのーさむきひに
かさねまほしきーたひのころもて【浅間千句】／薄何 [ほととぎす]／永正
11(1514)年5月13日～19日さむきひにーかはてやこまのーなつむらむ
あらしをしのかーたひのころもて【寛文年間百韻2巻】／□□ [なれてこ
し]／寛文10(1670)年2月27日なつひのなつころも
たつ日の夏衣→^{やまほととぎす}山時鳥つゆそおくーたちていくかのーなつころも
たひにはつれよーやまほととぎす【池田千句】／何路 [はなはしるや]／永
正7(1510)年春以前<永正5年春>なつころもーたちかふるひかすーほともなし
うへなくときかーやまほととぎす【大永年間百韻14巻】／名号 [なつころ
も]／大永8(1528)年4月12日なつひ
夏の日→^{むらさめのくも}村雨の雲なつひはーかたふくそらもーさやかにて
めくりもあへぬーむらさめのくも【永正年間百韻34巻】／何人 [ゆふつく
よ]／永正13(1516)年7月8日なつひはーやまのあなたにーへたたりて
ふもとにめくるーむらさめのくも【寛永年間百韻15巻】／□□ [ふたよあ
けて]／裏白／寛永5(1628)年1月3日はるのいりひ
春の入日→^{たえだえ}絶え絶えはるのいりひのーかけかすかなり
たえたえにーかねのひひきのーきこえて【称名院追善千句】／一字露頭 [くもはれ
て]／永禄6(1563)年12月14日～18日はるのいりひのーまつにかかれる
かへりみるーあとはかすみのーたえたえに【永禄年間百韻28巻】／何船 [ひきう
る]／裏白／永禄5(1562)年1月3日ひがくれる
日が暮れる→^{ふるゆき}ふる雪ゆくふねとめよーひこそくれぬれ
ふるゆきにーやまもかくるーみちのすゑ【延徳年間百韻16巻】／何船 [はるすき
ぬ]／延徳4(1492)年4月8日かはかせさむみーひこそくれぬれ
ふるゆきにーつまきこるをのーたにのみち【大永年間百韻14巻】／何人 [ちあきを
も]／大永5(1525)年9月21日→^{いりあひのかね}入相の鐘ものふかきーたけよりおくにーひはくれて
とよらのにしーいりあひのかね【顕証院会千句】／唐何 [みたれけり]／
宝徳元(1449)年8月19日～21日みちのへのーゆききかきたえーひはくれて
とほくそきこゆーいりあひのかね【伊予千句】／何路 [さみたれの]／天文
6(1537)年5月22日→^{ふくかぜ}吹く風つきさしいつるーひはくれにけり
きりはるるーおきついそさきーふくかせに【享徳二年千句】／何人 [つきとたか]／
享徳2(1453)年8月11日～13日はれみくもりみーひはくれにけり
たけのはのーおきふすのきはーふくかせに【因幡千句】／何船 [そらゆき]／文明
7(1475)年11月26日<～28日>ひぐれにともなう
日暮れに伴う→^{うたうこえ}歌う声々

くるるひにーかへるきこりのーともなひて
ふしもひとつにーうたふこゑこゑ

【因幡千句】／何木【ゆきとふる】／文明
7(1475)年11月26日<~28日>

くるひとのーひのくるるまでーともなひて
むかひてつきにーうたふこゑこゑ

【文明十四年万句52巻】／初何【をるそ
てに】／文明14(1482)年7月4日~9月
14日

にわ

つゆのおとさくくにお
露の音聞く庭

たまだれのきり
→玉垂の霧

つゆのおとさくくーにはのゆふかけ
たまだれのーきりのなこりやーはれさらむ

【伊勢千句】／何人【ふかくいりて】／大
永2(1522)年8月4日~8日

つゆのおとさくくーにはのしたをき
たまだれのーそものきりのーかたよりて

【天正年間百韻57巻】／何船【すまし
みは】／天正13(1585)年間8月12日

にわのあけほの
庭の曙

あきのみず
→秋の水

つきはかりあるーにはのあけほの
きりはれてーいけすみわたるーあきのみつ

【文安雪千句】／朝何【ゆきさそへ】／文
安2(1445)年10月18日

のわきしつけきーにはのあけほの
あきのみつーそらにかなるるーつきをみて

【文明十四年万句52巻】／何桶【はなど
つゆ】／文明14(1482)年7月4日~9月
14日

ぬれる

そでぬれる
袖濡れる

くさのほら
→草の原

おほろつきよにーそてそぬれぬる
つゆをたにーわするなきえむーくさのほら

【竹林抄／新古典文学大系本】／恋下／文
明8(1476)年5月頃

ゆくへもしらすーそてそぬれぬる
みしひとをーとへはかせふくーくさのほら

【心敬関係10種】／心玉集／静嘉堂文庫本
／

あかつき
→暁

たのまぬよはもーそてはぬれけり
あかつきのーつきにおちくるーかねのおと

【大永年間百韻14巻】／山何【うめやな
き】／大永7(1527)年1月19日

おとろくほとにーそてはぬれけり
あかつきのーかねこそゆめのーわかれなれ

【菟玖波集／広島大学本】／恋中／文和
5(1356)年冬~翌年の春

そでをぬらす
袖を濡らす

たちわかれ
→立ち別れ

ゆめにみえてもーそてぬらしけり
なこりさへーゆゆしきはかりーたちわかれ

【出陣千句】／薄何【ちきりきや】／永正
元(1504)年10月25日~27日

ゆふへのかすみーそてぬらしけり
まくらがるーあしたのくもにーたちわかれ

【伊勢千句】／三字中略【うめさきて】／
大永2(1522)年8月4日~8日

くさのかりいほ
→草の仮庵

よのなかにーあるかすならすーそてぬれて
いつをかきりそーくさのかりいほ

【文明年間百韻34巻】／何人【よるはつ
き】／文明18(1486)年2月6日

なかなかのーなさけおもへはーそてぬれて
ゆきにやとかすーくさのかりいほ

【文明十四年万句52巻】／夢想【そのし
なも】／文明14(1482)年7月4日~9月
14日

ね

いわがね
岩が根はしのひとすぢ
→橋の一筋いはかねにーをかはのなみの一つららめて
あさしもふかきーはしのひとすぢ【三島千句】／朝何 [やまとほく]／文明
3(1471)年3月21日～23日たまささもーかしけてたてるーいはかねに
まつはのへふすーはしのひとすぢ【聖廟千句】／何路 [うめかかに]／明応
3(1494)年2月10日～12日いわがねのまつ
岩が根の松いそにふねにひぐれ
→磯に舟に日暮れしつえなみよるーいはかねのまつ
あらいそのーふねひきつなくーひはくれて【弘治三年春雪千句】／何木 [はなならて]
／弘治3(1557)年正月7日～9日ひとりかせふくーいはかねのまつ
いそつたひーあまのふねさすーひはくれて

【月村抜句／書陵部本】／永正十四年／

ねぐら

ねぐらのはるのとりのね
埜の春の鳥の声しずか
→静かしはしねぐらのーはるのとりのね
しつかなるーあしたのほとはーおそきひに【元龜二年千句】／何袋 [ふるさとと]／
元龜2(1571)年3月5日たけをねぐらのーはるのとりのね
しつかなるーかきほやのへに一つつくらむ【平松文庫本千句】／□□ [おちはして]
／

ねや

ねやのつきかけ
闇の月影きりぎりす
→蟋蟀ほのかたらひしーねやのつきかけ
うちしきりーいまはあなかまーきりぎりす【伊勢千句】／三字中略 [うめさきて]／
大永2(1522)年8月4日～8日よひすきぬらしーねやのつきかけ
かたしきのーたもとにちかきーきりぎりす【大永三年月並千三百韻】／□□ [うめか
かや]／月並千三百韻／大永3(1523)年2
月23日

ねる

いかにねて
如何に寝てきのうをこそ
→昨日を去年のいかにねてーこよひはきかむーほととぎす
きのふをこそーゆめかうつつか【寛正年間百韻20巻】／唐何 [せみのは
の]／寛正4(1463)年6月23日いかにねてーいかにみやこのーゆめならむ
きのふをこそーはるのやまのは【大永四年月並千二百韻】／何色 [うめ
はな]／月並千二百韻／大永4(1524)年1
月23日いねがてのそら
寝ねがての空つきをまくらに
→月を枕におしあけかたのーいねかてのそら
しはのとはーみやまのつきをーまくらにて【成立不詳・心敬以前14巻】／何船 [は
るはまた]／成立時不詳さらてもよははーいねかてのそら
たのめしはーうつろふつきをーまくらにて【合点之句／神宮文庫本】／恋／天文
9(1541)年12月25日うたたね
うたた寝

→^{ともしひのかげ}灯の影

うたたねのーほとなくあくるーはるのよに
みしかくのこるーともしひのかげ

【太神宮法楽千句】／薄何 [まきのはや]
／長享 2(1488) 年 7 月

うたたねのーなこりしらるるーよひすきて
ほのかになれるーともしひのかげ

【大永四年月並千二百韻】／□□ [しもや
ひぬ] ／月並千二百韻／大永 4(1524) 年 9
月 23 日

かりねのつきかけ
仮寝の月影

→^{はなうちかおる}花打ち香る

かけかすむーかりねのつきのーあくるよに
はなうちかをりーとりのなくこゑ

【文明十四年万句 5 2 卷】／初何 [をるそ
てに] ／文明 14(1482) 年 7 月 4 日～9 月
14 日

かりねのつきのーかけさむきそら
わくるののーはなうちかをりーすゑくれて

【天正四年万句 7 0 卷】／何風 [ふりつも
る] ／天正 4(1576) 年 5 月 6 日～7 月 19 日

かりねをする
仮寝をする

→^{おかいよる}深い夜

そてうちしをれーかりねをやせむ
ひとかへるーあとにもいまたーふかきよに

【表佐千句】／何路 [みなかみの] ／文明
8(1476) 年 3 月 6 日<～8 日>

おもひのほかのーかりねをやせむ
やととほきーのへにいつれはーふかきよに

【園塵第四／早稲田大学本】／雑下／永正
6、7 年

ねざめする
寝覚めする

→^{よがながい}夜が長い

つきもはやーかたふくそらにーねさめして
こしかたおもふーよこそなかけれ

【明応年間百韻 2 2 卷】／何人 [ふきすて
よ] ／明応 7(1498) 年間 10 月 6 日

いろいろにーあきはこころのーねさめして
あらましつくすーよこそなかけれ

【大永年間百韻 1 4 卷】／山何 [うめやな
き] ／大永 7(1527) 年 1 月 19 日

ねざめするよ
寝覚めする夜

→^{まくら}枕

ねさめするよのーうつるたにをし
おときけはーよそのしくれをーまくらにて

【延徳年間百韻 1 6 卷】／夢想 [すみよし
の] ／延徳 2(1490) 年 9 月

ねさめするよのーさをしかのこゑ
つきにもるーいなはのかせをーまくらにて

【壁草／大阪天満宮文庫本】／秋／永正
2(1505) 年 8 月 23 日以後同 3 年 3 月以前

ひとりねとかげ
一人寝と影

→^{かたしゆく}片敷く

ひとりやねなむーまきたてるかけ
はなにほふーやまちのこけをーかたしきて

【新撰菟玖波集／実隆本】／春上／明応
4(1495) 年 9 月 26 日

ひとりやねなむーつきほそきかけ
むしのねもーよわるあらしをーかたしきて

【壁草／大阪天満宮文庫本】／秋／永正
2(1505) 年 8 月 23 日以後同 3 年 3 月以前

ひとりねる
一人寝る

→^{うらみわびる}恨み侘びる

かせみにしみぬーひとりかもねむ
いつはりのーなかたちをのみーうらみわひ

【天文年間百韻 3 8 卷】／山何 [なとりか
は] ／天文 19(1550) 年 6 月 16 日

まちよわりつつーひとりかもねむ
ちかひしにーかはるこころをーうらみわひ

【寛文年間百韻 2 2 卷】／□□ [きゆるも
のと] ／寛文 12(1672) 年 8 月 11 日

むらどりがねる
群鳥が寝る

→^{われどろく}我驚く

むらとりの一ねにゆくかねやーくれぬらむ
けふもすきぬとーわれそおとろく

【美濃千句】／何草【いつくにて】／文明
4(1473)年12月16日～21日

むらとりの一ねくらのたけのーゆきをれに
われそおとろくーさむきよのゆめ

【伊予千句】／何馬【もろひとの】／天文
6(1537)年5月22日

の

のがとおい
野が遠い

やすらい
→安らい

ゆくゆくくらすーのこそとほけれ
ほとはたたーむかひのさとにーやすらひに

【浅間千句】／山何【ここよりや】／永正
11(1514)年5月13日～19日

けしきもはるのーのこそとほけれ
やすらひにーなかきひぐらしーあかさらむ

【天文廿年断簡千句】／□□【やまかせや】
／天文20(1551)年6月10日～12日

いりあひのかね
→入相の鐘

のをとほみーわけくらしのーたひまくら
さとはありとやーいりあひのかね

【永禄年間百韻28巻】／何船【ひきうう
る】／裏白／永禄5(1562)年1月3日

のをとほみーゆきかふみちのーやすらひに
かへさをつくるーいりあひのかね

【文禄二年千句10巻】／何人【はなにあ
くる】／文禄2(1593)年4月8日～10日

のにかりまくら
野に仮枕

かたしきのゆめ
→片敷の夢

かりまくらーすそののかたにーかへなまし
いかにねてかはーかたしきのゆめ

【五吟一日千句】／初何【やまもいさ】／
天正9(1581)年11月19日

はかなしやーのかみのさとのーかりまくら
いふきおろしをーかたしきのゆめ

【壁草／大阪天満宮文庫本】／旅／永正
2(1505)年8月23日以後同3年3月以前

のしたもえ
野の下萌え

こまいわう
→駒祝う

あめすくるーよこののはらのーしたもえに
みきはのつつみーこまいはふなり

【石山四吟千句】／何人【うめかえは】／
天文24(1555)年8月15日～19日

のへはいまーところところのーしたもえに
かすみのあさけーこまいはふなり

【永禄石山千句】／何草【そらにあけて】
／永禄7(1564)年5月12日

のべちかいぐいす
野辺近い鶯

ゆきのたけのすゑすゑ
→雪の竹の末々

のへちかきーやとのうくひすーねをたえて
ゆきをれふかきーたけのすゑすゑ

【永禄年間百韻28巻】／何船【うたふよ
の】／永禄5(1563)年12月9日

のへちかきーにはのうくひすーこゑそひて
ゆきのとけゆくーたけのすゑすゑ

【天正年間百韻57巻】／何路【いろもか
も】／裏白／天正14(1586)年1月3日

のべのあけほの
野辺の曙

うぐいすのこえ
→鶯の声

ことしともなきーのへのあけほの
うくひすのーこゑはかりしてーふかきよに

【太神宮法楽千句】／薄何【まきのはや】
／長享2(1488)年7月

ゆきとけそむるーのへのあけほの
うくひすのーこゑにちさとのーはるたちて

【慶長年間百韻27巻】／□□【まつやな
ほ】／裏白／慶長10(1605)年1月3日

のべのあわれさ
野辺の哀れさ

あさぼらけ
→朝ぼらけ

なくやとりへのーのへのあはれさ
やまかすむーかりはのはるのーあさぼらけ

【文安年間百韻9巻】／山何〔はなはひも〕
／文安5(1448)年2月5日

のわきのあとの一のへのあはれさ
あさほらけーうすきりわたりーひのいてて

【園塵第一／続群書類従本】／秋／長享2
年

のべのいろいろ
野辺の色々

からころも
→唐衣

ちくさにをしき一のへのいろいろ
そめてみはーいつれともなしーからころも

【東山千句】／薄何〔つゆをいろ〕／永正
15(1518)年8月10日～12日

とてもさなから一のへのいろいろ
からころもーきりのしづくにーしをれきて

【石山四吟千句】／初何〔くれてなほ〕／
天文24(1555)年8月15日～19日

のべのおちこち
野辺の遠近

あらわれる
→現れる

いろになりたる一のへのをちこち
たちそへはーまつさへはなにーあらはれて

【天正年間百韻57巻】／初何〔はるたち
て〕／裏白／天正12(1584)年1月3日

かすむたもとの一のへのをちこち
たまほこのーみちはゆきまにーあらはれて

【天正年間百韻57巻】／□□〔けふひく
や〕／天正12(1584)年1月10日

のべのかりふし
野辺の仮臥

たひまくら
→旅枕

ゆめちをたとる一のへのかりふし
たひまくらーふかきもしらすーいつるよに

【住吉千句】／何田〔このはちる〕／大永
元(1521)年11月1日～14日

ねられぬとこは一のへのかりふし
たひまくらーゆめさへとひやーたえつらむ

【成立不詳・宗祇以前15巻】／何船〔き
りのはに〕／成立時不詳

たびのそら
→旅の空

ところさためぬ一のへのかりふし
うきものとーいひしそまことーたひのそら

【明応年間百韻22巻】／十三仏名号〔な
かつきも〕／明応4(1495)年9月30日

みやこわすれぬ一のへのかりふし
たちしよのーとりかまたなくーたひのそら

【宗碩関係2種】／宗碩連歌合／静嘉堂文
庫本／

のき

のきのたちばな
軒の橋

ほととぎす
→時鳥

かけさしおほふ一のきのたちはな
くれぬとてーこのさととふかーほととぎす

【成立不詳・宗祇以前6巻】／唐何〔なて
しこの〕／成立時不詳

うゑしをおもふ一のきのたちはな
こゑたててーきなけみきりのーほととぎす

【成立不詳・宗祇以前15巻】／何船〔あ
けほのや〕／存疑／成立時不詳

ははかりのこる一のきのたちはな
いつくともーしらすなきゆくーほととぎす

【文禄二年千句10巻】／夕何〔しくれて
も〕／文禄2(1593)年4月8日～10日

のこる

あめのこるそら
雨残る空

ほととぎす
→時鳥

てるひもなつのーあめのこるそら
ほととぎすーゆくゆくわかぬーこゑききて

【永禄石山千句】／三字中略〔こすゑまで〕
／永禄7(1564)年5月12日

やまはみとりにーあめのこるそら
ほととぎすーあしたのくもにーなきすてて

【合点之句／神宮文庫本】／夏／天文
9(1541)年12月25日

おぼろにのこるありあけのつき
朧に残る有明の月

→^{たななしおがねのおと}棚無し小舟の音

おぼろにのこるーありあけのつき
ほそえこくーたななしをふねーおとすみて

【心敬関係10種】／心玉集／静嘉堂文庫本

／

おぼろにのこるーありあけのつき
はるのよのーたななしをふねーおとふけて

【論書4種】／宗長／

きりのこる
霧残る

→^{つきほのか}月仄か

あきのしもーきりのまかきにーのこるらむ
やまをそともーつきほのかなり

【天文年間百韻38巻】／何人[さくふち
の]／天文18(1549)年3月24日

のわきせしーそとにもきりやーのこるらむ
たけのはこしーつきほのかなり

【慶長年間百韻27巻】／□□[あらしに
も]／裏白／慶長5(1600)年1月3日

くさはのこらないゆきのしたおれ
草は残らない雪の下折

→^{のわきするにわにつき}野分する庭に月

くさはのこらぬーゆきのしたをれ
のわきせしーにはのつきかけーよるさえて

【新撰菟玖波集／実隆本】／秋下／明応
4(1495)年9月26日

くさはのこらぬーゆきのしたをれ
のわきせしーにはをしつかにーつきふけて

【下草／金子本】／秋／延徳4(1492)年頃

のこる
残る

→^{そでのうつりが}袖の移り香

いつまでかーひとにわかれてーのこるらむ
これそかたみのーそでのうつりか

【美濃千句】／何草[いつくにて]／文明
4(1473)年12月16日～21日

おもかけやーこひしきかたにーのこるらむ
おもひとめたるーそでのうつりか

【看聞日記紙背50巻】／唐何[いやとし
に]／応永31(1424)年1月25日

→^{ほのかなそら}仄かな空

とはれてはーなかにうらみのーのこるらむ
なくほとときすーほのかなるそら

【弘治三年春雪千句】／初何[けさみれは]
／弘治3(1557)年正月7日～9日

むらさめのーあともあつさやーのこるらむ
くもにいりひのーほのかなるそら

【天正年間百韻57巻】／何垣[ゆくそて
に]／天正11(1583)年間1月1日

→^{うぐいすのこゑ}鶯の声

ありあけやーかすみのうへにーのこるらむ
けさもまたなくーうくひすのこゑ

【文明十四年万句52巻】／何船[ゆくみ
つに]／文明14(1482)年7月4日～9月
14日

うめかかやーそのよのそてにーのこるらむ
あけほのしたふーうくひすのこゑ

【心敬関係10種】／芝草内岩橋／本能寺本

／

のこるありあけ
残る有明

→^{あさほらけ}朝ぼらけ

かけもすくなくーのこるありあけ
やまのはにーよこくもきゆるーあさほらけ

【文明十二年千句8巻】／一字露頭[わか
はもて]／文明12(1480)年4月10日～
*日

それかとはかりーのこるありあけ
あさほらけーわけゆくかたにーむしなきて

【文明十四年万句52巻】／何船[あきの
いろ]／文明14(1482)年7月4日～9月
14日

のこるやまかけ
残る山影

→^{かえろ}帰る

おほゐのにしひーのこるやまかけ
みそれせしーあととやくもはーかへるらむ

【永正年間百韻34巻】／何船〔うちなひ
き〕／永正13(1516)年1月

ほのほのつきのーのこるやまかけ
のにいてしーしかやよをこめーかへるらむ

【天正四年万句70巻】／花何〔うくひす
の〕／天正4(1576)年5月6日～7月19日

のどか

あめののどけさ
雨の長閑さ

いずこにかすむ
→何処に霞む

にはにけさふるーあめののとけさ
まとすくるーかせはいつくにーかすむらむ

【長享年間百韻6巻】／何木〔わかみつの〕
／長享2(1488)年1月1日

みれともみえすーあめののとけさ
いつこにかーありあけのつきのーかすむらむ

【享祿年間百韻8巻】／白何〔あさみとり〕
／享祿3(1530)年3月2日

のどか 長閑

あまのつりふね
→海人の釣舟

うみすこしーあらしもなみもーのどかにて
おのかともよふーあまのつりふね

【文明十四年万句52巻】／玉何〔ゆきな
らは〕／文明14(1482)年7月4日～9月
14日

けふはなほーそらのけしきもーのどかにて
いさなひいつるーあまのつりふね

【天正四年万句70巻】／何色〔ちるはな
も〕／天正4(1576)年5月6日～7月19日

ひかりのどか 光長閑

とける
→解ける

にははあさけのーひかりのとけし
いけみつやーとちしこほりのーとけぬらむ

【寛永年間百韻15巻】／□□〔よのはる
を〕／裏白／寛永8(1631)年1月3日

かきほへたてぬーひかりのとけし
たけのはのーゆきやのこらすーとけぬらむ

【寛永年間百韻15巻】／□□〔しつけさ
の〕／裏白／寛永10(1633)年1月3日

のみや

のみや
野々宮

くろきのとりい
→黒木の鳥居

のみやのーわかれのあとの一つゆけきに
くろきのとりいーきりやたつらむ

【看聞日記紙背50巻】／何木〔としもは
や〕／応永27(1421)年12月12日

のみやのーにはあれまさるーあきくれて
くろきのとりいーなにそのこれる

【看聞日記紙背50巻】／何路〔まつころ
の〕／応永32(1425)年10月15日

のぼる

きりはれのぼる
霧晴れ昇る

あさひかげ
→朝日影

きりはれのぼるーなかのかけはし
かすかなるーのわきせしよのーあさひかけ

【出陣千句】／朝何〔きりもやは〕／永正
元(1504)年10月25日～27日

きりはれのぼるーまつのこたかさ
あさひかけーいろつくみねにーさしそひて

【文明年間百韻34巻】／□□〔したつゆ
は〕／文明12(1480)年7月4日

のり

のりのことのは
法の言の葉

こまとめる
→駒止める

たまたまあへるーのりのことのは
こまとめてーおなしやとかれーたひのとも

【竹林抄／新古典文学大系本】／旅／文明
8(1476)年5月頃

みみにもふれよーのりのことのは
わたりえぬーこたかかりはにーこまとめて

【基佐集／静嘉堂文庫本】／秋／永正
6(1509)年以前

のわき

のわきのあと
野分の後

むしのこゑ
→虫の声

のわきのあとの—まつにつれなさ
なきたゆる—なかにゆふへの—むしのこゑ

【平松文庫本千句】／□□ [なきてたつ]

／

のわきのあとの—くれわたるには
ほのかにも—なきこそいつれ—むしのこゑ

【慶長年間百韻27巻】／□□ [はるさめ
も]／慶長9(1604)年10月6日

のわきのかぜ
野分の風

あけのそほぶね
→朱のそほ舟

のわきのかせの—かよふやまもと
きりまより—あけのそほぶね—あらはれて

【享徳二年千句】／何人 [つきとたか]／
享徳2(1453)年8月11日～13日

やまもとは—のわきのかせの—ふきたえて
みきはにとむる—あけのそほぶね

【文明十四年万句52巻】／何水 [たまや
とる]／文明14(1482)年7月4日～9月
14日

は

やまのはのつき
山の端の月

あきかぜ
→秋風

くれてまちとる—やまのはのつき
あきかせに—よふねこたふる—かちのおと

【河越千句】／山何 [うくひすに]／文明
2(1470)年正月10～12日

しはしはのこれ—やまのはのつき
あきかせに—つゆのいのちも—をしまれて

【聖廟千句】／何人 [つきならし]／明応
3(1494)年2月10日～12日

うきをはすての—やまのはのつき
あきかせに—ふせやといへと—まとろまで

【伊庭千句】／三字中略 [ちりやすき]／

大永4(1524)年3月17日～21日

あきかへる
→秋更ける

ねさめにむかふ—やまのはのつき
みをすてむ—ほともいまはの—あきふけて

【三島千句】／何路 [なへてよ]／文明
3(1471)年3月21日～23日

まつひとさへそ—やまのはのつき
さととほき—しはのいほりに—あきふけて

【長享年間百韻6巻】／何路 [さみたれは]
／長享3(1489)年5月11日

いるかけのこる—やまのはのつき
いねかての—しはのとほその—あきふけて

【大永年間百韻14巻】／山何 [そめしつ
ゆ]／大永3(1523)年9月2日

いてしはいつの—やまのはのつき
たひころも—さむさおほゆる—あきふけて

【慶長年間百韻27巻】／□□ [みつのう
へに]／裏白／慶長17(1612)年1月3日

はぎ

こはぎうつろう
小萩移ろう

あきのかぜ
→秋の風

こはきうつろふ—いねかてのころ
しをるなよ—みにいまよりの—あきのかせ

【延徳年間百韻16巻】／夢想 [すみよし
の]／延徳2(1490)年9月

こはきうつろふ—ふるあとのには
とふひとも—あらぬすみかの—あきのかせ

【天正年間百韻57巻】／何木 [けふかへ
よ]／天正9(1581)年4月1日

こはきはら
小萩原

のちのたひびと
→後の旅人

こはきはら—をりたちかほに—さきやらて
すかてにゆく—のちのたひひと

【池田千句】／御何 [こころあひの]／永
正7(1510)年春以前<永正5年春>

たちかへりーみるやいろこきーこはきはら
 たまかはすくるーのちのたひひと

【論書4種】／宗長／

はぎのしたつゆ
 萩の下露

うすぎりのまがき
 →薄霧の離

うらかれてゆくーはぎのしたつゆ
 うすきりのーまかきのこたちーむらむらに

【皇学館文庫本千句】／□□ [はなにいそ
 き]／永禄6(1563)年11月18日以前

のほるはかりのーはぎのしたつゆ
 うすきりのーまかきのゆふへーいつかみむ

【永正年間百韻34巻】／山河 [まちこし
 や]／永正12(1515)年11月11日

はげしい

かせのはげしさ
 風の激しさ

しぐれくる
 →時雨来る

たもとにさゆるーかせのはげしさ
 あきのそらーまたかきくもりーしくれきて

【文明年間百韻34巻】／薄何 [さくをみ
 よ]／文明14(1482)年3月7日

たにはふかきもーかせのはげしさ
 つまきをるーみちははるかにーしくれきて

【延徳年間百韻16巻】／何路 [かすみさ
 へ]／延徳4(1492)年1月22日

あきくれる
 →秋暮れる

うちいつるののーかせのはげしさ
 したひゆくーなこりもとめすーあきくれて

【弘治三年春雪千句】／何木 [はななて
 へ]／弘治3(1557)年正月7日～9日

なるとふきこすーかせのはげしさ
 まきのやもーすみうきはかりーあきくれて

【竹林抄／新古典文学大系本】／秋／文明
 8(1476)年5月頃

はこぶ

はこぶみつき
 運ぶ貢

くににしたがう
 →国に従う

はこぶみつきの一おほきしなしな
 このくににーよもの□□□□ーしたかひて

【看聞日記紙背50巻】／山河 [まつそひ
 て]／応永26(1419)年2月6日

はこぶみつきの一ふねそひまなき
 わかくににーもろこしまてもーしたかひて

【看聞日記紙背50巻】／[やまもとは]
 ／文安5(1448)年以前

もろこしまでもしたがう
 →唐土までも従う

たまこかねーはこぶみつきの一かすかすに
 もろこしまてもーいまそしたかふ

【看聞日記紙背50巻】／何物 [かみとう
 め]／応永29(1422)年2月25日

はこぶみつきの一ふねそひまなき
 わかくににーもろこしまてもーしたかひて

【看聞日記紙背50巻】／[やまもとは]
 ／文安5(1448)年以前

はし

かけはし
 掛橋

まつのひとつもと
 →松の一本

かけはしのーくちてなかははーたえけらし
 よこたはりたるーまつのひとつもと

【天正年間百韻57巻】／何垣 [ゆくそて
 に]／天正11(1583)年閏1月1日

かけはしのーあ□□□かせのーふきおくり
 こけにかたふくーまつのひとつもと

【天正四年万句70巻】／一字露頭 [やま
 のはに]／天正4(1576)年5月6日～7月
 19日

くめのいわはし
 久米の岩橋

ただひとつこと
 →ただ一言

てらにたれーくめのいははしーつつくらむ
たたひとこともーすくにをしへよ

【享徳二年千句】／唐何【こころひく】／
享徳2(1453)年8月11日～13日

わたしもはてぬーくめのいははし
つきみてはーたたひとこともーおもはぬに

【看聞日記紙背50巻】／唐何【いやとし
に】／応永31(1424)年1月25日

くものかけはし
雲の掛橋

→ ^{かささぎ} 鶺鴒

あきかせわたるーくものかけはし
かささきの一つはさもかはすーあまのかは

【看聞日記紙背50巻】／何人【はなのひ
も】／応永27(1420)年間1月13日

みるもすさましーくものかけはし
かささきのーやまとひこゆるーゆふしにも

【宗碩関係2種】／宗碩百句／太田本／

そばのかけはし
傍の掛橋

→ ^{しもはただ} 霜はただ

たえたえなれやーそはのかけはし
しもはたたーむすふかうへのーあさほらけ

【永祿元年花千句】／□□【みるままに】
／永祿元(1558)年3月23日～25日

くちてあやうきーそはのかけはし
しもはたたーふるかうへにもーかさなりて

【永祿元年花千句】／□□【をりのこす】
／永祿元(1558)年3月23日～25日

はしはしら
橋柱

→ ^{きみだれのころ} 五月雨の頃

ふるかはのーなかれのうちのーはしはしら
つつみもみえぬーさみたれのころ

【大原野十花千句】／何衣【つきはなに】
／元龜2(1571)年2月5日～7日

のこるさへーなほふりわたるーはしはしら
みかはなからのーさみたれのころ

【永祿年間百韻28巻】／何路【はなにか
り】／永祿3(1560)年2月25日

みつふかくーなるやなからのーはしはしら
あしのすゑはのーさみたれのころ

【壁草／大阪天満宮文庫本】／夏／永正
2(1505)年8月23日以後同3年3月以前

みちのかけはし
道の掛橋

→ ^{てらのかど} 寺の角

とほくみえぬるーみちのかけはし
とひよるもーひとけまれなるーてらのかと

【天正年間百韻57巻】／□□【まつなら
ぬ】／天正17(1589)年1月4日

ゆきとけはつるーみちのかけはし
とひよるもーおくものふかきーてらのかと

【慶長年間百韻27巻】／□□【ちりてさ
へ】／慶長4(1599)年6月18日

→ ^{よいさる} 訪い寄る

とほくみえぬるーみちのかけはし
とひよるもーひとけまれなるーてらのかと

【天正年間百韻57巻】／□□【まつなら
ぬ】／天正17(1589)年1月4日

ゆきとけはつるーみちのかけはし
とひよるもーおくものふかきーてらのかと

【慶長年間百韻27巻】／□□【ちりてさ
へ】／慶長4(1599)年6月18日

みねのかけはし
峰の掛橋

→ ^{さるさけぶ} 猿叫ぶ

かははそなるーみねのかけはし
さるさけぶーこゑさへさむきーたきのもと

【顕証院会千句】／何人【えたわけの】／
宝徳元(1449)年8月19日～21日

こすゑのあきのーみねのかけはし
さるさけぶーやまちのつきのーありあけに

【永祿年間百韻28巻】／□□【つゆはそ
てに】／永祿4(1561)年9月19日

ゆめのうきはし
夢の浮橋

→ ^{いにしえ} 古

ねぬよにくつるーゆめのうきはし
いにしへのーなからのみやにーつきをみて

【老葉／吉川本】／秋／文明 13(1481) 年

夏頃

うつつともかな一ゆめのうきはし
いにしへの一ふてのまきまき一ほのかにて

【宗長関係 8 種】／興津宛／書陵部本／

→御幸する

そをたにかけよ一ゆめのうきはし
みゆきせし一あとはしたふも一とほきよに

【明応年間百韻 2 2 巻】／山河〔ほととき
す〕／明応 9(1500) 年 4 月 9 日

あともこのらぬ一ゆめのうきはし
みゆきせし一そのよこひしき一ふるてらに

【園塵第四／早稲田大学本】／雑下／永正
6、7 年

→涙河

つくやまらの一ゆめのうきはし
とこのうへの一うたかたやみの一なみたかは

【元龜年間百韻 6 巻】／何人〔はなのとき
も〕／元龜 4(1573) 年 6 月 6 日

はかなくかよふ一ゆめのうきはし
わたるせは一いつくなるらむ一なみたかは

【天正四年万句 7 0 巻】／一字露頭〔わか
くさも〕／天正 4(1576) 年 5 月 6 日～7 月
19 日

→春の夜

とたえかちなる一ゆめのうきはし
ねぬるまの一ほとはみしかき一はるのよに

【永祿石山千句】／何人〔つきやかる〕／
永祿 7(1564) 年 5 月 12 日

たえはてけりな一ゆめのうきはし
いとはやも一あけなむとする一はるのよに

【寛正年間百韻 2 0 巻】／□□〔なかつき
と〕／寛正 2(1461) 年 9 月

→峰にわかれる

たたつゆのまの一ゆめのうきはし
つきいれは一みねにわかるる一よるのくも

【美濃千句】／何草〔いつくにて〕／文明
4(1473) 年 12 月 16 日～21 日

はしら

はしはしら
橋柱

→五月雨の頃

ふるかはの一なかれのうちの一はしはしら
つつみもみえぬ一さみたれのころ

【大原野十花千句】／何衣〔つきはなに〕
／元龜 2(1571) 年 2 月 5 日～7 日

のころさへ一なほふりわたる一はしはしら
みかはなからの一さみたれのころ

【永祿年間百韻 2 8 巻】／何路〔はなにか
り〕／永祿 3(1560) 年 2 月 25 日

みつふかく一なるやなからの一はしはしら
あしのすゑはの一さみたれのころ

【壁草／大阪天満宮文庫本】／夏／永正
2(1505) 年 8 月 23 日以後同 3 年 3 月以前

はじ

おかべのはじのひとむら
岡辺の櫓の一群

→夕日隠れ

をかへいろこき一はしのひとむら
つゆやなほ一ゆふひかくれに一のころらむ

【出陣千句】／何袋〔はなさかり〕／永正
元(1504) 年 10 月 25 日～27 日

をかへになひく一はしのひとむら
うすきりの一ゆふひかくれに一もすなきて

【応仁年間百韻 6 巻】／何人〔つきのあき〕
／応仁 2(1468) 年 1 月 1 日

をかへになひく一はしのひとむら
うすきりの一ゆふひかくれに一もすなきて

【萱草／伊地知本】／秋／文明 6(1474) 年
2 月以前

はじめる

こおりそめる
氷初める

→霜ふる

あらしよりまつ一こほりそめけり
ころもてに一しみつくはかり一しもふりて

【天文廿四年梅千句】／山何〔うちなひき〕
／天文 24(1555) 年正月 7 日

いはねやたよりーこほりそめけり
うちわたすーまへのたなはしーしもふりて

【明応年間百韻 2 2 巻】／何人〔くもはれ
て〕／明応 5(1496) 年 8 月 22 日

はす

はちすのうえ
蓮の上

ひぐらし
→ 蝸

はちすのうへのーたのみたかふな
ひぐらしのーこゑにすすしきーいけのおも

【五吟一日千句】／薄何〔あけほの〕／
天正 9(1581) 年 11 月 19 日

はちすのうへのー一つゆもみたるな
ひぐらしのーなくゆふかせにーつきいてて

【萱草／伊地知本】／秋／文明 6(1474) 年
2 月以前

はつ

あきのはつかぜ
秋の初風

つきいでる
→ 月出る

にしよりむかふーあきのはつかせ
かみのますーかのをかきよくーつきいてて

【宝徳四年千句】／何船〔いろそそふ〕／
宝徳 4(1452) 年 3 月 12 日

あかつきしるきーあきのはつかせ
きよからむーかけほのめかすーつきいてて

【永正年間百韻 3 4 巻】／何路〔ひとはい
さ〕／永正 17(1520) 年 2 月 4 日

ふなちにおもふーあきのはつかせ
くまもなくーなきたるなみにーつきいてて

【天文年間百韻 3 8 巻】／朝何〔またてき
く〕／天文 9(1540) 年 4 月 25 日

のこるあつきにはしいする
→ 残る暑さに端居する

ふくとしもなきーあきのはつかせ
ふくるまでーのこるあつきにーはしゐして

【慶長年間百韻 2 7 巻】／□□〔はるにま
つ〕／裏白／慶長 6(1601) 年 1 月 3 日

おともしつけきーあきのはつかせ
しはしたたーのこるあつきにーはしゐして

【慶長年間百韻 2 7 巻】／□□〔はるもこ
そ〕／裏白／慶長 13(1608) 年 1 月 3 日

むしなく
→ 虫鳴く

たひたつそらもーあきのはつかせ
かへるさのーやまちいまはたーむしなきて

【永正年間百韻 3 4 巻】／山河〔まちこし
や〕／永正 12(1515) 年 11 月 11 日

ふきつたへくるーあきのはつかせ
このさともーさなからのへのーむしなきて

【成立不詳・宗長以前 1 5 巻】／何人〔や
まみつは〕／成立時不詳

まそう
→ 誘う

こすゑよりこそーあきのはつかせ
ひぐらしにーまつむしのねやーさそふらむ

【住吉千句】／白何〔あられのみ〕／大永
元(1521) 年 11 月 1 日～14 日

またこぬくれのーあきのはつかせ
したはちるーやなきやかりをーさそふらむ

【竹林抄／新古典文学大系本】／秋／文明
8(1476) 年 5 月頃

たなぼた
→ 七夕

けふめつらしきーあきのはつかせ
たなはたのーいかにまちみしーくれならむ

【大永四年月並千二百韻】／□□〔うのは
なの〕／月並千二百韻／大永 4(1524) 年 4
月 23 日

またそてぬらすーあきのはつかせ
たなはたのーまとほのうらみーいかはかり

【新撰菟玖波集／実隆本】／秋上／明徳
4(1495) 年 9 月 26 日

ひとはより
→ 葉より

たえたえなりしーあきのはつかせ
ひとはよりーのちはきことにーちるをみて

【竹林抄／新古典文学大系本】／秋／文明
8(1476)年5月頃

このよをおもふーあきのはつかせ
ひとはよりーかろきはおいのーゆくへにて

【竹林抄／新古典文学大系本】／雑下／文
明8(1476)年5月頃

けきのはつゆき
今朝の初雪

→^{きえきえる}冴え冴える

ふるきいほりのーけさのはつゆき
おきあつつーしはたくよはのーさえさえて

【寛正年間百韻20巻】／何人 [けふこす
は]／寛正3(1462)年2月27日

むらむらのこるーけさのはつゆき
ふきたゆむーかせもしはしはーさえさえて

【天文年間百韻38巻】／夢想 [ちりてな
ほ]／天文10(1541)年3月

→^{うづみび}埋火

やまのはまてのーけさのはつゆき
うつみひにーよるのあらしやーかへるらむ

【下草／東山御文庫本】／冬／明応5(1496)
年11月18日

ふゆともしらしーけさのはつゆき
うつみひにーさむさわすれしーとをあけて

【園塵第四／早稲田大学本】／冬／永正6、7
年

はじめ
初め

→^{ことのはのみち}言の葉の道

ひくことはーいつつのしらへーはしめにて
むくさにしけるーことのはのみち

【聖廟千句】／何路 [うめかかに]／明応
3(1494)年2月10日～12日

かみのよをーなにはのことのーはしめにて
まねひつたふるーことのはのみち

【成立不詳・宗廟以前6巻】／x x [うめ
なれや]／成立時不詳

はつかせときのうはきいてあきふける
初風と昨日は聞いて秋更ける

→^{ひとはのこらなれもみじ}人は残らない紅葉

はつかせとーきのふはききしーあきふけて
ひとはのこらすーもろきもみちは

【三島千句】／何人 [しるしらす]／文明
3(1471)年3月21日～23日

はつかせとーきのふはききしーあきふけて
ひとはのこらすーもみちちるかけ

【老葉／吉川本】／秋／文明13(1481)年
夏頃

はつかりのこえ
初雁の声

→^{あまおぶお}海人小舟

たたひとつらのーはつかりのこゑ
ゆふくれはーつりにといつるーあまをふね

【嘉吉年間百韻1巻】／何木 [たけのはに]
／嘉吉3(1443)年10月23日

あけゆくくももーはつかりのこゑ
なかめやるーうみへしつけきーあまをふね

【弘治年間百韻8巻】／x x [をりのこす]
／弘治2(1556)年9月10日

はつせかせ

はつせかせ
初瀬風

→^{よそのゆうぐれ}奈所の夕暮れ

あかつきのーかねもみにしむーはつせかせ
とははやつゆにーよそのゆふくれ

【美濃千句】／何草 [いつくにて]／文明
4(1473)年12月16日～21日

ふきすさふーなこりもはけしーはつせかせ
こころのはてやーよそのゆふくれ

【大永三年月並千三百韻】／□□ [まつか
せや]／月並千三百韻／大永3(1523)年6
月23日

はつせでら

はつせでら
初瀬寺

→^{よきのかみがき}与喜の神垣

あゆみをは—ころにはこふ—はつせてら
たれもねかひの—よきのかみかき

【看聞日記紙背50巻】／唐何【あすはさ
け】／応永31(1424)年2月25日

くれにけり—いりあひとほき—はつせてら
いのることのみ—よきのかみかき

【看聞日記紙背50巻】／何目【ゆふはえ
は】／応永32(1425)年2月29日

おこなひの—いつもたえせぬ—はつせてら
わきてちかひも—よきのかみかき

【看聞日記紙背50巻】／何船【ゆきにみ
て】／応永32(1426)年11月25日

はてる

あけはてる
明け果てる

いかなる
→如何なる

あけはつるまで—いねかてにして
おもふこと—かすはふみにも—いかならむ

【宮島千句】／白何【ゆふへより】／天文
20(1551)年5月9日～11日

あけはつるまで—ゆめはみえこす
わするなよ—わすれはせしも—いかならむ

【元龜年間百韻6巻】／何人【あきかせの】
／元龜3(1572)年7月13日

よわりはてる
弱り果てる

きりぎりす
→蟋蟀

ものおもふにや—よわりはつらむ
わひぬるも—われそまされる—きりぎりす

【伊勢千句】／何田【かすやてる】／大永
2(1522)年8月4日～8日

われからわれや—よわりはつらむ
つゆになれ—しもにやとかる—きりぎりす

【園塵第四／早稲田大学本】／秋／永正6、7
年

はな

あおほのはなのあと
青葉の花の後

かかるとしなみ
→掛かる藤浪

まつならて—あをはのゆきや—はなのあと
こときのかたに—かかるとしなみ

【看聞日記紙背50巻】／山何【かせやく
も】／応永26(1419)年10月25日

をしめとも—あをはになりぬ—はなのあと
まつにことさら—かかるとしなみ

【看聞日記紙背50巻】／山何【あつさな
ほ】／応永32(1425)年間6月25日

あさがおのはな
朝顔の花

まつむしのこゑ
→松虫の声

あさかほの—はなに□□□の—うちみたれ
すすきかもとは—まつむしのこゑ

【永禄年間百韻28巻】／□□【ゆきにう
め】／永禄5(1562)年2月1日

あさかほの—はなをみるから—なみたおち
つひにはかれむ—まつむしのこゑ

【文明十四年万句52巻】／何路【あさう
みに】／文明14(1482)年7月4日～9月
14日

おしんではなをみる
惜しんで花を見る

そでのうめのか
→袖の梅の香

みなひとの—をしむによらぬ—はなをみて
をりてかへさは—そでのうめかか

【飯盛千句】／何路【しけるきに】／永禄
4(1561)年5月27日～29日

をしみかね—ちるにまかする—はなをみて
をらすすすきぬる—そでのうめかか

【大永四年月並千二百韻】／□□【うくひ
すの】／月並千二百韻／大永4(1524)年2
月23日

おのえのはなをみる
尾上の花を見る

かすみにくれる
→霞に暮れる

あすはみむ—をのへのはなの—いかならむ
かすみにくる—たかまとのみや

【慶長年間百韻 27 卷】 / □□ [ゆきにし
も] / 裏白 / 慶長 9(1604) 年 1 月 3 日

くもとみしーをのへのはなのーあともなし
かすみにくるるーかねのさひしさ

【慶長年間百韻 27 卷】 / □□ [うめかか
は] / 裏白 / 慶長 11(1606) 年 1 月 3 日

かぜにはなちる
風に花散る

はるのゆめ
→春の夢

かせはなほーあをはにのこるーはなちりて
はるのゆめこそーことにあたなれ

【看聞日記紙背 50 卷】 / 何船 [のちやゆ
き] / 応永 28(1421) 年 2 月 25 日

いつもふくーまつかせつらきーはなちりて
はるのゆめこそーやかてさめぬれ

【成立不詳・宗祇以前 15 卷】 / x x [あ
らしにも] / 存疑 / 成立時不詳

かれはなすすき
枯れ花薄

よわるむしのお
→弱る虫の音

はなすすきーかれゆくしもにーあきふけて
のにはおしなひーよわるむしのね

【顕証院会千句】 / 山何 [あさもよひ] /
宝徳元 (1449) 年 8 月 19 日~21 日

つきのこるーかれののすゑのーはなすすき
ほのかになりぬーよわるむしのね

【因幡千句】 / 薄何 [かきはらふ] / 文明
7(1475) 年 11 月 26 日<~28 日>

さくはるのはな
咲く春の花

さくらとやどのうめのえだ
→桜と宿の梅の枝

ちれはさくーちきりもはかなーはるのはな
さくらにかはすーやとのうめかえ

【大永四年月並千二百韻】 / □□ [けふひ
くや] / 月並千二百韻 / 大永 4(1524) 年 5
月 23 日

さくこともーちらむためかはーはるのはな
さくらほのめくーやとのうめかえ

【園塵第三 / 統群書類従本】 / 春 / 文亀元
(1501) 年 3 月 18 日

ちるはな
散る花

うぐいすのこゑ
→鶯の声

ちるはなのーなみのしたくさーかせみえて
やなきやうきねーうくひすのこゑ

【天文年間百韻 38 卷】 / 朝何 [またてき
く] / 天文 9(1540) 年 4 月 25 日

ちるはなのーやまちやきりにーまかふらむ
たにのといつるーうくひすのこゑ

【元龜年間百韻 6 卷】 / 何船 [むさしもの]
/ 元龜 3(1572) 年 3 月 18 日

うぐいすがなく
→鶯が鳴く

ちるはなのーのちにはいかてーつけぬらむ
けさはつこゑのーうくひすそなく

【天正四年万句 70 卷】 / 何船 [そらにま
つ] / 天正 4(1576) 年 5 月 6 日~7 月 19 日

ちるはなのーとかをはかせにーなしはてて
こつたひすてすーうくひすそなく

【下草 / 龍谷大学本】 / 春 / 延徳 2(1490)
年~3 年春頃

としどしのはな
年々の花

ふるやまさくら
→ふる山桜

みしにかはらぬーとしどしのはな
すゑもなほーいくよをふるのーやまさくら

【顕証院会千句】 / 何人 [えたわけの] /
宝徳元 (1449) 年 8 月 19 日~21 日

あかれぬものをーとしどしのはな
みやすてむーふるきいほりのーやまさくら

【表佐千句】 / 何路 [みなかみの] / 文明
8(1476) 年 3 月 6 日<~8 日>

はなうえる
花植える

わかぎのさくら
→若木の桜

うきよにもーいのちのをしきーはなうゑて
わかぎのさくらーたのむいくはる

【看聞日記紙背 50 卷】 / 唐何 [ひそをし
き] / 応永 30(1423) 年 3 月 29 日

すまひとのーよかたりになるーはなうゑて
わかぎのさくらーはるそひさしき

【看聞日記紙背50巻】／山何〔まつかね
に〕／応永32(1425)年3月25日

はなうちかおる
花打ち香る

→木隠れる

はなうちかをりーとりのなくこゑ
さくうめにーすみかのたけのーこかくれて

【文明十四年万句52巻】／初何〔をるそ
てに〕／文明14(1482)年7月4日～9月
14日

はなうちかをりーのはかすみつつ
ゆふつくよーうめさくやまにーこかくれて

【合点之句／神宮文庫本】／春／天文
9(1541)年12月25日

はなさく
花咲く

→薄霞

やへくもとーみゆるよかはのーはなさきて
うすきかすみはーつきそすみよき

【宝徳年間百韻3巻】／以呂波〔いをねぬ
や〕／宝徳3(1451)年8月15日

おくやまもーよそめしけきのーはなさきて
うすきかすみはーたつとしもなし

【文明十二年千句8巻】／一字露頭〔わか
はもて〕／文明12(1480)年4月10日～
*日

→鶯が鳴く

くれたけのーはやしつつきにーはなさきて
ねくらさためすーうくひすそなく

【延徳年間百韻16巻】／何路〔かすみさ
へ〕／延徳4(1492)年1月22日

はるやまのーみねのいほりにーはなさきて
たにをわかよとーうくひすそなく

【宗砌関係9種】／宗砌発句並付句抜書／
小松天満宮本／

→松に藤の黄昏

はなさけはーやまのなかはもーなみこえて
まつのかすゑのーふちのたそかれ

【毛利千句】／一字露頭〔なつのひも〕／
文祿3(1594)年5月12日～16日

はなさけはーこのまにうときーはるのつき
まつにかかれるーふちのたそかれ

【天文年間百韻38巻】／夢想〔ちりてな
ほ〕／天文10(1541)年3月

はなざかり
花盛り

→鶯の声

うちむれてーひとのなかむるーはなざかり
いつくのさとそーうくひすのこゑ

【聖廟千句】／何人〔つきならし〕／明応
3(1494)年2月10日～12日

おくやまとーいへともあらぬーはなざかり
ひとにけちかきーうくひすのこゑ

【文龜年間百韻4巻】／千何〔うつろはぬ〕
／文龜3(1503)年7月25日

をしめともーさきみたれたるーはなざかり
こすゑにたかきーうくひすのこゑ

【文明十四年万句52巻】／山何〔つゆや
けさ〕／文明14(1482)年7月4日～9月
14日

→掛かる藤浪

さきそひてーまつこそみえねーはなざかり
よそのこすゑにーかかるふちなみ

【看聞日記紙背50巻】／何人〔うめのな
の〕／応永30(1423)年5月27日

たておくもーううるもにはのーはなざかり
いはかきつつきーかかるふちなみ

【永祿年間百韻28巻】／何路〔のこりな
く〕／永祿3(1560)年11月10日

→春の杉群

くももきをーうつむはかりのーはなざかり
せきのとあくるーはるのすきむら

【弘治三年春雪千句】／初何〔けさみれは〕
／弘治3(1557)年正月7日～9日

いはかねのーこけにこたかきーはなざかり
かたはらさひしーはるのすきむら

【壁草／大阪天満宮文庫本】／春／永正
2(1505)年8月23日以後同3年3月以前

はなすすき
花薄

→まつむしのこゑ

ほのめくやーたかたまぐらのーはなすすき
ふけゆくまでにーまつむしのこゑ

【天文年間百韻38巻】／何船[あさかほ
に]／天文12(1543)年7月29日

ひとつもとやーかれののうちのーはなすすき
したはにすたくーまつむしのこゑ

【永禄年間百韻28巻】／何船[たちなら
せ]／永禄元(1558)年7月18日

はなちる
花散る

→のこりおおい

やよひにもーまたなりやらぬーはなちりて
のこりおほくもーひこそなかけれ

【伊勢千句】／薄何[たかため]／大永
2(1522)年8月4日～8日

みはやすをーまちあへぬまのーはなちりて
のこりおほくもーはるはいぬめり

【天文年間百韻38巻】／何木[あすのな
を]／天文17(1548)年8月14日

→はるのくれがた

とはぬをもーみれはわすれしーはなちりて
ふるさとさひしーはるのくれがた

【美濃千句】／何色[しくれつつ]／文明
4(1473)年12月16日～21日

したもえのーくさのいろともーはなちりて
のもあをみゆくーはるのくれがた

【天正四年万句70巻】／何船[そらにま
つ]／天正4(1576)年5月6日～7月19日

→はるのさびしさ

あめかせのーこころあはするーはなちりて
とりさへかへるーはるのさびしさ

【三島千句】／何衣[はなにつき]／文明
3(1471)年3月21日～23日

うゑしよはーしるひともなきーはなちりて
ふるののおくのーはるのさびしさ

【宮島千句】／何袋[さきこすか]／天文
20(1551)年5月9日～11日

はなならで
花ならで

→はるのふるさと

みこそあれーおもひすつへきーはなならで
たれにとはれむーはるのふるさと

【明応年間百韻22巻】／何人[あさかす
み]／明応4(1495)年1月6日

ひとえたもーはなにをるへきーはなならで
あはれにかすむーはるのふるさと

【基佐集／静嘉堂文庫本】／春／永正
6(1509)年以前

はなのいろ
花の色

→うぐいすのこゑ

あをはよりーあらはれそむるーはなのいろ
したひもてゆくーうくひすのこゑ

【羽柴千句】／朝何[よもにふく]／天正
6(1578)年5月18・19日

いまもなほーあをはにのこるーはなのいろ
みきりになるるーうくひすのこゑ

【永禄年間百韻28巻】／□□[つゆはそ
てに]／永禄4(1561)年9月19日

さかりそとーみれはうつろふーはなのいろ
みきりをよそのーうくひすのこゑ

【文禄年間百韻12巻】／□□[けさのま
に]／文禄2(1593)年1月14日

はなのかげ
花の陰

→つづしやまがき

ちるあともーみすはうらみむーはなのかけ
さくらのみやはーつつしやまふき

【池田千句】／何船[おそくとく]／永正
7(1510)年春以前<永正5年春>

やまさととーさもこそならめーはなのかけ
みちもせにさくーつつしやまふき

【享禄年間百韻8巻】／懐旧[ゆふたちの]
／享禄5(1532)年6月8日

とりのさえずり
→鳥の囀り

さきぬへき—ころもちかつく—はなのかけ
かこふみきりの—とりのさへつり

【元和年間百韻24巻】/□□ [かせにつ
もり] /元和7(1622)年11月28日

このめさへ—またみえやらぬ—はなのかけ
はるのしるへの—とりのさへつり

【天正四年万句70巻】/何希 [いろそふ
や] /天正4(1576)年5月6日~7月19日

とりのひとこゑ
→鳥の一声

ひとかへる—あとしつかなる—はなのかけ
かすむゆふへの—とりのひとこゑ

【石山四吟千句】/青何 [つきやふね] /
天文24(1555)年8月15日~19日

ちるまと—おもふやまれの—はなのかけ
かへりつくして—とりのひとこゑ

【享祿年間百韻8巻】/何船 [はるのいろ]
/享祿5(1532)年1月18日

はるのさかづき
→春の杯

くれぬれは—そてをかたしく—はなのかけ
かへさわする—はるのさかづき

【慶長年間百韻27巻】/□□ [ねふかき
や] /慶長4(1599)年2月8日

いつれにか—まくらをからむ—はなのかけ
こころうかる—はるのさかづき

【寛永年間百韻15巻】/□□ [ききはみ
な] /裏白/寛永4(1627)年1月3日

やまかすむくれ
→山霞む暮れ

ひとよをも—あかさてかへる—はなのかけ
まきたつみちに—やまかすむくれ

【文明年間百韻34巻】/xx [あきふけ
ぬ] /文明12(1480)年9月28日

かりねして—いろみまほしき—はなのかけ
うちわたすのに—やまかすむくれ

【明応年間百韻22巻】/何路 [つゆやに
ほひ] /明応5(1496)年8月5日

みよしののはる
→み吉野の春

ゆきそふる—それもきえなむ—はなのかけ
やまかせさひし—みよしののはる

【長享年間百韻6巻】/何木 [わかみつの]
/長享2(1488)年1月1日

さきちるも—おとつれきかぬ—はなのかけ
いりにしままの—みよしののはる

【壁草/大阪天満宮文庫本】/雑上/永正
2(1505)年8月23日以後同3年3月以前

はなのかげにやすらう
花の陰に安らう

はるのかえるさ
→春の帰るさ

みるままに—やすらふききの—はなのかけ
おもへはとほし—はるのかへるさ

【宝徳四年千句】/何人 [はなどころ] /
宝徳4(1452)年3月12日

やすらへは—ときこそうつれ—はなのかけ
かねのつけこす—はるのかへるさ

【寛正年間百韻20巻】/何路 [ひととせ
に] /寛正5(1465)年12月9日

はなのこずえにあらわれる
花の梢に現れる

ふるてらのみち
→古寺の道

くもまより—はなのこすゑの—あらはれて
まつにふちさく—ふるてらのみち

【永祿年間百韻28巻】/何路 [きえしそ
の] /永祿7(1564)年1月22日

すきむらの—こすゑははなに—あらはれて
おくにそつつく—ふるてらのみち

【天正年間百韻57巻】/□□ [ことのは
も] /天正13(1585)年1月4日

はなのこのもと
花の木の下

うぐいす
→鶯

いそくこころの—はなのこのもと
うぐいすの—はるおとろかす—ねになきて

【羽柴千句】/千何 [あくるよを] /天正
6(1578)年5月18・19日

いろにいろそふ—はなのこのもと
うぐいすの—はかせをみるも—のとかにて

【天正四年万句70巻】／夕何 [はるさめに]／天正4(1576)年5月6日～7月19日

おとがする
→音がする

たかかへるらむーはなのこのもと
ふるさともーはるのみひとのーおとはして

【聖廟千句】／何田 [このるひに]／明応3(1494)年2月10日～12日

やまちひくるるーはなのこのもと
さくらちるーみねのあらしのーおとはして

【宗長関係8種】／興津宛／書陵部本／

やまざくら
→山桜

たちもはなれぬーはなのこのもと
おもかけにーなほもむかひのーやまさくら

【行助関係4種】／行助連歌／天理本／

しるしらぬあふーはなのこのもと
やまさくらーさけはみやこをーあくかれて

【壁草／大阪天満宮文庫本】／春／永正2(1505)年8月23日以後同3年3月以前

はなのはる
花の春

さくらさくころ
→桜咲く頃

かくてこそーちよもといはめーはなのはる
やとりはかなやーさくらさくころ

【初瀬千句】／何衣 [しけるとも]／享徳元・2(1452)年、4月

ちりすきはーよしやよしののーはなのはる
たたよのなかはーさくらさくころ

【嘉吉年間百韻1巻】／何木 [たけのはに]／嘉吉3(1443)年10月23日

つつしやまぶき
→躑躅山吹

ふたもとのーすきしはいくかーはなのはる
なつともみえぬーつつしやまぶき

【初瀬千句】／唐何 [ふたもとの]／享徳元・2(1452)年、4月

□□をさへーわすれかたみのーはなのはる
つゆなからをるーつつしやまぶき

【天文廿四年梅千句】／何人 [うめいつく]／天文24(1555)年正月7日

はなのはるかせ
花の春風

やまざくら
→山桜

とはむといひしーはなのはるかせ
おくはまたーおそきもあれやーやまさくら

【弘治年間百韻8巻】／何船 [たくそてに]／弘治2(1557)年12月2日

くもをはらふはーはなのはるかせ
やまさくらーよのまのあめにーさきいてて

【愚句老葉】／春／永正17年

にはのくちきのーはなのはるかせ
やまさくらーかけひのみつにーなかれきて

【園塵第四／早稲田大学本】／春／永正6、7年

はなのはるごと
花の春毎

うぐいすのこゑ
→鶯の声

うゑおきてーまたるはなの一はることに
わかやととはぬーうくひすのこゑ

【聖廟千句】／初何 [きのふより]／明応3(1494)年2月10日～12日

ほともなくーうつろふはなの一はることに
みをあくからすーうくひすのこゑ

【那智筆／北野天満宮本】／永正十四年／

はなのひとえだ
花の一枝

やまざくら
→山桜

をるをはゆるせーはなのひとえた
ひとをこそーとむるせきのーやまさくら

【文和千句】／手何 [はにしける]／文和5年

このかけもののーはなのひとえた
やまさくらーてをもゆるさすーをりもちて

【専順関係2種】／春／応仁元(1467)年5月10日

はなのひともと
花の一本

はるぐれる
→春暮れる

おそきものこる一はなのひとと
しらさりしーみやまをとへはーはるくれて

【文明年間百韻34巻】／何人〔ちきりあ
れや〕／文明14(1482)年3月20日

まきのはしのく一はなのひとと
とりのねもーそこはかとなく一はるくれて

【大永四年月並千二百韻】／□□〔ゆきふ
かき〕／月並千二百韻／大永4(1524)年11
月23日

はなのやまかせ
花の山風

→^{はるになる}春になる

くもあるつきのーはなのやまかせ
あけほのはーゆふへわかれしーはるなれや

【至徳以前百韻7巻】／□□〔くれなみの〕
／至徳4(1387)年以前

うらみははてしーはなのやまかせ
くれてしもーなほうとまれぬーはるなれや

【大永三年月並千三百韻】／□□〔ひとこ
ゑや〕／月並千三百韻／大永3(1523)年4
月23日

はなみえる
花見える

→^{うぐいすのこゑ}鶯の声

ものふかきーしけみをゆけはーはなみえて
やとりをしむるーうくひすのこゑ

【文安年間百韻9巻】／朝何〔さかきはに〕
／文安4(1447)年10月18日

かくしおくーのきはのおくにーはなみえて
はるやするへ□ーうくひすのこゑ

【天正四年万句70巻】／何木〔さくはな
の〕／天正4(1576)年5月6日～7月19日

はなよもみじよ
花よ紅葉よ

→^{やまとうた}大和歌

かさしてもみむーはなよもみちよ
あはれさのーこころしらるるーやまとうた

【五吟一日千句】／薄何〔あけほのの〕／
天正9(1581)年11月19日

ひとのこころはーはなよもみちよ
あらそふもーさすかゆゑあるーやまとうた

【文禄年間百韻12巻】／□□〔うめさき
て〕／文禄2(1593)年2月12日

はるのはな
春の花

→^{あおやぎのかげ}青柳の陰

いくもとそーやとにたえせぬーはるのはな
かともこたかしーあをやぎのかげ

【永原千句】／何船〔いくもとそ〕／明応
9(1500)年7月17日

わかきにもーいろかのふかきーはるのはな
かせふきなひくーあをやぎのかげ

【永原千句】／唐何〔とりのねに〕／明応
9(1500)年7月17日

かせふかぬーよになまたれそーはるのはな
めくみのつゆのーあをやぎのかげ

【文明年間百韻34巻】／何船〔かせふか
ぬ〕／文明9(1477)年1月22日

→^{うぐいすのこゑ}鶯の声

またるやーねこしてうゑしーはるのはな
のやまをここにーうくひすのこゑ

【永禄石山千句】／初何〔しらかしの〕／
永禄7(1564)年5月12日

たれをよのーまつひとにせむーはるのはな
さくらになれよーうくひすのこゑ

【成立不詳・宗祇以前15巻】／x x〔た
れをよの〕／成立時不詳

もるかけはーたをらむもやはーはるのはな
そのふにさらぬーうくひすのこゑ

【永禄年間百韻28巻】／山何〔ゆふかほ
に〕／永禄2(1559)年5月20日

いにしへのーあとはかはらぬーはるのはな
そのふはなれすーうくひすのこゑ

【文禄年間百韻12巻】／□□〔たかには
も〕／文禄2(1593)年5月27日

かけはしのーおくしるへせよーはるのはな
とほくなりぬるーうくひすのこゑ

【慶長年間百韻27巻】／□□〔あらしに
も〕／裏白／慶長5(1600)年1月3日

さきつかはーきのふけふかのーはるのはな
あさとあくれはーうくひすのこゑ

【永正年間百韻 1 巻】／何人 [こゑとほく]
／永正元 (1505) 年 12 月 10 日

たちよりにてーあらくなをりそーはるのはな
なかぬほとまつーうくひすのこゑ

【天正四年万句 7 0 巻】／何鳥 [かせにし
るき]／天正 4(1576) 年 5 月 6 日～7 月
19 日

うぐいすがなく
→鶯が鳴く

ひとときさへーあはれをしたふーはるのはな
そのふをちかみーうくひすのなく

【天正年間百韻 5 7 巻】／x x [わけゆか
は]／天正 4(1576) 年 8 月 19 日

もるひともーなきやおいきのーはるのはな
うくひすのなくーこゑのしつけさ

【天正年間百韻 5 7 巻】／何路 [かすむよ
の]／天正 6(1578) 年 2 月 18 日

たにのうぐいす
→谷の鶯

わかにはにもーおもかけのこせーはるのはな
かへりはつるかーたにのうくひす

【天文年間百韻 3 8 巻】／何船 [かはおと
も]／天文 23(1554) 年 6 月 1 日

とまふきのーあるしもまつやーはるのはな
ききこそそむれーたにのうくひす

【寛文年間百韻 2 2 巻】／□□ [くるかり
も]／寛文 12(1672) 年 8 月 23 日

みよしのののはな
み吉野の花

うぐいすのこゑ
→鶯の声

みよしのやーはなよりおくにーひきこもり
かすみにもるるーうくひすのこゑ

【天正年間百韻 5 7 巻】／□□ [ともなし
に]／天正 18(1590) 年 11 月 21 日

みよしのやーはなをよすかのーすみところ
ともとこそなれーうくひすのこゑ

【慶長年間百韻 2 7 巻】／□□ [みつのう
へに]／裏白／慶長 17(1612) 年 1 月 3 日

やまなしののはな
山梨の花

おうのうらなみ
→麻生の浦浪

やまなしのーみのとしきりをーはなにみて
はるはありけりーをふのうらなみ

【享祿年間百韻 8 巻】／何船 [はるのいろ]
／享祿 5(1532) 年 1 月 18 日

やまなしのーはなにかつかつーとひよりにて
なほはるしるきーをふのうらなみ

【天正四年万句 7 0 巻】／一字露頭 [わか
くさも]／天正 4(1576) 年 5 月 6 日～7 月
19 日

よしのがわのはな
吉野川の花

はるすぎる
→春過ぎる

よしのかはーひとひもちらぬーはなもなし
みゆききえつーはるもすきけり

【伊庭千句】／何木 [うつりきて]／大永
4(1524) 年 3 月 17 日～21 日

やまふきのーはなさきつつくーよしのかは
せかれぬみつとーはるもすきけり

【成立不詳・宗長以前 1 5 巻】／何船 [し
もしろき]／成立時不詳

はなれる

あけはなれる
明け離れる

かりがなきかわすそら
→雁が鳴き交わす空

たえたえにーをちのかはきりーあけはなれ
おりみるかりのーなきかはすそら

【称名院追善千句】／白何 [かねのこゑ]
／永祿 6(1563) 年 12 月 14 日～18 日

つきにしもーしたふわかれのーあけはなれ
たのものかりのーなきかはすそら

【天正年間百韻 5 7 巻】／□□ [いるそて
に]／天正 18(1590) 年 1 月 7 日

さとはなれたみち
里離れた道

かさなる
→重なる

さとはなれるなるとまつかけのみち
おちはなほーくつるかうへにーかさなりて

【称名院追善千句】／何牆 [さかのやま]

／永禄6(1563)年12月14日～18日

さとはなれなる一みちのたえたえ
かひすつる一まくさはみとり一かさなりて

【文禄年間百韻12巻】／□□ [わかなつ
みし]／文禄2(1593)年1月8日

はね

ういしぎのはねがき
憂い鳴の羽搔き

→^{はかない}儚い

かそふるもうき一しきのはねかき
あきならて一かよふころの一はかなしや

【元和年間百韻24巻】／□□ [あさなあ
さな]／元和8(1622)年2月29日

うきはまくらの一しきのはねかき
すむつきに一おとろくゆめは一はかなしや

【寛永年間百韻15巻】／□□ [とよとし
の]／裏白／寛永20(1643)年1月3日

しぎのはねおと
鳴の羽音

→^{あきのしも}秋の霜

たつかたしるき一しきのはねおと
あかつきに一なりにけらしな一あきのしも

【浜宮千句】／□□ [つきのいろと]／

とほさかりぬる一しきのはねおと
よなよなに一つきにふりしく一あきのしも

【慶長年間百韻27巻】／□□ [あとをす
ゑに]／裏白／慶長15(1610)年1月3日

しぎのはねがき
鳴の羽搔き

→^{ひとついお}一つ庵

あはれなそへそ一しきのはねかき
すむもたた一ちかきのさはの一ひとついほ

【五吟一日千句】／三字中略 [くらさぬ]
／天正9(1581)年11月19日

みにしめてゆく一しきのはねかき
はかなきは一かれののすゑの一ひとついほ

【永正年間百韻34巻】／何路 [あきにか
せ]／永正8(1511)年7月14日

はま

はまつたう
浜伝う

→^{かえるつりふね}帰る釣舟

なみのおと一かはるやあきの一はまつたひ
きりにみたれて一かへるつりふね

【毛利千句】／何人 [せせにすむ]／文禄
3(1594)年5月12日～16日

はまつたひ一ゆふしほときに一なりけらし
かせにつれつつ一かへるつりふね

【元和年間百韻24巻】／□□ [くにくに
の]／元和6(1620)年9月15日

はやい

あさまだき
朝まだき

→^{みちのはるけさ}道の遥けさ

きえぬるか一しもうすくもる一あさまたき
おきいててゆく一みちのはるけさ

【河越千句】／薄何 [はるもきて]／文明
2(1470)年正月10～12日

いちのとも一いそくやあきの一あさまたき
きりのへたての一みちのはるけさ

【元和年間百韻24巻】／□□ [ととし
に]／元和6(1620)年12月5日

はら

おやまだのはら
小山田の原

→^{あきかける}秋更ける

やへにきりふる一をやまたのはら
ひとはたた一かりにたにこぬ一あきふけて

【伊予千句】／何舟 [わきてみむ]／大永
2(1522)年8月4日～8日

かりのゆくへの一をやまたのはら
みねたかみ一ふきこすかせの一あきふけて

【永正年間百韻34巻】／何船 [うちなひ
き]／永正元(1504)年7月

くきはら
草原

だれをとおうか
→誰を訪おうか

ゆくゆくも一かすみをしののくさのはら
たれにとはまし一はるのわかれち

【紫野千句】／何木〔はにしける〕／延文
2(1357)年以後-応安3年6月以前

みちそなき一はなのゆきまのくさのはら
たれにとはまし一やまとことのは

【文安年間百韻9巻】／朝何〔さかきはに〕
／文安4(1447)年10月18日

こはきはら
小萩原

のちのたひひと
→後の旅人

こはきはら一をりたちかほに一さきやらて
すかてにゆく一のちのたひひと

【池田千句】／御何〔こころあひの〕／永
正7(1510)年春以前<永正5年春>

たちかへり一みるやいろこき一こはきはら
たまかはすくる一のちのたひひと

【論書4種】／宗長／

まさこはら
真砂原

ことのほのみち
→言の葉の道

いてふねの一あとしつかなる一まさこはら
ひとりたねなき一ことのほのみち

【文明十四年万句52巻】／何船〔あきの
いろ〕／文明14(1482)年7月4日~9月
14日

しらさきの一はをならへたる一まさこはら
なにをおもふも一ことのほのみち

【文明十四年万句52巻】／唐何〔はなあ
はせ〕／文明14(1482)年7月4日~9月
14日

わすれとうくきはら
忘れ訪う草原

ふるさと
→故里

わするなよ一とはむとちきる一くさのはら
たよりはかりに一かかふるさと

【太神宮法楽千句】／山何〔のははなに〕
／長享2(1488)年7月

わすれすも一とほきあととふ一くさのはら
なれこしたれそ一かかふるさと

【永正十花千句】／二字反音〔こまなへて〕
／永正13(1516)年3月11日~14日

わすれるなよ
忘れるなよ

わかれである
→別れである

はなはまた一なれしをわれも一わするなよ
はるころなき一わかれならずや

【紫野千句】／何目〔いつもみむ〕／延文
2(1357)年以後-応安3年6月以前

なくさむる一ひとにうきよを一わするなよ
そふともつひの一わかれならずや

【永正十花千句】／何路〔ゆくつきも〕／
永正13(1516)年3月11日~14日

ほどはくもい
→程は雲居

わするなよ一たひねにかすむ一よはのつき
ほどはくもゐの一はつほとときす

【難波田千句】／□□〔あけほのを〕／文
明14(1482)年10月前後

とほくなる一やとのわかれも一わするなよ
ほどはくもゐの一ふるさとのやま

【菟玖波集／広島大学本】／霧旅／文和
5(1356)年冬~翌年の春

はらう

はらう
払う

つきさやけき
→月のさやけき

かりころも一すそのつゆや一はらふらむ
かせわたりつつ一つきのさやけき

【寛文年間百韻22巻】／□□〔みるくも
に〕／寛文10(1670)年10月14日

ねしとりや一きえやらぬゆきを一はらふらむ
ゆふへをかへす一つきのさやけき

【天正四年万句70巻】／何鳥〔さみたれ
に〕／天正4(1576)年5月6日~7月19日

はる

かすむはるのおやま
霞む春の遠山

ありあけのつき
→有明の月

かすみかくれのーはるのとほやま
ありあけのーつきもわかれのーかりなきて

【看聞日記紙背50巻】／山何[まつそひ
て]／応永26(1419)年2月6日

かすみにのこるーはるのとほやま
ありあけのーつきのひかりのーさえかへり

【天正四年万句70巻】／何鳥[かせにし
るき]／天正4(1576)年5月6日～7月
19日

さくはるのはな
咲く春の花

さくらとやどのうめのえだ
→桜と宿の梅の枝

ちれはさくーちきりもはかなーはるのはな
さくらにかはすーやとのうめかえ

【大永四年月並千二百韻】／□□[けふひ
くや]／月並千二百韻／大永4(1524)年5
月23日

さくこともーちらむためかはーはるのはな
さくらほのめくーやとのうめかえ

【園塵第三／続群書類従本】／春／文亀元
(1501)年3月18日

ねぐらのはるのとりのお
壻の春の鳥の声

しずか
→静か

しはしねくらのーはるのとりのお
しつかなるーあしたのほとはーおそきひに

【元亀二年千句】／何袋[ふるさとと]／
元亀2(1571)年3月5日

たけをねくらのーはるのとりのお
しつかなるーかきほやのへにーつつくらむ

【平松文庫本千句】／□□[おちはして]
／

はなのはる
花の春

さくらさくころ
→桜咲く頃

かくてこそーちよもといはめーはなのはる
やとりはかなやーさくらさくころ

【初瀬千句】／何衣[しけるとも]／享徳
元・2(1452)年、4月

ちりすきはーよしやよしののーはなのはる
たたよのなかはーさくらさくころ

【嘉吉年間百韻1巻】／何木[たけのはに]
／嘉吉3(1443)年10月23日

つっじやまふき
→躑躅山吹

ふたもとのーすきしはいくかーはなのはる
なつともみえぬーつつしやまふき

【初瀬千句】／唐何[ふたもとの]／享徳
元・2(1452)年、4月

□□をさへーわすれかたみのーはなのはる
つゆなからをるーつつしやまふき

【天文廿四年梅千句】／何人[うめいつく]
／天文24(1555)年正月7日

はなのはるかぜ
花の春風

やまざくら
→山桜

とはむといひしーはなのはるかぜ
おくはまたーおそきもあれやーやまさくら

【弘治年間百韻8巻】／何船[たくそてに]
／弘治2(1557)年12月2日

くもをはらふはーはなのはるかぜ
やまさくらーよのまのあめにーさきいてて

【愚句老葉】／春／永正17年

にはのくちきのーはなのはるかぜ
やまさくらーかけひのみつにーななれきて

【園塵第四／早稲田大学本】／春／永正6、7
年

はなのはるごと
花の春毎

うぐいすのこゑ
→鶯の声

うゑおきてーまたるはなはのーはることに
わかやとはぬーうくひすのこゑ

【聖廟千句】／初何[きのふより]／明応
3(1494)年2月10日～12日

ほともなくーうつろふはなはのーはることに
みをあくからすーうくひすのこゑ

【那智庵／北野天満宮本】／永正十四年／

はるあきのいろ
春秋の色

→^{うつろう}移ろう

みしはしはしのーはるあきのいろ
やまふきのーつゆはもみちにーうつろひて

【美濃千句】／何馬[まつやしる]／文明
4(1473)年12月16日～21日

けにはかなしやーはるあきのいろ
ひとはたたーときなるかたにーうつろひて

【宗祇関係2種】／心敬専順点宗祇付句／

はるかえる
春帰る

→^{わかばのくすのかかるうもれぎ}若葉の葛の掛かる埋もれ木

としとしのーはるはいつくにーかへるらむ
わかばのくすのーかかろうもれき

【竹林抄／新古典文学大系本】／春／文明
8(1476)年5月頃

はるはさてーいくとしとしかーかへるらむ
わかばのくすのーかかろうもれき

【専順関係2種】／法眼専順連歌／赤木文
庫本／応仁元(1467)年5月10日

はるかぜがふく
春風が吹く

→^{かすむ}霞む

あしたのはらにーはるかぜそふく
さしのほるーひもほのかにやーかすむらむ

【葉守千句】／朝何[しもふけて]／長享
元(1487)年10月9日～11日>

かれしはやしもーはるかぜそふく
やまはけさーいくしもよにかーかすむらむ

【長享年間百韻6巻】／何人[ゆきなから]
／長享2(1488)年1月22日

はるがくる
春が来る

→^{うぐいすがなく}鶯が鳴く

やまさとのーみちのなきたにーはるのきて
けさをはつねのーうくひすそなく

【紫野千句】／唐何[かせやこれ]／延文
2(1357)年以後-応安3年6月以前

のちのちにーはなのさくへきーはるのきて
やとのあしたにーうくひすそなく

【文明十四年万句52巻】／何寺[きりう
すみ]／文明14(1482)年7月4日～9月
14日

ふるとしのーゆきのこなたにーはるはきて
おくるあしたにーうくひすそなく

【享徳二年千句】／何船[よもにちる]／
享徳2(1453)年8月11日～13日

たれかはとーおもふさとにもーはるはきて
わかみのともとーうくひすそなく

【延徳年間百韻16巻】／山河[ふきもこ
ぬ]／延徳2(1490)年9月20日

→^{うちかすむ}うち霞む

このあけほののーはるはきにけり
まきのとをーいてぬるにはのーうちかすみ

【成立不詳・心敬以前14巻】／何袋[ま
たしかし]／成立時不詳

かけひのすゑにーはるはきにけり
くれたけのーひとよあくればーうちかすみ

【園塵第一／統群書類従本】／春／長享2
年

→^{うめさく}梅咲く

このさとまでもーはるはきにけり
ひとしれぬーしはのまかきもーうめさきて

【園塵第一／統群書類従本】／春／長享2
年

こころうれしきーはるはきにけり
あひにあふーにひまくらかにーうめさきて

【論書4種】／宗長／

はるすぎる
春過ぎる

→^{ひがながい}日が長い

おのつからーとはれしころのーはるすきて
まつひとはこすーひこそなかけれ

【紫野千句】／山河[ゆふたちは]／延文
2(1357)年以後-応安3年6月以前

はなにわれ—こころつくしの—はるすきて
のとかにくらす—ひこそなかけれ

【宗長関係8種】／老耳／天理本／

はるたつ
春立つ

ひかりのどか
→光長閑

ひさかたの—くもぬのはの—はるたちて
すたれをまけは—ひかりのとけし

【文禄年間百韻12巻】／□□ [わかなつ
みし]／文禄2(1593)年1月8日

うくひすの—こゑにちさと—はるたちて
そともうつる—ひかりのとけし

【慶長年間百韻27巻】／□□ [まつやな
ほ]／裏白／慶長10(1605)年1月3日

はるのあけほの
春の曙

うぐいす
→鶯

おくつゆふかき—はるのあけほの
うくひすの—つはさにのこる—ゆきおちて

【永禄元年花千句】／□□ [みるままに]
／永禄元(1558)年3月23日～25日

いまいくかかは—はるのあけほの
うくひすの—かへるふるすや—たとるらむ

【至徳以前百韻7巻】／x x [はなちりて]
／存疑／至徳4(1387)年以前

こころつくしの—はるのあけほの
うくひすの—こゑにまくらを—そはたてて

【天正四年万句70巻】／何物 [きくやい
かに]／天正4(1576)年5月6日～7月
19日

かすむよ
→霞む夜

こころにとまる—はるのあけほの
かすむよの—つきをなこりの—かりなきて

【新撰菟玖波集／実隆本】／春上／明応
4(1495)年9月26日

はなにほひくる—はるのあけほの
かすむよの—ともしひうすき—まとにねて

【宗祇関係2種】／心敬専順点宗祇付句／

かすむ
→霞む

よをものこさぬ—はるのあけほの
つきそなき—むかふうちにや—かすむらむ

【成立不詳・宗長以前15巻】／□□ [ま
たもなき]／成立時不詳

ふるきみやこの—はるのあけほの
ひさかたの—つきのいくよか—かすむらむ

【下草／龍谷大学本】／春／延徳2(1490)
年～3年春頃

はるのいりひ
春の入日

たえだえ
→絶え絶え

はるのいりひの—かけかすかなり
たえたえに—かねのひひきの—きこえて

【称名院追善千句】／一字露頭 [くもはれ
て]／永禄6(1563)年12月14日～18日

はるのいりひの—まつにかかれる
かへりみる—あとはかすみの—たえたえに

【永禄年間百韻28巻】／何船 [ひきう
る]／裏白／永禄5(1562)年1月3日

はるのうみつら
春の海面

のどか
→長閑

かりもかへるな—はるのうみつら
のとかなる—しほひのをちに—やまをみて

【文明年間百韻34巻】／何人 [よるはつ
き]／文明18(1486)年2月6日

まつみえわたる—はるのうみつら
のとかなる—なみにうかはぬ—ふねもなし

【明応年間百韻22巻】／何木 [やまはゆ
き]／明応7(1498)年11月4日

はるのかえるさ
春の帰るさ

あまつかり
→天つ雁

ほとなくおもふ—はるのかへるさ
あまつかり—こそなこりの—ねをなきて

【成立不詳・心敬以前14巻】／何船 [ち
りしえぬ]／成立時不詳

おもへはしらぬ—はるのかへるさ
ゆきさゆる—こしちにむかふ—あまつかり

【成立不詳・宗祇以前15巻】／何椿〔か
せきよし〕／成立時不詳

はるのかりがね
春の雁

→此方彼方

ともまちつれぬーはるのかりがね
ちきりしはーこなたかなたにーなりはてて

【文明年間百韻34巻】／x x [あきふけ
ぬ]／文明12(1480)年9月28日

またたちかへるーはるのかりがね
たまつさはーこなたかなたにーかよひつつ

【菟玖波集／広島大学本】／恋下／文和
5(1356)年冬～翌年の春

はるのくれ
春の暮れ

かすむいりあいのかね
→霞む入相の鐘

あらしたつーはつせのやまのーはるのくれ
かすみとほきーいりあひのこゑ

【応仁年間百韻6巻】／x x [えたふりぬ]
／応仁2(1469)年12月

はかなくてーをしみなれこしーはるのくれ
かすみはてたるーいりあひのこゑ

【大永四年月並千二百韻】／□□ [へたつ
なよ]／月並千二百韻／大永4(1524)年3
月23日

はるのくれがた
春の暮れ方

ふじまく
→藤咲く

やよひのすゑのーはるのくれかた
ものふかきーまつひまひまーふちさきて

【園塵第三／続群書類従本】／春／文亀元
(1501)年3月18日

はなをそつくすーはるのくれかた
やまふきのーひとつかきねにーふちさきて

【合点之句／神宮文庫本】／春／天文
9(1541)年12月25日

はるのさびしさ
春の寂しさ

はなまく
→花咲く

やとからなれやーはるのさびしさ
にはうつむーこけにひともとーはなさきて

【宗祇関係2種】／心敬専順点宗祇付句／

あめふりすさふーはるのさびしさ
やまふかみーくもゆくみねのーはなさきて

【宗長関係8種】／老耳／天理本／

はるのともない
春の伴い

ゆうがすみ
→夕霞

おくれつつきーはるのともなし
ことのはにーあらそふあさなーゆふかすみ

【永禄年間百韻28巻】／山何 [かきつは
た]／永禄10(1567)年4月28日

かたみにうときーはるのともなし
てふとりのーやとりへたつるーゆふかすみ

【文禄年間百韻12巻】／□□ [うめかえ
や]／文禄4(1595)年7月21日

はるのはな
春の花

あおやぎのかげ
→青柳の陰

いくもとそーやとにたえせぬーはるのはな
かともこたかしーあをやきのかけ

【永原千句】／何船 [いくもとそ]／明応
9(1500)年7月17日

わかきにもーいろかのふかきーはるのはな
かせふきなひくーあをやきのかけ

【永原千句】／唐何 [とりのねに]／明応
9(1500)年7月17日

かせふかぬーよになまたれそーはるのはな
めくみのつゆのーあをやきのかけ

【文明年間百韻34巻】／何船 [かせふか
ぬ]／文明9(1477)年1月22日

うぐいすのこゑ
→鶯の声

またるやーねこしてうゑしーはるのはな
のやまをここにーうぐいすのこゑ

【永禄石山千句】／初何 [しらかしの]／
永禄7(1564)年5月12日

たれをよのーまつひとにせむーはるのはな
さくらになれよーうぐいすのこゑ

【成立不詳・宗祇以前15巻】／x x [た
れをよの]／成立時不詳

もるかけは一たをらむもやは一はるのはな
そのふにさらぬ一うくひすのこゑ

【永禄年間百韻28巻】／山河〔ゆふかほ
に〕／永禄2(1559)年5月20日

いにしへの一あとはかはらぬ一はるのはな
そのふはなれす一うくひすのこゑ

【文禄年間百韻12巻】／□□〔たかには
も〕／文禄2(1593)年5月27日

かけはしの一おくしるへせよ一はるのはな
とほくなりぬる一うくひすのこゑ

【慶長年間百韻27巻】／□□〔あらしに
も〕／裏白／慶長5(1600)年1月3日

さきつかは一きのふけふかの一はるのはな
あさとあくれば一うくひすのこゑ

【永正年間百韻1巻】／何人〔こゑとほく〕
／永正元(1505)年12月10日

たちよりて一あらくなをりそ一はるのはな
なかなほとまつ一うくひすのこゑ

【天正四年万句70巻】／何鳥〔かせにし
るき〕／天正4(1576)年5月6日～7月
19日

→^{うぐいすがなく}鶯が鳴く

ひとときさへ一あはれをしたふ一はるのはな
そのふをちかみ一うくひすのなく

【天正年間百韻57巻】／x x〔わけゆか
は〕／天正4(1576)年8月19日

もるひともし一なきやおいきの一はるのはな
うくひすのなく一こゑのしつけさ

【天正年間百韻57巻】／何路〔かすむよ
の〕／天正6(1578)年2月18日

→^{たにのうぐいす}谷の鶯

わかにはも一おもかけのこせ一はるのはな
かへりはつるか一たにのうくひす

【天文年間百韻38巻】／何船〔かはおと
も〕／天文23(1554)年6月1日

とまふきの一あるしもまつや一はるのはな
ききこそそむれ一たにのうくひす

【寛文年間百韻22巻】／□□〔くるかり
も〕／寛文12(1672)年8月23日

はるのひかり
春の光

→^{かすむ}霞む

はるのひかりも一なきたにのいほ
みねたかみ一ありあけまでや一かすむらむ

【飯盛千句】／何木〔かすかのの〕／永禄
4(1561)年5月27日～29日

はるのひかりも一みえぬおくやま
うくひすの一さへつるのへや一かすむらむ

【享徳年間百韻4巻】／何船〔をさまれる〕
／享徳2(1453)年1月25日

はるのふるさと
春の古里

→^{ながきひ}長き日

とはれむものか一はるのふるさと
あめのうち一ゆふへもわかす一ななきひに

【文明年間百韻34巻】／何路〔かせやく
も〕／文明4(1472)年10月26日

さひしくなりぬ一はるのふるさと
ななきひに一なととひすてて一かへるらむ

【延徳年間百韻16巻】／何人〔まつみよ
と〕／延徳4(1492)年2月8日

はるのもののね
春の物の音

→^{あらはしりのよるのつき}霰走りの夜の月

ひくてもゆかし一はるのもののね
あけのこる一あらはしりの一つきのよに

【住吉千句】／何田〔このはちる〕／大永
元(1521)年11月1日～14日

しらへえならぬ一はるのもののね
しつけさや一あらはしりの一よはのつき

【元和年間百韻24巻】／□□〔そらにみ
つ〕／元和8(1622)年10月19日

はるのやまざと
春の山里

→^{うぐいす}鶯

さくらのことを一はるのやまざと
うくひすの一こゑはかすみの一きはにて

【太神宮法楽千句】／玉何【あきとほし】
／長享 2(1488) 年 7 月

やかてもとへやーはるのやまさと
うくひすのーふるすのたにのーゆききえて

【東山千句】／何路【のわきせし】／永正
15(1518) 年 8 月 10 日～12 日

はるのやまてら
春の山寺

きさらぎのわかれをとう
→如月の別れを訪う

しきみにとほきーはるのやまてら
きさらぎのーわかれのにはをーとひすてて

【嵯峨千句】／何人【さきてちる】／(元
龜 4) 天正元 (1573) 年正月 9 日～11 日

かねさたかなるーはるのやまてら
きさらぎのーわかれをたれもーとひいてて

【寛永年間百韻 1 5 卷】／□□【とよとし
の】／裏白／寛永 20(1643) 年 1 月 3 日

はるのゆうぐれ
春の夕暮れ

つきいでる
→月出る

まさこちとほきーはるのゆふくれ
とけわたるーみきはもこほるーつきいてて

【天正年間百韻 5 7 卷】／何船【もしほく
さ】／天正 7(1579) 年 1 月 13 日

こけふむやまのーはるのゆふくれ
しつかなるーはなのおくよりーつきいてて

【合点之句／神宮文庫本】／春／天文
9(1541) 年 12 月 25 日

はるのよのつき
春の夜の月

こゑ
→声

いてたにやらすーはるのよのつき
あめはれてーかはつうるさきーこゑこゑに

【秋津洲千句】／一字露頭【わかほより】
／天文 15(1546) 年 8 月 25 日

こころうかるるーはるのよのつき
うちわひてーなきゆくかりのーこゑこゑに

【明応年間百韻 2 2 卷】／何船【はなそは
る】／明応 2(1493) 年 3 月 25 日

はるのよのゆめ
春の夜の夢

くさまくら
→草枕

みえこしやたたーはるのよのゆめ
つきもいつーのとかになれむーくさまくら

【伊予千句】／何垣【なつくさは】／天文
6(1537) 年 5 月 22 日

かへるともなきーはるのよのゆめ
おもはすよーすみれつむののーくさまくら

【専順関係 2 種】／法眼専順連歌／赤木文
庫本／応仁元 (1467) 年 5 月 10 日

はるはあけほの
春は曙

よこむ
→横雲

かすみはゆふへーはるはあけほの
よこくもにーよるのうすゆきーきえやらて

【皇学館文庫本千句】／□□【ちらははな】
／永禄 6(1563) 年 11 月 18 日以前

いつはありともーはるはあけほの
のこるかとーゆめをもたとるーよこくもに

【永正年間百韻 3 4 卷】／何人【みやまき
に】／永正 14(1517) 年 3 月 22 日

はるよりのち
春より後

ながきひ
→長き日

はるよりのちのーうくひすのこゑ
おくらすもーつれつれはなほーなかきひに

【嵯峨千句】／花之何【うめかかは】／(元
龜 4) 天正元 (1573) 年正月 9 日～11 日

はるよりのちのーとももこそあれ
たかさこやーむかしいまはのーなかきひに

【天正四年万句 7 0 卷】／薄何【はつかり
の】／天正 4(1576) 年 5 月 6 日～7 月 19 日

ふるきみやこのはる
古き都の春

うちかすみ
→うち霞む

ふるきみやこのーはるのはかなさ
しほかまやーけふりしなこりーうちかすみ

【明応年間百韻 2 2 卷】／山何【つきもひ
とに】／明応 5(1496) 年 8 月 15 日

ふるきみやこのーはなのひとと
つゆかかるーみちのしはくさーうちかすみ

【大永三年月並千三百韻】／□□【はなに
つき】／月並千三百韻／大永 3(1523) 年 3
月 23 日

はるか

きとのほるかさ
里の遙かさ

→おだのはら
小田の原

やなきかくれのーさとのほるけさ
すゑはなほーかへしのこせるーをたのはら
【天正年間百韻 5 7 巻】 / □□ [うくひす
も] / 天正 14(1586) 年 1 月 4 日

かすみわけゆくーさとのほるけさ
すきわたしーかへれはくるるーをたのはら
【慶長年間百韻 2 7 巻】 / □□ [はるもこ
そ] / 裏白 / 慶長 13(1608) 年 1 月 3 日

はるばる

はるばる
遙々

→あまのつりふね
あまのつり舟

はるはるとーわかすむかたはーうちかすみ
おきにかかれるーあまのつりふね
【宮島千句】 / 何木 [ほかにやは] / 天文
20(1551) 年 5 月 9 日~11 日

はるはるとーあしへをさしてーみつしほに
みるみるちかきーあまのつりふね
【大永三年月並千三百韻】 / □□ [うめか
かや] / 月並千三百韻 / 大永 3(1523) 年 2
月 23 日

はれる

きりはれのほる
霧晴れ昇る

→あさひかげ
朝日影

きりはれのほるーなかのかけはし
かすかなるーのわきせしよのーあさひかけ
【出陣千句】 / 朝何 [きりもやは] / 永正
元 (1504) 年 10 月 25 日~27 日

きりはれのほるーまつのこたかさ
あさひかけーいろつくみねにーさしそひて
【文明年間百韻 3 4 巻】 / □□ [したつゆ
は] / 文明 12(1480) 年 7 月 4 日

きりはれる
霧晴れる

→ひとすじしろい
一筋白い

かりのこすーすすきをこめしーきりはれて
ひとすちしろしーしもをふむみち
【弘治三年春雪千句】 / 初何 [けさみれは]
/ 弘治 3(1557) 年正月 7 日~9 日

ゆくゆくもーはまへつたひのーきりはれて
ひとすちしろしーつきのかはみつ
【天正年間百韻 5 7 巻】 / 何人 [ときはい
ま] / 天正 10(1582) 年 5 月 24 日

はれるむらさめ
晴れる村雨

→ひとこゑのほととぎす
一声の時鳥

ふくるまくらにーはるむらさめ
ひとこゑはーききこそわかぬーほととぎす
【表佐千句】 / 初何 [はなみよと] / 文明
8(1476) 年 3 月 6 日<~8 日>

そそきもあへすーはるむらさめ
ひとこゑはーそれかあらぬかーほととぎす
【元和年間百韻 2 4 巻】 / □□ [としとと
もに] / 裏白 / 元和 2(1616) 年 1 月 3 日

みずはれる
水晴れる

→あけのそほぶね
朱のそほ舟

かけおそきーゆふひのいりえーみつはれて
なみもよりくるーあけのそほぶね
【皇学館文庫本千句】 / □□ [きてかへる]
/ 永祿 6(1563) 年 11 月 18 日以前

はるはるとーやまもといつるーみつはれて
たひねするよのーあけのそほぶね
【壁草 / 書陵部本】 / 旅 / 永正 9 年

むらさめのはれゆくあとあらし
村雨の晴れゆく後は嵐

→ひにわたるふねのきむさ
日に渡る舟の寒さ

むらさめのーはれゆくあとあらし
ゆふひにわたるーふねのきむさ
【大永年間百韻 1 4 巻】 / 何人 [ちあきを
も] / 大永 5(1525) 年 9 月 21 日

むらさめのーはれゆくあとーはーゆふあらし
いりひをわたるーふねのさむけさ

【宗長関係8種】／老耳／天理本／

ゆきがふりはれる
雪がふり晴れる

さゆるゆうかせ
→寒ゆる夕風

まさこちにーまきるるゆきのーふりはれて
ふきあけののにーさゆるゆふかせ

【文安頃千句4巻】／何路【やへひとへ】

／

ふりはれてーつきにもなれるーゆきのかな
くさきのうへにーさゆるゆふかせ

【長禄三年千句11巻】／初何【ふりはれ
て】／長禄3(1459)年12月2日～5日

ば

あおばのはなのあと
青葉の花の後

かかふるふちなみ
→掛かる藤浪

まつならてーあをはのゆきやーはなのあと
こときのかたにーかかふるふちなみ

【看聞日記紙背50巻】／山何【かせやく
も】／応永26(1419)年10月25日

をしめともーあをはになりぬーはなのあと
まつにことさらーかかふるふちなみ

【看聞日記紙背50巻】／山何【あつさな
ほ】／応永32(1425)年閏6月25日

かきのもとつば
垣の本つ葉

みかわみず
→御溝水

あきにいろつくーかきのもとつは
おもふことーかきやなかさむーみかはみつ

【看聞日記紙背50巻】／何目【いろつき
ぬ】／応永28日5月29日

いろみしそむるーかきのもとつは
はきのとーはなさへうつるーみかはみつ

【看聞日記紙背50巻】／何路【まつころ
の】／応永32(1425)年10月15日

くさばのつゆ
草葉の露

あだしの
→化野

くさはのつゆもーおなしなみたか
あたしのやーおくれさきたちーいろつきて

【飯盛千句】／千何【こぬあきや】／永禄
4(1561)年5月27日～29日

くさはのつゆもーかせにみたれぬ
あたしのやーたれもさこそとーそてぬれて

【新撰菟玖波集／実隆本】／哀傷／明応
4(1495)年9月26日

こぼれるたけのはのつゆ
零れる竹の葉の露

かたしきのまくら
→片敷の枕

こほれてつたふーたけのはのつゆ
かたしきのーまくらのうへのーあきのかせ

【弘治三年春雪千句】／何舟【きえてたに】
／弘治3(1557)年正月7日～9日

こほれきにけりーたけのはのつゆ
かたしきのーそてもまくらもーひややかに

【元和年間百韻24巻】／□□【くにくに
の】／元和6(1620)年9月15日

もみじば
紅葉葉

くわさかずき
→波む杯

もみちははーいろこきよりもーをりかさし
よさむわすれてーくめるさかつき

【毛利千句】／初何【よとともに】／文禄
3(1594)年5月12日～16日

もみちははーたくあとよりもーかきあつめ
つきになるまでーくめるさかつき

【天正年間百韻57巻】／□□【しろたへ
の】／天正16(1588)年1月4日

ひ

あしひたくかけ
葦火焚く影

とがほたる
→飛ぶ螢

おなしみなとのーあしひたくかけ
うちみたれーくるるかたよりーとふほたる

【天正年間百韻57巻】／山何【あをやき
の】／天正3(1575)年2月2日

はなれこしまにーあしひたくかけ
とふほたるーゆくかたもなくーさよふけて

【壁草／大阪天満宮文庫本】／夏／永正
2(1505)年8月23日以後同3年3月以前

ひかり

はるのひかり
春の光

→^{かすむ}霞む

はるのひかりもーなきたにのいほ
みねたかみーありあけまでやーかすむらむ

【飯盛千句】／何木 [かすかのの]／永禄
4(1561)年5月27日～29日

はるのひかりもーみえぬおくやま
うくひすのーさへつるのへやーかすむらむ

【享徳年間百韻4巻】／何船 [をさまれる]
／享徳2(1453)年1月25日

ひかりのかげ
光の影

→^{とがほたる}飛ぶ螢

ひかりのかけをーあはれとやみむ
いにしへのーいかなるたまそーとふほたる

【文安雪千句】／花之何 [ゆきふれは]／
文安2(1445)年10月18日

ひかりのかけをーをしみとめはや
くれわたるーまとよりをちにーとふほたる

【成立不詳・心敬以前14巻】／何人 [こ
のものと]／成立時不詳

ひかりのどか
光長閑

→^{とける}解ける

にははあさけのーひかりのとけし
いけみつやーとちしこほりのーとけぬらむ

【寛永年間百韻15巻】／□□ [よのはる
を]／裏白／寛永8(1631)年1月3日

かきほへたてぬーひかりのとけし
たけのはのーゆきやのこらすーとけぬらむ

【寛永年間百韻15巻】／□□ [しつけさ
の]／裏白／寛永10(1633)年1月3日

ひぐらし

ひぐらしのこゑ
蝸の声

→^{やまのかげ}山の陰

うちおとろけるーひぐらしのこゑ
あきにさへーなりぬとおくるーやまのかげ

【伊庭千句】／御何 [うくひすや]／大永
4(1524)年3月17日～21日

つゆにしをるるーひぐらしのこゑ
むらさめやーするまもなきーやまのかげ

【天正四年万句70巻】／□何 [□□□□
□]／天正4(1576)年5月6日～7月19日

→^{ゆうづくよ}夕月夜

はやしらつゆにーひぐらしのこゑ
ゆふつくよーあきかせふかぬーやまもなし

【永原千句】／何色 [うつろはぬ]／明応
9(1500)年7月17日

ややものさひしーひぐらしのこゑ
やまのはにーまたかけうすきーゆふつくよ

【東山千句】／何色 [しかのねは]／永正
15(1518)年8月10日～12日

ひだり

ひだりみぎ
左右

→^{こころあらしうた}心争う歌

ふくふえにーあはするまひのーひたりみき
こころあらしうたのくちくち

【初瀬千句】／何衣 [しけるとも]／享徳
元・2(1452)年、4月

ゆるさるはーおなしくるまのーひたりみき
こころあらしうたのかちまけ

【文明十四年万句52巻】／栗何 [あけて
みむ]／文明14(1482)年7月4日～9月
14日

ひと

いつるたびひと
出る旅人

かりまくら
→ 仮枕

まとろみあへすーいつるたびひと
かりまくらーかねややまちにーさそふらむ

【寛正年間百韻 20巻】／唐何〔せみのは
の〕／寛正 4(1463)年 6月 23日

やすらふのへをーいつるたびひと
かりまくらーむすへはつきのーおつるよに

【老葉／吉川本】／旅／文明 13(1481)年
夏頃

いつるふなひと
出る舟人

あけわたる
→ 明け渡る

みなとのはるにーいつるふなひと
あけわたるーうらのかすみにーなみこえて

【宗砌関係 9種】／百番連歌／赤木文庫本
／享徳 2()年 8月 13日以後-寛正 6年 3
月以前

こころやとむるーいつるふなひと
あけわたるーいりえのゆきのーとまやかた

【専順関係 2種】／冬／応仁元 (1467)年
5月 10日

おちかたひとのそで
遠方人の袖

おくる
→ 送る

をちかたひとのーそてほのかなり
よこくもやーわかれしゆめをーおくるらむ

【大永四年月並千二百韻】／□□〔わけく
らし〕／月並千二百韻／大永 4(1524)年 7
月 23日

をちかたひとのーそてのむらさめ
ほとときすーなれもたひとやーおくるらむ

【那智筆／北野天満宮本】／永正十三年／

おもひひとのことは
思う人の言の葉

われのみひとりそでをぬらす
→ 我のみ一人袖を濡らす

おもふてふーひとのことはーたのみなや
われのみひとりーそてはぬらしつ

【菟玖波集／広島大学本】／恋上／文和

5(1356)年冬～翌年の春

おもふてふーひとのことはーことならば
われのみひとりーそてはぬらさし

【菟玖波集／広島大学本】／恋下／文和

5(1356)年冬～翌年の春

かえるさとひと
帰る里人

かた
→ 方

をのへをとほみーかへるさとひと
かねのこゑーいつつきこえぬーかたならむ

【出陣千句】／初何〔けふたつや〕／永正
元 (1504)年 10月 25日～27日

ふねひきすててーかへるさとひと
くれそむるーすゑやふしみのーかたならむ

【元和年間百韻 24巻】／□□〔えそすき
ぬ〕／元和 8(1622)年 4月 13日

かわるよのなか
変わる世の中

なつころも
→ 夏衣

ひとのころのーかはるよのなか
なつころもーはるのはなそめーぬきすてて

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁 2(1468)年 5月下旬

さめてむちうにーかはるよのなか
なつころもーついたちきたるーよはあけて

【新続犬筑波集】／夏／万治 3(1660)年正月

すまひと
須磨人

わかぎのさくら
→ 若木の桜

すまひとのーよかたりになるーはなうゑて
わかぎのさくらーはるそひさしき

【看聞日記紙背 50巻】／山河〔まつかね
に〕／応永 32(1425)年 3月 25日

すまひとのーうゑけるはなにーなくさみて
わかぎのさくらーさかりいつころ

【看聞日記紙背 50巻】／何路〔ひととせ
に〕／応永 32(1426)年 12月 11日

つかえひと
仕え人

いすいすのかげ
→家々の風

あふききて一きみにいくよを一つかへひと
いやさかえゆく一いへいへのかせ

【熊野千句】／初何 [をるはなに]／文正
元 (1466) 年 3 月以前

かりそめの一いとまもなみの一つかへひと
ほまれあるこそ一いへいへのかせ

【永禄元年花千句】／□□ [みるまに]
／永禄元 (1558) 年 3 月 23 日～25 日

なれるしばひと
なれる柴人

からすとぶ
→鳥飛ぶ

ひとりひとりに一なれるしはひと
からすとぶ一いちちのむらに一ひはおちて

【池田千句】／何人 [はるのはな]／永正
7(1510) 年春以前<永正 5 年春>

いりひかくれに一なれるしはひと
からすとぶ一すそののさとの一うすけふり

【永正年間百韻 3 4 巻】／何人 [すすしき
や]／永正 7(1510) 年 7 月 5 日

ひとかえる
人帰る

のべのひとむら
→野辺の一村

ひとかへる一たけのしたみち一くれやらて
たのものにつつく一へのひとむら

【永禄石山千句】／何路 [ときはきも]／
永禄 7(1564) 年 5 月 12 日

ひとかへる一あとはしつけき一はるならむ
とりのねかすむ一へのひとむら

【天文年間百韻 3 8 巻】／山何 [なくやい
つれ]／天文 24(1555) 年 5 月 14 日

ひとかげもしない
人影もしない

なる
→なる

まつとはすれと一ひとかけもせず
たのめしや一よそのゆふへに一なりぬらむ

【文安雪千句】／花之何 [ゆきふれは]／
文安 2(1445) 年 10 月 18 日

まはきかもとの一ひとかけもせず
いつすみて一とほさとをのと一なりぬらむ

【下草／東山御文庫本】／雑上／明応
5(1496) 年 11 月 18 日

ひとがうらめしい
人が恨めしい

とらう
→訪う

ふりはへてこぬ一ひとはうらめし
いつかたの一たよりにわれを一とひつらむ

【萱草／伊地知本】／恋／文明 6(1474) 年
2 月以前

とほさかりぬる一ひとはうらめし
おほつかな一たかこころにて一とひつらむ

【下草／龍谷大学本】／恋下／延徳 2(1490)
年～3 年春頃

ひとがまたれる
人が待たれる

こいしき
→恋しき

かへさいそきし一ひとそまたる
こひしさは一うらみにこりぬ一こころにて

【成立不詳・心敬以前 1 4 巻】／何船 [ま
つかせは]／成立時不詳

ちきりおかねと一ひとそまたる
こひしさは一みのならはしの一ゆふへにて

【新撰菟玖波集／実隆本】／恋下／明応
4(1495) 年 9 月 26 日

ひとだのみ
人頼み

おとづれて
→訪れて

みにしむかせそ一ひとたのめなる
いまこむと一ゆふくれことに一おとづれて

【因幡千句】／初何 [ゆきはなほ]／文明
7(1475) 年 11 月 26 日<～28 日>

はかなのゆめや一ひとたのめなる
わすらるる一ちきりになせは一おとづれて

【明応年間百韻 2 2 巻】／何路 [うつろは
て]／明応 3(1494) 年 10 月 30 日

なれなれる
→慣れ慣れる

そよきてをきの一ひとたのめなる
さをしかの一きりのまかきに一なれなれて

【平松文庫本千句】／□□ [ふゆはつき]
／

ひとたのめなる一くれもあやなし
ささかにのーかねてしるきも一なれなれて

【那智竈／北野天満宮本】／永正十三年／

ひとのおとずれ
人の訪れ

→桜散る

いまはおもはし一ひとのおとつれ
さくらちる一やまはかさなる一おくにして

【東山千句】／何色[しかのねは]／永正
15(1518)年8月10日～12日

きのふはありし一ひとのおとつれ
さくらちる一はるのやまさと一くれやらて

【新撰菟玖波集／実隆本】／春下／明応
4(1495)年9月26日

ひとのおもかけ
人の面影

→別れ路

ゆめかうつつか一ひとのおもかけ
しはしたに一とりとめはやのーわかれちに

【天文廿四年梅千句】／何垣[あさきりに]
／天文24(1555)年正月7日

これになくさむ一ひとのおもかけ
けふやかて一こひしかるへき一わかれちに

【応永年間百韻7巻】／□□[xxはせて]
／応永24(1417)年3月16日

→秋更ける

つきにみしよのーひとのおもかけ
のこりなく一よもきかすゑに一あきふけて

【永正十花千句】／何路[ゆくつきも]／
永正13(1516)年3月11日～14日

ぬきおくきぬのーひとのおもかけ
つきすめる一よこのうらかせ一あきふけて

【萱草／伊地知本】／秋／文明6(1474)年
2月以前

つきにみしよのーひとのおもかけ
のこれなく一あさちかすゑのーあきふけて

【那智竈／北野天満宮本】／永正十三年／

→慰める

まつとはしるや一ひとのおもかけ
うきをたた一ころとしはし一なくさめて

【天文年間百韻38巻】／朝何[またてき
く]／天文9(1540)年4月25日

わすれむとすれは一ひとのおもかけ
あはぬまも一ありつるみそと一なくさめて

【老葉／吉川本】／恋下／文明13(1481)年
夏頃

→涙

わすれもやらぬ一ひとのおもかけ
うらみをは一いはぬにもしる一なみたにて

【看聞日記紙背50巻】／唐何[としふり
て]／応永24(1417)年11月23日

あさちかはらのーひとのおもかけ
つゆはたた一ゆふへのおとす一なみたにて

【竹林抄／新古典文学大系本】／秋／文明
8(1476)年5月頃

ひとのかねごと
人の豫言

→契り

かはるかいか□一ひとのかねこと
ちきりても一ころのおくのーゆかしきに

【看聞日記紙背50巻】／山何[なつかけ
よ]／応永26(1419)年3月29日

いつはりなれや一ひとのかねこと
ちきりても一ふたりはしなすーのこるみに

【心敬関係10種】／心玉集／静嘉堂文庫
本／文正元(1466)年4月

ひとのこころ
人の心

→涙落ちる

たひのやと一かすはまれなる一ひとこころ
なさけのなきに一なみたおちけり

【文明十四年万句52巻】／手何[はふつ
たに]／文明14(1482)年7月4日～9
14日

たまさかに一ちきりおきつる一ひとこころ
かたみのふみに一なみたおちけり

【文明十四年万句 5 2 卷】／何水〔たまやとる〕／文明 14(1482) 年 7 月 4 日～9 月 14 日

はかない
→儚い

ひとのこころの—あやしうつしゑ
はかなくも—すきにしもの—おもはれて

【天正年間百韻 5 7 卷】／何木〔けふかへよ〕／天正 9(1581) 年 4 月 1 日

ひとのこころの—かはるよのなか
はかなくも—おとろふるをは—ともにせて

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応仁 2(1468) 年 5 月下旬

ひとのこころがかわる
人の心が変わる

うみやま
→海山

ひとのこころの—かはりやすさよ
うみやまの—つきみてあかす—すまのうら

【文明十四年万句 5 2 卷】／山何〔あきのはな〕／文明 14(1482) 年 7 月 4 日～9 月 14 日

ひとのこころの—かはるよのなか
うみやまの—なあるところも—たひなれや

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応仁 2(1468) 年 5 月下旬

ひとのこころのかわるよのなか
人の心の変わる世の中

あきのくれ
→秋の暮れ

ひとのこころの—かはるよのなか
やまさとを—うかれいてめや—あきのくれ

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応仁 2(1468) 年 5 月下旬

ひとのこころの—かはるよのなか
いまをなほ—とへやよしのの—あきのくれ

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応仁 2(1468) 年 5 月下旬

あきがくる
→秋が来る

ひとのこころの—かはるよのなか
うつせみの—はやまおろしに—あきはきて

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応仁 2(1468) 年 5 月下旬

ひとのこころの—かはるよのなか
しるしらぬ—ひとつなみたに—あきはきて

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応仁 2(1468) 年 5 月下旬

あわれ
→哀れ

ひとのこころの—かはるよのなか
よもきふを—かれぬあるしは—あはれにて

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応仁 2(1468) 年 5 月下旬

ひとのこころの—かはるよのなか
なきあとは—にくかりしたに—あはれにて

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応仁 2(1468) 年 5 月下旬

いろみえる
→色見える

ひとのこころの—かはるよのなか
まちをしむ—はなにほとなき—いろみえて

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応仁 2(1468) 年 5 月下旬

ひとのこころの—かはるよのなか
たけはその—こをおもふとも—いろみえて

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応仁 2(1468) 年 5 月下旬

ういみのとき
→憂い身の時

ひとのこころの—かはるよのなか
うきみさへ—ときにやあふと—はるたちて

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応仁 2(1468) 年 5 月下旬

ひとのこころの—かはるよのなか
うきみさへ—いまはのときや—をしからむ

【萱草／伊地知本】／雑／文明 6(1474) 年 2 月以前

おとろえる
→衰える

ひとのこころの—かはるよのなか
そのいへは—のこれとみちの—おとろへて

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

ひとのこころのーかはるよのなか
あかむれはーかみのしるしはーおとろへて

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

→袖濡れる^{そでぬれる}

ひとのこころのーかはるよのなか
ききわひぬーしくれこのはにーそてぬれて

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

ひとのこころのーかはるよのなか
おいかみはーわかなくつむにもーそてぬれて

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

→旅^{たび}

ひとのこころのーかはるよのなか
うきにあひーなさをみるもーたひなれや

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

ひとのこころのーかはるよのなか
うみやまのーなあるところもーたひなれや

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

→契り^{ちぎり}

ひとのこころのーかはるよのなか
なへてうきーあきなどほしのーちきるらむ

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

ひとのこころのーかはるよのなか
むかしたれーはなよりまつをーちきるらむ

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

→月を見る^{つきをみる}

ひとのこころのーかはるよのなか
よつときーいつれまさとーつきをみて

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

ひとのこころのーかはるよのなか
すさましとーいひしはすのーつきをみて

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

→とりどり

ひとのこころのーかはるよのなか
さむきひはーみつにいてふーとりとりに

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

ひとのこころのーかはるよのなか
すてかたきーわかふたみちのーとりとりに

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

→儂い羽根を並べる鳥部山^{はかないはねをならべるとりべやま}

ひとのこころのーかはるよのなか
はかなしやーはねをならへしーとりへやま

【萱草／伊地知本】／恋／文明 6(1474) 年
2 月以前

ひとのこころのーかはるよのなか
はかなしやーはをもならへしーとりへやま

【老葉／書陵部宗訊筆本】／旅／

→花咲く^{はなさく}

ひとのこころのーかはるよのなか
のへをわけーやまちをたとるーはなさきて

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

ひとのこころのーかはるよのなか
みやまきをーかたはらになすーはなさきて

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

→花もない^{はなもない}

ひとのこころのーかはるよのなか
うれへあるーみはななかめつるーはなもなし

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応

仁 2(1468) 年 5 月下旬

ひとのころのーかはるよのなか
うたのみちーまことをうるはーはなもなし

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応

仁 2(1468) 年 5 月下旬

→^{はねをならべるとりへやま}
羽根を並べる鳥部山

ひとのころのーかはるよのなか
とりへやまーはねをならへしーすゑたえて

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応

仁 2(1468) 年 5 月下旬

ひとのころのーかはるよのなか
はかなしやーはねをならへしーとりへやま

【萱草／伊地知本】／恋／文明 6(1474) 年

2 月以前

→^{ひとつ}
ひとつ

ひとのころのーかはるよのなか
つきはたたーみやもわらやもーひとつにて

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応

仁 2(1468) 年 5 月下旬

ひとのころのーかはるよのなか
こをおもふーみちのみたれもーひとつにて

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応

仁 2(1468) 年 5 月下旬

→^{ほととぎす}
時鳥

ひとのころのーかはるよのなか
ほととぎすーはななきころをーなくさめて

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応

仁 2(1468) 年 5 月下旬

ひとのころのーかはるよのなか
またしよもーなきかやまちのーほととぎす

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応

仁 2(1468) 年 5 月下旬

ひとのころのーかはるよのなか
ほととぎすーかへるやまちはーともならて

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応

仁 2(1468) 年 5 月下旬

→^{みをしらない}
身を知らない

ひとのころのーかはるよのなか
うれしさもーうきもゆめなるーみをしらて

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応

仁 2(1468) 年 5 月下旬

ひとのころのーかはるよのなか
ときをえはーなほおそるへきーみをしらて

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応

仁 2(1468) 年 5 月下旬

→^{みをしる}
身を知る

ひとのころのーかはるよのなか
みをしれはーわれとさためむーやともなし

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応

仁 2(1468) 年 5 月下旬

ひとのころのーかはるよのなか
みをしれはーいはむうらみもーなきものを

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応

仁 2(1468) 年 5 月下旬

→^{わがうえ}
我が上

ひとのころのーかはるよのなか
わかうへにーおもはてたれをーそしるらむ

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応

仁 2(1468) 年 5 月下旬

ひとのころのーかはるよのなか
わかうへにーほしのひとよのーあきもかな

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応

仁 2(1468) 年 5 月下旬

ひとのころのよのなか
人の心の世の中

→^{はなをうらむ}
花を恨む

ひとのころのーあたしよのなか
はなをたれーうつろふものとーうらむらむ

【竹林抄／新古典文学大系本】／春／文明

8(1476) 年 5 月頃

ひとのころのーかはるよのなか
なつやまとーみなすをはなやーうらむらむ

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応

仁 2(1468) 年 5 月下旬

ひともある
人もある

→^{かぞえまう}数添う

こころかしこき一ひともこそあれ
ことのはは一すゑのよになほ一かすそひて

【永原千句】／何色〔うつろはぬ〕／明応
9(1500)年7月17日

なをききかぬ一ひともこそあれ
かなしくも一にひしまりの一かすそひて

【下草／金子本】／雑上／延徳4(1492)年頃

ひとりねとかげ
一人寝と影

→^{かたしぐ}片敷く

ひとりやねなむ一まきたてるかけ
はなにほふ一やまちのこけを一かたしきて

【新撰菟玖波集／実隆本】／春上／明応
4(1495)年9月26日

ひとりやねなむ一つきほそきかけ
むしのねも一よわるあらしを一かたしきて

【壁草／大阪天満宮文庫本】／秋／永正
2(1505)年8月23日以後同3年3月以前

ひとりねる
一人寝る

→^{うらみわびる}恨み侘びる

かせみにしみぬ一ひとりかもねむ
いつはりの一なかたちをのみ一うらみわひ

【天文年間百韻38巻】／山何〔なとりか
は〕／天文19(1550)年6月16日

まちよわりつつ一ひとりかもねむ
ちかひしに一かはるころを一うらみわひ

【寛文年間百韻22巻】／□□〔きゆるも
のと〕／寛文12(1672)年8月11日

ふるさとひと
古里人

→^{たびのそら}旅の空

ふるさとひとに一ゆくへきかせし
ここにうらみ一かしこになけく一たひのそら

【新撰菟玖波集／実隆本】／騷旅上／明応
4(1495)年9月26日

ふるさとひとに一あへるうれしさ
ゆくとくと一なみたはひとり一たひのそら

【壁草／大阪天満宮文庫本】／旅／永正
2(1505)年8月23日以後同3年3月以前

わびひと
侘人

→^{あきのさころも}麻の狭衣

わひひとの一むねやすからぬ一あさゆふに
きてもやせはき一あさのさころも

【享祿年間百韻8巻】／何人〔あさかすみ〕
／享祿5(1532)年1月3日

わひひとの一はたへはいかに一さむからむ
うちしきりぬる一あさのさころも

【文祿年間百韻12巻】／□□〔にはくさ
の〕／文祿2(1593)年1月10日

ひま

^{かすみのひま}
霞のひま

→^{はるあさい}春浅い

かすみのひまの一あさあけのやま
はるあさき一のかせやしもに一くもるらむ

【永享年間百韻4巻】／山何〔くちてけり〕
／永享12(1440)年10月16日

かすみのひまの一なかそらのゆき
はるあさき一ひかけやさすも一うすからむ

【天正年間百韻57巻】／□□〔ひきのこ
せ〕／天正19(1591)年1月3日

ひややか

^{ひややか}
冷ややか

→^{あきのほたる}秋の螢

ここかしこ一なかるるみつの一ひややかに
あきのほたるや一くらいそくらむ

【天正年間百韻57巻】／何人〔ときはい
ま〕／天正10(1582)年5月24日

いはねこす一いけのしらなみ一ひややかに
あきのほたるや一みつのうきくさ

【天正年間百韻 5 7 卷】／□□ [まつならぬ] / 天正 17(1589) 年 1 月 4 日

みずのうきくさ
→水の浮草

さそふへき一つきのやまかせ一ひややかに
いろにみたるる一みつのうきくさ

【弘治年間百韻 8 卷】／何船 [たくそてに] / 弘治 2(1557) 年 12 月 2 日

いはねこす一いけのしらなみ一ひややかに
あきのほたるや一みつのうきくさ

【天正年間百韻 5 7 卷】／□□ [まつならぬ] / 天正 17(1589) 年 1 月 4 日

みずひややか
水冷ややか

たきのなみ
→滝の浪

みつひややかに一おつるかはつら
あしのはも一たたかれわたる一たきつなみ

【天正四年万句 7 0 卷】／山何 [みかつきの] / 天正 4(1576) 年 5 月 6 日～7 月 19 日

みつひややかに一すみわたるこゑ
おちつくす一はなのこのまの一たきつなみ

【天正四年万句 7 0 卷】／玉何 [まつはらも] / 天正 4(1576) 年 5 月 6 日～7 月 19 日

ひよし

かもひよし
賀茂日吉

あいかつら
→葵 桂

かもひよし一みやこにちかき一やまとして
あふひかつらは一まつりにそとる

【宝徳四年千句】／二字反音 [はなにかけ] / 宝徳 4(1452) 年 3 月 12 日

□□さけふ一かみかき□□し一かもひよし
あふひかつらは一おなし□□□□

【応永年間百韻 7 卷】／□□ [x x はせて] / 応永 24(1417) 年 3 月 16 日

ひらく

まどをひらく
窓を開く

なつごろも
→夏衣

まどをひらけは一つきのありあけ
なつごろも一いとひしもまた一みにふれて

【称名院追善千句】／何牆 [さかのやま] / 永禄 6(1563) 年 12 月 14 日～18 日

まどをひらけは一かよふあきかせ
なつごろも一うすきさへみに一いとはれて

【天正年間百韻 5 7 卷】／□□ [ゆふたちの] / 天正 17(1589) 年 6 月 16 日

ふかい

ふかいよるのそら
深い夜の空

ありあけ
→有明

かへすもまつも一ふかきよのそら
をくるまのつつきさへにほふ一ありあけに

【永正年間百韻 3 4 卷】／何色 [うゑてみぬ] / 永正 6(1509) 年間 8 月 29 日

とりのなくねは一ふかきよのそら
あふさかや一すきのはしろき一ありあけに

【永禄年間百韻 2 8 卷】／何人 [つきなから] / 永禄 5(1562) 年 8 月 11 日

やまぶかい
山深い

なほのほそみち
→谷の細道

しもにかね一さゆるいりあひ一やまぶかみ
すきむらとほき一たにのほそみち

【壁草／大東急記念文庫本】／雑上 / 永正 8(1512) 年 11 月 3 日～永正 9 年

やまぶかみ一とひくるもまた一なになれや
ひとかかせきか一たにのほそみち

【那智竈／北野天満宮本】 / 永正十四年 /

よがふかい
夜が深い

くさまくら
→草枕

かねたにならす一よこそふかけれ
くさまくら一しらぬいつくのつきなれや

【東山千句】／何色 [しかのねは]／永正
15(1518)年8月10日～12日

かねにたひたつ一よこそふかけれ
たかさとも一しつけきのへの一くさまくら

【成立不詳・宗祇以前15巻】／山何 [め
つらしき]／成立時不詳

ふく

あきかぜがふく
秋風が吹く

なくきりぎりす
→鳴く蟋蟀

ここにすみける一あきかせそふく
たれとなく一ふりにしあとの一きりきりす

【伊勢千句】／何木 [すめるよの]／大永
2(1522)年8月4日～8日

かれののあさち一あきかせそふく
くれぬれは一なくねもかはる一きりきりす

【文明年間百韻34巻】／x x [あきふけ
ぬ]／文明12(1480)年9月28日

つゆふる
→露ふる

まきのいたまは一あきかせそふく
みのむしの一こゑあはれにも一つゆふりて

【伊予千句】／何馬 [もろひとの]／天文
6(1537)年5月22日

とへはのみや一あきかせそふく
かきりなく一そてのわかれち一つゆふりて

【成立不詳・宗祇以前15巻】／x x [ち
れはいさ]／成立時不詳

あきじがはら
→浅茅が原

さひしきものと一あきかせそふく
あさちはら一ところをそむる一つゆなから

【専順関係2種】／秋／応仁元(1467)年
5月10日

つきはふけつつ一あきかせそふく
あさちはら一むしのねよりも一われなきて

【園座第三／統群書類従本】／秋／文亀元
(1501)年3月18日

はなすすき
→花薄

とふかときけは一あきかせそふく
はなすすき一きみかうゑしや一しのふらむ

【文明年間百韻34巻】／何路 [あさなけ
に]／文明8(1476)年1月11日

むかしこひしき一あきかせそふく
ひとすまぬ一をのへのみやの一はなすすき

【愚句老葉】／秋／永正17年

あらしふくやま
嵐吹く山

おおいがわがすむ
→大井川霞む

のとかにすめは一あらしふくやま
おほみかは一かすめるみつの一たえたえに

【享祿年間百韻8巻】／何人 [からころも]
／享祿3(1530)年1月28日

はなにとゆけは一あらしふくやま
おほみかは一かすみのそこに一おとはして

【文安頃千句4巻】／何路 [やへひとへ]
／

そてふきおくるかぜ
袖吹きおくる風

たまほこ
→玉鉢

そてふきおくる一みねのこからし
たまほこの一すゑはゆふしも一さえさえて

【天文年間百韻38巻】／x x [かめにさ
す]／天文21(1552)年2月20日

そてふきおくる一かせのすすしさ
たまほこの一ゆくへにしはし一やすらひて

【天正年間百韻57巻】／□□ [うめかえ
の]／裏白／天正19(1591)年1月3日

つゆふくかぜ
露吹く風

むしなく
→虫鳴く

つゆふくかせは一にしよりそたつ
みやきのの一はなのさかりは一むしなきて

【宝徳四年千句】／何衣 [はなもはも]／
宝徳4(1452)年3月12日

つゆふくかせは一すすのかりいほ
なつころも一ひもくれかたは一むしなきて

【永正年間百韻3 4巻】／何衣 [あひにあ
ひぬ]／永正10(1513)年2月16日

はるかぜがふく
春風が吹く

→^{かすむ}霞む

あしたのはらにーはるかぜそふく
さしのほるーひもほのかにやーかすむらむ

【葉守千句】／朝何 [しもふけて]／長享
元(1487)年10月9日<~11日>

かれしはやしもーはるかぜそふく
やまはけさーいくしもよにかーかすむらむ

【長享年間百韻6巻】／何人 [ゆきなから]
／長享2(1488)年1月22日

ふくかぜのあきのつゆ
吹く風に秋の露

→^{ひぐらしのこえ}蝸の声

かせはまたーふかぬになつもーあきのつゆ
せみにまじるやーひぐらしのこゑ

【平松文庫本千句】／□□ [なてしこの]
／

まつにふくーかせのしたはのーあきのつゆ
またかけうすきーひぐらしのこゑ

【大永三年月並千三百韻】／□□ [しくれ
のあめ]／月並千三百韻／大永3(1523)年
10月23日

ふくなみのうらかぜ
吹く浪の浦風

→^{とりのなきたつ}鳥の鳴き立つ

ふきまとはせるーなみのうらかぜ
さよふかきーうきねのとりのーなきたちて

【大永三年月並千三百韻】／□□ [はなに
つき]／月並千三百韻／大永3(1523)年3
月23日

ふきこそかはれーなみのうらかぜ
なかそらにーまさこのちとりーなきたちて

【元和年間百韻2 4巻】／□□ [まつふく
や]／元和8(1622)年10月29日

まつかぜがふく
松風が吹く

→^{くも}雲浮く

こえむをのへはーまつかせそふく
くれわたるーそらにひとむらーくもうきて

【三島千句】／朝何 [やまとほく]／文明
3(1471)年3月21日~23日

こえくるみねはーまつかせそふく
むらさめのーなこりにしはしーくもうきて

【成立不詳・心敬以前1 4巻】／何船 [は
るはまた]／成立時不詳

→^{うらい}憂い

みちくるしほにーまつかせそふく
とまりてもーふねやころのーうかるらむ

【成立不詳・宗長以前1 5巻】／何船 [し
もしろき]／成立時不詳

こころもしらすーまつかせそふく
ゆふくれやーこけのしたにもーうかるらむ

【萱草／伊地知本】／雑／文明6(1474)年
2月以前

→^{たのむ}頼む

あらうみきははーまつかせそふく
あまをふねーなこのきしをーたのむらむ

【三島千句】／山何 [うくひすの]／文明
3(1471)年3月21日~23日

こころもしらすーまつかせそふく
ふけいつるーつきはくもをもーたのむらむ

【下草／金子本】／秋／延徳4(1492)年頃

まつふくかせ
松吹く風

→^{ちるはな}散る花

まつふくかせもーかすみはてけり
ちるはなのーにほひをはるのーなこりにて

【成立不詳・心敬以前1 4巻】／何人 [こ
のものと]／成立時不詳

まつふくかせもーゆめはみせけり
ちるはなのーかをるまくらにーめもあはて

【専順関係2種】／春／応仁元(1467)年
5月10日

ふける

【文明年間百韻34巻】／x x [つきをか
せ]／文明12(1480)年8月

あきふける
秋更ける

きぎのしたつゆ
→木々の下露

かせわたるーあさちかすゑもーあきふけて
いろつきそむるーきぎのしたつゆ

【出陣千句】／朝何[きりもやは]／永正
元(1504)年10月25日～27日

やまとほきーいそのまつかせーあきふけて
しくれはのこるーきぎのしたつゆ

【至徳以前百韻7巻】／何所[ちりぬるか]
／至徳4(1387)年以前

きおじかのこえ
→さ牡鹿の声

みねたかみーへたつるつきのーあきふけて
つまやいつくのーさをしかのこゑ

【宗長追善千句】／白何[みしやいつ]／
(享祿5)天文元(1532)年3月25日

はやたよりーおしねもるまでーあきふけて
あらしにかよふーさをしかのこゑ

【寛正年間百韻20巻】／唐何[せみのは
の]／寛正4(1463)年6月23日

よわるむしのね
→弱る虫の音

はなすすきーかれゆくしもにーあきふけて
のにはおしなひーよわるむしのね

【顕証院会千句】／山何[あさもよひ]／
宝徳元(1449)年8月19日～21日

たひはまたーはるけきみちにーあきふけて
わくるくさはにーよわるむしのね

【文明年間百韻34巻】／何人[よるはっ
き]／文明18(1486)年2月6日

ころもうつおと
→衣打つ音

あきやいまーこからしふきてーふけぬらむ
のこるかたなくーころもうつおと

【宮島千句】／山何[ことのはや]／天文
20(1551)年5月9日～11日

くさまくらーうかれとあきやーふけぬらむ
みにしむかせにーころもうつおと

ありあけのつき
→有明の月

ひとはたたーかりにたにこぬーあきふけて
うらみにむかふーありあけのつき

【伊予千句】／何舟[わきてみむ]／天文
6(1537)年5月22日

ゆふつゆにーやとかすかのーあきふけて
こむよもてらせーありあけのつき

【宗長関係8種】／興津宛／書陵部本／

あきふけわたる
秋更け渡る

かりなく
→雁鳴く

あきふけわたるーきりのうみつら
ゆふなみのーまつのはこしにーかりなきて

【合点之句／神宮文庫本】／秋／天文
9(1541)年12月25日

あきふけわたるーつきのむらくも
かりなきてーよはいねかてのーたまくらに

【合点之句／神宮文庫本】／雑／天文
9(1541)年12月25日

つきふける
月更ける

そでのつゆけき
→袖の露けき

たれならずーつきみるよはやーふけぬらむ
なくさめかぬるーそでのつゆけき

【大永年間百韻14巻】／山何[うめやな
き]／大永7(1527)年1月19日

かたるまのーつきはいつしかーふけぬらむ
みえしこころもーそでのつゆけき

【天文年間百韻38巻】／何木[しくる
か]／天文19(1550)年8月25日

はつかぜときのはきはきいてあきふける
初風と昨日は聞いて秋更ける

ひとはのこらないもみど
→人は残らない紅葉

はつかせとーきのふはききしーあきふけて
ひとはのこらすーもろきもみちは

【三島千句】／何人[しるしらす]／文明
3(1471)年3月21日～23日

はつかせと一きのふはききし一あきふけて
ひとはのこらす一もみちちるかけ

【老業／吉川本】／秋／文明13(1481)年
夏頃

夜が更ける

→まどろまない

ひさしくなりぬ一よやふけぬらむ
いまこむの一ちきりはかなく一まどろまで

【成立不詳・宗祇以前15巻】／x x [た
れをよの]／成立時不詳

こひしさうたふ一よやふけぬらむ
おもひいつる一むかしにおいの一まどろまで

【宗長関係8種】／老耳／天理本／

ふじ

かかるふじなみ 掛かる藤浪

→たこのながき日
田子の長き日

よそのこすゑに一かかるふちなみ
たこのうら一あひきのなはも一なかきひに

【看聞日記紙背50巻】／何人[うめのな
の]／応永30(1423)年5月27日

まつにことさら一かかるふちなみ
ひまもなき一たこのしほくみ一なかきひに

【看聞日記紙背50巻】／山何[あつさな
ほ]／応永32(1425)年間6月25日

→かすむみかさやま
霞む三笠山

あをはのころに一かかるふちなみ
あけにけり一かすみのひまに一みかさやま

【看聞日記紙背50巻】／何人[はなのひ
も]／応永27(1420)年間1月13日

まつほのほのと一かかるふちなみ
かすみては一なほみねたかし一みかさやま

【看聞日記紙背50巻】／何船[ことはな
に]／応永31(1424)年9月27日

ふじのたそがれ 藤の黄昏

→はるのほととぎす
春の時鳥

おほつかなきは一ふちのたそかれ
はるとてや一しのひねならし一ほととぎす

【称名院追善千句】／何牆[さかのやま]
／永禄6(1563)年12月14日～18日

まつのこすゑの一ふちのたそかれ
はるこそと一はつねまたるれ一ほととぎす

【毛利千句】／一字露頭[なつのひも]／
文禄3(1594)年5月12日～16日

まつのふじなみ 松の藤浪

→つきいでる
月出る

はるちよかけよ一まつのふちなみ
なかきひも一くるれはやかて一つきいでて

【看聞日記紙背50巻】／山何[やよやよ
ひ]／応永31(1424)年3月18日

はなまちえたる一まつのふちなみ
はるのよの一ひかりをそふる一つきいでて

【文安年間百韻1巻】／夢想[おそさくら]
／文安2(1445)年3月18日

→ほととぎす
時鳥

なつをかけたる一まつのふちなみ
ほととぎす一このゆふつくよ一ほのめきて

【浅間千句】／何木[したふとや]／永正
11(1514)年5月13日～19日

こえてやたかき一まつのふちなみ
ここになく一こゑもくももの一ほととぎす

【成立不詳・宗長以前15巻】／□□[ち
らぬより]／成立時不詳

ところところの一まつのふちなみ
またれぬる一こゑはやよひの一ほととぎす

【天正年間百韻57巻】／x x [かすみけ
り]／天正10(1582)年3月1日

ふす

かりふしのゆめ 仮臥の夢

→かおのこえ
鐘の声

いつちさめゆく一かりふしのゆめ
かねのこゑ一きこえてのちの一ふかきよに

【天文年間百韻38巻】／山河〔つきやけ
さ〕／天文21(1552)年7月26日

むすひもあへぬーかりふしのゆめ
かねのこゑーそこともしらすーあけはてて

【天文年間百韻38巻】／x x〔しかそな
く〕／天文24(1555)年9月19日

のべのかりふし
野辺の仮臥

たひまくら
→旅枕

ゆめちをたとるーのへのかりふし
たひまくらーふかきもしらすーいつるよに

【住吉千句】／何田〔このはちる〕／大永
元(1521)年11月1日～14日

ねられぬとこはーのへのかりふし
たひまくらーゆめさへとひやーたえつらむ

【成立不詳・宗祇以前15巻】／何船〔き
りのはに〕／成立時不詳

たひのそら
→旅の空

ところさためぬーのへのかりふし
うきものとーいひしそまことーたひのそら

【明応年間百韻22巻】／十三仏名号〔な
かつきも〕／明応4(1495)年9月30日

みやこわすれぬーのへのかりふし
たちしよのーとりかまたなくーたひのそら

【宗碩関係2種】／宗碩連歌合／静嘉堂文
庫本／

ふで

ふでのあと
筆の跡

かすむあけのそほぶね
→霞む朱のそほ舟

たをりくるーさくらのみかはーふてのあと
かすみにくたすーあけのそほぶね

【天文廿四年梅千句】／何船〔つきにうめ〕
／天文24(1555)年正月7日

くらへみよーこすゑのはなにーふてのあと
かすむみきりのーあけのそほぶね

【毛利千句】／白何〔うすゆきの〕／文祿
3(1594)年5月12日～16日

ふね

あまおぶね
海人小舟

あらいそのなみ
→荒磯の浪

うらかけてーはるかによるのーあまをふね
もしほひさひしーあらいそのなみ

【永正年間百韻34巻】／何船〔かへるか
り〕／永正16(1519)年2月19日

あけくれをーうきてのみこそーあまをふね
よるとかへるとーあらいそのなみ

【大永年間百韻14巻】／山河〔いやまし
に〕／大永5(1525)年1月17日

わづかにみえるおきのしま
→わづかに見える沖の島

なみのうへにーなかきひくらすーあまをふね
わづかにみゆるーおきつしまやま

【池田千句】／何人〔はるのはな〕／永正
7(1510)年春以前<永正5年春>

ゆふくれはーつりにといつるーあまをふね
わづかにみゆるーおきのとほしま

【嘉吉年間百韻1巻】／何木〔たけのはに〕
／嘉吉3(1443)年10月23日

あまのつりぶね
海人の釣舟

あさぼらけ
→朝ぼらけ

はなれこしまにーあまのつりぶね
うなはらやーくもはれたるーあさぼらけ

【聖廟千句】／何船〔ねにそなく〕／明応
3(1494)年2月10日～12日

うらつたひするーあまのつりぶね
やまかすむーみきはのまつのーあさぼらけ

【天正四年万句70巻】／何衣〔うのはな
の〕／天正4(1576)年5月6日～7月19日

なみにしぐれる
→浪に時雨れる

おきにかかれるーあまのつりぶね
そことしもーなみにいりひやーしくるらむ

【宮島千句】／何木〔ほかにやは〕／天文
20(1551)年5月9日～11日

ゆふへにいてしーあまのつりふね
たかさとの一うらわのなみにーしくらむ

【那智箒／北野天満宮本】／永正十四年／

→^{まつたてる}松立てる

かつかつうかふーあまのつりふね
まつたてるーいそのかくれやーさとならむ

【成立不詳・宗養以前8巻】／山何〔ひとこゑや〕／成立時不詳

はるともしらしーあまのつりふね
まつたてるーかけにふちえのーうらさひて

【老葉／毛利本】／雑上／（文明17(1485)年7月23日頃）

いづるふなひと
出る舟人

→^{あけわたる}明け渡る

みなとのはるにーいつるふなひと
あけわたるーうらのかすみにーなみこえて

【宗廟関係9種】／百番連歌／赤木文庫本
／享徳2()年8月13日以後-寛正6年3月以前

こころやとむるーいつるふなひと
あけわたるーいりえのゆきのーとまやかた

【専順関係2種】／冬／応仁元(1467)年5月10日

おきのつりふね
沖の釣舟

→^{なみのうえ}浪の上

かすみはかりのーおきのつりふね
やまのははーほのかにたにもーなみのうへ

【永正十花千句】／何木〔ひかすたに〕／
永正13(1516)年3月11日～14日

のとかにうかふーおきのつりふね
あけほののーつきをひたせるーなみのうへ

【慶長年間百韻27巻】／何人〔わかくさの〕／慶長4(1599)年1月22日

かすみにうかふーおきのつりふね
とふとりもーそれかあらぬかーなみのうへ

【天正四年万句70巻】／一字露頭〔わかくさも〕／天正4(1576)年5月6日～7月19日

おきのふね
沖の舟

→^{うらのあさあけ}浦の朝明け

おきつふねーのとけきなみにーこききえて
つきになきたるーうらのあさあけ

【太神宮法楽千句】／薄何〔まきのはや〕
／長享2(1488)年7月

おきつふねーつきをともとやーいてぬらむ
あきかせさむきーうらのあさあけ

【文明十四年万句52巻】／堀何〔かるひとは〕／文明14(1482)年7月4日～9月14日

かわぞいぶね
川沿い舟

→^{きしのくれたけ}岸の真竹

さしいつるーかはそひふねにーかせふきぬ
すゑうちなひくーきしのくれたけ

【永原千句】／何袋〔たかそめし〕／明応9(1500)年7月17日

なみもなきーかはそひふねにーさをとりて
をのえてきらむーきしのくれたけ

【文明十四年万句52巻】／何色〔はるなつを〕／文明14(1482)年7月4日～9月14日

とまりぶね
泊まり舟

→^{おきのしらなみ}沖の白浪

うらかせもーあまけありとやーとまりふね
いくしほあひのーおきつしらなみ

【永祿年間百韻28巻】／何船〔たちならせ〕／永祿元(1558)年7月18日

よをこめてーつきにそいてしーとまりふね
かたへきりふるーおきつしらなみ

【文祿年間百韻12巻】／□□〔わかなつみし〕／文祿2(1593)年1月8日

→^{まつかぜのおと}松風の音

のとかなるーなみをまくらのーとまりふね
さそあらいそのーまつかぜのおと

【聖廟千句】／何人〔つきならし〕／明応3(1494)年2月10日～12日

さしよせてーいそのあたりにーとまりふね
まくらにちかきーまつかせのおと

【文明十四年万句52巻】／何紙【つゆは
けさ】／文明14(1482)年7月4日～9月
14日

とまりふねおとしていずち
泊まり舟音していずち

たびのくにのひと
→旅の国々の人

とまりふねーおとしていつちーわたるらむ
たれたひならぬーくにのひと

【東山千句】／一字露頭【つきみつ】／
永正15(1518)年8月10日～12日

とまりふねーおとしていつちーわかるらむ
あはれのたひやーくにのひと

【宗長関係8種】／興津宛／書陵部本／

なみのうきふね
浪の浮舟

てをらい
→手習い

よるへはいつくーなみのうきふね
てならひはーまたいとけなきーころそかし

【看聞日記紙背50巻】／何路【うのはな
の】／応永30(1423)年4月4日

ことにこきいるーなみのうきふね
てならひはーにはのをしへのーほとなるに

【看聞日記紙背50巻】／何人【かみにう
め】／応永31(1424)年2月25日

ふねのつなでなわ
舟の綱手縄

しおがまのうら
→塩釜の浦

ふねにすむーあまのしわさのーつなてなは
なみもたたならぬーしほかまのうら

【大永年間百韻14巻】／何船【うめかか
や】／大永3(1523)年1月9日

あさほらけーいそくやふねのーつなてなは
あまそかひなきーしほかまのうら

【園塵第二／統群書類従本】／雜／明応
4(1495)年早春

ふねひきのぼる
舟曳き上る

かえりみる
→帰る見る

ふねひきのぼるーそてそくれゆく
かへりみるーはなのこすゑはーしろたへに

【永禄元年花千句】／□□【よしさらは】
／永禄元(1558)年3月23日～25日

ふねひきのぼるーあとのはるかなり
かへりみるーみちのひとむらーうちかすみ

【元龜年間百韻6巻】／何人【とめゆけは】
／元龜3(1572)年9月28日

もろこしふね
唐土舟

まつらがた
→松浦瀉

もろこしふねのーなみのはけしさ
かへるひをーさらにいつとかーまつらかた

【天正四年万句70巻】／二字返音【かせ
やいろ】／天正4(1576)年5月6日～7月
19日

もろこしふねのーあとさきのうさ
いさりひにーゆふやみふかきーまつらかた

【春夢草／書陵部本】／雜／永正12(1516)
年、13年

よどのかわぶね
淀の川舟

むらさめ
→村雨

みつのにつなけーよどのかはふね
むらさめのーあとみかさやーまさるらむ

【文明十四年万句52巻】／一字露頭【ち
あきふる】／文明14(1482)年7月4日～
9月14日

ともにおくるるーよどのかはふね
むらさめのーまたふるましはーほしわひて

【文明十四年万句52巻】／何路【かみや
しる】／文明14(1482)年7月4日～9月
14日

ほとときす
→時鳥

なこりなかむるーよどのかはふね
なきすつるーつきはすむよのーほとときす

【永原千句】／何色【うつろはぬ】／明応
9(1500)年7月17日

はやあけすくるーよどのかはふね
ほとときすーたひたつあとにーやまみえて

【行助関係4種】／行助連歌／天理本／

さすかにはやき一よとのかはふね
ほととぎす一ひとこゑをたに一ききやらて

【基佐集／静嘉堂文庫本】／夏／永正
6(1509)年以前

わたしふね
渡し舟

→^{ましはにまじるつつしやまふき}真柴に混じる躑躅山吹

わたしふね一はなのゆききも一はるくれて
ましはにまじる一つつしやまふき

【大永四年月並千二百韻】／□□ [けふひ
くや]／月並千二百韻／大永4(1524)年5
月23日

やまもとの一はなをよそめの一わたしふね
ましはにまじる一つつしやまふき

【天文年間百韻38巻】／x x [ちりうせ
ぬ]／天文19(1550)年2月17日

ふみ

ふねのまきまき
文の巻々

→^{いかがしよう}如何しよう

なほおくふかき一ふみのまきまき
とひよるも一したしからぬはいかかせむ

【文禄年間百韻12巻】／□□ [はなのい
ろや]／文禄4(1595)年1月30日

あたらやきぬる一ふみのまきまき
すめらきの一さかなきよをは一いかかせむ

【寛文年間百韻22巻】／□□ [よもにう
つ]／寛文10(1670)年8月29日

ふゆ

ういふゆこもり
憂い冬籠り

→^{あさなあさな}朝な朝な

うきふゆこもり一いつかかかるらむ
しつかなる一なにはのうみの一あさなあさな

【伊勢千句】／山何 [みるめかれ]／大永
2(1522)年8月4日～8日

うきふゆこもり一なといそくらむ
ふくかせも一またさむからぬ一あさなあさな

【天正四年万句70巻】／何物 [きくやい
かに]／天正4(1576)年5月6日～7月
19日

ふゆがれ
冬枯れ

→^{わがおもいぐさ}我が思い草

ふゆかれに一かけなきのこそ一とほくみれ
いつまでのこる一わかおもひくさ

【永原千句】／唐何 [とりのねに]／明応
9(1500)年7月17日

むさしのも一かきりしらるる一ふゆかれに
いかなるたねそ一わかおもひくさ

【老葉／吉川本】／恋下／文明13(1481)年
夏頃

ふゆこもるころ
冬籠もる頃

→^{うめがはるまつ}梅が春待つ

ゆきよりさきと一ふゆこもるころ
はなにかつ一つほめるうめの一はるまちて

【住吉千句】／白何 [あられのみ]／大永
元(1521)年11月1日～14日

かせもあたらす一ふゆこもるころ
かめにさす一はなのうめかえ一はるまちて

【成立不詳・心敬以前14巻】／何袋 [ま
たしかし]／成立時不詳

ふる

あめがふる
雨がふる

→^{みわがさき}三輪崎

やとりもかなや一あめそふりくる
うちくもり一いりひをすゑに一みわかさき

【文明十四年万句52巻】／二字反音 [は
なはみな]／文明14(1482)年7月4日～
9月14日

はつせのかは一あめそふりくる
みわかさき一おつるあらしの一のをすきて

【専順関係2種】／雑／応仁元(1467)年
5月10日

いけふる
池ふる

あまのかくやま
→天の香具山

いけふりて一ほのかにうつる一よはのつき
あきいくあきそ一あまのかくやま

【成立不詳・宗祇以前15巻】/何人[みつさむし] /成立時不詳

なかむらむ一みきりははるのーいけふりて
みやちたえせぬ一あまのかくやま

【永正年間百韻34巻】/何人[みやまきに] /永正14(1517)年3月22日

しのにふるころ
篠にふるころ

ころもがひがたい
→衣が干難い

あしやのゆきのーしのにふるころ
たくひにも一わかころもては一ひかたくて

【文安雪千句】/何田[あとそある] /文安2(1445)年10月18日

ひとむらしくれーしのにふるころ
おりかくるーくものころもは一ひかたくて

【初瀬千句】/何水[うのはなの] /享徳元・2(1452)年、4月

つゆのふるみち
露のふる道

よわのつき
→夜半の月

わけはやたゆる一つゆのふるみち
ひとはいさ一みしはわすれぬ一よはのつき

【永正年間百韻34巻】/何船[うちなひき] /永正13(1516)年1月

ぬれてみなせのーつゆのふるみち
しらきくにーうつろひふる一よはのつき

【天文年間百韻38巻】/何人[にほへかつ] /天文13(1544)年1月29日

ふる
ふる

つちもるしらゆき
→積もる白雪

はつしもも一ふゆをまちてや一ふりぬらむ
けしきなからに一つもるしらゆき

【天正四年万句70巻】/朝何[なみよする] /天正4(1576)年5月6日~7月19日

いつのまにーかくまでさとは一ふりぬらむ
やまのはつかに一つもるしらゆき

【那智筆/北野天満宮本】/永正十二年/

きみだれのころ
→五月雨の頃

さくふちのーかかれはまつは一ふりはてて
かせもたえたる一さみたれのころ

【天文廿四年梅千句】/何木[つみそへよ] /天文24(1555)年正月7日

のきくつるーかさりのはたも一ふりはてて
ぬのおるいとーさみたれのころ

【心敬関係10種】/心玉集/静嘉堂文庫本

ふるきみやこのはる
古き都の春

うちかすむ
→うち霞む

ふるきみやこのーはるのはかなさ
しほかまや一けふりしなこりーうちかすみ

【明応年間百韻22巻】/山何[つきもひとに] /明応5(1496)年8月15日

ふるきみやこのーはなのひともと
つゆかかると一みちのしはくさーうちかすみ

【大永三年月並千三百韻】/□□[はなにつき] /月並千三百韻/大永3(1523)年3月23日

ふるでら
古寺

ともしひのもと
→灯の下の

ふるでらに一たのむはやしのーかけふかみ
かりねめさますーともしひのもと

【河越千句】/初何[ゆふつよ] /文明2(1470)年正月10~12日

かたらはむーともなみたのーふるでらに
ほとときすきつーともしひのもと

【行助関係4種】/行助句集/大阪天満宮本

ともしひのかげ
→灯の影

いりあひのーかねちかくなる一ふるでらに
ややくれそむるーともしひのかげ

【伊予千句】／何舟〔わきてみむ〕／天文
6(1537)年5月22日

よもすから一まつはかせふく一ふるてらに
つきこそまとの一としひのかけ

【延徳年間百韻16巻】／何船〔はるすき
ぬ〕／延徳4(1492)年4月8日

^{いりあひのかね}
→入相の鐘

ふるてらの一にははしもより一うつろひて
としもすゑののーいりあひのかね

【永原千句】／山河〔うすくこく〕／明応
9(1500)年7月17日

ふるてらの一みのりにとほき一みをわひて
こゑかすかなり一いりあひのかね

【文明年間百韻34巻】／□□〔はたはり
や〕／文明14(1482)年9月

^{ふるみやのうち}
古宮の内

^{つばくらめ}
→燕

すたれやつるる一ふるみやのうち
つはくらめ一いているのきのーひましけく

【寛正年間百韻20巻】／何人〔うめおく
る〕／寛正6(1465)年1月16日

はるをわすれぬ一ふるみやのうち
おなしすにーこころやかくる一つはくらめ

【行助関係4種】／行助句集／書陵部本／

^{みねのふるでら}
峰の古寺

^{はなさきく}
→花咲く

くものなかはのーみねのふるてら
まつたてるーはやしのおくにーはなさきて

【因幡千句】／何人〔みるたひに〕／文明
7(1475)年11月26日<~28日>

かさなるのきのーみねのふるてら
をはつせやーちるあともなほーはなさきて

【天正年間百韻57巻】／何木〔こころあ
てに〕／天正3(1575)年1月7日

^{ゆきがふりはれる}
雪がふり晴れる

^{さゆるゆうかぜ}
→寒ゆる夕風

まさこちにーまきるるゆきのーふりはれて
ふきあけののにーさゆるゆふかせ

【文安頃千句4巻】／何路〔やへひとへ〕

／

ふりはれてーつきにもなれるーゆきのかな
くさきのうへにーさゆるゆふかせ

【長祿三年千句11巻】／初何〔ふりはれ
て〕／長祿3(1459)年12月2日~5日

ふるさと

^{おもふふるさと}
思ふ古里

^{たびのそら}
→旅の空

ふなちにいとーおもふふるさと
なくさめとーつきはさやけきーたひのそら

【聖廟千句】／何木〔きえぬるか〕／明応
3(1494)年2月10日~12日

かへらむのみをーおもふふるさと
やとりをもーさためぬままのーたひのそら

【文祿二年千句10巻】／何船〔あめかし
た〕／文祿2(1593)年4月8日~10日

^{かえるふるさと}
帰る古里

^{はるぐれる}
→春暮れる

よもきになりぬーかへるふるさと
みつっこしーはなの□□□□ーはるくれて

【延徳年間百韻16巻】／何人〔うめいつ
こ〕／延徳元(1489)年9月27日

みちさへいつこーかへるふるさと
たまさかのーひとのゆききもーはるくれて

【大永年間百韻14巻】／名号〔なつころ
も〕／大永8(1528)年4月12日

^{たびごろも}
→旅衣

のくれやまくれーかへるふるさと
たひころもーはなのにしきをーかけにきて

【宗砌関係9種】／宗砌句／静嘉堂文庫本a

／

ひをふるまにーかへるふるさと
はるさめにーぬれぬれかりのーたひころも

【壁草／大阪天満宮文庫本】／春／永正
2(1505)年8月23日以後同3年3月以前

【文明年間百韻34巻】／何路[かせやく
も]／文明4(1472)年10月26日

すめるふるさと
住める古里

→^{おも}思

なほあらましと一すめるふるさと
たひゆくや一あとをいかにと一おもふらむ

【表佐千句】／唐何[つきはたた]／文明
8(1476)年3月6日<~8日>

あはれかくても一すめるふるさと
つれもなき一わかみやまつも一おもふらむ

【大永四年月並千二百韻】／□□[そよと
しも]／月並千二百韻／大永4(1524)年10
月23日

つゆのふるさと
露のふる里

→^{あきかぜ}秋風

かたるにおつる一つゆのふるさと
あきかせの一ならのかれはに一そよめきて

【太神宮法楽千句】／何船[とこよにや]
／長享2(1488)年7月

たひねさそなの一つゆのふるさと
あきかせの一ふきいてぬれは一うつころも

【毛利千句】／初何[よととにも]／文禄
3(1594)年5月12日~16日

とおきふるさと
遠き古里

→^{たびごろも}旅衣

さていくひかす一とほきふるさと
たひころも一せきちかさなる一あつまかた

【看聞日記紙背50巻】／何路[ひととせ
に]／応永32(1426)年12月11日

かへらむほとの一とほきふるさと
あめののち一いそきてゆかむ一たひころも

【成立不詳・心敬以前14巻】／朝何[し
たみつに]／成立時不詳

はるのふるさと
春の古里

→^{ながきひ}長き日

とはれむものか一はるのふるさと
あめのうち一ゆふへもわかす一なかきひに

さひしくなりぬ一はるのふるさと
なかきひに一なととひすてて一かへるらむ

【延徳年間百韻16巻】／何人[まつみよ
と]／延徳4(1492)年2月8日

ふるさと
古里

→^{たひのかなしき}旅の悲しさ

うみかはを一へたてておもふ一ふるさとに
とほくもなれる一たひのかなしき

【明応年間百韻22巻】／何船[はなそは
る]／明応2(1493)年3月25日

ふるさとに一しかしとかりや一かへるらむ
みはいつまでの一たひのかなしき

【成立不詳・宗祇以前15巻】／x x [ち
れはいさ]／成立時不詳

→^{はなのひとえだ}花の一枝

ふるさとに一ことつてやらむ一ひともかな
かへしてたをる一はなのひとえだ

【熊野千句】／何船[のとかなる]／文正
元(1466)年3月以前

またよとは一かはすも□たの一ふるさとに
みれはくちきの一はなのひとえだ

【天正四年万句70巻】／何物[ほととき
す]／天正4(1576)年5月6日~7月19日

→^{おもひやるにもそで}思いやるにも袖

ふるさとの一ひといかならむ一たひのみち
おもひやるにも一そてそしをるる

【因幡千句】／何船[そらやゆき]／文明
7(1475)年11月26日<~28日>

ふるさとの一あきはいつしか一□□ぬらむ
おもひやるにも一そてそぬれける

【天正四年万句70巻】／何木[さくはな
の]／天正4(1576)年5月6日~7月19日

ふるさとのあき
古里の秋

→^{かたみ}形見

とへはなみたのーふるさとのあき
つきをのみーこころみしよのーかたみにて

【大永三年月並千三百韻】／□□〔うめか
かや〕／月並千三百韻／大永3(1523)年2
月23日

いつかへりこむーふるさとのあき
わすれしのーつきのみひとのーかたみにて

【新撰菟玖波集／実隆本】／恋下／明応
4(1495)年9月26日

ふるさとのつき
古里の月

くさまくら
→草枕

すむもあはれはーふるさとのつき
あかつきをーゆめのなかはのーくさまくら

【天文年間百韻38巻】／何木〔やまかけ
て〕／天文21(1552)年3月11日

そてにかたしくーふるさとのつき
あしひきのーやまちくらしてーくさまくら

【永禄年間百韻28巻】／何路〔きえしそ
の〕／永禄7(1564)年1月22日

なくむし
→鳴く虫

なみたにむかふーふるさとのつき
なくむしもーしるへきものをーわかおもひ

【長享年間百韻6巻】／何路〔さみたれは〕
／長享3(1489)年5月11日

ゆくへなほうきーふるさとのつき
なくむしもーなれしともをやーしたふらむ

【文明十四年万句52巻】／山何〔あきの
はな〕／文明14(1482)年7月4日～9月
14日

ふるさとひと
古里人

たひのそら
→旅の空

ふるさとひとにーゆくへきかせし
ここにうらみーかしこになけくーたひのそら

【新撰菟玖波集／実隆本】／驛旅上／明応
4(1495)年9月26日

ふるさとひとにーあへるうれしさ
ゆくくととーなみたはひとりーたひのそら

【壁草／大阪天満宮文庫本】／旅／永正
2(1505)年8月23日以後同3年3月以前

へだたる

へだたる
隔たる

まがきである
→離である

うくつらきーわかなかやまのーへたたりて
くもやゆふへのーまかきなるらむ

【永享年間百韻4巻】／何木〔ささのはの〕
／永享6(1434)年6月18日

うくひすのーこゑもみきりにーへたたりて
いくへかすみのーまかきなるらむ

【慶長年間百韻27巻】／□□〔ちひろあ
る〕／慶長4(1599)年5月10日

ほし

さやかなほし
さやかな星

ももしきのにわ
→百敷の庭

さやかなるーほしやまよひをーてらすらむ
つかさつかさにーももしきのには

【石山四吟千句】／青何〔つきやふね〕／
天文24(1555)年8月15日～19日

さやかなるーほしのひかりのーうすくもり
はるあらたまるーももしきのには

【慶長年間百韻27巻】／□□〔あらしに
も〕／裏白／慶長5(1600)年1月3日

ほしをいただく
星を頂く

もののおががとをきる
→武士が兜着る

ほしをいたたくーきぬきぬのそら
もののふはーとののほろかけーかふときて

【宗叟関係9種】／連歌百句／小松天満宮本
／

ほしをいたたくーたそかれのとき
おのかなをーなるものふーかふときて

【心敬関係10種】／心玉集／静嘉堂文庫本
／

ほそい

みちがほそい
道が細い

はしのひとすじ
→橋の一筋

さしおほふーいはゐのものとーみちほそみ
ひとやはかよふーはしのひとすち

【成立不詳・宗長以前15巻】/xx[さ
みたれや] /成立時不詳

おしねもるーたのものにかよふーみちほそみ
しもうすこほるーはしのひとすち

【心敬関係10種】/芝草内連歌合/天理本
/

ほたる

あきのほたる
秋の螢

はしりするそでひややか
→端居する袖冷ややか

あきのほたるのーほのかなるかけ
はしるするーそてひややかにーつきいてて

【飯盛千句】/一字露頭[つきのこる] /
永禄4(1561)年5月27日~29日

あきのほたるのーいつちきゆらむ
はしるするーそてひややかにーあけはなれ

【慶長年間百韻27巻】/□□[こからし
も] /慶長3(1598)年10月19日

とぶほたる
飛ぶ螢

かぜのすずしさ
→風の涼しさ

はるはるとーかはのほりをーとふほたる
なかれふきくるーかぜのすずしさ

【元龜二年千句】/山何[はなのかの] /
元龜2(1571)年3月5日

ゆふなきにーきえてはもえてーとふほたる
むらくさたかくーかぜのすずしさ

【永正年間百韻34巻】/山何[まちこし
や] /永正12(1515)年11月11日

かけとほくーあしやのさとにーとふほたる
つきにくれゆくーかぜのすずしさ

【成立不詳・宗長以前15巻】/xx[さ
みたれや] /成立時不詳

そでのすずしさ
→袖の涼しさ

むしのなくーかたへはくれてーとふほたる
なつをわするるーそでのすずしさ

【皇学館文庫本千句】/□□[きてかへる]
/永禄6(1563)年11月18日以前

くれぬれはーみたれあひつつーとふほたる
やすらひいつるーそでのすずしさ

【天正年間百韻57巻】/□□[すたれま
け] /天正15(1587)年1月10日

ほたるとうくれ
螢訪う暮れ

つきはまだ
→月はまだ

かはかみよりやーほたるとふくれ
つきはまたーいてぬひかりのーみねこえて

【永禄年間百韻28巻】/何路[なつくさ
の] /永禄9(1566)年5月9日

たのものはらにーほたるとふくれ
つきはまたーおそき□やまのーあめ□□□

【寛永年間百韻15巻】/□□[まつにこ
まつ] /裏白/寛永19(1642)年1月3日

ほたるとぶそら
螢飛ぶ空

あきがくる
→秋が来る

たとるみちをやーほたるとぶそら
うすものーそてにおほゆるーあきのきて

【天文廿四年梅千句】/二字反音[くれな
ゐの] /天文24(1555)年正月7日

かせのよるよるーほたるとぶそら
あしかきのーすまひはかなきーあきのきて

【永正年間百韻34巻】/何船[うちなひ
き] /永正13(1516)年1月

みだれてとぶほたる
乱れて飛ぶ螢

みずのすずしさ
→水の涼しさ

とふほたるーつゆにみたれてーくるるのに
ひとつもかけするーみつのすずしさ

【葉守千句】/初何[わかこゑを] /長享
元(1487)年10月9日<~11日>

かたしきのーそてにみたれてーとふほたる
なかるおともーみつのすずしさ

【石山四吟千句】/青何[つきやふね] /
天文24(1555)年8月15日~19日

ほとけ

ほとけとなえる
仏唱える

→籠り居る

よをしるひとや一ほとけとなふる
こもりゐて一むすふもなつの一ものならし

【皇学館文庫本千句】/□□ [たきいつこ]

/永禄6(1563)年11月18日以前

ほとけとなふる一みこそふりぬれ
ひとしれぬ一かたやまてらに一こもりゐて

【行助関係4種】/行助連歌/天理本/

ほととぎす

きくほととぎす
聞く時鳥

→有明の空

ききあへぬ一ゆめのたたちの一ほととぎす
のこるほとなき一ありあけのそら

【文安月千句】/何鳥 [なにめてて] /文

安2(1445)年8月15日

さみたれに一またいつきかむ一ほととぎす
ねぬよほとふる一ありあけのそら

【文明年間百韻34巻】/xx [つきをか

せ] /文明12(1480)年8月

なくほととぎす
鳴く時鳥

→有明の月

やまよりやまに一なくほととぎす
ありあけの一つきはくもまに一かけみえて

【天正年間百韻57巻】/何路 [かすむよ

の] /天正6(1578)年2月18日

くさのまくらに一なくほととぎす
ありあけの一つきをなこりの一よはのゆめ

【天正年間百韻57巻】/□□ [ともなし

に] /天正18(1590)年11月21日

→月是有明

ほととぎす一はなのなかはに一きてもなけ
つきはありあけの一おほろなるころ

【弘治三年春雪千句】/何衣 [なくきしの]

/弘治3(1557)年正月7日~9日

たかかたの一あめになくらむ一ほととぎす
つきはありあけの一なつよのそら

【那智庵/北野天満宮本】/永正十四年/

→花盛り

まくらのくもに一なくほととぎす
のをひろみ一やとかるかけの一はなさかり

【紹巴亡父追善千句】/玉何 [はるよた]

/天文24(1555)年3月26日~晦日

なくほととぎす一ほのかなるそら
くもきを一うつむはかりの一はなさかり

【弘治三年春雪千句】/初何 [けさみれは]

/弘治3(1557)年正月7日~9日

→雨注ぎ

はるはよのまを一なくほととぎす
やよひはた一けふにつきぬ一あまそそき

【嵯峨千句】/山何 [いけみつの] / (元

龜4) 天正元(1573)年正月9日~11日

くもよりをちに一なくほととぎす
はなにそへ一たそかれをしき一あまそそき

【月村抜句/書陵部本】/永正十四年/

なけほととぎす
鳴け時鳥

→雨過ぎる

なけほととぎす一よをまたすとも
くもふかき一なつやまかけに一あめすきて

【看聞日記紙背50巻】/何人 [うのはな

は] /永享9(1437)年4月25日

つきかたふきぬ一なけほととぎす
たちいつる一くさのいほりの一あめすきて

【永禄年間百韻28巻】/何木 [きりのは

の] /永禄5(1562)年7月4日

→雲迷う

ひもゆふかけに一なけほととぎす
くもまよふ一かたはあめにや一むかふらむ

【因幡千句】／何草〔ふるゆきは〕／文明
7(1475)年11月26日<~28日>

なけほととぎすーすきのひとむら
くもまよふーこすゑのうへにーあめみえて

【那智筆／北野天満宮本】／永正十四年／

みじかよ
→短夜

なけほととぎすーひとこゑの□□
ににゆくーこころのつきのーみしかよに

【成立不詳・心敬以前14巻】／何船〔は
るはまた〕／成立時不詳

かかるをりふしーなけほととぎす
うたたねのーゆめのうきはしーみしかよに

【春夢草／書陵部本】／夏／永正12(1516)
年、13年

ほととぎす
時鳥

あかつきのそら
→暁の空

ほととぎすーくもをしはしのーやとりにて
くさのまぐらのーあかつきのそら

【文明十四年万句52巻】／玉何〔ゆきな
らは〕／文明14(1482)年7月4日~9月
14日

ひとこゑとーききしはかへるーほととぎす
われもたひよそーあかつきのそら

【文明十四年万句52巻】／何木〔すゑの
つゆ〕／文明14(1482)年7月4日~9月
14日

あけほのそら
→曙の空

つきのこるーかたのやゆくへーほととぎす
さみたれすくるーあけほののそら

【飯盛千句】／一字露頭〔つきのこる〕／
永禄4(1561)年5月27日~29日

ほととぎすーなくかたちかきーはるのくれ
あめになりたるーあけほののそら

【文禄年間百韻12巻】／□□〔たかには
も〕／文禄2(1593)年5月27日

あけやすいころ
→明けやすい頃

あつまちやーかりねにききしーほととぎす
くさのまぐらもーあけやすきころ

【浜宮千句】／□□〔いつのまに〕／

ほととぎすーいつくのさともーまたるへし
そらゆくつきのーあけやすきころ

【寛正年間百韻20巻】／何人〔とほくき
て〕／寛正6(1465)年3月6日

あめのきびしき
→雨の寂しさ

ひとこゑはーつれなくつらきーほととぎす
すきのこすゑのーあめのさひしさ

【永正年間百韻34巻】／何色〔うゑてみ
ぬ〕／永正6(1509)年間8月29日

やよひこそーなへてまつなれーほととぎす
このさとのみかーあめのさひしさ

【弘治年間百韻8巻】／何人〔うのはなの〕
／弘治2(1556)年4月27日

あめのつれつれ
→雨の徒然

ひとこゑをーいくつてならしーほととぎす
かたれはかたるーあめのつれつれ

【宮島千句】／何路〔つきやけさ〕／天文
20(1551)年5月9日~11日

ほととぎすーゆふへのはるにーおとつれて
かすむいほりのーあめのつれつれ

【毛利千句】／何路〔はなにふく〕／文禄
3(1594)年5月12日~16日

つきのありあけのころ
→月の有明の頃

まちまちてーこゑめつらしきーほととぎす
みやこのつきのーありあけのころ

【称名院追善千句】／白何〔かねのこゑ〕
／永禄6(1563)年12月14日~18日

ほととぎすーみやこのそらにーききそめて
つきこそあらめーありあけのころ

【天文年間百韻38巻】／何人〔かりなき
て〕／天文21(1552)年9月2日

ありあけのそら
→有明の空

しのひねも一なかはやよひの一ほととぎす
かすみにひとり一ありあけのそら

【永正年間百韻34巻】／何船[かへるか
り]／永正16(1519)年2月19日

うきなみた一いさくらへてむ一ほととぎす
つれなきをまつ一ありあけのそら

【寛文年間百韻22巻】／□□[たれもき
け]／寛文13(1673)年6月29日

ありあけのつき
→有明の月

やよひより一まちこそならへ一ほととぎす
はなのくもまに一ありあけのつき

【元龜二年千句】／朝何[あたにちる]／
元龜2(1571)年3月5日

またれては一よをもかさねよ一ほととぎす
つれなくのこる一ありあけのつき

【菟玖波集／広島大学本】／夏／文和
5(1356)年冬～翌年の春

いけのふちなみ
→池の藤浪

ほととぎす一はるくれぬとや一いそくらむ
こすゑににほふ一いけのふちなみ

【太神宮法楽千句】／玉何[あきとほし]
／長享2(1488)年7月

ほととぎす一むかしにかへる一ねをなきて
うゑしこかけの一いけのふちなみ

【永祿年間百韻28巻】／何路[はなにか
り]／永祿3(1560)年2月25日

おもかけにたつ
→面影に立つ

ひとこゑの一なこりたになき一ほととぎす
ゆめのゆくゑは一おもかけにたつ

【太神宮法楽千句】／何木[いつそめし]
／長享2(1488)年7月

あまひこや一こすゑのはるの一ほととぎす
かすみそにはの一おもかけにたつ

【皇学館文庫本千句】／□□[まつかせに]
／永祿6(1563)年11月18日以前

かたしきのそで
→片敷の袖

はるのよも一またぬにはあらぬ一ほととぎす
のはわかくさを一かたしきのそで

【永祿元年花千句】／□□[あたりまで]
／永祿元(1558)年3月23日～25日

ほととぎす一なきていつくの一そらならむ
あやめにかをる一かたしきのそで

【大永四年月並千二百韻】／□□[しもや
ひぬ]／月並千二百韻／大永4(1524)年9
月23日

かえるさのみち
→帰るさの道

ほととぎす一たれかいそかぬ一こゑならむ
わかおもふかたの一かへるさのみち

【紹巴亡父追善千句】／何船[すみそめの]
／天文24(1555)年3月26日～晦日

はるこそと一はつねまたるれ一ほととぎす
みなみまつりの一かへるさのみち

【毛利千句】／一字露頭[なつのひも]／
文祿3(1594)年5月12日～16日

かおるたちばな
→香る橘

ひとこゑを一みやこのそらの一ほととぎす
たかのきはより一かをるたちはな

【毛利千句】／何船[みてもおもふ]／文
祿3(1594)年5月12日～16日

ほととぎす一さそはぬあめの一くものまに
ぬるとしもなく一かをるたちはな

【永正年間百韻34巻】／何木[いろはふ
ちの]／永正8(1511)年4月6日

ひとこゑや一このまのつきの一ほととぎす
ゆめのなこりに一かをるたちはな

【大永三年月並千三百韻】／□□[ひとこ
ゑや]／月並千三百韻／大永3(1523)年4
月23日

くきのいお
→草の庵

さひしきは一とほくなりぬる一ほととぎす
くさのいほりに一きくはむらさめ

【文明十四年万句52巻】／村何[あきか
せに]／文明14(1482)年7月4日～9
月14日

ひとつても一たたにおもはし一ほととぎす
くさのいほりの一あめのさよなか

【天文年間百韻38巻】／山何〔ふむあと
も〕／天文13(1544)年10月15日

さみたれの一はれままちいてし一ほととぎす
くさのいほりの一とさしひらける

【天正年間百韻57巻】／何船〔すまし
み〕／天正13(1585)年間8月12日

なつきても一いかにつれなき一ほととぎす
くさのいほりの一ゆふへあけほの

【文禄年間百韻12巻】／□□〔わかたけ
を〕／文禄2(1593)年5月20日

→^{くものおちかた}雲の遠方

ほととぎす一よそにのきはの一くれもうし
やまほのかなる一くものをちかた

【表佐千句】／何木〔くれかたき〕／文明
8(1476)年3月6日<~8日>

しのひねに一こゑををしむか一ほととぎす
わかはになひく一くものをちかた

【天正四年万句70巻】／何文〔しのひ
ねに〕／天正4(1576)年5月6日~7月19日

→^{きみだれのころ}五月雨の頃

たちはなの一ちきりわするな一ほととぎす
うちのこしまの一さみたれのころ

【享徳二年千句】／三字中略〔はらへかせ〕
／享徳2(1453)年8月11日~13日

おもひいてて一ふるきみやこの一ほととぎす
くらしかたくも一さみたれのころ

【住吉千句】／山何〔そめさらは〕／大永
元(1521)年11月1日~14日

やまとほく一こゑまきれゆく一ほととぎす
あとさきみえぬ一さみたれのころ

【文明十四年万句52巻】／何船〔みつと
りか〕／文明14(1482)年7月4日~9月
14日

やすらはて一いつちゆくらむ一ほととぎす
ひとりわひぬる一さみたれのころ

【文明十五年千句11巻】／何舟〔かけた
かし〕／文明15(1483)年*月*日~3月2
日

やまもりや一なれてきくらむ一ほととぎす
かはのむかひの一さみたれのころ

【竹林抄／新古典文学大系本】／夏／文明
8(1476)年5月頃

おのつから一なくねまれなる一ほととぎす
おもへはひさし一さみたれのころ

【園塵第二／統群書類従本】／夏／明応
4(1495)年早春

→^{しげるこすゑ}茂る梢

よこくもの一わかれてとほき一ほととぎす
しけるこすゑの一つきかすかなり

【永禄元年花千句】／□□〔みるまに〕
／永禄元(1558)年3月23日~25日

ほととぎす一なけはみしよの一つきもなし
しけるこすゑの一あめはるるやま

【天文年間百韻38巻】／何路〔ほととぎ
す〕／天文24(1555)年4月10日

→^{すぎのこすゑ}杉の梢

ひとこゑは一つれなくつらき一ほととぎす
すきのこすゑの一あめのさひしき

【永正年間百韻34巻】／何色〔うゑてみ
ぬ〕／永正6(1509)年間8月29日

なやここに一とほきやまたの一ほととぎす
すきのこすゑの一みしかよのつき

【天文年間百韻38巻】／何人〔なやここ
に〕／天文4(1535)年5月1日

→^{すぎむらさめ}過ぎる村雨

あかしかた一ふねとめられし一ほととぎす
なみよりそも一すくるむらさめ

【天文年間百韻38巻】／何人〔かすむよ
は〕／天文23(1554)年3月26日

うたたねの一まくらやさそふ一ほととぎす
こすのとちかみ一すくるむらさめ

【天正年間百韻 5 7 卷】／何人 [みれはみし] / 天正 12(1584) 年 9 月 13 日

ほととぎす—まつよのしはし—のこれかし
かりねのやとに—すくるむらさめ

【文明十二年千句 8 卷】／何路 [よものなつ] / 文明 12(1480) 年 4 月 10 日～*日

ほととぎす—つれなきよひの—そらたのめ
くもたちかへり—すくるむらさめ

【文明十五年千句 1 1 卷】／何路 [あさつゆの] / 文明 15(1483) 年 *月 *日～3 月 2 日

→^{そそきすてる}注ぎ捨てる

はるなから—なきいてけりな—ほととぎす
そそきすてたる—あまりおとする

【天正年間百韻 5 7 卷】／x x [わけゆかは] / 天正 4(1576) 年 8 月 19 日

ひとこゑを—まつにつれなき—ほととぎす
そそきすてたる—あめのうきくも

【天正年間百韻 5 7 卷】／何船 [あをやきは] / 天正 13(1585) 年 1 月 28 日

ひとこゑの—なこりもあらめ—ほととぎす
そそきすてたる—むらさめのそら

【寛文年間百韻 2 2 卷】／□□ [なつはた] / 寛文 13(1673) 年 6 月 1 日

→^{いまおとつきがなむく}今際と月が傾く

しのひねを—かすみにもらせ—ほととぎす
いまはとまでは—つきそかたふく

【文安月千句】／何水 [つきぬなは] / 文安 2(1445) 年 8 月 15 日

みしかよに—こゑなをしみそ—ほととぎす
なこりいまはと—つきそかたふく

【文明年間百韻 3 4 卷】／何人 [よるはつき] / 文明 18(1486) 年 2 月 6 日

→^{つきのさびしさ}月の寂しさ

とほやまの—くもをわかる—ほととぎす
あかつきかたの—つきのさびしさ

【聖廟千句】／二字返音 [よにひととき] / 明応 3(1494) 年 2 月 10 日～12 日

はつこゑを—やとにまたる—ほととぎす
うちむかひぬる—つきのさびしさ

【慶長年間百韻 2 7 卷】／□□ [つゆにみ] / 慶長 9(1604) 年 6 月 28 日

→^{におうちばな}句う橘

さとわけて—ここにやすらへ—ほととぎす
ひとときもとほし—にほふたちはな

【文明年間百韻 3 4 卷】／□□ [はたはりや] / 文明 14(1482) 年 9 月

ひとこゑや—はやましけやま—ほととぎす
したかせとほく—にほふたちはな

【天文年間百韻 3 8 卷】／何路 [ひとこゑや] / 天文 14(1545) 年 5 月 8 日

ほととぎす—なれもたひなる—しのひねに
さきそめつつも—にほふたちはな

【天和年間百韻 2 卷】／□□ [つきになほ] / 天和 2(1682) 年 3 月 27 日

→^{のきのたちばな}軒の橘

またてみよ—まつにはつらき—ほととぎす
とはさらめやの—のきのたちはな

【宮島千句】／玉何 [はるといへは] / 天文 20(1551) 年 5 月 9 日～11 日

ことつてむ—こたへもかもな—ほととぎす
むかしをしふ—のきのたちはな

【称名院追善千句】／山何 [ことつてむ] / 永禄 6(1563) 年 12 月 14 日～18 日

をちかへり—なかはみやこそ—ほととぎす
みすはみとりの—のきのたちはな

【明応年間百韻 2 2 卷】／何人 [あさかすみ] / 明応 4(1495) 年 1 月 6 日

なくやいつれ—こそねさめの—ほととぎす
かけをしふの—のきのたちはな

【天文年間百韻 3 8 卷】／山何 [なくやいつれ] / 天文 24(1555) 年 5 月 14 日

→^{のちのたちばな}軒の橘

ほととぎすーしのふのやまにーたへわひて
みるひとやたれーのきのたちはな

【壁草／大阪天満宮文庫本】／夏／永正
2(1505)年8月23日以後同3年3月以前

おもかけはーきのふのはなにーほととぎす
むかしおほゆるーのきのたちはな

【壁草／大阪天満宮文庫本】／夏／永正
2(1505)年8月23日以後同3年3月以前

はなたちばな
→花橘

むらさめのーそらそとたのむーほととぎす
はなたちはなにーつゆかをるやと

【新撰菟玖波集／実隆本】／夏／明応
4(1495)年9月26日

なのらぬはーしふねきりやうかーほととぎす
はなたちはなにーまとふくちなは

【正章千句11巻】／正章千句 第四[な
のらぬは]／正保4(1647)年11月

ほととぎすーつれなきうちにーまたやねむ
はなたちはなのーうつろへるくれ

【河越千句】／白何[はるかせに]／文明
2(1470)年正月10～12日

なきすつるーつきはすむよのーほととぎす
はなたちはなのーつゆにほふやと

【永原千句】／何色[うつろはぬ]／明応
9(1500)年7月17日

きのふかもーなきつとききしーほととぎす
はなたちはなのーあめかをるそら

【天文十八年梅千句】／何牆[しつくさへ]
／天文18(1549)年正月11日

こころとやーなくねをしまぬーほととぎす
はなたちはなのーちりまかふさと

【大永四年月並千二百韻】／□□[へたつ
なよ]／月並千二百韻／大永4(1524)年3
月23日

ききふりてーなほあかなくにーほととぎす
はなたちはなのーやとをわするな

【菟玖波集／広島大学本】／夏／文和
5(1356)年冬～翌年の春

ふねさしとむる
→舟差し止める

ほととぎすーこゑさたかにもーなきすてて
ふねさしとむるーよとのかはつら

【天正年間百韻57巻】／初何[はるたち
て]／裏白／天正12(1584)年1月3日

つゆのまのーやとりにきなけーほととぎす
ふねさしとむるーいそやまのかけ

【天正四年万句70巻】／竹何[まつほと
や]／天正4(1576)年5月6日～7月19日

みじかよのそら
→短夜の空

たひひとのーやとをはしのへーほととぎす
かりねのつきのーみしかよのそら

【天正年間百韻57巻】／□□[たひひと
の]／天正17(1589)年4月7日

まつとしるーたよりもかもなーほととぎす
むらさめすくるーみしかよのそら

【文禄二年千句10巻】／山何[まつとし
る]／文禄2(1593)年4月8日～10日

むらさめすぎる
→村雨過ぎる

ほととぎすーちこゑはあきのーみやまかな
むらさめすくるーまきのしたつゆ

【文明十四年万句52巻】／何国[ほとと
ぎす]／文明14(1482)年7月4日～9月
14日

まつとしるーたよりもかもなーほととぎす
むらさめすくるーみしかよのそら

【文禄二年千句10巻】／山何[まつとし
る]／文禄2(1593)年4月8日～10日

むらさめがふる
→村雨がふる

ほととぎすーまてはつれなきーなつによに
ころもてしめりーむらさめそふる

【顕証院会千句】／何田[あきくさは]／
宝徳元(1449)年8月19日～21日

はなのゆくへーおもひしをれはーほととぎす
かはみつとほくーむらさめそふる

【浜宮千句】／□□[ちりうせぬ]／

→^{むらさめのくも}村雨の雲

まつかたにーこのみねこえよーほととぎす
やまをはなれぬーむらさめのくも

【三島千句】／何衣〔はなにつき〕／文明
3(1471)年3月21日～23日

なこりをもーおもはてゆくかーほととぎす
のきのとやまのーむらさめのくも

【天文十八年梅千句】／一字露頭〔にはを
はるに〕／天文18(1549)年正月11日

ほととぎすーたよりすくすなーとはかりに
やすらふそらはーむらさめのくも

【皇学館文庫本千句】／□□〔はなさけは〕
／永禄6(1563)年11月18日以前

たかかたにーききはそめけむーほととぎす
けしきはかりのーむらさめのくも

【天正年間百韻57巻】／何路〔いろもか
も〕／裏白／天正14(1586)年1月3日

→^{むらさめのそら}村雨の空

ほととぎすーわかまつほとやーしらさらむ
やかてはれぬるーむらさめのそら

【文明年間百韻34巻】／何船〔とふひと
に〕／文明13(1481)年2月24日

なきわたれーみねのあなたのーほととぎす
くものゆくへやーむらさめのそら

【寛文年間百韻22巻】／□□〔むかしお
もふ〕／寛文10(1670)年2月7日

ひとこゑのーなこりもあらめーほととぎす
そそきすてたるーむらさめのそら

【寛文年間百韻22巻】／□□〔なつはた
た〕／寛文13(1673)年6月1日

→^{やまのゆうぐれのそら}山の夕暮れの空

しるらめやーおもふむかしをーほととぎす
やますみふかきーゆふぐれのそら

【永正年間百韻34巻】／何路〔あきにか
せ〕／永正8(1511)年7月14日

こととふはーこころやはなきーほととぎす
まちかねやまのーゆふぐれのそら

【永正年間百韻34巻】／山河〔たちはな
に〕／永正18(1521)年5月7日

→^{ながめるゆうぐれのそら}眺める夕暮れの空

ほととぎすーまたれぬはるのーつきいてて
なかめをうつすーゆふぐれのそら

【弘治年間百韻8巻】／何路〔ゆくみつや〕
／弘治2(1556)年3月24日

こころあらむーあたりにきなけーほととぎす
なかめなれたるーゆふぐれのそら

【永禄年間百韻28巻】／何人〔つきな
か〕／永禄5(1562)年8月11日

→^{ゆめかうつつか}夢か現か

ましてしはしーみねこすくものーほととぎす
さむるまくらはーゆめかうつつか

【飯盛千句】／何衣〔つきいてて〕／永禄
4(1561)年5月27日～29日

いかにねてーこよひはさかむーほととぎす
きのふをこそーゆめかうつつか

【寛正年間百韻20巻】／唐何〔せみの
の〕／寛正4(1463)年6月23日

わかこころーありあけかたのーほととぎす
ゆめかうつつかーいにしへのひと

【大永年間百韻1巻】／何路〔いつのよも〕
／大永5(1525)年4月15日

まちてのみーなつをおくりしーほととぎす
ゆめかうつつかーさめてわひしき

【天正四年万句70巻】／何水〔むしの
ねや〕／天正4(1576)年5月6日～7月19日

→^{おちのとおやま}遠方の遠山

ふなちにもーきくひはあれなーほととぎす
むらさめわたるーをちのとほやま

【享徳年間百韻4巻】／何路〔さくふちの〕
／享徳2(1453)年3月15日

ほのかにてーうちすきましやーほととぎす
なかめおよはぬーをちのとほやま

【永正年間百韻34巻】／何人〔みちしあ
れや〕／永正2(1505)年1月1日

→^{くさのまくらのあかつき}草の枕の暁

ほととぎす—くもをしはしの一やとりにて
くさのまくらの—あかつきのそら

【文明十四年万句5 2巻】／玉何〔ゆきな
らは〕／文明14(1482)年7月4日～9月
14日

ほととぎす—なれもたひとや—まよふらむ
くさのまくらの—あめのあかつき

【那智筆／北野天満宮本】／永正十二年／

→^{くらはしやま}倉橋山

きかはやな—ひとこゑなりと—ほととぎす
くらはしやまに—まよふさみたれ

【文明十四年万句5 2巻】／錦何〔つきひ
とつ〕／文明14(1482)年7月4日～9月
14日

ほととぎす—とへははるこそ—わかれけれ
くらはしやまに—さくらちるころ

【名所句集／静嘉堂文庫本】／春／（大永
前後）

つきをみは—おもかけにせむ—ほととぎす
くらはしやまの—あきのむらさめ

【成立不詳・心敬以前1 4巻】／何路〔か
すみかは〕／成立時不詳

ほととぎす—□□ははるこそ—わかれけれ
くらはしやまの—さくらちるころ

【宗砌関係9種】／宗砌発句並付句抜書／
小松天満宮本／

→^{こすゑのおしのたそがれ}梢の藤の黄昏

ほととぎす—もよほされてや—すきつらむ
こすゑのふちの—はるのたそかれ

【伊勢千句】／三字中略〔うめさきて〕／
大永2(1522)年8月4日～8日

ほととぎす—それならぬかと—なきすてて
こすゑのふちの—たそかれのいろ

【壁草／大阪天満宮文庫本】／春／永正
2(1505)年8月23日以後同3年3月以前

→^{まくらくるしい}枕苦しい

みしかよの—そらにつれなき—ほととぎす
まくらくるしき—このとまりふね

【文禄二年千句1 0巻】／何木〔うすきり
や〕／文禄2(1593)年4月8日～10日

ほととぎす—こゑをなきけつ—すきむらに
まくらくるしき—なつのよからす

【春夢草／書陵部本】／夏／永正12(1516)
年、13年

ほととぎすなく
時鳥鳴く

→^{なる}なる

ほととぎすなく—くものをちかた
みしかよも—たれかねさめに—なりぬらむ

【文明十四年万句5 2巻】／朝何〔ひにそ
ひて〕／文明14(1482)年7月4日～9月
14日

ほととぎすなく—あとをこそみれ
むかしたか—うゑきのもりと—なりぬらむ

【心敬関係1 0種】／心玉集／静嘉堂文庫本
／

ほととぎすのひとこゑ
時鳥の一声

→^{はるのうくひす}春の鶯

かへるさを—いまひとこゑの—ほととぎす
なこりやをしむ—はるのうくひす

【皇学館文庫本千句】／□□〔はなにいそ
き〕／永禄6(1563)年11月18日以前

ほととぎす—ひとこゑをさへ—またせきて
ももさへつりは—はるのうくひす

【永禄年間百韻2 8巻】／何垣〔ねにかへ
る〕／永禄4(1561)年3月22日

ほととぎすまくらのいずちすぎる
時鳥枕のいずち過ぎる

→^{しずかなあめ}静かな雨

ほととぎす—まくらのいつち—すきぬらむ
しつかにあめの—うちそそくそら

【伊予千句】／御何〔すすしきは〕／天文
6(1537)年5月22日

ほととぎす—まくらのいつち—すきぬらむ
しつかにあめの—はるるくさふき

【寛永年間百韻15巻】／□□ [ききはみな] / 裏白 / 寛永4(1627)年1月3日

まつほととぎす
待つ時鳥

みじかよのつき
→短夜の月

みゆらめや—ころのまつに—ほととぎす
あかつきすめる—みじかよのつき

【天文年間百韻38巻】 / 何船 [みゆらめや] / 天文14(1545)年4月16日

まちまちて—いつかはきかむ—ほととぎす
つきはいてても—みじかよのつき

【慶長年間百韻27巻】 / □□ [ねふかきや] / 慶長4(1599)年2月8日

やまのほととぎす
山の時鳥

みじかよのつき
→短夜の月

ほととぎす—はなもまちける—みやまかな
くれなはいてよ—みじかよのつき

【初瀬千句】 / 何木 [ほととぎす] / 享徳元・2(1452)年、4月

なやここに—とほきやまたの—ほととぎす
すきのこすゑの—みじかよのつき

【天文年間百韻38巻】 / 何人 [なやここに] / 天文4(1535)年5月1日

やまほととぎす
山時鳥

あけやらない
→明けやらない

いくよまたるる—やまほととぎす
あめきけは—あけやすきころの—あけやらて

【天文廿年断簡千句】 / □□ [まつのよを] / 天文20(1551)年6月10日~12日

くもよりいつる—やまほととぎす
すゑとほく—かりねせしの—あけやらて

【永祿石山千句】 / 初何 [しらかしの] / 永祿7(1564)年5月12日

あさみどり
→浅緑

きくやおもかけ—やまほととぎす
うつしゑの—あともこすゑの—あさみどり

【大永四年月並千二百韻】 / □□ [うくひすの] / 月並千二百韻 / 大永4(1524)年2月23日

うへなくときか—やまほととぎす
あさみどり—はるののこりの—はなさきて

【大永年間百韻14巻】 / 名号 [なつころも] / 大永8(1528)年4月12日

あめはれる
→雨晴れる

まかふやくもち—やまほととぎす
ゆふなみに—うらつたひする—あめはれて

【大永三年月並千三百韻】 / □□ [たちはなに] / 月並千三百韻 / 大永3(1523)年5月23日

やまほととぎす—ゆふへとふやと
こすまけは—つきはあらず—あめはれて

【元和年間百韻24巻】 / □□ [えそすきぬ] / 元和8(1622)年4月13日

ありあけ
→有明

はるををしめは—やまほととぎす
なこりなほ—おほろつきよの—ありあけに

【住吉千句】 / 初何 [さよしくれ] / 大永元(1521)年11月1日~14日

さつきすきゆく—やまほととぎす
みじかよの—くもまわかれぬ—ありあけに

【伊予千句】 / 何馬 [もろひとの] / 天文6(1537)年5月22日

まつにもなかぬ—やまほととぎす
ありあけに—なるへきつきは—おそくして

【称名寺連歌3巻】 / x x [つきはあき] / 正慶元(1332)年9月13夜

よふかきいほの—やまほととぎす
かりまくら—さそはれいつる—ありあけに

【延徳年間百韻16巻】 / 何路 [うめかかの] / 延徳4(1492)年1月23日

はるもおもはし—やまほととぎす
いるかたは—かすみもうすき—ありあけに

【弘治年間百韻8巻】 / 何人 [ときはなる] / 弘治3(1557)年8月28日

→^{かたおかのもり}片岡の杜

みやこはとほきーやまほととぎす
かたをかのーもりくるあめにーたちぬれて

【難波田千句】／□□ [あくるよを]／文

明 14(1482)年 10 月前後

はつねめつらしーやまほととぎす
かたをかのーもりのこかけにーたたすみて

【浜宮千句】／□□ [こちふかは]／

→^{このもと}木の下

たひにはつれよーやまほととぎす
かへるやとーいふひとはなきーこのもとに

【池田千句】／何路 [はなはしるや]／永

正 7(1510)年春以前<永正 5 年春>

みやこうつろふーやまほととぎす
このもとにーはなたちはなのーかをとめて

【秋津洲千句】／初何 [はなならし]／天

文 15(1546)年 8 月 25 日

ひとこゑまでやーやまほととぎす
このもとにーいさやすすまむーなつのみち

【成立不詳・宗祇以前 1 5 巻】／何人 [う

めかかの]／成立時不詳

→^{はるすぎる}春過ぎる

やまほととぎすーきなけこのころ
ときわかぬーたにははるやーすきぬらむ

【享徳二年千句】／何玉 [くらからぬ]／

享徳 2(1453)年 8 月 11 日～13 日

あとはおとはのーやまほととぎす
むらさめやーこすゑはるかにーすきぬらむ

【伊庭千句】／白何 [けさやはる]／大永

4(1524)年 3 月 17 日～21 日

→^{はなたちばな}花 橘

やまほととぎすーあやなひとこゑ
さかりなるーはなたちはなのーあさゆふに

【伊予千句】／唐何 [うつせみの]／天文

6(1537)年 5 月 22 日

みやこうつろふーやまほととぎす
このもとにーはなたちはなのーかをとめて

【秋津洲千句】／初何 [はなならし]／天

文 15(1546)年 8 月 25 日

くものむかひのーやまほととぎす
ふきすくるーはなたちはなのーゆふかせに

【大永四年月並千二百韻】／□□ [わけく

らし]／月並千二百韻／大永 4(1524)年 7

月 23 日

→^{はなちる}花散る

わかさとうときーやまほととぎす
かへるにはーしかむかけなきーはなちりて

【成立不詳・宗硯以前 6 巻】／何人 [みつ

たまり]／成立時不詳

やまほととぎすーなほそまたるる
かりそめにーやとるいほりのーはなちりて

【文禄年間百韻 1 2 巻】／□□ [はなのい

ろや]／文禄 4(1595)年 1 月 30 日

→^{みじかよ}短夜

さつきすきゆくーやまほととぎす
みしかよのーくもまわかれぬーありあけに

【伊予千句】／何馬 [もろひとの]／天文

6(1537)年 5 月 22 日

かけたにとめよーやまほととぎす
みしかよのーつきもいまはたーみねこえて

【宮島千句】／何船 [ちかしてふ]／天文

20(1551)年 5 月 9 日～11 日

→^{むらさめ}村雨

わすれぬつてのーやまほととぎす
むらさめにーたちよるさくらーまたをりて

【三島千句】／御何 [はるとほし]／文明

3(1471)年 3 月 21 日～23 日

こゑはまくらのーやまほととぎす
さそはれてーすきゆくかせのーむらさめに

【弘治三年春雪千句】／山何 [はなそとも]

／弘治 3(1557)年正月 7 日～9 日

しのひあまるやーやまほととぎす
むらさめのーすきけるくもにーよひふけぬ

【天文十八年梅千句】／何船 [つきにうめ]
／天文 18(1549) 年正月 11 日

またもきなかむ一やまほととぎす
むらさめの一はるるあとより一うちそそき

【天正年間百韻 5 7 巻】／□□ [ききわく
や]／天正 18(1590) 年 10 月 8 日

→^{よわのつき}夜半の月

ゆくやいつくの一やまほととぎす
あらましの一ねさめをさそへ一よはのつき

【大永三年月並千三百韻】／□□ [しくれ
のあめ]／月並千三百韻／大永 3(1523) 年
10 月 23 日

まつとやおもふ一やまほととぎす
さらにたた一まくらもとらぬ一よはのつき

【天正年間百韻 5 7 巻】／何路 [なみこえ
て]／天正 9(1581) 年 2 月 3 日

→^{ふねにあかしのとまり}舟に明石の泊

やまほととぎす一ゆくもうらみし
ふねにこよひ一あかしのとまり一こきわかれ

【東山千句】／何人 [つきやしる]／永正
15(1518) 年 8 月 10 日～12 日

やまほととぎす一ひとこゑのそら
ふねよせて一あかしのとまり一いてかてに

【名所句集／静嘉堂文庫本】／旅／(大永
前後)

→^{うぐいす}鶯

たえにしのちの一やまほととぎす
うくひすの一こゑをへたつる一なつはきて

【天文年間百韻 3 8 巻】／何路 [ひもすす
し]／天文 11(1542) 年 6 月 12 日

いまはといつる一やまほととぎす
うくひすの一かへるたにのと一はるくれて

【宗長関係 8 種】／壬生宛／書陵部本／

→^{たちばな}橘

おとつれすてし一やまほととぎす
たちはなの一いくやとことに一にほふらむ

【元和年間百韻 2 4 巻】／□□ [としとし
に]／元和 6(1620) 年 12 月 5 日

よかれかちなる一やまほととぎす
たちはなの一はなちるつきは一ありあけに

【那智筆／北野天満宮本】／永正十三年／

きけはほのかに一やまほととぎす
たちはなの一にほふまくらを一そはたてて

【合点之句／神宮文庫本】／夏／天文
9(1541) 年 12 月 25 日

→^{はなまきく}花咲く

うへなくときか一やまほととぎす
あさみとり一はるののこりの一はなさきて

【大永年間百韻 1 4 巻】／名号 [なつころ
も]／大永 8(1528) 年 4 月 12 日

やまほととぎす一くもになくなり
とほきのの一ひととあさち一はなさきて

【基佐集／静嘉堂文庫本】／夏／永正
6(1509) 年以前

→^{はなたちばな}花橘

やまほととぎす一こゑものこすな
そてかをる一はなたちはなに一かせすきて

【老葉／毛利本】／夏／(文明 17(1485) 年
7 月 23 日頃)

やまほととぎす一こゑものこさす
そてかをる一はなたちはなに一かせすきて

【愚句老葉】／夏／永正 17 年

つきおちかかゝる一やまほととぎす
まくらかの一はなたちはなに一めはさめて

【合点之句／神宮文庫本】／雑／天文
9(1541) 年 12 月 25 日

→^{はるくれる}春暮れる

かたふくつきの一やまほととぎす
はなもいま一むかひのみねの一はるくれて

【天文年間百韻 3 8 巻】／何木 [あすのな
を]／天文 17(1548) 年 8 月 14 日

かつこえきての一やまほととぎす
あふさかの一おとはのこすゑ一はるくれて

【那智筆／北野天満宮本】／永正十二年／

いまはといつるーやまほとときす
うくひすのーかへるたにのとーはるくれて

【宗長関係8種】／壬生宛／書陵部本／

まつよつもれるーやまほとときす
はなはたたーきのふのゆめのーはるくれて

【宗長関係8種】／老耳／天理本／

→^{みねこえる}峰越える

かけたにとめよーやまほとときす
みしかよのーつきもいまはたーみねこえて

【宮島千句】／何船 [ちかしてふ]／天文
20(1551)年5月9日～11日

なけむらくものーやまほとときす
さみたれのーなこりすすしくーみねこえて

【園塵第三／統群書類従本】／夏／文亀元
(1501)年3月18日

ゆくほととぎす
行く時鳥

→^{そら}空

まつたれをわきーゆくほととぎす
いつこかはーさみたれそめぬーそらならむ

【宮島千句】／白何 [ゆふへより]／天文
20(1551)年5月9日～11日

おとつれそめてーゆくほととぎす
ねさめはたーたれもひとしきーそらならむ

【弘治三年春雪千句】／何木 [はなならて]
／弘治3(1557)年正月7日～9日

わかるほととぎす
別ける時鳥

→^{ねざめのあかつきのやま}寝覚めの暁の山

ほととぎすーひとをわかてやーすきぬらむ
ねさめひとりのーあかつきのやま

【葉守千句】／薄何 [いはほにも]／長享
元(1487)年10月9日<～11日>

おもふをはーわきてかたらへーほととぎす
ふかきねさめのーあかつきのやま

【東山千句】／何路 [のわきせし]／永正
15(1518)年8月10日～12日

ほど

ほどがしられる
程が知られる

→^{いしばかりにあき}言いしばかりに秋

さひしさなれぬーほとそしらるる
つきはたたーいひしはかりにーあきくれて

【宗長追善千句】／何色 [うくひすの]／
(享禄5)天文元(1532)年3月25日

はるにつれなきーほとそしらるる
このくれとーいひしはかりにーあきかけて

【心敬関係10種】／芝草内連歌合／天理本
／

ほのか

つきがほのめく
月がほのめく

→^{あきかぜ}秋風

やまをしみれはーつきそほのめく
あきかせにーくさのとほそをーたちいてて

【永原千句】／千何 [ひととせは]／明応
9(1500)年7月17日

ふかきみねよりーつきそほのめく
いはかねわーかりねのとこのーあきかせに

【大永四年月並千二百韻】／□□ [うのは
なの]／月並千二百韻／大永4(1524)年4
月23日

ほのか
仄か

→^{あきのはつかぜ}秋の初風

ゆふつくよーなかむるかけもーほのかにて
おほえぬはかりーあきのはつかせ

【池田千句】／唐何 [つゆかけて]／永正
7(1510)年春以前<永正5年春>

なかそらにーくればつきのーほのかにて
ふきたちけりなーあきのはつかせ

【毛利千句】／何船 [みてもおもふ]／文
禄3(1594)年5月12日～16日

→^{ところどころ}所々

このしたのーはたやくかたはーほのかにて
ところどころにーまきしあはれさ

【称名院追善千句】／山河【ことつむ】
／永禄6(1563)年12月14日～18日

ふゆたにもーひつしのすゑのーほのかにて
ところどころにーしろきはつしも

【羽柴千句】／初何【ふしたては】／天正
6(1578)年5月18・19日

ほのかなきり
仄かな霧

ころもうつおと
→衣打つ音

ほのかにもーふしみのかたはーきりこめて
たえたえさひしーころもうつおと

【称名院追善千句】／何路【いるかたの】
／永禄6(1563)年12月14日～18日

ほのかにもーへたてしさとーのーきりはれて
そともあらはにーころもうつおと

【寛正年間百韻20巻】／何船【はなおも
き】／寛正2(1461)年11月22日

まつむしほのめく
松虫ほのめく

あきのすずしさ
→秋の涼しさ

まつむしのーゆふかけちかくーほのめきて
かせのまにまにーあきのすずしさ

【天文年間百韻38巻】／何人【つきによ
る】／天文5(1536)年6月15日

まつむしのーこゑほのめかすーのはくれて
つゆのみたれもーあきのすずしさ

【天文年間百韻38巻】／何人【うつせよ
に】／天文21(1552)年2月23日

ほん

うめのひともと
梅の一本

うぐいす
→鶯

さきそめにけむーうめのひともと
うくひすのーうちはふきくるーそののうち

【五吟一日千句】／何木【としのうちに】
／天正9(1581)年11月19日

やつれてにほふーうめのひともと
うくひすのーいくはるとなきーこゑおいて

【大永三年月並千三百韻】／□□【やまい
くへ】／月並千三百韻／大永3(1523)年8
月23日

こしけきなかのーうめのひともと
うくひすのーうちはふきたるーこゑすなり

【天正年間百韻57巻】／初何【はるたち
て】／裏白／天正12(1584)年1月3日

きくのひともと
菊の一本

やまひと
→山人

しものそなるーきくのひともと
やまひとのーすむあといかにーたつねまし

【天文廿年断簡千句】／□□【つけのこせ】
／天文20(1551)年6月10日～12日

ちくさしをれてーきくのひともと
やまひとのーすみかはこことーものふるく

【長禄三年千句11巻】／何鳥【ふかくふ
る】／長禄3(1459)年12月2日～5日

はやちりそむるーきくのひともと
やまひとのーすさみいかなるーころならむ

【天正四年万句70巻】／朝何【なみよす
る】／天正4(1576)年5月6日～7月19日

はなのひともと
花の一本

はるくれる
→春暮れる

おそきものこるーはなのひともと
しらすりしーみやまをとへはーはるくれて

【文明年間百韻34巻】／何人【ちきりあ
れや】／文明14(1482)年3月20日

まきのはしのくーはなのひともと
とりのねもーそこはかたなくーはるくれて

【大永四年月並千二百韻】／□□【ゆきふ
かき】／月並千二百韻／大永4(1524)年11
月23日

まつのひともと
松の一本

みのおやま
→美濃の小山

あきをふるやのーまつのひともと
つゆやもるーみののをやまのーふはのせき

【享徳二年千句】／手何〔なほみよと〕／
享徳2(1453)年8月11日～13日

たてるもさひしーまつのひとつと
さきのけのーみののをやまのーゆきのくれ

【竹林抄／新古典文学大系本】／冬／文明
8(1476)年5月頃

たてるさひさしーまつのひとつと
さきのけのーみののをやまのーゆきのくれ

【宗叟関係9種】／宗叟句集／大阪天満宮本
／

やまもと
山本

だれがこえる
→誰が越える

やまもとのーさともわかれすーきりこめて
くるるまかきをーたれかこゆらむ

【宝徳四年千句】／山何〔みにしむは〕／
宝徳4(1452)年3月12日

やまもとのーのわきのあとのーしかのこゑ
をのへのみちはーたれかこゆらむ

【永正年間百韻34巻】／何人〔はなのき
も〕／永正7(1510)年4月1日

やまもとのさと
山本の里

かがはし
→掛橋

なかはかすみのーやまもとのさと
かけはしはーのきはのみねにーよこたはり

【池田千句】／何船〔おそくとく〕／永正
7(1510)年春以前<永正5年春>

いつくなるらむーやまもとのさと
かけはしはーふむあともなくーくちはてて

【慶長年間百韻27巻】／□□〔つゆにみ
を〕／慶長9(1604)年6月28日

ま

かせのまにまに
風のまにまに

くれるひ
→暮れる日

ちりもあくたもーかせのまにまに
おくれゆくーうしのあゆみのーくるるひに

【大原野十花千句】／何船〔ひときつつ〕
／元龜2(1571)年2月5日～7日

かせのまにまに一つゆみたるらし
なみかへるーみきはのみちのーくるるひに

【元龜二年千句】／何袋〔ふるさとと〕／
元龜2(1571)年3月5日

なみかえる
→浪返る

かせのまにまに一つゆみたるらし
なみかへるーみきはのみちのーくるるひに

【元龜二年千句】／何袋〔ふるさとと〕／
元龜2(1571)年3月5日

つゆのたまちるーかせのまにまに
なみかへるーまさこにうつるーつきのくれ

【寛文年間百韻22巻】／□□〔さそなお
く〕／寛文13(1673)年7月28日

なみのまにまに
浪の間に間に

ねさめがち
→寝覚めがち

おとはたたーなみのまにまにーしくれきて
ねさめかちなるーとまふきのうち

【嵯峨千句】／何路〔あけほのの〕／(元
龜4)天正元(1573)年正月9日～11日

なみのまにまにーちとりむれたつ
とまふきにーねさめかちなるーさよあらし

【寛文年間百韻22巻】／□□〔なつなき
は〕／寛文13(1673)年6月12日

まつあいだ
待つ間

ほととぎす
→時鳥

まつとせしまにーよもきふのかけ
ほととぎすーはなたちはなにーかれはてて

【太神宮法楽千句】／白何〔つゆなから〕
／長享2(1488)年7月

まつとせしまにーおくるはるあき
ほととぎすーきかぬひとよにーとしをへて

【心敬関係10種】／心玉集／静嘉堂文庫本
／

まい

まいのそで
舞の袖おはしまのおく
→欄干の奥あしふみも一さすかよしある一まひのそで
なこりをおもふ一おはしまのおく【五吟一日千句】／三字中略【くもらさぬ】
／天正9(1581)年11月19日いりあやも一したはれてまた一まひのそで
おもかけさたか一おはしまのおく【天正年間百韻57巻】／x x【はなさか
り】／天正6(1578)年3月10日

まえ

まえわたり
前渡りさとのくさかり
→里の草刈りふえのねに一それとはしるき一まへわたり
ふねにのりたる一さとのくさかり【嵯峨千句】／何船【はるはゆきに】／(元
龜4)天正元(1573)年正月9日～11日かすかにも一ふえのねもらす一まへわたり
すみかやをちの一さとのくさかり【寛永年間百韻15巻】／□□【あさひか
け】／裏白／寛永11(1634)年1月3日

まがき

きりのまがき
霧の籬あけはなれる
→明け離れるきりのまかきの一ひまそひにけり
のきちかき一やまはみるみる一あけはなれ【文禄年間百韻12巻】／□□【あつまや
の】／文禄2(1593)年5月6日きりのまかきの一あらはなりけり
みつおつる一かとのつきの一あけはなれ【元和年間百韻24巻】／□□【むかしに
や】／元和5(1619)年7月24日

まき

ふねのまきまき
文の巻々いかがしよう
→如何しようなほおくふかき一ふみのまきまき
とひよるも一したしからぬは一いがかせむ【文禄年間百韻12巻】／□□【はなのい
ろや】／文禄4(1595)年1月30日あたらやきぬる一ふみのまきまき
すめらきの一さかなきよをは一いがかせむ【寛文年間百韻22巻】／□□【よもにう
つ】／寛文10(1670)年8月29日

まぎれる

まぎれない
紛れないのこる
→残るすくなるみちは一まきれさりけり
かかるよも一かしこきかなや一のこるらむ【難波田千句】／□□【にしきにて】／文
明14(1482)年10月前後わひぬるひとの一まきれさりけり
いにしへは一まことあるにや一のこるらむ【宗長追善千句】／山河【こほるるや】／
(享禄5)天文元(1532)年3月25日

まく

すだれをまけばゆき
簾を巻けば雪よもすがら
→夜もすがらすたれをまけは一ゆきしろきやま
よもすから一しくれしつきの一けさすみて【弘治年間百韻8巻】／何船【たくそてに】
／弘治2(1557)年12月2日すたれをまけは一けさのうすゆき
よもすから一あらしをそてに一かたしきて【成立不詳・宗養以前8巻】／朝何【なひ
くよや】／成立時不詳

まくら

あきのたまくら
秋の手枕はなすすき
→花薄かたはらさひしーあきのたまくら
ましろののーくすはかれはのーはなすすき【文亀年間百韻4巻】／何人〔まつこえし〕
／文亀3(1503)年4月29日つゆこそこのこれーあきのたまくら
やまとほくーつきはいるののーはなすすき【老葉／吉川本】／秋／文明13(1481)年
夏頃かりまくら
仮枕ふるさとのゆめ
→古里の夢わけのこすーくさはをむすふーかりまくら
みるやとたのむーふるさとのゆめ【表佐千句】／何衣〔よるやあめ〕／文明
8(1476)年3月6日<~8日>はるけさやーおなしやまちのーかりまくら
まとろむほとんぬーふるさとのゆめ【称名院追善千句】／何路〔いるかたの〕
／永禄6(1563)年12月14日~18日かりまくらーかたしくつゆのーふかきのに
むすひもとめよーふるさとのゆめ【成立不詳・宗養以前8巻】／何木〔とこ
なつに〕／成立時不詳くさまくら
草枕しるべおきいづるみち
→標置き出る道くさまくらーゆめのつてさへーあくるよに
かねこそしるへーおきいづるみち【天文年間百韻38巻】／何木〔しくるる
か〕／天文19(1550)年8月25日にはとりのーこゑはきこえぬーくさまくら
つきをしるへにーおきいづるみち【天正四年万句70巻】／山河〔みかつき
の〕／天正4(1576)年5月6日~7月19日きけはあらし
→聞けば嵐くさまくらーあくへきころもーよをこめて
きけはあらしのーさはるまきのと【寛正年間百韻20巻】／何船〔とりねむ
る〕／寛正6(1465)年12月14日くさまくらーかれのにそてをーしきわひて
きけはあらしのーしもをふくそら【文明年間百韻34巻】／□□〔はなにく
も〕／文明14(1482)年2月27日ながきよのゆめ
→長き夜の夢さらしなやーつゆけきさとのーくさまくら
われをはすてつーなかきよのゆめ【河越千句】／何路〔ひそさむき〕／文明
2(1470)年正月10~12日わかやとはーはるかにあきのーくさまくら
かよふやいかかーなかきよのゆめ【宮島千句】／玉何〔はるといへは〕／天
文20(1551)年5月9日~11日ふるさとのゆめ
→古里の夢たゆますもーあらしふくよのーくさまくら
いつむすはましーふるさとのゆめ【永正年間百韻34巻】／玉何〔ちりてわ
か〕／永正2(1505)年8月22日くさまくらーむすひかねてのーあさかすみ
なこりはわかぬーふるさとのゆめ【永正年間百韻34巻】／x x〔なつころ
も〕／永正7(1510)年4月1日ゆめのおもかげ
→夢の面影あふひともーあらののはらのーくさまくら
つきをなこりのーゆめのおもかげ【毛利千句】／初何〔よとともに〕／文禄
3(1594)年5月12日~16日さきたつやーあかつきちかきーくさまくら
したふもあはれーゆめのおもかげ【天正年間百韻57巻】／何船〔もしほく
さ〕／天正7(1579)年1月13日たまくらのつき
手枕の月

→^{ゆめさめる}夢覚める

なみたにかかると一たまくらのつき
ものうかる一をののかりねに一ゆめさめて

【享徳二年千句】／手何 [なほみよと] /
享徳 2(1453) 年 8 月 11 日～13 日

かたみかほなる一たまくらのつき
いにしへの一たたかなしき一ゆめさめて

【大永三年月並千三百韻】／□□ [はると
ふく] / 月並千三百韻 / 大永 3(1523) 年 1
月 23 日

つゆのたまくら
露の手枕→^{おみなえと}女郎花

おきあかしたる一つゆのたまくら
なつかしや一やとかるのへの一をみなへし

【文安雪千句】／朝何 [ゆきさそへ] / 文
安 2(1445) 年 10 月 18 日

くるれはいとと一つゆのたまくら
をみなへし一まねくをはなに一うちみたれ

【天文十八年梅千句】／何路 [ふきよわる]
／天文 18(1549) 年正月 11 日

にいたまくら
新手枕→^{はじかわす}恥交わす

にひたまくらは一ゆめかうつつか
はちかはす一なかこそちは一しのはれめ

【伊予千句】／御何 [すすしきは] / 天文
6(1537) 年 5 月 22 日

にひたまくらは一あくるたひたひ
はちかはす一こころふかさを一うらみわひ

【五吟一日千句】／三字中略 [くもらさぬ]
／天正 9(1581) 年 11 月 19 日

のにかりまくら
野に仮枕→^{かたしきのゆめ}片敷の夢

かりまくら一すそののかたに一かへなまし
いかにねてかは一かたしきのゆめ

【五吟一日千句】／初何 [やまもいさ] /
天正 9(1581) 年 11 月 19 日

はかなしや一のかみのさとの一かりまくら
いふきおろしを一かたしきのゆめ

【壁草 / 大阪天満宮文庫本】 / 旅 / 永正
2(1505) 年 8 月 23 日以後同 3 年 3 月以前

ほとときすまくらのいづちすぎる
時鳥枕のいづち過ぎる→^{しずかなあめ}静かな雨

ほとときす一まくらのいつち一すきぬらむ
しつかにあめの一うちそそくそら

【伊予千句】／御何 [すすしきは] / 天文
6(1537) 年 5 月 22 日

ほとときす一まくらのいつち一すきぬらむ
しつかにあめの一はるるくさふき

【寛永年間百韻 1 5 巻】 / □□ [ききはみ
な] / 裏白 / 寛永 4(1627) 年 1 月 3 日

まくらさだめない
枕定めない→^{つきをみる}月を見る

まくらさためぬ一なつのうたたね
うかれめは一おもはぬかたの一つきをみて

【看聞日記紙背 5 0 巻】 / 片何 [まつはあ
め] / 応永 32(1425) 年 7 月 25 日

まくらさためぬ一あきのさひしさ
うたたねは一つらき□□□□一つきをみて

【成立不詳・心敬以前 1 4 巻】 / 何木 [ゆ
くみつの] / 成立時不詳

まくらのうえ
枕の上→^{つきのさやけさ}月のさやけさ

なかむれは一まくらのうへの一みねのくも
かねにおちくる一つきのさやけさ

【皇学館文庫本千句】 / □□ [よははなに]
／永禄 6(1563) 年 11 月 18 日以前

おきそふや一まくらのうへの一あきのしも
いたまもりいる一つきのさやけさ

【慶長年間百韻 2 7 巻】 / □□ [はなちれ
は] / 慶長 4(1599) 年間 3 月 21 日

まくらのゆめ
枕の夢→^{かりのこえ}雁の声

まくらのゆめをーさそふあきかせ
いつくともーおほえすとほきーかりのこゑ

【文明年間百韻34巻】／□□ [ゆきのか
け] / 文明5(1473)年12月5日

まくらのゆめをーさますはるかせ
わかるるやーありあけかたのーかりのこゑ

【文禄年間百韻12巻】／□□ [あめのひ
の] / 文禄2(1593)年5月

ねるほととぎす
→寝る時鳥

まくらのゆめにーさはるかのこゑ
ねぬるまをーうらみやすらむーほととぎす

【行助関係4種】／行助句集／大阪天満宮本
／

まくらのゆめにーつけやまつらむ
ぬるひとにーこゑをはをしめーほととぎす

【萱草／伊地知本】／夏／文明6(1474)年
2月以前

ゆめのかりまくら
夢の仮枕

つきにいくたび
→月に幾度

ならはすはーみえましゆめかーかりまくら
つきにいくたびーかけしふるさと

【成立不詳・宗長以前15巻】／何路 [み
ねちかし] / 成立時不詳

みしゆめのーのちもよなかきーかりまくら
つきにいくたびーとこのやまかせ

【天和年間百韻2巻】／□□ [おいかみに]
／天和2(1682)年4月3日

むさしののの原
→武蔵野の原

ゆめちにもーゆきつつおなしーかりまくら
またみぬかたやーむさしのの原

【羽柴千句】／薄何 [たちはなの] / 天正
6(1578)年5月18・19日

すゑいかにーみはてぬゆめのーかりまくら
あすもわくへきーむさしのの原

【文明十四年万句52巻】／山何 [あきか
せに] / 文明14(1482)年7月4日～9月
14日

わかくさまくら
若草枕

あきふける
→秋更ける

わかくさまくらーうつらふすこゑ
とこさむきーたひにしあれはーあきふけて

【紫野千句】／何船 [はれてたに] / 延文
2(1357)年以後-応安3年6月以前

わかくさまくらーつきややつさむ
いたつらにーあかすよおほくーあきふけて

【長享年間百韻6巻】／何人 [ゆきなから]
／長享2(1488)年1月22日

まさご

まさごはら
真砂原

ことのほのみち
→言の葉の道

いてふねのーあとしつかなるーまさごはら
ひとりたねなきーことのほのみち

【文明十四年万句52巻】／何船 [あきの
いろ] / 文明14(1482)年7月4日～9月
14日

しらさきのーはをならへたるーまさごはら
なにをおもふもーことのほのみち

【文明十四年万句52巻】／唐何 [はな
あはせ] / 文明14(1482)年7月4日～9月
14日

まつ

あめをまつ
雨を待つ

ときすぎるほととぎす
→時過ぎる時鳥

みなつきのそらのーあめやまつらむ
ときすきてーやすらふこゑのーほととぎす

【大永年間百韻14巻】／何人 [ちあきを
も] / 大永5(1525)年9月21日

みなつきのそらのーあめやまつらむ
ときすくるーなこりやすらぬーほととぎす

【宗長関係8種】／老耳 / 天理本 /

いわがねのまつ
岩が根の松

いそにふねにひぐれ
→磯に舟に日暮れ

しつえなみよるーいはかねのまつ
あらいそのーふねひきつなくーひはくれて

【弘治三年春雪千句】／何木〔はなならて〕
／弘治3(1557)年正月7日～9日

ひとりかせふくーいはかねのまつ
いそつたひーあまのふねさすーひはくれて

【月村抜句／書陵部本】／永正十四年／

こころながくまで
心長く待て

つなひくわたしがね
→綱引く渡し舟

こころなかくもーわれにまでとや
わたしふねーむかひにつなをーひきすてて

【新撰菟玖波集／実隆本】／羈旅下／明成
4(1495)年9月26日

こころなかくもーひとをこそまで
くるるまでーつなひきはふるーわたしふね

【北畠家連歌合／書陵部本】／北畠家連歌
合／文明2(1470)年正月6日

すみよしのまつ
住吉の松

かきのやはたやま
→垣の八幡山

かけとちきるやーすみよしのまつ
みつかきのーひさしくなりぬーやはたやま

【伊庭千句】／三字中略〔ちりやすき〕／
大永4(1524)年3月17日～21日

おひやかはれるーすみよしのまつ
かみかきにーすきのこたかきーやはたやま

【成立不詳・心敬以前14巻】／何路〔か
すみかは〕／成立時不詳

すみよしのまつとたのむ
住吉の松と頼む

あだなみがそでぬらす
→徒浪が袖濡らす

すみよしのーまつとたのめしーかひもなく
なにあたなみのーそでぬらすらむ

【菟玖波集／広島大学本】／恋上／文和
5(1356)年冬～翌年の春

すみよしのーまつとたのめしーほかにもた
なにあたなみのーそでぬらすらむ

【菟玖波集／広島大学本】／恋中／文和
5(1356)年冬～翌年の春

ただまつのかぜ
ただ松の風

はつしぐれ
→初時雨

ふりたるみやはーたたまつのかせ
さひしさはーかみなきつきーはつしぐれ

【河越千句】／何船〔やまかせに〕／文明
2(1470)年正月10～12日

あきのまくらはーたたまつのかせ
さをしかのーなくねにしるきーはつしぐれ

【大永四年月並千二百韻】／□□〔けふひ
くや〕／月並千二百韻／大永4(1524)年5
月23日

だれをまつ
誰を待つ

ゆうべ
→夕べ

たまゆらのよにーたれをまつらむ
いのちこそーものおもはするーゆふへなれ

【宝徳四年千句】／唐何〔さすはなや〕／
宝徳4(1452)年3月12日

をきふくかせにーたれをまつらむ
うきあきもーきみこそしらむーゆふへなれ

【老葉／書陵部宗訊筆本】／恋下／

よごこどり
→呼子鳥

はるゆくまでにーたれをまつらむ
みをつくすーこゑのかなしきーよふことり

【享禄年間百韻8巻】／懷旧〔ゆふたちの〕
／享禄5(1532)年6月8日

はなのあるしーたれをまつらむ
こえくれはーなほはなふかくーよふことり

【下草／龍谷大学本】／春／延徳2(1490)
年～3年春頃

つきまつ
月待つ

なわるよのなか
→変わる世の中

いててたにーくもの□□□□一つきまちて
さためなやけにーかはるよのなか

【看聞日記紙背50巻】／何船〔ことはな
に〕／応永31(1424)年9月27日

ともしする一やまにはいとふ一つきまちて
ひとのこころのーかはるよのなか

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁 2(1468)年 5 月下旬

ひとがまたれる
人が待たれる

→恋しさ

かへさいそきしーひとそまたるる
こひしきはーうらみにこりぬーこころにて

【成立不詳・心敬以前 1 4 巻】／何船 [ま
つかせは]／成立時不詳

ちきりおかねとーひとそまたるる
こひしきはーみのならはしのーゆふへにて

【新撰菟玖波集／実隆本】／恋下／明応
4(1495)年 9 月 26 日

まつあいだ
待つ間

→時鳥

まつとせしまにーよもきふのかけ
ほとときすーはなたちはなにーかれはてて

【太神宮法楽千句】／白何 [つゆなから]
／長享 2(1488)年 7 月

まつとせしまにーおくるはるあき
ほとときすーきかぬひとよにーとしをへて

【心敬関係 1 0 種】／心玉集／静嘉堂文庫本
／

まつかぜがふく
松風が吹く

→雲浮く

こえむをのへはーまつかせそふく
くれわたるーそらにひとむらーくもうきて

【三島千句】／朝何 [やまとほく]／文明
3(1471)年 3 月 21 日～23 日

こえくるみねはーまつかせそふく
むらさめのーなこりにしはしーくもうきて

【成立不詳・心敬以前 1 4 巻】／何船 [は
るはまた]／成立時不詳

→憂い

みちくるしほにーまつかせそふく
とまりてもーふねやこころのーうかるらむ

【成立不詳・宗長以前 1 5 巻】／何船 [し
もしろき]／成立時不詳

こころもしらすーまつかせそふく
ゆふくれやーこけのしたにもーうかるらむ

【萱草／伊地知本】／雑／文明 6(1474)年
2 月以前

→頼む

あらうみきははーまつかせそふく
あまをふねーなとこのきしをーたのむらむ

【三島千句】／山何 [うくひすの]／文明
3(1471)年 3 月 21 日～23 日

こころもしらすーまつかせそふく
ふけいつるーつきはくもをもーたのむらむ

【下草／金子本】／秋／延徳 4(1492)年頃

まつかぜのこえ
松風の声

→月を見る

しつこころなきーまつかせのこゑ
つゆふかきーこはきかうへのーつきをみて

【文安月千句】／何船 [つきはなを]／文
安 2(1445)年 8 月 15 日

またおとろくやーまつかせのこゑ
ふくるよのーねやにもりくるーつきをみて

【文明年間百韻 3 4 巻】／□□ [はたはり
や]／文明 14(1482)年 9 月

→花散る

さひしきやまのーまつかせのこゑ
みはやすをーまちあへぬまのーはなちりて

【天文年間百韻 3 8 巻】／何木 [あすのな
を]／天文 17(1548)年 8 月 14 日

よにとほやまのーまつかせのこゑ
たつねこしーひとあともなくーはなちりて

【基佐集／静嘉堂文庫本】／春／永正
6(1509)年以前

まつのはとむら
松の一群

→夜が明ける

しほひにたかき—まつのひとつら
とふかりの—かすもまきれす—よはあけて

【成立不詳・心敬以前14巻】／何人〔は
るふかし〕／成立時不詳

うらのとほきは—まつのひとつら
やまみえぬ—なみのうへより—よはあけて

【菟玖波集／広島大学本】／雑三／文和
5(1356)年3月26日

まつのひとつら
松の一本

→美濃の小山

あきをふるやの—まつのひとつら
つゆやもる—みなのをやまの—ふはのせき

【享徳二年千句】／手何〔なほみよと〕／
享徳2(1453)年8月11日～13日

たてるもさひし—まつのひとつら
さきのけの—みなのをやまの—ゆきのくれ

【竹林抄／新古典文学大系本】／冬／文明
8(1476)年5月頃

たてるさひさし—まつのひとつら
さきのけの—みなのをやまの—ゆきのくれ

【宗砌関係9種】／宗砌句集／大阪天満宮本
／

まつのおやま
松の藤浪

→つきいでる
月出る

はるちよかけよ—まつのおやま
なかきひも—くるれはやかて—つきいてて

【看聞日記紙背50巻】／山何〔やよや
ひ〕／応永31(1424)年3月18日

はなまちえたる—まつのおやま
はるのよの—ひかりをそふる—つきいてて

【文安年間百韻1巻】／夢想〔おそさくら〕
／文安2(1445)年3月18日

→まつひとつら
時鳥

なつをかけたる—まつのおやま
ほととぎす—このゆふつくよ—ほのめきて

【浅間千句】／何木〔したふとや〕／永正
11(1514)年5月13日～19日

こえてやたかき—まつのおやま
ここになく—こゑもくもみの—ほととぎす

【成立不詳・宗長以前15巻】／□□〔ち
らぬより〕／成立時不詳

ところどころの—まつのおやま
またれぬる—こゑはやよひの—ほととぎす

【天正年間百韻57巻】／x x〔かすみけ
り〕／天正10(1582)年3月1日

まつふくかせ
松吹く風

→ちるはな
散る花

まつふくかせも—かすみはてけり
ちるはなの—にほひをはるの—なこりにて

【成立不詳・心敬以前14巻】／何人〔こ
のものの〕／成立時不詳

まつふくかせも—ゆめはみせけり
ちるはなの—かをるまくらに—めもあはて

【専順関係2種】／春／応仁元(1467)年
5月10日

まつほととぎす
待つ時鳥

→みじかのつき
短夜の月

みゆらめや—こころのまつに—ほととぎす
あかつきすめる—みしかよのつき

【天文年間百韻38巻】／何船〔みゆらめ
や〕／天文14(1545)年4月16日

まちまちて—いつかはきかむ—ほととぎす
つきはいてても—みしかよのつき

【慶長年間百韻27巻】／□□〔ねふかき
や〕／慶長4(1599)年2月8日

まつみえる
松見える

→かえるかりがね
帰る雁

かすめとも—つきまつやまは—まつみえて
くもちはるかに—かへるかりがね

【看聞日記紙背50巻】／何路〔ふりかつ
け〕／応永29(1422)年【B】3月15日

とほさとの—はなをへたつる—まつみえて
やまのはつかに—かへるかりがね

【看聞日記紙背50巻】／何船〔ことはな
に〕／応永31(1424)年9月27日

まつをたよりに
松を頼りに

→^{たちかへる}立ち返る

まつをたよりに一すめるしはのと
たちかへる一やとははしらの一くちのこり

【天正年間百韻57巻】／□□〔うくひす
も〕／天正14(1586)年1月4日

まつをたよりに一かこふしはかき
たちかへる一はるもこころも一わかやかに

【文明十四年万句52巻】／二字反音〔ま
つうきて〕／文明14(1482)年7月4日～
9月14日

やまのまつかせ
山の松風

→^{しばのいお}柴の庵

ふるさとよりの一やまのまつかせ
なかなか一かこふそやすき一しはのいほ

【太神宮法楽千句】／何人〔しかのねを〕
／長享2(1488)年7月

なれてもさひし一やまのまつかせ
たれきてか一こころととめむ一しはのいほ

【萱草／伊地知本】／雑／文明6(1474)年
2月以前

→^{なかなか}中々

ふるさとよりの一やまのまつかせ
なかなか一かこふそやすき一しはのいほ

【太神宮法楽千句】／何人〔しかのねを〕
／長享2(1488)年7月

なれつつすめる一やまのまつかせ
なかなか一こけのころもは一さむからて

【園塵第一／統群書類従本】／雑／長享2
年

まつむし

だれをまつむしのなく
誰を松虫の鳴く

→^{とうひともあらしのやまのあきのくれ}訪う人も嵐の山の秋の暮れ

あかつきたれを一まつむしのなく
とふひとも一あらしのやまの一あきのくれ

【竹林抄／新古典文学大系本】／秋／文明

8(1476)年5月頃

いまはたれをか一まつむしのなく
とふひとも一あらしのやまの一あきのくれ

【行助関係4種】／行助句／伊地地本／

まつむしがなく
松虫が鳴く

→^{くさのほら}草の原

つゆのやとりに一まつむしのなく
くさのほら一あたるいろに一うつろひて

【美濃千句】／何色〔しくれつつ〕／文明
4(1473)年12月16日～21日

なにをまてとか一まつむしのなく
つきもはや一かけさすつゆの一くさのほら

【永原千句】／何木〔おとそなき〕／明応
9(1500)年7月17日

→^{あきのくれ}秋の暮れ

なれしはしるや一まつむしのなく
かりころも一いくつゆしもの一あきのくれ

【永正年間百韻34巻】／何船〔うちなひ
き〕／永正13(1516)年1月

あかつきたれを一まつむしのなく
とふひとも一あらしのやまの一あきのくれ

【竹林抄／新古典文学大系本】／秋／文明
8(1476)年5月頃

まつむしのこゑ
松虫の声

→^{あらしのやま}嵐の山

あきといふあきは一まつむしのこゑ
たへてやは一あらしのやまの一つきのもと

【永正年間百韻34巻】／述懐〔なけくか
な〕／永正8(1511)年1月21日

したくさかる一まつむしのこゑ
なにしおふ一あらしのやまの一くれわたり

【文安頃千句4巻】／朝何〔すゑとほき〕
／

→^{つきのよ}月の夜

なれもたれをかーまつむしのこゑ
ふたりみしーかけもわすれぬーつきのよに

【文明十四年万句52巻】／一字露頭 [ち
あきふる] / 文明 14(1482) 年 7 月 4 日～
9 月 14 日

えらひかねたるーまつむしのこゑ
いつよりもーひかりさやけきーつきのよに

【天正四年万句70巻】／何船 [そらにま
つ] / 天正 4(1576) 年 5 月 6 日～7 月 19 日

→なる

いかなるときをーまつむしのこゑ
ちきりしもーいまやかれのとーなりぬらむ

【聖廟千句】／山何 [ぬるとりの] / 明応
3(1494) 年 2 月 10 日～12 日

はしむになるるーまつむしのこゑ
うらかれのーのはらやさむくーなりぬらむ

【天正四年万句70巻】／二字返音 [かせ
やいろ] / 天正 4(1576) 年 5 月 6 日～7 月
19 日

→群薄

なほふるさとのーまつむしのこゑ
さらてたにーたとりしみちのーむらすすき

【成立不詳・宗長以前15巻】／名号 [な
かはひと] / 成立時不詳

いろいろなれやーまつむしのこゑ
いつしかにーしけきそとのーむらすすき

【寛永年間百韻15巻】／□□ [よのはる
を] / 裏白 / 寛永 8(1631) 年 1 月 3 日

まつむしほのめく
松虫ほのめく

→秋の涼しさ

まつむしのーゆふかけちかくーほのめきて
かせのまにまにーあきのすすしさ

【天文年間百韻38巻】／何人 [つきによ
る] / 天文 5(1536) 年 6 月 15 日

まつむしのーこゑほのめかすーのはくれて
つゆのみたれもーあきのすすしさ

【天文年間百韻38巻】／何人 [うつせよ
に] / 天文 21(1552) 年 2 月 23 日

まつり

おほらまつり
大原祭り

→春の宮人

おほはらやーまつりのそでのーあまたにて
みゆきことなるーはるのみやひと

【慶長年間百韻27巻】／□□ [はるもこ
そ] / 裏白 / 慶長 13(1608) 年 1 月 3 日

おほはらやーかみのまつりもーちかつきて
はなをりかさすーはるのみやひと

【天正四年万句70巻】／山何 [みかつき
の] / 天正 4(1576) 年 5 月 6 日～7 月 19 日

まつりするかみ
祭りする神

→森の木隠れ

まつりせしーひもくれゆけはーかみさひて
みちはのこれるーもりのこかくれ

【永禄年間百韻28巻】／追善 [まれにと
ふ] / 永禄元 (1558) 年 11 月 5 日

まつりせしーあとはいくかそーかみのまへ
くさうちしけるーもりのこかくれ

【文明十四年万句52巻】／何紙 [つゆは
けさ] / 文明 14(1482) 年 7 月 4 日～9 月
14 日

まど

こころがまどのうち
心が窓の内

→灯の影

しつかなれーこころをしむるーまどのうち
かせふくよるのーともしひのかけ

【寛正年間百韻20巻】／何人 [ひはなか
く] / 寛正 3(1462) 年 1 月 25 日

いつおもひーたえむこころそーまどのうち
かかけてはまつーともしひのかけ

【合点之句 / 神宮文庫本】 / 恋 / 天文
9(1541) 年 12 月 25 日

まどをひらく
窓を開く

→夏衣

まとをひらけは一つきのありあけ
なつころもーいとひしもまた一みにふれて

【称名院追善千句】／何牆 [さかのやま]
／永禄6(1563)年12月14日～18日

まとをひらけは一かよふあきかせ
なつころもーうすきさへみにーいとはれて

【天正年間百韻57巻】／□□ [ゆふたち
の]／天正17(1589)年6月16日

なみたしくれて一かせそみにしむ
なほさりとーおもふなひとのーあきのそら

【三島千句】／何木 [やまかせに]／文明
3(1471)年3月21日～23日

よふかきやまのーかせそみにしむ
しくれせぬーねさめはいかにーあきのそら

【葉守千句】／何木 [あらかりし]／長享
元(1487)年10月9日<～11日>

みにしみる
身にしみる

→^{そでにかける}
袖に掛ける

みにしめてーおもふきよみかーいそまくら
なみのおとをもーそてにかけつつ

【紹巴亡父追善千句】／何木 [おとろけど]
／天文24(1555)年3月26日～晦日

みにしめてーわすれぬこそはーかたみなれ
ひとのなみたをーそてにかけつつ

【永禄元年花千句】／□□ [さそふなよ]
／永禄元(1558)年3月23日～25日

→^{つきさやか}
月さやか

ことのねのーあかぬしらへをーみにしめて
おきみてみれば一つきさやかなり

【飯盛千句】／何木 [かすかのの]／永禄
4(1561)年5月27日～29日

みつのえやーゆふへのあはれーみにしめて
よさのみなどの一つきさやかなり

【寛永年間百韻15巻】／□□ [ふたよあ
けて]／裏白／寛永5(1628)年1月3日

みのゆくえ
身の行方

→^{あかしくらす}
明かし暮らす

いにしへにーまかせやせましーみのゆくへ
いたつらにやはーあかしくらさむ

【伊予千句】／御何 [すすしきは]／天文
6(1537)年5月22日

たくふれはーかせまつつゆのーみのゆくへ
なかめてつきにーあかしくらさむ

【文明十四年万句52巻】／堀何 [かるひ
とは]／文明14(1482)年7月4日～9月
14日

まどい

まどいする
円居する

→^{までのがずかず}
袖の数々

なかきひもーいりあやしたふーまとゐして
いろにくれぬるーそてのかすかす

【称名院追善千句】／何牆 [さかのやま]
／永禄6(1563)年12月14日～18日

ちれはさくーはなよりはなにーまとゐして
はるはこゆみのーそてのかすかす

【慶長年間百韻27巻】／□□ [あらしに
も]／裏白／慶長5(1600)年1月3日

まぼろし

まぼろし
幻

→^{こころづかい}
心使い

ゆきてとふなるーまぼろしもかな
おもかけもーこころつかひにーなるかとよ

【文安雪千句】／花之何 [ゆきふれは]／
文安2(1445)年10月18日

おもひをつけむーまぼろしもかな
こぬひとやーこころつかひにーかはるらむ

【成立不詳・心敬以前14巻】／何人 [こ
もとの]／成立時不詳

み

かぜがみにしみる
風が身にしみる

→^{あきのそら}
秋の空

みをおもう
身をおもう→^{みよしののおく}
み吉野の奥あれはある一みともいつまで一おもふらむ
たえはやあとを一みよしののおく【浅間千句】／白何〔たますたれ〕／永正
11(1514)年5月13日～19日すつるみも一はるはみやこや一おもふらむ
かすめはとほき一みよしののおく【文明年間百韻34巻】／何船〔かせふか
ぬ〕／文明9(1477)年1月22日みわたのむな
身を頼むな→^{いのち}
命いつくもかりの一みをあなたのみそ
たれもよに一ありははてしの一ののちにて【永禄年間百韻28巻】／山何〔ゆふかほ
に〕／永禄2(1559)年5月20日ゆふへのつゆの一みをあなたのみそ
けさのまを一つきかけろふの一ののちにて【宗叟関係9種】／宗叟句／静嘉堂文庫本a
／

みぎ

ひだりみぎ
左右→^{こころあらしうた}
心争う歌ふくふえに一あはするまひの一ひたりみき
こころあらしうたのくちくち【初瀬千句】／何衣〔しけるとも〕／享徳
元・2(1452)年、4月ゆるさるは一おなしくるまの一ひたりみき
こころあらしうたのかちまけ【文明十四年万句52巻】／栗何〔あけて
みむ〕／文明14(1482)年7月4日～9月
14日

みじかい

みじかよのつき
短夜の月→^{ほととぎす}
時鳥ありあけになる一みしかよのつき
ほととぎす一なほしのひねのつれなくて【宝徳四年千句】／山何〔みにしむは〕／
宝徳4(1452)年3月12日こころをすます一みしかよのつき
ほととぎす一またるそらに一かねなりて【寛文年間百韻22巻】／□□〔なつなき
は〕／寛文13(1673)年6月12日あまりみしかき一みしかよのつき
なつかりの一あしのしのひの一ほととぎす【天正四年万句70巻】／何心〔やまかけ
や〕／天正4(1576)年5月6日～7月19日みじかよのゆめ
短夜の夢→^{しのびま}
忍び妻むすふともなき一みしかよのゆめ
まちふけて一あふもほとなき一しのひつま【看聞日記紙背50巻】／山何〔やよやよ
ひ〕／応永31(1424)年3月18日みるもすくなき一みしかよのゆめ
ふけてあふ一わかれそはやき一しのひつま【看聞日記紙背50巻】／片何〔しもやい
と〕／応永31(1424)年10月26日→^{なにわのあし}
難波の葦とけてやはみる一みしかよのゆめ
かせそよく一なにはのあしの一かりまくら

【那智庵／北野天満宮本】／永正十二年／

おもかけをしき一みしかよのゆめ
あふほとも一なにはのあしの一ふしのまに

【那智庵／北野天満宮本】／永正十三年／

みず

あきのさわみず
秋の沢水

しぎなく
→鳴鳴く

をふねさをさすーあきのさはみつ
やまかけのーとこさたまらぬーしきなきて

【伊予千句】／何舟 [わきてみむ] ／天文
6(1537)年5月22日

しはふかくれのーあきのさはみつ
ゆふまくれーきりふるつきにーしきなきて

【文安年間百韻9巻】／何人 [なもしらぬ]
／文安4(1447)年8月19日

いけみず
池水

こほりとけゆく
→氷解け行く

いけみつのーつきかけあらふーやなきかな
こほりとけゆくーなみのあさかせ

【嵯峨千句】／山何 [いけみつの] ／(元
龜4) 天正元(1573)年正月9日～11日

いけみつのーささなみさそふーはるのかせ
いはまいはまのーこほりとけゆく

【慶長年間百韻27巻】／□□ [はるさめ
も] ／慶長9(1604)年10月6日

いさらののみず
いさら井の水

あけるよ
→明ける夜

こほりのひまのーいさらののみつ
かはおとのーあめかときけはーあくるよに

【天文廿四年梅千句】／何木 [つみそへよ]
／天文24(1555)年正月7日

かすみにむせふーいさらののみつ
うくひすのーこゑするなかれーあくるよに

【大永四年月並千二百韻】／□□ [うのは
なの] ／月並千二百韻／大永4(1524)年4
月23日

かけいにうけるみず
懸樋に受ける水

ここかしこ

かけひにうくるーみつのまにまに
ここかしこーいはのはさまもーううるたに

【浜宮千句】／□□ [ちりうせぬ] ／

かけひにうくるーおほかはのみつ
ここかしこーなかれのすゑかーいせのうみ

【天正四年万句70巻】／下何 [むらさき
の] ／天正4(1576)年5月6日～7月19日

かすみのうちのみずのみなかみ
霞の内の水の水上

こもよう
→言問う

かすみのうちのーみつのみなかみ
こととはむーいつくかはるのーみなどかは

【天文年間百韻38巻】／何人 [はなのい
ろも] ／天文14(1545)年2月25日

かすみにおつるーみつのみなかみ
はるくるるーうちのしはふねーこととはむ

【行助関係4種】／行助句集／書陵部本／
文正元(1466)年(7月16日)

さわみずのおと
沢水の音

ふねくだすふしみ
→舟下す伏見

きけはさむけきーさはみつのおと
ふねくたすーふしみのつきのーふくるよに

【竹林抄／新古典文学大系本】／秋／文明
8(1476)年5月頃

きけはさむけきーさはみつのおと
ふねくたすーふしみのつきのーふくるよに

【心敬関係10種】／心敬僧都百句／岩瀬
文庫本／文明7(1475)年4月16日以前

きけはさむけきーさはみつのおと
ふねくたすーふしみのつきのーふくるよに

【名所句集／静嘉堂文庫本】／秋／(大永
前後)

つきもさひしきーさはみつのおと
ふねくたすーひとふしみのーえはふけて

【心敬関係10種】／吾妻辺云捨／天理本
／

ながれるみず
流れる水

よしのがわ
→吉野川

なかるるみつのーととまらしとや
なみにはなーそをたにのこせーよしのかは

【園塵第三／統群書類従本】／春／文亀元
(1501)年3月18日

なかるみつの一ゆくへしらすや
かたとこそ一はなもきゆらめ一よしのかは

【園塵第四／早稲田大学本】／春／永正6、7
年

なかるみつの一ゆくへしらはや
あわとこそ一はなもきゆらめ一よしのかは

【名所句集／静嘉堂文庫本】／春／(大永
前後)

みずかげのさびしさ
水影の寂しさ

かえる
→帰る

かはへのみつの一かけのさひしさ
うちむれて一みそせしもや一かへるらむ

【天文年間百韻38巻】／x x [したみつ
も]／天文24(1555)年9月2日

いたるのしみつ一かけのさひしさ
ゆふくれや一すすみしひとも一かへるらむ

【宗長関係8種】／老耳／天理本／

みずこえる
水越える

なみのうきはし
→浪の浮橋

のをめくる一よとのかはきし一みつこえて
うへにゆきふる一なみのうきはし

【紫野千句】／何物 [したくさの]／延文
2(1357)年以後-応安3年6月以前

さみたれに一さはへのなかれ一みつこえて
ふめはあやふき一なみのうきはし

【因幡千句】／山何 [ふるゆきは]／文明
7(1475)年11月26日<~28日>

みずにおうやまぶき
水に匂う山吹

あめはれたはるのくれ
→雨晴れた春の暮れ

こふかきみつに一にほふやまふき
なかあめの一ひをうつすまに一はるくれて

【三島千句】／二字反音 [いけすみて]／
文明3(1471)年3月21日~23日

いしはしるみつに一にほふやまふき
あめはるる一せせのしらなみ一はるくれて

【成立不詳・宗長以前15巻】／初何 [た
てなから]／成立時不詳

みずのおと
水の音

いずこにある
→何処にある

うつみつる一たけはかけひの一みつのおと
いしまのこけは一いつくなるらむ

【天正年間百韻57巻】／何人 [ときはい
ま]／天正10(1582)年5月24日

とめよれは一くるるいはまの一みつのおと
いつくなるらむ一たきつかはかみ

【慶長年間百韻27巻】／□□ [さきつか
む]／裏白／慶長19(1614)年1月3日

みずのさびあゆ
水の錆鮎

やなぎかげ
→柳陰

つきにひかるや一みつのさひあゆ
えたかはす一もみちはいかに一やなぎかけ

【応永年間百韻7巻】／□□ [x x はせて]
／応永24(1417)年3月16日

みしふかくれの一みつのさひあゆ
ちるとみて一そてにいろつく一やなぎかけ

【文安年間百韻9巻】／何船 [ときはなる]
／文安元(1444)年10月12日

みずのすえみえる
水の末見える

くれるはしのひとすじ
→暮れる橋の一筋

たききとり一みつをむすひし一すゑみえて
やまくれかかると一はしのひとすち

【秋津洲千句】／何木 [ひとさかり]／天
文15(1546)年8月25日

こほりとく一みつをつつみの一すゑみえて
たえたえくるる一はしのひとすち

【元龜年間百韻6巻】／何船 [むさしのも]
／元龜3(1572)年3月18日

みずのたえだえ
水の絶え絶え

あきおひ
→朝氷

むすひすてたる一みつのたえたえ
ふゆはまた一あさかのぬまの一あさこほり

【園塵第一／統群書類従本】／冬／長享2年

かけひのいほにーみつのだえたえ
あさこほりーこよひはしめてーむすふらむ

【宗長関係8種】／老耳／天理本／

みずのひとすじ
水の一筋

→滝

そそくはかりのーみつのひとすぢ
ふりにけるーあとやなみたのーたきならむ

【大永四年月並千二百韻】／□□ [しもやひぬ]／月並千二百韻／大永4(1524)年9月23日

みなかみしらぬーみつのひとすぢ
そてやたたーうきおとなしのーたきならむ

【名所句集／静嘉堂文庫本】／恋下／(大永前後)

みずはすむ
水は澄む

→明け方

あかてみなせのーみつはすみけり
あけかたのーたきよりうへもーつきなれや

【石山四吟千句】／青何 [つきやふね]／天文24(1555)年8月15日～19日

くむにいほまのーみつはすみけり
あけかたのーつきにいてぬるーそてみえて

【慶長年間百韻27巻】／□□ [けふことに]／裏白／慶長8(1603)年1月3日

みずはれる
水晴れる

→朱のそほ舟

かけおそきーゆふひのいりえーみつはれて
なみもよりくるーあけのそほふね

【皇学館文庫本千句】／□□ [きてかへる]／永禄6(1563)年11月18日以前

はるはるとーやまもといつるーみつはれて
たひねするよのーあけのそほふね

【壁草／書陵部本】／旅／永正9年

みずひややか
水冷ややか

→滝の浪

みつひややかにーおつるかはつら
あしのはもーたたかれわたるーたきつなみ

【天正四年万句70巻】／山何 [みかつき]の]／天正4(1576)年5月6日～7月19日

みつひややかにーすみわたるこゑ
おちつくすーはなのこのまのーたきつなみ

【天正四年万句70巻】／玉何 [まつはらも]／天正4(1576)年5月6日～7月19日

やまのいのみず
山の井の水

→木の下

むすふはつきぬーやまのゐのみつ
このもとにーひとつふたつのーこけのいほ

【成立不詳・宗長以前15巻】／花之何 [ふゆのいろに]／成立時不詳

むすこけふかしーやまのゐのみつ
すすしさはーきりのわかはのーこのもとに

【壁草／大阪天満宮文庫本】／夏／永正2(1505)年8月23日以後同3年3月以前

みだれる

つゆがみだれる
露が乱れる

→朝霧

つゆそみたるるーにはのたまささ
あさきりのーまかきにつきのーさしのこり

【浜宮千句】／□□ [くれかたき]／

あめにもまさりーつゆそみたるる
あさきりのーみのしろころもーしをれきて

【壁草／統群書類従本】／秋／永正3(1506)年3月頃

つゆにみだれる
露に乱れる

→飛ぶ蜚

つゆにみたるるーあしのひとむら
くれぬれはーきりのひまひまーとふほたる

【浜宮千句】／□□ [ときもよも]／

ねにこそなかれーつゆにみたるる
したもえをーしのふののきにーとふほたる

【心敬関係10種】／心敬僧都百句／岩瀬
文庫本／

みだれがみ
乱れ髪

あおやぎのいと
→青柳の糸

たはつけしーすちともあらぬーみたれかみ
つゆにぬれぬるーあをやきのいと

【文禄年間百韻12巻】／□□〔はなさけ
と〕／文禄2(1593)年2月18日

かきやるは一つれなきかけのーみたれかみ
いているかとのーあをやきのいと

【園塵第四／早稲田大学本】／春／永正6、7
年

みだれてとぶほたる
乱れて飛ぶ螢

みずのすずしき
→水の涼しき

とふほたる一つゆにみたれてーくるるのに
ひとまかけするーみつのすずしき

【葉守千句】／初何〔わかこゑを〕／長享
元(1487)年10月9日<~11日>

かたしきのーそてにみたれてーとふほたる
なかるるおともーみつのすずしき

【石山四吟千句】／青何〔つきやふね〕／
天文24(1555)年8月15日~19日

みち

いくえとよらのたけのしたみち
幾重豊浦の竹の下道

またつきあるゆきのほれる
→また月ある雪の晴れる

いくへとよらのーたけのしたみち
にしにまた一つきあるゆきのーけさはれて

【竹林抄／新古典文学大系本】／冬／文明
8(1476)年5月頃

いくへとよらのーたけのしたかけ
あめにまた一つきあるゆきのーよるはれて

【心敬関係10種】／心玉集／静嘉堂文庫本
／

かえるさのみち
帰るさの道

なる
→なる

あさたかひとのーかへるさのみち
かきくもりーそらやゆきにもーなりつらむ

【天文十八年梅千句】／何船〔つきにうめ〕
／天文18(1549)年正月11日

かすみこめたるーかへるさのみち
なみたにやーおほろつきよとーなりつらむ

【文明十四年万句52巻】／山何〔つゆや
けさ〕／文明14(1482)年7月4日~9月
14日

かすみにたどるみち
霞にたどる道

よふことり
→呼子鳥

かすみにたどるーいはのかけみち
よふことりーなきてこころのーしるへせよ

【葉守千句】／白何〔こからしを〕／長享
元(1487)年10月9日<~11日>

かすみにたどるーみちのをちこち
よふことりーこゑするかたにーひはくれて

【天文十八年梅千句】／青何〔ゆけはうめ〕
／天文18(1549)年正月11日

かわぞいのみち
川沿いの道

あかつき
→暁

みつうちけふるーかはそひのみち
あかつきのーつきのこるえにーふねさして

【河越千句】／二字反音〔はるみても〕／
文明2(1470)年正月10~12日

かすかにのこるーかはそひのみち
あかつきのーやまにかかれるーよはのつき

【文明年間百韻34巻】／何木〔うめかか
を〕／文明15(1483)年2月19日

わたしがね
→渡し舟

くたれはあさきーかはそひのみち
はやきせにーおとさていそのーわたしふね

【成立不詳・宗祇以前15巻】／x x〔は
るやたつ〕／存疑／成立時不詳

つつくともなきーかはそひのみち
くれぬれはーひとりふたりのーわたしふね

【天正年間百韻57巻】／何人〔みれはみ
し〕／天正12(1584)年9月13日

きりのしたみち
霧の下道

→音がする

ましろそてみぬ一きりのしたみち
たれとしも一わかすつきまつ一おとはして
【伊勢千句】／三字中略 [うめさきて] /
大永 2(1522) 年 8 月 4 日～8 日

あふひともなき一きりのしたみち
さととほき一みやまにたきの一おとはして
【心敬関係 1 0 種】／心敬僧都百句／岩瀬
文庫本／

このもとみち
木の下道

→片敷く

ゆふへすすしき一このもとのみち
しつかなる一かせのさゆりは一かたしきて
【宗牧追善千句】／山何 [ちるちらぬ] /
永禄 4(1561) 年 9 月 14 日・15 日

あくるもしはし一このもとのみち
さよころも一はなのほひに一かたしきて
【合点之句／神宮文庫本】／春／天文
9(1541) 年 12 月 25 日

さとはなれたみち
里離れた道

→重なる

さとはなれなる一まつかけのみち
おちはなほ一くつるかうへに一かさなりて
【称名院追善千句】／何牆 [さかのやま]
／永禄 6(1563) 年 12 月 14 日～18 日

さとはなれなる一みちのたえたえ
かひすつる一まくさはみとり一かさなりて
【文禄年間百韻 1 2 卷】／□□ [わかなつ
みし] / 文禄 2(1593) 年 1 月 8 日

つきのたびのみち
月の旅の道

→後の世の秋

つきならば一いさとてゆかむ一たひのみち
まよふななけく一のちのよのあき
【文明十四年万句 5 2 卷】／花何 [みたす
なよ] / 文明 14(1482) 年 7 月 4 日～9 月
14 日

はれよくも一つきこそたより一たひのみち
おもふもつらし一のちのよのあき

【宗砌関係 9 種】／宗砌句／静嘉堂文庫本 b

つゆのふるみち
露のふる道

→夜半のつき

わけはやたゆる一つゆのふるみち
ひとはいさ一みしはわすれぬ一よはのつき
【永正年間百韻 3 4 卷】／何船 [うちなひ
き] / 永正 13(1516) 年 1 月

ぬれてみなせの一つゆのふるみち
しらくくに一うつろひふくる一よはのつき
【天文年間百韻 3 8 卷】／何人 [にほへか
つ] / 天文 13(1544) 年 1 月 29 日

のちのよのみち
後の世の道

→大和歌

いかさまならむ一のちのよのみち
かすかすに一かはりもてきぬ一やまとうた
【成立不詳・心敬以前 1 4 卷】／何船 [ち
りしえぬ] / 成立時不詳

くらきそうらみ一のちのよのみち
たとたとし一これよりさきの一やまとうた
【宗砌関係 9 種】／宗砌句／静嘉堂文庫本 b

みちがほそい
道が細い

→橋の一筋

さしおほふ一いはるのものと一みちほそみ
ひとやはかよふ一はしのひとすち
【成立不詳・宗長以前 1 5 卷】／x x [さ
みたれや] / 成立時不詳

おしねもる一たのものにかよふ一みちほそみ
しもうすこほる一はしのひとすち

【心敬関係 1 0 種】／芝草内連歌合／天理本

みちたえだえ
道絶え絶え

→雪ふる

みちたえたえのーみねのふるてら
あくれともーかとをとちたるーゆきふりて

【表佐千句】／何路 [みなかみの]／文明
8(1476)年3月6日<~8日>

みちたえたえのーすゑのふるはた
つまきこるーそはのいはかきーゆきふりて

【宗長関係8種】／老耳／天理本／

みちである
道である

かけはしのすゑ
→掛橋の末

ひとすちやーこかけにつつくーみちならむ
いはまこけむすーかけはしのすゑ

【皇学館文庫本千句】／□□ [いろみえて]
／永禄6(1563)年11月18日以前

いつくにかーつたへのこせるーみちならむ
かたやまきしもーかけはしのすゑ

【天正年間百韻57巻】／x x [わけゆか
は]／天正4(1576)年8月19日

みちのかけはし
道の掛橋

てらのかど
→寺の角

とほくみえぬるーみちのかけはし
とひよるもーひとけまれなるーてらのかと

【天正年間百韻57巻】／□□ [まつなら
ぬ]／天正17(1589)年1月4日

ゆきとけはつるーみちのかけはし
とひよるもーおくものふかきーてらのかと

【慶長年間百韻27巻】／□□ [ちりてさ
へ]／慶長4(1599)年6月18日

とひよる
→訪い寄る

とほくみえぬるーみちのかけはし
とひよるもーひとけまれなるーてらのかと

【天正年間百韻57巻】／□□ [まつなら
ぬ]／天正17(1589)年1月4日

ゆきとけはつるーみちのかけはし
とひよるもーおくものふかきーてらのかと

【慶長年間百韻27巻】／□□ [ちりてさ
へ]／慶長4(1599)年6月18日

みちのすゑ
道の末

たちやすらう
→立ち安らう

なつころもーはるはるきぬるーみちのすゑ
みつゆくはしにーたちそやすらふ

【天文年間百韻38巻】／何人 [さくふち
の]／天文18(1549)年3月24日

くれかかるとーものみくるまのーみちのすゑ
やとりさためすーたちそやすらふ

【天正四年万句70巻】／何鳥 [まつむし
の]／天正4(1576)年5月6日~7月19日

みちのつじうら
道の辻占

まちおびる
→待ち侘びる

ききもさためぬーみちのつじうら
はるかなるーたひのかへさをーまちわひて

【永禄石山千句】／青何 [わくらはの]／
永禄7(1564)年5月12日

こひにまよへるーみちのつじうら
まちわひてーわれとははやとーおもふみに

【文安頃千句4巻】／二字返音 [はなをりて]
／

みちのひとすじ
道の一筋

はなれこま
→放れ駒

たなかにつつくーみちのひとすち
はなれこまーいはふかたにしーゆきつれて

【元龜年間百韻6巻】／何人 [はなのとき
も]／元龜4(1573)年6月6日

さとはみえぬもーみちのひとすち
つななからーいつくよりかはーはなれこま

【文禄年間百韻12巻】／□□ [あつまや
の]／文禄2(1593)年5月6日

ゆきつれる
→行き連れる

たなかにつつくーみちのひとすち
はなれこまーいはふかたにしーゆきつれて

【元龜年間百韻6巻】／何人 [はなのとき
も]／元龜4(1573)年6月6日

かよふをのへのーみちのひとすち
このかたはーたききしはとりーゆきつれて

【文明十五年千句11巻】／何路〔ひめもの〕／文明15(1483)年*月*日～3月2日

みちのやすらい
道の安らい

→^{さとのかなわら}里の傍ら

やなきちるーかきねのみちのーやすらひに
ややくれかかろーさとのかたはら

【天文年間百韻38巻】／何人〔かせみえて〕／千句第四／天文13(1545)年間11月25日

たまほこのーみちもすすしきーやすらひに
みやこににたるーさとのかたはら

【文禄二年千句10巻】／夕何〔しくれても〕／文禄2(1593)年4月8日～10日

やまのしたみち
山の下道

→^{ほととぎす}時鳥

むらさめすくるーやまのしたみち
まちてみよーなかくてはあらしーほととぎす

【文明年間百韻34巻】／何人〔ゆきのやま〕／文明14(1482)年1月16日

とふにならはぬーやまのしたみち
またときくーたひのゆくてのーほととぎす

【永正年間百韻34巻】／何人〔みやまきに〕／永正14(1517)年3月22日

→^{きおじかのこえ}さ牡鹿の声

そよくたのものはーやまのしたみち
さをしかのーたちとしらるるーこゑすなり

【天正年間百韻57巻】／何路〔なみこえて〕／天正9(1581)年2月3日

きりのあしたのーやまのしたみち
さをしかのーいまひとこゑはーかすかにて

【合点之句／神宮文庫本】／秋／天文9(1541)年12月25日

→^{しかなく}鹿鳴く

きこりたたすむーやまのしたみち
くさかりのーふえにはよらぬーしかなきて

【親当関係2種】／親当自連歌合／早稲田大学本／

ゆふきりふかきーやまのしたみち
いりあひのーこゑしつまれはーしかなきて

【基佐集／静嘉堂文庫本】／秋／永正6(1509)年以前

わかれじのあと
別れ路の跡

→^{おもかけ}面影

あくかれいつるーわかれちのあと
おもかけにーわかたましひやーつれぬらむ

【難波田千句】／□□〔あけほのを〕／文明14(1482)年10月前後

くもこそかたみーわかれちのあと
ゆふへにはーあめともなれるーおもかけに

【難波田千句】／□□〔にしきにて〕／文明14(1482)年10月前後

みつぎ

はこふみつぎ
運ぶ貢

→^{くににしたがう}国に従う

はこふみつぎのーおほきしなしな
このくににーよもの□□□□ーしたかひて

【看聞日記紙背50巻】／山何〔まつそひて〕／応永26(1419)年2月6日

はこふみつぎのーふねそひまなき
わかくににーもろこしまてもーしたかひて

【看聞日記紙背50巻】／〔やまもとは〕／文安5(1448)年以前

→^{もろこしまでもしたがう}唐土までも従う

たまこかねーはこふみつぎのーかすかすに
もろこしまてもーいまそしたかふ

【看聞日記紙背50巻】／何物〔かみとうめ〕／応永29(1422)年2月25日

はこふみつぎのーふねそひまなき
わかくににーもろこしまてもーしたかひて

【看聞日記紙背50巻】／〔やまもとは〕／文安5(1448)年以前

みね

くもかかるみね
雲かかる峰はなさかり
→花盛りみるかうちより一くもかかるみね
はなさかり一かすみはるれは一あらはれて【文禄年間百韻 1 2 巻】/□□ [わかなつ
みし] / 文禄 2(1593) 年 1 月 8 日きゆるとみしも一くもかかるみね
かつらきや一さきつつきての一はなさかり【文禄年間百韻 1 2 巻】/□□ [うめかえ
や] / 文禄 4(1595) 年 7 月 21 日みねこえる
峰越えるはるのかりがね
→春の雁くもにけふ一はなちりはつる一みねこえて
きけはいまはの一はるのかりかね【長享年間百韻 6 巻】/何人 [ゆきなから]
/ 長享 2(1488) 年 1 月 22 日ゆきおくれ一ひとりかすみの一みねこえて
よはあけかたの一はるのかりかね【大永三年月並千三百韻】/□□ [はるを
まつ] / 月並千三百韻 / 大永 3(1523) 年 11
月 23 日みねたかい
峰高いさおじかのこえ
→さ牡鹿の声みねたかみ一へたつるつきの一あきふけて
つまやいつくの一さをしかのこゑ【宗長追善千句】/白何 [みしやいつ] /
(享禄 5) 天文元 (1532) 年 3 月 25 日かたをかの一のへのむかひの一みねたかみ
あけはなれても一さをしかのこゑ【元龜年間百韻 6 巻】/何人 [はなのとき
も] / 元龜 4(1573) 年 6 月 6 日みねのあきかぜ
峰の秋風かりなく
→雁鳴くつきさやかなる一みねのあきかせ
かきつらね一みたれぬくもに一かりなきて

【天文廿四年梅千句】/何木 [つみそへよ]

/ 天文 24(1555) 年正月 7 日

たもとふきすく一みねのあきかせ
さよころも一よさむのつきに一かりなきて【壁草 / 大阪天満宮文庫本】/ 秋 / 永正
2(1505) 年 8 月 23 日以後同 3 年 3 月以前みねのいお
峰の庵まつかぜのこえ
→松風の声みねのいほ一このはののちも一すみあかて
さひしさならふ一まつかせのこゑ【長享年間百韻 6 巻】/何人 [ゆきなから]
/ 長享 2(1488) 年 1 月 22 日しつけさは一ひとりかうへの一みねのいほ
ともとたのむも一まつかせのこゑ【永正年間百韻 3 4 巻】/何路 [はやみの
に] / 永正 12(1515) 年 11 月 10 日みねのかけはし
峰の掛橋きるさけぶ
→猿叫ぶかははそこなる一みねのかけはし
さるさけふ一こゑさへさむき一たきのもと【顕証院会千句】/何人 [えたわけの] /
宝徳元 (1449) 年 8 月 19 日~21 日こすゑのあきの一みねのかけはし
さるさけふ一やまのつきの一ありあけに【永禄年間百韻 2 8 巻】/□□ [つゆはそ
てに] / 永禄 4(1561) 年 9 月 19 日みねのくも
峰の雲やまほとときす
→山時鳥あらましに一こよひもあけぬ一みねのくも
かならずいつの一やまほとときす【永正十花千句】/何船 [ねぬるよを] /
永正 13(1516) 年 3 月 11 日~14 日なかめつつ一かたみもつらき一みねのくも
いつらはこえし一やまほとときす【成立不詳・宗養以前 8 巻】/何木 [とこ
なつに] / 成立時不詳みねのしらゆき
峰の白雪

のこる
→残る

のはしもかれの一みねのしらゆき
さとふりぬ一たかかよひちの一のこるらむ

【柴野千句】／何路【あふちさく】／延文
2(1357)年以後-応安3年6月以前

それとはかりの一みねのしらゆき
いつおきて一かれののしもは一のこるらむ

【柴野千句】／山何【ゆふたちは】／延文
2(1357)年以後-応安3年6月以前

ふりそめけりな一みねのしらゆき
まつたかく一しくれのくもや一のこるらむ

【熊野千句】／何色【なみしけし】／文正
元(1466)年3月以前

みねのふるでら
峰の古寺

はなさく
→花咲く

くものなかはの一みねのふるでら
まつたて一はやしのおくに一はなさきて

【因幡千句】／何人【みるたひに】／文明
7(1475)年11月26日<~28日>

かさなるのきの一みねのふるでら
をはつせや一ちるあともなほ一はなさきて

【天正年間百韻57巻】／何木【こころあ
てに】／天正3(1575)年1月7日

みねのゆき
峰の雪

としがくれる
→年が暮れる

みねのゆき一いくへともなく一ふみならし
つまきこりつむ一としはくれけり

【出陣千句】／白何【あをやきや】／永正
元(1504)年10月25日~27日

あさなあさな一やへふりまかふ一みねのゆき
はやのこりなく一としはくれけり

【天文年間百韻38巻】／何路【あさかほ
の】／天文10(1541)年7月29日

みや

いにしへのみや
古の宮

はなさく
→花咲く

はるのこころは一いにしへのみや
をかのへの一なきさのさくら一はなさきて

【名所句集／静嘉堂文庫本】／春／(大永
前後)

たまをみかける一いにしへのみや
よしのなる一たきつかはつら一はなさきて

【名所句集／静嘉堂文庫本】／春／(大永
前後)

ふるみやのうち
古宮の内

つばくらめ
→燕

すたれやつる一ふるみやのうち
つばくらめ一いているのきの一ひましけく

【寛正年間百韻20巻】／何人【うめおく
る】／寛正6(1465)年1月16日

はるをわすれぬ一ふるみやのうち
おなしすに一こころやかくる一つばくらめ

【行助関係4種】／行助句集／書陵部本／

みやこ

ふるきみやこのはる
古き都の春

うちかすみ
→うち霞む

ふるきみやこの一はるのはかなさ
しほかまや一けふりしなこり一うちかすみ

【明応年間百韻22巻】／山何【つきもひ
とに】／明応5(1496)年8月15日

ふるきみやこの一はなのひともと
つゆかかると一みちのしはくさ一うちかすみ

【大永三年月並千三百韻】／□□【はなに
つき】／月並千三百韻／大永3(1523)年3
月23日

みやこがこいしい
都が恋しい

なくほととぎす
→鳴く時鳥

むかしにならの一みやここひしも
つきそすむ一なきてきつらむ一ほとときす

【享禄年間百韻8巻】／何船 [はるのいろ]
／享禄 5(1532) 年 1 月 18 日

いやとほくなる一みやここひしも
なきすてし一くさのまくらの一ほとときす

【天文年間百韻38巻】／何人 [にほへか
つ]／天文 13(1544) 年 1 月 29 日

みやがとおい
都が遠い

あすかかせ
→明日香風

みやこをとほみ一わかれぬるみち
あすかかせ一たつねてふかむ一そもなし

【表佐千句】／薄何 [ゆきてみむ]／文明
8(1476) 年 3 月 6 日<~8 日>

みやこをとほみ一すめるわひしさ
あすかかせ一いたつらにのみ一みのふりて

【永正十花千句】／初何 [はなはたた]／
永正 13(1516) 年 3 月 11 日~14 日

みやこのつきにかえる
都の月に帰る

くさまくら
→草枕

みやこのつきに一たれかへるらむ
しらぬのに一ひとりつゆけき一くさまくら

【応仁年間百韻6巻】／x x [そてにみな]
／応仁 2(1468) 年 10 月 22 日

みやこのつきに一われやかへらむ
ゆめもみを一さそひてさめね一くさまくら

【宗長関係8種】／興津宛／書陵部本／

みやごと

みやごともない
宮事もない

はながおとろえる
→花が衰える

かすみのほらは一みやごともなし
ときすくる一こころのはなの一おとろへて

【三島千句】／三字中略 [はるよまで]／
文明 3(1471) 年 3 月 21 日~23 日

うきときはまた一みやごともなし
あきふかみ一はなのきとも一おとろへて

【心敬関係10種】／吾妻辺云捨／天理本
／

みる

おしんではなをみる
惜しんで花を見る

そでのうめのか
→袖の梅の香

みなひとの一をしむによらぬ一はなをみて
をりてかへさは一そでのうめかか

【飯盛千句】／何路 [しけるきに]／永禄
4(1561) 年 5 月 27 日~29 日

をしみかね一ちるにまかする一はなをみて
をらすすきぬる一そでのうめかか

【大永四年月並千二百韻】／□□ [うくひ
すの]／月並千二百韻／大永 4(1524) 年 2
月 23 日

おのえのはなをみる
尾上の花を見る

かすみにくれる
→霞に暮れる

あすはみむ一をのへのはなの一いかならむ
かすみにくる一たかまとのみや

【慶長年間百韻27巻】／□□ [ゆきにし
も]／裏白／慶長 9(1604) 年 1 月 3 日

くもとみし一をのへのはなの一あともなし
かすみにくる一かねのさひしさ

【慶長年間百韻27巻】／□□ [うめかか
は]／裏白／慶長 11(1606) 年 1 月 3 日

かぜみえる
風見える

はつかりのこゑ
→初雁の声

はなすすき一なひくはかりに一かせみえて
つきにほのきく一はつかりのこゑ

【明応年間百韻22巻】／何人 [ひかしけ
ふ]／本式／明応 5(1496) 年 1 月 9 日

むらさめに一つゆふきみたす一かせみえて
すすきになひく一はつかりのこゑ

【新撰菟玖波集／実隆本】／秋上／明応
4(1495) 年 9 月 26 日

つきをみる
月を見る

あきかぜがふく
→秋風が吹く

たのむよに一またふけはてぬ一つきをみて
とふかときけは一あきかせそふく

【文明年間百韻34巻】／何路〔あさなけ
に〕／文明8(1476)年1月11日

あらましのーいたつらふしにーつきをみて
ちきりしものをーあきかせそふく

【老葉／吉川本】／恋上／文明13(1481)年
夏頃

はなみえる
花見える

→鶯の聲

ものふかきーしけみをゆけはーはなみえて
やとりをしむるーうくひすのこゑ

【文安年間百韻9巻】／朝何〔さかきはに〕
／文安4(1447)年10月18日

かくしおくーのきはのおくにーはなみえて
はるやするへ□ーうくひすのこゑ

【天正四年万句70巻】／何木〔さくはな
の〕／天正4(1576)年5月6日～7月19日

まつみえる
松見える

→帰る雁

かすめともーつきまつやまはーまつみえて
くもちをはるかにーかへるかりかね

【看聞日記紙背50巻】／何路〔ふりかつ
け〕／応永29(1422)年【B】3月15日

とほさとのーはなをへたつるーまつみえて
やまのはつかにーかへるかりかね

【看聞日記紙背50巻】／何船〔ことはな
に〕／応永31(1424)年9月27日

みずのすえみえる
水の末見える

→暮れる橋の一筋

たききとりーみつをむすひしーすゑみえて
やまくれかかるとーはしのひとすぢ

【秋津洲千句】／何木〔ひとさかり〕／天
文15(1546)年8月25日

こほりとくーみつをつつみのーすゑみえて
たえたえくるるーはしのひとすぢ

【元龜年間百韻6巻】／何船〔むさしのも〕
／元龜3(1572)年3月18日

みるのもうい
見るのも憂い

→紅葉散る頃

さもあらぬーなきになしてーみるもうし
あらしのやまのーもみちちるころ

【延徳年間百韻16巻】／何人〔まつみよ
と〕／延徳4(1492)年2月8日

なかなかにーふたつのかははーみるもうし
みむろたつたのーもみちちるころ

【竹林抄／新古典文学大系本】／冬／文明
8(1476)年5月頃

むかう

かたるばかりにむかうおもかげ
語るばかりに向う面影

→それでない声

かたるはかりにーむかふおもかけ
それならぬーこゑもむつましーみやことり

【老葉／吉川本】／旅／文明13(1481)年
夏頃

かたるはかりにーむかふおもかけ
それならぬーこゑもうらめしーほととぎす

【論書4種】／宗長／

むかつてなみだおちる
向って涙落ちる

→なる

むかへはつきにーなみたおちけり
おいさりしーあきはたかよにーなりぬらむ

【竹林抄／新古典文学大系本】／雑下／文
明8(1476)年5月頃

むかふくさきにーなみたおちけり
たかさとのーよもきかそまとーなりぬらむ

【園塵第四／早稲田大学本】／雑下／永正
6、7年

むかし

むかし
昔

→蓬生の影

かたるよもーおなしはてなるーむかしにて
あたりよりまつーよもきふのかげ

【弘治三年春雪千句】／何木〔はなならて〕
／弘治3(1557)年正月7日～9日

はなさけは—おもひやらるる—むかしにて
はるともわかぬ—よもきふのかけ

【天正年間百韻57巻】／山何〔あをやきの〕
／天正3(1575)年2月2日

むかしをいまの
昔を今の

ほととぎす
→時鳥

むかしをいまの—おもかけのゆめ
おもひいてて—ふるきみやこの—ほととぎす

【住吉千句】／山何〔そめさらは〕／大永
元(1521)年11月1日～14日

むかしをいまの—こころとやせむ
わすれすも—なつはきてなく—ほととぎす

【天正四年万句70巻】／花何〔うくひすの〕
／天正4(1576)年5月6日～7月19日

むかしをおもうなみだ
昔を思いう涙

あきはかなしい
→秋は悲しい

むかしおもふ—なみたにつきや—くもるらむ
いととねさめの—あきそかなしき

【成立不詳・宗長以前15巻】／□□〔ま
たもなき〕／成立時不詳

むかしおもふ—なみたもつゆも—そてのうへ
ひとのこころの—あきそかなしき

【文禄年間百韻12巻】／□□〔けさのま
に〕／文禄2(1593)年1月14日

くさのいお
→草の庵

むかしおもふ—こよひはなみた—もよほして
くさのいほりの—あめのさひしさ

【初瀬千句】／何人〔なつやまに〕／享徳
元・2(1452)年、4月

むかしおもふ—なみたにかすむ—よはのつき
くさのいほりの—ゆふくれのはる

【文明十四年万句52巻】／何木〔あきの
ひも〕／文明14(1482)年7月4日～9月
14日

むさしの

とおきむさしの
遠き武蔵野

くさまくら
→草枕

ゆけともいまた—とほきむさしの
くさまくら—ゆめもみなから—あはれにて

【天文十八年梅千句】／何壙〔しつくさへ〕
／天文18(1549)年正月11日

わけてもすゑの—とほきむさしの
おのつから—やとかるかやの—くさまくら

【看聞日記紙背50巻】／何人〔まつちか
し〕／応永32(1425)年6月25日

むし

しげきむしのね
繁き虫の音

よわのつき
→夜半の月

かへのうちにも—しげきむしのね
みえこしも—ゆめとほさかる—よはのつき

【大原野十花千句】／何壙〔かをりきて〕
／元龜2(1571)年2月5日～7日

かせややさむき—しげきむしのね
やとれとは—すみやはあらず—よはのつき

【宗長関係8種】／老耳／天理本／

むしなく
虫鳴く

きりのしたみち
→霧の下道

をかのへの—かきほはまたき—むしなきて
ゆふかけふかき—きりのしたみち

【飯盛千句】／何衣〔つきいてて〕／永禄
4(1561)年5月27日～29日

あさほらけ—わけゆくかたに—むしなきて
そてさむくなる—きりのしたみち

【文明十四年万句52巻】／何船〔あきの
いろ〕／文明14(1482)年7月4日～9月
14日

むしのこえ
虫の声

あきふける
→秋更ける

むしのこゑ一のこるまかきのーはなおちて
こすゑうつろひーあきはふけけり

【兼守千句】／何路 [しくるやと]／長享
元 (1487) 年 10 月 9 日<~11 日>

たつねてもーあかすよほそきーむしのこゑ
あさなあさなにーあきはふけけり

【成立不詳・心敬以前 1 4 巻】／何路 [し
ろたへの]／成立時不詳

→^{つゆがみだれる}露が乱れる

むしのこゑーきけはいまはたーをりはへて
ゆふくれふかきーつゆそみたるる

【大永三年月並千三百韻】／□□ [あらた
まの]／月並千三百韻／大永 3(1523) 年 12
月 23 日

みちのへにーなきよわりたるーむしのこゑ
ゆけはもすそにーつゆそみたるる

【文明十四年万句 5 2 巻】／錦何 [つきひ
とつ]／文明 14(1482) 年 7 月 4 日~9 月
14 日

→^{ひとむらすすま}群薄

かれのにもーなほかけたのむーむしのこゑ
ひとむらすすきーちりなつくしそ

【三島千句】／何路 [なへてよの]／文明
3(1471) 年 3 月 21 日~23 日

わひしきはーかれのこりたるーむしのこゑ
ひとむらすすきーうちなひくかけ

【五吟一日千句】／何路 [いそのなみ]／
天正 9(1581) 年 11 月 19 日

むしのこゑ
虫の声々

→^{こはきはら}小萩原

なみたあらそふーむしのこゑこゑ
こはきはらーうつろふゆふへーかりなきて

【大永三年月並千三百韻】／□□ [はるを
まつ]／月並千三百韻／大永 3(1523) 年 11
月 23 日

あきのゆふへのーむしのこゑこゑ
あかすしもーなかむるはなのーこはきはら

【天正年間百韻 5 7 巻】／何人 [わかくさ
も]／天正 11(1583) 年 1 月 10 日

→^{あぐかぜ}吹く風

つゆもあたるーむしのこゑこゑ
かりまくらーよさむのつきをーふくかせに

【永祿年間百韻 2 8 巻】／□□ [ゆきにう
め]／永祿 5(1562) 年 2 月 1 日

あきはすゑののーむしのこゑこゑ
しもかれのーをはなくすはなーふくかせに

【宗碩関係 2 種】／宗碩百句／太田本／

むしのね
虫の音

→^{ころもでのつゆ}衣手の露

うたたねのーはしめはちかきーむしのねに
おほえすしほるーころもでのつゆ

【称名院追善千句】／初何 [したふなよ]
／永祿 6(1563) 年 12 月 14 日~18 日

むしのねにーむかしのあとのーこととひて
わけいるのへのーころもでのつゆ

【嵯峨千句】／花之何 [うめかかは]／(元
龜 4) 天正元 (1573) 年正月 9 日~11 日

→^{ふるさとのあき}古里の秋

むしのねもーみたるるつゆのーしけきのに
とへはなみたのーふるさとのあき

【大永三年月並千三百韻】／□□ [うめか
かや]／月並千三百韻／大永 3(1523) 年 2
月 23 日

むしのねもーきえわたるよのーありあけに
あはれなそへそーふるさとのあき

【天文年間百韻 3 8 巻】／夢想 [ちりてな
ほ]／天文 10(1541) 年 3 月

よわのむしのね
夜半の虫の音

→^{つきにかりまくら}月に仮枕

をささかもとのーよはのむしのね
ねられしなーつきにかせふくーかりまくら

【寛正年間百韻 2 0 巻】／何人 [うめおく
る]／寛正 6(1465) 年 1 月 16 日

ところさためぬーよはのむしのね
さやかなるーつきをみるみるーかりまくら

【大永年間百韻 1 4 巻】／何人 [ちあきを
も]／大永 5(1525) 年 9 月 21 日

むしろ

さむしろ
さ筵なくきりきりす
→鳴く蟋蟀

さむしろに—かれゆくよはの—つきもしれ
たのめはゆめに—なくきりきりす

【永禄年間百韻28巻】／何船〔ふくやい
かに〕／永禄5(1562)年3月7日

わひしきは—ひとりのあきの—さむしろに
なみたなそへそ—なくきりきりす

【元和年間百韻24巻】／□□〔まつふく
や〕／元和8(1622)年10月29日

さむしろのつき
さ筵の月のきのまつ
→軒の松

みをこからしの—さむしろのつき
とこふりて—ひたすらひどは—のきのまつ

【宗長追善千句】／何色〔うくひすの〕／
(享禄5)天文元(1532)年3月25日

しももおきそふ—さむしろのつき
くれてより—こゑかしかまし—のきのまつ

【永禄石山千句】／三字中略〔こすゑまで〕
／永禄7(1564)年5月12日

むね

むねのおもい
胸の思いわがなみだ
→我が涙

むねのおもひそ—とふにきえぬる
わかなみた—かさねておちは—いかかせむ

【弘治三年春雪千句】／何木〔はなならて〕
／弘治3(1557)年正月7日～9日

むねのおもひそ—しほしみてうき
わかなみた—いくへのいろを—からころも

【成立不詳・宗砌以前6巻】／何人〔みつ
たまり〕／成立時不詳

むらさめ

あきのむらさめ
秋の村雨つゆがうい
→露が憂い

うらつたひする—あきのむらさめ
ぬれとほる—わかたひころも—つゆもうし

【文安年間百韻9巻】／山何〔はなはひも〕
／文安5(1448)年2月5日

やまのかけゆく—あきのむらさめ
ふりてすむ—いほりののきの—つゆもうし

【文明十四年万句52巻】／山何〔あきか
せに〕／文明14(1482)年7月4日～9月
14日

かぜのむらさめ
風の村雨ほととぎす
→時鳥

ふきおくらる—かぜのむらさめ
ほととぎす—まきれはててや—すきぬらむ

【出陣千句】／何木〔しもなから〕／永正
元(1504)年10月25日～27日

あとよりふれる—かぜのむらさめ
ほととぎす—はなもちりあへす—はやなきて

【壁草／続群書類従本】／夏／永正3(1506)
年3月頃

すぎむらさめ
過ぎる村雨ほととぎす
→時鳥

くもるとすれは—すくるむらさめ
したふとも—いらはやいかて—ほととぎす

【長享年間百韻6巻】／朝何〔はるかさは〕
／長享2(1488)年4月

むらくもとほく—すくるむらさめ
ひとこゑの—ほかにはきかぬ—ほととぎす

【天正四年万句70巻】／三字中略〔かせ
たえて〕／天正4(1576)年5月6日～7月
19日

はれるむらさめ
晴れる村雨ひとこゑのほととぎす
→一声の時鳥

ふくるまくらに—はるむらさめ
ひとこゑは—ききこそわかぬ—ほととぎす

【表佐千句】／初何 [はなみよと]／文明
8(1476)年3月6日<~8日>

そそきもあへすーはるるむらさめ
ひとこゑはーそれかあらぬかーほととぎす

【元和年間百韻24巻】／□□ [としとと
もに]／裏白／元和2(1616)年1月3日

ひとむらさめ
ー村雨

なくほととぎす
→鳴く時鳥

ひとむらさめのーつきのこるやま
かへりなくーよはにききつるーほととぎす

【寛永年間百韻15巻】／□□ [はるをう
る]／裏白／寛永2(1625)年1月3日

ひとむらさめのーすくるをちかた
つゆのまのーやとりにきなけーほととぎす

【天正四年万句70巻】／竹何 [まつほと
や]／天正4(1576)年5月6日~7月19日

むらさめ
村雨

なげほととぎす
→鳴け時鳥

むらさめのーひとめくりまつーなかやとり
こそをわすれすーなげほととぎす

【美濃千句】／何鳥 [こころさへ]／文明
4(1473)年12月16日~21日

むらさめのーなこりにしはしーくもうきて
なげほととぎすーひとこゑの□□

【成立不詳・心敬以前14巻】／何船 [は
るはまた]／成立時不詳

よつのおのこえ
→四緒の声

むらさめのーあともとめすーはれつらむ
しはしはかりのーよつのをのこゑ

【紹巴亡父追善千句】／何人 [なきあとは]
／天文24(1555)年3月26日~晦日

むらさめのーやまにしはしーやすらひて
せきのわらやにーよつのをのこゑ

【園塵第四／早稲田大学本】／雑下／永正
6、7年

むらさめがたつ
村雨がたつ

つゆにうつろふ
→露に移ろう

むらさめのーけしきをそらにーさきたてて
のへのくさはそーつゆにうつろふ

【池田千句】／何田 [をとめこか]／永正
7(1510)年春以前<永正5年春>

むらさめのーあとはほのかにーきりたちて
つゆにうつろふーありあけのかけ

【大永四年月並千二百韻】／□□ [としな
みの]／月並千二百韻／大永4(1524)年12
月23日

むらさめすぎる
村雨過ぎる

ほととぎす
→時鳥

むらさめすくるーをちのかけはし
さたかにはーたれかききけむーほととぎす

【平松文庫本千句】／□□ [したみつの]
／

むらさめすくるーやまのしたみち
まちてみよーなかてはあらしーほととぎす

【文明年間百韻34巻】／何人 [ゆきのや
ま]／文明14(1482)年1月16日

むらさめのそら
村雨の空

やまのは
→山の端

たたくはかりのーむらさめのそら
やまのはのーくもにいりひのーかたわけて

【天正年間百韻57巻】／追悼 [としをふ
る]／天正5(1577)年9月22日

なこりしはしのーむらさめのそら
やまのはのーきりまにうすきーよはのつき

【慶長年間百韻27巻】／□□ [ちりてさ
へ]／慶長4(1599)年6月18日

ほととぎす
→時鳥

すすしくなりぬーむらさめのそら
ほととぎすーあきまつころやーかへるらむ

【行助関係4種】／行助連歌／天理本／

すくるもはやきーむらさめのそら
ほととぎすーいつれのくもにーやとるらむ

【専順関係2種】／夏／応仁元(1467)年

5月10日

むらさめのはれゆくあとはあらし
村雨の晴れゆく後は嵐ひにわたるふねのさむさ
→日に渡る舟の寒さむらさめの一はれゆくあとは一ふくあらし
ゆふひにわたる一ふねのさむけさ【大永年間百韻14巻】／何人〔ちあきを
も〕／大永5(1525)年9月21日むらさめの一はれゆくあとは一ゆふあらし
いりひをわたる一ふねのさむけさ

【宗長関係8種】／老耳／天理本／

むれ

うちむれる
打ち群れるそでのいろいろ
→袖の色々はなのはる一しめのゆくひと一うちむれて
つむやすみれを一そでのいろいろ【伊勢千句】／何船〔あさひかけ〕／大永
2(1522)年8月4日～8日たれとなく一のとかなるのに一うちむれて
かすむやいつれ一そでのいろいろ【明応年間百韻22巻】／何人〔くもはれ
て〕／明応5(1496)年8月22日おかべのはじのひとむら
岡辺の櫓の一群ゆうひがくれ
→夕日隠れをかへいろこき一はしのひとむら
つゆやなほ一ゆふひかくれに一のこるらむ【出陣千句】／何袋〔はなさかり〕／永正
元(1504)年10月25日～27日をかへになひく一はしのひとむら
うすきりの一ゆふひかくれに一もすなきて【応仁年間百韻6巻】／何人〔つきのあき〕
／応仁2(1468)年1月1日をかへになひく一はしのひとむら
うすきりの一ゆふひかくれに一もすなきて【萱草／伊地知本】／秋／文明6(1474)年
2月以前くものひとむら
雲の一群すてるほととぎす
→捨てる時鳥

ゆくかたいつち一くものひとむら

ほととぎす一のこれるはなを一とひすてて

【天文年間百韻38巻】／何路〔あきよた
た〕／天文12(1543)年8月19日

うかふあしたの一くものひとむら

なきすつる一あとしたはるる一ほととぎす

【天正年間百韻57巻】／□□〔このは
も〕／天正13(1585)年1月4日さとひとむら
里の一群くさまくら
→草枕

とひよるやとの一さとひとむら

くさまくら一つきをよすかに一こよひねむ

【文明十二年千句8巻】／夢想〔うしとし
の〕／文明12(1480)年4月10日～*日

うちけふりたる一さとひとむら

くさまくら一たつきもしらす一あくるのに

【文明十四年万句52巻】／何船〔みつと
りか〕／文明14(1482)年7月4日～9月
14日すぎのむらたち
杉の群立ちすえにちるはな
→末に散る花

いらかさひしき一すぎのむらたち

かすかなる一こけちのすゑは一ちるはなに

【弘治年間百韻8巻】／x x〔をりのこす〕
／弘治2(1556)年9月10日

あらしにあくる一すぎのむらたち

さきかくす一こすゑわかれて一ちるはなに

【成立不詳・宗養以前8巻】／何人〔あを
やきや〕／成立時不詳たけのひとむら
竹の一群かたおかのべ
→片岡野辺

たくひのかけは一たけのひとむら

つつしなく一かたをかへの一あめのうち

【天文廿四年梅千句】／何木〔つみそへよ〕
／天文24(1555)年正月7日

いほのすさひや一たけのひとむら
ゆくひとも一かたをかへの一ふゆかれに

【春夢草／書陵部本】／雑／永正 12(1516)
年、13 年

→^{やまもと}山本

なひくやかせの一たけのひとむら
やまもとの一つゆのしたみち一くさかれて

【文明年間百韻 3 4 巻】／何人 [ちきりあ
れや]／文明 14(1482) 年 3 月 20 日

かすみになひく一たけのひとむら
やまもとの一はるのあさかは一ゆきはれて

【老葉／吉川本】／春／文明 13(1481) 年
夏頃

つきのむらくも
月の群雲

→^{よるにかりなく}夜に雁鳴く

はるくれかたの一つきのむらくも
かへるよの一あまとひかくれ一かりなきて

【月村抜句／書陵部本】／永正十四年／

あきふけわたる一つきのむらくも
かりなきて一よはいねかての一たまくらに

【合点之句／神宮文庫本】／雑／天文
9(1541) 年 12 月 25 日

ひとむら
一群

→^{なびくくれたけ}靡く呉竹

ひとむらの一けふりのすゑの一はれわたり
そよきいてつ一なひくくれたけ

【毛利千句】／山何 [きくのかは]／文禄
3(1594) 年 5 月 12 日～16 日

ひとむらの一すゑにつつける一のをとほみ
かこはぬかたは一なひくくれたけ

【天正年間百韻 5 7 巻】／何木 [うくひす
の]／天正 11(1583) 年間 1 月 8 日

ふとむらすすき
一群薄

→^{しもまようやまだ}霜迷う山田

ひとむらすすき一そてふるるかけ
しもまよふ一やまたのおしね一かりすてて

【永正年間百韻 3 4 巻】／何路 [はやみの
に]／永正 12(1515) 年 11 月 10 日

ひとむらすすき一ひともかけせす
しもまよふ一やまたのこいへ一かたふきて

【合点之句／神宮文庫本】／冬／天文
9(1541) 年 12 月 25 日

まつのひとつむら
松の一群

→^{よがあける}夜が明ける

しほひにたかき一まつのひとつむら
とふかりの一かすもまきれす一よはあけて

【成立不詳・心敬以前 1 4 巻】／何人 [は
るふかし]／成立時不詳

うらのとほきは一まつのひとつむら
やまみえぬ一なみのうへより一よはあけて

【菟玖波集／広島大学本】／雑三／文和
5(1356) 年 3 月 26 日

むらちどり
群千鳥

→^{まさごじのすえ}真砂路の末

ゆくかたは一いつこなるらむ一むらちとり
ゆふかけさむき一まさこちのすゑ

【羽柴千句】／千何 [あくよを]／天正
6(1578) 年 5 月 18・19 日

したるも一たちさわきぬる一むらちとり
かへるとまやは一まさこちのすゑ

【慶長年間百韻 2 7 巻】／懐旧 [みなそこ
の]／慶長 4(1599) 年 5 月 2 日

かたかたに一なきたちてゆく一むらちとり
おくしもふかき一まさこちのすゑ

【慶長年間百韻 2 7 巻】／□□ [けふこと
に]／裏白／慶長 8(1603) 年 1 月 3 日

むらどりがねる
群鳥が寝る

→^{われおどろく}我驚く

むらどりの一ねにゆくかねや一くれぬらむ
けふもすきぬと一われそおとろく

【美濃千句】／何草 [いつくにて]／文明
4(1473) 年 12 月 16 日～21 日

むらどりの一ねくらのたけの一ゆきをれに
われそおとろく一さむきよのゆめ

【伊予千句】／何馬 [もろひとの]／天文
6(1537) 年 5 月 22 日

めずらしい

まくのもめずらしい
聞くのも珍しい

ほとときす
→時鳥

きくもめつらしーこのみやことり
ほとときすーけさはおとはのーやまこえて

【竹林抄／新古典文学大系本】／夏／文明
8(1476)年5月頃

まれのみゆきはーきくもめつらし
ゆふかけてーかみまつよのーほとときす

【萱草／伊地知本】／夏／文明6(1474)年
2月以前

もえる

かれたくさがもえでる
枯れた草が萌え出る

こまいわうこえ
→駒祝う声

ふゆかれしーみちのしはくさーもえいてて
のへのかすみにーこまいはふこゑ

【聖廟千句】／何田〔のこるひに〕／明応
3(1494)年2月10日～12日

こそかれしーくさはつゆけくーもえいてて
のはあさまたきーこまいはふこゑ

【明応年間百韻22巻】／何水〔あけほの
を〕／明応8(1499)年2月19日

もしお

かくもしおぐさ
搔く藻塩草

うみのなぎきにまつのはなおちる
→海の汀に松の花落ちる

かくてふなるはーたたもしほくさ
みつうみのーみきはにまつのーははおちて

【論書4種】／宗長／

かきあつむるはーたたもしほくさ
にほのうみのーみきはにまつのーははおちて

【論書4種】／宗牧／

もず

もずのくさくき
鴟の草茎

はしもみじ
→端紅葉

しもにあとなきーもすのくさくき
ちりにけりーきりにかせふくーはしもみち

【壁草／統群書類従本】／秋／永正3(1506)
年3月頃

ちきりはかなやーもすのくさくき
はしもみちーかたえにのこるーかせたちて

【宗長関係8種】／老耳／天理本／

もつ

うつりもてゆく
移り持て行く

→起き出でる

うつりもてゆくーあきのかなしさ
いまこむとーなくさめつつもーおきいてて

【文禄年間百韻12巻】／□□〔たかには
も〕／文禄2(1593)年5月27日

うつりもてゆくーそてのつきかけ
つゆをしくーかりねののへをーおきいてて

【文明十四年万句52巻】／山何〔つゆや
けさ〕／文明14(1482)年7月4日～9月
14日

もと

かきのもとつば
垣の本つ葉

みかわみず
→御溝水

あきにいろつくーかきのもとつは
おもふことーかきやなかさむーみかはみつ

【看聞日記紙背50巻】／何目〔いろつき
ぬ〕／応永28日5月29日

いろみしそむるーかきのもとつは
はきのとのーはなさへうつるーみかはみつ

【看聞日記紙背50巻】／何路〔まつころ
の〕／応永32(1425)年10月15日

かすむやまもと
霞む山本

みなせがわ
→水無瀬川

くるるまくさは一かすむやまもと
ところせき一わたりかねたる一みなせかは

【平松文庫本千句】／□□ [ふくるよの]

／

あらしのすゑの一かすむやまもと
ゆきてしも一とははやはるの一みなせかは

【天文年間百韻 3 8 巻】／何木 [やまかけ
て]／天文 21(1552) 年 3 月 11 日

みれはほのかに一かすむやまもと
はるのよも一ありあけかたの一みなせかは

【永祿年間百韻 2 8 巻】／何人 [つきな
ら]／永祿 5(1562) 年 8 月 11 日

そこともみえす一かすむやまもと
ほのかにも一あけのこりたる一みなせかは

【慶長年間百韻 2 7 巻】／□□ [ねのひし
て]／慶長 6(1601) 年 1 月 26 日

もの

なきもの
無き物

ふるさとはる
→古里の春

たひにして一いつもさため一なきものを
いそくやかへる一ふるさとはる

【寛正年間百韻 2 0 巻】／□□ [なかつき
と]／寛正 2(1461) 年 9 月

むかしには一かへるにならひ一なきものを
あはれのときや一ふるさとはる

【大永年間百韻 1 4 巻】／何木 [うめかか
を]／大永 7(1527) 年 1 月 18 日

はるのものね
春の物の音

あらはしりのよるのつき
→霰走りの夜の月

ひくてもゆかし一はるのものね
あけのこる一あらはしりの一つきのよに

【住吉千句】／何田 [このはちる]／大永
元 (1521) 年 11 月 1 日～14 日

しらへえならぬ一はるのものね
しつけさや一あらはしりの一よはのつき

【元和年間百韻 2 4 巻】／□□ [そらにみ
つ]／元和 8(1622) 年 10 月 19 日

ものおもころ
物思う頃

いかなる
→如何なる

こころくたけて一ものおもふころ
ひとはうし一ゆきてとはむも一いかならむ

【難波田千句】／□□ [あけほのを]／文
明 14(1482) 年 10 月前後

つゆのみたれに一ものおもふころ
よしやとの一ゆふへよあきよ一いかならむ

【永正年間百韻 3 4 巻】／何人 [みちしあ
れや]／永正 2(1505) 年 1 月 1 日

だれがうい
→誰が憂い

つゆもわかみの一ものおもふころ
あちきなや一たれゆゑそらも一うかるらむ

【太神宮法楽千句】／白何 [つゆなから]
／長享 2(1488) 年 7 月

なみたすすろに一ものおもふころ
ちきらすよ一たれにゆふへの一うかるらむ

【竹林抄／新古典文学大系本】／恋上／文
明 8(1476) 年 5 月頃

ものがなしき
物悲しき

あかつきづき
→暁月

ものかなしきの一しもはらふこゑ
ねさめする一あかつきつきの一くさのいほ

【毛利千句】／何田 [やまとりも]／文祿
3(1594) 年 5 月 12 日～16 日

ふもとには一ものかなしきの一なきすてて
あかつきつきの一いろのさやけさ

【文祿二年千句 1 0 巻】／山何 [まつとし
る]／文祿 2(1593) 年 4 月 8 日～10 日

ものごと
物毎

はるあきのそら
→春秋の空

ものことに一こころのとまる一としたりて
ゆくすゑいかに一はるあきのそら

【三島千句】／何船 [とりのねは]／文明
3(1471) 年 3 月 21 日～23 日

ものことに一みやこをこふる一かたみなか
おくるもつらし一はるあきのそら

【文明年間百韻34巻】／□□〔ゆきのか
け〕／文明5(1473)年12月5日

ものさびしい
物寂しい

こえがきこえる
→声が聞こえる

つねならぬ一もしひのかけ一ものさひし
のりのふみよむ一こゑそきこゆる

【浜宮千句】／□□〔くれかたき〕／

ねられすよ一あまよのころ一ものさひし
なくふくろふの一こゑそきこゆる

【長祿三年千句11巻】／何田〔まつちる
や〕／長祿3(1459)年12月2日～5日

もみじ

はなよもみじよ
花よ紅葉よ

やまとうた
→大和歌

かさしてもみむ一はなよもみちよ
あはれさの一ころしらる一やまとうた

【五吟一日千句】／薄何〔あけほのの〕／
天正9(1581)年11月19日

ひとのころは一はなよもみちよ
あらそふも一さすかゆゑある一やまとうた

【文祿年間百韻12巻】／□□〔うめさき
て〕／文祿2(1593)年2月12日

もみじのにしき
紅葉の錦

かろきと
→古里

もみちのにしき一かさねきころ
ふたたひは一いなしとおもふ一ふるさとに

【天正四年万句70巻】／夕何〔はるさめ
に〕／天正4(1576)年5月6日～7月19日

もみちのにしき一きてやゆかまし
ぬれぬれも一あきはしくれの一ふるさとに

【菟玖波集／広島大学本】／雑一／文和
5(1356)年冬～翌年の春

もみじば
紅葉葉

くわきかき
→波む杯

もみちはは一いろこきよりも一をりかさし
よさむわずれて一くめるさかつき

【毛利千句】／初何〔よとともに〕／文祿
3(1594)年5月12日～16日

もみちはは一たくあとよりも一かきあつめ
つきになるまで一くめるさかつき

【天正年間百韻57巻】／□□〔しろたへ
の〕／天正16(1588)年1月4日

もり

かなびのもり
神奈備の森

あきのみむろやま
→秋の三室山

もみちりしく一かみなひのもり
あきふけて一つきもしくる一みむろやま

【名所句集／静嘉堂文庫本】／秋／(大永
前後)

みつつきゆく一かみなひのもり
あきのいろ一いたるやたつた一みむろやま

【成立不詳・心敬以前14巻】／朝何〔し
たみつに〕／成立時不詳

もりのしたくさ
森の下草

はなれこま
→放れ駒

うらかれわたる一もりのしたくさ
つなかる一しつかたなれの一はなれこま

【葉守千句】／何路〔しくるやと〕／長享
元(1487)年10月9日<～11日>

かけふかくなる一もりのしたくさ
たつぬへき一あともなつの一はなれこま

【竹林抄／新古典文学大系本】／夏／文明
8(1476)年5月頃

やしろ

よきのみやしろ
与喜の御社

いづこにも
→何処にも

かすまてつきの一よきのみやしろ
いつくにも一あまみつかみの一なはたかし

【看聞日記紙背50巻】／片何〔まつはあ
め〕／応永32(1425)年7月25日

かみのこころも一よきのみやしろ
いつくにも一おなしたのの一あとたれて

【看聞日記紙背50巻】／何物〔いつれみ
む〕／応永32(1425)年9月17日

やすらう

はなのかげにやすらう
花の陰に安らう

→^{はるのかえるき}春の帰るさ

みるまに一やすらふききの一はなのかげ
おもへはとほし一はるのかへるさ

【宝徳四年千句】／何人〔はなそころ〕／
宝徳4(1452)年3月12日

やすらへは一ときこそうつれ一はなのかげ
かねのつけこそ一はるのかへるさ

【寛正年間百韻20巻】／何路〔ひととせ
に〕／寛正5(1465)年12月9日

みちのやすらい
道の安らい

→^{きとのかなわら}里の傍ら

やなきちる一かきねのみちの一やすらひに
ややくれかかかる一さとのかたはら

【天文年間百韻38巻】／何人〔かせみえ
て〕／千句第四／天文13(1545)年間11月
25日

たまほこの一みちもすすしき一やすらひに
みやこににたる一さとのかたはら

【文禄二年千句10巻】／夕何〔しくれて
も〕／文禄2(1593)年4月8日～10日

やすらい
安らい

→^{いずこにたびのやどり}何処に旅の宿り

みちのへは一はやしはくれの一やすらひに
いつくにたひの一やとりさためむ

【羽柴千句】／何船〔ときはきも〕／天正
6(1578)年5月18・19日

そことなき一かたをかこえの一やすらひに
いつくにたひの一やとりからまし

【天正年間百韻57巻】／何路〔たちそひ
て〕／天正6(1578)年1月3日

やど

やどのうめ
宿の梅

→^{のきのうぐいすのこえ}軒の鶯の声

ひとやいつ一はるのとひくる一やどのうめ
けさのきちかき一うくひすのこゑ

【美濃千句】／何船〔ひとやいつ〕／文明
4(1473)年12月16日～21日

たをるなと一そてにやにほふ一やどのうめ
のきはにきなく一うくひすのこゑ

【文明年間百韻34巻】／何人〔たをるな
と〕／文明15(1483)年1月16日

やどのうめのか
宿の梅の香

→^{うぐいす}鶯

かこふにもる一やどのうめかか
うくひすの一のへよりのへに一なきいてて

【五吟一日千句】／何舟〔はなをさへ〕／
天正9(1581)年11月19日

たちえかくれぬ一やどのうめかか
うくひすの一こゑするつきや一あけぬらむ

【大永三年月並千三百韻】／□□〔はると
ふく〕／月並千三百韻／大永3(1523)年1
月23日

なきひとしたへ一やどのうめかか
うくひすの一なくねもたれを一しのふらむ

【享祿年間百韻8巻】／追善〔あきのこゑ〕
／享祿5(1532)年7月29日

つほみにこもる一やどのうめかか
うくひすの一かきほのゆきを一はらひきて

【寛永年間百韻15巻】／□□〔よのはる
を〕／裏白／寛永8(1631)年1月3日

やどのゆうぐれ
宿の夕暮れ

→^{はなのかげ}花の陰

くさかるをかの一やどのゆふぐれ
たちよらむ一こまつかれゆく一はなのかげ

【竹林抄／新古典文学大系本】／春／文明
8(1476)年5月頃

あらしさひしきーやとのゆふくれ
たかためかーゆきをはらはむーはなのかけ

【専順関係2種】／春／応仁元(1467)年
5月10日

やどをかる
宿を借る

→^{むらさめ}村雨

せきのこなたにーやとやからまし
むらさめのーおとはのさとにーたちよりて

【行助関係4種】／行助句集／書陵部本／

しはしのほとどのーやとやからまし
むらさめのーあとよりすくるーこのもとに

【大原三吟／酒竹文庫本】／大原三吟／文
明14(1482)年10月<11月>

やどをとう
宿を訪う

→^{おもかげ}面影

ゆきすきかたきーやとやとはまし
おもかけのーひかふるあたりーこまとめて

【宗長関係8種】／興津宛／書陵部本／

をしへすてたるーやとやとはまし
おもかけのーさきたつはかりーしるへして

【宗長関係8種】／老耳／天理本／

やなぎ

あおやぎ
青柳

→^{かつらぎやま}葛城山

あをやきのーいととしつけきーあめみえて
こえむもいかかーかつらきのやま

【天文年間百韻38巻】／山河〔つきやけ
さ〕／天文21(1552)年7月26日

あをやきのーほかはふきぬるーかせもなし
よもはかすみのーかつらきのやま

【春夢草／書陵部本】／春／永正12(1516)
年、13年

あおやぎのいと
青柳の糸

→^{うちはえ}打ち映える

たえぬをかけのーあをやきのいと
つゆなからーあさゆふかすみーうちはへて

【宮島千句】／山河〔ことのはや〕／天文
20(1551)年5月9日～11日

はるにやさらずーあをやきのいと
えのみつにーかすみのころもーうちはへて

【文明年間百韻34巻】／何人〔わすれて
は〕／文明5(1473)年2月1日

→^{かわぞい}川添い

のとかなひくーあをやきのいと
かはそひのーふねのつなてのーなかきひに

【看聞日記紙背50巻】／唐何〔うめはけ
ふ〕／応永26(1419)年2月25日

みたれあひたるーあをやきのいと
かはそひのーつつみやなみのーこえぬらむ

【文禄年間百韻12巻】／□□〔あめのひ
の〕／文禄2(1593)年5月

あおやぎのかげ
青柳の陰

→^{はなをみる}花を見る

かせもかよはぬーあをやぎのかげ
けふもまたーなかきひくらしーはなをみて

【新撰菟玖波集／実隆本】／春上／明応
4(1495)年9月26日

しはしたたすむーあをやぎのかげ
あふひとにーところせかるるーはなをみて

【宗長関係8種】／老耳／天理本／

なびくあおやぎ
靡く青柳

→^{かすむ}霞む

かせよりさきもーなひくあをやぎ
ありあけやーなかさたかくーかすむらむ

【看聞日記紙背50巻】／何人〔うめのな
の〕／応永30(1423)年5月27日

はるのしるしにーなひくあをやぎ
かつらきやーくものよそめにーかすむらむ

【看聞日記紙背50巻】／唐何〔いやとし
に〕／応永31(1424)年1月25日

→^{のこる}残る

くちきなからも一なひくあをやき
みちのへの一ゆきはうすくや一のこるらむ

【看聞日記紙背50巻】／何路〔ひととせ
に〕／応永32(1426)年12月11日

しつえしけりて一なひくあをやき
かせやまた一ちりしさくらに一のこるらむ

【寛文年間百韻22巻】／□□〔たのもし
な〕／寛文9(1669)年10月2日

やま

あきのやま
秋の山

→^{とわのふるみや}永久の布留宮

おもひには一みわかぬものを一あきのやま
ひとはかけせぬ一とはのふるみや

【文明十四年万句52巻】／何人〔やまい
かに〕／文明14(1482)年7月4日~9月
14日

むしそなく一まことにこれそ一あきのやま
みよやかくなる一とはのふるみや

【文明十四年万句52巻】／何路〔あさう
みに〕／文明14(1482)年7月4日~9月
14日

あけほのやま
曙の山

→^{うぐいす}鶯

はるなりけりな一あけほののやま
うくひすの一なかすはこその一ゆきのうち

【文明年間百韻34巻】／何船〔そめよな
ほ〕／文明14(1482)年9月20日

さくらにねぬる一あけほののやま
うくひすの一のへのあるしの一くさまくら

【大永年間百韻14巻】／何路〔はままつ
の〕／大永4(1524)年5月1日

→^{なる}なる

こよひのつきの一あけほののやま
あきさむし一ふなちいくかに一なりぬらむ

【文安雪千句】／何田〔あとそある〕／文
安2(1445)年10月18日

くものあとなる一あけほののやま
みしはなや一たひねのゆめに一なりぬらむ

【親当関係2種】／親当句集／赤木文庫本
／

→^{ほととぎす}時鳥

いくへかすみの一あけほののやま
とひすつる一はるのまらの一ほととぎす

【嵯峨千句】／三字中略〔まっはなの〕／
(元龜4)天正元(1573)年正月9日~11日

くものほかなる一あけほののやま
ほととぎす一ききあへぬそらに一つきおちて

【萱草／伊地知本】／夏／文明6(1474)年
2月以前

→^{よこぐも}横雲

ふるさとさひし一あけほののやま
よこぐもに一をちかたひとや一わかるらむ

【老葉／毛利本】／恋上／(文明17(1485)
年7月23日頃)

かせもかすみも一あけほののやま
よこぐもに一まほのふねゆく一なみのうへ

【宗長関係8種】／老耳／天理本／

あらしふくやま
嵐吹く山

→^{おおいがわかつむ}大井川霞む

のとかにすめは一あらしふくやま
おほみかは一かすめるみつの一たえたえに

【享祿年間百韻8巻】／何人〔からころも〕
／享祿3(1530)年1月28日

はなにとゆけは一あらしふくやま
おほみかは一かすみのそこに一おとはして

【文安頃千句4巻】／何路〔やへひとへ〕
／

うしろのやま
後ろの山

→^{みなみはのどか}南は長閑

うしろのやまのーかせのはけしさ
たひのそらーみなみにゆけはーのとかにて

【園塵第四／早稲田大学本】／雑下／永正
6、7年

うしろのやまのーあらしこからし
ふゆのひもーみねのみなみはーのとかにて

【宗長関係8種】／老耳／天理本／

うつのやま
宇津の山

つたのしたみち
→ 鳶の下道

うつのやまーあひみるひともーなみたにて
ふゆはかれぬるーつたのしたみち

【文明十四年万句52巻】／玉何〔ゆきな
らは〕／文明14(1482)年7月4日～9月
14日

わかかたへーふみことつくるーうつのやま
やすらひにけりーつたのしたみち

【文明十五年千句11巻】／何風〔たきな
みや〕／文明15(1483)年*月*日～3月2
日

うつのやまこえ
宇津の山越え

あきのかぜ
→ 秋の風

つきにもまよふーうつのやまこえ
しもはらふーみちのゆくてのーあきのかせ

【延徳年間百韻16巻】／初何〔さけはさ
く〕／千句第三／延徳4(1492)年3月3日

あはれはおなしーうつのやまこえ
ふるさとのーゆふへなりけりーあきのかせ

【大永四年月並千二百韻】／□□〔へたつ
なよ〕／月並千二百韻／大永4(1524)年3
月23日

おくやまのかげ
奥山の陰

うちとけて
→ 打ち解けて

こころのほかのーおくやまのかげ
まつのとにーはらはぬゆきもーうちとけて

【秋津洲千句】／何人〔しかのねに〕／天
文15(1546)年8月25日

さりとてはまたーおくやまのかげ
うちとけてーなかぬみやこのーほととぎす

【園塵第一／統群書類従本】／夏／長享2
年

おちかたのやま
遠方の山

わたのはら
→ わたの原

つきのひかりにーをちこちのやま
あけわたるーきりのたえまのーわたのはら

【紹巴亡父追善千句】／唐何〔はなのかに〕
／天文24(1555)年3月26日～晦日

かねはかすみのーをちこちのやま
わたのはらーいつくのかたにーとまりふね

【五吟一日千句】／何木〔としのうちに〕
／天正9(1581)年11月19日

おちのとのおやま
遠方の遠山

かりなぐ
→ 雁鳴く

みつつかすみのーをちのとほやま
わかれしもーおなしゆくへのーかりなきて

【紹巴亡父追善千句】／何船〔すみそめの〕
／天文24(1555)年3月26日～晦日

あすやこえましーをちのとほやま
わたりかねーふかきせうらにーかりなきて

【心敬関係10種】／苔薙／赤木文庫本／
文明3(1471)年秋

おやまだのすえ
小山田の末

ししがれ
→ 霜枯れ

かへしすてたるーをやまたのすえ
しもかれのーくすはにかはるーあきのかせ

【天正年間百韻57巻】／何船〔もしほく
さ〕／天正7(1579)年1月13日

かりのこしぬるーをやまたのすえ
しもかれのーひとむらすすきーほのかにて

【天正年間百韻58巻】／□□〔あさなあ
さな〕／天正15(1587)年1月3日

おやまだのはら
小山田の原

あきふける
→ 秋更ける

やへにきりふるーをやまたのはら
ひとはたたーかりにたにこぬーあきふけて

【伊予千句】／何舟 [わきてみむ]／大永
2(1522)年8月4日～8日

かりのゆくへの一をやまたのはら
みねたかみ一ふきこすかせの一あきふけて

【永正年間百韻34巻】／何船 [うちなひ
き]／永正元(1504)年7月

かくれがのやま
隠れ家の山

→埋もれる

はてはひとりの一かくれかのやま
ふみわけし一いはのかげちのうつもれて

【成立不詳・宗長以前15巻】／何木 [た
ますたれ]／成立時不詳

はなみかてらの一かくれかのやま
みよしのや一ふかきかすみにうつもれて

【天正四年万句70巻】／何垣 [かけす
し]／天正4(1576)年5月6日～7月19日

→捨ててから

くもはいくへそ一かくれかのやま
すてしより一みはしたひくる一ひともなし

【難波田千句】／□□ [うめかかの]／文
明14(1482)年10月前後

ひとつとひこぬ一かくれかのやま
すてしより一このよのほかに一みをなして

【新撰菟玖波集／実隆本】／雑五／明応
4(1495)年9月26日

→み吉野

おくかおくなる一かくれかのやま
みよしのは一みねのかげちも一たえはてて

【太神宮法楽千句】／初何 [ほのめくは]
／長享2(1488)年7月

けふりもみえぬ一かくれかのやま
みよしのは一さくらにくもる一よはのつき

【園塵第三／統群書類従本】／春／文亀元
(1501)年3月18日

かさなるやま
重なる山

→峰の雲

かさなるやまの一みちはとほくて
かくれるは一いつこならまし一みねのくも

【諸尊法紙背3巻】／旧何 [あきまてと]
／建武4(1337)年6月29日

かさなるやまの一おくそしつけき
みよしのに一いるあとかくせ一みねのくも

【諸家月次連歌抄】／諸家月次連歌抄／成
立()年未詳

かすむはるのおやま
霞む春の遠山

→有明の月

かすみかくれの一はるのとほやま
ありあけのつきもわかれのかりなきて

【看聞日記紙背50巻】／山何 [まつそひ
て]／応永26(1419)年2月6日

かすみにのこる一はるのとほやま
ありあけのつきのひかりの一さえかへり

【天正四年万句70巻】／何鳥 [かせにし
るき]／天正4(1576)年5月6日～7月
19日

かすむやまもと
霞む山本

→水無瀬川

くるるまくさは一かすむやまもと
ところせき一わたりかねたる一みなせかは

【平松文庫本千句】／□□ [ふくるよの]
／

あらしのすゑの一かすむやまもと
ゆきてしも一とははやはるの一みなせかは

【天文年間百韻38巻】／何木 [やまかけ
て]／天文21(1552)年3月11日

みれはほのかに一かすむやまもと
はるのよも一ありあけかたの一みなせかは

【永祿年間百韻28巻】／何人 [つきなか
ら]／永祿5(1562)年8月11日

そこともみえす一かすむやまもと
ほのかにも一あけのこりたる一みなせかは

【慶長年間百韻27巻】／□□ [ねのひし
て]／慶長6(1601)年1月26日

かつらぎのやま
葛城の山

たえだえ
→絶え絶え

ちるややなきの—かつらきのやま
かはそひの—みちのいははし—たえたえに

【初瀬千句】／何路〔おそさくら〕／享徳
元・2(1452)年、4月

はなおそけなる—かつらきのやま
まつたかく—かかれるふちの—たえたえに

【諸家月次連歌抄】／諸家月次連歌抄／成
立()年未詳

さくらのかつらぎのやま
桜の葛城の山

あさがすみたつ
→朝霞立つ

おくもさくらの—かつらきのやま
あさかすみ—たつたやとほく—へたつらむ

【毛利千句】／何田〔やまとりも〕／文禄
3(1594)年5月12日～16日

さくらさくなる—かつらきのやま
あさかすみ—たつたやはなに—なりぬらむ

【園塵第二／統群書類従本】／春／明応
4(1495)年早春

しもすさまじいやま
霜凌まじい山

まつあらわれる
→松現れる

しもすさましく—からすなくやま
かはきりに—ふもとのまつは—あらはれて

【葉守千句】／何船〔うゑしうゑは〕／長
享元(1487)年10月9日<～11日>

しもすさましく—まよふやまもと
けふりより—いろなきまつの—あらはれて

【元和年間百韻24巻】／□□〔うくひす
の〕／裏白／元和9(1623)年1月3日

ちかいやまざと
近い山里

おもいやる
→思いやる

めさますかねの—ちかきやまさと
おもひやる—みやこのつきに—まくらして

【表佐千句】／何衣〔よるやあめ〕／文明
8(1476)年3月6日<～8日>

ゆきのつまきの—ちかきやまさと
おもひやる—ひなのすまひの—ふゆこもり

【明応年間百韻22巻】／何人〔ふきすて
よ〕／明応7(1498)年間10月6日

とおやまのあき
遠山の秋

きのうみ
→紀伊海

いまつきにみる—とほやまのあき
きのうみや—ふねをきりまに—こきいたし

【文明十四年万句52巻】／何木〔すゑの
つゆ〕／文明14(1482)年7月4日～9月
14日

なかめわひぬる—とほやまのあき
きのうみや—たまつしままつ—きりこめて

【專順関係2種】／秋／応仁元(1467)年
5月10日

のこるやまかけ
残る山影

かえる
→帰る

おほみのにしひ—のこるやまかけ
みそれせし—あととやくもは—かへるらむ

【永正年間百韻34巻】／何船〔うちなひ
き〕／永正13(1516)年1月

ほのほのつきの—のこるやまかけ
のにいてし—しかやよをこめ—かへるらむ

【天正四年万句70巻】／花何〔うくひす
の〕／天正4(1576)年5月6日～7月19日

はなのやまかせ
花の山風

はるになる
→春になる

くもあるつきの—はなのやまかせ
あけほのは—ゆふへわかれし—はるなれや

【至徳以前百韻7巻】／□□〔くれなみの〕
／至徳4(1387)年以前

うらみははてし—はなのやまかせ
くれてしも—なほうとまれぬ—はるなれや

【大永三年月並千三百韻】／□□〔ひとこ
ゑや〕／月並千三百韻／大永3(1523)年4
月23日

はるのやまざと
春の山里

うぐいす
→鶯

さくらのことを一はるのやまさと
うくひすの一こゑはかすみの一のきはにて
【太神宮法楽千句】／玉何〔あきとほし〕
／長享 2(1488) 年 7 月

やかてもとへや一はるのやまさと
うくひすの一ふるすのたにの一ゆききえて
【東山千句】／何路〔のわきせし〕／永正
15(1518) 年 8 月 10 日～12 日

はるのやまでら
春の山寺

→^{きさらぎのわかれをとう}如月の別れを訪う

しきみにとほき一はるのやまでら
きさらきの一わかれのにはを一とひすてて
【嵯峨千句】／何人〔さきてちる〕／(元
龜 4) 天正元 (1573) 年正月 9 日～11 日

かねさたかなる一はるのやまでら
きさらきの一わかれをたれも一とひいてて
【寛永年間百韻 1 5 巻】／□□〔とよとし
の〕／裏白／寛永 20(1643) 年 1 月 3 日

みよしののやま
み吉野の山

→^{のどか}長閑

かすみやへたつ一みよしののやま
やまふきの一せにゆくみつの一のとかにて
【文安雪千句】／何木〔しらくもの〕／文
安 2(1445) 年 10 月 18 日

はなにのみいる一みよしののやま
しらくもの一をのへのまつも一のとかにて
【伊予千句】／何木〔かせをてに〕／天文
6(1537) 年 5 月 22 日

やまがくるしい
山が苦しい

→^{おいのさか}老の坂

ちかきかよひも一やまそくるしき
こしをおし一てをひくほとの一おいのさか
【河越千句】／何路〔ひそさむき〕／文明
2(1470) 年正月 10～12 日

こえてまたある一やまそくるしき
かさなれる一としにかむかふ一おいのさか

【文明十四年万句 5 2 巻】／山何〔ことた
るは〕／文明 14(1482) 年 7 月 4 日～9 月
14 日

やまざくら
山桜

→^{かすむあけほの}霞む曙

くもとのみ一みゆるやとほき一やまさくら
こすゑひとつに一かすむあけほの

【因幡千句】／何人〔みるたびに〕／文明
7(1475) 年 11 月 26 日<～28 日>

のこるとも一のちはあらしの一やまさくら
つきをもをしめ一かすむあけほの

【成立不詳・宗祇以前 1 5 巻】／何船〔き
りのはに〕／成立時不詳

→^{はるのまつのは}春の松の枝

をりそへて一つまきにまじる一やまさくら
みとりたちそふ一はるのまつかえ

【看聞日記紙背 5 0 巻】／何路〔まつころ
の〕／応永 32(1425) 年 10 月 15 日

たかこころ一やすらふいその一やまさくら
をのへしつけき一はるのまつかえ

【成立不詳・心敬以前 1 4 巻】／何路〔こ
ころあらは〕／存疑／成立時不詳

→^{ゆくすゑのはる}行く末の春

もみちさへ一もろくうつろふ一やまさくら
たのむもはかな一ゆくすゑのはる

【難波田千句】／□□〔みつのおもに〕／
文明 14(1482) 年 10 月前後

みやまにや一さきもならひし一やまさくら
はなのさかりの一ゆくすゑのはる

【永正十花千句】／何路〔みやまにや〕／
永正 13(1516) 年 3 月 11 日～14 日

やまざと
山里

→^{あかつきのあめ}暁の雨

やまさとの一はるをさひしく一なしはてて
かすめるかねに一あかつきのあめ

【長享年間百韻 6 巻】／何路〔さみたれは〕
／長享 3(1489) 年 5 月 11 日

やまさとの一かせひややかに一めはさめて
はなによふかき一あかつきのあめ

【合点之句／神宮文庫本】／春／天文
9(1541)年12月25日

やまちかい
山近い

はなまちどおい
→花待ち遠い

やまちかき一よしののさとは一かせさえて
はなまちとほに一おもふはつはる

【美濃千句】／何心〔つゆにきえ〕／文明
4(1473)年12月16日～21日

やまちかき一いほのきたまと一ひきとちて
はなまちとほに一おくるつれつれ

【寛文年間百韻22巻】／□□〔つきやあ
らぬ〕／寛文13(1673)年7月19日

やまのいのみず
山の井の水

このもと
→木の下

むすふはつきぬ一やまのゐのみつ
このもとに一ひとつふたつの一こけのいほ

【成立不詳・宗長以前15巻】／花之何〔ふ
ゆのいろに〕／成立時不詳

むすこけふかし一やまのゐのみつ
すすしさは一きりのわかは一このもとに

【壁草／大阪天満宮文庫本】／夏／永正
2(1505)年8月23日以後同3年3月以前

やまのおく
山の奥

みねのまつかぜ
→峰の松風

すみわひぬ一いつらとしふる一やまのおく
ともとはきくを一みねのまつかせ

【延徳年間百韻16巻】／夢想〔ものおも
はて〕／延徳元(1489)年9月27日

やまのおく一さひしくとても一いてはせし
こころしてふけ一みねのまつかせ

【大永年間百韻1巻】／何路〔いつのよも〕
／大永5(1525)年4月15日

やまのかくれが
山の隠れ家

なる
→なる

むすひかへたる一やまのかくれか
のかれてや一ゆめのうきよと一なりぬらむ

【柴野千句】／何木〔はにしける〕／延文
2(1357)年以後-応安3年6月以前

あらしちかき一やまのかくれか
つれなきや一のちのなさけと一なりぬらむ

【天正四年万句70巻】／薄何〔やまとほ
み〕／天正4(1576)年5月6日～7月19日

やまのかげ
山の陰

すまのうらなみ
→須磨の浦浪

こえわひぬ一あめにかみなる一やまのかけ
ふなちにあらき一すまのうらなみ

【表佐千句】／唐何〔つきはたは〕／文明
8(1476)年3月6日<～8日>

つらかりし一うきよをかたる一やまのかけ
あはれなかけそ一すまのうらなみ

【永祿年間百韻28巻】／山何〔ゆふかほ
に〕／永祿2(1559)年5月20日

はしのひとすじ
→橋の一筋

ましはとる一みちのへちかき一やまのかけ
ふみならしたる一はしのひとすじ

【明応年間百韻22巻】／何路〔こそたち
し〕／明応6(1497)年1月1日

すすしさに一しはしかたらふ一やまのかけ
ゆききのみちの一はしのひとすじ

【天正年間百韻57巻】／何路〔とふひと
の〕／天正14(1586)年3月19日

まつかぜがふく
→松風が吹く

そことなき一かねもすさまし一やまのかけ
こえむをのへは一まつかせそふく

【三島千句】／朝何〔やまとほく〕／文明
3(1471)年3月21日～23日

つきもたた一こころつくしの一やまのかけ
このはしくれて一まつかせそふく

【難波田千句】／□□〔はるのよの〕／文
明14(1482)年10月前後

すまれすは一たちもかへらむ一やまのかけ
たきのひひきも一まつかせそふく

【紹巴亡父追善千句】／何木【おとろけと】
／天文24(1555)年3月26日～晦日

けふもまた一くもるいりひの一やまのかけ
みちくるしほに一まつかせそふく

【成立不詳・宗長以前15巻】／何船【し
もしろき】／成立時不詳

→道の掛橋

のるこまを一しはしひかふる一やまのかけ
すゑはあやふき一みちのかけはし

【永禄年間百韻28巻】／何船【ひきう
る】／裏白／永禄5(1562)年1月3日

あきふけて一たれもかよはぬ一やまのかけ
さとはなれなる一みちのかけはし

【天正年間百韻57巻】／□□【あさなあ
さな】／天正15(1587)年1月3日

やまのしたかげ
山の下陰

→そよぐ秋風

ましはわけゆく一やまのしたかけ
ならのはに一そよきもてくる一あきのかせ

【文安月千句】／何水【つきぬなは】／文
安2(1445)年8月15日

いろにすすしき一やまのしたかけ
うゑしたも一そよきてたる一あきのかせ

【紹巴亡父追善千句】／何船【すみそめの】
／天文24(1555)年3月26日～晦日

やまのしたみち
山の下道

→時鳥

むらさめすくる一やまのしたみち
まちてみよ一なかてはあらし一ほとときす

【文明年間百韻34巻】／何人【ゆきのや
ま】／文明14(1482)年1月16日

とふにならぬ一やまのしたみち
またときく一たひのゆくての一ほとときす

【永正年間百韻34巻】／何人【みやまき
に】／永正14(1517)年3月22日

→さおじかのこま
鹿の聲

そよくたのものは一やまのしたみち
さをしかの一たちとしらるる一こゑすなり

【天正年間百韻57巻】／何路【なみこえ
て】／天正9(1581)年2月3日

きりのあしたの一やまのしたみち
さをしかの一いまひとこゑは一かすかにて

【合点之句／神宮文庫本】／秋／天文
9(1541)年12月25日

→鹿鳴く

きこりたたすむ一やまのしたみち
くさかりの一ふえにはよらぬ一しかなきて

【親当関係2種】／親当自連歌合／早稲田
大学本／

ゆふきりふかき一やまのしたみち
いりあひの一こゑしつまれは一しかなきて

【基佐集／静嘉堂文庫本】／秋／永正
6(1509)年以前

やまのはのつき
山の端の月

→秋風

くれてまちとる一やまのはのつき
あきかせに一よふねこたふる一かちのおと

【河越千句】／山何【うくひすに】／文明
2(1470)年正月10～12日

しはしはこのれ一やまのはのつき
あきかせに一つゆのいのちも一をしまれて

【聖廟千句】／何人【つきならし】／明応
3(1494)年2月10日～12日

うきをはすての一やまのはのつき
あきかせに一ふせやといへと一まとろまで

【伊庭千句】／三字中略【ちりやすき】／
大永4(1524)年3月17日～21日

→秋更ける

ねさめにむかふ一やまのはのつき
みをすてむ一ほともいまはの一あきふけて

【三島千句】／何路【なへてよの】／文明
3(1471)年3月21日～23日

まつひとさへそーやまのはのつき
さととほきーしはのいほりにーあきふけて

【長享年間百韻6巻】／何路【さみたれは】
／長享3(1489)年5月11日

いるかけのこるーやまのはのつき
いねかてのーしはのとほそのーあきふけて

【大永年間百韻14巻】／山何【そめしつ
ゆ】／大永3(1523)年9月2日

いてしはいつのーやまのはのつき
たひころもーさむさおほゆるーあきふけて

【慶長年間百韻27巻】／□□【みつう
へに】／裏白／慶長17(1612)年1月3日

やまのほととぎす
山の時鳥

→^{みじかよのつき}短夜の月

ほととぎすーはなもまちけるーみやまかな
くれなはいてよーみしかよのつき

【初瀬千句】／何木【ほととぎす】／享徳
元・2(1452)年、4月

なやここにーとほきやまたのーほととぎす
すきのこすゑのーみしかよのつき

【天文年間百韻38巻】／何人【なやここ
に】／天文4(1535)年5月1日

やまのまつかせ
山の松風

→^{しばのいお}柴の庵

ふるさとよりのーやまのまつかせ
なかなかにかこふそやすきーしはのいほ

【太神宮法楽千句】／何人【しかのねを】
／長享2(1488)年7月

なれてもさひしーやまのまつかせ
たれきてかーこころととめむーしはのいほ

【萱草／伊地知本】／雑／文明6(1474)年
2月以前

→^{なかなか}中々

ふるさとよりのーやまのまつかせ
なかなかにかこふそやすきーしはのいほ

【太神宮法楽千句】／何人【しかのねを】
／長享2(1488)年7月

なれつつすめるーやまのまつかせ
なかなかにかこふそやすきーしはのいほ

【園塵第一／統群書類従本】／雑／長享2
年

やまぶかい
山深い

→^{たにのほそみち}谷の細道

しもにかねーさゆるいりあひーやまふかみ
すきむらとほきーたにのほそみち

【壁草／大東急記念文庫本】／雑上／永正
8(1512)年11月3日～永正9年

やまふかみーとひくるもまたーなになれや
ひとかかせきかーたにのほそみち

【那智箒／北野天満宮本】／永正十四年／

やまほととぎす
山時鳥

→^{あけやらない}明けやらない

いくよまたるるーやまほととぎす
あめきけはーあけやすきころのーあけやらて

【天文廿年断簡千句】／□□【まつのよを】
／天文20(1551)年6月10日～12日

くもよりいつるーやまほととぎす
すゑとほくーかりねせしののーあけやらて

【永禄石山千句】／初何【しらかしの】／
永禄7(1564)年5月12日

→^{あさみどり}浅緑

きくやおもかけーやまほととぎす
うつしゑのーあともこすゑのーあさみどり

【大永四年月並千二百韻】／□□【うくひ
すの】／月並千二百韻／大永4(1524)年2
月23日

うへなくときかーやまほととぎす
あさみどりーはるののこりのーはなさきて

【大永年間百韻14巻】／名号【なつころ
も】／大永8(1528)年4月12日

→^{あめはれる}雨晴れる

まかふやくもちーやまほととぎす
ゆふなみにーうらつたひするーあめはれて

【大永三年月並千三百韻】／□□ [たちは
なに] /月並千三百韻/大永 3(1523)年 5
月 23 日

やまほとときすーゆふへとふやと
こすまけはーつきはあらはすーあめはれて

【元和年間百韻 2 4 巻】／□□ [えそすき
ぬ] /元和 8(1622)年 4 月 13 日

ありあけ
→有明

はるををしめはーやまほとときす
なこりなほーおほろつきよのーありあけに

【住吉千句】／初何 [さよしくれ] /大永
元 (1521)年 11 月 1 日～14 日

さつきすきゆくーやまほとときす
みしかよのーくもまわかれぬーありあけに

【伊予千句】／何馬 [もろひとの] /天文
6(1537)年 5 月 22 日

まつにもなかぬーやまほとときす
ありあけにーなるへきつきはーおそくして

【称名寺連歌 3 巻】／x x [つきはあき]
/正慶元 (1332)年 9 月 13 夜

よふかきいほのーやまほとときす
かりまくらーさそはれいつるーありあけに

【延徳年間百韻 1 6 巻】／何路 [うめかか
の] /延徳 4(1492)年 1 月 23 日

はるもおもはしーやまほとときす
いるかたはーかすみもうすきーありあけに

【弘治年間百韻 8 巻】／何人 [ときはなる]
/弘治 3(1557)年 8 月 28 日

かたおかのもり
→片岡の杜

みやこはとほきーやまほとときす
かたをかのーもりくるあめにーたちぬれて

【難波田千句】／□□ [あくよを] /文
明 14(1482)年 10 月前後

はつねめつらしーやまほとときす
かたをかのーもりのこかけにーたたすみて

【浜宮千句】／□□ [こちふかは] /

→木のこ
→木の下

たひにはつれよーやまほとときす
かへるやとーいふひとはなきーこのもとに

【池田千句】／何路 [はなはしるや] /永
正 7(1510)年春以前<永正 5 年春>

みやこうつろふーやまほとときす
このもとにーはなたちはなのーかをとめて

【秋津洲千句】／初何 [はなならし] /天
文 15(1546)年 8 月 25 日

ひとこゑまでやーやまほとときす
このもとにーいさやすすまむーなつのみち

【成立不詳・宗祇以前 1 5 巻】／何人 [う
めかかの] /成立時不詳

はるすまゐる
→春過ぎる

やまほとときすーきなけこのころ
ときわかぬーたにははるやーすきぬらむ

【享徳二年千句】／何玉 [くらからぬ] /
享徳 2(1453)年 8 月 11 日～13 日

あとはおとはのーやまほとときす
むらさめやーこすゑはるかにーすきぬらむ

【伊庭千句】／白何 [けさやはる] /大永
4(1524)年 3 月 17 日～21 日

はなたちばな
→花橘

やまほとときすーあやなひとこゑ
さかりなるーはなたちはなのーあさゆふに

【伊予千句】／唐何 [うつせみの] /天文
6(1537)年 5 月 22 日

みやこうつろふーやまほとときす
このもとにーはなたちはなのーかをとめて

【秋津洲千句】／初何 [はなならし] /天
文 15(1546)年 8 月 25 日

くものむかひのーやまほとときす
ふきすくるーはなたちはなのーゆふかせに

【大永四年月並千二百韻】／□□ [わけく
らし] /月並千二百韻/大永 4(1524)年 7
月 23 日

はなちる
→花散る

わかさとうとき—やまほとときす
かへるには—しかむかけなき—はなちりて

【成立不詳・宗廟以前6巻】／何人〔みつ
たまり〕／成立時不詳

やまほとときす—なほそまたる
かりそめに—やとるいほりの—はなちりて

【文禄年間百韻12巻】／□□〔はなのい
ろや〕／文禄4(1595)年1月30日

→^{みじかよ}短夜

さつきすきゆく—やまほとときす
みしかよの—くもまわかれぬ—ありあけに

【伊予千句】／何馬〔もろひとの〕／天文
6(1537)年5月22日

かけたにとめよ—やまほとときす
みしかよの—つきもいまはた—みねこえて

【宮島千句】／何船〔ちかしてふ〕／天文
20(1551)年5月9日～11日

→^{むらさめ}村雨

わすれぬつての—やまほとときす
むらさめに—たちよるさくら—またをりて

【三島千句】／御何〔はるとほし〕／文明
3(1471)年3月21日～23日

こゑはまくらの—やまほとときす
さそはれて—すきゆくかせの—むらさめに

【弘治三年春雪千句】／山何〔はなそとも〕
／弘治3(1557)年正月7日～9日

しのひあまるや—やまほとときす
むらさめの—すきけるくもに—よひふけぬ

【天文十八年梅千句】／何船〔つきにうめ〕
／天文18(1549)年正月11日

またもきなかむ—やまほとときす
むらさめの—はるるあとより—うちそそき

【天正年間百韻57巻】／□□〔ききわく
や〕／天正18(1590)年10月8日

→^{よわのつき}夜半の月

ゆくやいつくの—やまほとときす
あらましの—ねさめをさそへ—よはのつき

【大永三年月並千三百韻】／□□〔しくれ
のあめ〕／月並千三百韻／大永3(1523)年
10月23日

まつとやおもふ—やまほとときす
さらにたた—まくらもとらぬ—よはのつき

【天正年間百韻57巻】／何路〔なみこえ
て〕／天正9(1581)年2月3日

→^{ふねにあかしのとまり}舟に明石の泊

やまほとときす—ゆくもうらみし
ふねにこよひ—あかしのとまり—こきわかれ

【東山千句】／何人〔つきやしる〕／永正
15(1518)年8月10日～12日

やまほとときす—ひとこゑのそら
ふねよせて—あかしのとまり—いてかてに

【名所句集／静嘉堂文庫本】／旅／(大永
前後)

→^{うぐいす}鶯

たえにしのちの—やまほとときす
うくひすの—こゑをへたつる—なつはきて

【天文年間百韻38巻】／何路〔ひもすす
し〕／天文11(1542)年6月12日

いまはといつる—やまほとときす
うくひすの—かへるたにのと—はるくれて

【宗長関係8種】／壬生宛／書陵部本／

→^{たちばな}橘

おとつれすてし—やまほとときす
たちはなの—いくやとことに—にほふらむ

【元和年間百韻24巻】／□□〔としとし
に〕／元和6(1620)年12月5日

よかれかなる—やまほとときす
たちはなの—はなちるつきは—ありあけに

【那智庵／北野天満宮本】／永正十三年／

きけはほのかに—やまほとときす
たちはなの—にほふまくらを—そはたてて

【合点之句／神宮文庫本】／夏／天文
9(1541)年12月25日

→^{はなさきく}花咲く

うへなくときかーやまほとときす
あさみとりーはるののこりのーはなさきて

【大永年間百韻 1 4 巻】/名号 [なつころ
も] /大永 8(1528) 年 4 月 12 日

やまほとときすーくもになくなり
とほきののーひともとあさちーはなさきて

【基佐集/静嘉堂文庫本】/夏/永正
6(1509) 年以前

→^{はなたちばな}花橘

やまほとときすーこゑものこすな
そてかをるーはなたちはなにーかせすきて

【老葉/毛利本】/夏/ (文明 17(1485) 年
7 月 23 日頃)

やまほとときすーこゑものこさす
そてかをるーはなたちはなにーかせすきて

【愚句老葉】/夏/永正 17 年

つきおちかかゝるーやまほとときす
まくらかのーはなたちはなにーめはさめて

【合点之句/神宮文庫本】/雑/天文
9(1541) 年 12 月 25 日

→^{はるぐれる}春暮れる

かたふくつきのーやまほとときす
はなもいまーむかひのみねのーはるくれて

【天文年間百韻 3 8 巻】/何木 [あすのな
を] /天文 17(1548) 年 8 月 14 日

かつこえきてのーやまほとときす
あふさかのーおとはのこすゑーはるくれて

【那智箴/北野天満宮本】/永正十二年/

いまはといつるーやまほとときす
うくひすのーかへるたにのーはるくれて

【宗長関係 8 種】/壬生宛/書陵部本/

まつよつもれるーやまほとときす
はなはたたーきのふのゆめのーはるくれて

【宗長関係 8 種】/老耳/天理本/

→^{みねこえる}峰越える

かけたにとめよーやまほとときす
みしかよのーつきもいまはたーみねこえて

【宮島千句】/何船 [ちかしてふ] /天文
20(1551) 年 5 月 9 日~11 日

なけむらくものーやまほとときす
さみたれのーなこりすすしくーみねこえて

【園塵第三/統群書類従本】/夏/文亀元
(1501) 年 3 月 18 日

やまもと
山本→^{だれがこえる}誰が越える

やまもとのーさともわかれすーきりこめて
くるるまかきをーたれかこゆらむ

【宝徳四年千句】/山何 [みにしむは] /
宝徳 4(1452) 年 3 月 12 日

やまもとのーのわきのあとのーしかのこゑ
をのへのみちはーたれかこゆらむ

【永正年間百韻 3 4 巻】/何人 [はなのき
も] /永正 7(1510) 年 4 月 1 日

やまもとのさと
山本の里→^{かけはし}掛橋

なかはかすみのーやまもとのさと
かけはしはーのきはのみねにーよこたはり

【池田千句】/何船 [おそくとく] /永正
7(1510) 年春以前<永正 5 年春>

いつくなるらむーやまもとのさと
かけはしはーふむあともなくーくちはてて

【慶長年間百韻 2 7 巻】/□□ [つゆにみ
を] /慶長 9(1604) 年 6 月 28 日

ゆうぐれのやま
夕暮れの山→^{ひとぐもり}曇り

ゆきふりむかふーゆふくれのやま
ひとぐもりーしくれしそらはーはるるひに

【顕証院会千句】/白何 [にはにさせ] /
宝徳元 (1449) 年 8 月 19 日~21 日

ほともまちかきーゆふくれのやま
ひとぐもりーあらしのあとのーゆきはれて

【称名院追善千句】/山何 [ことつてむ]
/永禄 6(1563) 年 12 月 14 日~18 日

みねのくも
→峰の雲

ひもさむけなる一ゆふくれのやま
みねのくも一かへるやゆきを一さそふらむ

【難波田千句】／□□ [あけほのを] / 文
明 14(1482) 年 10 月前後

つきをはいそけ一ゆふくれのやま
あらましの一ころにかかるとみねのくも

【文明年間百韻 3 4 巻】 / 夕何 [みつみえぬ]
／千句第□ / 文明 17(1485) 年 6 月 26 日

やまおろし

やまおろし
山嵐

ふねにすまのうらなみ
→舟に須磨の浦浪

すさましき一さとのうしろの一やまおろし
ふねさしとむる一すまのうらなみ

【宝徳四年千句】 / 何人 [はなところ] /
宝徳 4(1452) 年 3 月 12 日

おとはたた一あまりなるまで一やまおろし
よるふねいかに一すまのうらなみ

【東山千句】 / 何色 [しかのねは] / 永正
15(1518) 年 8 月 10 日～12 日

やまがつ

やまがつ
山賤

あきがおのはな
→朝顔の花

やまかつの一やとりにあたら一あきのつき
つゆをたよりの一あさかほのはな

【永原千句】 / 何船 [いくもとそ] / 明応
9(1500) 年 7 月 17 日

やまかつの一ひとむらううる一くれたけに
かかるかきほの一あさかほのはな

【合点之句 / 神宮文庫本】 / 秋 / 天文
9(1541) 年 12 月 25 日

やまがつのいお
山賤の庵

けむりたてそえる
→煙立て添える

ひもゆふかけの一やまかつのいほ
こりかへる一ましはのけふり一たてそへて

【永禄年間百韻 2 8 巻】 / 何船 [みのこす
や] / 永禄 2(1559) 年 7 月 16 日

かすみのおくの一やまかつのいほ
ほのかにも一はたやくけふり一たてそへて

【那智庵 / 北野天満宮本】 / 永正十三年 /

やまと

やまとことのは
大和言の葉

もろこし
→唐土

みちこそたかき一やまとことのは
もろこしの一ふみをよろつのうへにみて

【延徳年間百韻 1 6 巻】 / 何船 [さよかせ
も] / 延徳 2(1490) 年 7 月 23 日

いのらはいたれ一やまとことのは
もろこしの一たひのひとまつ一あさゆふに

【老葉 / 吉川本】 / 旅 / 文明 13(1481) 年
夏頃

やまなし

やまなしのはな
山梨の花

おうのうらなみ
→麻生の浦浪

やまなしの一みのとしきりを一はなにみて
はるはありけり一をふのうらなみ

【享禄年間百韻 8 巻】 / 何船 [はるのいろ]
／享禄 5(1532) 年 1 月 18 日

やまなしの一はなにかつかつ一とひよりて
なほはるしるき一をふのうらなみ

【天正四年万句 7 0 巻】 / 一字露頭 [わか
くさも] / 天正 4(1576) 年 5 月 6 日～7 月
19 日

やまぶき

きしのやまぶき
岸の山吹

かわずなく
→蛙鳴く

こてふとひかふ一きしのやまぶき
かはつなく一はるのみつたに一とりおりて

【文安月千句】／朝何【ひかりをも】／文
安 2(1445) 年 8 月 15 日

かつうつろへる一きしのやまふき
かはつなく一さとのかはつら一すきやらて

【永正十花千句】／何木【ひかすたに】／
永正 13(1516) 年 3 月 11 日～14 日

はるをのこせる一きしのやまふき
かはつなく一こゑさへうもれ一みつさひて

【成立不詳・宗長以前 15 巻】／何路【あ
ひにあき】／成立時不詳

みずにおうやまふき
水に匂う山吹

あめはれたはるのくれ
→雨晴れた春の暮れ

こふかきみつに一にほふやまふき
なかあめの一ひをうつすまに一はるくれて

【三島千句】／二字反音【いけすみて】／
文明 3(1471) 年 3 月 21 日～23 日

いしはしるみつに一にほふやまふき
あめはるる一せせのしらなみ一はるくれて

【成立不詳・宗長以前 15 巻】／初何【た
てなから】／成立時不詳

やよい

やよいのあめ
弥生の雨

ほととぎす
→時鳥

やよひのあめの一ゆふくれのやま
なつまたて一なくをきかはや一ほととぎす

【享徳二年千句】／手何【なほみよと】／
享徳 2(1453) 年 8 月 11 日～13 日

やよひのあめの一つきくもるそら
いまよりや一しのひねならし一ほととぎす

【天文年間百韻 38 巻】／山何【ほたと
ふ】／天文 6(1537) 年 5 月 10 日

ゆう

かすむゆうぐれ
霞む夕暮れ

つきので
→月の出

あけほののみか一かすむゆふくれ
いりあひの一かねにをのへの一つきいてて

【池田千句】／何船【おそくとく】／永正
7(1510) 年春以前<永正 5 年春>

つまきのみちの一かすむゆふくれ
しつかすむ一まかきのそとも一つきいてて

【大永四年月並千二百韻】／□□【しもや
ひぬ】／月並千二百韻／大永 4(1524) 年 9
月 23 日

はるのゆうぐれ
春の夕暮れ

つきいでる
→月出る

まさこちとほき一はるのゆふくれ
とけわたる一みきはもこほる一つきいてて

【天正年間百韻 57 巻】／何船【もしほく
さ】／天正 7(1579) 年 1 月 13 日

こけふむやまの一はるのゆふくれ
しつかなる一はなのおくより一つきいてて

【合点之句／神宮文庫本】／春／天文
9(1541) 年 12 月 25 日

やどのゆうぐれ
宿の夕暮れ

はなのかげ
→花の陰

くさかるをかの一やとのゆふくれ
たちよらむ一こまつかれゆく一はなのかけ

【竹林抄／新古典文学大系本】／春／文明
8(1476) 年 5 月頃

あらしさひしき一やとのゆふくれ
たかためか一ゆきをはらはむ一はなのかけ

【専順関係 2 種】／春／応仁元 (1467) 年
5 月 10 日

ゆうあらし
夕嵐

いりあいのかね
→入相の鐘

やまてらの一かへさをおくる一ゆふあらし
ひとりのみさく一いりあひのかね

【大永四年月並千二百韻】／□□【ゆふた
ちは】／月並千二百韻／大永 4(1524) 年 6
月 23 日

ゆふあらし一もよほすやまの一むらくもに
つねよりさひし一いりあひのかね

【成立不詳・宗長以前15巻】／初何〔たてなから〕／成立時不詳

ゆうぐれのくも
夕暮れの雲

→時雨れる

をのへにのこる一ゆふくれのくも
やまさとや一はるるともなく一しくるらむ

【延徳年間百韻16巻】／何人〔はなやあらぬ〕／延徳2(1490)年2月25日

へたつるかたの一ゆふくれのくも
やまとりの一をのへのまつや一しくるらむ

【大永三年月並千三百韻】／□□〔はなにつき〕／月並千三百韻／大永3(1523)年3月23日

→時鳥

なかめこそやれ一ゆふくれのくも
きのふかも一なきつとききし一ほととぎす

【天文十八年梅千句】／何端〔しつくさへ〕／天文18(1549)年正月11日

わかやまのはの一ゆふくれのくも
こころとや一なくねをしまぬ一ほととぎす

【大永四年月並千二百韻】／□□〔へたつなよ〕／月並千二百韻／大永4(1524)年3月23日

→峰越える

それもともなる一ゆふくれのそら
くもにけふ一はなちりはつる一みねこえて

【長享年間百韻6巻】／何人〔ゆきなから〕／長享2(1488)年1月22日

すすしきやまの一ゆふくれのそら
かせさそふ一ひとむらさめの一みねこえて

【成立不詳・宗祇以前15巻】／何船〔きたにみる〕／成立時不詳

ゆうぐれのそら
夕暮れの空

→なる

やますみふかき一ゆふくれのそら
いつしかも一まなくしくれに一なりぬらむ

【永正年間百韻34巻】／何路〔あきにかせ〕／永正8(1511)年7月14日

つくつくむかふ一ゆふくれのそら
きえにしは一いつれのくもと一なりぬらむ

【園塵第三／統群書類従本】／雑下／文亀元(1501)年3月18日

→時鳥

あつきひしのく一ゆふくれのそら
ひとこゑも一まれになりたる一ほととぎす

【永禄元年花千句】／□□〔さそふなよ〕／永禄元(1558)年3月23日~25日

そことなにはの一ゆふくれのそら
ほととぎす一あしのしのひに一なきすきて

【竹林抄／新古典文学大系本】／夏／文明8(1476)年5月頃

うらみをかくる一ゆふくれのそら
ほととぎす一またせてもたた一ひとこゑに

【壁草／大阪天満宮文庫本】／雑上／永正2(1505)年8月23日以後同3年3月以前

→山壁

なくさめかねつ一ゆふくれのそら
やまさとは一ことわりよりも一さひしくて

【竹林抄／新古典文学大系本】／雑上／文明8(1476)年5月頃

あしたのかすみ一ゆふくれのそら
やまさとは一はなのほひに一とりのこゑ

【論書4種】／宗長／

→我が心

なかめわひぬる一ゆふくれのそら
さりとも一おもひななれそ一わかこころ

【竹林抄／新古典文学大系本】／恋下／文明8(1476)年5月頃

おもひなつけ一ゆふくれのそら
こひしさも一たかなすこと一わかこころ

【北畠家連歌合／書陵部本】／北畠家連歌合／文明2(1470)年正月6日

ゆうぐれのやま
夕暮れの山

→^{ひとくもり}曇り

ゆきふりむかふーゆふくれのやま
ひとくもりーしくれしそらはーはるるひに

【顕証院会千句】／白何 [にはにさせ] /
宝徳元 (1449) 年 8 月 19 日～21 日

ほともまちかきーゆふくれのやま
ひとくもりーあらしのあとのーゆきはれて

【称名院追善千句】／山何 [ことつてむ]
／永禄 6(1563) 年 12 月 14 日～18 日

→^{みねのくも}峰の雲

ひもさむけなるーゆふくれのやま
みねのくもーかへるやゆきをーさそふらむ

【難波田千句】／□□ [あけほのを] / 文
明 14(1482) 年 10 月前後

つきをはいそけーゆふくれのやま
あらましのーころにかかるとーみねのくも

【文明年間百韻 3 4 巻】／夕何 [みつみえぬ]
／千句第□ / 文明 17(1485) 年 6 月 26 日

ゆうしぐれ
夕時雨

→^{くものむらむら}雲の群々

きほふかとーおもへはよそのーゆふしくれ
はれてもさむきーくものむらむら

【天文廿四年梅千句】／二字反音 [くれな
ゐの] / 天文 24(1555) 年正月 7 日

はるるかどーみれはあとよりーゆふしくれ
こすゑにのこるーくものむらむら

【紹巴亡父追善千句】／何船 [すみそめの]
／天文 24(1555) 年 3 月 26 日～晦日

ゆうすずみ
夕涼み

→^{あきかぜがふく}秋風が吹く

すきたてるーいくきのもとのーゆふすすみ
ここにすみけるーあきかせそふく

【伊勢千句】／何木 [すめるよの] / 大永
2(1522) 年 8 月 4 日～8 日

なつ□たたーいはゐにちきるーゆふすすみ
そてにをりをりーあきかせそふく

【文明年間百韻 3 4 巻】／何船 [かへれと
て] / 文明 18(1486) 年 3 月 27 日

ゆうづくよ
夕月夜

→^{おぼつかない}覚束ない

まつかけはーみえてすくなきーゆふつくよ
おぼつかなしやーあきのくるみち

【嘉吉年間百韻 1 巻】／何木 [たけのはに]
／嘉吉 3(1443) 年 10 月 23 日

かすみけりーさらてたにもとーゆふつくよ
おぼつかなしやーなによふことり

【永正年間百韻 3 4 巻】／x x [なつころ
も] / 永正 7(1510) 年 4 月 1 日

ゆうべ
夕べ

→^{いりあひのかね}入相の鐘

たえぬとてーひとをまつへきーゆふへかは
はなはちるらむーいりあひのかね

【太神宮法楽千句】／朝何 [つゆにたに]
／長享 2(1488) 年 7 月

わするなよーまたてすくさむーゆふへかは
みをおとろかすーいりあひのかね

【成立不詳・宗叡以前 6 巻】／何人 [みつ
たまり] / 成立時不詳

ころなくーたたにすくへきーゆふへかは
きけやちきりしーいりあひのかね

【永正年間百韻 3 4 巻】／玉何 [ちりてわ
か] / 永正 2(1505) 年 8 月 22 日

ゆうべかぎる
夕べ限る

→^{あぎのうわかぜ}萩の上風

うきことやーゆふへゆふへにーかきるらむ
ほのかなりつるーをきのうはかせ

【天文廿四年梅千句】／二字反音 [くれな
ゐの] / 天文 24(1555) 年正月 7 日

さひしきやーわかゆふへにやーかきるらむ
うからはきかしーをきのうはかせ

【成立不詳・心敬以前 1 4 巻】／何人 [は
るふかし] / 成立時不詳

ゆうまぐれ
夕まぐれ

いりあひのかね
→入相の鐘

ゆふまくれーさとなきやまのーきりのうち
そこともきかぬーいりあひのかね

【太神宮法楽千句】／薄何【まきのはや】
／長享 2(1488)年 7月

いつかたにーあきのこるらむーゆふまくれ
きりにこまれるーいりあひのかね

【文明年間百韻 34巻】／何人【ちきりあ
れや】／文明 14(1482)年 3月 20日

ものおもふーあすはいかかのーゆふまくれ
こころをつくすーいりあひのかね

【文明年間百韻 34巻】／何路【やまかせ
に】／文明 15(1483)年 3月 2日

おぎのうわがぜ
→萩の上風

のをみればーすすきかれたつーゆふまくれ
あきのなこりのーをきのうはかせ

【文安雪千句】／何船【かせにとふ】／文
安 2(1445)年 10月 18日

あきはいまーすすしきほとどのーゆふまくれ
うすきそてふくーをきのうはかせ

【美濃千句】／何路【ほととぎす】／文明
4(1473)年 12月 16日～21日

ゆうがお

ゆうがお
夕顔なすがれのそら
→黄昏の空

ゆふかほのーはなにくるまをーひきいれて
けはひしられぬーたそかれのそら

【天正四年万句 70巻】／何人【をらてみ
よ】／天正 4(1576)年 5月 6日～7月 19日

ゆふかほのーかきほのつゆにーやすらひて
はなにこととふーたそかれのそら

【菟玖波集／広島大学本】／春下／文和
5(1356)年 冬～翌年の春

ゆうがおのちぎり
夕顔の契りなすがれどき
→黄昏時

ゆふかほのーやともかりなるーちきりにて
たそかれときそーひとはまたるる

【看聞日記紙背 50巻】／唐何【いやとし
に】／応永 31(1424)年 1月 25日

ゆふかほのーはなはちきりのーしるへにて
たそかれときそーこころうかるる

【看聞日記紙背 50巻】／何物【いつれみ
む】／応永 32(1425)年 9月 17日

ゆうだち

ゆうだち
夕立なみのおとがすずしい
→浪の音が涼しい

ゆふたちのーすくるかたへのーたまりみつ
いはまのさなみーおとそすすしき

【顕証院会千句】／山何【あさもよひ】／
宝徳元(1449)年 8月 19日～21日

ゆふたちのーゆくへにつるるーおきつふね
よするやなみのーおとそすすしき

【伊予千句】／何馬【もろひとの】／天文
6(1537)年 5月 22日

ゆうだちのあと
夕立の後いそぐ
→急ぐ

ひはまたのこるーゆふたちのあと
こぬあきをーひくらしのねやーいそくらむ

【慶長年間百韻 27巻】／□□【よつのと
き】／裏白／慶長 18(1613)年 1月 3日

いつるひきよきーゆふたちのあと
□□□をもーくれぬ□□とやーいそくらむ

【天正四年万句 70巻】／山何【みかつき
の】／天正 4(1576)年 5月 6日～7月 19日

くものただえにほのめく
→雲の途絶えにほのめく

ひととほりせしーゆふたちのあと
ひのかけはーくものとたえにーほのめきて

【嵯峨千句】／何人【さきてちる】／(元
龜 4)天正元(1573)年 正月 9日～11日

ふりめぐりたるーゆふたちのあと
むらくものーたえまのひかりーほのめきて

【慶長年間百韻 27巻】／□□【はるにま
つ】／裏白／慶長 6(1601)年 1月 3日

ゆうつけどり

ゆうつけどりをきく
木綿付け鳥を聞く

→^{かきよる}深い夜

ゆふつけとりをうらみてそきく
いましはしーうちもねぬへくーふかきよに

【葉守千句】／何路 [しくるやと] /長享
元 (1487) 年 10 月 9 日 <~11 日 >

ゆふつけとりを一なこりにそきく
ゆめひとのーあとはかもなくーふかきよに

【住吉千句】／何木 [つきはふゆ] /大永
元 (1521) 年 11 月 1 日 ~14 日

ゆき

うちのゆき
内の雪

→^{なみのうきふね}浪の浮舟

もろともにーひともわけけりーうちのゆき
よるへはいつくーなみのうきふね

【看聞日記紙背 50 巻】／何路 [うのはなの] /応永 30(1423) 年 4 月 4 日

あとみするーしのひかよひのーうちのゆき
ことにこきいるーなみのうきふね

【看聞日記紙背 50 巻】／何人 [かみにうめ] /応永 31(1424) 年 2 月 25 日

くさはのこらないゆきのしたおれ
草は残らない雪の下折

→^{のわきするにわにつき}野分する庭に月

くさはのこらぬーゆきのしたをれ
のわきせしーにはのつきかけーよるさえて

【新撰菟玖波集 / 実隆本】 / 秋下 / 明応
4(1495) 年 9 月 26 日

くさはのこらぬーゆきのしたをれ
のわきせしーにはをしつかにーつきふけて

【下草 / 金子本】 / 秋 / 延徳 4(1492) 年頃

けさのはつゆき
今朝の初雪

→^{きえきえる}冴え冴える

ふるきいほりのーけさのはつゆき
おきみつーしはたくよはのーさえさえて

【寛正年間百韻 20 巻】 / 何人 [けふこすは] / 寛正 3(1462) 年 2 月 27 日

むらむらのこるーけさのはつゆき
ふきたゆむーかせもしはしはーさえさえて

【天文年間百韻 38 巻】 / 夢想 [ちりてなほ] / 天文 10(1541) 年 3 月

→^{うづみび}埋火

やまのはまてのーけさのはつゆき
うつみひにーよるのあらしやーかへるらむ

【下草 / 東山御文庫本】 / 冬 / 明応 5(1496)
年 11 月 18 日

ふゆともしらしーけさのはつゆき
うつみひにーさむさわすれしーとをあけて

【園塵第四 / 早稲田大学本】 / 冬 / 永正 6、7
年

こしのしらゆき
越の白雪

→^{かえるかりがね}帰る雁

はるふかきまでーこしのしらゆき
ありあけのーつきもなこりとーかへるかり

【看聞日記紙背 50 巻】 / 山何 [あつきなほ] / 応永 32(1425) 年間 6 月 25 日

きゆるひもなきーこしのしらゆき
かへるかりーいつかたこえてーまたはこむ

【享祿年間百韻 8 巻】 / 白何 [あさみとり] / 享祿 3(1530) 年 3 月 2 日

すたれをまけばゆき
簾を巻けば雪

→^{よもすがら}夜もすがら

すたれをまけばーゆきしろきやま
よもすからーしくれしつきのーけさすみて

【弘治年間百韻 8 巻】 / 何船 [たくそてに] / 弘治 2(1557) 年 12 月 2 日

すたれをまけばーけさのうすゆき
よもすからーあらしをそてにーかたしきて

【成立不詳・宗養以前 8 巻】 / 朝何 [なひくよや] / 成立時不詳

みねのしらゆき
峰の白雪

のころ
→残る

のはしもかれのーみねのしらゆき
さとふりぬーたかかよひちのーのころらむ

【紫野千句】／何路【あふちさく】／延文
2(1357)年以後-応安3年6月以前

それとはかりのーみねのしらゆき
いつおきてーかれののしもはーのころらむ

【紫野千句】／山何【ゆふたちは】／延文
2(1357)年以後-応安3年6月以前

ふりそめけりなーみねのしらゆき
まつたかくーしくれのくもやーのころらむ

【熊野千句】／何色【なみしけし】／文正
元(1466)年3月以前

みねのゆき
峰の雪

としがくれる
→年が暮れる

みねのゆきーいくへともなくーふみならし
つまきこりつむーとしはくれけり

【出陣千句】／白何【あをやきや】／永正
元(1504)年10月25日～27日

あさなあさなーやへふりまかふーみねのゆき
はやのこりなくーとしはくれけり

【天文年間百韻38巻】／何路【あさかほ
の】／天文10(1541)年7月29日

ゆきがふりはれる
雪がふり晴れる

さゆるゆうかせ
→寒ゆる夕風

まさこちにーまさるるゆきのーふりはれて
ふきあけののにーさゆるゆふかせ

【文安頃千句4巻】／何路【やへひとへ】
／

ふりはれてーつきにもなれるーゆきのかな
くさきのうへにーさゆるゆふかせ

【長禄三年千句11巻】／初何【ふりはれ
て】／長禄3(1459)年12月2日～5日

ゆききえる
雪消える

ういすのこえ
→鶯の声

たきつせのーまさるはおくのーゆききえて
ふるすをいつるーうくひすのこゑ

【看聞日記紙背50巻】／山何【やよやよ
ひ】／応永31(1424)年3月18日

ふりつつもーのやまをわかつーゆききえて
みきりにちかしーうくひすのこゑ

【天正年間百韻57巻】／何垣【ゆくそて
に】／天正11(1583)年間1月1日

こおりながれる
→氷流れる

はるのひのーかすみののやまーゆききえて
こほりなかるーさほのかはなみ

【永享年間百韻4巻】／何木【ささのはの】
／永享6(1434)年6月18日

うくひすのーこゑのかよひちーゆききえて
こほりなかるーたきのゆくすゑ

【寛正年間百韻20巻】／何水【をるひと
を】／寛正5(1464)年3月29日

ゆきになる
雪になる

いそがれる
→急がれる

ゆきにやならむーそらそさむけき
のをとほみーつまきのみちのーいそかれて

【因幡千句】／何石【やまはたか】／文明
7(1475)年11月26日～28日

ゆきにやならむーをちかたのくも
ふゆこもりーこころになほもーいそかれて

【文明十四年万句52巻】／初何【をるそ
てに】／文明14(1482)年7月4日～9月
14日

ゆきのあけほの
雪の曙

やまなかい
→山高い

すきむらうすきーゆきのあけほの
やまたかみーよるのあらしやーよわるらむ

【難波田千句】／□□【ゆくはるに】／文
明14(1482)年10月前後

ふしにはれたるーゆきのあけほの
つくりてはーおとろくにはのーやまたかみ

【東山千句】／下何【てるつきに】／永正
15(1518)年8月10日～12日

ゆきのあさあけ
雪の朝明け

→薄霞うすがすみ

なかめにしかしーゆきのあさあけ
ふもとまでーこしのたかねのーうすかすみ
【文明十四年万句52巻】／一字露頭〔ちあきふる〕／文明14(1482)年7月4日～9月14日

たつはるしるきーゆきのあさあけ
やまはまたーこそそのままなるーうすかすみ
【論書4種】／宗長／

ゆきのうち
雪の内

→冬籠ふゆこもるころもる頃

むらとりのーたつたにみえぬーゆきのうち
たれとくらすむーふゆこもるころ
【三島千句】／御何〔はるとほし〕／文明3(1471)年3月21日～23日

たくしはのーのこるともなきーゆきのうち
かせもあたらすーふゆこもるころ
【成立不詳・心敬以前14巻】／何袋〔またしかし〕／成立時不詳

ゆきのなかぞら
雪の中空

→ふきと吹ふきとふくく

くれわたりたるーゆきのなかぞら
ふきとふくーあらしのおとはーしつかにて
【羽柴千句】／何人〔すくにゆく〕／天正6(1578)年5月18・19日

のはちりきゆるーゆきのなかぞら
ふきとふくーかせよりのちのーあさつくひ
【天正年間百韻57巻】／x x〔わけゆかは〕／天正4(1576)年8月19日

ゆくえ

みのゆくえ
身の行方

→明あかし暮くららす

いにしへにーまかせやせましーみのゆくへ
いたつらにやはーあかしくらすむ
【伊予千句】／御何〔すすしさは〕／天文6(1537)年5月22日

たくふれはーかせまつつゆのーみのゆくへ
なかめてつきにーあかしくらすむ

【文明十四年万句52巻】／堀何〔かるひとは〕／文明14(1482)年7月4日～9月14日

ゆくすえ

おいのゆくすえ
老いの行く末

→森もりのしたくさの下草

あるにまかするーおいのゆくすゑ
たねさへにーもりのしたくさーよもかれし

【寛正年間百韻20巻】／何人〔いはかねに〕／寛正2(1461)年9月23日

たのむもあるやーおいのゆくすゑ
ふゆかれのーもりのしたくさーはるまちて

【新撰菟玖波集／実隆本】／冬／明応4(1495)年9月26日

かぜのゆくすえ
風の行末

→植うきえこうく

いかにふきそふーかせのゆくすゑ
うゑおきしーそのふのたけのーかけふかみ

【天正年間百韻57巻】／何人〔わかくさも〕／天正11(1583)年1月10日

のとかになりぬーかせのゆくすゑ
うゑおきしーみきりのまつのーわかみとり

【文禄二年千句10巻】／何木〔うすきりや〕／文禄2(1593)年4月8日～10日

つきのゆくすえ
月の行く末

→時し雨ぐれる

なみにかたふくーつきのゆくすゑ
をしかなくーあはちのやまやーしくるらむ

【大永年間百韻14巻】／何人〔ゆきのうちに〕／大永5(1525)年1月25日

あかつきかたのーつきのゆくすゑ
つゆさむきーまくらのうへやーしくるらむ

【天正年間百韻57巻】／何路〔とふひとの〕／天正14(1586)年3月19日

ゆくすえのそら
行く末の空

→^{かえるさ}帰るさ

こたへかたしやーゆくすゑのそら
ことのはもーおよはぬはなのーかへるさに

【葉守千句】／唐何〔したをれを〕／長享
元(1487)年10月9日<~11日>

おもへはやすきーゆくすゑのそら
かへるさにーなるをのふなちーやまみえて

【大永四年月並千二百韻】／□□〔かけき
ゆる〕／月並千二百韻／大永4(1524)年8
月23日

→^{うゑおく}植え置く

□□□□□□□ーゆくすゑのそら
とくおそきーはなをかすかすーうゑおきて

【天正四年万句70巻】／何鳥〔はつしも
は〕／天正4(1576)年5月6日~7月19日

まかひやせましーゆくすゑのそら
しらゆきのーほとをとはなをーうゑおきて

【基佐集／静嘉堂文庫本】／春／永正
6(1509)年以前

ゆめ

^{いにしへのゆめ}
古の夢

→^{さよまくら}小夜枕

わかれしままのーいにしへのゆめ
さよまくらーかねよりのちはーまどろまで

【永原千句】／何木〔おとそなき〕／明応
9(1500)年7月17日

みるもくやしきーいにしへのゆめ
つきひとりーかはらぬあきのーさよまくら

【天文十八年梅千句】／青何〔ゆけはうめ〕
／天文18(1549)年正月11日

^{かりのよるのゆめ}
仮の夜の夢

→^{あしたのくも}朝の雲

はかなしなーかりにみたりしーよるのゆめ
あしたのくものーあともとまらず

【成立不詳・宗廟以前6巻】／何人〔みつ
たまり〕／成立時不詳

かりそめにーなれてかへりしーよるのゆめ
あしたのくものーのこるやまのは

【専順関係2種】／雑／応仁元(1467)年
5月10日

^{かりふしのゆめ}
仮臥の夢

→^{かねのこえ}鐘の声

いつちさめゆくーかりふしのゆめ
かねのこゑーきこえてのちのーふかきよに

【天文年間百韻38巻】／山河〔つきやけ
さ〕／天文21(1552)年7月26日

むすひもあへぬーかりふしのゆめ
かねのこゑーそこともしらすーあけはてて

【天文年間百韻38巻】／x x〔しかそな
く〕／天文24(1555)年9月19日

^{ただゆめのうち}
ただ夢の内

→^{まどろむ}まどろむ

おとつれぬるやーたたゆめのうち
つきよよしーとはまちつるもーまどろみて

【永禄年間百韻28巻】／何船〔ひきうう
る〕／裏白／永禄5(1562)年1月3日

ひかりのかけはーたたゆめのうち
ともしひのーふくるもしらすーまどろみて

【行助関係4種】／行助句集／書陵部本／

^{はるのよのゆめ}
春の夜の夢

→^{くさまくら}草枕

みえこしやたたーはるのよのゆめ
つきもいつーのとかになれむーくさまくら

【伊予千句】／何垣〔なつくさは〕／天文
6(1537)年5月22日

かへるともなきーはるのよのゆめ
おもはずよーすみれつむののーくさまくら

【専順関係2種】／法眼専順連歌／赤木文
庫本／応仁元(1467)年5月10日

^{まくらのゆめ}
枕の夢

かりのこえ
→雁の声

まくらのゆめを—さそふあきかせ
いつくとも—おほえすとほき—かりのこゑ

【文明年間百韻34巻】／□□〔ゆきのか
け〕／文明5(1473)年12月5日

まくらのゆめを—さますはるかせ
わかるるや—ありあけかたの—かりのこゑ

【文禄年間百韻12巻】／□□〔あめのひ
の〕／文禄2(1593)年5月

ねるほととぎす
→寝る時鳥

まくらのゆめに—さはるかのこゑ
ねぬるまを—うらみやすらむ—ほととぎす

【行助関係4種】／行助句集／大阪天満宮本
／

まくらのゆめに—つけやまつらむ
ぬるひとに—こゑをはをしめ—ほととぎす

【萱草／伊地知本】／夏／文明6(1474)年
2月以前

みじかよのゆめ
短夜の夢

しのびつま
→忍び妻

むすふともなき—みじかよのゆめ
まちふけて—あふもほとなき—しのひつま

【看聞日記紙背50巻】／山何〔やよやよ
ひ〕／応永31(1424)年3月18日

みるもすくなき—みじかよのゆめ
ふけてあふ—わかれそはやき—しのひつま

【看聞日記紙背50巻】／片何〔しもやい
と〕／応永31(1424)年10月26日

なにわのあし
→難波の葦

とけてやはみる—みじかよのゆめ
かせそよく—なにわのあしの—かりまくら

【那智箒／北野天満宮本】／永正十二年／

おもかけをしき—みじかよのゆめ
あふほとも—なにわのあしの—ふしのまに

【那智箒／北野天満宮本】／永正十三年／

ゆめさめる
夢覚める

やまかぜがふく
→山風が吹く

ものうかる—をののかりねに—ゆめさめて
ふかきよかはの—やまかせそふく

【享徳二年千句】／手何〔なほみよと〕／
享徳2(1453)年8月11日～13日

いにしへの—たたちかなしき—ゆめさめて
みはならはしの—やまかせそふく

【大永三年月並千三百韻】／□□〔はると
ふく〕／月並千三百韻／大永3(1523)年1
月23日

ゆめのうきはし
夢の浮橋

いにしへ
→古

ねぬよにくつる—ゆめのうきはし
いにしへの—なからのみやに—つきをみて

【老葉／吉川本】／秋／文明13(1481)年
夏頃

うつつともかな—ゆめのうきはし
いにしへの—ふてのまきまき—ほのかにて

【宗長関係8種】／興津宛／書陵部本／

みゆきする
→御幸する

そをたにかけよ—ゆめのうきはし
みゆきせし—あとはしたふも—とほきよに

【明応年間百韻22巻】／山何〔ほととき
す〕／明応9(1500)年4月9日

あとのこらぬ—ゆめのうきはし
みゆきせし—そのよこひしき—ふるてらに

【園塵第四／早稲田大学本】／雑下／永正
6、7年

なみだがわ
→涙河

つくやまくらの—ゆめのうきはし
とこのうへの—うたかたやみの—なみたかは

【元龜年間百韻6巻】／何人〔はなのとき
も〕／元龜4(1573)年6月6日

はかなくかよふ—ゆめのうきはし
わたるせは—いつくなるらむ—なみたかは

【天正四年万句70巻】／一字露頭〔わか
くさも〕／天正4(1576)年5月6日～7月
19日

はるのよ
→春の夜

とたえかちなる一ゆめのうきはし
ねぬるまの一ほとはみしかき一はるのよに

【永禄石山千句】／何人 [つきやかる] /
永禄 7(1564) 年 5 月 12 日

たえはてけりな一ゆめのうきはし
いとはやも一あけなむとする一はるのよに

【寛正年間百韻 20 卷】／□□ [なかつき
と] / 寛正 2(1461) 年 9 月

みねにわかれる
→峰に分かれる

たたつゆのまの一ゆめのうきはし
つきいれは一みねにわかる一よるのくも

【美濃千句】／何草 [いつくにて] / 文明
4(1473) 年 12 月 16 日～21 日

ゆめのおもかけ
夢の面影

とこのうえ
→床の上

うつつはかりの一ゆめのおもかけ
まくらかも一あかてまたねの一とこのうへ

【称名院追善千句】／何路 [いるかたの]
／永禄 6(1563) 年 12 月 14 日～18 日

つきをなこりの一ゆめのおもかけ
ふたりねし一あとすさましき一とこのうへ

【毛利千句】／初何 [よとともに] / 文禄
3(1594) 年 5 月 12 日～16 日

ゆめのかりまくら
夢の仮枕

つきにいくたび
→月に幾度

ならはすは一みえましゆめか一かりまくら
つきにいくたび一かけしふるさと

【成立不詳・宗長以前 15 卷】／何路 [み
ねちかし] / 成立時不詳

みしゆめの一のちもよなかき一かりまくら
つきにいくたび一とこのやまかせ

【天和年間百韻 2 卷】／□□ [おいかみに]
／天和 2(1682) 年 4 月 3 日

むさしののほら
→武蔵野の原

ゆめちにも一ゆきつつおなし一かりまくら
またみぬかたや一むさしののほら

【羽柴千句】／薄何 [たちはなの] / 天正
6(1578) 年 5 月 18・19 日

すゑいかに一みはてぬゆめの一かりまくら
あすもわくへき一むさしののほら

【文明十四年万句 5 2 卷】／山何 [あきか
せに] / 文明 14(1482) 年 7 月 4 日～9 月
14 日

よるのゆめ
夜の夢

いにしへのつき
→古の月

とめもえぬ一まくらのうへの一よるのゆめ
みしはいつその一いにしへのつき

【享徳二年千句】／唐何 [こころひく] /
享徳 2(1453) 年 8 月 11 日～13 日

はるかなる一ところもかよふ一よるのゆめ
あふとはしるや一いにしへのつき

【天文年間百韻 3 8 卷】／x x [したみつ
も] / 天文 24(1555) 年 9 月 2 日

よ

あじけないよ
味気ない世

たのみおく
→頼み置く

わかきもしらす一あちきなよや
あととへと一たのめおきても一いかならむ

【難波田千句】／□□ [みつのおもに] /
文明 14(1482) 年 10 月前後

なれこしとしも一あちきなよや
しかはかり一たのめおきても一わするらむ

【大永四年月並千二百韻】／□□ [うくひ
すの] / 月並千二百韻 / 大永 4(1524) 年 2
月 23 日

かわるよのなか
変わる世の中

なつごろも
→夏衣

ひとのこころの一かはるよのなか
なつごろも一はるのはなそめ一ぬきすてて

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付 / 応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

さめてむちうにーかはるよのなか
なつころも一ついたちきたるーよはあけて

【新統犬筑波集】／夏／万治3(1660)年正月

すてるよのなか
捨てる世の中

→^{わひぬればおもう}佐ぬれば思う

なほいかならむーすつるよのなか
わひぬれはーおもひしことのーまさるみに

【表佐千句】／何人【はなそくも】／文明
8(1476)年3月6日<~8日>

まよふうちにもーすつるよのなか
わひぬれはーおもふこにさへーちかつかて

【基佐集／静嘉堂文庫本】／雑／永正
6(1509)年以前

のちのよのみち
後の世の道

→^{やまとうた}大和歌

いかさまならむーのちのよのみち
かすかすにーかはりもてきぬーやまとうた

【成立不詳・心敬以前14巻】／何船【ちりしえぬ】／成立時不詳

くらきそうらみーのちのよのみち
たとたとしーこれよりさきのーやまとうた

【宗砌関係9種】／宗砌句／静嘉堂文庫本b

ひとのこころのかわるよのなか
人の心の変わる世の中

→^{あきのくれ}秋の暮れ

ひとのこころのーかはるよのなか
やまさとをーうかれいてめやーあきのくれ

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁2(1468)年5月下旬

ひとのこころのーかはるよのなか
いまをなほーとへやよしののーあきのくれ

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁2(1468)年5月下旬

→^{あきがくる}秋が来る

ひとのこころのーかはるよのなか
うつせみのーはやまおろしにーあきはきて

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁2(1468)年5月下旬

ひとのこころのーかはるよのなか
しるしらぬーひとつなみたにーあきはきて

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁2(1468)年5月下旬

→^{あわれ}哀れ

ひとのこころのーかはるよのなか
よもきふをーかれぬあるしはーあはれにて

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁2(1468)年5月下旬

ひとのこころのーかはるよのなか
なきあとはーにくかりしたにーあはれにて

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁2(1468)年5月下旬

→^{いろみえる}色見える

ひとのこころのーかはるよのなか
まちをしむーはなにほとなきーいろみえて

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁2(1468)年5月下旬

ひとのこころのーかはるよのなか
たけはそのーこをおもふともーいろみえて

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁2(1468)年5月下旬

→^{ういみのとき}憂い身の時

ひとのこころのーかはるよのなか
うきみさへーときにやあふとーはるたちて

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁2(1468)年5月下旬

ひとのこころのーかはるよのなか
うきみさへーいまはのときやーをしからむ

【萱草／伊地知本】／雑／文明6(1474)年
2月以前

→^{おとろえる}衰える

ひとのこころのーかはるよのなか
そのいへはーのこれとみちのーおとろへて

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

ひとのこころのーかはるよのなか
あかむれはーかみのしるしはーおとろへて

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

→^{そでぬれる}袖濡れる

ひとのこころのーかはるよのなか
ききわひぬーしくれこのはにーそでぬれて

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

ひとのこころのーかはるよのなか
おいかみはーわかなくつむにもーそでぬれて

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

→^{たび}旅

ひとのこころのーかはるよのなか
うきにあひーなさけをみるもーたひなれや

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

ひとのこころのーかはるよのなか
うみやまのーなあるところもーたひなれや

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

→^{ちぎり}契り

ひとのこころのーかはるよのなか
なへてうきーあきなどほしのーちきるらむ

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

ひとのこころのーかはるよのなか
むかしたれーはなよりまつをーちきるらむ

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

→^{つきをみる}月を見る

ひとのこころのーかはるよのなか
よつときーいつれまさるとーつきをみて

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

ひとのこころのーかはるよのなか
すさましとーいひしはすのーつきをみて

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

→^{とりどり}とりどり

ひとのこころのーかはるよのなか
さむきひはーみつにいるてふーとりとりに

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

ひとのこころのーかはるよのなか
すてかたきーわかふたみちのーとりとりに

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

→^{はかないはねをならべるとりべやま}儂い羽根を並べる鳥部山

ひとのこころのーかはるよのなか
はかなしやーはねをならへしーとりへやま

【萱草／伊地知本】／恋／文明 6(1474) 年
2 月以前

ひとのこころのーかはるよのなか
はかなしやーはをもならへしーとりへやま

【老葉／書陵部宗訊筆本】／旅／

→^{はなさく}花咲く

ひとのこころのーかはるよのなか
のへをわけーやまちをたるとるーはなさきて

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

ひとのこころのーかはるよのなか
みやまきをーかたはらになすーはなさきて

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

→^{はなもない}花もない

ひとのこころのーかはるよのなか
うれへあるーみはななかめつるーはなもなし

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

ひとのこころのーかはるよのなか
うたのみちーまことをうるはーはなもなし

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

→^{はねをならべるとりへやま}羽根を並べる鳥部山

ひとのこころのーかはるよのなか
とりへやまーはねをならへしーすゑたえて

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

ひとのこころのーかはるよのなか
はかなしやーはねをならへしーとりへやま

【萱草／伊地知本】／恋／文明 6(1474) 年
2 月以前

→^{ひとつ}ひとつ

ひとのこころのーかはるよのなか
つきはたたーみやもわらやもーひとつにて

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

ひとのこころのーかはるよのなか
こをおもふーみちのみたれもーひとつにて

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

→^{ほととぎす}時鳥

ひとのこころのーかはるよのなか
ほととぎすーはななきころをーなくさめて

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

ひとのこころのーかはるよのなか
またしよもーなきかやまちのーほととぎす

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

ひとのこころのーかはるよのなか
ほととぎすーかへるやまちはーともなう

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

→^{みをしらない}身を知らない

ひとのこころのーかはるよのなか
うれしさもーうきもゆめなるーみをしらて

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

ひとのこころのーかはるよのなか
ときをえはーなほおそるへきーみをしらて

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

→^{みをしる}身を知る

ひとのこころのーかはるよのなか
みをしれはーわれとさためむーやともなし

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

ひとのこころのーかはるよのなか
みをしれはーいはむうらみもーなきものを

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

→^{わがうえ}我が上

ひとのこころのーかはるよのなか
わかうへにーおもはてたれをーそしるらむ

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

ひとのこころのーかはるよのなか
わかうへにーほしのひとよのーあきもかな

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

ひとのこころのよのなか
人の心の世の中

→^{はなをうらむ}花を恨む

ひとのこころのーあたしよのなか
はなをたれーうつろふものとーうらむらむ

【竹林抄／新古典文学大系本】／春／文明
8(1476) 年 5 月頃

ひとのこころのーかはるよのなか
なつやまとーみなすをはなやーうらむらむ

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

よにながらえる
世に長らえる→^{はなのひともと}花の一本あるはみな一なきよかなしき一なからへに
えたももききの一はなのひともと【永禄元年花千句】/□□ [さそふなよ]
/永禄元(1558)年3月23日~25日あたなりし一よはけふのみの一なからへに
くちきにのこる一はなのひともと【天正四年万句70巻】/何路 [うすきり
に] /天正4(1576)年5月6日~7月19日よのなか
世の中→^{みをやすく}身を安くたのむこと一あれはなほうき一よのなかに
おいてやひとは一みをやすくせむ【延徳年間百韻16巻】/何人 [うすゆき
に] /延徳3(1491)年10月20日をくるまの一くるしくめくる一よのなかに
うしやいつかは一みをやすくせむ【延徳年間百韻16巻】/初何 [さけはさ
く] /千句第三/延徳4(1492)年3月3日よのならい
世の習い→^{よもぎうのかげ}蓬生の影おとろへも一さかえもおなし一よのならひ
さそふにいてぬ一よもきふのかけ【元和年間百韻24巻】/□□ [よにおほ
へ] /元和7(1621)年1月19日しのふるも一かくれかたしよ一よのならひ
けふりともの一よもきふのかけ【天正四年万句70巻】/手何 [はつあら
れ] /天正4(1576)年5月6日~7月19日よばかりかかる
世ばかり掛かる→^{つらいたまのお}辛い玉の緒おなしよの一たのみはかりや一かかるらむ
かすならぬこそ一つらきたまのを【大原野十花千句】/何路 [けふこそは]
/元龜2(1571)年2月5日~7日いつのよの一むくひはかりに一かかるらむ
いとふ□□□□一つらきたまのを【大永四年月並千二百韻】/□□ [かけき
ゆる] /月並千二百韻/大永4(1524)年8
月23日よをいとう
世を厭う→^{すみそめのそで}墨染の袖うかりけり一よやたたひとを一いとふらむ
こころよりいつ一すみそめのそで【明応年間百韻22巻】/何人 [あきのい
ろに] /明応9(1500)年7月11日みつをたに一ぬるるとよを一いとふらむ
あさくしもやは一すみそめのそで【永正年間百韻34巻】/山家 [ひとめさ
へ] /永正8(1511)年11月3日

よき

よきのみやしろ
与喜の御社→^{いずこにも}何処にもかすまてつきの一よきのみやしろ
いつくにも一あまみつかみの一なはたかし【看聞日記紙背50巻】/片何 [まつはあ
め] /応永32(1425)年7月25日かみのこころも一よきのみやしろ
いつくにも一おなしきたのの一あとたれて【看聞日記紙背50巻】/何物 [いつれみ
む] /応永32(1425)年9月17日

よこ

たなびくよこくものそら
棚引く横雲の空→^{つきまのころ}月残るやまにたなひく一よこくものそら
つきのよや一あくとみえて一のこるらむ【紫野千句】/何木 [はにしける] /延文
2(1357)年以後-応安3年6月以前みねにたなひく一よこくものそら
つきやまた一かすみかくれに一のこるらむ

【文明十二年千句8巻】／何田〔あめのよ
は〕／文明12(1480)年4月10日～*日

よこぐもかすむ
横雲霞む

ゆめのうきはし
→夢の浮橋

よこくもの－わかるるかたや－かすむらむ
よるちるはなの－ゆめのうきはし

【熊野千句】／何路〔かさなるや〕／文正
元(1466)年3月以前

よこくもの－のこれるよもも－かすむひに
さめてそなほも－ゆめのうきはし

【文明十二年千句8巻】／白何〔まつりす
る〕／文明12(1480)年4月10日～*日

よこぐものそら
横雲の空

はるのよ
→春の夜

かすみのまよふ－よこくものそら
はるのよの－ゆめのわかれは－たととし

【文明十四年万句52巻】／手何〔はふつ
たに〕／文明14(1482)年7月4日～9月
14日

ひきわかれゆく－よこくものそら
はるのよの－つきにひとすち－かりとひて

【論書4種】／宗長／

よしの

みよしののおく
み吉野の奥

かげくれる
→影暮れる

くもはいくへそ－みよしののおく
たつねつる－はなにやすらふ－かけくれて

【看聞日記紙背50巻】／何物〔かみとう
め〕／応永29(1422)年2月25日

さとのほかなる－みよしののおく
かへらしよ－たつぬるはなの－かけくれて

【看聞日記紙背50巻】／何船〔ゆきにみ
て〕／応永32(1426)年11月25日

はなをみる
→花を見る

みをすつへくは－みよしののおく
わかやとと－たつねのみこし－はなをみて

【壁草／書陵部本】／春／永正9年

いりにしひとの－みよしののおく
しるへする－あとさへたゆる－はなをみて

【宗長関係8種】／宗長付句／「雑袋」所
載本／

よぶこどり
→呼子鳥

はなをたよりの－みよしののおく
ゆくゆくも－ききこそわかね－よぶこどり

【東山千句】／何船〔をきにかせ〕／永正
15(1518)年8月10日～12日

よしひなかさも－みよしののおく
すつるみの－つれつれいつち－よぶこどり

【那智筆／北野天満宮本】／永正十二年／

みよしののはな
み吉野の花

うぐいすのこえ
→鶯の声

みよしのや－はなよりおくに－ひきこもり
かすみにもる－うくひすのこゑ

【天正年間百韻57巻】／□□〔ともなし
に〕／天正18(1590)年11月21日

みよしのや－はなをよすかの－すみところ
ともとこそなれ－うくひすのこゑ

【慶長年間百韻27巻】／□□〔みつのう
へに〕／裏白／慶長17(1612)年1月3日

みよしののやま
み吉野の山

のどか
→長閑

かすみやへたつ－みよしののやま
やまふきの－せにゆくみつの－のとかにて

【文安雪千句】／何木〔しらくもの〕／文
安2(1445)年10月18日

はなにのみいる－みよしののやま
しらくもの－をのへのまつも－のとかにて

【伊予千句】／何木〔かせをてに〕／天文
6(1537)年5月22日

よしのがわ

よしのがわのはな
吉野川の花→^{はるすぎ}春過ぎるよしのかは—ひとひもちらぬ—はなもなし
みゆききえつつ—はるもすきけり【伊庭千句】／何木〔うつりきて〕／大永
4(1524)年3月17日～21日やまふきの—はなさきつつく—よしのかは
せかれぬみつと—はるもすきけり【成立不詳・宗長以前15巻】／何船〔し
もしろき〕／成立時不詳

よど

よどのかわぶね
淀の川舟→^{むらさめ}村雨みつのにつなけ—よどのかはふね
むらさめの—あとはみかさや—まさるらむ【文明十四年万句52巻】／一字露頭〔ち
あきふる〕／文明14(1482)年7月4日～
9月14日ともにおくるる—よどのかはふね
むらさめの—またふるまは—ほしわひて【文明十四年万句52巻】／何路〔かみや
しる〕／文明14(1482)年7月4日～9月
14日→^{ほととぎす}時鳥なこりなかむる—よどのかはふね
なきすつる—つきはすむよの—ほととぎす【永原千句】／何色〔うつろはぬ〕／明応
9(1500)年7月17日はやあけすくる—よどのかはふね
ほととぎす—たひたつあとに—やまみえて

【行助関係4種】／行助連歌／天理本／

さすかにはやき—よどのかはふね
ほととぎす—ひとこゑをたに—ききやらて【基佐集／静嘉堂文庫本】／夏／永正
6(1509)年以前

よぶこどり

よぶこどり
呼子鳥→^{おぼつかない}覚束ないなつくれは—はるかへれとや—よふこどり
おほつかなきは—ゆめのよのなか【美濃千句】／何心〔つゆにきえ〕／文明
4(1473)年12月16日～21日よふこどり—よふはたれをか—まちぬらむ
おほつかなきは—しののめのつき【飯盛千句】／何船〔ありあけや〕／永禄
4(1561)年5月27日～29日

よもぎ

よもぎう
蓬生→^{たらちねのあと}垂乳根の跡よもきふの—かけとていてむ—わかみかは
ななくそなこり—たらちねのあと【延徳年間百韻16巻】／何船〔はるすき
ぬ〕／延徳4(1492)年4月8日よもきふの—やとをしるへと—たとるらむ
たちいてかたし—たらちねのあと【文禄二年千句10巻】／玉何〔かはかせ
に〕／文禄2(1593)年4月8日～10日よもぎうのかけ
蓬生の影→^{きりぎりす}蟋蟀のこるはまれの—よもきふのかけ
のわきせし—けさまでつきに—きりぎりす【弘治年間百韻8巻】／何路〔ゆくみつや〕
／弘治2(1556)年3月24日すみならひたる—よもきふのかけ
きりぎりす—なくよのつきは—なほさひし【天正年間百韻57巻】／□□〔うくひす
も〕／天正14(1586)年1月4日みちわけわふる—よもきふのやと
きりぎりす—のこるこゑする—よるのしも【美濃千句】／何色〔しくれつつ〕／文明
4(1473)年12月16日～21日

つきのみすめるーよもきふのやと
きりきりすーゆくへはかなきーしもおきて

【大永四年月並千二百韻】／□□〔かけき
ゆる〕／月並千二百韻／大永 4(1524) 年 8
月 23 日

よる

あきのよすがら
秋の夜すがら

→寝られる

このはまたちるーあきのよすから
ねられめやーまくらにちかくーうつころも

【文安頃千句 4 卷】／朝何〔すゑとほき〕
／

よひのまふくるーあきのよすから
ねられめやーのわきやまかせーふきそひて

【文明十五年千句 1 1 卷】／二字返音〔は
なははの〕／文明 15(1483) 年 * 月 * 日 ~
3 月 2 日

あきのよなが
秋の夜長

→蟋蟀

はしみにあかぬーあきのよなかさ
ききすててーたれかいをぬるーきりきりす

【大永年間百韻 1 4 卷】／何人〔つきやふ
ね〕／大永 2(1522) 年 8 月

おもひをつくすーあきのよなかさ
きりきりすーなれかなくねにーまけむやは

【弘治年間百韻 8 卷】／何人〔うめひとき〕
／裏白／弘治 3(1557) 年 1 月 3 日

あきのよなよな
秋の夜な夜な

→草枕

つきまつころのーあきのよなよな
ふるさともーさそなつゆけきーくさまくら

【天文年間百韻 3 8 卷】／x x〔しかそな
く〕／天文 24(1555) 年 9 月 19 日

おもひをそふるーあきのよなよな
ゆめにわれーみゆらむものをーくさまくら

【壁草／大阪天満宮文庫本】／旅／永正
2(1505) 年 8 月 23 日以後同 3 年 3 月以前

あきのよのつき
秋の夜の月

→みにしみる

ひとのかたみのーあきのよのつき
しもまよふーかれののすすきーみにしみて

【表佐千句】／何衣〔よるやあめ〕／文明
8(1476) 年 3 月 6 日 < ~ 8 日 >

あくかれてゆくーあきのよのつき
ものおもふーみちののかせはーみにしみて

【諸尊法紙背 3 卷】／手何〔むすふにも〕
／建武 4(1337) 年 6 月 23 日

→野分する

あさちかやとをーあきのよのつき
かこはれしーつゆのたよりもーのわきして

【文龜年間百韻 4 卷】／何人〔きえしよの〕
／文龜 2(1502) 年 8 月 6 日

むくらかおくのーあきのよのつき
いつこにもーさはるかけなくーのわきして

【宗長関係 8 種】／老耳／天理本／

おほろつきよ
朧月夜

→長閑な枕

おほろつきよにーゆくそらもなき
のとかなるーまくらやゆめをーしたふらむ

【難波田千句】／□□〔みつのおもに〕／
文明 14(1482) 年 10 月前後

おほろつきよにーしくあきもやは
のとかなるーまくらもとらてーあかしはて

【慶長年間百韻 2 7 卷】／□□〔ちりてさ
へ〕／慶長 4(1599) 年 6 月 18 日

→時鳥の声

おほろつきよのーゆめをのこして
ほとときすーはるのまくらのーひとこゑに

【紹巴亡父追善千句】／何木〔おとろけと〕
／天文 24(1555) 年 3 月 26 日 ~ 晦日

おほろつきよのーあけのこるやま
ほとときすーそれかいまやとーこゑすきて

【成立不詳・宗祇以前15巻】／何船 [きたにみる]／成立時不詳

かりのよるのゆめ
仮の夜の夢

あしたのくも
→朝の雲

はかなしな一かりにみたりしーよるのゆめ
あしたのくものーあともとまらず

【成立不詳・宗叡以前6巻】／何人 [みつたまり]／成立時不詳

かりそめに一なれてかへりしーよるのゆめ
あしたのくものーのこるやまのは

【専順関係2種】／雑／応仁元(1467)年5月10日

こころをつくすあめのよる
心を尽す雨の夜

みがおいたほととぎす
→身が老いた時鳥

ねられぬこころ一つくすあめのよ
まつうちに一みもおいぬへきーほととぎす

【心敬関係10種】／芝草内連歌合／天理本
／

まつにこころを一つくすあめのよ
つれなきに一みもおいぬへきーほととぎす

【心敬関係10種】／吾妻辺云捨／天理本
／

つきがかすむよる
月が霞む夜

くもをかえるかりがお
→雲居を帰る雁

ありあけのつきやあらぬとーかすむよに
きけはくもるをーかへるかりかね

【永享年間百韻4巻】／山何 [おいまつは]／万句巻頭／永享9(1437)年3月21日

つきかけは一みえみみえすみーかすむよに
くもるちたとりーかへるかりかね

【成立不詳・宗叡以前6巻】／x x [うめなれや]／成立時不詳

つきよなよな
月夜な夜な

きむしろのつゆ
→き筵の露

しのふれは一つきもさはりのーよなよなに
はらふとするもーさむしろのつゆ

【元龜二年千句】／何船 [はなにとふ]／元龜2(1571)年3月5日

よなよなに一つきもうつろふーあきさひし
みはかたはらのーさむしろのつゆ

【文祿年間百韻12巻】／□□ [わかみつみし]／文祿2(1593)年1月8日

なつのよのつき
夏の夜の月

ほととぎす
→時鳥

ことかはすまも一なつのよのつき
きくもたたーそれかあらぬかーほととぎす

【天正年間百韻57巻】／山何 [かせふけは]／天正2(1574)年5月8日

なかめあかせる一なつのよのつき
ほととぎすーやはひとこゑにーまどろまで

【園塵第三／統群書類従本】／夏／文龜元(1501)年3月18日

ねさめするよ
寝覚めする夜

まくら
→枕

ねさめするよのーうつるたにをし
おときけはーよそのしくれをーまくらにて

【延徳年間百韻16巻】／夢想 [すみよしの]／延徳2(1490)年9月

ねさめするよのーさをしかのこゑ
つきにもるーいなはのかせをーまくらにて

【壁草／大阪天満宮文庫本】／秋／永正2(1505)年8月23日以後同3年3月以前

はるのよのつき
春の夜の月

こゑごえ
→声々

いてたにやらすーはるのよのつき
あめはれてーかはつうるさきーこゑこゑに

【秋津洲千句】／一字露頭 [わかはより]／天文15(1546)年8月25日

こころうかるるーはるのよのつき
うちわひてーなきゆくかりのーこゑこゑに

【明応年間百韻22巻】／何船 [はなそはる]／明応2(1493)年3月25日

はるのよのゆめ
春の夜の夢

くさまくら
→草枕

みえこしやたたーはるのよのゆめ
つきもいつーのとかになれむーくさまくら

【伊予千句】／何垣 [なつくさは] ／天文
6(1537)年5月22日

かへるともなきーはるのよのゆめ
おもはすよーすみれつむののーくさまくら

【専順関係2種】／法眼専順連歌／赤木文
庫本／応仁元(1467)年5月10日

ふかいよのそら
深い夜の空ありあけ
→有明

かへすもまつもーふかきよのそら
をくるまのーつきさへにほふーありあけに

【永正年間百韻34巻】／何色 [うゑてみ
ぬ] ／永正6(1509)年間8月29日

とりのなくねはーふかきよのそら
あふさかやーすきのはしろきーありあけに

【永禄年間百韻28巻】／何人 [つきなか
ら] ／永禄5(1562)年8月11日

みじかよのつき
短夜の月ほととぎす
→時鳥

ありあけになるーみしかよのつき
ほととぎすーなほしのひねのーつれなくて

【宝徳四年千句】／山何 [みにしむは] ／
宝徳4(1452)年3月12日

こころをすますーみしかよのつき
ほととぎすーまたるるそらにーかねなりて

【寛文年間百韻22巻】／□□ [なつなき
は] ／寛文13(1673)年6月12日

あまりみしかきーみしかよのつき
なつかりのーあしのしのひのーほととぎす

【天正四年万句70巻】／何心 [やまかけ
や] ／天正4(1576)年5月6日～7月19日

みじかよのゆめ
短夜の夢しのびつま
→忍び妻

むすふともなきーみしかよのゆめ
まちふけてーあふもほとなきーしのひつま

【看聞日記紙背50巻】／山何 [やよやよ
ひ] ／応永31(1424)年3月18日

みるもすくなきーみしかよのゆめ
ふけてあふーわかれそはやきーしのひつま

【看聞日記紙背50巻】／片何 [しもやい
と] ／応永31(1424)年10月26日

なにわのあし
→難波の葦

とけてやはみるーみしかよのゆめ
かせそよくーなにわのあしのーかりまくら

【那智箆／北野天満宮本】／永正十二年／

おもかけをしきーみしかよのゆめ
あふほともーなにわのあしのーふしのまに

【那智箆／北野天満宮本】／永正十三年／

ゆうづくよ
夕月夜おぼつかない
→覚束ない

まつかけはーみえてすくなきーゆふつくよ
おぼつかなしやーあきのくるみち

【嘉吉年間百韻1巻】／何木 [たけのはに]
／嘉吉3(1443)年10月23日

かすみけりーさらてたにもとーゆふつくよ
おぼつかなしやーなによふことり

【永正年間百韻34巻】／x x [なつころ
も] ／永正7(1510)年4月1日

よがあける
夜が明けるつきのころ
→月残る

あふちさくーやとのとくちにーよはあけて
かせふくそともーつきそのこれる

【伊予千句】／何路 [さみたれの] ／天文
6(1537)年5月22日

たひひとのーともをいさなふーよはあけて
あまのやまのーつきそのこれる

【長禄三年千句11巻】／何舟 [しほかれ
て] ／長禄3(1459)年12月2日～5日

よながい
夜が長いおもいわびる
→思い侘びる

ゆめいくたひのーよこそなかけれ
こひそうきーあきはものかはーおもひわひ

【看聞日記紙背50巻】／山何〔ちよもみ
む〕／応永19(1412)年1月14日

ひとりはなつもーよこそなかけれ
おもひわひーみしかきこころーいかかせむ

【文明年間百韻34巻】／何人〔ゆきのや
ま〕／文明14(1482)年1月16日

つきをみる
→月を見る

はつしもふれるーよこそなかけれ
まとろますーかりねののへのーつきをみて

【熊野千句】／何田〔おそさくら〕／文正
元(1466)年3月以前

ねさめののちもーよこそなかけれ
ふるさにーをはすてやまのーつきをみて

【新撰菟玖波集／実隆本】／秋上／明応
4(1495)年9月26日

よがふかい
夜が深い

くさまくら
→草枕

かねたにならすーよこそふかけれ
くさまくらーしらぬいつくのーつきなれや

【東山千句】／何色〔しかのねは〕／永正
15(1518)年8月10日～12日

かねにたひたつーよこそふかけれ
たかさともーしつけきのへのーくさまくら

【成立不詳・宗祇以前15巻】／山何〔め
つらしき〕／成立時不詳

よがふける
夜が更ける

まどろまない
→まどろまない

ひさしくなりぬーよやふけぬらむ
いまこむのーちきりはかなくーまどろまで

【成立不詳・宗祇以前15巻】／x x〔た
れをよの〕／成立時不詳

こひしさうたふーよやふけぬらむ
おもひいつるーむかしにおいのーまどろまで

【宗長関係8種】／老耳／天理本／

よさむおぼえる
夜寒おぼえる

からごろも
→唐衣

よさむおほゆるーひとのかたらひ
あはれみてーとはるるなかのーからころも

【嵯峨千句】／何木〔ちへにみし〕／(元
龜4)天正元(1573)年正月9日～11日

よさむおほゆるーかせのたえたえ
をちこちにーうちいてけりなーからころも

【永祿年間百韻28巻】／懐旧〔はつゆき
の〕／永祿6(1563)年11月18日

よはしののめ
夜は東雲

わかれる
→別れる

よはしののめにーしくれてそゆく
わかれてのーそでのけしきをーひともみよ

【永正十花千句】／何船〔ねぬるよを〕／
永正13(1516)年3月11日～14日

よはしののめにーはるのたまくら
わかれてのーきはやはとほきーわするなよ

【永正年間百韻34巻】／何衣〔あひにあ
ひぬ〕／永正10(1513)年2月16日

よもすがら
夜もすがら

ともしひのかげ
→灯の影

よもすからーこのはのたたくーとをとちて
はやきえかてのーともしひのかげ

【熊野千句】／何人〔よろつとせ〕／文正
元(1466)年3月以前

よもすからーまつはかせふくーふるてらに
つきこそまとのーともしひのかげ

【延徳年間百韻16巻】／何船〔はるすき
ぬ〕／延徳4(1492)年4月8日

よるくむさかざき
夜汲む杯

つきのもと
→月の下

よさむわすれてーくめるさかつき
もろともにーななめあかせるーつきのもと

【毛利千句】／初何〔よとともに〕／文祿
3(1594)年5月12日～16日

よるはずからにーくめるさかつき
あくるをもーしらてともなふーつきのもと

【平松文庫本千句】／□□ [ふくるよの]

／

よるのゆめ
夜の夢

いにしへのつき
→古の月

とめもえぬ—まくらのうへの—よるのゆめ
みしはいつその—いにしへのつき

【享徳二年千句】／唐何 [こころひく] /
享徳2(1453)年8月11日～13日

はるかなる—ところもかよふ—よるのゆめ
あふとはしるや—いにしへのつき

【天文年間百韻38巻】／x x [したみつ
も] /天文24(1555)年9月2日

よわのあきかぜ
夜半の秋風

くさまくら
→草枕

すからにさひし—よはのあきかぜ
あくるまの—はなのにおそき—くさまくら

【宮島千句】／山何 [ことのはや] /天文
20(1551)年5月9日～11日

すすしさおくる—よはのあきかぜ
くさまくら—しきもさためぬ—いろにして

【五吟一日千句】／何舟 [はなをさへ] /
天正9(1581)年11月19日

よわのつき
夜半の月

あきかぜのそら
→秋風の空

くもはれて—さたまりけりな—よはのつき
しくれつくせる—あきかぜのそら

【称名院追善千句】／一字露頭 [くもはれ
て] /永禄6(1563)年12月14日～18日

ひとはいさ—みしはわすれぬ—よはのつき
たのむるすゑは—あきかぜのそら

【永正年間百韻34巻】／何船 [うちなひ
き] /永正13(1516)年1月

かねかすか
→鐘微か

さしこもる—とほやまでらの—よはのつき
きりまもれたる—かねかすかなり

【宗牧追善千句】／山何 [ちるちらぬ] /
永禄4(1561)年9月14日・15日

まつかせの—ふきすさひたる—よはのつき
ふけゆくあきの—かねかすかなり

【文禄年間百韻12巻】／□□ [はなのい
ろや] /文禄4(1595)年1月30日

そでのあきかぜ
→袖の秋風

よはのつき—またあるやとを—たひたちて
せきちこえゆく—そでのあきかぜ

【宝徳四年千句】／唐何 [さすはなや] /
宝徳4(1452)年3月12日

やまのはの—すすしさそふる—よはのつき
うたたねしまの—そでのあきかぜ

【天文年間百韻38巻】／夢想 [ちりてな
ほ] /天文10(1541)年3月

おじかなくやま
→牡鹿鳴く山

うかるへき—あきのそらかは—よはのつき
すみてやみまし—をしかなくやま

【延徳年間百韻16巻】／何船 [はるすき
ぬ] /延徳4(1492)年4月8日

なかめすは—うらみやせまし—よはのつき
まつかせふきて—をしかなくやま

【論書4種】／宗長 /

よわのむしのね
夜半の虫の音

つきにかりまくら
→月に仮枕

をささかもとの—よはのむしのね
ねられしな—つきにかせふく—かりまくら

【寛正年間百韻20巻】／何人 [うめおく
る] /寛正6(1465)年1月16日

ところさためぬ—よはのむしのね
さやかなる—つきをみるみる—かりまくら

【大永年間百韻14巻】／何人 [ちあきを
も] /大永5(1525)年9月21日

よわる

よわりはてる
弱り果てる

きりぎりす
→蟋蟀

ものおもふにや—よわりはつらむ
わひぬるも—われそまされる—きりきりす

【伊勢千句】／何田 [かすやてる]／大永
2(1522)年8月4日～8日

われからわれや—よわりはつらむ
つゆになれ—しもにやとかる—きりきりす

【園塵第四／早稲田大学本】／秋／永正6、7
年

れつ

かりのいくつら
雁の幾列

はるばる
→遙々

なきですくなる—かりのいくつら
はるはると—あしへをさして—みつしほに

【大永三年月並千三百韻】／□□ [うめか
かや]／月並千三百韻／大永3(1523)年2
月23日

つはさみたれし—かりのいくつら
はるはると—たのものすゑの—いろつきて

【慶長年間百韻27巻】／□□ [つゆにみ
を]／慶長9(1604)年6月28日

かりのひとつら
雁の一行

→まことない

あととはかすめる—かりのひとつら
そことなく—ななめへのこる—はるのうみ

【明応年間百韻22巻】／何人 [あきのい
ろに]／明応9(1500)年7月11日

ゆくあとしたふ—かりのひとつら
そことなく—きりのうなはら—ふねうけて

【弘治年間百韻8巻】／何人 [うめひと
とき]／裏白／弘治3(1557)年1月3日

わかい

わかきまくら
若草枕

→あきふける

わかきまくら—うつらふすこゑ
とこさむき—たひにしあれは—あきふけて

【紫野千句】／何船 [はれてたに]／延文
2(1357)年以後-応安3年6月以前

わかきまくら—つきややつさむ
いたつらに—あかすよおほく—あきふけて

【長享年間百韻6巻】／何人 [ゆきなから]
／長享2(1488)年1月22日

わかれる

わかれじのあと
別れ路の跡

おもかげ
→面影

あくかれいつる—わかれちのあと
おもかけに—わかたましひや—つれぬらむ

【難波田千句】／□□ [あけほのを]／文
明14(1482)年10月前後

くもこそかたみ—わかれちのあと
ゆふへには—あめともなれる—おもかけに

【難波田千句】／□□ [にしきにて]／文
明14(1482)年10月前後

わかれる
別れる

いのちである
→命である

つらきよや—すむうちにたに—わかるらむ
いとひをしむも—いのちなりけり

【成立不詳・心敬以前14巻】／何人 [は
るふかし]／成立時不詳

いくたひか—これをかきりと—わかるらむ
のちのちきりは—いのちなりけり

【菟玖波集／広島大学本】／恋上／文和
5(1356)年冬～翌年の春

わかれるたびはかなしい
別れる旅は悲しい

あうひと
→逢う人

わかれゆくゆく—たひそかなしき
あふひとも—かたみになこり—うちなきて

【壁草／大阪天満宮文庫本】／恋下／永正
2(1505)年8月23日以後同3年3月以前

けふわかれしも—たひそかなしき
あふひとも—またふるさとの—なこりにて

【宗長関係8種】／老耳／天理本／

わけるほととぎす
別ける時鳥

ねざめのあかつきのやま
→寝覚めの暁の山

ほととぎす一ひとをわかつてや一すきぬらむ
ねさめひとりの一あかつきのやま

【葉守千句】／薄何 [いはほにも]／長享
元 (1487) 年 10 月 9 日<~11 日>

おもふをは一わきてかたらへ一ほととぎす
ふかきねさめの一あかつきのやま

【東山千句】／何路 [のわきせし]／永正
15(1518) 年 8 月 10 日~12 日

わすれる

だれにわすれる
誰に忘れる

つらい
→辛い

おもひなそへそ一たれにわすれむ
つらしとて一うつるならひは一しらぬよに

【文明年間百韻 3 4 卷】／山何 [かせにた
ちし]／文明 18(1486) 年 9 月 30 日

こひしきことを一たれにわすれむ
つらしとて一またいつかたに一うつらまし

【延徳年間百韻 1 6 卷】／何路 [かけす
し]／延徳 4(1492) 年 6 月 1 日

わすれとうくきはら
忘れ訪う草原

ふるさと
→古里

わするなよ一とはむとちきる一くさのはら
たよりはかりに一かかるふるさと

【太神宮法楽千句】／山何 [のははなに]
／長享 2(1488) 年 7 月

わすれすも一とほきあととふ一くさのはら
なれこしたれそ一かかるふるさと

【永正十花千句】／二字反音 [こまなへて]
／永正 13(1516) 年 3 月 11 日~14 日

わすれもしない
忘れもしない

いにしえ
→古

わすれもやらぬ一はるのおもかけ
いにしへの一てらをかすみの一たてこめて

【天正四年万句 7 0 卷】／何色 [ちるはな
も]／天正 4(1576) 年 5 月 6 日~7 月 19 日

わすれもやらぬ一このへのうち
いにしへの一なこりもいまは一おほみかは

【文禄二年千句 1 0 卷】／白何 [としなみ
の]／文禄 2(1593) 年 4 月 8 日~10 日

わすれようとする
忘れようとする

わがこころ
→我が心

わすれむとすれは一ふるさとのゆめ
わかこころ一ちちになれとや一かかるらむ

【天文十八年梅千句】／青何 [ゆけはうめ]
／天文 18(1549) 年正月 11 日

わすれむとすれは一なみたなるころ
わかこころ一きみかこころを一かつしりて

【大永四年月並千二百韻】／□□ [そよと
しも]／月並千二百韻／大永 4(1524) 年 10
月 23 日

わすれるなよ
忘れるなよ

わかれである
→別れである

はなはまた一なれしをわれも一わするなよ
はるこころなき一わかれならずや

【紫野千句】／何目 [いつもみむ]／延文
2(1357) 年以後-応安 3 年 6 月以前

なくさむる一ひとにうきよを一わするなよ
そふともつひの一わかれならずや

【永正十花千句】／何路 [ゆくつきも]／
永正 13(1516) 年 3 月 11 日~14 日

ほどはくもい
→程は雲居

わするなよ一たひねにかすむ一よはのつき
ほどはくもゐの一はつほととぎす

【難波田千句】／□□ [あけほのを]／文
明 14(1482) 年 10 月前後

とほくなる一やとのわかれも一わするなよ
ほどはくもゐの一ふるさとのやま

【菟玖波集／広島大学本】／驛旅／文和
5(1356) 年冬~翌年の春

わたす

うちわたす
打ち渡す→^{こまもすすまない}
駒も進まないうちわたすーはしもとかけてーよるなみに
あさかせたてはーこまもすすます【文明年間百韻34巻】／何人〔きえねよ
し〕／文明14(1482)年2月2日うちわたすーふゆたのはらはーあはれにて
ゆきのゆふへはーこまもすすます【天正四年万句70巻】／薄何〔はつかり
の〕／天正4(1576)年5月6日～7月19日

わたる

あきふけわたる
秋更け渡る→^{かりなく}
雁鳴くあきふけわたるーきりのうみつら
ゆふなみのーまつのはこしにーかりなきて【合点之句／神宮文庫本】／秋／天文
9(1541)年12月25日あきふけわたるーつきのむらくも
かりなきてーよはいねかてのーたまくらに【合点之句／神宮文庫本】／雑／天文
9(1541)年12月25日まえわたり
前渡り→^{さとのくさかり}
里の草刈りふえのねにーそれとはしるきーまへわたり
ふねにのりたるーさとのくさかり【嗟峨千句】／何船〔はるはゆきに〕／(元
龜4)天正元(1573)年正月9日～11日かすかにもーふえのねもらすーまへわたり
すみかやをちのーさとのくさかり【寛永年間百韻15巻】／□□〔あさひか
け〕／裏白／寛永11(1634)年1月3日わたしふね
渡し舟→^{ましはにまじるつつしやまがき}
真柴に混じる躑躅山吹わたしふねーはなのゆききもーはるくれて
ましはにまじるーつつしやまふき【大永四年月並千二百韻】／□□〔けふひ
くや〕／月並千二百韻／大永4(1524)年5
月23日やまもとのーはなをよそめのーわたしふね
ましはにまじるーつつしやまふき【天文年間百韻38巻】／x x〔ちりうせ
ぬ〕／天文19(1550)年2月17日わたるかりがね
渡る雁→^{ながいよ}
長い夜ねさめのまくらーわたるかりかね
あかつきとーおもひてたにもーなかきよに【応永年間百韻7巻】／何路〔やまみつの〕
／応永15(1408)年3月11日かすさへしるくーわたるかりかね
たつしきのーおのかはねかきーなかきよに

【宗長関係8種】／壬生宛／書陵部本／

わびる

しきわぶ
敷き侘ぶ→^{はらうころもでのつゆ}
払う衣手の露しきわひてーつきにいくよのーかりまくら
はらひつくさぬーころもでのつゆ【天正年間百韻57巻】／何船〔なはしろ
の〕／天正3(1575)年3月8日ちりつもるーあきのさむしろーしきわひて
いつかはらはむーころもでのつゆ【文明十五年千句11巻】／三字中略〔か
たいとを〕／文明15(1483)年*月*日～
3月2日わびびと
侘人→^{あさのさころも}
麻の狭衣わひひとのーむねやすからぬーあさゆふに
きてもやせはきーあさのさころも【享祿年間百韻8巻】／何人〔あさかすみ〕
／享祿5(1532)年1月3日わひひとのーはたへはいかにーさむからむ
うちしきりぬるーあさのさころも【文祿年間百韻12巻】／□□〔にはくさ
の〕／文祿2(1593)年1月10日

われ

なみだ^ながわ^わがそ^そでのう^うえ
涙が我が袖の上

→^{おも}う

つゆもなみたも一わかそでのうへ
ひとしれぬ一みにはなにをか一おもふらむ

【文安年間百韻9巻】／山何〔ふたたびの〕
／文安5(1448)年11月12日

いづもなみたの一わかそでのうへ
とふひとや一こよひはかりと一おもふらむ

【合点之句／神宮文庫本】／恋／天文
9(1541)年12月25日

われでなくなるのがう^うい
我でなくなるのが憂い

→^{こけのと}の^のう^うあ^あらし

うしやわれにも一あらすなりゆく
はなをふく一こけのとほその一ゆふあらし

【春夢草／書陵部本】／春／永正12(1516)
年、13年

うしやわれにも一あらすなりゆく
こけのとの一はなにふきたつ一ゆふあらし

【論書4種】／宗牧／

索引

- あう (逢う), 187
 あうきぬぎぬはうい (逢う後朝は憂い), 69, 280
 あうひと (逢う人), 168, 274, 464
 あおいかつら (葵桂), 171, 370
 あおばのはなのあと (青葉の花の後), 55, 75, 344, 361
 あおやぎ (青柳), 55, 430
 あおやぎのいと (青柳の糸), 55, 94, 171, 412, 430
 あおやぎのかげ (青柳の陰), 55, 142, 350, 357, 430
 あかしがた (明石瀉), 55
 あかしくらす (明かし暮らす), 304, 407, 449
 あかしはてる (明かし果てる), 189, 317
 あかつき (暁), 56, 83, 178, 256, 258, 280, 331, 412
 あかつきがた (暁方), 237, 287
 あかつきづき (暁月), 56, 131, 168, 279, 427
 あかつきのあめ (暁の雨), 231, 435
 あかつきのそら (暁の空), 56, 170, 261, 326, 385
 あかつきふかい (暁深い), 241
 あきがくる (秋が来る), 60, 180, 197, 216, 264, 305, 310, 366, 383, 453
 あきかぜ (秋風), 56, 153, 229, 284, 289, 294, 299, 338, 381, 395, 437
 あきかぜがふく (秋風が吹く), 59, 156, 252, 255, 284, 288, 371, 418, 445
 あきかぜのこえ (秋風の声), 59, 156, 204
 あきかぜのそら (秋風の空), 235, 289, 463
 あきがふける (秋が更ける), 173, 316
 あきくさ (秋草), 60, 191
 あきくる (秋来る), 60, 197
 あきくれる (秋暮れる), 100, 160, 183, 339
 あきさむい (秋寒い), 60, 208, 229, 234, 237
 あきしぐれ (秋時雨), 60, 239
 あきちかくなる (秋近くなる), 61, 276, 326
 あきないことのね (飽きない琴の音), 67, 125, 220
 あきにしぐれる (秋に時雨れる), 61, 239
 あきのあまのはしだて (秋の天橋立), 130, 281
 あきのおもかげ (秋の面影), 61, 132
 あきのかぜ (秋の風), 82, 113, 114, 207, 212, 234, 236, 262, 286, 338, 432
 あきのかわかぜ (秋の川風), 61, 157, 177
 あきのくも (秋の雲), 83, 280
 あきのくれ (秋の暮れ), 130, 180, 203, 216, 310, 319, 366, 405, 453
 あきのくれがた (秋の暮れ方), 61, 164, 199
 あきのさびしさ (秋の寂しさ), 61, 232
 あきのさわみず (秋の沢水), 62, 237, 409
 あきのしも (秋の霜), 126, 235, 239, 260, 352
 あきのすずしさ (秋の涼しさ), 396, 406
 あきのそら (秋の空), 62, 99, 158, 165, 232, 245, 261, 285, 407
 あきのたまくら (秋の手枕), 62, 297, 399
 あきのつき (秋の月), 62, 279
 あきのはつかぜ (秋の初風), 62, 123, 157, 263, 310, 342, 395
 あきのはつしも (秋の初霜), 124, 283
 あきのほたる (秋の蛍), 63, 369, 383
 あきのみず (秋の水), 68, 331
 あきのみむろやま (秋の三室山), 183, 428
 あきのむらさめ (秋の村雨), 63, 282, 299, 422
 あきのやま (秋の山), 63, 431
 あきのゆうぐれ (秋の夕暮れ), 87, 153
 あきのよ (秋の夜), 82, 103, 121, 143, 158, 167, 283
 あきのよすがら (秋の夜すがら), 63, 459
 あきのよなが (秋の夜長), 64, 313, 459
 あきのよなよな (秋の夜な夜な), 64, 459
 あきのよのつき (秋の夜の月), 64, 279, 459
 あきのよもぎうのさと (秋の蓬生の里), 172, 224
 あきはかなしい (秋は悲しい), 131, 325, 420
 あきふける (秋更ける), 64, 83, 132, 174, 193, 207, 211, 236, 237, 266, 281, 286, 289, 338, 352, 365, 373, 401, 420, 432, 437, 464
 あきふけわたる (秋更け渡る), 65, 373, 466
 あきぼたるとゆうまくら (秋蛍と夕枕), 144, 306
 あけがた (明け方), 108, 256, 315, 411
 あけがたのそら (明け方の空), 69, 164, 261
 あけのそほぶね (朱のそほ舟), 161, 338, 360, 411
 あけのとりのこえごえ (明けの鳥の声々), 101
 あけはてる (明け果てる), 69, 344
 あけはなれる (明け離れる), 69, 188, 241, 351, 398
 あけぼののくも (曙の雲), 67, 194
 あけぼののそら (曙の空), 67, 262, 385
 あけぼののやま (曙の山), 67, 431

- あげやすいころ (明けやすい頃), 385
 あげやすいつき (明けやすい月), 69, 280
 あげやらない (明けやらない), 392, 438
 あける (明ける), 70, 91, 210, 308
 あけるよ (明ける夜), 89, 409
 あけわたる (明け渡る), 298, 363, 376
 あけわたるそら (明け渡る空), 174, 291, 305
 あさあけのどか (朝明け長閑), 106
 あさがおのいろ (朝顔の色), 73, 99
 あさがおのはな (朝顔の花), 73, 272, 321, 344, 442
 あさがすみ (朝霞), 70, 148
 あさがすみたつ (朝霞立つ), 167, 228, 434
 あさぎり (朝霧), 61, 232, 293, 411
 あさくるうぐいす (朝来る鶯), 71, 106, 197
 あさけしずか (朝明け静か), 70, 71, 240
 あさごおり (朝氷), 266, 410
 あさごろもうつ (麻衣打つ), 74, 113, 224
 あさじう (浅茅生), 172
 あさじうのおく (浅茅生の奥), 189
 あさじうのつゆ (浅茅生の露), 172, 292
 あさじがはら (浅茅が原), 59, 156, 371
 あさつゆ (朝露), 269, 329
 あさなあさな (朝な朝な), 102, 222, 378
 あさのさごろも (麻の狭衣), 74, 224, 369, 466
 あさひかげ (朝日影), 71, 142, 188, 329, 337, 360
 あさぼらけ (朝ぼらけ), 71, 77, 84, 85, 108, 109, 115,
 117, 135, 187, 194, 204, 295, 315, 328, 334,
 336, 375
 あさまだき (朝まだき), 72, 352
 あさみどり (浅緑), 392, 438
 あじけないよ (味気ない世), 74, 452
 あした (朝), 72
 あしたのくも (朝の雲), 175, 450, 460
 あしびたくかげ (葦火焚く影), 74, 143, 267, 361
 あすかかぜ (明日香風), 303, 418
 あだしの (化野), 192, 292, 361
 あだとかかりくる (徒と掛かり来る), 74, 139, 197
 あだなみがそでぬらす (徒浪が袖濡らす), 255, 272, 402
 あとをだにとう (後をだに訪う), 75, 300
 あまおとめ (天乙女), 127, 298
 あまおぶね (海人小舟), 77, 128, 174, 210, 343, 375
 あまそそぎ (雨注ぎ), 318, 384
 あまつおとめご (天つ乙女子), 128
 あまつかり (天つ雁), 138, 356
 あまつかりがね (天つ雁), 255, 284
 あまのかぐやま (天の香具山), 88, 379
 あまのがわ (天の川), 177, 298
 あまのつりぶね (海人の釣舟), 71, 72, 77, 142, 295, 329,
 337, 360, 375
 あまひこのこえ (天彦の声), 78, 204
 あめかすむくれ (雨霞む暮れ), 78, 153, 199
 あめがふる (雨がふる), 78, 378
 あめすぎたあとのしずけさ (雨過ぎた後の静けさ), 75,
 78, 240, 249
 あめすぎる (雨過ぎる), 318, 384
 あめのうち (雨の内), 78, 112
 あめのくれ (雨の暮れ), 79, 199, 254, 257, 261
 あめのこるそら (雨残る空), 79, 262, 335
 あめのさびしさ (雨の寂しさ), 385
 あめのつれづれ (雨の徒然), 385
 あめのなごり (雨の名残), 209, 307
 あめののどけさ (雨の長閑さ), 79, 337
 あめはれたはるのくれ (雨晴れた春の暮れ), 329, 410,
 443
 あめはれる (雨晴れる), 392, 438
 あめをまつ (雨を待つ), 79, 401
 あやおるみず (綾織る水), 76, 197
 あやめぐさ (菖蒲草), 80, 114, 134, 258
 あらいそのなみ (荒磯の浪), 77, 128, 375
 あらしのやま (嵐の山), 211, 405
 あらしふくやま (嵐吹く山), 80, 371, 431
 あらまし (あらまし), 81, 97, 169
 あらればしりのよるのつき (霰走りの夜の月), 126, 358,
 427
 あらわす (現す), 81
 あらわれる (現れる), 81, 124, 137, 173, 335
 ありあけ (有明), 81, 246, 264, 314, 370, 392, 439, 461
 ありあけがた (有明方), 231, 275
 ありあけのかげ (有明の影), 82, 143
 ありあけのそら (有明の空), 82, 185, 262, 271, 384, 385
 ありあけのつき (有明の月), 65, 71, 82, 107, 114, 119,
 132, 151, 186, 280, 296, 301, 318, 327, 354,
 373, 384, 386, 433
 あるかなきか (有るか無きか), 84, 309
 あるもの (あるもの), 84
 あわじがた (淡路潟), 118, 253, 323
 あわじしま (淡路島), 118, 254
 あわじしまやま (淡路島山), 314
 あわれ (哀れ), 85, 180, 216, 310, 366, 453
 あわれしる (哀れ知る), 85, 247
 あわれである (哀れである), 85
 あわれをいう (哀れを言う), 137, 173, 207
 いいしばかりにあき (言いしばかりに秋), 247, 395
 いえいえのかぜ (家々の風), 279, 363
 いかが (如何), 87

- いかがしよう (如何しよう), 378, 398
 いかだをくだすかわ (筏を下す川), 327
 いかなる (如何なる), 69, 131, 223, 344, 427
 いかにねて (如何に寝て), 88, 332
 いかばかり (如何ばかり), 78, 153, 207, 238
 いくえかすみ (幾重霞), 88, 149
 いくえとよらのたけのしたみち (幾重豊浦の竹の下道),
 88, 241, 267, 307, 412
 いけのふじなみ (池の藤浪), 386
 いけふる (池ふる), 88, 379
 いけみず (池水), 88, 409
 いさらのみず (いさら井の水), 89, 409
 いずこにある (何処にある), 127, 410
 いずこにかすむ (何処に霞む), 79, 337
 いずこにたびのやどり (何処に旅の宿り), 429
 いずこにも (何処にも), 428, 456
 いそがれる (急がれる), 89, 448
 いそぐ (急ぐ), 76, 89, 446
 いそぐかり (急ぐ雁), 124, 151
 いそにふねにひぐれ (磯に舟に日暮れ), 101, 332, 401
 いつかさて (何時かさて), 94
 いづるたびびと (出る旅人), 272, 298, 363
 いづるひかげ (出る日影), 72, 152, 159
 いづるふなびと (出る舟人), 298, 363, 376
 いつわり (偽り), 94, 187, 220
 いなおおせどり (稲負鳥), 60, 94, 197
 いなずまのかげ (稲妻の陰), 95, 143, 282, 299
 いにしえ (古), 95, 106, 123, 240, 340, 451, 465
 いにしえのあと (古の後), 75, 85, 95, 247
 いにしえのつき (古の月), 95, 281, 452, 463
 いにしえのみや (古の宮), 95, 417
 いにしえのゆめ (古の夢), 87, 95, 244, 450
 いねがてのそら (寝ねがての空), 262, 332
 いのち (命), 272, 408
 いのちであってほしい (命であってほしい), 95
 いのちである (命である), 464
 いのちにて (命にて), 96
 いまわとつきがかたむく (今際と月が傾く), 388
 いもがこいしくて (妹が恋しくて), 96, 203
 いもにこいつつ (妹に恋いつつ), 96, 203
 いらいのかね (入相の鐘), 80, 97, 136, 168, 175, 187,
 200, 225, 297, 302, 330, 334, 380, 443, 445
 いらひかげ (入り日影), 98, 143, 329
 いろかわる (色変わる), 99, 180
 いろかわるころ (色変わる頃), 99, 180, 222
 いろづく (色付く), 60, 99, 103, 239, 290, 296
 いろみえる (色見える), 180, 217, 310, 366, 453
 いわがね (岩が根), 100, 332
 いわがねのまつ (岩が根の松), 101, 332, 401
 いわこすなみ (岩越す浪), 101, 212, 322
 うい (憂い), 101, 163, 258, 293, 372, 403
 ういあき (憂い秋), 65, 95, 102, 281
 ういしぎのはねがき (憂い鳴の羽搔き), 102, 141, 239,
 352
 ういてねるかもめ (浮いて寝る鷗), 241
 ういふゆごもり (憂い冬籠り), 102, 222, 378
 ういみのとき (憂い身の時), 180, 217, 311, 366, 453
 ういものはない (憂いものはない), 82, 280
 うえおく (植え置く), 160, 265, 449, 450
 うえないならきかないおぎのうわかぜ (植えないなら聞
 かない荻の上風), 65, 102
 うえはつれない (上は連れない), 103, 296
 うえるた (植える田), 105, 265
 うきをただなぐさめる (憂きをただ慰める), 102, 319
 うぐいす (鶯), 67, 68, 90, 106, 115-117, 125, 135, 150,
 179, 184, 197, 202, 222, 231, 242, 259, 316,
 328, 348, 356, 358, 394, 396, 429, 431, 434,
 440
 うぐいすがなく (鶯が鳴く), 108, 198, 227, 278, 315,
 345, 346, 351, 355, 358
 うぐいすのこえ (鶯の声), 68, 71, 81, 100, 108, 115,
 134, 148, 172, 184, 204, 225-227, 255, 278,
 303, 334, 336, 345-347, 349-351, 354, 357,
 419, 448, 457
 うぐいすのこえごえ (鶯の声々), 80, 111, 214
 うくつらい (憂く辛い), 102, 295
 うしろのやま (後ろの山), 75, 431
 うすがすみ (薄霞), 70, 73, 227, 346, 448
 うすぎりのまがき (薄霧の籬), 242, 295, 339
 うすけむり (薄煙), 111, 203
 うずみび (埋火), 73, 343, 447
 うずもれる (埋もれる), 86, 141, 433
 うずらなく (鶉鳴く), 123, 278
 うたうこえごえ (歌う声々), 201, 306, 330
 うたたね (うたた寝), 332
 うたのしなじな (歌の品々), 111, 244
 うちかえすた (打ち返す田), 113, 135, 265
 うちかすむ (うち霞む), 109, 149, 198, 205, 355, 359,
 379, 417
 うちがなぐさめる (うちが慰める), 319
 うちかわす (打ち交わす), 85, 278
 うちきせたい (打ち着せたい), 190
 うちしぐれ (うち時雨), 97, 168
 うちしぐれる (うち時雨れる), 277, 317
 うちとけて (打ち解けて), 122, 143, 432
 うちなびく (打ち靡く), 321

- うちのかたち (内の形), 84, 276, 309
 うちのゆき (内の雪), 112, 447
 うちはえる (打ち映える), 55, 94, 430
 うちむれる (打ち群れる), 424
 うちわたす (打ち渡す), 466
 うつあさごろも (打つ麻衣), 60, 234
 うつのやま (宇津の山), 113, 432
 うつのやまごえ (宇津の山越え), 113, 212, 432
 うつりもてゆく (移り持て行く), 88, 114, 426
 うつる (映る), 232, 285
 うつろう (移ろう), 66, 100, 114, 174, 207, 355
 うのはな (卯の花), 115
 うみのなぎさにまつのはなおちる (海の汀に松の花落ちる), 141, 191, 426
 うみやま (海山), 180, 216, 366
 うめがはるまつ (梅が春待つ), 222, 223, 378
 うめさく (梅咲く), 115, 198, 227, 355
 うめにおう (梅匂う), 115, 328
 うめにおうころ (梅匂う頃), 115, 328
 うめのか (梅の香), 115, 134
 うめのかがする (梅の香がする), 116, 134
 うめのひともと (梅の一本), 90, 116, 396
 うらなみのおと (浦浪の音), 136
 うらのあさあけ (浦の朝明け), 121, 376
 うらみわびる (恨み侘びる), 92, 333, 369

 えだにうめさく (枝に梅咲く), 109, 205

 おいのさか (老の坂), 198, 435
 おいのゆくすえ (老いの行く末), 119, 449
 おうさかのせき (逢坂の関), 119, 128, 159
 おうさかのやま (逢坂の山), 120
 おうのうらなみ (麻生の浦浪), 351, 442
 おおいがわかすむ (大井川霞む), 80, 371, 431
 おおはらまつり (大原祭り), 120, 406
 おおよどのなみ (大淀の浪), 136
 おかべのあき (岡辺の秋), 56, 285
 おかべのはじのひとむら (岡辺の櫓の一群), 90, 120, 341, 424
 おきいでる (起き出でる), 88, 114, 116, 134, 426
 おぎにかぜ (荻に風), 121, 158
 おぎのうわかぜ (荻の上風), 85, 103, 121, 141, 158, 445, 446
 おきのしらなみ (沖の白浪), 120, 247, 305, 322, 376
 おきのつりぶね (沖の釣舟), 120, 296, 376
 おきのなみ (沖の浪), 121, 322
 おきのふね (沖の舟), 121, 198, 302, 376
 おくやまのかげ (奥山の陰), 122, 143, 432
 おくる (送る), 122, 164, 257, 301, 363

 おぐるまのおと (小車の音), 123, 125, 198
 おじかなくこえ (牡鹿鳴く声), 206, 237, 316
 おじかなくやま (牡鹿鳴く山), 290, 463
 おしむ (惜しむ), 123
 おしんではなをみる (惜しんで花を見る), 123, 344, 418
 おそざくら (遅桜), 123, 228
 おだのはら (小田の原), 230, 360
 おちかたのくも (遠方の雲), 164, 194, 301
 おちかたのやま (遠方の山), 164, 301, 432
 おちかたびと (遠方人), 190
 おちかたびとのそで (遠方人の袖), 164, 257, 301, 363
 おちのとおやま (遠方の遠山), 165, 301, 390, 432
 おちのひとむら (遠方の一村), 138, 252
 おちるあまつかり (落ちる天つ雁), 124, 173, 298
 おちるたきなみ (落ちる滝浪), 151
 おとがする (音がする), 184, 188, 241, 242, 349, 413
 おとずれて (訪れて), 272, 364
 おとろえる (衰える), 128, 181, 217, 311, 366, 453
 おとわがわ (音羽川), 101, 267, 323
 おなじこころ (同じ心), 128, 214
 おのえのはなをみる (尾上の花を見る), 128, 344, 418
 おぼしまのおく (欄干の奥), 260, 398
 おぼつかない (覚束ない), 149, 221, 289, 445, 458, 461
 おぼろづきよ (朧月夜), 129, 281, 459
 おぼろにのこるありあけのつき (朧に残る有明の月), 83, 129, 281, 336
 おみなえし (女郎花), 129, 294, 400
 おもいかえす (思い返す), 130, 136
 おもいかねる (思いかねる), 209, 277, 317
 おもいぐさ (思い草), 294, 324
 おもいそめる (思い初める), 133, 214
 おもいたい (思いたい), 98, 169
 おもいたえる (思い耐える), 130, 266
 おもいのけむり (思いの煙), 130, 203
 おもいやる (思いやる), 166, 231, 276, 434
 おもいやるにもそで (思いやるにも袖), 381
 おもいわびる (思い侘びる), 314, 461
 おもう (思う), 103, 104, 112, 121, 158, 245, 255, 260, 299, 325, 381, 467
 おもうこととつき (思う事と月), 130, 281
 おもうな (思うな), 130
 おもうひとのことは (思う人の言の葉), 130, 220, 363
 おもうふるさと (思う古里), 130, 239, 380
 おもかげ (面影), 77, 114, 132, 134, 258, 300, 415, 430, 464
 おもかげにたつ (面影に立つ), 386
 おもかげばかり (面影ばかり), 247, 292
 おやまだのすえ (小山田の末), 248, 266, 432

- おやまだのはら (小山田の原), 266, 352, 432
 おろかなこころ (愚かな心), 133, 214
 かえしおく (返し置く), 225, 307
 かえりにこまいわうこえ (帰りに駒祝う声), 101, 136, 207, 221
 かえりみる (帰り見る), 377
 かえりをいそぐ (帰りを急ぐ), 89, 136
 かえる (帰る), 97, 105, 136, 145, 146, 165, 168, 200, 215, 233, 277, 317, 336, 410, 434
 かえるかりがね (帰る雁), 72, 81, 82, 129, 137, 151, 173, 219, 243, 247, 280, 404, 419, 447
 かえるかりのこえ (帰る雁の声), 137, 173, 207
 かえるさ (帰るさ), 137, 265, 450
 かえるさとびと (帰る里人), 137, 230, 363
 かえるさのみち (帰るさの道), 137, 386, 412
 かえるつりぶね (帰る釣舟), 291, 352
 かえるとりのね (帰る鳥の音), 125, 137, 307
 かえるふなびと (帰る舟人), 200
 かえるふるさと (帰る古里), 138, 380
 かおるたちばな (香る橘), 386
 かかる (掛かる), 139
 かかるふじなみ (掛かる藤浪), 55, 75, 139, 226, 322, 344, 346, 361, 374
 かきねづたい (垣根伝い), 140, 291
 かきのもとつば (垣の本つ葉), 140, 361, 426
 かきのやはたやま (垣の八幡山), 254, 402
 かくもしおぐさ (掻く藻塩草), 141, 191, 426
 かくれが (隠れ家), 86, 141
 かくれがのやま (隠れ家の山), 86, 141, 433
 かくれがはない (隠れ家はない), 86, 142, 309
 かけいにうけるみず (懸樋に受ける水), 111, 142, 409
 かげかすか (影かすか), 143, 148
 かげくれる (影暮れる), 122, 143, 199, 457
 かげさびしい (影寂しい), 59, 156, 204
 かげたかくなる (影高くなる), 144, 266
 かけはし (掛橋), 139, 231, 304, 339, 397, 441
 かけはしのすえ (掛橋の末), 414
 かげろうのいわがき (蜻蛉の岩垣), 84, 309
 かこいすてる (囲い捨てる), 207
 かささぎ (鶴), 140, 195, 340
 かさなる (重なる), 231, 351, 413
 かさなるやま (重なる山), 147, 433
 かさのはのゆき (笠の端の雪), 137
 かしこい (賢い), 147
 かずあまた (数あまた), 78, 153
 かすか (微か), 248, 268
 かすかなかげ (微かな影), 144, 148
 かずそう (数添う), 84, 369
 かずならぬ (数ならぬ), 153
 かすみ (霞), 149, 225, 308
 かすみあさつゆ (霞む朝露), 216
 かすみくみよる (霞くみよる), 149
 かすみこめる (霞こめる), 149, 174, 207, 221
 かすみつつ (霞みつつ), 109, 149, 205
 かすみにくれる (霞に暮れる), 128, 344, 418
 かすみにこもる (霞にこもる), 150, 222
 かすみにたどるみち (霞にたどる道), 150, 271, 412
 かすみのうちのみずのみなかみ (霞の内の水の水上), 104, 112, 150, 409
 かすみのそこ (霞の底), 150, 257
 かすみのひま (霞のひま), 150, 369
 かすみより (霞より), 151
 かすむ (霞む), 55, 69, 109, 151, 162, 205, 222, 227, 228, 322, 355, 356, 358, 362, 372, 430
 かすむあけのそほぶね (霞む朱のそほ舟), 76, 375
 かすむあけぼの (霞む曙), 107, 213, 228, 304, 435
 かすむあさまだき (霞む朝まだき), 109, 204
 かすむいりあいのかね (霞む入相の鐘), 200, 357
 かすむおちこち (霞む遠近), 124, 151
 かすむこのあした (霞むこの朝), 108, 315
 かすむたまつしま (霞む玉津島), 220
 かすむの (霞む野), 109, 205
 かすむはるのとおやま (霞む春の遠山), 151, 301, 354, 433
 かすむひ (霞む日), 151, 329
 かすむみかさやま (霞む三笠山), 139, 323, 374
 かすむやまもと (霞む山本), 152, 426, 433
 かすむゆうぐれ (霞む夕暮れ), 152, 199, 443
 かすむよ (霞む夜), 68, 356
 かぜがすさまじい (風が凄まじい), 158, 249
 かぜがみにしみる (風が身にしみる), 158, 245, 407
 かぜさえる (風冴える), 83, 281
 かぜとあさがすみ (風と朝霞), 72, 152, 159
 かぜにつゆがおちる (風に露が落ちる), 129
 かぜにつゆがこぼれる (風に露が零れる), 61, 239
 かぜににおうたちばな (風に匂う橘), 159, 269, 328
 かぜにはなちる (風に花散る), 159, 278, 345
 かぜのおとわやま (風の音羽山), 128, 159
 かぜのおりおり (風の折々), 133, 159
 かぜのしずけさ (風の静けさ), 159, 241
 かぜのすずしさ (風の涼しさ), 159, 251, 305, 383
 かぜのはげしさ (風の激しさ), 160, 339
 かぜのまにまに (風のまにまに), 160, 397
 かぜのむらさめ (風の村雨), 160, 422
 かぜのゆくすえ (風の行末), 160, 449
 かぜみえる (風見える), 160, 418

- かぜわたる (風渡る), 282, 299
 かた (方), 137, 230, 363
 かたおかのべ (片岡野辺), 91, 268, 424
 かたおかのみち (片岡の道), 307, 317
 かたおかのもり (片岡の杜), 393, 439
 かたしきのそで (片敷の袖), 165, 257, 386
 かたしきのまくら (片敷の枕), 221, 267, 292, 361
 かたしきのゆめ (片敷の夢), 176, 334, 400
 かたしく (片敷く), 92, 146, 166, 183, 242, 333, 369, 413
 かたばかり (湯ばかり), 183
 かたみ (形見), 66, 75, 114, 134, 166, 186, 224, 254, 259, 381
 かたむく (傾く), 166
 かたもさだめない (方も定めない), 165, 230
 かたより (片寄), 167
 かたるばかりにむかうおもかげ (語るばかりに向う面影), 132, 167, 419
 かつらぎのやま (葛城の山), 167, 433
 かつらぎやま (葛城山), 55, 430
 かどさす (門さす), 97, 168
 かどみえる (門見える), 98, 169
 かねかすか (鐘微か), 290, 463
 かねなる (鐘鳴る), 67, 104, 170, 228, 262, 326
 かねのおと (鐘の音), 104, 150, 178, 222, 285
 かねのこえ (鐘の声), 176, 374, 450
 かねのひびき (鐘の響き), 88, 149
 かみにただいのる (神にただ祈る), 96, 171
 かみまつり (神祭), 117, 238, 323
 かもひよし (賀茂日吉), 171, 370
 からごろも (唐衣), 100, 128, 172, 209, 224, 235, 256, 335, 462
 からすとぶ (鳥飛ぶ), 245, 327, 364
 かりがなきかわすそら (雁が鳴き交わす空), 69, 351
 かりごろも (狩衣), 187
 かりそめ (仮初め), 175
 かりなく (雁鳴く), 65, 66, 80, 161, 163, 165, 173, 210, 301, 316, 324, 373, 416, 432, 466
 かりねのつきかけ (仮寝の月影), 144, 175, 282, 333
 かりねののべ (仮寝の野辺), 70
 かりねをする (仮寝をする), 175, 333
 かりのいくつら (雁の幾列), 173, 464
 かりのこえ (雁の声), 82, 174, 207, 280, 400, 450
 かりのこえごえ (雁の声々), 174, 207
 かりのこのよ (仮のこの世), 190, 271
 かりのたまずさ (雁の玉章), 174, 274
 かりのなくこえ (雁の鳴く声), 71
 かりのひとこえ (雁の一声), 174, 207
 かりのひとつら (雁の一行), 174, 464
 かりのよるのゆめ (仮の夜の夢), 175, 450, 460
 かりふしのゆめ (仮臥の夢), 176, 374, 450
 かりまくら (仮枕), 168, 176, 272, 273, 298, 363, 399
 かれたくさがもえでる (枯れた草が萌え出る), 177, 191, 298, 426
 かれはなすすき (枯れ花薄), 177, 251, 345
 かわおと (川音), 125, 177
 かわすことのは (交わす言の葉), 179, 220
 かわずなく (蛙鳴く), 113, 135, 150, 179, 186, 257, 265, 316, 442
 かわぞい (川添い), 55, 94, 430
 かわぞいのみち (川沿いの道), 167, 178, 256, 412
 かわぞいぶね (川沿い舟), 178, 256, 376
 かわつらのさと (川面の里), 178, 230, 295
 かわるよのなか (変わる世の中), 214, 230, 287, 363, 402, 452
 かななづき (神無月), 183
 かななびのもり (神奈備の森), 183, 428
 きえない (消えない), 67, 262
 きえるけむり (消える煙), 184, 203
 きえるならきえるおもい (消えるなら消えるべき思い), 129, 184
 きぎすなきたつ (雉鳴き立つ), 186, 316
 きぎのいろいろ (木々の色々), 100, 183
 きぎのしたつゆ (木々の下露), 64, 373
 きくのひとと (菊の一本), 90, 185, 396
 きくのもめずらしい (聞くのも珍しい), 185, 426
 きくほととぎす (聞く時鳥), 185, 384
 きけばあらし (聞けば嵐), 192, 399
 きさらぎのわかれをと (如月の別れを訪う), 297, 359, 435
 きしのうのはな (岸の卯の花), 142, 320
 きしのくれたけ (岸の呉竹), 178, 256, 376
 きしのやまぶき (岸の山吹), 186, 442
 きぬぎぬ (後朝), 186
 きぬぎぬのあと (後朝の後), 57, 75, 154, 186
 きぬぎぬのおもかげをしたう (後朝の面影をしたう), 67, 194
 きぬぎぬのそで (後朝の袖), 56, 186, 257
 きぬたのおと (砧の音), 125, 187
 きのうのくも (昨日の雲), 187, 194
 きのうみ (紀伊海), 66, 302, 434
 きのうをこそ (昨日を去年の), 88, 332
 きみがよ (君が代), 187
 きみのことのは (君の言の葉), 187, 220
 きょうごと (今日毎), 187, 225
 きょうばかり (今日ばかり), 187
 きよまわり (清まわり), 188

- きりぎりす (蟋蟀), 64, 145, 147, 158, 189, 249, 288,
 313, 332, 344, 458, 459, 463
 きりたちのぼる (霧立ち上る), 327
 きりにしも (霧に霜), 188, 246
 きりのうえ (霧の上), 104, 188
 きりのうち (霧の内), 61, 232
 きりのこる (霧残る), 188, 336
 きりのしたみち (霧の下道), 188, 241, 319, 413, 420
 きりのまがき (霧の籬), 188, 398
 きりのみちのかたがた (霧の道の方々), 89
 きりはれのぼる (霧晴れ昇る), 188, 337, 360
 きりはれる (霧晴れる), 189, 236, 284, 360
 きりわたる (霧わたる), 61, 157, 177

 くさのいお (草の庵), 87, 131, 191, 325, 386, 420
 くさのかりいお (草の仮庵), 260, 331
 くさのつゆ (草の露), 191, 292
 くさのとのうち (草の戸の内), 112, 191, 299
 くさのはら (草の原), 258, 275, 300, 319, 331, 405
 くさのまくら (草の枕), 263, 273
 くさのまくらのあかつき (草の枕の暁), 391
 くさはのこらないゆきのしたおれ (草は残らない雪の下
 折), 133, 191, 242, 336, 447
 くさばのつゆ (草葉の露), 192, 292, 361
 くさはら (草原), 192, 352
 くさまくら (草枕), 56, 64, 66, 68, 82, 90, 96, 139, 164,
 168, 192, 203, 231, 261, 262, 273, 288, 289,
 293, 302, 319, 359, 370, 382, 399, 418, 420,
 424, 450, 459, 460, 462, 463
 くににしたがう (国に従う), 194, 243, 339, 415
 くむさかずき (汲む杯), 361, 428
 くめのいわはし (久米の岩橋), 101, 194, 339
 くもいをかえるかりがね (雲居を帰る雁), 152, 283, 460
 くもうく (雲浮く), 162, 372, 403
 くもかかるみね (雲かかる峰), 139, 195, 416
 くもどりのあと (雲鳥の跡), 76, 197
 くもにありあけのつき (雲に有明の月), 70, 148
 くもになくほととぎす (雲に鳴く時鳥), 233
 くものうえ (雲の上), 84
 くものおちかた (雲の遠方), 165, 195, 302, 387
 くものかけはし (雲の掛橋), 140, 195, 340
 くものかよいじ (雲の通り路), 127, 298
 くものたえま (雲の絶え間), 195, 266
 くものとだえにほのめく (雲の途絶えにほのめく), 77,
 446
 くものひとむら (雲の一群), 90, 195, 424
 くものむらむら (雲の群々), 240, 445
 くもまよう (雲迷う), 318, 384
 くらはしやま (倉橋山), 391

 くれごとのそら (暮れごとの空), 199, 262
 くれたけ (呉竹), 267
 くれつがた (暮れつ方), 190, 317
 くれのないのうめ (紅の梅), 116, 202
 くれのはなすすき (暮れの花薄), 61, 132
 くれゆくかた (暮れゆく方), 165, 200
 くれる (暮れる), 200, 209, 307
 くれるはしのひとすじ (暮れる橋の一筋), 248, 410, 419
 くれるひ (暮れる日), 160, 397
 くれわたる (暮れ渡る), 125, 137, 307
 くろきのとりい (黒木の鳥居), 337

 けさのはつゆき (今朝の初雪), 72, 343, 447
 げにもあだしむ (げにも徒しむ), 75
 けむりたてそえる (煙立て添える), 87, 442
 けむりひとすじ (煙一筋), 90, 203, 250
 けむりふきやるかぜ (煙吹きやる風), 92, 250

 こいしさ (恋しさ), 364, 403
 こえがきこえる (声が聞こえる), 132, 233, 428
 こえごえ (声々), 288, 359, 460
 こえする (声する), 207
 こえのさむさ (声の寒さ), 207, 234
 こえるいせき (越える井関), 254
 こえるおうさかのせき (越える逢坂の関), 119, 212
 こえるおうさかのやま (越える逢坂の山), 120, 213
 こおりそめる (氷初める), 213, 341
 こおりとけゆく (氷解け行く), 88, 409
 こおりながれる (氷流れる), 184, 448
 こがくれる (木隠れる), 119, 135, 212, 346
 こがらしのかぜ (木枯しの風), 160, 214
 こけのどのゆうあらし (苔の戸の夕嵐), 103, 328, 467
 ここかしこ (ここかしこ), 111, 142, 409
 ここのえのうち (九重の内), 183
 こころあらそうた (心争う歌), 80, 111, 214, 362, 408
 こころうかれる (心浮かれる), 105, 215, 229
 こころうらめしい (心恨めしい), 118, 215
 こころがまどのうち (心が窓の内), 215, 406
 こころづかい (心使い), 407
 こころづくし (心尽くし), 215, 290
 こころである (心である), 130, 215
 こころであればなあ (心であればなあ), 275
 こころではない (心ではない), 215
 こころながくまで (心長く待て), 215, 313, 402
 こころにて (心にて), 216
 こころぼそいはなおちるころ (心細い花落ちる頃), 61,
 276, 326
 こころをつくすあめのよる (心を尽す雨の夜), 79, 216,
 290, 460

- こしのしらゆき (越の白雪), 219, 247, 447
 こずえのあき (梢の秋), 65, 219
 こずえのふじのたそがれ (梢の藤の黄昏), 391
 こすのと (小簾の外), 269, 329
 こたえようか (答えようか), 219
 こちょうという (胡蝶という), 220
 こちょうのたとえ (胡蝶の喩え), 220, 270
 こととう (言問う), 104, 112, 150, 409
 ことのはがない (言の葉がない), 220
 ことのはにする (言の葉にする), 219
 ことのはのすえ (言の葉の末), 94
 ことのはのみち (言の葉の道), 148, 254, 343, 353, 401
 こないでおとする (来ないで音する), 125, 197
 こなたかなた (此方彼方), 175, 357
 このしたつゆ (木の下露), 183, 242, 292
 このはちるおと (木の葉散る音), 92, 240
 このもと (木の下), 85, 393, 411, 436, 439
 このもとみち (木の下道), 183, 242, 413
 こはぎうつろう (小萩移ろう), 114, 338
 こはぎはら (小萩原), 212, 338, 353, 421
 こぼれるたけのはのつゆ (零れる竹の葉の露), 221, 267,
 292, 361
 こまいわう (駒祝う), 334
 こまいわうこえ (駒祝う声), 177, 191, 298, 426
 こまとめる (駒止める), 186, 221, 316, 337
 こまもすすまない (駒も進まない), 466
 こもりいる (籠り居る), 304, 384
 ころもうつ (衣打つ), 56, 153
 ころもうつおと (衣打つ音), 65, 189, 373, 396
 ころもうつこえ (衣打つ声), 57, 81, 99, 154, 255, 284,
 290
 ころもがひがたい (衣が干難い), 223, 244, 379
 ころもでのつゆ (衣手の露), 127, 242, 287, 421

 さえさえる (冴え冴える), 72, 343, 447
 さおじかのこえ (さ牡鹿の声), 59, 64, 155, 207, 238,
 243, 267, 373, 415, 416, 437
 さくはるのはな (咲く春の花), 227, 345, 354
 さくらさく (桜咲く), 227, 228
 さくらさくころ (桜咲く頃), 222, 227, 228, 349, 354
 さくらちる (桜散る), 127, 365
 さくらちるかげ (桜散る陰), 144, 228, 278
 さくらとやどのうめのえだ (桜と宿の梅の枝), 227, 345,
 354
 さくらのうえ (桜の上), 104, 228
 さくらのかつらぎのやま (桜の葛城の山), 167, 228, 434
 さすらうみ (流離う身), 85
 さそう (誘う), 63, 105, 157, 229, 270, 342
 さそわれる (誘われる), 229

 さだめない (定めない), 230
 さとにひとかえるみゆ (里に人帰る見ゆ), 98, 143, 329
 さとのかたわら (里の傍ら), 415, 429
 さとのくさかり (里の草刈り), 398, 466
 さとのとみくさ (里の富草), 272
 さとのはるかさ (里の遥かさ), 230, 360
 さとのひとむら (里の一群), 90, 231, 424
 さとはなれたみち (里離れた道), 231, 351, 413
 さともない (里もない), 225, 273
 さねかずら (真葛), 120
 さみだれ (五月雨), 179, 233, 316
 さみだれのあと (五月雨の後), 76, 233
 さみだれのうち (五月雨の内), 112, 233
 さみだれのころ (五月雨の頃), 143, 199, 223, 234, 340,
 341, 379, 387
 さみだれのつゆ (五月雨の露), 234, 292
 さむいひ (寒い日), 234, 330
 さむしろ (さ筵), 422
 さむしろのつき (さ筵の月), 422
 さむしろのつゆ (さ筵の露), 287, 460
 さやか (さやか), 235
 さやかなほし (さやかな星), 236, 382
 さゆるゆうかぜ (寒ゆる夕風), 361, 380, 448
 さよごろもとゆめ (小夜衣と夢), 130, 136
 さよまくら (小夜枕), 95, 450
 さるさけぶ (猿叫ぶ), 140, 340, 416
 さるさけぶこえ (猿叫ぶ声), 208, 229, 237
 さわみずのおと (沢水の音), 126, 237, 409

 しおがまのうら (塩釜の浦), 291, 297, 328, 377
 しかなく (鹿鳴く), 243, 415, 437
 しがのうらぶね (志賀の浦舟), 117, 238, 323
 しかのこえ (鹿の声), 65, 219
 しぎなく (鳴鳴く), 62, 237, 409
 しぎのはねおと (鳴の羽音), 126, 239, 352
 しぎのはねがき (鳴の羽掻き), 58, 141, 154, 239, 352
 しきわぶ (敷き侘ぶ), 239, 466
 しぐれ (時雨), 56, 279
 しぐれくる (時雨来る), 160, 339
 しぐれる (時雨れる), 165, 195, 196, 201, 239, 287, 302,
 444, 449
 しげきむしのね (繁き虫の音), 126, 240, 420
 しげるこずえ (茂る梢), 387
 しずか (静か), 210, 241, 246, 303, 308, 332, 354
 しずかなあめ (静かな雨), 89, 249, 391, 400
 しずかなともしびのかげ (静かな灯の影), 252
 しずのおだまき (賤の芋環), 123, 240
 したうわかれじ (慕う別れ路), 72
 したわれる (慕われる), 243

- しのにふるころ (篠にふる頃), 223, 244, 379
 しののめ (東雲), 186, 257
 しのびかねる (忍びかねる), 244
 しのびづま (忍び妻), 408, 451, 461
 しのぶぐさ (忍草), 192, 244
 しばのいお (柴の庵), 87, 163, 244, 254, 257, 261, 405, 438
 しばのとのうち (柴の戸の内), 112, 245, 299
 しばもつひと (柴持つ人), 89, 136
 しばむあさがお (萎む朝顔), 73, 245
 しもがれ (霜枯れ), 248, 266, 432
 しもすさまじいやま (霜凄まじい山), 246, 250, 434
 しものかたしき (霜の片敷), 166, 246
 しもはただ (霜はただ), 140, 261, 340
 しもふる (霜ふる), 213, 341
 しもまようやまだ (霜迷う山田), 93, 251, 425
 しらかわのせき (白河の関), 246
 しらつゆ (白露), 247, 292
 しらない (知らない), 213, 215, 259
 しる (知る), 247
 しるべ (標), 165, 230
 しるべおきいづるみち (標置き出る道), 192, 399
 すえにちるはな (末に散る花), 248, 269, 424
 すぎのこずえ (杉の梢), 387
 すぎのむらだち (杉の群立ち), 170, 248, 269, 326, 424
 すぎるむらさめ (過ぎる村雨), 249, 387, 422
 すぎるゆうぐれ (過ぎる夕暮れ), 244
 すごいあきかぜ (凄い秋風), 65, 161, 249
 すさまじいそら (凄まじい空), 250, 263
 すずしい (涼しい), 251
 すずしさ (涼しさ), 126, 178, 276
 すずしさにあきたつ (涼しさに秋立つ), 65, 251, 270
 すずむしのこえ (鈴虫の声), 208, 252
 すだれをまけばゆき (簾を巻けば雪), 252, 398, 447
 すててかえる (捨てて帰る), 138, 252
 すててから (捨ててから), 86, 141, 433
 すてるほととぎす (捨てる時鳥), 90, 195, 424
 すてるよのなか (捨てる世の中), 252, 310, 453
 すまのうら (須磨の浦), 117, 253
 すまのうらなみ (須磨の浦浪), 118, 146, 253, 323, 436
 すまびと (須磨人), 253, 363
 すみぞめのそで (墨染の袖), 94, 101, 254, 257, 261, 456
 すみだがわ (隅田川), 254
 すみどころ (住み所), 255, 303
 すみのころもで (墨の衣手), 224, 254
 すみよし (住吉), 254
 すみよしのうら (住吉の浦), 118, 254
 すみよしのまつ (住吉の松), 254, 402
 すみよしのまつとたのむ (住吉の松と頼む), 255, 272, 402
 すむみねのふるでら (住む峰の古寺), 87, 271
 すめるふるさと (住める古里), 255, 381
 せきのと (関の戸), 209, 308, 317
 せみのもろごえ (蟬の諸声), 209, 256
 そうはおもかげ (添うは面影), 132, 256
 そことない (そことない), 174, 464
 そことなくかすむ (そことなく霞む), 110, 205
 そそぎすてる (注ぎ捨てる), 388
 そでがつゆっぽい (袖が露っぽい), 62, 103, 258, 273, 279, 293
 そでにかける (袖に掛ける), 245, 407
 そでぬれる (袖濡れる), 181, 217, 258, 311, 331, 367, 454
 そでのあきかぜ (袖の秋風), 290, 463
 そでのいろいろ (袖の色々), 100, 258, 274, 424
 そでのうつりが (袖の移り香), 114, 134, 172, 186, 224, 258, 336
 そでのうめのか (袖の梅の香), 116, 123, 135, 259, 344, 418
 そでのかずかず (袖の数々), 407
 そでのくれない (袖の紅), 203, 259
 そでのこおり (袖の氷), 213, 259
 そでのすずしさ (袖の涼しさ), 305, 383
 そでのつゆけさ (袖の露けさ), 287, 373
 そでのまゆずみ (袖の眉墨), 324
 そでふきおくるかぜ (袖吹きおくる風), 122, 161, 259, 371
 そでをぬらす (袖を濡らす), 260, 331
 そのあさがお (園の朝顔), 73, 260
 そのうめのか (園の梅の香), 81
 そのむらたけ (園の群竹), 107
 そのまま (そのまま), 260
 そばのかけはし (傍の掛橋), 140, 261, 291, 340
 そよぐあきかぜ (そよぐ秋風), 147, 243, 437
 そら (空), 88, 395
 それでないこえ (それでない声), 132, 167, 419
 たえだえ (絶え絶え), 99, 136, 140, 143, 148, 167, 291, 330, 356, 433
 たえない (耐えない), 172, 292
 たがさと (誰が里), 231, 275
 たき (滝), 93, 250, 411
 たきおちる (滝落ちる), 101, 212, 322
 たきのいわなみ (滝の岩浪), 101, 267, 323
 たきのしらなみ (滝の白浪), 151

- たきのなみ (滝の浪), 370, 411
 たけうちなびく (竹打ち靡く), 268, 321
 たけのすえずえ (竹の末々), 248, 268
 たけのひとむら (竹の一群), 91, 268, 424
 たけをうつこえ (竹を打つ声), 113, 209, 268
 たごのながきひ (田子の長き日), 139, 322, 374
 たそがれどき (黄昏時), 277, 446
 たそがれのそら (黄昏の空), 446
 ただあきのかぜ (ただ秋の風), 65, 161
 ただありなしのちぎり (ただ有り無しの契り), 84, 276, 309
 ただおもかげは (ただ面影), 260
 ただひとこと (ただ一言), 101, 194, 339
 ただひととおり (ただ一通り), 91, 303
 ただまつのかぜ (ただ松の風), 161, 402
 ただゆめのうち (ただ夢の内), 112, 450
 たちかえる (立ち返る), 274, 405
 たちばな (橘), 114, 135, 259, 394, 440
 たちやすらう (立ち安らう), 248, 414
 たちわかれ (立ち別れ), 260, 331
 たつたがわ (立田川), 203, 259
 たつたのやま (立田の山), 121, 322
 たつたやまのあき (立田山の秋), 120, 247, 322
 たつてうかれる (立って浮かれる), 105, 270
 たつひのなつごろも (たつ日の夏衣), 224, 270, 320, 330
 たななしおぶねのおと (棚無し小舟の音), 83, 129, 281, 336
 たなばた (七夕), 63, 157, 271, 342
 たなびくよこぐものそら (棚引く横雲の空), 195, 263, 271, 456
 たにうえやらない (田に植えやらない), 223, 234
 たにのいお (谷の庵), 87, 271
 たにのうぐいす (谷の鶯), 351, 358
 たにのとのうぐいす (谷の戸の鶯), 226, 308
 たにのとのやま (谷の戸の山), 107
 たにのとはあけてもおそいひのひかり (谷の戸は明けても遅い日の光), 108, 204
 たにのほそみち (谷の細道), 370, 438
 たのしみをきわめる (楽しみを極める), 190, 271
 たのしむ (楽しむ), 272
 たのみおく (頼み置く), 74, 452
 たのむ (頼む), 163, 372, 403
 たのむおなじよ (頼む同じ世), 96
 たのものはら (田の面の原), 248, 314
 たび (旅), 181, 217, 311, 367, 454
 たびごろも (旅衣), 138, 225, 250, 263, 273, 302, 380, 381
 たびにある (旅にある), 273
 たびのかなしさ (旅の悲しさ), 168, 273, 381
 たびのくにぐにのひと (旅の国々の人), 89, 126, 306, 377
 たびのころもで (旅の衣手), 225, 234, 273, 330
 たびのそら (旅の空), 130, 176, 263, 273, 335, 369, 375, 380, 382
 たびはうい (旅は憂い), 103, 273
 たびはかなしい (旅は悲しい), 168, 273
 たびまくら (旅枕), 176, 335, 375
 たまがわのなみ (多摩川の浪), 115
 たまくらのつき (手枕の月), 282, 399
 たましまがわ (玉島川), 274
 たますだれ (玉簾), 70, 71, 106, 159, 197, 240, 252, 269, 328
 たますだれあける (玉簾あける), 70, 252
 たまだれのきり (玉垂の霧), 126, 185, 294, 331
 たまのおのすえ (玉の緒の末), 74, 139, 197
 たまぼこ (玉鉢), 122, 161, 259, 274, 371
 たまぼこのゆくえ (玉鉢の行方), 125, 187
 たらちねのあと (垂乳根の跡), 458
 だれがうい (誰が憂い), 131, 223, 427
 だれかえる (誰帰る), 138, 275
 だれかがうえたまつのこる (誰かが植えた松残る), 90, 203, 250
 だれがこえる (誰が越える), 397, 441
 だれなのか (誰なのか), 275
 だれにわすれる (誰に忘れる), 275, 465
 だれをとおうか (誰を訪おうか), 192, 275, 300, 352
 だれをまつ (誰を待つ), 275, 402
 だれをまつむしのなく (誰を松虫の鳴く), 276, 317, 405
 ちかいかりがね (近い雁), 246, 285
 ちかいかわおと (近い川音), 126, 178, 276
 ちかいやまざと (近い山里), 231, 276, 434
 ちぎり (契り), 166, 171, 181, 217, 277, 311, 365, 367, 454
 ちどりなく (千鳥鳴く), 277, 317
 ちどりなくこえ (千鳥鳴く声), 209, 226, 277, 284, 317
 ちょうのあわれさ (蝶の哀れさ), 85, 278
 ちるのがおいしい (散るのが惜しい), 123, 278
 ちるはな (散る花), 163, 278, 345, 372, 404
 つかえびと (仕え人), 279, 363
 つきいでやる (月出やる), 282, 299
 つきいでる (月出る), 60, 62, 157, 197, 200, 282, 299, 324, 342, 359, 374, 404, 443
 つきおちる (月落ちる), 124, 209, 283, 307
 つきがかすむ (月が霞む), 152, 283
 つきがかすむよる (月が霞む夜), 152, 283, 460
 つきがかたむく (月が傾く), 167, 170, 283, 326

- つきかげすむ (月影澄む), 144, 255, 283
 つきがこおる (月が氷る), 213, 283
 つきがさやか (月がさやか), 236, 284
 つきがのこる (月が残る), 71, 148
 つきがほのめく (月がほのめく), 284, 395
 つきさえる (月冴える), 226, 284
 つきさしいでる (月差し出る), 229, 284, 299
 つきさやか (月さやか), 245, 407
 つきすむ (月澄む), 255, 284
 つきにありあけのそら (月に有明の空), 83, 263, 285
 つきにいくたび (月に幾度), 176, 401, 452
 つきにかえる (月に帰る), 100, 258
 つきにかりまくら (月に仮枕), 127, 421, 463
 つきにしも (月に霜), 246, 285
 つきのあかしがた (月の明石瀉), 56, 285
 つきのあかつき (月の暁), 166
 つきのありあけのころ (月の有明の頃), 385
 つきのいでしほ (月の出潮), 124, 173, 298
 つきのいりがた (月の入方), 99, 165, 285
 つきのかわかみ (月の川上), 104, 178, 285
 つきのこる (月残る), 70, 195, 263, 271, 456, 461
 つきのさびしさ (月の寂しさ), 232, 285, 388
 つきのさむしろ (月のさ簀), 70, 189, 252
 つきのさやけさ (月のさやけさ), 105, 125, 177, 236, 286, 353, 400
 つきのさよのなかやま (月の小夜の中山), 237, 286
 つきのさよふける (月の小夜更ける), 208, 238
 つきのたびのみち (月の旅の道), 274, 286, 413
 つきので (月の出), 152, 199, 443
 つきのむらくも (月の群雲), 195, 287, 425
 つきのもと (月の下), 194, 226, 242, 287, 462
 つきのゆうぐれ (月の夕暮れ), 62, 261
 つきのゆくすえ (月の行く末), 229, 287, 449
 つきのよ (月の夜), 211, 405
 つきはありあけ (月は有明), 84, 287, 318, 384
 つきはいでもくらい (月は出でも暗い), 188, 246
 つきはなお (月は猶), 69, 164, 261
 つきはまだ (月はまだ), 201, 300, 383
 つきふける (月更ける), 287, 373
 つきほのか (月仄か), 188, 336
 つきまつ (月待つ), 287, 402
 つきもさやか (月もさやか), 237, 287
 つきよなよな (月夜な夜な), 287, 460
 つきをまくらに (月を枕に), 262, 332
 つきをみる (月を見る), 163, 166, 181, 211, 217, 230, 246, 288, 311, 314, 367, 400, 403, 418, 454, 462
 つたう (伝う), 291
 つたのしたみち (葛の下道), 113, 432
 つづく (続く), 98, 169, 268, 322
 つづくおかごえのみち (続く岡越えの道), 56
 つつじやまぶき (躑躅山吹), 145, 347, 349, 354
 つなひくわたしぶね (綱引く渡し舟), 215, 313, 402
 つばくらめ (燕), 112, 380, 417
 つまとうちどりしばなく (妻訪う千鳥しば鳴く), 117, 253
 つもるしらゆき (積もる白雪), 379
 つゆおちる (露落ちる), 208, 238
 つゆがうい (露が憂い), 63, 422
 つゆがこぼれる (露が零れる), 58, 155
 つゆがみだれる (露が乱れる), 212, 293, 411, 421
 つゆさむいそで (露寒い袖), 144, 255, 283
 つゆしぐれのくさ (露時雨の草), 193, 240, 293
 つゆとけさのはつしも (露と今朝の初霜), 99, 290
 つゆにうつろう (露に移ろう), 270, 423
 つゆにみだれる (露に乱れる), 293, 411
 つゆのあけぼの (露の曙), 68, 293
 つゆのおとさくにわ (露の音聞か庭), 126, 185, 294, 331
 つゆのくさむら (露の草群), 220
 つゆのすずしさ (露の涼しさ), 251, 294
 つゆのたまくら (露の手枕), 294, 400
 つゆのつきがこぼれる (露の月が零れる), 221, 288, 294
 つゆのふるさと (露のふる里), 59, 156, 294, 381
 つゆのふるみち (露のふる道), 294, 379, 413
 つゆのよのなか (露の世の中), 189
 つゆふくかぜ (露吹く風), 161, 294, 371
 つゆふる (露ふる), 59, 156, 371
 つゆもたまらない (露も溜まらない), 321
 つゆもなみだも (露も涙も), 294, 324
 つらい (辛い), 275, 465
 つらいたまのお (辛い玉の緒), 140, 456
 つりぶね (釣舟), 144, 306
 つれない (連れない), 130, 266, 296
 つれないなかににしきぎ (連れない仲に錦木), 81
 つれなくみる (連れなく見る), 118, 215
 つれなさをうらむ (連れなさを恨む), 119, 296
 てならい (手習い), 106, 323, 377
 てらのかど (寺の角), 140, 340, 414
 といいかくいい (と云いかく言い), 85
 といよる (訪い寄る), 140, 340, 414
 とう (訪う), 119, 364
 とうひともあらしのやまのあきのくれ (訪う人も嵐の山の秋の暮れ), 276, 317, 405
 とおぎえ (遠消え), 184, 302
 とおきふるさと (遠き古里), 302, 381
 とおきむさしの (遠き武蔵野), 302, 420

- とおくきた (遠く来た), 198, 302
 とおやまのあき (遠山の秋), 66, 302, 434
 ときすぎるとときず (時過ぎる時鳥), 79, 401
 とける (解ける), 337, 362
 とこのうえ (床の上), 133, 452
 ところどころ (所々), 303, 327, 395
 ところをしめる (所を占める), 246, 303
 としがくれる (年が暮れる), 417, 448
 としこえる (年越える), 213, 304
 としたける (年長ける), 268, 304
 としどしのはな (年々の花), 304, 345
 とにかくに (とにかくに), 304
 とぶかりのつばさ (飛ぶ雁の翼), 174, 291, 305
 とぶほたる (飛ぶ蛍), 74, 143, 144, 146, 148, 266-268, 293, 305, 321, 361, 362, 383, 411
 とまりぶね (泊まり舟), 305, 376
 とまりぶねおとしていずち (泊まり舟音していずち), 89, 126, 306, 377
 ともしびのかげ (灯の影), 144, 215, 297, 306, 332, 379, 406, 462
 ともしびのもと (灯の下), 297, 306, 379
 ともちどり (友千鳥), 118, 253
 とりがさえずる (鳥が囀る), 225, 307
 とりどり (とりどり), 181, 217, 311, 367, 454
 とりなく (鳥鳴く), 164, 194, 301, 307, 317
 とりのこえ (鳥の声), 209, 307
 とりのこえごえ (鳥の声々), 209, 267, 307
 とりのさえずり (鳥の囀り), 145, 225, 308, 348
 とりのなきたつ (鳥の鳴き立つ), 118, 162, 324, 372
 とりのなくこえ (鳥の鳴く声), 209, 308, 317
 とりのひとこえ (鳥の一声), 91, 145, 210, 308, 348
 とわのふるみや (永久の布留宮), 63, 431
 とわれる (訪われる), 300

 なおさびしい (なお寂しい), 232
 なおすまのうら (なお須磨の浦), 118, 253
 ながあめのそら (長雨の空), 79, 263, 314
 ながいよ (長い夜), 175, 466
 ながきひ (長き日), 76, 149, 358, 359, 381
 ながきよのゆめ (長き夜の夢), 192, 399
 なかぞら (中空), 263, 310
 なかぞらのくも (中空の雲), 195, 263, 310
 なかだち (媒), 85
 ながつきのしも (長月の霜), 246, 314
 なかなか (中々), 164, 405, 438
 なかなかいちはすみよい (中々市は住み良い), 91, 256, 313
 ながめる (眺める), 314
 ながめるゆうぐれのそら (眺める夕暮れの空), 390
 ながめわびる (眺め侘びる), 94
 ながらえる (長らえる), 215
 ながれのすえ (流れの末), 248, 314
 ながれる (流れる), 314
 ながれるみず (流れる水), 315, 409
 なきいでる (鳴き出る), 304
 なきそめる (鳴き初める), 236, 286
 なきもの (無き物), 309, 427
 なくきりぎりす (鳴く蟋蟀), 59, 60, 156, 189, 191, 317, 371, 422
 なくさめる (慰める), 133, 365
 なくほととぎす (鳴く時鳥), 92, 204, 233, 247, 318, 384, 417, 423
 なくむし (鳴く虫), 288, 382
 なくやまほととぎす (鳴く山時鳥), 296
 なけほととぎす (鳴け時鳥), 318, 384, 423
 なごり (名残り), 320
 なごりさびしい (名残り寂しい), 232, 320
 なつかけて (夏かけて), 142, 320
 なつこだち (夏木立), 183, 270, 320
 なつごろも (夏衣), 214, 363, 370, 406, 452
 なつのひ (夏の日), 320, 330
 なつよのつき (夏の夜の月), 288, 320, 460
 なでしこ (撫子), 321
 なにおもう (何思う), 130, 321
 なにたのむ (何頼む), 272, 321
 なににたとえよう (何に譬えよう), 72, 271, 321
 なにわのあし (難波の葦), 408, 451, 461
 なびきあうたけ (靡き合う竹), 268, 322
 なびくあおやぎ (靡く青柳), 55, 322, 430
 なびくくれたけ (靡く呉竹), 92, 425
 なみかえる (浪返る), 160, 397
 なみこもと (浪此处許), 117, 253
 なみだ (涙), 133, 254, 257, 261, 324, 365
 なみだあらそうこえ (涙争う声), 80, 210, 324
 なみだおちる (涙落ちる), 124, 216, 325, 365
 なみだがわ (涙河), 106, 178, 325, 341, 451
 なみだがわがそでのうえ (涙が我が袖の上), 104, 260, 325, 467
 なみにしぐれる (浪に時雨れる), 77, 296, 375
 なみのうえ (浪の上), 104, 120, 296, 323, 376
 なみのうきはし (浪の浮橋), 213, 410
 なみのうきふね (浪の浮舟), 106, 112, 323, 377, 447
 なみのおと (浪の音), 215, 290
 なみのおとがすずしい (浪の音が涼しい), 446
 なみのまにまに (浪の間に間に), 324, 397
 なる (なる), 67, 75, 86, 91, 95, 125, 133, 137, 142, 146, 159, 201, 208, 211, 238, 264, 303, 309, 319,

- 326, 327, 364, 391, 406, 412, 419, 431, 436, 444
なれなれる (慣れ慣れる), 272, 364
なれるしばびと (なれる柴人), 245, 327, 364
- にいたまくら (新手枕), 74, 297, 400
におう (匂う), 159, 241
におううめのか (匂う梅の香), 117, 135, 328
におうころもで (匂う衣手), 166
におうたちばな (匂う橘), 269, 329, 388
にわたづみ (庭水), 179, 316
にわのあけぼの (庭の曙), 68, 331
にわのつきかげ (庭の月影), 56, 153
- ねぐらのはるのとり (塙の春の鳥の声), 210, 308, 332, 354
ねざめがち (寝覚めがち), 324, 397
ねざめする (寝覚めする), 235, 333
ねざめするよ (寝覚めする夜), 235, 333, 460
ねざめのあかつきのやま (寝覚めの暁の山), 395, 465
ねざめのほととぎす (寝覚めの時鳥), 223, 234
ねざめればつき (寝覚めれば月), 206, 237, 316
ねやのつきかげ (閨の月影), 145, 288, 332
ねられる (寝られる), 63, 459
ねるほととぎす (寝る時鳥), 401, 451
- のがとおい (野が遠い), 208, 209, 238, 302, 308, 334
のきのうぐいすのこえ (軒の鶯の声), 117, 429
のきのたちばな (軒の橘), 269, 335, 388
のきのまつ (軒の松), 422
のきばかたむく (軒端傾く), 76, 233
のこりおおい (残り多い), 278, 347
のこる (残る), 55, 152, 247, 283, 322, 336, 398, 416, 430, 447
のこるあけぼの (残る曙), 107
のこるあつさにはしいする (残る暑さに端居する), 62, 157, 342
のこるありあけ (残る有明), 84, 336
のこるつきかげ (残る月影), 71, 148
のこるやまかげ (残る山影), 145, 336, 434
のこるやまとなでしこ (残る大和撫子), 189
のちのたちばな (軒の橘), 388
のちのたびびと (後の旅人), 338, 353
のちのよのあき (後の世の秋), 274, 286, 413
のちのよのみち (後の世の道), 76, 102, 413, 453
のどか (長閑), 115, 295, 337, 356, 435, 457
のどかなまくら (長閑な枕), 129, 281, 459
のにかりまくら (野に仮枕), 176, 334, 400
ののしたもえ (野の下萌え), 334
ののひとつまつ (野の一つ松), 65, 161, 249
ののみや (野々宮), 337
ののみやのみち (野々宮の道), 188
のははるか (野は遙か), 225, 273
のべちかいうぐいす (野辺近い鶯), 111, 276, 334
のべのあけぼの (野辺の曙), 68, 334
のべのあわれさ (野辺の哀れさ), 85, 334
のべのいろいろ (野辺の色々), 100, 335
のべのおちこち (野辺の遠近), 124, 335
のべのかりふし (野辺の仮臥), 176, 335, 375
のべのひとむら (野辺の一村), 138, 364
のべのむしのね (野辺の虫の音), 57, 154
のりのことは (法の言の葉), 221, 337
のりのみち (法の道), 95
のわきする (野分する), 64, 73, 99, 279, 459
のわきするにわにつき (野分する庭に月), 133, 191, 242, 336, 447
のわきのあと (野分の後), 76, 338
のわきのかぜ (野分の風), 161, 338
- はかない (儂い), 102, 141, 216, 239, 352, 366
はかないはねをならべるとりべやま (儂い羽根を並べる鳥部山), 181, 218, 311, 367, 454
はぎさく (萩咲く), 60, 197
はぎのしたつゆ (萩の下露), 242, 295, 339
はこぶみつき (運ぶ貢), 339, 415
はしいするそでひややか (端居する袖冷ややか), 63, 383
はじかわす (恥交わす), 74, 297, 400
はしのひとすじ (橋の一筋), 100, 146, 332, 383, 413, 436
はしばしら (橋柱), 340, 341
はじめ (初め), 343
はしもみじ (端紅葉), 190, 193, 426
はちすのうえ (蓮の上), 105, 342
はつかぜときのうはきいてあきふける (初風と昨日は聞いて秋更ける), 66, 162, 185, 187, 343, 373
はつかりのこえ (初雁の声), 57, 154, 160, 174, 210, 343, 418
はつしぐれ (初時雨), 61, 161, 164, 199, 402
はつせかぜ (初瀬風), 343
はつせでら (初瀬寺), 98, 170, 343
はつせやま (初瀬山), 98, 170
はつほととぎす (初時鳥), 81
はなうえる (花植える), 105, 345
はなうちかおる (花打ち香る), 135, 144, 175, 282, 333, 346
はながおとろえる (花が衰える), 309, 418
はなざかり (花盛り), 139, 195, 226, 318, 346, 384, 416
はなさく (花咲く), 95, 99, 180, 181, 218, 222, 227, 233, 297, 300, 312, 346, 357, 367, 380, 394, 417,

- 440, 454
 はなすすき (花薄), 59, 62, 156, 251, 297, 347, 371, 399
 はなたちばな (花橘), 389, 393, 394, 439, 441
 はなちる (花散る), 163, 211, 278, 347, 393, 403, 439
 はたとあさぼらけ (花と朝ぼらけ), 108, 315
 はなならで (花ならで), 347
 はなのあと (花の跡), 132, 256
 はなのいろ (花の色), 100, 347
 はなのかげ (花の陰), 97, 145, 169, 201, 347, 429, 443
 はなのかげにやすらう (花の陰に安らう), 146, 348, 429
 はなのこずえにあらわれる (花の梢に現れる), 81, 219, 348
 はなのこのもと (花の木の下), 111, 184, 242, 244, 348
 はなのちるころ (花の散る頃), 87, 245
 はなのはる (花の春), 349, 354
 はなのはるかぜ (花の春風), 162, 349, 354
 はなのはるごと (花の春毎), 225, 349, 354
 はなのひとえだ (花の一枝), 91, 119, 349, 381
 はなのひとつもと (花の一本), 91, 314, 349, 396, 456
 はなのやまかぜ (花の山風), 102, 162, 295, 350, 434
 はなまちどおい (花待ち遠い), 276, 436
 はなみえる (花見える), 350, 419
 はなもない (花もない), 182, 218, 312, 367, 454
 はなよもみじよ (花よ紅葉よ), 350, 428
 はなれごま (放れ駒), 93, 193, 243, 250, 414, 428
 はなをうらむ (花を恨む), 219, 313, 368, 455
 はなをまつ (花を待つ), 107
 はなをみる (花を見る), 55, 122, 142, 430, 457
 はねをならべるとりべやま (羽根を並べる鳥部山), 182, 218, 312, 368, 455
 はまつたう (涙伝う), 291, 352
 はらう (払う), 353
 はらうころもでのつゆ (払う衣手の露), 239, 466
 はるあきのいろ (春秋の色), 66, 100, 355
 はるあきのそら (春秋の空), 132, 225, 427
 はるあさい (春浅い), 150, 369
 はるか (遙か), 178, 230, 295
 はるかえる (春帰る), 138, 355
 はるがきた (春が来た), 153
 はるがくる (春が来る), 198, 355
 はるかぜ (春風), 78, 153, 199
 はるかぜがふく (春風が吹く), 151, 162, 355, 372
 はるかぜがゆるい (春風が緩い), 72
 はるがみえる (春が見える), 236
 はるくれる (春暮れる), 91, 138, 349, 380, 394, 396, 441
 はるさめのそら (春雨の空), 227, 228
 はるすぎる (春過ぎる), 249, 351, 355, 393, 439, 458
 はるたつ (春立つ), 270, 356
 はるながら (春ながら), 144, 228, 278
 はるになる (春になる), 98, 162, 170, 350, 434
 はるのあけぼの (春の曙), 68, 356
 はるのあめ (春の雨), 150, 222
 はるのいりひ (春の入り), 99, 330, 356
 はるのうぐいす (春の鶯), 93, 211, 391
 はるのうみつら (春の海面), 115, 295, 356
 はるのかえるさ (春の帰るさ), 138, 146, 348, 356, 429
 はるのかりがね (春の雁), 122, 149, 175, 213, 357, 416
 はるのくれ (春の暮れ), 200, 357
 はるのくれがた (春の暮れ方), 165, 200, 279, 347, 357
 はるのこる (春残る), 110, 206
 はるのさかずき (春の杯), 145, 348
 はるのさびしさ (春の寂しさ), 233, 279, 347, 357
 はるのすぎむら (春の杉群), 227, 346
 はるのとおやま (春の遠山), 149
 はるのともない (春の伴い), 306, 357
 はるのの (春の野), 111, 206
 はるのはな (春の花), 350, 357
 はるのひかり (春の光), 358, 362
 はるのふるさと (春の古里), 347, 358, 381
 はるのほととぎす (春の時鳥), 269, 374
 はるのまつのえ (春の松の枝), 229, 435
 はるのみやびと (春の宮人), 120, 406
 はるのものね (春の物の音), 126, 358, 427
 はるのやまざと (春の山里), 231, 358, 434
 はるのやまでら (春の山寺), 297, 359, 435
 はるのゆうぐれ (春の夕暮れ), 200, 359, 443
 はるのゆめ (春の夢), 159, 278, 345
 はるのよ (春の夜), 106, 196, 265, 341, 452, 457
 はるのよのつき (春の夜の月), 288, 359, 460
 はるのよのゆめ (春の夜の夢), 359, 450, 460
 はるはあけぼの (春は曙), 69, 359
 はるばる (遙々), 173, 360, 464
 はるよりのち (春より後), 76, 359
 はるをしる (春を知る), 116, 134
 はれたさみだれのそら (晴れた五月雨の空), 105, 265
 はれるむらさめ (晴れる村雨), 360, 422
 ひがくれる (日が暮れる), 98, 170, 200, 330
 ひかげさす (日影さす), 116, 134
 ひがながい (日が長い), 249, 355
 ひかりさえへだたる (光りさえ隔たる), 73, 260
 ひかりのかげ (光の影), 146, 362
 ひかりのどか (光長閑), 107, 270, 337, 356, 362
 ひぐらし (蛸), 105, 342
 ひぐらしがなく (蛸が鳴く), 60, 197
 ひぐらしのこえ (蛸の声), 58, 65, 66, 100, 155, 162, 210, 251, 270, 290, 295, 321, 362, 372

- ひぐれ (日暮れ), 175
 ひぐれにともなう (日暮れに伴う), 201, 306, 330
 ひだりみぎ (左右), 362, 408
 ひとがうらめしい (人が恨めしい), 119, 364
 ひとかえる (人帰る), 138, 364
 ひとかげもしない (人影もしない), 146, 309, 364
 ひとがまたれる (人が待たれる), 364, 403
 ひとぐもり (一曇り), 202, 441, 445
 ひとこえのほととぎす (一声の時鳥), 360, 422
 ひとしぐれ (一時雨), 92, 240
 ひとすじ (一筋), 92, 250
 ひとすじしろい (一筋白い), 189, 360
 ひとだのみ (人頼み), 272, 364
 ひとつ (一つ), 182, 218, 312, 368, 455
 ひとついお (一つ庵), 141, 239, 352
 ひととお (一通り), 92, 303
 ひとのおとずれ (人の訪れ), 127, 365
 ひとのおもかげ (人の面影), 132, 166, 277, 365
 ひとのかねごと (人の豫言), 171, 365
 ひとのこころ (人の心), 216, 365
 ひとのこころがかわる (人の心が変わる), 180, 216, 366
 ひとのこころのかわるよのなか (人の心の変わる世の中),
 180, 216, 310, 366, 453
 ひとのこころのよのなか (人の心の世の中), 219, 313,
 368, 455
 ひとはおとしない (人は音しない), 321
 ひとはといこない (人は訪い来ない), 74, 113, 224
 ひとはのこらないもみじ (人は残らない紅葉), 66, 162,
 185, 187, 343, 373
 ひとはより (一葉より), 63, 157, 342
 ひとふでのあと (一筆の跡), 102, 319
 ひとむら (一群), 92, 164, 194, 301, 425
 ひとむらさめ (一村雨), 92, 423
 ひとむらすすき (一群薄), 59, 156, 212, 421
 ひともある (人もある), 84, 369
 ひともない (人もない), 124, 325
 ひともなし (人もなし), 138, 275
 ひともみる (人も見る), 73, 245
 ひとりすむ (一人住む), 300
 ひとりねとかげ (一人寝と影), 92, 146, 333, 369
 ひとりねる (一人寝る), 92, 333, 369
 ひにわたるふねのさむさ (日に渡る舟の寒さ), 76, 80,
 360, 424
 ひのかげ (日の影), 226, 308
 ひばりなくこえ (雲雀鳴く声), 149
 ひややか (冷やか), 236, 286, 369
 ふえのね (笛の音), 160, 214
 ふかいよる (深い夜), 175, 185, 333, 447
 ふかいよるのそら (深い夜の空), 264, 370, 461
 ふきとふく (ふきと吹く), 265, 313, 449
 ふくあきのはつかぜ (吹く秋の初風), 177, 298
 ふくかぜ (吹く風), 200, 212, 271, 321, 330, 421
 ふくかぜのあきのつゆ (吹く風に秋の露), 66, 162, 295,
 372
 ふくなみのうらかぜ (吹く浪の浦風), 118, 162, 324, 372
 ふけふける (更け更ける), 236, 286
 ふじさく (藤咲く), 165, 200, 357
 ふじのたそがれ (藤の黄昏), 269, 374
 ふしみのゆめ (伏見の夢), 173, 316
 ふでのあと (筆の跡), 76, 375
 ふとむらすすき (一群薄), 93, 251, 425
 ふねからきくなみがすさまじい (舟から聞く浪が凄まじ
 い), 58, 155
 ふねくだすふしみ (舟下す伏見), 126, 237, 409
 ふねさしとめる (舟差し止める), 389
 ふねにあかしのとまり (舟に明石の泊), 394, 440
 ふねにすまのうらなみ (舟に須磨の浦浪), 442
 ふねのうち (舟の内), 105, 323
 ふねのつなでなわ (舟の綱手縄), 291, 297, 328, 377
 ふねのまきまき (文の巻々), 378, 398
 ふねひきのぼる (舟曳き上る), 377
 ふゆがれ (冬枯れ), 177, 378
 ふゆごもり (冬籠り), 232, 320
 ふゆこもるころ (冬籠もる頃), 113, 222, 223, 378, 449
 ふりはえる (振延える), 208, 252
 ふる (ふる), 379
 ふるきのきば (古き軒端), 192, 244
 ふるきみやこのはる (古き都の春), 359, 379, 417
 ふるさと (古里), 103, 121, 124, 137, 158, 173, 193, 301,
 325, 329, 353, 381, 428, 465
 ふるさとにあきのかぜ (古里に秋の風), 167, 283
 ふるさとのあき (古里の秋), 66, 127, 381, 421
 ふるさとのつき (古里の月), 288, 382
 ふるさとのはる (古里の春), 309, 427
 ふるさとのゆうべ (古里の夕べ), 57, 154
 ふるさとのゆめ (古里の夢), 176, 192, 399
 ふるさとびと (古里人), 103, 121, 158, 369, 382
 ふるづかのまつ (古塚の松), 327
 ふるでら (古寺), 297, 379
 ふるでらのみち (古寺の道), 81, 219, 348
 ふるみやのうち (古宮の内), 112, 166, 380, 417
 ふるやまざくら (ふる山桜), 304, 345
 ふるゆき (ふる雪), 200, 330
 へだたる (隔たる), 382
 へだつふるさと (隔つ古里), 174, 274

- ほしをいただく (星を頂く), 382
 ほたるとうくれ (蛍訪う暮れ), 201, 300, 383
 ほたるとびかう (蛍飛び交う), 251
 ほたるとぶそら (蛍飛ぶ空), 264, 305, 383
 ほどがしられる (程が知られる), 247, 395
 ほとけとなえる (仏唱える), 304, 384
 ほととぎす (時鳥), 68, 78, 79, 82, 84, 91, 96, 108, 110, 112, 119, 153, 160, 168, 179, 182, 185, 196, 199, 201, 202, 204, 206, 210, 218, 220, 223, 233, 234, 243, 249, 262-264, 269, 273, 280, 287-289, 292, 308, 312, 314, 315, 320, 324, 335, 368, 374, 377, 385, 397, 403, 404, 408, 415, 420, 422, 423, 426, 431, 437, 443, 444, 455, 458, 460, 461
 ほととぎすなく (時鳥鳴く), 319, 391
 ほととぎすのこえ (時鳥の声), 129, 281, 459
 ほととぎすのひとこえ (時鳥の一声), 93, 211, 391
 ほととぎすまくらのいずちすぎる (時鳥枕のいずち過ぎる), 89, 249, 391, 400
 ほどはくもい (程は雲居), 193, 353, 465
 ほのか (仄か), 395
 ほのかなきり (仄かな霧), 189, 396
 ほのかなそら (仄かな空), 336
 まいのそで (舞の袖), 260, 398
 まえわたり (前渡り), 398, 466
 まがきである (籬である), 382
 まぎれない (紛れない), 398
 まくら (枕), 235, 333, 460
 まくらくるしい (枕苦しい), 391
 まくらさだめない (枕定めない), 230, 400
 まくらにかたしく (枕に片敷く), 96, 203
 まくらにちどりなくこえ (枕に千鳥鳴く声), 55
 まくらのうえ (枕の上), 105, 400
 まくらのゆめ (枕の夢), 400, 450
 まくらはいずこ (枕は何処), 58, 155
 まさごじのすえ (真砂路の末), 277, 282, 299, 425
 まさごはら (真砂原), 353, 401
 ましばにまじるつつじやまぶき (真柴に混じる躑躅山吹), 378, 466
 ませのうち (籬の内), 86
 またつきあるゆきのはれる (また月ある雪の晴れる), 88, 241, 267, 307, 412
 またはじらう (また恥じらう), 94
 まちわびる (待ち侘びる), 112, 118, 191, 291, 299, 414
 まつあいだ (待つ間), 397, 403
 まつあらわれる (松現れる), 246, 250, 434
 まつかぜがふく (松風が吹く), 147, 162, 372, 403, 436
 まつかぜのおと (松風の音), 305, 376
 まつかぜのこえ (松風の声), 87, 163, 211, 403, 416
 まつかぜのつき (松風の月), 67, 125, 220
 まつたてる (松立てる), 77, 296, 376
 まつにふじのたそがれ (松に藤の黄昏), 227, 346
 まつのひとむら (松の一群), 93, 184, 302, 403, 425
 まつのひとつもと (松の一本), 93, 111, 139, 203, 339, 396, 404
 まつのふじなみ (松の藤浪), 123, 228, 324, 374, 404
 まつふくかぜ (松吹く風), 163, 372, 404
 まつほととぎす (待つ時鳥), 392, 404
 まつみえる (松見える), 404, 419
 まつむしがなく (松虫が鳴く), 319, 405
 まつむしのこえ (松虫の声), 57, 73, 99, 154, 180, 211, 251, 320, 344, 347, 405
 まつむしほのめく (松虫ほのめく), 396, 406
 まつらがた (松浦瀉), 172, 377
 まつりするかみ (祭りする神), 171, 406
 まつをたよりに (松を頼りに), 274, 405
 まどいする (円居する), 407
 まどろまない (まどろまない), 374, 462
 まどろむ (まどろむ), 112, 450
 まどをひらく (窓を開く), 370, 406
 まぼろし (幻), 407
 まよう (迷う), 97, 169
 みえかくれする (見え隠れする), 195, 263, 310
 みがおいたほととぎす (身が老いた時鳥), 79, 216, 290, 460
 みかわみず (御溝水), 140, 361, 426
 みじかよ (短夜), 319, 385, 393, 440
 みじかよのそら (短夜の空), 389
 みじかよのつき (短夜の月), 289, 392, 404, 408, 438, 461
 みじかよのゆめ (短夜の夢), 408, 451, 461
 みずかげのさびしさ (水影の寂しさ), 146, 233, 410
 みずこえる (水越える), 213, 410
 みずたえだえ (水絶え絶え), 110, 205
 みずにおうやまぶき (水に匂う山吹), 329, 410, 443
 みずのうきくさ (水の浮草), 230, 370
 みずのおと (水の音), 127, 410
 みずのさびあゆ (水の鯖鮎), 80, 274, 410
 みずのすえみえる (水の末見える), 248, 410, 419
 みずのすずしさ (水の涼しさ), 241, 305, 383, 412
 みずのたえだえ (水の絶え絶え), 266, 410
 みずのひとつじ (水の一筋), 93, 250, 411
 みずはすむ (水は澄む), 256, 411
 みずはれる (水晴れる), 360, 411
 みずひややか (水冷ややか), 370, 411
 みだれがみ (乱れ髪), 171, 412
 みだれてとぶほたる (乱れて飛ぶ蛍), 305, 383, 412

- みちがほそい (道が細い), 383, 413
 みちたえだえ (道絶え絶え), 266, 413
 みちである (道である), 414
 みちのおく (道の奥), 246
 みちのかけはし (道の掛橋), 140, 147, 340, 414, 437
 みちのかたがた (道の方々), 92, 229, 303
 みちのすえ (道の末), 248, 414
 みちのつじうら (道の辻占), 118, 291, 414
 みちのはるけさ (道の遥けさ), 72, 107, 352
 みちのひとすじ (道の一筋), 93, 250, 414
 みちのやすらい (道の安らい), 415, 429
 みなかみのもみぢちる (水上の紅葉散る), 178, 325
 みなせがわ (水無瀬川), 152, 426, 433
 みなみはのどか (南は長閑), 75, 431
 みにかぎらない (身に限らない), 190, 318
 みにしみる (身にしみる), 60, 64, 156, 204, 245, 279, 407, 459
 みねこえる (峰越える), 196, 201, 213, 395, 416, 441, 444
 みねたかい (峰高い), 267, 416
 みねにわかれる (峰に分かれる), 106, 341, 452
 みねのあきかぜ (峰の秋風), 66, 163, 416
 みねのあらし (峰の嵐), 195, 266
 みねのいお (峰の庵), 87, 416
 みねのかけはし (峰の掛橋), 140, 340, 416
 みねのくも (峰の雲), 147, 196, 202, 416, 433, 442, 445
 みねのしらゆき (峰の白雪), 247, 416, 447
 みねのふるでら (峰の古寺), 171, 297, 326, 380, 417
 みねのまつかぜ (峰の松風), 122, 436
 みねのゆき (峰の雪), 417, 448
 みののおやま (美濃の小山), 93, 396, 404
 みのゆくえ (身の行方), 407, 449
 みみにみちる (耳に満ちる), 190, 318
 みやこがこいしい (都が恋しい), 204, 417
 みやこがとおい (都が遠い), 303, 418
 みやごともない (宮事もない), 309, 418
 みやこのつきにかえる (都の月に帰る), 139, 289, 418
 みやこのはるがすみ (都の春霞), 120, 213
 みやこびと (都人), 101, 136, 207, 221
 みやのうち (宮の内), 183
 みゆきする (御幸する), 106, 341, 451
 みよしの (み吉野), 86, 142, 433
 みよしののおく (み吉野の奥), 86, 122, 131, 141, 142, 309, 408, 457
 みよしののはな (み吉野の花), 351, 457
 みよしのはる (み吉野の春), 145, 348
 みよしののやま (み吉野の山), 435, 457
 みるのもうい (見るのも憂い), 103, 419
 みわがさき (三輪崎), 78, 378
 みわのすぎむら (三輪の杉群), 91, 256, 313
 みをあきちかくとぶほたる (身を秋近く飛ぶ蛍), 129, 184
 みをおもう (身を思う), 131, 408
 みをしらない (身を知らない), 182, 218, 312, 368, 455
 みをしる (身を知る), 182, 219, 312, 368, 455
 みをたのむな (身を頼むな), 272, 408
 みをやすく (身を安く), 313, 456
 むかし (昔), 419
 むかしをいまの (昔を今の), 96, 420
 むかしをおもうなみだ (昔を思う涙), 131, 325, 420
 むかってなみだおちる (向って涙落ちる), 125, 326, 419
 むさしのとくさまくら (武蔵野と草枕), 83, 280
 むさしののはら (武蔵野の原), 176, 401, 452
 むしなく (虫鳴く), 63, 157, 161, 294, 319, 342, 371, 420
 むしのこえ (虫の声), 76, 211, 338, 420
 むしのこえごえ (虫の声々), 212, 421
 むしのなくこえ (虫の鳴く声), 191, 292
 むしのね (虫の音), 127, 213, 283, 421
 むしのねによがふける (虫の音に夜が更ける), 221, 288, 294
 むすぶちぎり (結ぶ契り), 96, 171
 むねのおもい (胸の思い), 131, 422
 むらさめ (村雨), 177, 179, 377, 393, 423, 430, 440, 458
 むらさめがたつ (村雨がたつ), 270, 423
 むらさめがふる (村雨がふる), 389
 むらさめすぎる (村雨過ぎる), 249, 389, 423
 むらさめのくも (村雨の雲), 320, 330, 389
 むらさめのそら (村雨の空), 264, 390, 423
 むらさめのはれゆくあととはあらし (村雨の晴れゆく後は嵐), 76, 80, 360, 424
 むらすすき (群薄), 208, 211, 238, 406
 むらちどり (群千鳥), 277, 425
 むらどりがねる (群鳥が寝る), 309, 333, 425
 もしおくむ (藻塩汲む), 184, 203
 もしおのけむり (藻塩の煙), 104, 323
 もしおやくけむり (藻塩焼く煙), 118, 253, 323
 もずのくさぐき (鴟の草茎), 190, 193, 426
 ものおもい (物思い), 258, 293
 ものおもう (物思う), 258, 293
 ものおもうころ (物思う頃), 121, 131, 158, 223, 427
 ものがなしき (物悲しき), 131, 168, 427
 ものごと (物毎), 132, 225, 427
 ものさびしい (物寂しい), 132, 233, 428
 もののふがかぶとをきる (武士が兜着る), 382
 もみぢちるころ (紅葉散る頃), 103, 419
 もみじのにしき (紅葉の錦), 329, 428

- もみじば(紅葉葉), 361, 428
ももしきのにわ(百敷の庭), 236, 382
ももとせ(百年), 75, 220, 270
もりのこがくれ(森の木隠れ), 171, 406
もりのしたくさ(森の下草), 119, 193, 243, 428, 449
もろこし(唐土), 221, 442
もろこしぶね(唐土舟), 172, 377
もろこしまでもしたがう(唐土までも従う), 339, 415
- やすらい(安らい), 302, 334, 429
やすらう(安らう), 159, 251
やどのうめ(宿の梅), 117, 429
やどのうめのか(宿の梅の香), 117, 135, 429
やどのゆうぐれ(宿の夕暮れ), 201, 429, 443
やどをかる(宿を借る), 177, 430
やどをとう(宿を訪う), 300, 430
やなぎかげ(柳陰), 80, 410
やまおろし(山嵐), 442
やまがおぼろ(山が朧), 129
やまがくるしい(山が苦しい), 198, 435
やまかすむくれ(山霞む暮れ), 145, 348
やまかぜがふく(山風が吹く), 95, 235, 451
やまがつ(山賤), 74, 224, 442
やまがつのいお(山賤の庵), 87, 442
やまこえる(山越える), 83, 281
やまざくら(山桜), 91, 119, 137, 162, 173, 184, 228, 242, 349, 354, 435
やまざと(山里), 202, 231, 264, 435, 444
やまたかい(山高い), 69, 448
やまちかい(山近い), 276, 436
やまとうた(大和歌), 76, 350, 413, 428, 453
やまとことのは(大和言の葉), 194, 221, 243, 442
やまなしのはな(山梨の花), 351, 442
やまのあきくれる(山の秋暮れる), 161, 214
やまのいのみず(山の井の水), 85, 411, 436
やまのおく(山の奥), 122, 232, 436
やまのかくれが(山の隠れ家), 86, 142, 436
やまのかげ(山の陰), 146, 210, 362, 436
やまのしたかげ(山の下陰), 147, 243, 437
やまのしたみち(山の下道), 243, 415, 437
やまのは(山の端), 75, 78, 240, 249, 264, 423
やまのはのいろ(山の端の色), 57, 154
やまのはのつき(山の端の月), 58, 155, 171, 289, 327, 338, 437
やまのほととぎす(山の時鳥), 392, 438
やまのまつかぜ(山の松風), 163, 405, 438
やまのゆうぐれのそら(山の夕暮れの空), 390
やまびと(山人), 90, 185, 396
やまぶかい(山深い), 97, 169, 370, 438
- やまほととぎす(山時鳥), 78-80, 87, 89, 112, 183, 191, 196, 199, 224, 233, 270, 320, 330, 392, 416, 438
やまもと(山本), 91, 268, 397, 425, 441
やまもとのさと(山本の里), 231, 397, 441
ややさむいそで(やや寒い袖), 235, 260
やよいのあめ(弥生の雨), 79, 443
- ゆうあらし(夕嵐), 80, 443
ゆうがお(夕顔), 123, 125, 198, 446
ゆうがおのちぎり(夕顔の契り), 277, 446
ゆうがすみ(夕霞), 306, 357
ゆうぐれのくも(夕暮れの雲), 196, 201, 444
ゆうぐれのそら(夕暮れの空), 201, 264, 444
ゆうぐれのやま(夕暮れの山), 202, 441, 445
ゆうしぐれ(夕時雨), 240, 445
ゆうすずみ(夕涼み), 252, 445
ゆうだち(夕立), 251, 294, 446
ゆうだちのあと(夕立の後), 76, 446
ゆうづくよ(夕月夜), 210, 289, 362, 445, 461
ゆうつけどりをきく(木綿付け鳥を聞く), 185, 447
ゆうひがくれ(夕日隠れ), 90, 120, 341, 424
ゆうべ(夕べ), 183, 242, 275, 292, 402, 445
ゆうべかぎる(夕べ限る), 141, 445
ゆうまぐれ(夕まぐれ), 62, 104, 122, 158, 188, 232, 445
ゆきがふりはれる(雪がふり晴れる), 361, 380, 448
ゆききえる(雪消える), 110, 184, 206, 448
ゆきつれる(行き連れる), 93, 250, 414
ゆきとはなのかげ(雪と花の陰), 75, 300
ゆきになる(雪になる), 448
ゆきのあけぼの(雪の曙), 69, 448
ゆきのあさあけ(雪の朝明け), 70, 73, 448
ゆきのうち(雪の内), 113, 449
ゆきのしたいお(雪の下庵), 267
ゆきのたけのすえずえ(雪の竹の末々), 111, 276, 334
ゆきのなかぞら(雪の中空), 265, 313, 449
ゆきのむらぎえ(雪の斑消え), 151, 329
ゆきのやまもと(雪の山本), 327
ゆきはふりつつ(雪はふりつつ), 108
ゆきふる(雪ふる), 266, 413
ゆくえしれない(行方知れない), 314
ゆくすえのそら(行く末の空), 265, 450
ゆくすえのはる(行く末の春), 229, 435
ゆくほととぎす(行く時鳥), 88, 395
ゆめかうつつか(夢か現か), 390
ゆめさめる(夢覚める), 124, 235, 282, 325, 399, 451
ゆめのうきはし(夢の浮橋), 106, 152, 196, 340, 451, 457
ゆめのおもかげ(夢の面影), 133, 192, 277, 399, 452
ゆめのかりまくら(夢の仮枕), 176, 401, 452

- ゆめもうつつも (夢も現も), 268, 304
 よいのみ (宵の間), 95, 143
 よがあける (夜が明ける), 70, 93, 403, 425, 461
 よがおさまる (世が治まる), 147
 よがながい (夜が長い), 235, 282, 299, 314, 333, 461
 よがふかい (夜が深い), 370, 462
 よがふける (夜が更ける), 113, 172, 209, 214, 224, 268, 284, 374, 462
 よきのかみがき (与喜の神垣), 343
 よきのみやしろ (与喜の御社), 428, 456
 よこぐも (横雲), 68, 69, 359, 431
 よこぐもかすむ (横雲霞む), 152, 196, 457
 よこぐものそら (横雲の空), 196, 265, 457
 よごむおぼえる (夜寒おぼえる), 128, 235, 462
 よしのがわ (吉野川), 315, 409
 よしのがわのはな (吉野川の花), 351, 458
 よしや (よしや), 128, 214
 よそのゆうぐれ (余所の夕暮れ), 343
 よつのおのこえ (四緒の声), 423
 よどのかわぶね (淀の川舟), 179, 377, 458
 よにながらえる (世に長らえる), 314, 456
 よのなか (世の中), 130, 313, 321, 456
 よのならい (世の習い), 326, 456
 よばかりかかる (世ばかり掛かる), 140, 456
 よはしののめ (夜は東雲), 244, 462
 よぶかいみち (夜深い道), 82
 よぶこどり (呼子鳥), 122, 149, 150, 221, 271, 275, 402, 412, 457, 458
 よもぎう (蓬生), 458
 よもぎうのかげ (蓬生の影), 147, 326, 419, 456, 458
 よもすがら (夜もすがら), 252, 398, 447, 462
 よるくむさかずき (夜汲む杯), 194, 226, 462
 よるにかりなく (夜に雁鳴く), 195, 287, 425
 よるのゆめ (夜の夢), 452, 463
 よわのあきかぜ (夜半の秋風), 66, 164, 463
 よわのつき (夜半の月), 110, 126, 165, 206, 240, 257, 289, 294, 379, 394, 413, 420, 440, 463
 よわのむしのね (夜半の虫の音), 127, 421, 463
 よわりはてる (弱り果てる), 344, 463
 よわるむしのね (弱る虫の音), 64, 177, 251, 345, 373
 よをいとう (世を厭う), 94, 456
 よをこめる (夜をこめる), 83, 263, 285
 わがうえ (我が上), 182, 219, 313, 368, 455
 わがおもいぐさ (我が思い草), 177, 378
 わかぎのさくら (若木の桜), 105, 253, 345, 363
 わかくさまくら (若草枕), 193, 401, 464
 わがこころ (我が心), 202, 265, 444, 465
 わかつ (分かつ), 303
 わがなみだ (我が涙), 131, 422
 わかばのくずのかかるうもれぎ (若葉の葛の掛かる埋もれ木), 138, 355
 わからない (わからない), 97, 169
 わかれじ (別れ路), 132, 365
 わかれじのあと (別れ路の跡), 77, 415, 464
 わかれである (別れである), 193, 353, 465
 わかれる (別れる), 244, 462, 464
 わかれるたびはかなしい (別れる旅は悲しい), 168, 274, 464
 わかれをいそぐ (別れを急ぐ), 67, 262
 わけるほととぎす (別ける時鳥), 395, 465
 わずかにみえるおきのしま (わづかに見える沖の島), 77, 128, 375
 わすれとうくさはら (忘れ訪う草原), 193, 301, 353, 465
 わすれもしない (忘れもしない), 465
 わすれようとする (忘れようとする), 465
 わすれるなよ (忘れるなよ), 193, 353, 465
 わたしぶね (渡し舟), 178, 256, 378, 412, 466
 わたのはら (わたの原), 164, 301, 432
 わたるかりがね (渡る雁), 175, 193, 240, 293, 466
 わびぬればおもう (侘ぬれば思う), 252, 310, 453
 わびびと (侘人), 369, 466
 われおどろく (我驚く), 309, 333, 425
 われでなくなるのがうい (我でなくなるのが憂い), 103, 328, 467
 われのみひとりそでをぬらす (我のみ一人袖を濡らす), 130, 220, 363

編著者略歴

山田 奨治（やまだ しょうじ）

一九六三年大阪府生まれ。筑波大学大学院修士課程医科学研究科修了。筑波技術短期大学視覚部情報処理学科助手を経て現在、国際日本文化研究センター研究部助教授、総合研究大学院大学文化科学研究科助教授。博士（工学）著書『禅という名の日本丸』（弘文堂 二〇〇四年）

『情報のみかた』（弘文堂 二〇〇五年）

『日本文化の模倣と創造

—オリジナルリティとは何か—』（角川選書 二〇〇二年）など。

岩井 茂樹（いわい しげき）

一九六九年奈良県生まれ。総合研究大学院大学文化科学研究科博士課程修了。現在、国際日本文化研究センター研究部技術補佐員。博士（学術）著書『茶道と恋の関係史』（思文閣出版 二〇〇六年）

『百人一首万華鏡』（白幡洋三郎編、共著、思文閣出版 二〇〇五年）

『日本文芸史』第八卷（現代Ⅱ）

（鈴木貞美編、共著、河出書房新社 二〇〇五年）など。

日文研叢書 38

連歌の発想

連想語彙用例辞典と、そのネットワークの解析

二〇〇六年一月二〇日発行

著

編者 山田奨治・岩井茂樹

発行所 国際日本文化研究センター

京都市西京区御陵大枝山町3-2

印刷所 創文堂印刷株式会社

福井市問屋1-7

連歌の発想

連想語彙用例辞典と、そのネットワークの解析

山田奨治・岩井茂樹 編著



日文研